

轉移列島

NAO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

核攻撃の消滅危機を免れた日本列島は、異星文明装置により、人が住む事の出来ない筈の惑星「火星」へ転移していた・・・。

H3 1. 2. 24 一旦当サイトでの連載を終了しました。

長い間のブックマありがとうございますm () m

*この小説はフィクションです。実在する国家、団体、企業、個人、法律、地名、その他固有名称等とは一切関係ありません。

*キャラクターイラスト制作は以下の素敵な皆さまにお願いしました！

【イラスト制作者様一覧（イラスト登場順）】

- ・ 絵師／里音（りおん） 様
- ・ イラストレーター／更江（さらえ） 様
- ・ イラストレーター／鈴木 プラモ 様
- ・ お絵描きさん／らてい 様
- ・ イラストレーター／しつぽ 様
- ・ イラストレーター／七七七 様

【警告】 本作品中で使用されているキャラクター画像及び各種加工写真のサイト外転載は著作権侵害に当たります。固くお断りしますm

() m

目次

プロローグ	
消滅前夜	1
火星編 転移直後	
灼熱（しゃくねつ）の君	12
混乱	16
赤い夜空	20
観測	22
驚愕（きょうがく）と覚悟	24
舞台裏	27
日常の終わり（前編）	31
日常の終わり（後編）	36
火星編 遭遇	
脱出／イワシパイ	43
大震災／対馬事変	48
降臨（こうりん）／咆哮（ほうこう）	54
審判の壁（ジャッジメント・ウォール）	58
試練	62
タカミムスビ	67
コンタクト	73
追憶／遭遇	79
火星編 承継者たち	
内閣官房執務室	87
出向（しゅっこう）	92
交信	95

再会	99
別離	102
試食会	110
ホームステイ（イワフネ）	112
ホームステイ（アマトハ）	117
ホームステイ（ゼイエス）	123
ホームステイ（大月、西野、春日、東山）	129
修羅（しゅら）の星	132
火星編 選択	
政治家の選択	138
各国の選択	142
マルス人の選択	152
国民の選択	156
大月の選択	159
ミーコの選択	163
海兵隊の選択	166
西野の選択	169
トップの選択	177
国民の選択 その2	180
宇宙国家の選択	184
火星編 新天地	
目覚め	186
悪夢再来	190
迎撃（げいげき）	195
火星研究機構	198

月面国家独立戦争	326
肅清	322
火星編 地球復興計画	
宴の後始末	315
火星五輪 (後編)	307
火星五輪 (前編)	301
トイレの花子さん	295
風雲、ムスビ城	289
空飛ぶ方舟	286
北米大陸救出作戦	282
予告	277
ヨーロッパ救出作戦／帰還	270
休戦交渉	262
プレアデスからの船	256
圧倒	250
呼応	244
火星編 戦女神の星	
聖地巡礼	239
野望	236
こちら地球	232
ミーコとムスビ	225
人類都市ボレアリアフ	222
A Day (第二次アルテムィユア大陸上陸作戦)	215
イワフネハウス ビフォー&アフター	206
相思相愛	202

人生相談	508
アンダーグラウンド	498
マルスの責務	491
未知への突入	484
対面	472
セカンドコンタクト	464
霧中宙域	457
理想と現実	450
超 恋愛無双く再びく	441
転生国家	430
ヘラス大陸攻略作戦	419
天敵	409
混沌編 混沌の始まり	400
門出	394
教育者と保護者	388
起業	378
イワフネファンド	372
運転免許試験場	366
明日へ	361
恋愛無双	354
地球復興計画	348
地球復興会議	339
シャンバラ攻略	335
インドラの矢	331
ラグランジュポイントの戦い	

福音

——
解き放たれたもの

最悪な告白

侵略

——
命令はまだか!?

混沌編 真 世界大戦

——
マリーンシティの戦い

真の脅威

——
バトル・オブ・ブリテンⅡ／オセアニアの戦い【前編】

——
バトル・オブ・ブリテンⅡ／オセアニアの戦い【後編】

生きてこそ

——
ヒトとして

招かれざる降臨

——
仮想世界の動乱

参戦

——
仮想と現実

仮想世界の神々

急転

——
伏線

襲撃

——
呼び寄せたもの

マリネ

——
神々の反省

作戦前夜

混沌編 人類反攻

715 706 697 690 682 677 667 658 649 641 632 622 614 605 595 583 573 564 553 544 536 527 517

終局	793
流星	782
誰が為の	770
地球の一番長い日	760
月面防衛戦《後編》	751
月面防衛戦《中編》	740
月面防衛戦《前編》	732
影の帝国	724

プロローグ 消滅前夜

日本列島が消滅する46億年前

「太陽系第4惑星マルス オリンポス山特殊宇宙・生物物理学研究所」

「よし、第3惑星へのプレゼントだ！カプセル射出準備完了」ゼイエスが管制室に合図する。

「了解、こちら管制。第3惑星への射出軌道計算は完了。宇宙航路への接触も心配ない」管制官のイワフネが応える。

「所長」ゼイエスが呼び掛ける。

「予定通り第3惑星への射出を実行する」所長のアマトハが宣言する。

「カプセル射出！」アマトハが指示する。

「カプセルロックオフ！電磁カタパルト滑走！大気圏外の射出口まであと10！」イワフネがカウントダウンする。

「2、1、射出完了！」

水色が鮮やかな第4惑星の一角から蒼白い光を纏った流線型の物体が宇宙空間に飛び出した。

「カプセル、衛星軌道離脱。惑星間コース033を予定通りの速度で第3惑星に向かっています」イワフネが報告する。

「おめでとう、アマトハ」ゼイエスが滑らかな銀色の鱗に覆われた手を差しのべる。

「ありがとう、ゼイエス。君のおかげだ。だが、これからが大変だ。第3惑星到達後の作業も山積みだしな」

「そうだな、アマトハ。だが、私達の研究は元々千年単位で続けた物だしな。今更だよ」縦長の瞳孔を持つ双眼を細めてニヤリと笑う。

「私達は、自らの足跡をこの星系にあまねく広め、やがては同胞たる知的生命体とコンタクトせねばならぬ」ゼイエスの創造は始まったばかりなのだ。

「ところでゼイエス、次の課題で私が指摘した宇宙空間への水蒸気流出についてなんだがね——」

オリンポス山特殊宇宙物理学研究所は、今日も休むこと無く惑星と宇宙の理（ことわり）を探求し続ける。

2018年12月24日午前5時〔日本国 神奈川県 横浜市 アパート「サンライズ」105号室〕

大月満の部屋にある4kテレビが自動的に起動し、どこことなく不安感を掻き立てる長短の和音が奏でるチャイムが鳴り響いた。

直後に合成音声が、

『ミサイル発射、避難。ミサイル発射、避難。先程北朝鮮北東部からミサイルが発射されました。ミサイルは関東甲信越地方を通過するが内陸部に着弾の可能性あり。直ちに最寄りの指定ミサイル防護施設に避難してください』

Jアラートのアナウンスが2度繰り返されたあとに、重厚で耳障りなサイレンがテレビから出される。

大月は最初のチャイムが鳴ると同時に飛び起きて携帯電話を掴むと、枕元に置いていた地震用の避難袋を背負って部屋を飛び出した。アパートの住民も、寝惚（ねぼ）け顔ではあるが、素早く部屋を飛び出して二軒隣にある自治会が最近空地に『掘った』簡易シェルターに走り出していた。

区役所の方角からも耳障りなミサイル警報のサイレンが聞こえている。

大月やアパートの住民だけが素早く動いているのではない。街中の住民全てが最寄りのシェルターに避難していた。

1年前には想像も出来ない光景だった。

昨年末の紅白歌合戦放送中に飛び込んできた、北朝鮮のミサイル警報。

栃木県日光の温泉宿が『偶然』北朝鮮ミサイルの直撃を受けて倒壊し、宿泊客を含めた数十人が死亡した「事故」以来、政府主導の官民避難訓練が熱心に繰り返された賜物（たまもの）とも言える。

大月がシェルターに駆け付け付けた時には既にお年寄りや家族連れで

溢（あふ）れ返っていたので、近くのマンションにある地下駐車場の作業用スペースに飛び込んだ。

暫くすると携帯電話から、Jアラートのチャイムが鳴り、メッセー
ジが、

『ミサイル着弾情報。ミサイルは、房総半島沖、150キロの海上に着弾した模様。念のため、海岸には近付かないでください。避難指示は解除されました。』

と携帯電話の画面に表示された。

大月はほっと一息つくとのそりと地下駐車場から出てアパートに戻った。

部屋のテレビはミサイル発射について、今年16回目になる日本政府内閣官房長官発表による「遺憾の意」を伝えていた。

「クリスマスプレゼントには、センスの欠片（かけら）もないな」大月は独り呟くと、溜め息をつきながら、出勤の支度（したく）を始めるのだった。

—————

2018年12月28日午前8時30分

【東京都 千代田区 丸の内 角紅商事株式会社 本店】

角紅商事は中堅の総合商社である。東日本大震災の復興事業に尽力し、被災地の住民を優先的に雇用して、当時の政府復興庁から表彰された実績もあり、北関東から東北地方にかけて幅広い業界に根強い顧客層を持っている。

角紅商事本店営業部の朝の会議は先日のミサイル着弾についてふたたび東北地方の水産物に風評被害が出始めている事が報告された。「既に、中国やEU諸国が日本からの海産物に輸入制限をかけるはじめています」総合流通営業部の40代ベテラン社員である大月が報告した。

「刺身や天ぷら好きな癖に、本当に外人は極端ですね」海産物営業部の春日が頬杖（ほおづえ）をついてぼやいた。春日は入社3年目にして海産物営業では持ち前のフットワークを活かして、全社で取引高ナン

バーワンの実績を持つ若手のホープである。

「やはり、政府が先頭に立って着弾直後に海産物の安全アピールをして欲しかったですね」広報部が発言した。

「経産省に強く働きかけをしています。何故か最近彼らの動きが鈍いんです。」大月が言った。

「なんと言うか、放心状態で心ここに有らず、といった感じで、暖簾（のれん）に腕押しです。何が経産省に起きているか探っているところですよ」大月が報告した。

結局、朝の会議は結論が出ず、会議の参加者は三々五々と各部署に戻っていった。

「大月さん、何だか嵐の前のなんとやらみたいです。え」会議に同席していた同じ部署の西野ひかりが声を掛ける。

彼女は先日秘書室から異動してきた。海外生活の経験もある、所謂（いわゆる）帰国子女らしい。

異動してきた初日から大月にやたらと絡んでくるのだが、大月からみれば新入りの面倒を多少見た程度に過ぎなかった。

しかし、どうやら才女だらけの激戦区から来た彼女から見れば、入社以来、初めてライバルではない異性の同僚から厚遇（こうぐう）された訳で、大変に好印象だったらしい。歳の差は親子ほどあるのにと大月は不思議に思う。

まあ、別の言い方をするならば、大人に憧れる乙女？の一目惚れかも知れないが。

同日午前11時30分、社員食堂で早めの昼食をとっていた大月は、今日も西野ひかり20代（自己申告）の自称手作り弁当アタックを巧みにかわしていたが、食堂のテレビが伝えるNHKニュースに釘付けとなった。

『先程北朝鮮の朝鮮中央放送は特別重大発表として、朝鮮労働党の金委員長が、我が国とアメリカ、韓国に宣戦を布告したと伝えました！繰り返します、北朝鮮が我が国とアメリカ、韓国に宣戦を布告しました！』

『今、新しい情報が入りました。ソウル支局によりますと、ソウル中心

部の南大門広場で大規模な爆発があつた模様です。爆発は今も続いており、南大門広場の他にもソウル中心部の各地で同時多発的な爆発が続いています』

『ソウル支局と電話が繋(つな)がっています。李(り)特派員、そちらの状況を伝えてください』

『こちらソウル支局の李です。東京の音声はイヤホンをしていても周囲の爆発音で聴きづらい状況です！』

『この爆発は、爆弾テロではありません！爆発前に何らかの飛翔音が聞こえた後にビルや大通りが爆発してめちゃめちゃになっています。先程は向かいのビルが爆発して崩壊しました！凄い土煙です！私達はこの爆発——』

甲高い金属的な飛翔音が響いた直後、ソウル支局の通話が途切れた。

『……ソウル支局との電話が切れてしまいました。ここからは元陸上自衛隊幕僚長の——』

第二次朝鮮戦争が勃発した。

大月と西野は茫然(ぼうぜん)と画面を見つめていた。

—————

韓国では、今年2月の平昌冬季オリンピック後、北朝鮮への融和政策に不満を持つ軍部の軍事クーデターにより、分政権が排除され、親米軍事政権が誕生した。

欧米と日本は形式的な非難声明を出しただけであり、制裁措置をとらなかつた。

対称的に中国とロシアが猛烈な非難と経済制裁を韓国に実施、国連の北朝鮮経済制裁も無視して大規模な支援を再開、経済封鎖で瀕死(ひんし)だった北朝鮮は息を吹き返し、再び大陸間弾道ミサイルの発射実験を再開、既に16回という常軌(じょうき)を逸(いつ)した回数(かいすう)が日本列島を越える形で発射された。

「不幸にも」1基のロフテッド軌道(ロフテッドきだう)をとりすぎた弾道弾(だんどうだん)が栃木県の山

間部に着弾して民間人の犠牲者を出した。

南北非武装地帯を挟んだ拡声器による挑発放送の再開、ドローンによる両軍の偵察行為や偶発的な銃撃、砲撃戦も頻発（ひんぱつ）し、日米韓と朝中露の関係は加速度的に悪化した。

親米軍事政権は国内の北朝鮮系、中国系リベラル派政治団体の弾圧と投獄（とうごく）を強行し、北朝鮮に対しては数万名にのぼる拉致韓国人の解放要求と開城工業団地からの韓国企業の撤退等、強硬な政治姿勢と毎月のように行われる臨時米韓合同軍事演習による軍事的挑発を繰り返していた。

そして――

12月28日午前11時30分。追い詰められた北朝鮮は韓国、米国、日本国に宣戦を布告、韓国の首都ソウルに無警告で無差別砲撃を行い、第二次朝鮮戦争が勃発した。

無差別砲撃を受けたソウル市街は7割の建物が損壊し、旅行中の外国人や報道関係者も含めて約20万人が死傷した。

在韓米軍司令部は北朝鮮が「サリン」や「ノビチヨフ」等最新毒ガスを含む化学兵器弾頭を多数使用したと激しく非難した。

同日深夜、かねてからの避難計画が実施され、在韓米軍家族と西側韓国駐在外交官やビジネスマン、旅行客がアメリカ第2師団とオーストラリア陸軍の護衛の下ソウルを陸路脱出して釜山（プサン）に退避を始めた。

在留外国人の釜山避難はネット民により拡散され、韓国国民に衝撃を与え、大勢の市民が自家用車や会社の営業車両を使って外国人避難グループに同行しようとしたが、韓国軍憲兵隊に阻止された。激高した市民の一部が「スリーパー」として数十年韓国で待機していた北朝鮮工作員の扇動を受けて暴徒化し、避難ルートの町々に火を放ち、幹線道路をバリケードで封鎖して韓国国内は騒乱状態となった。

南北非武装地帯（DMZ）で奮戦していた米韓軍はこの後方の混乱

で補給部隊や補充部隊の到着が遅れ、38度線の各所で防衛線が北朝鮮軍機甲師団に突破された。

日付が変わる頃には米軍第2師団は半数が潰滅、空路日本の座間に撤退した。その他の米軍部隊もソウル市街を通過して烏山空軍基地から一部の米軍家族と共に日本の福岡空港に緊急避難した。

12月29日未明には、在韓米軍の大半と在留西側外国人は釜山又は烏山空軍基地から日本国航空・海上自衛隊の支援により撤退を完了し、朝鮮半島には戦線を分断された韓国軍と混乱した市民だけが残された。

12月29日午前7時、中国、ロシア、パキスタン、アフリカ諸国を中心とする『上海条約機構』が北朝鮮支援を表明。上海条約機構加盟国連合軍が韓国の港灣都市仁川に強行上陸、電撃作戦を展開して韓国首都ソウルを占領した。

北朝鮮の金委員長は朝鮮民主主義人民共和国の首都をソウルに遷都すると平壤放送で発表した。

同日夕方、上海条約機構海空連合軍は日本国の沖縄、北海道に上陸作戦を行ったが日米と台湾の海空軍による連合波状ミサイル攻撃を受け、多数の輸送船や空母、強襲揚陸艦が撃沈されて上陸を断念した。

同日夜半、中国福建省、吉林省から通常弾頭形弾道ミサイル「東風21号」400発が、在日米軍、自衛隊主要基地に発射された。中国軍の飽和攻撃に日米のミサイル防衛システムは果敢に対応したが、多くのミサイルが迎撃を突破して各地の自衛隊や在日米軍基地周辺の住宅地に着弾し、軍民共に数万人の死傷者を出した。

日本国総理大臣は自衛隊に防衛出動を命令した。予備自衛官が召集され、企業や学校は当面の間活動休止となり、市民の山間部や都心部シエルターへの避難が始まった。

中国軍第二砲兵（戦略ミサイル軍）によるこのミサイル飽和攻撃は米国インド太平洋軍司令部を震撼（しんかん）させた。

極東の一大補給拠点であった在日米軍基地が一時的に機能停止したため、極東地区における米軍の第一列島戦線維持が不可能となり日

本列島はもとより台湾、フィリピンの防衛までもが困難となったのである。

事態を重く見たインド太平洋軍司令部はペンタゴンの統合参謀本部、ワシントンの海軍作戦部長と協議した結果、アジア地区における中露勢力の侵攻を食い止めるべく重大な決断をした。

12月30日未明、米国グアム島アンダーセン空軍基地から戦略空軍爆撃機が出撃、上海条約機構の本部がある上海、ロシア極東艦隊司令部があるウラジオストク、北朝鮮の首都平壤（ピョンヤン）に核攻撃を行った。

同日午後、米国西海岸のサンフランシスコ、サンディエゴ海軍基地、韓国臨時政府の首都釜山に中国とロシアが新型大陸間弾道弾（ICBM）を発射。新型弾道ミサイル迎撃に失敗したサンフランシスコと韓国臨時政府の首都釜山は核の炎に包まれて壊滅した。

日米とNATO諸国、フランス、インドは西側陣営として中国とロシアを激しく非難し、各国は臨戦体制に突入した。

中東では黙示録における「最終戦争」が不可避になったと各国の宗教指導者が扇動したために、人々が最後の「聖戦（ジハード）」を實行すべく、エルサレムとヨルダン川西岸地区でイスラエル警察、軍に投石や発砲、自爆テロで攻撃を行い、イスラエル側の反撃で双方1万人近くの死傷者が出た。

この出来事でイスラエル周辺諸国の軍事的緊張が一気に高まり、イスラエル首相は国家総動員法を発令、18歳以上の若者が軍隊に招集され、民間防衛隊の出動が始まった。

同様にインドとパキスタン国境においても両軍の戦力がカシミール地方に集結して軍事的緊張が極度に高まった。

12月31日の時点で、第三次世界大戦は不可避と世界中のあらゆる指導者が確信した。

日本国内では、『時局を考慮して』紅白歌合戦や、民放各社の年末年始娯楽特別番組、年末ジャンボ宝くじ当選発表等は総務省の『強い要請により』延期された。

渋谷では恒例の年末カウントダウンが中止されたために、怒った一部の若者と左翼思想の過激派が警察機動隊と衝突、渋谷センター街の一部も過激派による放火で破壊された。

警察と公安に逮捕された若者達は2000人を超え、双方の死傷者は300人以上となった。

東京都知事は、首相官邸を通じて陸上自衛隊に応援要請を行い練馬の第32普通科連隊が治安出動する事態に発展した。

箱根駅伝が中止された、2019年1月2日午後9時45分、極秘裏に打ち上げられた日本の早期警戒衛星『あさがけ』がユーラシア大陸各地から多数のICBMが日本列島全域を目標として発射されたのを探知した。

探知したICBMは150基を優に超えた。

同9時50分、日本海に展開していた海上自衛隊イージス艦『こんごう』『みょうこう』、米国海軍『ウイルバー』から迎撃ミサイルが発射された。また、本州の各自衛隊基地からはTHAAD(サード)、PAC(パックスリー)3が迎撃を行ったが、迎撃に成功したのは僅か8割だった。

同9時55分、日本国政府は日本列島全域にJアラートを発令。

不協和音が織り成すミサイル警報サイレンを耳にした大月や西野、春日達も含む日本国民が意識を失う最後に視たのは、北西の澄んだ夜空を横切る数十の美しい流れ星と天空から降り注ぐ眩(まばゆ)いばかりの白光(びやくこう)だった。

2019年1月2日午後10時、日本列島は『地球上から』消滅した。

—————

日本列島が地球上から消滅した1時間後。

2019年1月2日午後11時、米国アラスカ州から飛来した米国空軍のWC135大気観測機はロシア軍暗黙の了解のもと、カム

チャツカ半島から南下して台湾まで飛行し、北海道から沖縄に至る地域を含む日本列島の完全消滅を確認した。同時に大気中のサンプルから自然界に存在しない強烈な濃度の各種放射性物質を検知した。

観測データは自動的にペンタゴン（国防総省）とモスクワのクレムリンに送信された。

米中露政府はスイスジュネーブでの交渉で、日本列島消滅を両陣営における相互確証破壊要件に該当する事で合意、西側への代償としてクリミア半島セバストーポリと中部工業都市ミンスク、中国内陸部工業都市 重慶への報復核攻撃、テヘラン郊外にあるイラン核施設へのイスラエル軍の空爆、キューバへの米国軍事進攻を中露が黙認することとなった。

衛星軌道を回る国際宇宙ステーションの地球観測システムは、日本列島周辺が消滅する直前に、強力な重力振動と電磁フィールドの発生を探知した。

また、NASAの月面観測システムも検知機器が故障する程の猛烈な電磁波と重力エネルギーが月面から日本列島を指向して発生したことを探知した。

しかしこの情報が米国政府中枢で生かされることは無かった。

北東アジアで発生した強烈な重力波振動と、南北1500 kmの長大な日本国土及び周辺海域分の質量が失われた巨大な「ひずみ」は、世界各地の地殻、マントル活動を激しく刺激して超巨大地震と大津波、火山の大噴火が地球規模で同時多発的に発生した。さらにポールシフト（地軸変動）をも生じさせて南北両極氷床の一部が融解、地球海面が5 m上昇した。これによって多くの島々、世界中の低海拔地帯が水没した。

各大陸沿岸部の既存港湾は全て水没、パナマ運河も大津波と海面上昇により人工的な運用が不可能となるなど、世界中の海運に致命的な打撃を与えた。

ポールシフトは地球磁場の大変動を引き起こし、無線通信が不安定となり地上と衛星の送受信が出来なくなつた。当然にGPS機能が

全く機能しなくなった。

また、世界中の火山帯が活動を活発化させた為に地球全域が火山灰に覆われてあらゆる航空機の飛行が困難となった。

都市部では降灰により送電施設がショートして故障、電力供給が困難となった。

この天変地異で大半の国が大混乱の末、政府組織が統治機能を失って消滅していった。

特にアジア・アフリカ・中南米においては一つの国も存続が出来なかった。

このような状況下で生き残った人類が、既に消滅した極東の島国に想いを馳せる暇など無かった。

火星編 転移直後

灼熱（しゃくねつ）の君

日本列島が消滅する約45億9000年前

〔太陽系第4惑星マルス タルシス高地 オリンポス山 特殊宇宙生物物理学研究所〕

ゼイエスの考案した惑星間特殊カプセルを用いた第3惑星 創星プロジェクトは1つの区切りを迎えようとしていた。

『こちら調査観測ラボ「ルンナ」 灼熱の君』が良く見える。』

第3惑星衛星軌道に到着した「ルンナ」に搭乗しているイワフネ調査隊長から星間通信が届く。

調査観測ラボ「ルンナ」は、現在建造中の葉巻型フォルムを持つオウムアムル型プレアデス星系移民船に比べれば小さいが、マルスに2つある衛星「フォボス」「ダイモス」を合わせたものよりは大きい。「ゼイエスのカプセルとのデータリンクはどうなっている？」

第4惑星マルスのアマトハ所長が報告を求める。

『データリンクは問題ない。予定通り第3惑星大気圏突入後、850万の小型カプセルに分離、惑星中緯度に着地した親カプセルを中心に半径2000kmの地点に展開、着地した。』イワフネが報告した。

「子カプセルの特殊バイオ溶液、電磁フィールド、重力制御システムの稼働状況は？」

ゼイエスがアマトハの通信に割り込んできた。

『焦るなよゼイエス。全ての子カプセルが正常に機能している。フリーズしたり溶けたカプセルは皆無だ。親子カプセル共に万一の場合は、ルンナがフォローにまわるぞ！第4惑星マルスまで瞬間転送させるから、心配するなよ。』イワフネが苦笑して応えた。

『第3惑星地表温度は現在1400℃。熱い歓迎ぶりだ。地下のマントルからマグマがあふれかえっているようだな。小型カプセルに積んでいる特殊バイオ溶液開放は時期尚早と思われる。アマトハ、本当にこんな所で生命が育つと思っっているのか？』

イワフネが懐疑的に訊く。

「われらの星もかつてはこんな感じだったのだ。これは母星の考古学探索チームからの分析結果から断定出来る。あとは地殻（ちかく）が安定して、大気と水が更に満（み）たされるまで待つしかないな」

アマトハ所長が判断する。

「ああ、特殊バイオ溶液の開放まで2000年程待つか。なに、少し寝ている間に状況は劇的な変化を遂げるはずだ」

ゼイエスが樂觀的に言う。

『こちらは間もなくルンナ全体をスリープモードに移行させる。良い夢を、アマトハ、ゼイエス』

イワフネが告げる。

「ああ、研究所地下区画もスリープモードに移行する。また会おう、イワフネ」

ゼイエスが応えた。

イワフネからの星間通信が終わると、ゼイエスがアマトハに問いかける。

「アマトハ、あのバイオ溶液は『シャドウ』製ではないよな？」

ゼイエスが疑わし気な顔でアマトハを見つめる。

「ゼイエス！非常に不愉快な事を言うね君は。私をあの異端者共と一緒ににしないでくれるか？」

アマトハが憤懣やるかたない表情でゼイエスと向き合う。

「私の作ったバイオ溶液は純粋に科学的成分で作ったものだ！異端者共のようにどこの誰とも知らぬ輩が自らの仲間を溶かして作ったものとは違うのだ！」

アマトハが言い放つ。

「すまんアマトハ。だが、時々私は奴らの研究も異端ながら一部「真理」を突いているように思えるのだよ」

ゼイエスが正直に白状した。

「ゼイエス、今の話は聞かなかったことにしよう。これ以上この話題をすると我々もシャドウになりかねないぞ！」

アマトハが警告した。

「っ!?そう、だったな。危ないところだった。少しでも気を許すと直ぐ奴らの思想に侵おかされてしまう。私は寝ることにするよ」

ゼイエスはそう答えるとコールドスリーパーの設定を5000年後に設定した。

「それが良い。お休み、ゼイエス」

アマトハはゼイエスにお休みを告げると指令室の個人ブースに入った。

「リア、こちらのプロジェクトはひと段落した。これから「少し」眠ることにするよ」

アマトハがモニターの向こう側に居る恋人に報告する。

「あら、つれないわねアマトハ？私はこれからプレアデス星団へジャンプするのに・・・」

少し拗す(す)ねた口調でリアが言った。

「君も早く寝た方がいいぞ？君にはプレアデス星団(むこう)で私達のマイホームを建ててもらわねばならないのだから」

アマトハが宥めるように言う。

「そうね。こちらもこれからジャンプして自動航行システムに切り替わるから2000年程ひと眠りしておくわ」

リアが肩を竦すくめる。

「ところで、例の溶液に他者からの介入はあったの？」

リアが声を潜めて訊く。

「ない。ゼイエスが疑わしいと思って問い詰めてみたが、彼は素でイカれているからな。奴らの怪しい思想もゼイエスには敵かなわんだろう」

アマトハがそう「報告」した。

「了解したわ。ありがとうアマトハ。これでプロジェクトが完了したらあなたは評議員に一歩近づくのね」

リアがため息をつく。

「君だってプレアデス移民プロジェクトが軌道に乗ると探査船団の隊長様だろうか？」

アマトハが指摘する。

「そうね。否定はしないわ。さらなる研究の先に行き着くためにはま

だまだ力が足りないの」

リアが答える。

「私も同じさ。それじゃ、お互い寝るとしようじゃないか？お休みリア」

「おやすみなさいアマトハ」

通信モニターが切れると指令室の電源が自動的にスリープモードに入った。

「今の所介入は無かった……。今の所はな……」

含むように呟きながらアマトハは眠りに落ちた。

混乱

地球暦2019年1月3日午前0時〔東京都千代田区永田町 首相官邸危機管理センター〕

日本列島が天空から降り注ぐ白光に包まれて全国民が意識を失つて数時間後、日本国政府中枢である危機管理センターも意識を取り戻した職員が次々と持ち場について政府各省庁や全国の自治体と連絡をとるべく慌ただしく動き回っていた。

「誰でもいい、順番なんていらん、何でもいいから現状の報告を頼む」
ピンマイクを着けた内閣官房長官の岩崎が、どかっと司令席に座ると声を張り上げた。

直後に怒濤の如く、報告が始まる。

『総務省電波管理局、北海道から沖縄にかけての上空は電離層が極めて不安定。長距離無線、衛星通信、GPS使えません！ただし、地上有線ケーブルは生きています。国際海底ケーブルは断線しており使用不可能』

「通信制限をかける！90%だ！」

『経産省、日本国内の原発は全て異常無し！』

「直ぐに地元自治体に連絡しろ！」

「環境省！全国各地のモニタリングポストに異常値！」

「詳しく頼む」

「全都道府県において放射線量が基準超過！首都圏は通常の200倍！」

「中露の核爆弾が空中で炸裂したのか!？」

「市ヶ谷からは核爆発観測なしとの報告！」

「Jアラート発令！全国民に屋内又はシェルターへの緊急避難指示！」

「総務省は民放電波使用权の一部停止を指示！政府広報を優先、全局はテレビ・ラジオもNHKに統一！」

「ネット回線は通信制限と同等の90%だ！」

「全国の消防と警察は直ちに管轄区域を巡回！放射線異常観測の事実

と住民の避難を徹底させろ！」

『防衛省、空自が百里から観測機を出しました。米軍も嘉手納から出しています。』

日本海の海自イーゼス艦は米軍の空母レーガン、駆逐艦ウイルバーと共に健在。舞鶴への緊急寄港を要請中。

辺野古の米国海兵隊と旗艦『ブルーリッジ』健在

『海兵隊の救援出動を要請しろ。市ヶ谷と連携させるんだ』

『こちら横須賀の自衛艦隊司令部、東北太平洋沖でオハイオ級原潜からの救助要請あり、潜水支援母艦が急行』

『横須賀に知らせてやれ。よし、頼む。』

『こちら空自小松、札幌上空にロシアの偵察機が飛来、所属基地消失のため緊急着陸要請！』

『空自千歳基地に降ろせ！後は市ヶ谷の指示を仰げ！』

『海保巡視船しきしま、長崎沖の米国空母セオドア・ルーズベルトから那覇軍港への緊急寄港要請受け、誘導中。同じく英国空母クイーン・エリザベスも佐世保又は那覇軍港への緊急寄港を要請しており、巡視船あたごが対応中』

『要請を受諾する。後は市ヶ谷の指示を仰げ！』

『国交省 府中航空管制センター、日本列島上空を飛行中の国際線旅客機多数から原因不明の計器故障によるエマージェンシーコール受信！有害な宇宙線により、乗員・乗客多数被爆した模様。連絡途絶した旅客機複数あり』

『なんだと!?!』

岩崎は驚いて立ち上がった。他の職員も思わず動きを止めた。

『国籍を問わず、日本列島上空を飛行中の全旅客機を直ちに最寄り空港に降ろせ！』

『各空港は当面封鎖、それと地域の指定病院に急性放射線被爆患者の受け入れを要請しろ。非常事態法に係る内閣官房優先行政命令を発動させろ！』

『横浜市鶴見区の住宅地に旅客機が墜落した模様！炎上中！』

「茨城県、千葉県からも旅客機墜落情報！」

「羽田コントロールから複数の旅客機がレーダーから消失！」

「羽田に消失した旅客機の乗客名簿情報を警視庁と国交省、首都圏自治体に流すんだ！個人情報保護は後回しだ！今は国民の安否確認が最優先だ！」

「全国の自治体、警察、消防に、墜落した旅客機が被爆^{ひばく}している可能性があることを至急連絡！自衛隊災害派遣を要請させる！」

「環境省は全国モニタリングポスト放射線値を直ぐにこちらに報告だ！ただし、自治体への連絡を優先！」

立て続けに岩崎が指示を出す。危機管理センター職員の動きは既にピークに達していた。

『警視庁、都内の混乱は最小限度。暴動などは発生していません』
『全国の自治体が自主的に避難所を開設中。都内各区も準備をしています。外国人旅行者受け入れも可能。』

『総務省消防庁、神奈川県、千葉県、茨城で旅客機墜落による住宅地での大規模火災発生報告あり！都内各地で意識不明患者多数の搬送要請が殺到中』

『外務省、米国、英国、EU諸国、オーストラリア、中国、ロシアの駐日大使と駐在武官が首相との緊急協議を求めて来ました！』

「そつちは30分後に首相執務室へ回せ！」

『JAXA^{ジャクサ}、地球観測衛星からの通信がロスト！データ受信出来ません。また、134基ある衛星の大半と交信不可能。電離層が乱れ、磁場が大きく変動している模様。』

国立天文台、各地の天文台から光学観測を基に、現在位置の測定を行おうとされていますが、苦戦。空自の協力を求めています』

「百里^{ひゃくじ}がもう出ている事を伝えてやれ。市ヶ谷と連携させるんだ」

『信州のニュートリノ研究所が、スーパーカミオカンデ緊急停止させました！』

「文科省に対応させる！」

「今夜もまた、徹夜だな」

先程の報告を「全て」整理、記憶した岩崎は、秘書官の差し出した

おしぼりで顔を拭いながら、内閣総理大臣が仮眠している執務室へ向かった。

1時間後、日本政府は日本全土に居留する人々に対して、緊急異常事態を知らせる政府広報を全てのチャンネルで放送した。

赤い夜空

地球暦2019年1月3日午前1時【神奈川県横浜市 アパート
「サンライズ」105号室】

大月が突つ伏していた炬燵こたつの上で目を覚ますと、ソファアで西野ひかりが、台所で春日が一升瓶いっしょうびんを抱き枕にして酔いつぶれて寝息を立てていた。

そう言えば、日本最期にほんさいいじの夜なら宴会だ！とか言つて無理矢理西野ひかりが春日を引き連れて部屋に上がり込んで酒盛りさかもになったのだつたか。大月はぼんやりと西野の苛烈なアタックと、酒癖さけくせの悪さが露呈ろうていした春日が大月と西野に絡からんだカオスな時間を思い出して頭を振つた。

普段の大月なら、静かな時間を好む筈はずだが、昨晚は何故か、人恋しくなっていたのか？よくわからないな。

ベランダで深い溜め息をつきながら、夜空を見上げると、夜空を不気味な赤いオーロラが一面に拡がってゆらゆらと揺れていた。

ぼんやりした頭で大月は、悪い夢でも見ている気分になった。

しばらくベランダに寄りかかりながら、浮き世離れた幻想的な赤い夜空を眺めていると、テレビから再びJアラートのチャイムと緊急地震速報のシグナル音が流れてきた。

部屋に入ってテレビ画面を見ると、

『政府広報

緊急異常事態発生につき、国民の皆様は自宅か、自治体が設置した避難所等『屋内おくない』に急いで避難してください。

なお、避難にあたり、自家用車、バイク自転車は交通渋滞もとの元となるので使用しないでください。

我が国上空の電波状態等が非常に悪いので、不要不急の通信、通話は公衆電話を除き、止めてください。現在、厳しい通信制限を実施中です。

必要な情報はお手持ちのテレビ、ラジオ、行政無線等からお伝えする予定です。

各都道府県の放射線値が軒並み高い為、極力、外出は止めてください。

特に、15才未満の子供の外出は健康を害する可能性があります。不要不急の外出は控えてください。

本日から当面の間、行政サービス拠点、公共交通機関（民間航空及び船舶は除く）を除いた全ての企業活動は休止となります。

国民および国内に滞在している海外旅行者の皆様におかれましては、どうか冷静に行動して頂きたく、お願い申し上げます。』

この政府広報は、全てのチャンネルで日本語のみならず、英語、ロシア語、中国語でも流されていた。

取り急ぎ、身の危険が去ったことに安堵した大月は、ベランダのシャッターを下ろして外の光を遮ると、ソファアで酔いつぶれる西野の介抱を始めるのだった。

観測

地球暦2019年1月3日午前0時30分【茨城県大洗沖70kmの太平洋】

高度30000フィートの太平洋上を北に向かう航空自衛隊のRF4E偵察機に搭乗している高瀬翼少佐は特別に黒く塗りつぶされたキャノピーに覆われたコクピットの中で冷静に各種観測任務を続けていた。

「こちらヤタガラス、針路正面に向けて赤外線レーザー、炭素レーザー、索敵レーダーを照射する。オクレ。」

赤い高空を飛ぶRF4Eから、赤や緑の糸状の線が針路前方に伸びていく。

「っ!!こちらヤタガラス、各レーザー、レーダー、前方30kmでブロック!」

高瀬が緊張した声で報告する。

「了解した。ヤタガラスは針路を反転して南西に向かえ。オクレ。」

「ヤタガラス、ラジャ。」RF4Eは翼を翻すと今度は日本列島に沿って南下した。

「こちらコントロール、ヤタガラスの針路を確認した。地上撮影カメラを最大望遠モードにセットせよ。オクレ。」

「ヤタガラス、最大望遠モードにセット完了、オクレ。」

「こちらコントロール、そのままの針路で超音速背面飛行を5分継続せよ、オクレ。」

「...こちらヤタガラス、耳が遠くなった。もう一度指示を頼む、オクレ。」

通常、こうした操縦士の返答はコントローラーに向けた明らかな抗命行為に等しく、懲罰モノである。

しかし、今度は管制官とは違う声で、

「こちらジエネラル。馬鹿げた指示だと私も思う。だが、今我が国で宇宙（そら）を視れるものは貴官以外に誰もいないのだ。可能か?」

航空幕僚長自ら通信に応じたことに高瀬は事態の深刻さを認識し

た。

「ヤタガラス、失礼しました。これより任務遂行する、オクレ。」

R F 4 E 偵察機はアクロバット飛行しながらの背面姿勢をとりながら、マツハ1.5を超える超音速で日本列島与那国島南端まで天空の撮影を行った。

デジタル撮影された映像は直ちに市ヶ谷の防衛省統合幕僚本部と府中の航空総隊司令部に自動送信された。

30分後、高瀬は無事、百里基地に着陸した。

離陸前の美しい塗装は焼け焦げて跡形もなく、機体からはうっすらと白煙が上がっていた。

駆け付けた整備員が作業用ドローンのセンサーで機体を計測したところ、地球上では考えられない高レベルの有害な各種宇宙線に被曝した痕跡こんせきが検出された。

整備員は直ちに滑走路から退避して、そのまま自衛隊中央病院に直行した。

ヘルメットで分からないが、熱でのぼせたような、やや赤く膨れた顔に気付かないまま、高瀬はコクピットから出ると、あつという間に白い放射線防護服に包まれた化学部隊隊員に担がれてストレッチャーに乗せられ、大急ぎで自衛隊中央病院に搬送された。

自衛隊救急車の中で高瀬は激しい嘔吐おうとを繰り返し、病院到着時には意識不明となっていた。

高瀬は、致死量に近い放射線を1度に浴びて急性放射線被曝を発症しており、集中治療室の中で化学学校の教官でもある専門医の懸命な被曝治療を受け、一命を取りとめた。

高瀬の状態を知った航空幕僚長と管制官は翌朝、辞表を提出したが、それぞれの上官に一喝いっかつされ、受理されなかった。

高瀬が命懸けいのちがで撮影した映像と観測データを解析した防衛省統合幕僚本部とJAXAジャクサは、その内容に驚愕きょうがくした。

驚愕（きょうがく）と覚悟

地球暦2019年1月3日午前3時〔東京都千代田区永田町 首相官邸地下 総合会議室〕

日本列島消滅前の国際情勢に関係なく、お互いが生き延びる為に、情報を共有、協力する事で合意が取れた国のみ参加する、合同対策会議が開催された。

会議室には澁澤首相を始めとする内閣の全閣僚と、各省庁の事務次官、米国、英国、カナダ、オーストラリア、ロシアの駐日大使と駐在武官、各国軍の司令官が円卓の形で席に着いた。

会議は、進行役である内閣官房長官の岩崎が音頭をとって始まった。

「現在、日本列島とその周辺を取り巻く異常事態について、一定の分析結果が出たので報告いたします。」

JAXA理事長の天草が、

「信じがたい事ですが、私達は北海道から沖縄までの日本列島ごと——周囲100km、高度2000kmの空間ごと、太陽系第4惑星である火星に転移したものとみられます。これは、米英海軍、ロシア海軍による海上、海中調査と航空自衛隊偵察機による高高度からの宇宙撮影映像と各種データ解析の結果として導き出されました。」

と詳しく報告すると会議参加者からどよめきの声が上がった。

「クレイジーだ！火星は人類の生存に適さないとNASAが言っていたのではないのか？」

沖縄海兵隊司令官のジョーンズ中將が声を張り上げた。

「ミスターアマクサ、周囲100kmと貴方は言われたが、その先はどうなっているのですか？」

英国極東派遣艦隊司令官のロイド少將が質問した。

「サー、ロイド閣下。100km先は発生源不明の電磁フィールドに阻まれて観測出来ません。あらゆる物質も、電波や光も、フィールドは通過することが出来ませんでした。」天草が答えた。

「ジョーンズ中將が仰るとおり、火星本来の環境にさらされたのであ

れば、私達は既に即死しています。」

「現に、日本列島高空を飛行した多くの国際線旅客機で、乗員乗客が多数、有害宇宙線による急性放射線被曝をしております。我が国の偵察機パイロットも致死量に近い宇宙線を浴びて被曝し、意識不明の重体です。」天草が答えた。

「ミスターアマクサ、取り乱して申し訳ない。被爆した方々にお見舞い申し上げます。」

ジョーンズ中將が神妙な顔で天草に目礼した。

天草は頷きながら、説明を再開した。

「しかし、私達はまだ、”生きています”これは、私達の生存環境が電磁フィールドで維持されているからだと推測されます。」

「今の私達は、1つのバイオスフィア（独立した生態系）の中で生きています。原因はオーバーテクノロジー過ぎて不明ですが。」

会議参加者達は絶句するしかなかった。

JAXAの天草を皮切りに、防衛省、在日米軍、英国連邦派遣軍、ロシア陸海軍から驚くべき報告が続いて、会議参加者は国内外の出身を問わず、自分が夢を見ているのではないかと錯覚しそうになるほどだった。

しかし、1億1000万人を超える国民と、在日米軍を始めとする各国の駐留軍、訪日旅行者、外交官やその家族など、百数十万人規模の居留者が日本列島には存在している。

現実逃避する暇など無かった。

内閣総理大臣の澁澤太郎が、重みのある声音で会議参加者に呼び掛けた。

「日本国首相として、無策でこの異常事態に身を委ねる事などあり得ません！我が国は座して死を待つことを断固拒否いたします！

我が国は、いかなる災厄が降りかかろうとも、諦めずにこの異常事態へ毅然と立ち向かう覚悟です。

我が国が核の惨禍で消滅する寸前まで日本列島に踏みとどまった各国の皆様に応えるためにも、我が国の国民と同等の安全と権利を保証する為に、国家が持つ資源を提供する用意があります。

各国の皆様には是非とも我が国の方針をご理解頂き、共に生き延びる為、各国の叡知^{えいち}とお力をお借り致したく、ご協力をお願いしたい。」米国のミツチエル大使が立ち上がり、澁澤首相に敬意を込めて拍手した。各国の会議参加者も次々とスタンディングオベーションを澁澤首相に贈った。

一息つく間もない、場の流れに違和感を覚えた参加者も多くいたが、大半の国家代表は『日本国との密約』を結んでいたなのでこの流れを当然のものとして振る舞った。

その後の対策と各国との協力体制を構築する話し合いは円滑に進み、午前5時前に当面の対応が決定された。

そして、午前6時に全閣僚と各国大使が出席した上で、全てのマスコミを首相官邸に集めて国家非常事態宣言と合同記者会見が行われる事となった。

舞台裏

地球暦2019年1月3日午前2時〔東京都千代田区永田町 首相官邸 内閣総理大臣執務室〕

「どうだろう？ミツチエル。検討して貰えないか？」

澁澤が流暢な英語でモニター先の相手に語りかける。

「わかった。すぐに検討して連絡する。1時間くれないか？」ミツチエル駐日大使が応える。

「申し訳ないが、このあと中国・ロシア・ヨーロッパ諸国と協議するんだ。30分で答えをくれないか？」澁澤が切り返す。

「ワシントンやウォール街は存在しないんだ。君が大統領なのだから。当てにしているよ、ミツチエル。」澁澤から通話を切った。

「破格の条件なのに欲張りですな。」

官房長官の岩崎が澁澤に感想を述べる。

「いや、あれがアメリカだよ。アメリカファーストなんだよ。沖縄地方だけではなく東京の半分を寄越せなど、クレイジー極まりないが彼はアメリカ合衆国の体現者でもある。最大限の国益を追求するのは当然さ。」澁澤が応えた。

「おそらく、沖縄県は日米共同統治地区として、極東アメリカ合衆国の誕生だ。我々は行政を担い、治安は米軍に任せた方が楽だ。この際、核兵器の保有については黙認しよう。」

「毎年3000億円も注ぎ込みながら、何の結果も出さずに反発するだけの自治体など、これからの我が国には負担でしかない。」澁澤が本音で語る。

きっかり30分後、ミツチエル駐日大使から連絡があり、沖縄の共同統治、極東アメリカ合衆国の建国、日米『相互』防衛条約の締結が決まった。

「我々中華人民共和国は、先の大戦における日本軍の戦犯行為に謝罪と賠償を要求する。」

また、歴史的にも我が共和国との関係が深い、琉球諸島、九州地区

の領有権を主張する。」

中華人民共和国 鄭駐日大使は開口一番に捲し立てた。

「我が国の国土を抹殺しようとしたのはどこの国か！」 澁澤総理が一喝した。

「貴国の時代遅れの主張に耳を傾ける暇などない。我が国と共に生きるか、否かです！」

岩崎官房長官も応酬する。

「戦犯国日本は、国内の我が国人民の生活と政治的・経済的独立を保証しなければならぬ。」

鄭大使は主張を曲げなかった。

「もう結構です。我が国は法律に則り、適切に大使並びに滞留者の処遇を決めさせて頂きます。」

澁澤は鄭の反論を待たずにモニターを切った。

「石場外務大臣は何をしていたのかね？」 澁澤が怒り心頭の表情で、岩崎に事前折衝の不備を指摘した。

「石場君はチャイナスクール派でしたなあ。」 岩崎が顎をさすりながら答えた。

「中国に恩を売ろうとしたのでは？ 脅されたのかも知れませんが。」

「そう言えば石場君は最近体調が優れないようだったなあ。」 唐突に澁澤が言った。

「そうですね、この際、検査入院を勧めて見ましようかね。」 岩崎も棒読みな答えをした。

午前2時40分、外務大臣の石場が体調不良を訴え、都内の病院に救急搬送された。

診断の結果、重度の肝機能障害が認められたため、石場外務大臣は一身上の都合により辞職した。

午前2時55分、異例の簡略手続きで、後任の外務大臣として中立派の後白河 政徳が、皇居で信任を受けた。

皇居で信任された後、澁澤は後白河に、

「後白河君、初仕事だ。公安に国内居留の全在日中国・朝鮮半島出身者、反日的日本人支援者のマークを要請してくれ。今からすぐにだ！」

それと国際法に則り、人道的な観点から彼らを纏めて『保護・收容』する政策の立案を頼む。」

と、戦後からの永い呪縛を徹底的に排除する指示を出した。

「非常に不本意ではありますが、正直に申し上げましょう。我が国は『貴国』の北方4島を極東ロシア連邦と認め、相互防衛条約並びに経済連携協定を締結する用意があります。」

澁澤がパノフ大使に提案した。

ロシア連邦駐日大使のパノフは、ポーカーフフェイスを保ちながらこう応えた。

「我が祖国としても願ってもない事です。我が国の人民が自由に北海道を満喫出来ることは有り難いことです。」しれっと、パノフ大使は北海道の共同統治権を要求した。

「北海道は我が国固有の領土です。多少の便宜は図りますが、まずは、大使の北方4島を開発する事を先にされた方が極東アメリカ合衆国との関係を築くためにも大切では？」

あ、いい忘れましたが、8時間前のICBMはシベリアや沿海州からも発射されたことを我々は独自に知っています。夜明け前に公表しても構いませんが、さて。」

澁澤はパノフの要求を拒絶しながらも、経済協力による北方4島の開発を提示した。

「いや、澁澤首相の仰る通りですな。我々の北方4島をどうかよろしくお願いします。」

パノフからモニターが切られた。

「まったく、相変わらず厚かましいロシア熊め。」澁澤首相と岩崎官房長官は溜め息をついた。

ロシア大使の後も英国、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国の駐日大使との交渉が続いたが、中国のように決裂はしなかった。

長崎県や地元住民の完全同意の上で、佐世保市や五島列島の一部、瀬戸内海の小豆島周辺を拠点とした、『英国連邦極東』の設立案が合意

された。

また、佐世保市ハウステンボス町に隣接した山地を日本政府が買取り、在日ヨーロッパ諸国のコミュニティや滞留観光客が開発して、『ユーロピア自治区』を設立する案も合意された。

尚、韓国大使館は大使がソウル滞在中に北朝鮮の砲撃に巻き込まれて行方不明となり、代理大使も任命されないうまま、釜山壊滅時に政府自体が消滅したため閉鎖され、一時的に法務省に接收された。

日中交流協会は後白河外務大臣と協議し、神奈川県横浜市の中華街にある台湾人コミュニティを「地元自治体との共生」を絶対条件として、中華街の一部地域を『台湾自治区』として認められる事となった。

日常の終わり（前編）

地球暦2019年1月3日午前5時45分頃【神奈川県 横浜市
アパート「サンライズ」105号室】

「大月さん、鮭焼けましたよ。」台所から春日が大月に声をかける。
「ん、ありがとな、春日。」春日の魚さばきは中々のもので、スーパー
の実演販売で経験を重ねただけであった。

一方で、

「西野、まだ気持ち悪いか？ バファリン飲むか？ 違うな、ウコンにする
か？」大月が青ざめた顔でぐったりと炬燵に突っ伏している西野の面
倒を見る。

「ううう。良妻アピールのチャンスが・・・」

「すみません、大月さん。ウコンください。ぐうつ。」西野がウコンを
イッキ飲みする。

「ふう。もう1本！」西野がおかわりを求める。

「やめとけ、そんなのより朝食食べた方が酔いが早く醒めるぞ？ ほれ、
赤だし味噌汁でも飲んでけ。」大月が嗜める。

「どうせ仕事もお休みなんですから、いいんですよー。のんびり朝御
飯いただきまーす♪」けろつとして焼鮭に箸を伸ばす西野だった。

「大月さん、ご飯のあと、シャワーお借りしてもいいですかあ？」西野
があざと可愛い声で大月に訊いた。

「ウゴツ！ はあ？ お前、家で浴びてこいよ。」大月が喉に流し込んでい
た納豆かけご飯を詰まらせながら、モゴモゴ言ったあとで、

「ああ、そうか。放射線かあ。」大月は煩惱を振り払うべく、苦悩の表
情を見せる。

西野から見るとまるで、煩惱と闘う紳士の振りをした中年男性にし
か見えないのだが。

春日は我関せず、とばかりに澄まし顔で味噌汁を啜ってい
た。

そうこうしているうちに、テレビ画面が政府広報から変わり、首相

官邸の円卓会議場が映しだされた。

円卓中央に厳しい表情の澁澤首相が座っていた。

左右は米露駐日大使がポーカーフェイスを保ちながら席に着いていた。

NHKアナウンサーの声で

「これより、澁澤総理大臣による国家非常事態宣言と、緊急国際共同声明、合同記者会見をお伝えします。」

とアナウンスが行われた。

画面中央に座る澁澤首相はおもむろに立ち上がると、テレビ画面を真つ直ぐに見つめて視聴者に語りかけた。

「今から8時間前、我が国は150発を超える核ミサイルの攻撃を受けました。」澁澤は具体的な国名を敢えて、明らかにしなかった。

「我が国は米軍と共に日本海に展開した海上自衛隊イージス艦、全国の自衛隊基地から各種迎撃ミサイルで撃墜（げきつい）を試みましたが、全てのミサイルの撃墜には至りませんでした。」澁澤は言葉を切った。

「日本列島が世界から核爆発で消滅しようとした瞬間、我が国とその周辺で未知の現象が発生しました。」澁澤がゆっくりと話す。

「断片的な情報を基に分析したところ、我が国と周辺100kmが空間ごと、太陽系第4惑星である火星に転移したとの結論に達しました。」

画面が赤いオーロラに覆われた夜空を撮影した画像に切り替わった。

「この画像の右上矢印にご注目ください。」

画面右上の矢印で示された白い星が拡大されていき、やがて誰もが知る青色の海、白い雲と茶色い大地を持つ星が写し出された。

所々に赤い光点や灰色の煙、赤い川が見えるが。

「この星は、我が国が8時間前に存在していた、『地球』になります。」

澁澤はしばらく言葉を発しなかった。

視聴者が澁澤の発言を全て理解するまで待ったのである。

同時刻【地球 カリフォルニア沖の太平洋上 日本国籍 豪華客船「斑鳩」^{いかるが}】

朝食を取りにダイニングに訪れた乗客たちは味噌汁が冷めるのも忘れて、海外ニュースに釘付けになっていた。

なぜなら自分たちの母国が消滅してしまったのだから。

ダイニングのテレビは画像が不安定な米国CMNニュースを同時通訳や字幕なしで流していた。

NHKの海外衛星放送は受信できなくなっているのだから。

(以下「斑鳩」乗務員による日本語訳)

「こちらはニューヨークのスタジオです。ただ今番組の途中ですが臨時ニュースをお伝えしています。

ペンタゴン（国防総省）によりますと、昨日東部時間午後6時頃日本列島が中国とロシアの核攻撃で消滅したとのことです。繰り返します、日本が中国とロシアの核攻撃により消滅しました」

「NORAD（北米航空宇宙防衛司令部）とNASA（アメリカ航空宇宙局）によりますと、日本列島には150発以上の戦略核ミサイルが発射され、少なくとも20発以上が日本列島を直撃したとのことです」

ダイニングの床に一人の日本人の老婦人が涙を流しながら崩れるように座り込み、ダイニングのテーブルからはすすり泣く声が聞こえた。

「ペンタゴンによりますと、アラスカのアンカレジ基地から発進した空軍の特殊観測機が日本列島の消滅を確認したとのことです。日本のヨコタ、ヨコスカ、ミサワ、サセボ、ナハ、イワクニ、アツギ等主要基地と朝鮮半島東部の日本海に展開していた複数の航空母艦やイージス艦、潜水艦との通信が途絶えているとのことです」

「APF通信によりますと、ブリュッセルのNATO軍司令部は、英国の新鋭空母「クイーンエリザベス」とその随伴艦隊^{すいはんかんたい}が日本列島消滅と同じ時刻に消息を絶ったとのBBDF放送の報道を確認する声明を発表しました。司令部は長崎県沖を航行していた際に核爆発に巻き込まれたものと推測し、アメリカ太平洋軍と共同で調査・救難チームを

派遣する事をローロー」

「日本への奇襲核攻撃に対し、ペンタゴンは報復としてクリミヤ半島のセバストーポリロシア黒海艦隊海軍基地、ロシア中部の工業都市ミンスク、中国内陸部の工業都市重慶に対し戦略核攻撃を行い、各目標を完全に破壊したと発表しました」

「また、国営ロシアテレビによりますと、キューバの首都ハバナがアメリカ軍の空爆を受けているとの事です。プエルトリコ州兵の報道官はCMNの電話取材に対し、キューバの首都ハバナ郊外に海兵隊と州兵1個大隊が上陸してキューバ軍と交戦中であることを明らかにしました」

「ロシア大統領府は先程戦略ミサイル軍に臨戦態勢に入るよう指示し、モスクワ市民に対し避難命令を発令しました」

「ペンタゴンは戦略空軍が臨戦態勢に入ったことを認めました」

「中東カタールの放送局アロジャジーラは先程、イスラエル空軍がイランの首都テヘランに中性子爆弾複数を使用したと速報で伝えています。CMNテヘラン支局との通信が途絶しています」

「サウジアラビアの首都リヤドでアメリカに協力する現王政に反対する民衆が政府軍と衝突し多数の死者がローロー」

「現在、全面核戦争を避けるためにジュネーブの国連代表部で米口中代表は断続的に真剣な協議を続けています。現状の相互確証破壊で両陣営が収まるのかどうか、世界中が息を潜めて成り行きを見守っています」

「ローマのサンピエトロ大聖堂ではローマ法王が全世界に向けて停戦を呼びかけるミサを行いローロー」

次々とテレビから気が狂いそうなニュースが報じられる中、テレビと乗客の携帯電話が一斉に緊急速報を受信した。

ローロー緊急地震速報ローロー米国カリフォルニア沖にて超巨大地震発生。激しい揺れと大津波に注意して下さい。

乗客たちが緊急速報メールを受信した5分後、高さ60mの津波が日本の豪華客船右舷を直撃し、茫然としていた1200名の乗員・乗客を海底に巻き込みながらアメリカ西海岸一帯に波高を高めながら

襲い掛かった。

日常の終わり（後編）

【NHK 国家非常事態宣言 澁澤総理大臣会見中継】

日本語の他に英語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語に同時通訳された澁澤首相の会見は続いていた。

先程拡大された地球の映像は火星に転移した日本列島の赤い夜空に戻っていた。

再び写し出された澁澤首相は、着席して話していた。

「我が国は有史以来、存亡の危機にあります。この未知の現象が止まれば、私達は瞬時に赤い大地の過酷な環境に投げ出されて命を失うことになるでしょう。しかし、だからと言って、我が国は座して死を待つことなど断固拒否いたします！

如何なる災厄が我が国に襲いかかろうとも、私達は、諦めることなく、毅然として、この状況に立ち向かいます！よって、ここに、国家非常事態宣言をいたします。

政府は、国家の総力を挙げて、最期の瞬間まで、国民の皆様をお守りします。

専門家の推測によりますと、未知の現象は私達と異なる文明による、オーバーテクノロジーが関与しており、当面はこの隔絶された空間が維持されると思われま。政府は、この隔絶された空間で生き延びるためにあらゆる方策を実施してまいります。

国民および、我が国に滞在されている在留外国人の皆様におかれましては、耐えがたきを耐え、しのびがたきをしのびつつも、諦めずに、この日本列島で生き延びる強い意志を、保ち続けていただきます様、お願い申し上げます。」

テレビ画面が澁澤首相の背後にある超大型スクリーンに焦点を合わせ、スクリーンに投影された首相のノートパソコン画面を写し出す。

画面には、『日本国非常事態宣言に係る特別対処条項』と記された主題の下に、政府が発表する具体的な対応が箇条書きで記載されていた。

『日本国非常事態宣言に係る特別対処条項』

- ・ 経済統制
- ・ 通信規制
- ・ 交通規制

・ 民法の一部改正、凍結

・ 憲法の一部における一時的な効力の停止、または時限的措置に基づく変更、新設。

・ 国際関係の再構築に伴う条約、協定の変更、廃止または離脱、新規締結。

・ 「(仮称) 火星隔絶空間」の内外に関する官民合同調査・研究。

「ここからは私がご説明させていただきます。内閣官房長官の岩崎です。」

テレビ画面は変更されずに、柔らかく、優しい声音の男性が条項の細かい説明を始めた。

「まず、経済統制ですが、我が国は現在外部との連絡、移動が一切取れない異常な状況下であり、足りない物資をどこか「海外」から輸入するなどあり得ない状況になりました。」

しかしながら我が国の政府備蓄、特に石油については3カ月分の通常消費量を賄(まかな)う量があります。また、食料については政府備蓄米の放出を予定しており、今すぐに食生活が困窮(こんきゆう)する事態にはなりません」

岩崎は一旦言葉を切ると、ゆっくりと具体的な措置の発表を行った。

「しかし、この孤立した異常な状態がいつ改善されるのか全く予想がつかない状況です。そこで、国民の皆様には大変不便を強いることになりませんが、エネルギーや食糧面での国家統制を発動いたします」

「まず東京、名古屋、大阪の三大都市圏では、緊急車両を除いた自家用車及び民間企業の保有車輛は、運輸業種を除き、原則として使用禁止となります。例外として、電車やバス等公共交通機関、タクシー会社が最寄りにない地域のみ例外的に使用を許可しますが、各都県の国家公安委員会の許可が必要となります」

「自動車産業およびその関連事業に従事されている皆様、仕事が無くなる事はございません。政府は、国民が所有する全ての自家用車をハイブリッド又はオール電気自動車、水素自動車に転換する施策を実施いたします。従ってエンジン部分の開発、ガソリンスタンドと電気・水素スタンドの併設、自動運転システム等やるべきことが沢山あります。自動車メーカー各社および業界団体の皆様とは今後国土交通省が主体となり、合同実務協議を行います。各社各工場で即日研究開発を実施して頂くようお願いするものであります」

「尚、日本列島上空の放射線量が人体に危険なレベルのため、当面の間、放射線が人体の許容量に達するまで、民間航空機の使用は禁止いたします。海上船舶については、国防、輸送用、漁業協同組合の許可を受けた漁船以外の使用を禁止いたします」

「次に、食料に関連した先物取引市場を無期限閉鎖といたします。我々には今を生きるための物資が重要だからです。同様にあらゆる鉱物資源、原油、天然ガスも先物取引を停止します。市場が閉鎖されることにより、巨額の損失が出るでしょうが、損失については火星転移特別措置法に基づいた臨時会計措置適用により、会計上の損失は棚上げすることを認めます」

「また、個人の投資家の方が巨額の損失で生活が立ち行かなくなる場合、政府は食糧や物資などでこれを補てんいたします。補てんレートは申し訳ありませんが、国で決めさせていただきます」

「外食産業については、業界団体の皆様と協議させていただきますが、仕入(しい)れに上限を設けさせていただきます。自社で既存契約、生産している食料については例外と致しますが、本日以降の農家や生産者との新規契約は国民食糧確保の観点から禁止となります。我が国の食料自給率はコメや肉、魚、果物全てを総合した数値で申しますと68%に過ぎません。国民の10人中6人しか養うことが出来ません。そのことをよく認識して頂きたいと思えます」

「株式市場の閉鎖は考えておりません。しかしながら、大量の取引が出来るコンピュータ売買を禁止いたします。また、当然のことながら外国為替相場は閉鎖いたします。お手持ちの海外紙幣については火

星転移直前のレートで日本円と交換になります。交換期限はありません」

「電子マネーについては、物資、食料・エネルギーによって裏打ちされる範囲での流通を認めます。裏打ちできないマネーについては、各社においてシステム上で凍結保存してください」

「国民の皆様には自覚して頂きたいことは、いくらお金を持っていてもそれが裏付けのある現物（げんぶつ）、食料やエネルギー、物資で保障されないことには持っているお金の価値が無為になるということです。これが株式大量売買禁止や電子マネー規制の理由です」

「様々な物資が一時的に不足して一部の商品価格が上昇することが予想されますが、政府は国民生活に必要な物資の価格については据え置き、公正取引委員会の監視のもと、適切な市場価格の形成に努めてまいります」

「通信に関しては、我が国上空の電離層が機能していないため、現在総務省、防衛省、経産省、JAXAが高高度通信用飛行船を大量生産する準備に入りましたので、高高度飛行船による通信ネットワークが機能するまでの間、有線回線での使用をお願いするものであります。なお、医療機関については規制の対象外と致しますが、用途については自治体と緊密に協議して頂きたいと思えます」

条項の説明が終わると澁澤首相から、

極東アメリカ合衆国（首都〓那覇特別行政区”那覇DC”）、

英国連邦極東（首都〓佐世保市「ハウステンボス町」を「ダウンニングタウン」に改称）、

極東ロシア連邦（首都〓エトロブルク（択捉島イトウルツプを改称））

ユーロピア自治区（ダウンニングタウンに隣接した山地を開発。在日、滞在ヨーロッパ諸国民のコミュニティ）

台湾自治区（神奈川県横浜市中区の一部）

の建国、自治区発足が発表され、各国、自治区の指導者となった駐日大使、交流協会の代表がそれぞれの言語で建国宣言や自治区発足宣言と、具体的な政治経済・軍事体制の説明が行われた。

台湾自治区の会見が終わると、すぐに合同記者会見が始まり、騒然とした雰囲気の記事ブースから様々な言語で記者からの質問が殺到した。

対照的に岩崎官房長官をはじめとする各国報道官は冷静に、時には冷徹に対応し、明らかに敵対的な政治的・宗教的主張だけを試みる記者、失言やゴシップを故意に狙った記者を、SPと各国警護官又は兵士が会見場所からやんわりと、しかし、有無を言わずに『隔離』した。

そんな記者会見を視ながら、

「これは、世の中が、変わるな。」大月が唸（うな）るような声で言った。

「そうですねえ、同期の官房秘書官も『これからは俺達の時代だ！』なんて無駄に張り切っていましたからねえ。」西野が、彼女の本当の声音かも知れないが、白けた声で、とんでもない内容の発言をした。

「火星の生き物は食えるんすかね？ワクワクしますね。」冗談なのか本気なのか分からない声で春日が言った。

「それは、どうだろうなあ。」大月が応えた。

二人とも西野の発言に突っ込みは入れなかった。

依然として、騒然とした雰囲気が続く記者会見を醒めた眼で眺めながらも、大月達は何気なく過ごす日常が終わった事を漠然と感じ、心なし寒気を感じて炬燵蒲団をお互い引っ張りあった。

赤い夜が開けようとしていた。

—————

同時刻【アメリカ合衆国ワシントン州上空30000フィート 大統領専用機「エアフォース・ワン」】

「大統領閣下。西海岸を襲った巨大地震の震源はカリフォルニア沖20マイルでしたが、後に壊滅したサンフランシスコ内陸部サンアンドレアス断層崩壊と同時に発生したことがハワイ観測所の分析で明らかになりました」

「それで被害は？」

聴きたくはないが、聴くしかないのだと大統領は自分に言い聞かせながら報告を促した。

「ロスアンゼルスは地震で建物が崩壊して都市機能が麻痺したところに大津波が襲来、多くの市民が犠牲になりました。推定50万人以上に上ります。北はシアトル、南はメキシコ北部までの沿岸都市が大津波で壊滅的被害を受けました恐らく数百万人単位の犠牲者が・・・」

国土安全保安省長官が絶句しながら報告した。

「大統領、モスクワからホットラインです」

国務長官が告げた。

「こちらへ繋いでくれ」

「——大統領閣下。西海岸の災害に心からお悔やみ申し上げます。また、日本と貴国駐留軍の事は残念に思う。だが我々の無益な争いはここで終（しま）いにしたい。実は、カムチャツカで大規模な地殻変動の予兆が見られる。そちらに対処したいのだ」

ロシア大統領の口調はいつもよりも早口で明らかに焦りの色が感じ取れた。

「貴国のお悔やみにお礼申し上げたいところだが、われわれは貴重な同盟国であり、地球で最も進歩的な技術立国だった日本を失ったのだ。駐留していた20万を超える我が国の兵士とその家族もね。君の都合など聞けると思っているのかい？」

「——とにかく我がロシア連邦は貴国との戦闘行動を停止する。戦略ロケット軍の臨戦態勢もまもなく通常体制に戻す。我々は極東地区を放棄する」

「おい！ウラジミール！正気か？自分が何を言っているのかわかっているのか!？」

「ドナルド、その言葉そのまま返すよ。東海岸と地中海の津波と火山に注意しろ！では、お互い生きていればまた話そう」

「——モスクワとの通信途絶しました」

「ハワイの太平洋地震津波センターから緊急！カムチャツカ半島で大規模な火山噴火を観測！続いて千島列島南端で巨大地震！M9.1
！津波発生可能性大！」

「ウラジミールはこのことに気づいていたな！」

「さらにハワイから報告続きます！ニューヨークランド沖M8.9の巨大地震、チリ沖でM9.0の巨大地震を相次いで観測したとのことですよ！」

「イエローストーン観測所から緊急電！火山性微動が激増。噴火可能性大との事です。」

「NASAから緊急通信！ISSの地球観測システムが地軸の変動を観測しています！ポールシフトです！現在も変動中！磁場が急速に変動しているとのことですよ。まもなく無線通信が不可能になります」

「国土安全保安省から全米に連邦緊急放送システムを発令させる。市民に避難を促すんだ！」

「ですが、大統領閣下、どこに避難させるのですか？」

「内陸部で火山活動の影響を受けにくい地域だ！」

「・・・手配します」

30分後、エアフォース・ワンはイエローストーン火山の第一次爆発噴火の影響でエンジントラブルを起こし、五大湖の一つオンタリオ湖に緊急不時着した。

辛うじてカナダ軍に救出された大統領は陸路ワシントンに向かったが、フィラデルフィア付近で大西洋からの大津波に巻き込まれて行方不明となった。

オレゴン州シャイアンマウンテンのNORAD（北米航空宇宙防衛司令部）に避難していた副大統領が直ちに職務を引き継いだ。その二時間後、シャイアンマウンテン自体がロッキー山脈を中心とする火山活動による溶岩流で司令部が生き埋めとなり、合衆国政府の指揮系統は潰滅（かいめつ）した。

ロシア、中国でも同様の天変地異が各地で同時多発的に発生し、政府首脳達の大半が生死不明となり、指揮系統が潰滅（かいめつ）した。

火星編 遭遇

脱出／イワシパイ

日本列島が消滅する15000年前 【太陽系第3惑星衛星軌道上
マルス派遣調査ラボ「ルンナ」】

永いスリープモードに入っているプルト級楕円宇宙船「ルンナ」は、
外宇宙から猛烈なスピードで飛来する白い巨大彗星の接近を感知し
た。

その彗星は第3惑星付近を約370年周期で通過しており、「ルン
ナ」の人工知能航法装置にも入力されていた。

しかし、太陽からの放射圧と熱量により、彗星の核が変質し、
周回軌道とスピードが頻繁に変化した。

「ルンナ」の人工知能航法装置は緊急回避行動をとったが、変
則を繰り返して加速する彗星の予測針路計算に手間取り、僅かに回避
行動が遅れ、巨大彗星のダストテイル（尾）に巻き込まれた。

無数の金属塊と岩石が「ルンナ」居住区と調査・観測ラボ・管制区
画を直撃して大半の搭乗員が死亡した。

「ルンナ」は危機管理プログラムに則り、生き残った搭乗員をスリープ
カプセルごと脱出シャトルに搭載し、最寄りの惑星大気圏突入針路へ
射出した。「ルンナ」人工知能は、一部の機能を除き、沈黙した。

「ルンナ」から射出された脱出シャトルが、第3惑星上に無事着陸する
と、搭載したスリープカプセルが覚醒モードに移行した。

「ルンナ」に搭乗していた調査隊長のイワフネは眼を覚ますと、脱出
シャトルの外に出た。

イワフネの双眸に、どこか高い山脈の尾根から地上を俯瞰する光景
が飛び込んできた。

太陽が山脈の間から昇ろうとしていた。

夜明け前の薄暗い空は蒼く、白い雲海が眼下を埋め尽くしている。
銀色の鱗に覆われた肌が寒気を感じた。

イワフネは大きく深呼吸をすると、冷たいが新鮮な酸素が体内に送

り込まれた。

イワフネは頭を振ると、他の搭乗員の様子を診るために脱出シャツに戻っていった。

脱出シャツルが着陸した場所は、現在の宮崎県高千穂町を含む1000m級の山々が連なる九州山地の一角にあたる。

現地語で『高天原（たかまがはら）』と言う。

地球歴2019年4月3日午前11時【東京都千代田区丸の内 角紅本社】

総合流通営業部の大月は、社員食堂で今日も一足早い昼食を取っていた。

「春日くん、今日はエトロブルクで魚の買い付けらしいですよ。お土産は蟹かな？チーズ鱈かな？」西野がやけにオヤジくさい事を言っていた。

「あいつ、極東（むこうの）ロシアの島を廻っているんだったな。もう10日になるな。蟹や魚は日持ちしないだろ、あきらめろ。」大月は春日のハードワークを思うと感慨深い物があった。

日本国国家非常事態宣言から3ヶ月、数週間前から、日本列島に降り注ぐ宇宙放射線の値が下降し、ほぼ許容値に達したことから、食料や燃料の経済統制下にあるものの、民間航空会社や通信事業者の営業が徐々に再開され、製造業の工場も稼働を始めた。

中堅総合商社である角紅は、極東ロシア連邦での穀物地帯開発、インフラ整備、生鮮食料品の買い付けなど、新規事業が目白押しで社員の多くが極東ロシア連邦と対岸の北海道東北地方を行き来していた。大月は本社で、出張した彼らが買い付けた品を速やかに取引先に売り込み、届ける手配を行っていた。

極東ロシア連邦の生鮮食料品は、食糧不足と物珍しさもあって、引く手あまただった。

また、極東アメリカ合衆国や英国連邦極東の農産物も、日本国内の生産にもかかわらず、ブランド力を持ち、外国産に目がない富裕層に高値で売っていた。

西野もちやつかり極東アメリカ合衆国のパイナップルや、長崎県五島列島の英国流イワシパイを買っていた。

「大月さん、昼ごはんはんにイワシパイを食べませんか？」西野にアーンをさせようとする。

英国料理のイワシパイを知る大月は、身体をよじつて西野の差し出すイワシパイから逃れた。

「なんですか、その反応は！」ぷくつと頬を膨らませた西野はそのままイワシパイにかぶりつく。

「っ?!」西野が眼を一杯に見開いて大月を見る。

大月が”慰めようと”定食の鳥の唐揚げを差し出そうとすると、

「懐かしい、独特のこの風味！たまりませんなあ。」

と頬を緩ませてイワシパイを食べていた。

大月は、初めて西野に尊敬の念を感じた。

極東アメリカ合衆国、極東ロシア連邦、英国連邦極東、ユーロピア自治区での食糧生産が軌道に乗ると日本列島の食料自給率は徐々に改善され、火星転移直後の68%から75%に上昇した。

しかし、米以外の小麦など穀物は依然として不足しており家畜用の飼料も伸び悩んでいることから国内の耕作廃棄地、都市部での大規模プラント水耕栽培の拡充に政府は人的資源を集中させた。

—————

同4月3日アメリカ東部時間午前5時【地球 アメリカ合衆国フロリダ州 ケープカナベラルNASA（アメリカ航空宇宙局）宇宙センター】

その日、雪雲や火山灰を降らす噴煙が一時的にメキシコ湾岸からの南風で流されると奇跡的に宇宙センターに数か月ぶりの青い空が顔を覗（のぞ）かせた。

この機を逃すまいと、未明から多くの地上職員がシャトルの打ち上げ準備に奔走していた。

火山灰が薄く降り積もった打ち上げ施設で職員たちが地球衛星軌道上に避難する人々を乗せた軍用シャトルの発進準備を行っていた。

「燃料注入完了。打ち上げ施設上空は雪雲が散見されるがあと数時間

はこの好天が続く模様」

「了解。こちらシャトルX34-B。計器システムに異常はない。いつでもいけるぞ。次の地震が来るまでにもう一度宇宙（そら）に行きたいものだ」

シャトルの機長が管制官に応えた。

「了解X34-B。打ち上げ短縮の秒読みを300から始める。人類の希望を頼む」

5分後、久しぶりに晴れたフロリダ半島上空の青空を真っすぐに宇宙へ突き進むシャトルの姿がニューオーリンズからも見る事が出来た。

衛星軌道上に無事到着したX-34Bは5時間後、ISS（国際宇宙ステーション）にドッキングし、地球から避難してきた欧米の科学者や軍人がISSの居住区画に移動した。シャトルのカーゴが開くとISSからロボットアームが伸びてきてカーゴ内にあるステーションの追加ユニットを慎重にシャトルから取り出した。

この追加ユニットはISS居住区画であり、一つ当たり10人が生活できる設備が付いている。ISSにはそのようなユニットが既に数十個取り付けられており、ロシアや中国からの宇宙船も同様のユニットを装備してドッキングしていた。

「こちらISS船長。久しぶりだな。地上の様子はどうだ？」

「昨日、ニューヨークが大西洋からの巨大津unamiで水没した。国連本部も海の底だ。アフリカと南米からの通信が途絶えた。電離層が異常な状況なのもあるがね」

シャトルの機長が答えた。

「帰りはどこの基地になる？」

「フロリダがベストだが、あそこも最近群発地震が増えている。ハワイの観測所によるとそろそろでかいのが来るそうだ」

「地球上で安全な場所など無くなってしまったな」

「ああ。北半球はほとんど火山灰の厚い雲に覆われて気温が急激に低下している。南半球も時間の問題だろう。そうだ、オーストラリア内陸部はまだ安全そうだな」

「あそこにはシャトル用の滑走路がないだろうか？」

「生き残りの海兵隊がスコップ持って向かっているようだ」

「そうか。エアーズロックの観光でも楽しんで来てくれ。また会おう」

「ありがとう。ISSにも幸運を」

30分後、アメリカ宇宙軍所属のシャトルはケープカナベラル基地には戻らずに、オーストラリア大陸内陸部にある秘密基地に帰還した。

フロリダの基地が巨大地震と津波で潰滅（かいめつ）したためである。

地球の苦難は始まったばかりだった。

大震災／対馬事変

1997年（平成7年）1月17日午前5時半頃【大阪府茨木市
角紅 関西独身寮】

その日早朝、入社3年目の大月は朝が苦手にも関わらず、珍しく目覚めが早かった。もつとも、目覚めただけで、肌寒い空気に触れるのが億劫で、部屋の電気は点けたものの、そのまま蒲団ふとんの中でボーツと仰向けあおむになつていたが。

しばらくすると、蒲団の真下がズシン、と突き上げられ、鉄筋コンクリート3階建、独身寮3階個室の部屋全体が揺れた気がした。

次の瞬間、部屋の電源が落ち、同時に個室のドアがバターンと大きな音を立てて勝手に廊下側へ開き、猛烈な横揺れが大月を襲った。

壁に備えられていた本棚に収められていた、前列の参考書から後ろに隠した先輩の秘蔵コレクションまで全てバサバサと床に落ちる中、鉄筋コンクリートで被われた部屋の壁がミシミシと音を立てるのを聴いて、「あ、俺死ぬんだな」と思いながら大月は、蒲団ごと為す術もなく畳の上を仰向けになったまま、横滑りしていた。

しばらくすると揺れは治まったが、電源は回復せず部屋は真っ暗だった。仕方無く起き上がって廊下を覗くと、小さく赤い非常灯が独身寮の薄暗い廊下を照らしていた。

1階ロビーに降りると、寮の全員がロビーに集まっており、管理人の寮母りょうぼが持ってきたラジオに耳を傾けていた。

『先程5時45分頃、強い地震が関西地方で感じられました——』

関東大震災が起きたと思った大月は横浜の実家に電話をかけた。

直ぐに電話に出た母から、関西方面、神戸が震源らしいと伝えられた。

情報を得るべく、寮の全員が既に出勤の支度を始めていた。

【同午前6時頃 兵庫県 神戸市長田区 ベーカリー『ニシノ』】

「おかん！おとん！大丈夫？」

暗闇で女の子が、足元の瓦礫がれきに向かって叫び続けていた。地元商店街でパン屋を営む両親は、朝の仕込みで1階に居るはずだった。女の

子は『2階』で寝ていたが、蒲団から突き上げられた様な衝撃で目を覚ますと、自分が地面に滑り落ちた部屋から蒲団ごと投げ出されていることに気がついた。奇跡的に無傷だった。

両隣の商店も倒壊しており、難を逃れた住人達が各々の家族を探して瓦礫の中を動き回っていた。

女の子も、瓦礫の中から見つけた母のサンダルを履いて、必死になって瓦礫や家財道具を掻き分けながら、両親の名を叫び続けた。

しかし、瓦礫の中からの返事は聞こえなかった。

辺りには、ガスの匂いや切断された電線が火花を散らしながら放つ、ビニールが焦げたような匂いが立ち込め始めていた。

同、午前7時半頃、

「ひかりちゃん！もうあかんわ、はよ逃げへんと！」一緒に両親を探していた向かいの靴屋の叔父さんが西野に声をかける。

「まだおとんとおかんが居らへんねん！」西野は泣きながら答えた。

「分かったわ、ほな、おっちゃんが探しとくさかい、ひかりちゃんは先におばちゃんと避難しとき！」

叔父が西野を説得した。

西野ひかりは、叔母に連れられて瓦礫の山と化した商店街を何度も振り返りながら、近隣の中学校体育館に向かった。

商店街に住む人々が家族の安全と取引先の無事を確かめるために、避難所や会社に向かう中、商店街の後ろにある文化住宅が密集する地区からは、不気味な大きな火の手が上がり始めていた。

体育館に避難した西野と叔母は、叔父がなかなか戻らないので心配になり、叔母が様子を見に行つた。

避難した今も、時おり強い揺れを伴う余震が頻発していた。

体育館に置かれたテレビからは、NHKヘリが神戸市上空からの中継を伝えていた。

阪神高速道路の高架が延々と横倒しに続く映像から、住み慣れた商店街一帯が丸ごと大きな炎に包まれて空高く煙を上げる映像に変わると、映像を視ていた西野はしばらく呆然となり身体が固まった。やがてその場にしゃがみ込むと、被っていた毛布に顔を埋めて体育座り

になり、その場で声を押し殺して泣き続けた。

その日深夜遅くになっても、両親や叔父、叔母は戻って来なかった。

最大震度7、死者・行方不明者6437人を出したこの大地震は、

『阪神・淡路大震災』と呼ばれている。

地球暦2019年4月14日午前5時【東京都千代田区丸の内 総合流通営業部】本店 総合流通営業部

早朝にも関わらず、既に社員がぼつぼつと出入りする本店ビルに大月が出勤する。

総合流通営業部のフロアも既に数人が出勤しており、商品の発送や、発注の準備に取りかかっていた。

大月は早足で自分の机に鞆かばんを置くと、赤色の洒落しゃれたりボンでトッピングされたアクセサリが入った小箱を取り出して、隣にある西野の机片隅に目立たないようにそっと置くとそのまま食堂に向かった。何だかんだと日頃から手弁当を振る舞う西野への感謝の気持ちだった。

国家非常事態宣言が行われて3ヶ月余り、日本国内外の政治経済状況は大きく変貌へんぼうしつつあった。

国内では、食糧自給率の向上を至上命題しじょうめいだいとして、過疎地の田畑でんぱたが競うように整備され、その土地に合った農産物の生産が始まった。

また、棚田たなだの様な生産効率が悪い場所でもLED照明を用いた室内水耕野菜プラントの構築等、最先端の農業技術が発揮された。

山間部でも、ニジマスや、ナマズ、チョウザメ等の養殖魚を各国専門家の指導のもと、訪日旅行者だった者を臨時雇用して人工飼育していた。

瀬戸内海の温暖な島々では、旧オーストラリア陸軍やカナダ軍、米国海兵隊で農家出身の兵士が経験を活かしてレモンやオリーブ、オレンジ、アーモンド等の農産物や頭数は少ないが、肉牛の飼育も始められた。

母国や帰属するコミュニティから引き離されて心細かった欧米・ロシアの兵士や旅行者はこの事業に「生き甲斐がい」を見出だして、積極的に参加した。

極東ロシア連邦は、日本の官民ファンド資金を利用して、北方4島の農地拡大や漁港の整備を行って、食糧増産に取り組んだ事によって、一大穀倉地帯となった。

また、手付かずの自然が多く残る国土は、日本人はもとより、極東欧米人に人気の観光保養地として著しい発展を遂げる事となる。

極東アメリカ合衆国は、行政サービスは日本流、治安維持は米軍主導で運営され、古き良きアメリカンスタイルの社会が再現され、観光客が大挙して訪問するようになった。沖縄のハワイ、グアム化である。

観光収入の他に、強大な軍事力は有志任務部隊として、自衛隊と共に沿岸警備や、日本国重要施設の巡回、極東ロシア連邦国境付近に派遣され、巨額の派遣手当が極東アメリカ合衆国軍に払い込まれ、在日米軍兵士の収入は倍増した。

日本国内の左翼や米軍基地反対派が大いに氣勢を上げて反対したものの、以前から活動家達のマークを完了していた日本国総務省国家公安委員会と、極東アメリカ合衆国の国家情報局(極東CIA)の連携によりあっさり鎮圧された。

英国連邦極東の首都ダウニングタウン(旧ハウステンボス)は、連日関西方面の観光客が大挙して訪問し、活況を呈した。

また、空母クイーン・エリザベスに乗船する日本列島1周クルーズが募集されると、英国ブランドと豪華客船とはひと味違う趣を求めた各国富裕層の応募が殺到し、数百倍の抽選倍率となった。

観光収入は莫大なものとなり、空母クイーン・エリザベスとその随伴艦隊の燃料弾薬、所属兵士全員の衣食住を簡単に賄える程になった。

また、五島列島の一部地域が地元住民全員の同意を得て、日本政府支援のもと、主に英国、オーストラリア、カナダの兵士や、転移に巻き込まれた旅行者向けの住宅地として開発され、静かに過ごせる様に整備された。

ちなみに、五島列島で水揚げされた新鮮な海産物により、イギリス料理で有名なイワシパイが、地元民のアドバイスを経て、日本

人の味覚に合った風味を完成させ、『普通においしいイワシパイ』、として日本国内で劇的なデビューを飾る事となる。

西野が喜んで購入し、大月に食べさせた(あーんさせたとも言う)のは言うまでもない。

いずれの国家も隔絶空間における運命共同体としての認識を持っていたので、日本国政府や地元住民との対立は生じなかった。

——中国・朝鮮半島出身者を除いては。

地球暦2019年2月、自らの待遇たいぐうに不満を持つ在留中国人、在日韓国・朝鮮人とそれを支援する日本国内の左翼政治団体等およそ5万人が「アジア連合共和国」の建国を宣言、長崎県対馬市中心部で市民2万人を人質に武装蜂起を行い、日本国からの独立と、先の大戦で行われたと主張する南京大虐殺や慰安婦問題の謝罪と賠償、対馬および九州地域の領土割譲を要求した。

時を同じくして、東京・大阪都内において、金融、交通管制システム、電力供給システムがサイバー攻撃を受けてダウン、都市機能が著しく低下した。

政府は東京都と大阪都に戒厳令を布告、自衛隊を治安出動させて事態の收拾にあたった。

対馬市では当初、長崎県警が容疑者達の検挙を試みたが、機動隊の装甲車両や監視ヘリコプターが武装勢力の携帯ミサイルで撃破された段階で警務執行を断念、警察庁は防衛出動を澁澤総理大臣に要請した。

日本国首相の澁澤は、極東アメリカ、極東ロシア、英国連邦極東、ユーロピア自治区、台湾自治区と協議を行い、武装勢力の要求を拒絶するとともに、隔絶空間に於ける運命共同体として、直ちに人質解放の上、武装解除して対馬市から退去するよう呼び掛けた。

数日間の膠着状態が過ぎ、武装勢力が対馬市民の処刑を始めたため、対馬を包囲していた自衛隊と各国の特殊作戦部隊が、米英空軍による精密空爆支援を受けて対馬市に強行突入し、4日間におよぶ激しい市街戦と掃討作戦の末、武装勢力を排除して対馬市を解放した。

対馬市内で確認された死者は、戦闘による戦死者の他、市街戦に卷

き込まれたり、武装勢力による処刑、略奪の被害に遭った対馬市民を含め1万人を超え、負傷者は3万人を超えた。

投降した武装勢力は皮肉なことに、首謀者達を除く全員が、極東アメリカ合衆国の統治下になった『尖閣諸島』に収容され、厳重な監視下に置かれた。

島から逃亡を試みた一部の容疑者達は米軍海兵隊に射殺された。

武装勢力の首謀者達は東京に移送され、日本と各国の合同司法当局は綿密で容赦ない取り調べを行って訴追した。

彼らの大半は死刑判決を受け、死刑を免れた者は累計数百年を超える懲役刑を受けた。

判決に基づく執行は速やかに行われ、懲役刑の受刑者達は極東ロシア連邦施政管理下にある齒舞諸島の果てにある収容所に移送された。

逃亡を試みた者は駐留しているロシア軍特殊部隊に抹殺された。

対馬市占拠から解放に至るまでの10日間、日本や各国マスコミは濫澤の判断により、「ありのまま」の報道を許され、取材制限や検閲の措置は一切取られなかった。その為しばしばショッキングな映像が日本や各国のテレビで流され、国民に大きな衝撃を与え、自由な情報公開について論争が起きた。逆に印象操作や偏向的な報道を試みた一部のマスコミは視聴者の激しい怒りを買ひ、テレビ局や新聞社、スポンサーに苦情と抗議が殺到した。

結果的に、日本国内や各国、各自治区において、武力行使や死刑反対等の抗議行動は一切起きなかった。

この一連の事態は『対馬事変』と呼ばれ、日本と各国が空間運命共同体として結束を固めるきっかけともなった。

降臨（こうりん）／咆哮（ほうこう）

日本列島が消滅する15000年前【日本列島九州地方 高天原】
アダムスキー型脱出シャトルに装備されていた、蒼黒いずんぐりした防護服を身につけたイワフネは、同行する部下に語りかけた。

「外の空気はマルスと変わらないし、そのままでもいい気がするのだが。」

「イワフネ隊長、未知のウイルスや生物、現地人に攻撃される可能性を考えると、最初はやはりこの服しかありません！」若手のモウゼが言った。

イワフネは溜め息をつきながら、

「仕方ない。では、行こうか。今日は山裾（やますそ）の環境調査だ。繰り返すが武器は持つなよ。こちらから現地人に危害を加えてはならん！防護服から出るレーザーバリアで充分だ。」ゴーグルを頭に装着しながら同行する二人の部下に再度確認する。モウゼとユダが領（うなず）いた。

イワフネ達はゆっくりと山を降りていった。

途中の森や集落で遭遇する人間は鱗が無く、ヘソが

有ることから、何らかの哺乳類から進化した人種と推測された。色白だがやや黄土色の肌を持つ彼ら彼女らは、麻の簡素な衣類を身に付けていた。

身長が3mあるイワフネ達の巨体と、ずんぐりした防護服は、地元民に強く印象付けられ、その場で土を捏（こ）ねて彼らの姿形（すがたかたち）を再現しようとする者も現れた。

イワフネ達は脱出シャトルで日本列島各地を廻り、詳しい調査を行いながら、現地人と接触、交渉したり、時には現地人を襲っていた大蛇や大イノシシ、水棲恐竜から彼らを助けたりした。

イワフネ達の特異な格好は各地の現地人に強い印象を残し、彼らを象った土人形は魔除けとして多くの集落で奉（まつ）られた。

調査の結果、食料や燃料の基となるエネルギー源の確保に目処がついたため、イワフネ達は高天原から移動し、日本列島中間部北に位置

する、とある山地に基地を築いて拠点とし、日本列島のみならず、世界中を廻る事となった。

地球暦2019年1月3日夜【惑星マルス（火星） オリンポス山

一

日本列島が火星に転移して約20時間後、火星の大地に出現した半徑1500kmの細長いが強大な電磁フィールドと重力波振動を放つ巨大質量空間の出現は、永い眠りについていて火星のマグマを急速に刺激していた。

日本列島転移24時間後、標高27kmという太陽系最大の火山は天空に向けて咆哮（ほうこう）するように赤い炎と煙、無数の火炎弾を噴き出した。

流れ出た溶岩はすぐに極寒の大地で固まったが、すぐに新たな溶岩流がそれを乗り越えて赤い大地に拡がっていった。

噴出した火炎弾は火星各地に降り注いだだが、一部は第五惑星の重力に捕らえられて分厚い大気を持つ第五惑星の奥深くに落下した。

第五惑星である木星は惑星構成要素の大半がメタンや窒素などの気体である。地球の100数十倍の厚みを持つ大気層の奥深くに落下した火炎弾は木星大気や気体が固形化された大地に接触すると著しい化学反応を引き起こした。

木星の有名な特徴である大赤斑の様な模様が木星の各所で発生し、いくつもの不気味な眼（まなこ）が火山弾を送り込んだ第四惑星と、原因を作り出した第三惑星を睨んでいるように見えた。

同1月4日夜

オリンポス山の大噴火は衰えることなく続いていた。

また、オリンポス山の大噴火が火星北半球に集中する他の火山噴火を誘発し、目覚めたばかりのマグマを地上に送り込んだ。

惑星規模の火山活動に伴って排出された噴煙は火星を覆う大気となり、地下で蠢くマグマの流れは磁場、重力を産み出して大気を惑星に繋（つな）ぎ止めた。

高温の火山ガスと地下のマグマが極寒の大地を暖め、地下で凍結し

ていた水分を溶かして地表に噴出させた。両極に蓄えられていた大量の水分も氷から急速に液体へと変化しつつあった。

日本列島が火星に転移して2ヶ月が経つ頃には、地球程ではないものの、大気圏が形成され、海と言うべき大洋も出現していた。

火星地表に届く有害宇宙線があたりなく形成された大気圏に遮られて大幅に減ったことで、日本列島に降り注ぐ放射線も減少し、電離層も安定して通信も復活した。

隔絶空間内部での人類の活動が円滑に行えるようになったのである。

地球暦2019年5月2日午前4時 【火星 アルテミア大陸

タルシス高地 オリンポス山 特殊宇宙生物物理学研究所 閉鎖区画

『イ・ワト』』

うつすらと白い噴煙を噴き上げるオリンポス山の標高3000m付近の熔岩ドームに似た建物の内部で、大気圏観測システムと連動したプログラムが起動し、閉鎖区画『イ・ワト』のスリープモードが解除され、覚醒シークエンスに移行した。

12時間後、

「・・・」カプセルから己のクローン体を起こしたゼイエスは、虚ろな瞳で虚空を見つめた。

暫くすると、別のプログラムが起動し、宇宙の遥か彼方からのシグナルを受信した。

ゼイエスは、今度こそ明確な意思を宿した瞳を、隣のカプセルから起き上がったアマトハに向けて、声を掛けた。

「アマトハ、思考に障害は無いか？」

「大丈夫、明瞭だ！視界もぼつちり開かれている。」アマトハが返事をした。

「これで恒星間心身同調ネットワークシステムの実証実験に成功したぞ！」ゼイエスが興奮して歓喜する。

「おめでとうゼイエス。個人の精神世界をここまで跳ばせるとは、我々はいったいどこまで行ってしまおうんだい？」

呆れた口調でアマトハが言う。

「決まっているじゃないか。」ゼイエスがスリーピングスーツを着けた銀色の鱗が光る胸を張った。

「宇宙の果てまでさ！」ゼイエスが決め台詞を放つ。

「ところでだが、イワフネ達のことを掴（つか）む前に、「やつれたような顔でアマトハがゼイエスに話し掛ける。」

「この身体（クローン）は大変に”飢えている”と私は思うのだが：」

「……………」腹を押さえたゼイエスが無言でコクリと頷いた。

「その点は改善の余地があるな。カプセルを栄養補給モードに切り替えよう。暫（しばらく）く横になった方が良いみたいだ。カプセルからの補給が終わったらシドニアの本部へ移動しよう。あそこなら、彼らと通信もとれるだろうし、イワフネの消息も。」ゼイエスがパタリとカプセルに横たわる。

あつさりとダウンした同僚を呆（あき）れた顔で見ると、アマトハもまた、パタリとカプセルに横たわった。

審判の壁（ジャツジメント・ウォール）

地球暦2019年5月15日午前7時【房総半島沖90kmの太平洋】

太平洋上を日米連合艦隊が北上していた。

艦隊はいつの間にか兵士達が『審判の壁』と呼ぶようになった赤黒い電磁フィールドに数キロまで接近した形で進んでいた。海は青黒い黒潮らしい海流を見せていたが、艦隊の上空は日本列島陸地と違い、審判の壁に沿って薄いオレンジ色を纏まとった青空が広がっていた。

第1調査任務艦隊の旗艦『ひゆうが』の広大な直通甲板で、東南海大学海洋学部の岬渚みさなみ紗教授が潮風を浴びながら気持ち良さそうに背伸びをしていた。

「うーん、今日も爽快そうかいな寝覚めだあ。」

「どうせならあと30分早起きしてラジオ体操に参加したらいかげです？空母レーガンでは流行りのエクセサイズみたいですよ。」

後ろから助手の大鳥が声を掛けた。

「もうすぐブリーフィングの時間です。」

「ありがとう、『大鳥くん♪』岬教授がにぱっとイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「私は大鳥です、「島」ではありません！何回目ですかそのネタは、「大鳥が背を向けて艦内に戻る。」

「待ってよー大鳥っちー、親愛の表現なのだよー！」岬は三つ編みのお下げをくるくる回しながら、身体も廻りながら、大鳥を追いかけた。
このやり取りは、艦隊が横須賀を出航してから毎朝の恒例行事となっていた。

「ひゆうが」ブリーフィングルーム

岬と大鳥がブリーフィングルームに入るとほぼ全員が揃っていた。

「申し訳ありません。」大鳥が謝る。

「大丈夫だ、まだ3分あります。」JAXAの天草が苦笑して答える。

「岬先生、時間になりましたのでお願いします。」

天草が岬に合図を送る。

岬は先程までのほやつとした表情をかなぐり捨てると、キリリとした顔で伊達眼鏡を掛けるとノートパソコンを操作しながら正面スクリーン前に進み出る。これが、岬教授曰く『できる女』らしい。形から入る性格らしい。

大鳥も、天草も、既に突っ込みをあきらめている。

「皆さんおはようございます。本日の調査は、審判の壁と海流・気流の関係です。なぜ、隔絶された空間内で大気と水の循環が行われているのか？それも、転移前と同じ条件下で。審判の壁の関与なくして考えられません！」 岬が力説する。

「午前中は私が潜水艦『そうりゆう』に乗って、海中から可能な限り、審判の壁に接近、潜水ドロロンを使って海流の発生源を探ります。」
『そうりゆう』艦長の名取大佐が頷く。

「午後は、空母ロナルド・レーガン」から大鳥君が対潜ヘリに乗って、審判の壁沿いの至近距離で海上の気流と、海流調査ソナー『ジューク・ボックス』の投下、

壁上方の放射宇宙線値は搭載戦闘機を使用して測定します。戦闘機パイロットの皆さんが被曝しないように、出航時に差し入れた、宇宙線遮断塗料をキャノピーに念入りに塗ってください！測定値が少しでも、我が国の環境影響評価基準を超えた場合はすぐに帰艦してください。カウボーイ精神やトップガン根性はまだまだ、とっておいてくださいねっ！」

岬が明るくウインクする。

『ロナルド・レーガン』艦長のステイブン大佐が苦笑しながら頷く。
パイロット席からは小さな笑い声が上がった。

「ひとつひとつ焦らずに、出来る事からやりましょう！安全第一でいきましよう！」

岬が締めくくってブリーフィングが終了した。

海上自衛隊潜水艦『そうりゆう』発令所

名取大佐と岬教授がドロロン等の発射準備を見守っていた。

「艦首魚雷発射管、自立型潜水ドロロン『おさかなくん』発射準備完了。

デコイ発射口からも自立型海流調査機『ぼによ』射出準備完了。」

心なしか発令所の隊員が笑いを堪こらえているように見えるが、岬教授は全く気付かずに、

「では、いっちゃってくださいー！」と号令した。

副長は復唱に戸惑い、名取大佐をチラリと見ると、名取大佐が、

「ドローン発射！探索機射出！」と大きな声で命令した。

「アイアイサー、ドローン発射！探索機射出！」

副長が復唱した。

審判の壁に至近距離で艦首から流線型のドローン『おさかなくん』とデコイ型の探索機『ぼによ』が射出された。

『おさかなくん』は審判の壁に沿って海中を進みつつ、審判の壁から発する放射宇宙線や、逆に壁へ向けた各種レーザーがもたらす分析データを『そうりゆう』に送り続けた。

『そうりゆう』からばら蒔かれた『ぼによ』はゆらゆらと海中を漂いながら、海流に上手く乗り、更にはその源へ向かった。

極東アメリカ合衆国海軍航空母艦『ロナルド・レーガン』

広大な飛行甲板からスチームカタパルトで射出されたFA-18

”ホーネット”と、SH-60F”オーシャン”対潜水艦ヘリの編隊は、審判の壁500mまで接近していた。

随ずい伴はんしているホーネットは速度が違いため、何度も旋回を繰り返しながら、オーシャンヘリのガードと、審判の壁高空の放射宇宙線調査を行った。

「こちらアツギー、審判の壁からの放射宇宙線は日本の環境影響評価基準を下回っている。」

ホーネット編隊長がオーシャンに乗る大鳥に報告した。

「了解、アツギーの勇気に敬意を。横須賀でたらふくバドワイザーを手配する。」

これよりスイマー1から8は『ジュークボックス』を投下する。」

ホーネット編隊から歓声上がる中、オーシャンヘリの編隊から

ペットボトルの様な透明な容器に収められた探索装置が降り注ぐように海上にばら蒔まかれた。

試練

日本列島が消滅する12000年前【大西洋上空】

イワフネはアダムスキー型シャトルから、あちらこちらにある火山が大噴火を起こし、赤い炎と無数の噴石と溶岩を、空高く噴き上げながら沈没してゆく大陸を、戦慄の表情でじっと見つめていた。

大陸上では噴火の他にも、巨大地震、大津波が発生し、地上の人々を地面や海面の中に呑み込んでいた。

地上にある多くの火山が荒れ狂うかのように噴火を起こしていた。やがて噴煙はこの星を覆い、一時的に氷河期と呼ばれる極寒な気候になるだろう。

人は、生き延びられるのだろうか？と彼は少し考えた。

「モウゼ、原因は？」イワフネが訊いた。

「シロヒト人地殻振動兵器の乱用が、マグマの暴走を起こした模様。」モウゼが冷静に答える。

「哺乳類とは、かくも戦いくせという試練から逃れられぬ運命なのだろうか。」イワフネが独り呟つぶやく。

現地人に一から文明誕生の手ほどきをして、ある段階でイワフネ達は身を引く。

人類が自ら学び、発展しなければ、それは単なる「文明の模倣もほう」になっなってしまなうからだ。

しかし、与えた力が大きいほど、人は原理の研究よりも力の行使を率先する傾向が強い。

「私達のご先祖様は違ったのでしょうね。」モウゼが言う。

「寿命が違うのだ、我々の1万分の1にも満たない年月では、生き急ぐのは無理もないのか？」

とても想像出来ないな。とイワフネは思った。

「ユダから連絡。太平洋のアカヒト人連合大陸が大噴火の末、沈没中との事です。アカヒト人のマントルエネルギー転換大容量レーザー施設が制御不能に陥った模様です。各種原子核臨界爆発も大陸各地で連鎖的に発生！」モウゼが報告した。

イワフネは溜め息をつくど、

「この時代はもうダメだ。タカミムスビに戻ろう。新たな文明が勃興するまでスリープモードに移行する、ユダにも伝えるんだ。」

円盤型のアダムスキー型脱出シャトルは、極東にある基地に向けて飛び始めた。

同時刻【大西洋南部上空】

「ふむ。奴らは玩具を振り回し過ぎたようだ」

大陸の遙か上空、衛星軌道上で楕円形の形状をした高速連絡艇に乗り込んでいた縦長の瞳を持つ人物がコーンパイプで阿片をふかしながら眼下で滅び行くアトランティス大陸の断末魔の光景を興味深げに眺めていた。

「マスター、大陸南部にシロヒト人残存勢力が再結集している模様。月面まで避難を試みる様です」

同じく特殊なプラグスーツを着た縦長の瞳と萌黄色の鱗を持つ連絡艇操縦士がコーンパイプをふかす主人に報告する。

「それはいかん。奴らがまだ宇宙に来るのは2万年早いというものだ」

眼下の大陸南端に集まるシロヒト人避難民を馬鹿にしたように見つめる彼が宣（のたま）う。

「アカヒト人の大陸で生き残っている電磁波システムは有るか？」

彼が訊く。

「はい、マスター。イースターベースのモアシシステムが稼働中」
操縦士が答える。

「よし、こちらでモアシシステムのコントロールを掌握するのだ」
僅かな時間の後に、

「マスター。モアシシステムコントロール来ました」
と彼に報告が上がる。

彼はニヤリと白銀の薄い鱗に覆われた顔を歪めると命令した。

「モアシシステム最大照射！目標アトランティス南部サーガツソー！」

太平洋東南部の一角から強力な電磁波が電離層を反射して大西洋南部にある崩壊した大陸の一角に降り注いだ。

「モアシシステム照射中。出力150%、施設の耐用限界値を突破します」

「構わん。どのみち滅ぶのは奴らだけだ」

「アトランティス南東部沈黙。宇宙港機能停止しました」

「よろしい。私達は地上が落ち着くまでラグランジュポイントでしばし眠りの時間に入る。監視体制はオートで構わん」

「しかし、これでしばらく奴らの新鮮な心臓が食べられないとは辛いな・・・」

コーンパイプを加えた彼と数名の爬虫類搭乗員を乗せた連絡艇はそのまま滑るようにバンアレン帯を飛行して地球大気圏を突破、月面との中間地点に向かった。

眼下の地上では、1万2000年後に「南米大陸アマゾン地域」と呼ばれる、かつてアトランティス大陸南端部分だった所に、真新しい苗木が群生する大草原が誕生していた。

真新しい大草原の下には、アトランティス文明が誇っていた多くの大陸間連絡シャトルや衛星軌道にも到達可能なアダムスキー型連絡艇等の高度な飛行機械が埋もれていた筈（はず）である。

また、太平洋東南部の一角は電磁兵器の乱用で激しい地殻変動を起こして施設の大半が海に沈み、モアシシステムのレドーム部分が耐用限界を超えて過熱溶解し、まるでヒトの顔のような物が地上に露出した形で残されることとなった。

この施設が在（あ）った地区は後世で「イースター島」と呼ばれることとなる。

シロヒト人の大陸はアトランティス大陸、

アカヒト人連合大陸はムー大陸と後世の人類は呼んでいる。

神の怒りに触れて、一夜にして沈没したと言われる両大陸が実在したかについて、現在でも議論がされている。

地球暦2019年5月15日午後10時（北海道東方沖の太平洋海上自衛隊護衛艦『ひゆうが』ブリーフィングルーム）

1日の調査を終えて『ひゆうが』に戻った岬と大鳥は、夕食を終え

るとブリーフィングルームに向かった。

二人がブリーフィングルームに入ると、研究結果の発表が始まった。

この発表は岬教授の強い希望により、全艦隊の乗組員が聴けるように、通信回線をオーブンにしている。

まず、岬教授から

「海流ですが、黒潮は北上するとそのまま審判の壁に吸い込まれるように消えていきます。」

反対に、黒潮南端からは、海中の審判の壁から海底付近まで、湧き出るように『黒潮』が発生している事が確認されました。

また、海中のゴミや汚れは、北上して審判の壁に吸い込まれたあと、黒潮南端から、「綺麗きれいな」海水として流れています。まるで審判の壁がフィルターフィルターの役割を果たしているようです。

魚類、プランクトン、鮫さめは審判の壁にそのまま入り、同時に黒潮南端から出現しています。これは、南端側と黒潮北端の両端に待機させた、ドローンによるリアルタイム撮影で確認しました。ちなみに鯨、イルカは本能的に審判の壁を避けて黒潮北端から審判の壁沿いに南下する流れに乗って黒潮南端に戻り、再び北上しています。

実に摩訶不思議まかふしぎな仕組みとしか言いようがありません。」

「海流の仕組みとしては、オゾンで消臭・消毒された水が水槽の中を循環するイメージです。」

と大鳥が補足し、

「気流・気圧についても同様です。まるで審判の壁が転移前の内部の気流・気圧を「知っている」かのように、コントロールされた大気の流れが発生しています。南側に行くほど新鮮な空気が多い。そう考えて頂いて構いません。」

大鳥が報告した。

レーガン艦長のステイブン大佐が、

「ミス・ミサキ。もしその通りだとしたら、日本列島は以前から審判の壁を作った存在に、取り込まれていたのではないかね？」と質問した。

岬は、

「今のところ、その存在に結び付く手掛かりが皆無であり、科学的な立証もこれからになるので、分からないとしか言えません。」

「しかし、個人的には大佐のお考えが自然な流れだと思えます。」と答えた。

「審判の壁は太古の神々が、我々人類に与えたもうた科学的、技術的な試練かも知れません。また、この空間を作り上げた存在は、内部の生物を育て上げ、守り抜く為に、この大掛かりな仕掛けを作り上げたのでしょうか思えないのです。」

岬はちよつと宗教的になつた頭を振つて目を醒ますかのように、科
学者としての思考を取り戻しながら考えを述べた。

「明日は、審判の壁沿いの海底地形を調査します。地震列島と言われる地殻と火星との関係調べます。ソナーを使う予定です。それでは皆様、お休みなさい。」岬教授が発表を締めくくつた。

任務調査艦隊のやるべき事は多い。

タカミムスビ

1987年（昭和62年）7月23日午後1時〔富山県立山市尖山〕^{とがりやま}

尖山は何の変哲もない、標高559mの自然侵食されて形成された山である。

高度経済成長により豊かになった庶民が週末に大挙して観光に励む習慣が定着する頃には、登山道が設けられ、富山県の観光スポットとして賑わっていた。

しかし、この日の昼過ぎ、山頂付近が僅かに振動し、強力な電磁波を伴った電波が、月面とおうし座方面に発信された。

山頂付近で昼食を取っていた観光客らは、足元が一瞬揺らいで軽い目眩を覚えたが、体感時間にして1秒前後であり、登山の疲れだと錯覚した。

同時刻、関東北部の変電所において原因不明の電圧崩壊が発生、午後1時19分、東京都全域を含む神奈川県、千葉県、埼玉県、栃木県、静岡県、6都府県で大停電が発生し、280万戸への電力供給が3時間半以上にわたって停止された。

この停電は『東京大停電』として歴史に記録されている。

東京都千代田区の国会議事堂も停電し、衆議院予算委員会が中止を余儀なくされた。

事態を重く見た中曽根康弘（なかそねやすひろ）総理大臣は、後藤田正晴（ごとうだまさはる）官房長官に原因究明と再発防止を指示した。

防衛庁は富士山測候所、野辺山、富山湾岸の自衛隊通信施設が大停電と同じ時刻に強力な電波が富山県立山市付近から発信されたのを探知した。

防衛庁は直ちに首相公邸に報告した。

詳細な調査の結果、電波の発信源は富山県立山市の尖山と特定された。

中曽根首相は米国のレーガン大統領と極秘電話協議を行い、米軍の

支援のもと、陸海空統合自衛隊による秘密調査を行うことを決断した。

同7月25日午前2時【能登^{のと}半島沖の富山湾 海上自衛隊護衛艦『しまゆき』CIC（戦闘管制室）】

「こちらノドグロ、習志野の展開状況を報告せよ。オクレ。」

最新鋭護衛艦『しまゆき』に搭乗している「中央即応部隊」司令の石原一佐が空挺特殊部隊の状況を確認する。

中央即応部隊は、大規模不正規戦、ヘリボーンによる急襲等に迅速対応する専門部隊であり、今年発足した。

『こちら習志野。目標確認。目標上空まで5分、オクレ。』

「ノドグロ了解。コマンド1は山頂、コマンド2は登山口から散開突入せよ。民間人への発砲は禁止。遭遇した場合は拘束してヤマネコへ引き渡せ。オクレ。」

『習志野、ラジャ。交信終わり。』

尖山内部で永年保守管理を行っている人工知能『タカミムスビ』が外部からの各種レーダー波、上空からのレーザーセンサー等に反応し、外部からの発信源に対し、「対話を求める」通信を送ったが返答が一切無かった為、防衛機構が稼働を始めた。

尖山山頂上空に到着した陸自のCH-47チヌークヘリの側面ドアが開くと、迷彩服を着た完全装備の空挺特殊部隊隊員が次々と岩石が転がる山頂にロープを伝って降下した。

登山口からも、空挺特殊部隊が散開しながら登山を開始した。

海上自衛隊護衛艦『しまゆき』CIC

「目標から通信あり。」管制官が報告した。

「内容は？」石原一佐が訊く。

「解読不明の文字列が繰り返し送られています。陸自へり、空自のF4も受信しています。」

「ミスターイシハラ。我が国の衛星も受信した様だ。」在日米国海軍横須賀司令部（通称コマンド・ケイブ）から派遣されてきた連絡将校『M』

が石原に告げた。

「ありがとうございますM。恐らくソ連も嗅ぎ付けているでしょうね。」石原が応える。

「ええ、急ぎませう。」Mが解読よりも調査優先を主張して”アドバイス”した。

「こちらノドグロ、各員に告ぐ。迅速な任務遂行を期待する。」石原は通信文の解読よりも、あくまで調査強行を決断した。

「空自千歳から緊急。ユジノサハリンスク基地から爆撃機、戦闘機が多数発進中！」

「稚内早期警戒レーダーより緊急！ミグ31、5機、ミグ25、9機、ミグ23、15機、ツポレフ・バックファイア超音速爆撃機5機が日本海を南下！過去に無い大規模な編隊を確認！」

「三沢米軍から緊急！、象の檻（輪形アンテナの通信傍受施設）が極東ソ連軍司令部発の平文を傍受。『全軍戦闘態勢に入れ』だそうです……」

手が震えて顔面蒼白となった管制官が報告した。

尖山山頂に降下した空挺特殊部隊は散開して周囲を警戒して調査を開始した。

直後に隊員達の身体が淡い水色の光に包まれると消失した。

海上自衛隊護衛艦『しまゆき』CIC

「コマンド1、頂上付近でロスト！」管制官が叫ぶ。

「チヌーク1、状況報告せよ。」

『こちらチヌーク1、コマンド1は全員発光した後に消滅した！』

「コマンド2、登山口から100mの地点でロスト！」

『チヌーク2、こちらは暗闇で赤外線ゴーグルで目視、コマンド2は全員フラッシュみたいに光って消えた！』

「ジーザス！何と言う事だ！」Mが驚愕する。

「こちらノドグロ、全チヌーク直ちに目標付近から離脱！」石原が叫ぶ。

「空自F4編隊が、飛騨・高山、水上方面から接近する国籍不明”光球体”を捕捉、領空侵犯の警告を行うも返答なし。」

空域担当管制官が報告する。

『こちらハヤブサ1、国籍不明機から光球が2つ発射された！緊急回避、フレア射出！応戦の指示を請う！』F4戦闘機のパイロットが極度に緊張した声で助けを求めた。

「本艦の対空レーダーも目標付近上空で飛騨・高山、水上から飛来した光球体6機を確認。F4編隊2機を包囲しています。」

『しまゆき』艦長自ら石原に報告した。

「F4は作戦空域から急速離脱せよ！光球体は分裂しただけだ。相手が攻撃しない限り、撃つな！」石原が念を押した。

同時刻【東京都千代田区永田町 首相公邸】

護衛艦『しまゆき』CICの騒然とした状況はリアルタイムで首相

公邸に伝えられていた。

「ええ、そうですロン。戦闘態勢に入った大規模なソ連空軍機の編隊が、富山湾の艦隊に向かっています。過去に例の無い事態です。事態が拗れると日本海から世界大戦が始まりかねない！」額に汗を滲ませた中曽根首相が通話先のレーガン大統領に訴えた。

「ヤス、我々も赤い熊共がナホトカとウラジオストックに多数の船舶と強襲揚陸艦、自動車化狙撃師団を集結させているのをキャッチしたよ。」

「どうやらホツカイドウとニイガタに上陸させ、特殊部隊旅団は直接トウキョウを指すらしい。」

「我が国のミニットマン（米国多弾頭型ICBMの名称）は何時でも撃ち込めるが、モスクワのゴルバチョフに今から警告する。シベリアとウラルでミサイルのサイロが開いたようだ。」

「残念だが直ちにこのコマンドは中止しよう。」

「申し訳無いヤス。今から大統領専用機に乗らねばならない。君に神のご加護を。」

レーガン大統領の通話が切れた。

「すぐに作戦中止命令を出せ！」

中曽根首相が、檜町で待機する防衛庁長官に直通電話で叫んだ。

傍らにいた後藤田官房長官は、無言のまま、よろよろとソファに崩

れるように座った。

首相公邸には緊急時の専用指揮通信設備も、数週間は政府機能を維持させる大深度地下核シェルターも、全く備えられていなかった。

二人とも”不沈空母”日本が成す術もなく核の炎に包まれる光景を想像し、愕然としてその場で彫刻の如く固まっていた。

後日、とあるマスコミの取材で中曽根は、

『あのときの20分間は、雲の上を歩いているような感覚で国会対応の報告も上の空で聞いていた。』と当時の心境を吐露している。

海上自衛隊護衛艦『しまゆき』CIC

「F4編隊作戦空域離脱。光球体全機ロスト！消え？ました…。」管制官が呆然として報告する。

「わけが分からん。」石原が頭を抱える。

「Gから至急電」管制官が石原に電文を渡す。

中曽根首相からの電文を一瞥した石原一佐は、

「作戦中止！各部隊は所属基地に帰還！なお、目標からの通信データは全て抹消せよ。通信データは全て抹消せよ！本作戰は特級箱口令とする。」

「やむを得ませんな。我々はヒューミント（人的資源）による監視と情報収集を始めます。」

Mがため息をつきながら石原に告げる。

「わかった。」短く答えた石原一佐の顔は仏頂面だった。

『しまゆき』が舞鶴に寄港するまでの間、日本海を南下するソ連空軍の大編隊に小松基地のF4戦闘機が自衛隊創設以来初めて、実弾による警告射撃を行うなど、CICは騒然とした雰囲気にも包まれた。

『しまゆき』を含む任務護衛隊群は、ソ連空軍からの対艦ミサイル攻撃を警戒しながら急いで富山湾から離脱した。

任務護衛隊群が富山湾を離脱した直後、ソ連空軍機はUターンしてユジノサハリンスクに戻った。

作戦中に消滅して行方不明となっていた空挺特殊部隊の隊員達は、

3日後、長野県水上山（皆神山）の山中で無事発見、救助された。

彼らは直ちに檜町の防衛庁本庁病院で精密検査を受けたが異常は

見られなかった。

しかし、ヘリから降下した後については全員が記憶を喪失しており、何が彼らに起きたのかは解明出来なかった。

この事件は日米防衛当局内部でも無期限の極秘機密扱いとされ、尖山とがりやまに関する申し送り事項は、内閣官房とコマンド・ケイブ（米軍横須賀司令部）が相互監視する形で冷戦終結後も民主党政権時代を除き、澁澤政権まで注意事項として引き継がれている。

そもその原因は、イワフネが設定したメンテナンスシステム『タカミムスビ』が、500年に1度の母船「ルンナ」に向けた観測データの定時送信と、“遙か”彼方の母星へ向けた救援要請が引き起こした事件だった。

尖山から発信された通信文は極秘裏に防衛庁や宇宙開発研究機構の合同チームが解読を試み、日本語の原型に近い字体が一部散見されたが、裏付けが偽書（ぎしよ）しかなく、偶然と見なされてあくまでも未知の言語であると結論づけられた。

その解読作業はJAXAに移管されても、種子島の片隅ほそほそで細々と続けられた。

火星に転移した現時点でも、研究者達は日々解読に悪戦苦闘していた。

コンタクト

平成21年(2011年)3月11日午後2時45分頃【東京都渋谷区渋谷2丁目 渋谷駅 地下連絡通路】

就職活動中だった春日の携帯が振動し、耳慣れないメロディーが繰り返し聴こえてきたが、金曜日の雑踏に紛れてよく聞こえなかった。いや、周囲の人の携帯も全て同じメロディーを奏でていたはずだから聞こえているのだろうが、春日は5回目の人事部面接を終えたその余韻(よいん)で頭が一杯だったのだ。

——「それで偉そうなことを言うあなたは、具体的に何を弊社(へいしや)でやるんですか?」ベテラン社員だろうか、40代初めの面接官が言葉の裏付けを取ろうと春日を論理的に追い詰めてくる。

春日は”就職活動マニュアル”なんか頭の中からかなぐり捨てて”素で”答えたもんだった。

「そんなもん、実家で扱っている東北の海産物を御社の為に売り捌くだけでしよう!」

冷静に答えたつもりが声が裏返っていたかもしれない。

しばらく無言で見つめていた面接官は僅かに口の端を緩ませて頷くと、

「うん。次回は、役員面接です。人間味溢れる話し方も結構好きですが、相手の心情も考えてくださいいね。」春日に言った。

「意外と、言ってみるもんだなあ。」素直な春日の反応である。

そんなことを考えながら地上へ向かう連絡道を歩いていると、目眩(めまい)が春日を襲った。やがて目眩(めまい)が酷(ひど)くなり、立てなくなり、手すりによるよろよろとしがみつくと、周りの人々も壁に手をついたり、駅員までもがスロープの手すりに掴まっていた。

「え?地震?」

春日は漸く地震発生に気付いた。

地上に出ると周囲のオフィス街から会社員が避難してきたのか路上にわらわらと溢れていた。

パトカーが『今の揺れで気分の悪い方は申し出てください。』とス

ピーカーでアナウンスしながらゆっくりと宮益坂を下って行く。見たところビルが崩れたわけではないし、次の会社の面接に行こう。

都営バスに乗った春日は動き出したバスが暫くすると停留所でもない路肩に停車し、『えく、総合運転指令センターの指示で、都内の全便一旦停車いたします。大変申し訳ございません。次の指示があるまで運転を取り止めます。』とアナウンスがあった。

乗客たちは仏頂面で下車し、歩いて各々の目的地へ向かった。

春日も仕方なくバスを降りて歩くと、一軒のラーメン屋がテレビを路上に出して、大勢の通行人が足を止めてテレビに群がっていた。

テレビの画面では、ヘリの空撮で、画面の端から端まで拡がる津波が漁船や車を巻き込みながら、畑や住宅地を呑み込んでひたすら進む様子が映し出されていた。

どこの国？インド洋大津波みたいなのがまたアジアで起こったのかな？何て考えながら視ていると、画面に

『中継』仙台市上空』と表示されていた。

春日は慌てて仙台市の実家に電話をかけるが、話中の音しか聴こえなかった。両親の携帯にかけても繋がらなかった。

父から1通だけ、15分前にメールが入っていた。春日がバスを降りられて歩いていた頃である。

メールには無題で

『すまん』

とだけ書かれていた。

メールでも無口な親父だな。苦笑しながら歩いて下宿に戻った。

下宿に戻ると他の学生も戻っており、東北地方で後に『東日本大震災』と呼ばれる、大地震と大津波が起こったことを初めて知った。

部屋に戻った春日はその晩ひたすらテレビの前で両親の携帯と実家に電話をかけた。

誰も、出なかった。

翌週の月曜日、叔父（おじ）と名乗る人物から連絡があり、二人で仙台市の実家に向かって、実家の近くに来たが、海の臭いと、ドブの

腐った臭いが混ざりあつた臭気が漂い、一面泥の海と瓦礫(がれき)で街並みというものが存在しなかった。

漸(ようや)く叔父と探し廻つて見つけた実家も、コンクリートの基礎しか残っていないかった。家の前には大きな漁船が道路の真ん中に鎮座(ちんざ)していた。

この場所は海岸から1km内陸の静かな住宅地の筈(はず)だったが。

春日は、自分が現実世界に居るのか、妄想で夢を視ているのか、分からなくなり叔父と名乗る人物を見ると、無言で嗚咽(おえつ)を堪(こら)えながら涙を流して歩いていった。

春日は叔父(おじ)の手をぎゅっと握った。

叔父の情報から、ある体育館に着いて入口をくぐると、一面に棺(ひつぎ)が並べられていた。

春日は唇をギョツと硬く結んで体育館の奥に進んで行き、棺に入った両親と対面した。

後は叔父に手を引かれてあちこち回つた記憶しか無かった。

春日の携帯にはあの日、父から来た最期(さいご)のメールが今でも受信BOXに保護して残されている。

1週間後、震災当日の面接で春日に忠告した面接官から内定の連絡を受けた。両親を喪つたショックで上の空だった春日は空返事で応対したが、面接官は怒りもせず、淡々と今後のスケジュールを伝えて電話を切った。

面接官の名前は大月という。

地球暦2019年5月31日午後11時20分【鹿児島県 種子島 JAXA 宇宙文字研究室】

日本の誇る宇宙ロケットが打ち上げられる種子島の宇宙センターの片隅に、その研究室は有った。

1987年に富山県立山市尖山から発信された、解読不明の通信文をあらゆる見地、角度から、研究して解読を試みる部署である。

室長の琴乃羽(ことのは) 美鶴(みつる)は古今東西あらゆる文明

の文字との照合を繰り返していたが、密かに東京のスーパーコンピュータにプログラムした異星翻訳システムの起動には至らなかった。

照合に行き詰まった琴乃羽が足下のオカルト雑誌に何となく目を向けると、とある古文書の偽書（ぎしよ）が目にとまった。

朝飯のネタにするつもりで雑誌に掲載されていた文字をスキャンしたところ、異星翻訳システムがにわか起動を始めた。

呆然とパソコン画面の前に立ち尽くす琴乃羽に、スーパーコンピュータが解析した翻訳内容が表示された。

『第3惑星の知的なる人々へ。我々は貴方達と話がしたい。これ以上の施設侵入は、侵略行為と見なし、自衛措置を発動する。』

驚いた琴乃羽は、直ぐに市ヶ谷の防衛省長官官房に連絡を入れた。

防衛大臣と通話を終えた琴乃羽は、震える足を堪（こら）えて、机にたどり着き、三鷹キャンパスに連絡を取った。

同時刻【東京都三鷹市 国立天文台 三鷹キャンパス】

天文台所長の空良（そら）透（とおる）が僅かな光学観測による天文図とにらめっこをしていると、職員が駆け寄ってくる。

「所長、隔絶空間の外から通信が入っています！」

職員が通信データを記した検知用紙を差し出した。

「まさか？どこかの国の電波が乱反射しているんじゃないか？」

空良は胡乱（うろん）げな顔で受け取った検知用紙を見たとき顔色を変えて外に走り出した。

「今から首相官邸に向かいます！JAXAの天草さんにも連絡お願いします！」

空良（そら）は白衣をパタパタ翻（ひるがえ）しながら玄関を飛び出そうとしていた。

種子島の琴乃羽（ことのは）からの連絡は間に合わなかった。

同6月1日午前1時【東京都千代田区永田町 首相官邸 総理大臣執務室】

執務室に集まったのは空良の他に、官房長官の岩崎とJAXA理事長の天草だった。

澁澤総理大臣と四人で執務室の応接ソファ―に腰かけて一息つく
と、岩崎官房長官が空良に訊いた。

「この通信が外から来たかどうか確認出来たのですか？」

「通信文に記載されていた天空のポイントを電波望遠鏡で確認したところ、明らかに周囲よりも鮮明な星空が観測できました。」

空良が答え、電波望遠鏡の観測結果に基づく天空図を応接のテーブルに広げた。

四人は、天空の一角にぽっかりと穴の空いた天空図を暫（しばらく）凝視した。

「それで、どのような通信だったのですか？」澁澤が訊いた。

「何らかの文字を顕（あらわ）すのでしようが、さっぱり分かりません。」天草理事長が両手を挙げて降参のゼスチャアをしながら、奇妙な文字列が記された通信メモをテーブルの上に置いた。

メモを見た澁澤と岩崎は思わず絶句してその場で暫く固まった。

「岩崎君、直ぐに彼らと連絡を取ってくれ！」

固い表情の澁澤が岩崎官房長官に指示した。

岩崎は直ぐに携帯電話で市ヶ谷の防衛省に連絡を取った。

「桑田君、特級指定の尖山（とがりやま）の件だ、そうだ。なんだって!?直ぐに来てくれ。総理が呼びだ。」

岩崎が、

「総理、桑田防衛大臣から大至急お伝えしたいことがあるので直接こちらに来るようです。尖山の件です。」と報告した。

「わかった。タイミングが良いな。さて、仮に外部からの呼び掛けとして、現時点でもその穴はあるのかね？」澁澤が訊いた。

「現時点でも空いています。徐々に縮小しています。24時間後には完全に閉じてしまうでしょう。」空良が答えた。

「穴が閉じるまで返答を待つ、と言う意味でしょうか？」岩崎が呟く。「恐らく、日本列島を呼び寄せた相手が何らかの接触を求めていると考えるのが自然かと思われませう。」天草が見解を述べた。

「この通信は我々だけが受信したのかね？」澁澤が尋ねる。

「この通信は『穴』直下の直径10kmの空間に向けられたものです。」

空良が答えた。

「必ずしも我々だけとは限らんぬ。」澁澤が唸った。

「総務省の電波監視チームを急行させます。」岩崎が携帯で指示を出す。

「コンタクトを試みてみよう。外の存在と話してみないことにはどうにもならんからな。」澁澤が決断した。

「極東NASA、極東ロシア宇宙庁、ユーロピア宇宙機関に連絡し、合同チームで交信しよう。説明の手間も省ける。」

その後、桑田防衛大臣が打ち合わせに加わり、種子島の琴乃羽から届いた驚くべき報告を行った。

澁澤は、この情報を各国宇宙機関に提示した上で、同意が得られたならば交信をする、という姿勢を取った。

6月1日午前8時、国立天文台に各国の宇宙機関が集合して「穴」の外へ向けて、琴乃羽が作成したメッセージが送信された。

追憶／遭遇

平成7年（1995年）1月17日午前7時45分【大阪府茨木市内】

大月は関西支社の方角へ歩きながら、何故だか涙が止まらなかった。

目に入る景色が全て傾いて、歪ゆがんでいるので、自分のバランス感覚がおかしいのかと錯角し、吐き気をもよおす程だった。

目に入る景色が全て壊れていた。

建物の壁は崩れ、ショーウィンドウのガラスは粉々に砕け、まるでビー玉をぶちまけたように大通りに散らばっていた。

大月は自分の中で今まで生きていた常識が、音を立てて崩れるのを感じていた。ここは、日本なのか？どこか他のアジアの国ではないのか？

時折身体を揺さぶる強い余震に警戒しつつ、傾いた信号機が全く点灯しない交差点を、涙を流しながら大月は横断していった。

同年2月上旬某日【兵庫県神戸市 長田区】

米国子会社から急遽帰国した彼は、昔に喧嘩別れした息子夫婦の安否あんびを確かめる為に、そのまま迎えの車を神戸市に向かわせた。大阪市街を過ぎた直後に、猛烈な交通渋滞に巻き込まれ、全く前に進めなくなった時、彼は神戸市方面から徒歩で大阪市内へ向かう集団に遭遇する。

彼らの顔は憔悴しよつすいしており、外国で報道される「難民」に酷似こくちしていた。彼は強い衝撃を受け、しばらく車の中で固まっていた。

神戸市の地理に詳しい運転手に起こされると、夜だった。

彼は作業着に着替えると車を降りて、長田区ながたくの商店街を探し回ったが、見覚えのある建物やランドマークを探したが、辺りはほとんど焼け野原になっており、馴染なじみの有った土地勘が働かなくなっていた。

夜が明けた頃、たまたま家財道具を探しに来ていた知り合いに出会い、とあるパン屋まで案内してもらったが、そこには焼け落ちた建材と瓦礫しか無かった。隣も、向かいの靴屋くつやも全て、焼け落ちていた。

茫然とその場で立ち尽くしていると、女の子の声が出た。

声の方に顔を向けると、まだ幼い、小学校低学年位か？女の子が泣き腫らした顔で、声をかけてきた。

「おっちゃん。パパとママが帰ってけえへんねん。向かいの叔父さん叔母さんもみんな。」と言ってパン屋の焼け跡を指差した。

彼は思わず泣いてしまい、「ごめんなあ…」と言いながら女の子の頭を撫（な）でながら自分の名前と女の子の祖父に当たることを伝えた。

女の子は、涙を浮かべながら顔を歪めると、彼が着る作業着の袖に泣き腫らした顔をぐりぐりと擦り付けてしがみついた。祖父は嗚咽を漏らしながら女の子を連れて車に戻った。

仁志野ひかりは3か月後、祖父の手配により心の傷を癒すために日本を発ち、祖父の親友が住む静かな北欧の片田舎に移り住んだ。

彼女に合せて、欧州支社の責任者として赴任した祖父は仕事の合間に度々顔を出し、ひかりの様子を見に来た。

ひかりの傷が癒えるまで、10年近くかかった。

地球暦2019年5月21日午前10時〔神奈川県横浜市緑区 郊

外〕

火葬場の煙突から灰色の煙が立ち上る。黒い礼服を着た大月がぼんやりとたなびく煙を眺めながら呟（つぶや）いた。

「後は任せたって、……何も残っていないじゃないか。バカ親父。」大月の視界が滲んだ。

先月中旬、大月の父が実家で大量吐血して意識を失い救急搬送された。

母から連絡を受けた大月が搬送先の病院に駆けつけると、処置に当たった医師から、父が末期の肺癌であることを告知された。

その晩、大月は人工呼吸器を付けて昏睡状態の父の手を朝まで握り続けた。

翌日、父は目を覚ましたが、呼吸器機能が低下して自力呼吸が困難になっていた為、母と共に担当医に相談した上で、呼吸困難な感覚を

モルヒネ投与によって緩和（かんわ）させる処置（終末期医療とも言う）を施すことになった。

その日から2週間、ほとんど父は昏睡状態であり、たまに目を覚まして、意味不明な言動と、母以外の人間の認識能力が失われた容態であった。

そして一昨日の早朝、担当医に呼び出された大月は、父の心臓機能が急低下して余命が間もなく尽きる事を告げられた。

午後、毎日通って看護していた母がふと気づくと、父は息を引き取っていた。78歳だった。

昭和の戦後を生き抜いた猛烈サラリーマンの呆気ない最期だった。

大月が駆け付けた頃には、病室から霊安室に父の遺体は移されていた。

大月にとって、父は小さい頃から礼儀作法に厳しい畏怖すべき存在であり、一方で、女と酒と、借金にまみれた軽蔑すべき存在であった。「サラリーマンなんて所詮、こんなもんなんだよ。」

すっかり頭髪が抜け落ち、頬がこけた顔で病室の天井を見つめたまま、ぜえぜえと荒い息を吐きながら、父は大月に話した。

2週間後の午後、容態が急変して父は帰らぬ人となった。

色々な、相反する感情がごちゃ混ぜになった大月は、火葬場の広場に立ち尽くしたまま、いつまでも、いつまでも、立ち上る煙を見つめ続けた。

大月の少し後ろでは、西野ひかりが黒いスーツを着て何も言わずに、大月と立ち上る煙を見つめていた。

葬儀の参列者が全て帰り、春日が二人を呼びに来るまで、二人とも無言でその場で佇んでいた。

2019年6月1日午後1時【富山県立山市 尖山山頂付近】

国立天文台で、歴史的な異星文明とのコンタクトが試みられていた頃、

「やったー！制覇したぞー！」先に頂上へたどり着いた西野が氣勢を挙げた。奇声（きせい）ではない、ごめんなさい。心の中で周囲の観光客に平身低頭しながら、黙々と大月は頂上に続く登山道を踏み締め

て前進する。

大月の父が死去して1週間、大月は忌引きびぎと有給休暇をフル活用してアパートに引き込みもっていた。

想像以上に父の死は堪えこた、大月は部屋の中で何にも手につかず、茫然自失となっていた。

ドアのインターホンが鳴っても、携帯電話が鳴っても、全て無視した。

そして今日、早朝から近所迷惑なドアを激しく叩く音に閉口してドアから顔を出すと、西野が部屋に突入し、カーテンを開け、シャッターを開け、部屋の片付けを始めた。その間、西野は一言も喋らなかつた。新鮮な空気が室内に流れ込み、ユニットバスに湯が満たされると、大月は西野に引きずられて風呂場に叩き込まれた。

久しぶりのお湯とシャワーを満喫して、人間の気持ちを取り戻した大月が用意されていた着替えを着てユニットバスを出ると、西野が仁王立ちにおうだで待ち構えていた。

「大月さん。何か言うことはありますか。」

西野が無表情で問いかける。

「ごめんなさい。」大月は正座すると、西野に詫びた。

「そして、本当にありがとう。」心から礼を述べた。

そんな大月を半泣きで見下ろしながら、

「本当に大月さんはしょうがない人ですね。ご飯を食べたらピクニックに行きますよー。」

優しい声音こわねで言った。

大月は初めて西野ひかりに好意を持った。

そして、現在。

「疲れたー、死ぬー。」大月はぜいぜい喘ぎあえながら頂上で西野が差し出したスポーツドリンクをがぶがぶ飲んだ。

「大袈裟おおげさですねー。そんなに飲んだら、私の手作り弁当が食べれませんよー。」西野があざと可愛い声で嗜たしなめる。

「でも、大月さんが元気になってくれて何よりです。」

西野が言った。

「こんなブヒブヒ言っているイノシシに構わなくてもいいんだぞ。」
照れた大月が言った。

「それではこれから、イノシシの餌やりタイムです♪」

西野が茶化して言うとお月は苦笑した。

西野の手作り弁当は豪華なイワシパイだった。

思わず緊張した大月だったが、普通に美味しかったので完食した。

食後に頂上でごろりと横になる大月は、北の海辺で日向ぼっこをするゴマフアザラシを彷彿とさせた。

西野はケラケラ笑いながらそんな大月の写メを撮っていた。

平日にはしやぐ若いカップルに気を使ったのか、年配の夫婦ら登山客は既に下山ルートに向かっているのだろう。頂上には一時的に大月と西野だけとなった。

衆人環視の中での「あーん」は精神的拷問に等しかったのだ。

ひとしきり大月をいじって満足した西野は、頂上に転がる石を集めてピラミッドを作り始めた。

石を手取る度に、方位磁石を近づけて、磁石が狂う石だけを選んで「パワーを感じますねえ」等と謎な事を言いながらピラミッド状に石を積み上げた。

尖山内部の人工保守管理知能『タカミムスビ』は頂上から施設と同じエネルギー波を受けると、救援部隊が到着したと錯覚し、施設内の各区画をスリープモードから覚醒モードに移行した。

「大月さん、キレイでつすよーっ！」西野がはしやいで写メを撮りまくった。

頂上に他の観光客が居なくて良かったと、大月は安堵の息を吐くと、西野が積み上げたピラミッドを見る。

西野が積み上げたピラミッドは淡い水色の光を発して輝いていた。
え？こんなにキレイな石あったかな？玄武岩？雲母？

と大月がぼんやりと考えていると、尖山の頂上付近が突然、陥没した。

山頂を目指していたり、下山途中の観光客達は山頂から立ち上る土煙を見て、直ぐに警察と消防に通報した。

消防と富山県警の救助ヘリが尖山付近に差し掛かると、突然、尖山の周辺で猛烈な上昇気流が発生し、竜巻が尖山を覆う形となった。

登山口からの地上救助隊は、竜巻が収まるまで、待機を余儀なくされた。

また、尖山各所を登山中の観光客達は、不思議な事に、竜巻発生した直後に、全員が登山口に『転移』した。登山者達は狐につままれたような表情でお互い顔を見合わせた。地上救助隊は転移した観光客の対応に追われた。

午後4時、富山県知事の災害派遣要請により、自衛隊特殊作戦群が派遣され、尖山周辺地域を封鎖した。

「ここはどこですかねえ？秘密基地みたいでワクワクしますねえ。」西野がペンライト片手に通路をずんずんと進んでいた。

西野は本当に物怖じしないなあ、感嘆の念で西野の後に続く大月。別に恥ずかしくなんか無い！怖いものは怖いのだ！オカルト好きな割りに現地で小心者になる小市民の大月は開き直る。

大月と西野は山頂陥没に巻き込まれたのではない。

山頂がエレベーターのようにゆっくりと降下し、永年にわたって降り積もった大量の土砂と一緒にエレベーターで下に運ばれたのである。

外部からは、山頂が陥没したと思われるのも無理はない。

二人が進む通路は、高さが5m、幅が4mの金属製の通路である。照明器具は見当たらないが、金属自体が発光しており、明るく二人を照らしていた。

大月が落ち着きを取り戻す頃に、西野はペンライトをそっとしまった。

通路は分岐する事無く、真つ直ぐと奥の大きな扉の前まで続いていた。

見たところ、高さ10m、幅が20mの円形か。

二人が扉に近づくと、扉の縁から緑色の光線が二人を包み込み、しばらくすると、青色に切り替わった。

人工保守管理知能『タカミムスビ』は、訪問者二人の身体データ収集と殺菌消毒を行い、危険度が極めて低いことを確認すると、中央区画に繋がる扉を開放した。

大月と西野が開放された扉から中に入ると、10基程の円筒形をしたカプセルが中央に立ち並んでいるのが目に入った。カプセルの大きさは高さが4m超、幅は2m程か。

二人がカプセルの1つに近付いて、顔を寄せあつて覗き込むと、半透明の蓋？のような窓から中が見えた。

中には、毛髪が無い、銀色に光る鱗を持つ顔が見えた。

その顔は瞳を閉じており、眠っているものと思われた。

その瞳が突然開くと、縦長の瞳孔どうこうを持つ双眸そうぼうが二人を見つめた。

「うぎやーっ!!」西野と大月は産まれて初めて絶叫した。

二人の絶叫した表情を見たカプセル内の存在も、自分を覗き込むのぞ物ものらしい形相”の人間を見て驚き、内部で絶叫したようだった。

西野は絶叫して離れる際、カプセルを少し手で押したが、永年の金属疲労で立て付けていた現地製ちきゆうせいの留め具が破断し、カプセルが隣のカプセルに倒れた。隣のカプセル留め具もまた、突然もたれ掛かった隣の比重に耐えきれずに破断、ドミノ倒しのように、カプセルが次々と倒れていった。

ドミノ倒しが終わった後、全てのカプセルが床にごろごろ倒れて転がっていた。

大月と西野が見た最初のカプセルで絶叫した存在も、カプセルが倒れた衝撃で失神したようだった。

二人は顔を見合わせながら、おろおろして器用なパントマイムを繰り広げた後、溜め息をついた。

やがて失神から立ち直った存在が倒れたカプセルから這い出て二

人に向かい合った。身長3mはあろうか。

大月、西野は、

「ホントごめんなさいっ!」

と深く頭を下げ、謝罪した。

見上げる様な高い身長で鱗うろこに包まれたその存在は、僅わずかに苦笑すると、右手を差し出してきた。

大月と西野はその手をそつと握った。

現代日本人と異星文明人の出会いが始まった。

数カ月後、尖山メンテナンス人工知能『タカミムスビ』が撮影した映像が流失した際、マスコミが大騒ぎする一方、大月と西野はネット上で「異星人に決闘の躍りを披露する『女勇者と盾役』と”痛い”認定を受けた。

イワフネ達からは

「過去文明でも披露された、伝統的な原住民の儀式舞踊ではなかったんですか?」と真顔で言われてしまい、ショックを受けた二人は数週間、尖山の施設奥深くに引き籠こもり、東山の依頼を受けたイワフネがタカミムスビに指示して水上山（皆神山）に強制転移させるまで、日本政府関係者を大いに困らせたという。

火星編 承継者たち

内閣官房執務室

地球暦2019年6月1日午後5時〔東京都千代田区永田町 首相官邸 内閣官房執務室〕

内閣官房秘書官 外交経済担当の東山龍太郎は、昼間の国立天文台で行われた、歴史的な異星文明とのコンタクトに駆り出されて疲れた体を休めていたが、大学の同期からかかって来た電話に対応していた。

『もしもしー東？この前は素敵なパワースポット教えてくれてありがとうね！』

ハイテンションらしい西野が礼を言ってきた。

プライドの高い西野が礼を言うことは滅多に無い。少々驚きながらも常識的な行動を取る同期に尊敬の念を持ちながら、

「どういたしました。で、どうだった？」と、「数日前に」終わったと思われるパワースポット巡りのデート結果を訊いた。

『掴みはばっちりしょー♪彼の意外な一面も見れたし、もう胃袋まで落とした？みたいなw』

西野はおのろけ全開のようだ。

「そろそろござんしたねー。こちとら絶賛残業中だよ！じゃんじゃんばりばり仕事入ってウハウハだよ、ちくしょーっ！」東山が本音を出す。

『なにー？俺達の時代』なんですよ？しつかりしなさいよー。』西野が先日の飲み会で東山が言い放った若気の至りを突く。

「うるせー！そっちこそ、そろそろ楽しい情報教えてくれるんだろうなあ？」東山が応戦する。

商社勤めの西野にねだられて、ギリギリ国家公務員服務規程に抵触しない範囲で”独り言”を言ったりして、何かと帰国子女でどこか醒めた性格でボツちな西野の援護射撃をしていた。そろそろ何かあるかも知れないな。西野は受けた恩は忘れないのだ。

『楽しい情報かあ、大月さんとはラブラブだし、「トカゲの人」とも仲良しになったよー?』

西野が意味不明な事を言った。東山は西野が酔っぱらって電話を掛けたのかと思って切ろうとしたが、友人として、後で回収(介抱)する必要上、現在位置を聞くことにした。

「で?今どこよ。」東山が訊いた。

『尖山なんだけど。』西野が真面目に答えた。

『どーしよー!?東いー!』西野が泣き付いた。

東山は頭を抱えた。まさか”特級機密案件”に来るとはなあ。

東山は座席から立ち上ると、内閣官房執務室の全員にゼスチャーで注目を促した。そして、電話をスピーカーモードにした。

岩崎を含めた全員が彼の電話に注目した。

東山の全身からは、最終面接試験以来の冷や汗が大量に湧き出していた。

「それで、今そこには西野、お前だけか?」

『大月さんだけだよ。二人で山頂でご飯食べて石でピラミッドを積み上げたら”山の中の秘密基地”に入れたんだよー。あれ?入れられてしまった?どっちかな?』

「どっちでもいーよ。我が国にはそんな”秘密基地”なんて無いだら?」

『やっぱりー!「トカゲの人」も自分達は月から来たって言ってたよーw(ノ、▽、*)』

「何で月から来た人がそんなところに基地作って居るんだよ?」

『んー、月がねえ、どがーつと事故って仕方なく降りてきたんだって。それで助けが来るまで寝ていたみたい。私達が来たから起こしちゃったみたい、てへぺろ?』

東山と西野の会話を聴いている内閣官房の職員はあまりの内容に絶句していた。

東山も途方に暮れていた。いや、宇宙人起こしててへぺろ?は無いだろ。普通。

気が付くと、傍らに官房長官の岩崎が立っていた。

「電話を替わりましょう。」岩崎が言った。

「もしもし、東山がお世話になっております。東山の上司の岩崎です。」

『これはごく丁寧に、はじめまして、岩崎官房長官。』西野が初めて真面目に返答した。

岩崎は西野の豪胆さ切り替えの早さに感心しながら話し掛けた。

「その、西野さん。『トカゲの人』と貴女は話せるのでしょうか？」

『はい。』日本語で会話できます。所々、発音が日本語とは違う言い回しがあり、完全には理解出来ませんが、意思疎通は可能かと思われれます。』

西野が正確に答えた。

「西野さん、貴女はなかなか洞察力も優れていますね。お若いのに大したものですよ。」

『いやーそれほどですよ?』西野が笑う。

「大月さんとはお話出来ますか?」

『はい。』“あなた”電話ですよ?』

『西野が大変失礼いたしました。同僚の大月と申します。』向こうの受話器の後ろから西野が“妻”認定されて歓声を上げている。大月は、幻聴だと思うことにした。いや、したい?

「大月さん、『トカゲの人』は恐らくこの火星文明を築いた人類でしような。『トカゲの人』は東京(こちら)に来てくれますかねえ?」岩崎が訊く。

『難しいかと。彼らは覚醒した直後です。転送や激しい動作は、身体に負担がかかるようです。』大月も取引相手との折衝に慣れているのか、自然と相手の所作や状況を気にかける癖が身に着いていた。

「ふむ。こちらから”お邪魔”する事は可能かね?」

『その場合は、武器の携帯は不可能になります。彼らの施設を警備するAIが、自動的に武装した者を”遠くに跳ばして”しまうようです。彼らのAIは非常に優秀です。常に各種レーザーやセンサーと思われる光線を駆使して施設周辺の警備巡回をしているようです。つい先日も我が国がお邪魔しようとした?様ですが?』

「先日ではないのだがね。」岩崎が苦笑した。

「彼らは友好的かね？」

『はい。私達は一切危害を加えられていません。彼らは”常に前もつて、こちらの気持ちに配慮”してくるので意思の疎通はスムーズです。』

大月は読心能力を彼らが使っている可能性を、遠回しに伝えた。

「成る程、大月さん。とても良いお話を聞かせてくれてありがとうございます。ございます。お二人はこれからどうされるのでしょうか？」岩崎が大月達の今後を訊いた。

『「トカゲの人」から幾つか頼まれ事を受けましたので、1度東京に戻るつもりです。』大月が話したあとに、背後から金属的な甲高い声が聴こえた。

『えー。はい。差し支えなければ、首相官邸（そちら）の座標を教えてください。」「トカゲの人」が施設の機能で”転送”してくれる様ですが？それと、しばらく尖山には入って欲しくないと要望されました。』
「分かりました。こちらから”お邪魔”するのは控えましょう。座標ですか。少し待ってください。」

職員が首相官邸の座標を記したメモを持ってくるまで、岩崎はどうしたものかと思考した。

首相官邸以外の安全な場所——、官邸（ここ）しかないな、岩崎は決断した。転送を断ったところで、我々の文明を凌駕する相手の前には逃げも隠れも出来ないだろうし、するべきではないな。

「——これかね？ありがとうございます。大月さん、座標を言いますね、北緯※※※東経※※※※※※※※です。」

『ありがとうございます。すぐにそちらに”お邪魔”します。』
「お待ちしています。」電話が切れた。

途端に内閣官房執務室が蜂の巣をつついたような騒ぎに包まれた。警備の手配をする者、何らかの観測器材を最寄りの官庁から取り寄せようとする者、職員が動き回った。

騒然とした雰囲気の中、東山は、自席で呆然と立ち尽くしていた。間もなく岩崎官房長官に呼ばれた東山は、異星文明と大月達とのパ

イプ役として、日本国政府交渉団の一員に加わった。

10分後、首相官邸正面玄関に大月と西野が何の前触れも無しに出現した。

呆気にとられているSPを余所に、二人は出迎えに来た東山と岩崎官房長官との対面を果たした。

日本国政府独自の異星文明との対話窓口が出来た瞬間でもあった。

出向（しゅつこう）

地球暦2019年6月1日午後6時〔東京都千代田区永田町 首相官邸 総理大臣執務室〕

応接ソファーには大月と西野ひかり、内閣総理大臣の澁澤、内閣官房長官の岩崎が座っていた。

大月と西野の後ろには、東山 首相補佐官（さつき昇格した）が立つ。

大月と西野はピクニックの服装のまま、“浮いて”いたが、別に気にしないと澁澤が一言言ってくれたので、大月の緊張が少しほぐれた様子だった。西野は泰然と向かいの二人を見据えていた。大月はそれに気付かなかつた。

「この度は、大変な目に遭って仕舞われたようで本当に申し訳ございません。」

澁澤と岩崎が揃って頭を下げた。

「とんでもありません！あれは、偶然です。私たちは貴重な体験が出来ましたから、頭を上げてください。」と大月が慌てて言った。

「ただ、『トカゲの人』の頼み事を受けてしまったもので、どうしようかと。」大月が正直に言った。

「日本国政府は国民であるあなた方を守るために最大限のサポートをさせていただきます。」岩崎が協力を申し出た。

大月の隣に座っていた西野は後ろを振り向いて東山を見るとニヤリと意味ありげな笑いをした。東山は本能的に半歩下がった。

「それで、頼み事とは？」澁澤が尋ねた。

「彼らの望みは、母星と連絡が取りたいと。その為に、通信施設、通信手段を利用して欲しいとの事でした。」大月が答えた。

「私は商社マンです。色々な品は手配できますが、流石に宇宙関係は大手に負けます。」

大月は素直に白状した。

それを聞いた澁澤はワハハと大笑いして、

「いや、失礼しました。いくら大手の商社マンでも宇宙人の顧客は居

ませんから気にせんで良いでしょう。」

「彼らの母星とはどちらになるのでしょうか？」岩崎が訊いた。

「『トカゲの人』の母星はプレアデス星団にあるコロニー群です。」と大月が答え、

「地球から443光年になります。」すかさず西野が補足した。

「遠いな」澁澤が呟く。

「国立天文台の電波望遠鏡を使っても、どれ程時間がかかるか。専門家に聞いてみましょう。」岩崎が言った。

「その他は現在の日本国の情報全部だそうです。それと、当面の食糧と燃料の心配もしているようでした。」大月が言った。

「その点は東山君がお役に立つでしょう。」岩崎が言った。

「大月さん、後程具体的な品目を打ち合わせさせてください。」東山が言った。

結局、母星への通信と膨大な情報の提供方法については結論が出ず、明日、再び首相官邸で打ち合わせをする事となった。

機密保持と警備上の観点から、帰宅や会社への連絡は禁止され、二人は内閣官房が手配した赤坂の高級ホテルのスイートに案内された。

部屋の外にはSPが配置され、ホテル正面には機動隊の警備車両がひっそりと待機する事となった。

大袈裟な扱いに大月は辟易したが、西野は「プチ新婚旅行ですう♪」とはしゃいでいた。

同じ日の夜遅く、総合商社角紅（かどべに）の社長 仁志野清嗣にしのみきよつぐの自宅に経産省次官から電話があり、とある角紅社員二人を官民人事交流の一環として、内閣官房に急遽預かりたい旨の連絡が有った。

他言無用として仁志野だけに事情が説明された。

幼い頃に震災で辛い経験を過ごした孫娘の活躍と、それを助けた頼れるパートナーの出現に喜んだ仁志野は、出向扱いとして人事交流を快諾した。

後日、経産省から指名で追加の人事交流として春日が内閣官房に向した。

大月達が執務室を出た後、

「総理、我が国は独自の異星文明窓口を確保しました。」岩崎が言った。
「30年前の悪夢の再来かと肝きもを冷やしたが、瓢箪ひょうたんから駒こまで良かった
じゃないか。」濫澤がニヤリと笑った。

「しかし、通信ですか。困りましたな。」岩崎が珍しく頭を抱えた。

「明日から本格的なコンタクトが始まると言うのに。」

「仕方あるまい、こうなったら、タイミングを見て『トカゲの人』に相
談するしかないだろう。」濫澤が応えた。

交信

『マスター。マルスの外の空気がこちらと同じ成分になった。』その存在がとある研究者に告げた。

「温度差は問題ないのかい？」研究者が訊いた。

『問題ない。マルスに転移してから生態系維持システムに負荷がかかり過ぎている。一部機能を停止して、システムのメンテナンスを実行する。大気圏、海水表面部の電磁フィールドを解除する。』

「分かった。あくまでも生態系維持の為ならば認めよう。マルスの生態系との混合は不可だ。」

『了解。マスター。今から解除する。』

地球暦2019年6月2日午前5時【東京都三鷹市 国立天文台三鷹キャンパス内】

「予定よりも早くお集まり頂いて申し訳ございません。緊急のお話があります。」

JAXA理事長の天草が、各国宇宙関係者に恐縮しきりに挨拶した。

「昨日、我が国の国内でこの通信を送ってきたと思われる人類と同一存在が発見されました。」天草が衝撃的な情報を伝えた。

「抜け駆けとは、誠実な日本人らしくない。」極東NASAのゲイツ所長が皮肉たつぷりに言った。

「いつもフェイクばかり公表する貴国が言えた分際か？」極東ロシア宇宙庁のマレンコフ通信局長が言い返した。

昔の米露冷戦を思い出してうんざりした天草理事長が割って入った。

「抜け駆けではありません！30年前から、コマンド・ケイプが常時監視している場所なんですがね。」

「尖山（あそこ）が動いたのかね!」ゲイツが驚いて言った。

「はい。厳密には動いたと言うか、目覚めたと言うのが正確な所です。」天草が説明した。

「彼らは今回のコンタクトを送ってきた相手ではありません。同胞達から孤立している様です。これから行うコンタクトが終わり次第、全ての情報を開示します。」

「まずは一つ、やるべき事をやりましょう。」天草がコンタクト開始を宣言した。

各国は反対しなかった。

同日午前8時交信が指定された「穴」から始まる。

「初めまして。日本国JAXAの天草と申します。」国際合同交信チームのリーダーである天草が呼び掛けた。

やがて自動的に国立天文台電波望遠鏡管制室のメインスクリーンに、頭髪のない、鱗に覆われた顔が2つ映った。

『初めまして。私はマルスアカデミープレアデスコロニーメローネ研究所のアマトハです。』

『同じく、プレアデスコロニーケラエノ研究所のゼイエスです。』

二人とも鱗の色が白銀と銀色で微妙に違うが、同じ爬虫類から進化した人類と思われた。

アマトハが送った通信は、琴乃羽が見つけた神代文字で解読し、日本語とほぼ同じ発音だと認識されている。実際にスクリーンから聴こえる音声も、日本語のそれだった。

天草の横で耳を傾ける各国宇宙関係者には、同時通訳で伝えられている。

「まず、私達は太陽系第3惑星『地球』で進化した人類なので自らを「地球人」と呼んでいます。アマトハさん達の場合はどう呼ぶのでしょうか？」

天草が尋ねた。

『天草さん。私たちは太陽系第4惑星「マルス」出身です。40億年前、この惑星が将来生存に適さなくなると予知したためにプレアデス星団に移住した集団です。ですから、私たちの事は「マルス人」と呼んでください。』アマトハが言った。

『ゼイエスです。天草さん達は、永年、マルスアカデミーが観察していた星で進化された。それが何故、「マルス」にいらっしやるのでしょうか？』

か？」

彼は、自分達が生命を作り出し、永年生命の進化を司ったとは言わなかった。

ゼイエスの質問に対し、天草は日本列島が人類同士の戦乱に巻き込まれて消滅の危機に瀕した事、その際、電磁フィールドで列島が防護されたものの、火星に列島ごと転移した事を説明した。

『その電磁フィールドは、アカデミーが設置した第3惑星の生態系を見守る為のものです。』普通の天変地異”では稼働しませんが、生態系そのものが消滅の危機にさらされた時に限り作動するものです。転移システムは、電磁フィールド内部の生態系を最大限ありのまま維持するように設計されています。』ゼイエスが説明した。

「なるほど。私たちはマルスアカデミーの皆様のおかげで命拾いしたと言うことですね。」天草が眉をひそめて言った。

「先程、私達を永年観察されていたと話されていましたが、私達の衛星である月面上でしょうか？それとも、プレアデスコロニーからでしょうか？」

ゲイツ極東NASA長官が質問した。彼らにとっては、月面着陸は歴史の輝かしい1ページなのだから。

『いいえ。正確には少し違うのです。』アマトハが言いにくそうに、否定した。

『大規模調査研究ラボ「ルンナ」で第3惑星衛星軌道上を回りながら見守っております。すなわち、天草さん、ゲイツさん達が月と呼ばれている衛星になりますね。』衝撃的な答えが返ってきた。

極東各国メンバーは絶句した。

天草は人類が過去に月面を調査・観測したデータを送信すると、

『これは、酷いな』アマトハが顔を曇らせて呻いた。

『あなた方が呼ばれている「月」とは、衛星自体が人工物です。かなり激しく損傷していますが。』ゼイエスが答えた。

『なるほど、この地球にしか表を見せていない”傾いた”姿勢だとプレアデスコロニーにアンテナが向けられないから通信が送れなかったし、我々の信号も受信出来なかったのですね。』アマトハが嘆息し

た。

『ルンナとの交信は15000年前に突然途絶えました。どうやら、彗星の影響で致命的な損害を受けたようですね。』天草のデータを再確認しながらゼイエスが言った。

『恐らく、乗組員はルンナから脱出し、第3惑星に降り立ったものと推測しています。私達は、ルンナ乗組員を救助し、同時にマルスに戻ってきた”皆様とコンタクトする為にここに居るのです。』

『天草さん。私達の同胞探しを手伝って頂けないでしょうか？』

アマトハが僅かに頭を下げた。

天草が少し思案する。両隣に陣取る各国宇宙関係者達は当然、相手との交渉材料としてイワフネ達の情報を使うだろう。地球人としては、「あり」だが、マルス人には、人類の文明を遥かに超越した存在に、使って良いだろうか？

天草は、内閣官房室と大月達の最初のやり取りの記録を見ていたので思い出す。

”彼らは常にこちらの気持ちを一先取りして配慮してくれる”だったかな？それは、彼らに読心系の能力がある事を暗示してはいないか？

そうだよな、格上に「下手な」小細工は失礼だ。

「アマトハさんは、イワフネさんと言う方をご存知でしょうか？」いたずらっぽい顔で、でも優しく微笑みながら天草は、彼らの消息を伝えた。

再会

地球暦2019年6月2日午後7時【富山県立山市 尖山^{とがりやま}】

アマトハは、イワフネ達生き残りの生存を天草から知らされると心から安堵した。

アマトハ、ゼイエスの強い要望で、その日のうちに、尖山^{とがりやま}に向かうことになった。

アマトハ達は、シドニア地区の旧マルスアカデミー本部に保管されていた、マイヤー型連絡艇で電磁フィールドを透過^{とうか}して、尖山に向かった。

尖山周辺は自衛隊と極東アメリカ合衆国が封鎖し、警戒へりも飛んでいた。

大月を通じて事前に連絡を受けていたイワフネ達は、『タカミムスビ』の自律防衛モードを解除してアマトハ達と大月、天草達関係者を迎え入れた。

マイヤー型連絡艇が、尖山山頂から山体内の基地に收容され、大月、天草達の乗る自衛隊へりは中腹からいつの間にか伸びてきた巨大な金属製のヘリポートに着陸し、そのままヘリポートは山体内に收容された。

先に收容されたマイヤー型連絡艇のハッチが開いてアマトハ、ゼイエスが降り立つと、イワフネ達生き残りが二人に群^{むら}がった。

「遅れて済まない、イワフネ。」アマトハが言った。

「大勢の乗組員を彗星から守れなかった、すまん。」イワフネが沈痛な表情で謝罪する。

「地球人からもらったデータを見た。」

あれは、避けようがない。完全なAI制御は、あの頃の技術だと”難しいと思う。ルンナのAIは最善を尽くしたと思う。イワフネ、君もな。よく生き残ってくれた。」アマトハがイワフネ達生き残りを見回して、永年の苦勞^{いたわ}を労った。

イワフネ達生き残りは感極まって泣いていた。

「大月さん。」しばらくするとイワフネが、基地の片隅で彼らをそつと

見守っていた大月、天草達の宇宙関係者に近づいてきた。

イワフネが鱗に覆われた右手を差し出すと、

「心からありがとうと言わせてくれ。」と言った。

大月は両手でイワフネの差し出した手を握るとはにかんで、「どういたしました」とだけ言った。

「貴方がイワフネを見つけてくれたのですね、ありがとうございます。」アマトハが近づいてきて礼を述べた。

「どういたしましたして、きっかけは彼女が偶然作ってくれました。」大月は照れながら、西野ひかりを紹介した。

「まさか、磁石が狂う石をピラミッド状に積み上げただけで中に入れるとは思っても見なかったのですよ？」西野が笑いながらアマトハとイワフネに話しかける。

「そうでしたか。私達のエネルギー源は貴女が言った磁石が狂う石を三角に積み上げることです。他にも、通信、信号に應用もしていますよ。」最後に近づいてきたゼイエスが言った。

「原理は後日、ご説明しましょう。」アマトハが会話を引き取った。

「楽しみです。これ以上同胞水入らずどうほうみずいを邪魔するのは無粋ぶすいです。今日のところは帰りましょう。」いつの間にかずいこう随行していた岩崎官房長官が言った。

大月や天草達合同通信チームが陸自へりで尖山を離れると、再びタカミムスビによる竜巻が発生して、山を覆い隠した。

翌日、早朝にアマトハ、ゼイエスとイワフネ達生き残りは尖山を一時間閉鎖して、連絡艇でシドニア地区の旧アカデミー本部に向かった。

旧アカデミー本部でアマトハとイワフネは、プレアデスアカデミー本部に恒星間通信で、ルンナ生存者の救出と第3惑星人とのコンタクトを報告した。

プレアデスアカデミー本部は、生存者救出に歓喜し、直ちにオウムアムル型光速救難艦を派遣した。マルス到着まで2年との事だった。

ちなみにゼイエスが実証した恒星間心身同調ネットワークシステムを希望した者は、居なかった。

ゼイエスは心なしガツカリしていたが。

第3惑星人とのコンタクトについては、オウムアムル型救難艦到着までの期間を文化交流、技術承継に充てることを決定し、アマトハとゼイエスを臨時マルスアカデミー使節団に任命した。

また、オウムアムル型救難艦帰還時に、地球人希望者のみプレアデスアカデミーに長期留学生として招聘しょうへいする事も認められた。

これらの方針が人類に伝えられ、日本国、極東各国が対応を検討した後、

地球歴2019年6月25日、マルスアカデミーと日本国、極東各国との間でそれぞれ、技術承継又は、共同技術研究の協定が締結された。

後楽園ドームシティの調印式で5万人の群衆に歓喜の声で迎えられたマルス人達は、人類が持つ独特の熱意に感嘆しながら、調印式に臨んだ。

アマトハと濫澤始め、ミツチエル大統領等、極東各国代表が調印する中、イワフネは、今度こそマルスの技術が人類の恒久発展に使われる事を願ってやまなかった。

別離

日本列島が消滅する約2500年前「インド亜大陸　ガンジス平原
東部」

「ラーマ、貴方一人が乗ったヴィマナー機ではどうにもなりませんよ。ナスカ基地の空中母艦とヴィマナー編隊が到着するまでお待ちになってはどうか。」

イワフネが若い国王に自重じちようを求めた。

しかしラーマ王は、

「イワフネ。心配するな。我はついにインドラの矢を手に入れたからな。試作品だが、ラビイーダの都みやこに撃ち込むと脅おどせば、この戦争は終わるんだよ。」

と言って直ぐにヴィマナーに乗り込むと、ロケットエンジンを点火して空高く飛んでいった。

「隊長。我々は？」ユダが指示を求めた。

「この戦いに介入は出来ん。人類同士の争いだからなあ。ただ、以前のシロヒト人の兵器の例もあるから、一旦いったんタカミムスビに戻って見守ろう。」

イワフネが言った。

アラビア半島の手前、チグリス川が見えてくると、ラーマは高度を落とし、ラビイーダ首都モヘンジョダロに通信を送った。

「ラビイーダよ！こちらは神の矢を手に入れた。直ちに妻を解放せよ！」

モヘンジョダロは沈黙していたが、やがて対空戦車群とステルス戦闘機編隊がラーマ王のヴィマナーにミサイルを発射した。

「すまん。シーター！」ラーマ王はモヘンジョダロにインドラの矢を放った。

流線型のスリッパに似た形のインドラの矢は、音速を超える速度でモヘンジョダロの中心部上空に到達すると、小型の太陽になった。

ラーマのヴィマナーが高空から見ると、モヘンジョダロから大きなキノコ型の黒雲が浮かび上がり、ラーマのヴィマナーも退避途中だったが

衝撃波で木の葉のように機体が揺れた。

ラーマ王は帰還してから吐血し、毛髪が抜け落ちてしばらく体調を崩して寝込んだ。

ラーマ王は妻シータを見殺しにしたことを生涯悔いて、後妻ごさいを迎える事はなかった。

一連の経過はモウゼが観測しており、結末を報告した。

報告を受けたイワフネは何も言わず、再びタカミムスビに基地のスリープモードを指示した

『ラヴィーダ王国 カツパドキア山脈地下基地 『シャンバラ』』

「ダグリウス！話が違うではないか！君が付いていながら何故核を使わせたのだ！」

モヘンジヨダロ上空の迎撃任務から戻ったダグリウスにアナンドリウス・ヒタイラーが鱗の上からでも分かるぐらい怒気で顔を真っ赤にして掴つかかかった。

「すまん、ヒタイラー。だが私は制止したぞ？今はまだ、数が少ないあの兵器を使うのは得策ではないとな。ここ一番で使わないとダメだと口を酸っぱくして言い聞かせたのだ」

涼しい顔でダグリウスが答える。

「奴らは未開な原始人なのだ！ここ一番のタイミングなどわかる筈もなからうに……。これでまた世界大戦の実証実験が中途半端に終わってしまうではないか」

ヒタイラーが肩を落としてボヤク。

「そこまで落ち込むなヒタイラー。まだ人類は絶滅してはいないさ。ラーマ王国は大打撃を受けたがナスカ基地やユーラシア大陸方面軍が所々生き残っている。文明再興にさほどの時間はかかるまい？」

ダグリウスがヒタイラーを宥なだめる。

『次の』文明誕生までどれくらいかかると思う？』

ヒタイラーが訊く。

「この惑星における、大戦争後の壊滅した文明復興サイクルは『今までのデータ』によると約50000〜100000年後だな。今回は各地に文明の技術がそのまま残されているから10000年ぐらいで最初の

覇権国家が誕生するだろう。我々が介入するタイミングはそこだろう」

ダグリウスが思案しながら答えた。

「アカデミーの生き残りも今回の結果には落胆しているだろう。さぞかし人類の戦いを求めてやまない性質を『素のもの』として捉えているだろう。我々が介入する前に文明勃興の手伝いをする事は『過去の事例』を診ても明らかだ」

ヒタイラーが母星主流学派の行動予測をする。

「ダグリウス。次は私が自ら『実験に理想的な』大帝国を築くことにするよ。君に任せるとまた良い所で文明の成熟を潰つぶされてしまう。私は大帝国の初代国王として、覇権国家の人類統治システムについて研究を深めるつもりだ。次は『宗教戦争』と『経済戦争』も試してみたい」

ヒタイラーが自分の考えを伝える。

「分かった。ヒタイラーの提案を尊重しよう。君は今回被害が少なかったユーラシア大陸西部で文明を興おこせばいい。私はアフリカ大陸からラーマ王国支配地域までの環境再生を行いながら覇権国家を興おこすでしょう。上手く行けば君の覇権国家の好敵手ライバルに成れるように『宗敎国家体制』を試してみよう」

ダグリウスが応えた。

「ダグリウスもたまには良い提案をするではないか！面白い。ならば覇権国家同士による『冷戦』なるものも試してもよいだろうか？」

ヒタイラーが楽しそうに言った。

「冷戦はまだ理論上の話の段階だからな。試す価値はあるだろう。お互いそれまでは核を含む切り札の使用は控えるでしょう。それと、主流学派の支援は受けても良いが、我らの素性は気づかれてはならんぞ？お前が王になるのなら。今の身体では感づかれてしまうぞ!？」

ダグリウスが指摘する。

「大丈夫だ。既にギザ研究地区のファラムラビーと共同してクローン人類の作成に成功したよ。ついでに言う和我々の精神体をクローンに移す研究も目途めどがついたんだ」

ヒタイラーが告げる。

「それは素晴らしい！これでいつでも我々は姿を変えて人類と共に歩むことが出来るな！」

ダグリウスが称賛する。

「何が共に歩むだ。我々は研究者であつて人類は検体だろうに……。まあいい……。今は研究の最終確認だ。200年もあれば試験体を幾つか生成出来る。後はこれから私達が興す国で使ってみよう」

ヒタイラーが応える。

「分かった。では、我々はここからは別行動としよう。お互いの研究に幸あれ」

ダグリウスがヒタイラーに別れの言葉をかけると連絡艇格納庫に向かった。

「ダグリウスにも『シャドウ』の幸あれ」

ヒタイラーもダグリウスの背中に祝福の言葉をかけると肩を揺すりながらカツパドキア地下最深部にあるリニアモーターカー乗り場に向かった。

数百年後、地中海沿岸部のとある半島から一つの文明国家が勃興してユーラシア大陸の半分を手中に収めることとなる。

その初代国王の名は「フアラオ」とも「アナンヌキ」とも呼ばれた。同時期中東地域で勃興した巨大多宗教国家の君主は名前を言うのも憚（はばか）られると言われ、その容姿だけが後世に伝えられた。そのカリフは背が高く、頭を黒いスカーフで隠して縦長の眼だけを覗かせる奇抜な格好だったという。

その巨大多宗教国家の人民はカリフにならつてスカーフで顔を覆い、一日に何度もカリフを讃える唱を口ずさんだと言われている。

地球暦2019年7月1日午前8時【東京都千代田区永田町 首

相官邸 総理大臣執務室】

「そうか、ミツチエルも行くのか。」澁澤総理大臣が極東アメリカ合衆国のミツチエル大統領へ寂しげに言った。

『ああ、外に打って出るチャンスをみすみす逃すのは惜しいのさ。いつまでもタロウに甘える訳にはいかんよ。』ミツチエル大統領が答えた。

『先ずは、先遣隊を出して、拠点作りに適した場所を見つけたら、那覇DCを出すよ。引き続き共同統治が有り難いのだが。』

「君達が治安要員を減らさなければOKだ。どのみち安定したバックアップが必要だろ？我が国も少しは支援するさ。」

『ありがとうタロウ。では、これから議会で説得だ。』

「我々は100%共に在る。幸運を祈る、ミツチエル。」

強烈な皮肉で餓はなむけの言葉を贈るとミツチエル大統領が苦笑して映像を切った。

「やはり出て行きますな。アメリカは。」岩崎官房長官が言った。

「ああ、彼らは我が国におんぶに抱っこではプライドが傷付くからな。」濞澤が応えた。

「しかし、ロシア熊も出て行くとは、仲が良いな。」濞澤が意味ありげな表情をする。

「ええ、内調ないちよう（内閣調査室・日本唯一の情報機関）を使って調べていますが、なかなか尻尾しっぽが掴つかめませんな。」岩崎が報告する。

「奴等は恐らく、外に出てから我々に牙を向くかも知れない。油断するなよ。」濞澤が言った。

調印式の後、各国首脳だけがアマトハに呼び止められて、シドニア地区にある旧マルスアカデミー本部に招かれた（転送された）。

そして、隔絶空間の外である火星の大地が劇的な変化を遂げていることを知らされて驚愕きやうがくする。

大気があり、海もあり、陸地もある。厳密な意味で人類に適しているかは分からないが、アマトハの開示したデータを見る限りでは、開発可能と思われた。

また、現在日本列島に展開されている電磁フィールドが数日以内に、大気圏と海面上層に限定されてだが、一時的に解除されると伝えられた。

そして、火星の衛星『フォボス』『ダイモス』からマルスアカデミー

の監視用器材が撮影した地球の拡大映像も見せられた。

地球では日本列島消滅の影響で地殻変動が発生、火山が各所で大噴火を起こし、見知った大陸の形が変わっていた。或いは、大陸自体が姿を消していた。そして、水の星の半分近くが火山の噴煙で覆われようとしていた。

絶句する各国首脳にアマトハは、このままいけば噴煙が太陽を遮り、数百年単位で氷河期になると告げた。

隔絶空間に戻った後、各国首脳はこの情報を政府首脳に伝え、方針を協議した。

ミツチエル大統領が澁澤に連絡する前に、極東ロシア連邦のパノフ大統領が、火星開拓に進出する旨を伝えてきた。

外に打って出るのはこの2国であり、英国連邦極東、ユーロピア自治区、台湾自治区は、各々の日本国地元自治体及び日本国内にある多くの姉妹都市提携をしていた自治体からあらゆる面での支援を受けており、深い共生環境を築いていた。

自分達の文化を寛容に受け止め、存続に協力を惜しまない日本国民に彼らは心から感謝しており、今さら火星に新天地を求めるのは時期尚早との意見が政府内部で相次いだのである。

一方、火星文明承継についても意見が対立した。

極東米露は、文明の即時完全承継を希望する積極派と、日本国をはじめとする各国は、火星文明の分析による、火星の科学技術を地球の科学技術に応用させて取り入れる段階的な承継を目指す慎重派に分かれた。

アマトハとゼイエス、イワフネは中立を貫き、各々の希望に沿った文明の承継、研究開発に協力すると言った。

両者の対立が隔絶空間共同体の別離を加速させる原因になったとも言える。

同日午前11時〔東京都千代田区永田町 首相官邸内閣官房 チーム『マルス』〕

「最近、極東ロシアが渋いんですよ。」春日が溜め息をつきながら大月に愚痴る。

「何が渋いんだ？」大月が訊く。

「素っ気ないと言うか。物資の提供を渋ると言うか、そんな感じですよ。」春日が言った。

「極東アメリカもパイナップル売ってくれませーん！」西野が泣き付く。

「お前は長崎のイワシパイが有ればいいんだろ？」大月がいなす。

「やはり、そう来るか。」大月が呟く。

「列島の外に出るなら、物資がいくらあっても足らんだろ。」素っ気なく言った。

「東山さん、お昼を食べたら午後は尖山に行きたいのですが。」大月がチームリーダーの東山首相補佐官に外出許可を申告する。

「私も付いて行きますよー。」西野も申告した。

「私はちよつと仕込みがあるんでやめときます。」春日が辞退した。

東山は少し考えたあとで、イワフネと連絡を取って、出来れば内密に行ける方法がないか相談して欲しいと課題を出した。

西野は直ぐに携帯を取り出して何処かに電話をはじめると、スピーカーモードで

「あ、イワフネさんですかあ？西野です！大月さんがお話しに行きたいと言っていますけど、大丈夫ですか？」といきなり話し始めた。

大月は、そう言えば最近携帯が見つからなかったのは、西野が大月の携帯をイワフネに渡していたからか、と仕掛しかけに気付いた。

『私は大丈夫です。大月さん達のお話は面白いですからね。』イワフネが了承した。

『——はい、内密ですか。——事情はうすうす。——そうですねえ。では、水上山の頂上までご足労願そくろうえませんか？』イワフネが提案した。

『タカミムスビの転送システムは、水上山みなかみやま（皆神山）と飛騨ひだたかやま高山の頂上から相互に移動出来るようになっていきます。』イワフネが説明した。

「大月です。ご配慮ありがとうございます。では、皆神山に着いたらまた電話します。失礼します。」大月が会話を引き取って終了した。

「東山リーダー、新しい連絡ポイントについて、岩崎さんに報告に行きましょう！」大月が具ぐ申しんした。

「ええ、今直ぐに。」東山は若干押されぎみに頷いた。

岩崎官房長官に、水上山（皆神山）と飛驒高山から尖山とがりやまに転送出来るシステムがあると報告すると、

「早速結果を出すとは、さすがですね。我が国独自の火星文明交流と情報収集にも役立ちます。その2ヶ所にはJAXAの宇宙観測施設を作ると表向きはしましょう。秘密裏に陸自の特殊部隊を駐留させ、公安に警備をさせましょう。総理には、私から報告します。」

話が大事になってきたが、取りあえず皆神山に向かう大月と西野だった。

試食会

地球暦2019年7月2日午前11時30分【富山県立山市 尖山】

「それでは、これより大試食会を開催いたしまーすっ！どんどんパフパフー！」無駄に元気な西野の声がハンドスピーカーから大音量で流れる。

春日はドン引きしつつも西野に合わせて「ウエイイ♪」と囃し立てる。

え？それ日本語なの？と、大月は悪徳勧誘商売会場に連れ込まれたような、諦めの笑顔で、それでも楽器でどんどんパフパフしていた。チームリーダーの東山は、料理の搬入で忙しく、突っ込み切れなかった。

暫くして立ち直った大月は、ハンドスピーカー片手に、「これからマルスの皆様と我が国が交流を深めていくにあたり、マルスの皆様の好みを知りたいと思ひまして、試しに作ってみました！」

大月が基地の片隅を指し示す。

シャトルの隣に、バイキングビュッフェよろしく、机が並べられて、各種料理が大皿に盛り付けられ、各種飲み物が並べられていた。

料理の背後では、給仕として立候補した宮内庁料理人が数名、料理の盛り付けと、温度を保つために忙しく器具を動かしていた。

イワフネ達マルス人は、その光景をみてどよめきの声を挙げた。

「よろしければ、味見をお願いします。お口に合わないものも有ると思ひます。その時は是非教えてください！また、出来れば好みの味付けなどのアドバイスをよろしくお願いいたします。」

大月が試食を促した。

春日、宮内庁料理人、上野動物園 爬虫類飼育係が監修した、異色のコラボレーションメニューである。

鳥の照り焼き、レバーの串焼き、鳥の唐揚げ、カエルの唐揚げ、イナゴ・コオロギの佃煮、蜂の子ご飯、カボチャのポタージュ、ツナとラディッシュ・ニンジンのサラダ、サツマイモの蒸したもの、芋羊羹、

バナナ料理、パイナップル、ミカンを使ったジュースやお酒等 多彩（たさい）にわたる。

食材の準備には、大月、西野、東山までもが列島各地を東奔西走した。

永年、宇宙船や外惑星基地でサプリメントや栄養補給ゼリーやカロリーバー等の合成食品を主食としていたマルス人にとって、大月達の料理は、色彩豊かで美味しそうな匂いが鼻腔をくすぐり、口のなかで本能的にじゅるりとさせるのに充分だった。

マルス人達は、おっかなびつくり大きなスプーン（おたまとも言っ）や特注した巨大フォークで大皿に群がるのだった。

イワフネやゼイエスがパイナップル酒で酔っぱらい、アマトハに介抱されるレアな場面も目撃され、試食会場は宴に突入した。

感極まったゼイエスが「これは宇宙料理研究分野の誕生の瞬間です。」とよくわからないことを言っておらず、感概無量になつていた。

そんなアマトハも、永年観察していた対象がこのような、これ程の果実をもたらすとは思っておらず、感概無量になつていた。

そんな彼らに笑顔で料理を振る舞う大月、西野、春日、東山達だった。

彼らは後日、マルス人達から深く感謝される事となる。

大月の発案で、尖山基地へ給食としてこれ等の料理が日本政府宮内庁から定期的に届けられたのである。

また、サプライズでいたずら好きな皇族が何名か給食の給仕を行い、イワフネ達と交流した。東山はしばらく胃が痛かったと言う。

ホームステイ（イワフネ）

地球暦2019年7月20日午前9時【極東アメリカ合衆国横田基地（エリア・横田）】

澁澤首相、ミツチエル大統領、パノフ大統領他各国の要人がアマトハ達『留学生』を出迎えるために集まっていた。

やがて、

『——っ！高速で上空1万mから垂直降下する飛行物体を探知しました！』基地の管制からのアナウンスが響く。

やがて、誰もが知るシルエットを持つ飛行物体が初夏の青空から降ってきた。

そのシルエットは『土星型円盤』と呼ばれる。

かつてブラジル海軍が撮影し、公式にブラジル政府が認定したタイプである。

土星型円盤は音もなく輪の部分をくるくる回転させながら、代表団が待ち受ける滑走路上に近付くと、4本の脚を出して着陸した。

やがて円盤のハッチが開いて、タラップが地上に届くと、アマトハ達が円盤から降りてきた。

”今回は”アマトハ、ゼイエス、イワフネの3人が別行動をとって各国を訪問し文化交流と、来る技術承継について協議する事になったのである。

お忍びで、大月と西野が水上山（皆神山）から尖山（とがりやま）に行つてイワフネと話したときに、地球文明を全て知りたいという希望に対して、西野が「それなら、みんなホームステイに来ればいいんですよ。」とあつけらかなと言いつ放つたのがきっかけである。

イワフネは直ちにアマトハとゼイエスに『ホームステイ』の打診をしたら、とても良いノリで決まってしまったのである。

東京の官邸に戻つて、岩崎官房長官と東山リーダーに、「アマトハ達がホームステイしたいそうです。」と報告すると、二人とも口をあんぐり開けて固まっていた。

これは不味い、と何となく感じた大月は西野を道連れに角紅が持つ

コネクションを利用して、取引先に仕事の打診をした。

ちなみにコネクションの利用については、西野が社長に”直談判”
して許可を得ている。

角紅のデイベロツパー部門のゼネコン設計士には、身長3mの人間が
快適に過ごせる住宅の設計を大至急で依頼し、西野の伝で巨人に見合
う北欧家具を特注し、春日と宮内庁、上野動物園に宇宙人食の相談を
して試食会を成功させた。

衣服についても、西野がリーダーシップを發揮し、取引先のファッ
ションデザイナーを中心に、異世界人類の着る”実用的な”各種衣類
を製作して貰った。

衣食住が揃った段階で、大月はこの資料を各国宇宙機関窓口に送
り、準備を促した。

アマトハ、ゼイエス、イワフネ達にホームステイの内容、意義につ
いて大月が詳しく説明した。

要は1ヶ月にわたり、”お忍び”で、日本国及び各国の政治、社会
文化、科学技術を実体験するのである。

イワフネは大月と寝泊まりを共にしながら、角紅の社員としてサラ
リーマン生活を送る。休日は庶民のレジャーを経験する。

アマトハは各国を廻って政治指導者と対話を行い、人類国家の政
治思想を聴く。

ゼイエスは各国の科学者と交流する。

アマトハとゼイエスも各国が用意する滞在施設に泊まる。
勿論3人には、万一に備え各国政府の護衛が秘かに付く。

大月、アマトハ達双方が遠足に臨む学生のようにワクワクしながらそ
の日が来るのを楽しみにしながら待ったものだった。

翌日7月21日午前6時【神奈川県横浜市 アパート「サンライズ」
105号室】

「おはようございますー！」西野の元気な声がインターホンから聴こ
えた。

「おはよう西野。元気だな。」寝ぼけ眼で西野を部屋に上げると、西野
はニコニコと笑顔でそのまま大月の部屋を横切り、大月の壁に設置さ

れた特注の「玄関」脇のインターホンを押す。

「イワフネさーん！朝ですよー！」イワフネのホームステイ1日目のモーニングコールである。

たつぷり5分かけて扉を開けたイワフネは、水色の特注Yシャツと、明るいグレーのスーツを身に付けていた。

「イワフネさんバッチリ決まっています！いけてます！」西野がよくわからないテンションで褒める。

「朝御飯召し上がりますか？」西野が訊いた。

「ありがたい、よろしくお願いします。」イワフネがニコリとする。

「あなたーっ！イワフネさん家で朝御飯ですよー！早く着替(きが)えてくださいなー♪」西野が新妻(にいづま)気取りで大月をぐるぐる小突(こづき)き廻(まわ)す。大月は洗濯機の中の衣類のように西野に世話を焼かれながら着替える。

リア中年爆発しろ！と影ながら警戒するSPが言ったかも知れない。いや、作者かな？

イワフネの滞在場所は、大月のアパートに隣接して角紅(かくこう)デベロツパー部門が威信(いしん)をかけて急遽(きゅうきょ)突貫(とつかん)工事で建設され、正面(しょうめん)玄関(げんかん)の他に、大月の部屋に面した部分にも「玄関」が作られ、そこから大月と西野が出入り出来るようになっていた。

西野ネーミング『イワフネハウス』らしい。ひねらないの？等と突っ込む暇(ひま)もなく、西野が手際(てぎわ)よく前日から仕込んでいたカボチャのポタージュとシーチキンサラダ、鳥の照り焼きという豪華な朝食を済ませると、3人はSP護衛のもと、横浜駅に向かった。

横浜駅からは、JR東海道本線に乗って東京まで通勤するのである。

朝のJR東海道本線は混雑(こんざつ)が酷く、経済統制、交通規制下の現在、自家用車の使用が禁止されてからは更に過密(かみつ)になっていた。

この為、一番混むとされる川崎く品川間の乗車率は300%を超えていたがその日、「ビッグゲスト”の乗車により阿鼻叫喚(あびきょうわん)の通勤地獄と化した。

人がはち切れんばかりに溢(あふ)れかえる乗車口に身長3mを超えるイ

ワフネが乗ろうとしたのである。

車内は悲鳴と怒号に包まれた。

すかさず護衛のSPが、

「すいませーん、特撮映画の撮影ですー！ご協力お願いしまーすー」と叫び、車内放送も「本日、10号車において、海外国賓による特別撮影が行われている関係で、電車大変混みあいまして誠に申し訳ございません。ご協力の程、お願い申し上げます。」とアドリブを効かせたアナウンスがされた段階で、漸く乗客達は落ち着いてイワフネが乗る空間を、駅員や車掌達と協力して空けたのであった。イワフネが収まった車両のドアは、東京駅に着くまで、途中駅で開いても、乗降する（乗降出来る）乗客は居なかった。

大月はイワフネの巨体を後ろで支え、西野が大月のメタボな体をその後ろで支え（ハグとも言おう）、春日はイワフネの鞆（かばん）がドアに挟まらないように神経を使い、護衛のSPは物珍しげに写メを撮ろうとするものを睨み付けて牽制したり、接触しようとする者を遮るなどして、任務を全うした。

東京駅で交替したSPは全員駅の医務室に運ばれた。極度の緊張と急激な脱水症状であった。

疲労困憊の体で2人（何故か西野は顔がツヤツヤしていた）がイワフネと共に角紅本店に到着すると、久しぶりに出勤した大月と春日に同僚が早速仕事の相談を持ち掛けていた。

同僚達は、イワフネに興味深い視線を向けたものの、自分の業務に集中しており、その姿勢にイワフネは感銘（かんめい）を受けた。暫くすると、社長室から出迎えの秘書が来て、「新人」イワフネを挨拶させるために、西野を付き添わせ、社長室に案内して行った。

イワフネは、「人類は毎日こんなに過酷な生活をしているのに、研究ばかりしている自分はこれでいいのだろうか？」と齢500万歳を超える賢人は暫く悩んだと言う。

角紅社長室の応接セットで社長と3人だけになると、

「ひかりちゃん、凄い新人さん連れてきたなあ。」と社長の仁志野が笑

顔で言った。

「お祖父ちゃんこそ、いろいろ手伝ってくれてありがとう。」” 仁志野ひかり” が嬉しそうに答える。

「そらあ、火星の新人さんは会社創業以来やからなあ。」思わずひかりのペースで関西弁に戻る社長。

「今はまだお忍びやけど、そのうち公表されると思うで。火星人御用達のブランド準備しといた方がええんちゃうかなあ。」ひかりがボソツと、” 独り言を言う様な感じ” で、政府の動きを示唆した。「ほんま、商売に結びつける子やなあ。そろそろ役員やつとくか？」社長が冗談半分で打診する。

「今はまだ、『彼』の傍に居たいねん。」とひかりが答える。

社長はニヤリと笑うと、今度はイワフネを見て、

「イワフネさん、ようこそ家の会社へ。」初めてイワフネを歓迎した。

「ありがとうございます。ニシノ社長。よろしくお願いします。」イワフネが体をちよこんと折り曲げてお辞儀をした。

「礼儀正しいですなあ。」社長が感心する。

「大月さんに仕込まれました。」イワフネが苦笑しながら応えた。

「大月君か。ひかり、彼は化けたなあ。」ニコリと笑う。

「そうやねえ。彼はいろいろ独りで抱えていたみたいやけど、少しずつ男前になつてるでえ♪」ひかりが少し（かなり）、のろけた。

社長はガハハと笑い、

「ほな、もう少し男を上げたらちゃんとお紹介してな。」ひかりに告げた。

「ありがとうございます、おじいちゃん。」ひかりが心から感謝する。

「イワフネはん、どうかうちらをよろしくお願いします。」社長が頭を下げる。

「それと、ここでの話は大月さんには内緒やで？」といたずらっぽく笑った。

「分かりました。大月さんはしつかりとご自分の役割をこなす人だと思えます。ひかりさんとは、お似合だと思いますよ。」イワフネが応えた。

社長は大いに満足そうに笑った。

ホームステイ（アマトハ）

地球暦2019年7月21日午前10時【東京都千代田区 皇居】
アマトハが天皇陛下をお忍びで訪問した時、天皇陛下は皇太子殿下を伴って、アマトハが待っていた会見場に現れた。

「お待たせしました。」

温和な声で天皇陛下がアマトハに声を掛けた。

「こちらこそ、無理を言ってお邪魔してしまい、恐縮です。」

立ち上がったアマトハがお辞儀をして応じた。

「それと、」先日は、ありがとうございます。殿下。「アマトハが

皇太子殿下にお辞儀をした。

「皆様のお気持ちがかもった美味しい料理が胸に染みました。」アマトハは心から感謝した。

「アハハいえいえ、料理人達は一生に1度の名誉だと申しておりますよ。」

皇太子殿下は笑って応えた。

「一生に1度の名誉、ですか。」

アマトハは一瞬言葉を考えたが、

「天皇陛下。現在の人類の寿命は、いか程（ほど）になるのでしょうか？ 私達と余りに違うものですか。」

正直に聞いた。

「そうですね、男性で80年少し、女性は80年から90年位でしょうかね。」

天皇陛下が少し考えて答えた。

「だから、一生に1度の名誉なのですか。」

アマトハが言った。

天皇陛下は頷きながら

「だから、人間はまだまだやりたいことが有っても限られた時間で、自分の人生を選択しなければならぬのです。」感慨深げに天皇陛下が答えた。

「陛下。私達マルス人類の寿命は平均で1000万歳になります。私

は650万歳になります。」

アマトハが告白した。

余りの内容に天皇陛下も、皇太子殿下も、絶句してしまった。

「陛下、それでも私達は日々宇宙の真理と理の研究を続けている人種なのです。」アマトハが言った。

アマトハは次に首相官邸に向かった。

澁澤総理大臣と懇談する為である。

「やつとゆつくりお話ができますなあ。」澁澤がぎつくばらんに言った。

「ありがとうございます。留学準備の時に大月さんに取り寄せてもらった日本の近代、現代史、歴史書は大変興味深かったですよ。」アマトハが応えた。

「我々と違って地球の方々は生き急いでいるように感じてしまうのは、仕方がないのでしょうか？」

アマトハが率直な感想を述べた。

「ええ、人の一生は短いし、常にチャンスが有るわけではない。だから、とある一瞬に人は全力を出せるように努力するのだと私は思いますよ。」

澁澤が答えた。

「マルスの人々はこの様な政治体制で社会を築かれているのでしょうか？」

澁澤が質問した。

「我々はアカデミーという、研究統轄機関が政府の役割を果たす感じですね。マルス人の殆どは研究・調査の日々という人生を送ります。」アマトハが答えた。

「それは素晴らしい。我が国の学者達が聴いたらさぞかしうらやましがらるでしょうなあ。」

澁澤が笑いながら言った。

「アマトハさん。実は訊いてみたかった事があるのですが、何故、過去の高度人類文明は、滅びたのでしょうか？」澁澤が尋ねた。

「アトランティス、ムー、バベル、モヘンジロダロ、ナスカ、マヤ、オルメカ、ケルト。いずれの文明も、立ち上げ当初は我々が技術支援を行いました。」

アマトハが衝撃的な発言をした。

「しかし、我々の技術支援は文明が”発展サイクル”に入ると終了します。”彼らの文明”は、我々の模倣であってはならない、とアカデミーが決めているからです。」アマトハが説明を続ける。

澁澤は真剣な面持ちで聞き入っている。

「地球人類は、大きすぎる力を手にすると、それを応用したり派生させる研究に到達する前に、”そのまま行使”する傾向が強いのです。」
「結果として、戦乱が激しくなり、やがてはその時代の生態系を道連れに、惑星規模の破滅に至るまで制御不能になります。いずれの文明も、それが原因で、宇宙の果てまで行く前に、滅んでいきます。」

アマトハが嘆息して言った。

「ですから、我々は、即事技術承継を求めた一部極東各国の将来を危惧しています。しかし、ユニークな選択をした日本国は、今までに無い事例です。我々は期待せざるを得ない。」

アマトハが澁澤の決断を評価した。

「我々は己の分を弁えるという考えがありますからな。しかし、国内には慎重すぎる、チャンスを逃すな！と批判する多くの国民が出るでしょう。」澁澤が悲観的な見通しを示した。

「その声が大きくなったとき、私は内閣を総辞職させ、総選挙で国民に信を問うやり方を取ります。」

澁澤はアマトハに、今後日本国政治で起こりうる最悪の事態を予告した。

「分かりました。私は、あなた方政府に留まって欲しい。あなたは賢明だから。」

澁澤は珍しく照れて笑った。

首相官邸にいたアマトハを迎えに来たのは、

極東アメリカ合衆国の要人輸送用海兵隊ヘリ『マリーン・α（アル

フア)』だった。

海兵隊ヘリに乗ったアマトハは、そのまま横須賀沖に停泊する航空母艦『セオドア・ルーズベルト』に着艦した。

甲板では、ミツチエル大統領を始めとする政府首脳が出迎えた。

航空母艦のブリーフィングルームに案内されたアマトハはそこで、民主主義リーダーとしての大国、極東アメリカ合衆国の成り立ち、日本国との歴史的関係、今後のアメリカが考える火星開拓戦略を聞いた。

その後は甲板に出て、巡洋艦『ズムウォルト』のレールガンの威力や、極秘戦闘機『オーロラ』からの攻撃用レーザー発射等、軍事技術の強大さをアマトハにアピールした。

アマトハは、「懐かしい」兵器の数々を見ました。人類の技術進歩は戦争によるものだという事がよく分かりました。これが人類に有益に使われることを願います。」

とだけ言つて、極東ロシア連邦の迎えのヘリに乗ってエトロブルクに向かった。

極東ロシア連邦のパノフ大統領との懇談は、極東アメリカ合衆国と似ており、如何に極東ロシアが人類に影響力を持っているか、ロシア民族の苦難の歴史と北方四島の領有権の正統性をアピールした。

アマトハは、特に感嘆もせず、極東アメリカ合衆国に言つたのと同じことをコメントしてエトロブルクを発った。

自衛隊ヘリで長崎県に向かったアマトハは、五島列島の1つで静かな海を望む邸宅で英国連邦極東首相ケビン、ユーロピア自治区代表ジャンヌと懇談したが、「ティータイム」という形式でざっくばらんに話し合うパターンは、極東米露と違う毛色だった。

「アマトハさんは、地球人類が信仰する宗教についてどのような考えをお持ちか？」

英国のケビン首相から質問されると、少し考えてこう言った。

「誰でも、自分の信じるものを支えに日々生きているのだと思います。」

人類の特徴として、1つの目標に立ち向かう集団のエネルギーは、マ
ルス人が久しく忘れていたものを思い出させてくれます。」

とアマトハは率直に評価した。

「しかし過去の人類の地球文明では、宗教的特徴を強調するあまり、本
来の意義を見失って自らの身を滅ぼした文明もあります。科学と宗
教のバランスは難しく、また、人々の宗教観念も異なります。これは
まさに、永遠の課題ではないでしょうか？」

アマトハが見解を述べた。

「私達はこの豊かな自然の中で、伝統的な生活が送れていることを、神
に感謝しています。」

英国のケビンが言った。

「我々を何千年も支えたもうた偉大なる神”ゼウス”に毎朝感謝して
います。」

ユーロピアのジャンヌ代表が言った。

アマトハは”ゼイエス”がここに居なくて良かったと心から思う
のだった。

「また、ティータイムにお話ししましょう。」と二人からティータイムの
誘いを受けたアマトハは、「お話だけなら」と了承して長崎を発った。

よくよく考えてみると、言質を取られていたことに気付いたアマト
ハだった。

東京の迎賓館に戻ってきたアマトハは充てがわれた自室に戻ると、
盛大にため息を吐いた。

やがてイワフネに電話し、「今日は飲むぞ！」と宣言し、『イワフネ
ハウス』で大月達と宴会を開き、西野特製マルス料理をたらふく食べ
てストレスを大いに発散させた。

特製。パインアップルのお酒が疲れたアマトハの心身に染みた。

「アマトハ、お前サラリーマンみたいだな。」

とイワフネに真顔で言われ苦笑するアマトハだった。

翌日、アマトハは『母星から”急ぎ”の調査要請を受けた』と、留
学を切り上げる旨を各国首脳に伝えた。

ね 100年程度である。 マルス人の感覚で”急ぎ”とは、地球人類の感覚に変換すると、概^{おおむ}

ホームステイ（ゼイエス）

地球暦2019年7月21日午前10時〔東京都千代田区 北の丸公園 科学技術館 会議場〕

ゼイエスは、会議場に集まった各国の学者、科学者、研究者、各国政府科学部門職員等400人と討論、質疑応答に臨んだ。

そして、案の定、最初は日本列島を覆う審判の壁について質問が殺到した。

ゼイエスは答える。

『現在、日本列島周辺には800万以上の自律進化型生態系維持管理システムが活動しています。普段はデータ収集のみですが、今回のような核攻撃による生態系全体を消滅させる事態に遭遇すると、自動的に火星へ”避難（ひなん）”するようにセットしていました。』

想像を超えたスケールの大きさに、参加者は言葉を失っていた。

ゼイエスの説明は続く、

『このシステムは各々が自律進化します。つまり、過去の人類の破滅的状況も学習し、経験として蓄積、共有しています。今回も然り、です。ですから、今後このシステムがどの様な進化を遂げるか、誰にも分かりません。』

もしかしたら、火星よりも安全な”何処かに”再び転移する可能性も捨てきれません。』

日本の科学者達からどよめきの声が上がった。

『しかし、1つだけ言える事があります。それは、内部の生態系は保護され続ける。破滅的滅亡を免れる事が出来ます。』

ゼイエスはあくまでも客観的な解説に終始（しゅうし）した。

「我々はあなた方に創られ、手のひらで踊っているのですね？」

極東ロシアの宗教学者が質問した。

『私達のプロジェクトは、原初の第3惑星に新たな生命を生み出しました。それは否定しません。』

ゼイエスは研究者として明確に肯定した。

『しかし、生物の進化は司っていないません。それは、皆様と私達の肌を

比べると一目瞭然でしよう。地球人類は哺乳類ですが、マルスの生態系では、魚類と節足動物、爬虫類が主流であり、我々は爬虫類から進化しました。

私達は小さな切っ掛けを惑星に与えただけです。どのような生物が台頭しようと、それに干渉はしていません。』

「マルスの皆様の寿命が大変長いのは何故でしょうか？」英国連邦極東の生物学者が質問した。

『この第4惑星は寒冷で、太陽光の恩恵が少ない環境下です。私達爬虫類の身体は一定温度を下回ると緩慢な動作になり、冬眠に近くなります。結果として、細胞活動時間が短くなり、劣化する速度も遅くなります。これが永年繰り返され、徐々に長命になっていったと思われれます。』

ゼイエスが答えた。

会場が再びどよめきに包まれた。

さぞかし宗教家や神による永遠の命や、天地創造を信じる人からしたら、天誅を下したい気分だろうな。とJAXA理事長の天草は醒めた眼で色めき立つ欧米の研究者達を見た。

宗教論争になる前に天草は話題の転換を試みた。

「この日本列島周辺の環境を制御する、800万の自律システム自体を機能停止させることは、あなた方の技術では容易く可能ではありませんか？」

天草理事長が質問した。

『自律システムの大きさは地球人の手のひらサイズです。それが800万個以上、日本列島周辺の岩盤深くに散らばっています。この広大な範囲を、地中深くまで届く停止信号を送ったところで、どれ程が反応するか？信号を免(まぬが)れたナノマシーンは他の機能停止したナノマシーンに再起動を促す設定をしています。また、広域にわたる強さを持つジャミングを使用すると、生物に悪影響が出る可能性が高くなります。』

ゼイエスが心なしか、申し訳なきような顔をした。

極東アメリカ合衆国の学者が質問した。

「現在、この第4惑星は日本列島が転移した事に劇的な変化を遂げた」と聞いています。どの程度まで環境変化が起きたのでしょうか？」

『日本列島全体という巨大質量の物体が強力な電磁フィールドと重力波振動を伴って火星の大地に出現した事により、火星のマグマが再び活性化し、僅か数カ月でこのマルスは呼吸可能な大気圏と微生物を多く含む最初の海洋を擁するに至りました。』

惑星大気圏を漂っていた大量の火山灰は、我々が惑星規模の電磁フィールドを、数度に渡り多重展開させて海中に溶かし込みました。火山灰の成分が海中で化学反応を起こし、有機質の成分が発生しました。

ゆえに、おそらく、地球人類の生存に耐えうる環境かと思われれます。もちろん、古来（こらい）よりマルスに棲息する生物が人類に危害を加える可能性もあります。火星の生態系は地球の其よりも、次元を超えたレベルで過酷ですので。安全を保する為に充分な調査が必要です。』

ゼイエスが答えると、会場が騒然となった。
火星に新天地が出来るかもしれない。

この情報は特に極東米露の関係者を歓喜させた。

ユーロピアの宇宙考古学者が質問した。

「我々より以前の古代地球文明はどこまで発展出来たのでしょうか？」

『イワフネー―これは私達の第3惑星調査隊長ですが、彼らの記録によると―具体的な名前は今は省きますが、一番発展した文明は、地球衛星軌道まで進出出来ました。』

残念ながら地球人同士の争いにより、繁栄していた大地ごと、跡形も無く消え去りましたが。

いずれの歴代地球文明は、我々マルス人の発展スピードに比べ10倍は早く発展していました。

気候や地殻を操り、マグマのエネルギーを転換させてレーザーや荷電粒子、特定の離れた場所の地殻を変動させる、そんなところですね。』ゼイエスが答えた。

『しかし、歴代人類は過ぎた力を手に入れると直ぐに行使したがりま
した。

原理の研究もせずに、物事の理も理解しないままにです。

我々はまず、力について研究し、原理、理を探します。それを理解
してはじめて、応用に進むのです。もちろん、長い年月がかかります。
ですが我々は幸い寿命が1000万歳あります。試行錯誤した研究
の繰り返しで、やっとここまでたどり着きました。』

ゼイエスが言った。

ユーロピア宇宙機関の職員が質問した。

「太陽系には他にも知的生命体は居るのでしょうか？」

『厳密に言えば、“生物”は各惑星に居ます。しかし、我々の様にコン
タクトして会話が出来る存在には“今のところ”遭遇していません
ね。』ゼイエスが答えた。

「太陽系の外にはゼイエスさんのような文明は幾つも有るのでし
ょうか？」

『私達の母星があるプレアデス星団にはありません。宇宙は本当に広
大で私達が知り得た範囲はまだマルスからプレアデス星団までのほ
んの僅かではありません。』

参加者は真剣に、ゼイエスの言葉の意味する事まで捉えようと、耳
を傾けていた。

科学技術館での質疑応答を終えたゼイエスは、厳重な警護のもと見
学の為に新幹線に乗り、グランクラスの特注座席で快適な地上走行を
満喫した。

ゼイエスは、窓に顔をピタリとくっつけて外の景色を夢中で見てい
た。JRの車掌や警護のSPは、そんな彼を微笑ましく見ていた。

やがて満足したゼイエスは特注した座席に座り、背もたれに身体を
預けると、満足そうに目を閉じて快適な旅行を楽しんだ。

同席した案内役のJRの技術系社員達とも気さくに話し合った。

「ほう、リニアが出来るのですか。」

「はい、今は経済統制で物資が足りないので開業が少し遅れそうです

がね。」社員が苦笑した。

「では、トンネル部分や、海中はハイパールのチューブのチューブを応用してはいかがでしょうか？ 少なくともコンクリート等には必要ありません。強化合成樹脂と硝子の化合物でチューブを作れませんかねえ。」ゼイエスが呟く。向かいで聞いていた数名の社員は慌ててメモを取りはじめた。

「チューブの中は超電導を発生させるレールが敷けませんけど、ハイパールの原理で物体を移動させる事は出来ますね。問題は、レールの上に再びリニアが接続出来るかなんですよね。このホームステイ中に終われば良いのですが。」

この発言を聞いた技術系社員は大喜びしたが、反対側の座席に座っていた各JRの社長は困惑してヒソヒソと打ち合わせを始めた。

ゼイエスの独り言は直ちに首相官邸に届けられ、澁澤総理と経産大臣、岩崎官房長官もノリノリで快諾した。

経産省から連絡を受けたJR各社長達は歓喜し、本気で実用実験場の手配を行った。

ゼイエスのホームステイ先は特別編成の列車を、東京く京都く名古屋く長野く金沢く秋田く函館く仙台く東京、と山手線のように周回運行させて車輛はJR各社が用意した豪華寝台列車を日替りで利用する事になった。

ゼイエスは、『リニアハイパールハイブリッド新幹線』の検証を各駅に隣接して作られた臨時研究所で行い、車輛の基本構造、材質のアイデアを技術系社員に提供し、社員はデザイナーや車両製作会社と打ち合わせを重ねて車輛案をゼイエスに確認してもらう手順を確立させた。信号系統、保守管理系統、総合管制システム等で画期的なアイデアがゼイエス、JR各社連合から生まれることになる。

ゼイエスは鉄道をこよなく愛するマルス人として、日本鉄道史に名前を残す事になる。

思いつきで発案したりニアハイパールハイブリッド新幹線は翌年7月に開業した。

東京駅で行われたテープカット式典にゼイエスが招待されたのは

言うまでもない。

テープカットを行ったゼイエスは満面まんめんの笑みだったという。

ちなみにゼイエスがホームステイ期間中に周回した路線は、『科学の路みち』と呼ばれ、鉄道ファンはもとより、理系学生の出世コースとして、タイアップした旅行会社が『聖地巡礼』と銘打めいったツアーが組まれるなど、新たな観光資源の発掘に繋つながった。

ホームステイ（大月、西野、春日、東山）

地球暦2019年8月30日午前6時【第4惑星マルス アルテミア大陸 シドニア地区 旧マルスアカデミー本部】

前日の夜に尖山から土星円盤型大気圏シャトルでシドニア入りした大月達は、その夜は円盤に泊まり、朝、アカデミー本部を訪問した。アカデミー本部の壮麗建築は圧巻なのだが、一番驚いたのは、宇宙服無しで外気にあたることだった。空も青く、アカデミー本部の最上階からは海が見えた。

まるで、移民船で入植したみたいだ。経験無いけどな、大月はそう思った。

「では、皆さん、火星の大地をご案内しますね。」イワフネがホームステイのお返しとばかりに今回はエスコート役である。

地上スレスレを飛ぶアダムスキー型シャトルはシドニア地区の壮麗な建築群を抜けると、赤い大地が一面に広がる光景が目に入った。「現在の空気濃度は地球とほぼ同じです。酸素が少し多いですね。」イワフネが話す。

「あっーイワフネさんあそこに何か居ますよ！」春日が嬉しそうに叫ぶ。春日ストレス溜まつてるなあ、と大月は思った。

春日が指差した方向の大岩の上に地球のイグアナに似た灰色の鱗を持つ体長1m程の生物が日向ぼっこするようにじっと座っていた。「あれは、火星に昔から居たヒュドランの進化種ですね。地上の昆虫を食べます。こんな荒れ地ですが、ワーム（ミミズ）やサソリモドキが居ますから餌には事欠きません。」イワフネが説明した。

さらにアルテミア大陸を南下すると赤い大砂漠に遭遇した。「ここはアマゾニス平原です。酸化鉄を含む砂と塵が大砂漠を形成しています。」

イワフネが説明している時に、シャトルの航法システムがアラートを鳴らした。

イワフネはアダムスキー型シャトルを急いで100m程急上昇させた。

大月達は、上昇するGがかかって皆、床に蛙^{かえる}みたいにはばりつけられていた。

上昇が止み、下を見ると、突然直下の地面下が幅5mわたり、陥没した。同時に”陥没した穴”が”上昇”して此方^{こちら}に真つ直ぐ向かってきたが、30m程で止まった。

よく見ると口を開けたピンク色の肌を持つ巨大ワームがイワフネのシャトルを呑み込もうとしていたのだ。

全長は地上部分だけでも30mは超えており、大月達の想像を絶していた。

暫くすると、次々と巨大ワームが地中から現れ即席の巨大ビルディングの群れが、ゆらゆらと恨めしげに大月達に向けて口を開けていた。

やがて諦めたワーム達は、出てきたときと同じようにあつという間に赤い砂の海に埋もれて消えた。

「これは、マルス生物の頂点にいる巨大ワームです。この砂漠に多く生息します。最近は何でも短時間に入れるようです。キャンピングやピクニックの時は気をつけて下さいね。」

イワフネが説明と言うか、注意を促した。

「これは、気を付けてなんとかなるレベルを越えていると思う。」

東山が真つ青な顔で言った。他の3人も首をコクコクさせていた。

その後は、しばらく高度100mを保ちながら、アマゾニス平原を抜けてシレーヌス海、マリネリス海溝を観光した。

地球と同じ青い海だが、海溝部分を除くと、やや深みに欠けた、明るい水色が多かった。

「海が形成されたのは、日本列島が転移してから2ヶ月目です。今は、海中の有機物からバクテリアやプランクトンが発生しています。魚類の誕生はまだまだ先でしょう。」イワフネがコメントした。

「日本近海の魚は火星の海に適応出来ますかね？」春日が質問した。

「成分的には地球の海洋と似ています。基本的には適応可能でしょう。ただ、その魚が食べる餌はまだ誕生していないでしょうね。」イワフネが答えた。

「じゃあ、生け簀すで区切きって養殖すればいいじゃないかあ？」西野が質問した。

「餌を我々が与える方式ならば可能でしょう。海中のワームから魚を護まもる対策が必要ですが。」イワフネが肩を竦すくめて答えた。

「荒地にも地球の植物が根付く可能性も有りますね。」大月が言った。

「荒地でも鉄分を好む作物に良いでしょう。」

イワフネが応えた。

海を渡り、南半球のヘラス盆地は、赤い砂漠の大陸だった。さぞかしミミズ釣りにはもってこいだろうな、と大月達は早くヘラス盆地出たいと思った。

ひたすら”草原のように”延々と地中から巨体をくねらせて口を開ける巨大ワーム群を飛び越えて、大月達は、シドニア地区に帰還した。

10日程は、何故か全員が野菜サンドを食べるのだった。

こうして、ホームステイが終了したが、日本国ではとある政治的決断がされようとしていた。

修羅（しゅら）の星

ガルディア暦2年（西暦2019年）9月1日

『地球衛星軌道上 旧国際宇宙ステーション 現『宇宙国家アース・ガルディア』コア・サテライト』

地球は青かった、と人類初の宇宙飛行士ガガーリンは言っていたが、今の衛星軌道（えいせいきどう）から見る地球は灰色と青と赤茶色（あかちやいろ）が混在（こんざい）したまだらの惑星になっていた。

そんな地球を見やりながら、

「今日も地球は怒（いか）り狂っているなあ。」渋（しぶ）い顔でソーンダイク代議員が、言った。

「今日は何処（どこ）が怒り心頭（しんとう）なんだい？」アレクセイエフ代議員が訊（き）いた。

「昨日はイエローストーン（ワイオミング州）とセントヘレンズ（ワシントン州）が大噴火したのにまた（合衆国（ステイツ）だよっ！内陸部（ないりくぶ）は壊滅的（かいめつてき）損害だ。小麦畑が灰に覆（おお）われたよ。そして、つい先程（さきほど）空震（くうしん）をキャッチした。震源地はハワイ島だ！くそつたれ！」

「マウナケアの山頂が半分吹き飛ぶおまけ付きの大爆発だ。ワイキキはじめ全島が火砕流（かさいりゅう）と溶岩流に呑（の）み込まれた。マウイ島も巻き添（ぞ）えだ。」

「真珠湾基地（パールハーバー）も全滅したようだ。」

ソーンダイクはむっつりした顔で言った。

「ユーラシアはカムチャツカ半島から白頭山（北朝鮮・中国）、ピナトゥボ（フィリピン）、アグン（バリ島）、エルブルス（ロシア）、ベスヴィオ（イタリア）まで絶賛（ぜっさん）大噴火祭りだよ。」

この景色（けしき）もそのうち噴煙（ふんえん）で見られなくなるな。アレクセイエフが幾筋（いくすじ）もの赤い川で割れたアララト山（トルコ・ロシア南部）を含む故郷、旧ロシアを眺（なが）めながら言った。

「どれくらいが宇宙に来れるかな？」ソーンダイクが訊いた。

「NASA（ナサ）、ESA（イーエスエー）、ボストーク、インド、中国が秘密基地はもとより、民間企業も徴発（ちようはつ）して形振（なりふ）り構わずに打ち上げている。」

アレクセイエフが答えた。

二人の眼下（がんか）で一筋のオレンジ色の光が東アジアから立ち昇ったが、やがて失速して大気圏上層部で赤く輝きながら分解して流れ星になって落下していった。

「失敗しているものも多いがね。」

アレクセイエフが嘆息（たんそく）して言った。

「おそらくは数千規模になるだろう。ドッキングした各船体と、廃棄された研究ステーション群も活用して凌（しの）ぐしかないな。」

アレクセイエフが呟（つぶや）いた。

「後は、海上のメガフロートを方舟（はこぶね）に見立（みた）てて乗りきるしかないか。」

ソーンダイクが言った。

「こんな状態で『宇宙国家』なんて酷（ひど）いジョークだよ。」ソーンダイクが自嘲（じちよう）した。

「そんなことはないよ。我々を頼りに人々が結集するんだ。国連以上にね。総代表もそれをお望みだ。」

アレクセイエフが言った。

宇宙国家『アース・ガルディア』は、2年前にロシアの軍需産業（ぐんじゆさんぎよう）を営（いとな）む実業家が、米露（べいろ）の科学者と共に建国した人類初の宇宙国家である。

宇宙の脅威（きようい）から地球を守る目的で建国された。

ネットで登録した15万人の国民は大部分が未（いま）だ地上にいるが、宇宙の国家本部「コア・サテライト（旧 国際宇宙ステーション）」から生き残りに必要な情報を随時（ずいじ）発信（はっしん）して、集団としての纏（まと）まりを維持していた。

「ところでアレク、君はこの星が何処（どこ）だかわかるかい？」ソーンダイクがかつて”赤かった星”の映像を拡大して見せる。

「なんだい？海があるし、大気も有るな。太陽系にそんな星が有ったか!？」アレクセイエフが驚愕（きょうわく）した。

「そうだよね、あれは火星なんだ。この数カ月で環境が激変した様だ。地球の異変は火星にも影響を及ぼしているのかな？」ソーンダイクが応えた。

「すぐには行けない距離にあるのがもどかしい。まともな調査手段も今は無いしな。次の大接近時に探査したいものだ。」アレクセイエフが溜め息をついた。

「でも、地球が修羅（しゆら）の星と化して居住不可能になりつつある現在、人類にとっての希望だね。ところで、この島は何処（どこ）かで視た記憶が有るのだが。」アレクセイエフが映像を指差（ゆびさ）していた。

拡大された「青い火星の」中緯度（ちゆういど）に、『日本列島』が、火星の海のただ中で存在していた。周囲は赤黒い線で囲（かこ）われているが。

「冗談（じゆたん）だろ？これは、」ソーンダイクが絶句（ぜつく）した。「直（す）ぐに総代表へ連絡だ!!」

—————

同日アメリカ東部時間午後4時「フロリダ沖のカリブ海 アメリカ合衆国海軍 第7艦隊所属 ロスアンゼルス型原子力潜水艦「ルイビル」

「超長波通信、他の周波数でも試しましたがやはりパールハーバー、サンディエゴ、ノーフォーク基地の応答有りません、上空の電離層が不安定でまともな通信が受信できません」

発令所で通信担当士官が艦長に報告した。

「付近の友軍基地との交信は可能か？」

「プエルトリコ州兵基地が近いのですが、応答ありません。」

「艦長！海底から救難信号をキャッチ！友軍です」

「コールサインは？」

「・・・第3艦隊旗艦 空母「アメリカ」です。自動発信モードです。海底800m」

艦長はため息をついた。

恐らくカリブ海で起きた巨大地震の天津波で転覆したのだろうか？

プエルトリコ基地が応答しないのも津波で基地が壊滅したのだろうと推測できた。

「付近の状況を確認する。操舵員、進路をフロリダ半島沖1キロ、ケープカナベラル基地付近にまで寄せてみる」

「アイアイサー！」

2時間後、夕暮れのフロリダ半島沖に浮上した潜水艦のハッチを開けて久しぶりの空気を吸った艦長と副長はすぐに顔をしかめた。

陸地側からの風が死臭に満ちていたからである。

「・・・沿岸部の都市はツナミで軒並み壊滅しているようだな」

双眼鏡で陸地の海岸沿いを一通り観測した艦長が言った。

「隣の副長は背中が無線機で無線交信を試みていた」

「誰かいますか？誰かいますか？こちらルイビル。誰か応答してください！」

「・・・ルイビル。こちらイギリス海軍戦略ミサイル潜水艦「ヴェンジャンス」・・・貴官はどこにいる？」

驚いたことにイギリスの戦略ミサイル潜水艦がコンタクトしてきた。

艦長は驚いたが副長からマイクを受け取って交信を試みる。

「こちらはフロリダ半島沖だ。合衆国海軍第7艦隊所属潜水艦「ルイビル」、艦長のサザーランド大佐だ」

「サー、艦長。私は「ヴェンジェンス」艦長のグリナート大佐です。我々は現在ハバナ沖3キロの海上に浮上している。付近に友軍も敵軍も居ない。ハバナはツナミで壊滅した模様。」

「こちらも付近に応答できる者が誰もいないようだ。先程友軍の空母アメリカが沈没しているのを確認した」

「お悔やみを、大佐」

「感謝する。グリナート艦長」

「貴官はこれからどうする？」

「司令部からの最後の通信は「別命あるまで安全な海域で待機せよ」だった。グアムから西海岸寄りに南下して喜望峰を回ってここまで来たが、新たな指令はまだ来ない」

「我々が知る限りでは、貴国の指揮系統は潰滅状態だ。そもそも国家として機能しているかも怪しい状態だ」

「うれしくないジョークだな」

「ああ。ジョークでないところがタチの悪いところだ。こちらも同じ状況だね。グラスゴーからの通信が途絶して3日になる。通信衛星の故障か、電離層の状態が劣悪なのか、グラスゴー海軍基地自体が海の底かはわからんがね」

「そうですか・・・地上の放送はどこか聴いていますか?」

「BBDの海外放送は先週から途絶えたままだよ。お国の放送局はVOA（ヴォイス・オブ・アメリカ）アメリカ政府の対外宣伝放送）がたまに傍受（ぼうじゅ）出来るくらいだ。ラジオのみだがね。2日前に傍受したところだと現在のお国の最高司令官はバンデンバーグ基地に避難している空軍長官らしい。ちなみに我が国の政府は軍の指揮権をNATOに移譲したようだ。だが、ブリュッセルとも通信が取れない」

「そうですか・・・情報に感謝します。本艦はバンデンバーグ基地との連絡を試みます」

「サザーランド艦長の幸運を祈る」

「貴官はどうされるのか?」

「取りあえずグラスゴーに戻るよ。どのような状態かわからんが本国の近くに戻れば何かしら情報が得られるかもしれない」

「グリナート大佐の幸運を祈ります」

「感謝する。交信終わり」

サザーランドは副長の背中の無線機にマイクを戻すと、

「副長、取りあえずバンデンバーグに向かおう」

「アイ、艦長」

1週間後、米海軍潜水艦「ルイビル」はバンデンバーグ基地との交信に成功し、生き残っていた補給艦から糧食などの補給を受けること

が出来た。

一方のイギリス海軍戦略ミサイル原潜「ヴェンジェンス」はグラスゴー基地近くまで戻ることになったが、海軍基地自体が海面上昇により水没しており、グリナート艦長は無線でグラスゴー近郊で避難民の保護にあたった陸軍部隊とコンタクトを取りながら、グラスゴー基地周辺に集まっていた避難民の支援にあたった。

ヴェンジェンスの原子炉から得られる電力を陸上の友軍工兵に有線で送電し、避難民キャンプの開設を支援したのである。

火星編 選択 政治家の選択

地球暦2019年9月5日午後1時〔東京都千代田区永田町 国会
議事堂 応接室〕

二人の与野党議員がすれ違う振りをしてふらりと入った応接室で
”雑談”をしていた。

番記者で見つけた者は居なかった。

「なあ蓮さん。今、解散総選挙やったらどうするね？」

与党国対委員長の春日陽介議員が訊いた。

「春さん。経済統制や報道規制がされている中で、野党の立場なんて
吹けば飛んでしまっただろうさ。」

野党国対委員長の太塚蓮司が答えた。

「蓮さん。総理はねえ、とある事柄について国民に信を問いたいご
意向でね。まあ、信を問うなら総選挙、そういうことだわさ。」

「どの様な内容かは今は言えないらしい。だが確実に国論を二分する
らしいんだとさ。」

どう政治的な選択肢を国民に示すか春日は古くからの同志に相談
したので。

「うくん、正直贅沢な悩みだべ春さんよお。この危機的状況で堅実且
つ大胆な国家運営は澁ちゃんの十八番だしなあ。とにかく野党は敵
(かな) いっこない。時間と金の無駄になるね。私は負ける戦はしな
い性格だべ。」

太塚が応えた。そして、

「だからなあ… 国民投票にしたらどうよ？」

太塚が提案した。

春日は黙考した。

ふと顔を上げると既に太塚の姿は無かった。

同日午後4時〔首相官邸 総理大臣執務室〕

澁澤総理が春日国対委員長から報告を受けていた。

「そうか、野党は牙を抜かれた狼では戦えんか。」澁澤が言った。

「確かに国民投票がシンプルですなあ。」岩崎が言った。

「万一の場合、このプランでいこう。」澁澤が決断して指示を行った。

同日午後5時【同 執務室】

通信モニターの向こうに居るのは、シドニア地区で研究していたアマトハ、ゼイエスである。

澁澤から相談したい事があると言って急遽連絡したのだ。

「アマトハさん、ゼイエスさん、お忙しい所申し訳ありません。」澁澤がまず二人に詫びた。

「実は先日、この日本列島を覆う壁が一部解除と聞きまして、幾つかお聞きしたい事があつたのです。」澁澤が言った。

「澁澤さん、ご自由にご質問なさってください。私達の分かる範囲でお答えしましょう。」アマトハが言った。

「まず、先日内閣官房の東山達がマルス各地をイワフネさんの案内で廻った報告を受けました。その中で、巨大ワーム？と形容するのでしょうか、地球とはかけ離れた生態系の数々が存在し、東山達はかなり驚いたそうです。」

『壁』の解除によってそれらのマルス生物が、日本列島に大挙して侵入する事は有りますか？」澁澤が訊いた。

「ありません。」ゼイエスが即答した。

「日本列島を覆う壁の機能は一部解除されるだけで、マルス生物が日本列島に殺到するとおそらく排除するでしょう。壁の機能は内部の生態系を維持、保護する事が最優先されています。ただ、生態系を侵さないと判断されるレベルの生物の侵入はあるかも知れません。」

ゼイエスが説明した。

「なるほど、それを聞いて安心しました。それと、我が国ではありませんが、幾つかの国がマルス大地に進出を考えていますが、我々人類がマルス大地の生態系を、おそらく、ワームを始めとする人類に危害を加える可能性が有る生物の討伐を行ったとしたら、マルス人してどう思われますか？」澁澤が訊いた。

「現在のマルス大地の生態系は、かつて我々が住んでいた頃のもの」と

は全く違います。惑星其々の環境に適応した種が生き残るのは、当然の結果です。これは、地球の恐竜時代と現在の日本列島の生態系が違うのと同じだと私達は思います。」

「ですから、大気と海洋が再生した『今の環境』で地球の皆さんが火星生物を討伐しても惑星レベルでの災厄にはならないと思います。もつとも、核兵器や二酸化炭素を排出する機械を多用すると徐々に惑星レベルでの変動に繋がると思われますが。」 濫澤の懸念を打ち消しながらも、人類の過剰な行動にアマトハが釘を注した。

濫澤は大きく頷いて同意した。

同9月6日午前7時【東京都千代田区 永田町 首相官邸 総理大臣会見】

その日、前日から政府からの重大発表が有るので、自宅で待機するようにとのアナウンスが告知されたため、国民は出勤、通学時間を遅らせて、政府発表を待っていた。

「これから発表する内容は、極東アメリカ合衆国、極東ロシア連邦、英国連邦極東、ユーロピア自治区、台湾自治区で同時に発表されています。」

濫澤首相が前置きした。

「我が国は去る6月25日、後楽園ドームシティに於いて、マルス人を代表するマルスアカデミーと文化交流・段階的技術承継に関する共同研究について合意し、協定を締結いたしました。」

「現在我が国とマルス文明との間で膨大な量の基本的情報交換を行っておりませんが、その中でこの度、隔絶空間の外、火星の大地に空気と海が存在する情報が発見され、マルスアカデミー協力の下、解析を行った結果、地球とほぼ同じ成分の空気と原初の状態ですが海が存在が確認されました。」

記者席からどよめきが起きた。

「現在、我々はごく限られた手段でしか隔絶空間の外に出ることが出来ません。しかし、マルス側によると近日中に、電磁フィールドの一部分が一時的に、解除される可能性があるとの事です。既に、大気圏上層部の電離層が地球に存在した時と同レベルまで安定し始めてい

ます。この事は既に各国首脳へマルスアカデミーが通知しております。」

「以上の状況下で、積極的且つ即事の技術承継を表明している極東アメリカ合衆国、極東ロシア連邦から、火星大地に進出可能となった場合、我が国を出て火星大地に移転するとの連絡が先日ありました。我が国としては引き続き各国の支援を行います。火星進出については、現地の生態系を調査する探索隊を派遣する予定です。火星大地の生物が我が国の国民に安全であるか確認出来るまでは移転は致しません。発表は以上です。」

澁澤に報道陣からの質問が殺到した。

澁澤の会見終了後、野党は新宿駅前街頭演説を繰り広げた。

「今この瞬間、我が国は新たな希望の大地である、火星開拓の流れから取り残されようとしています。」

「開拓競争からも脱落し、及び腰な技術承継しか考えていない澁澤政権は、科学技術立国としての名声が地に落ちるのを、黙って見過ごさうとしているのです！」女性野党議員が声を張り上げた。

通信制限が緩和された為、久々に活き活きとした偏向報道を行うとあるテレビチャンネルを視ながら、

「彼女、自分で土木建築の公共事業や、科学技術振興予算を仕分けした実績”が有るのに、よくあんなことが言えたものですね。」

岩崎官房長官が呆れた声で言った。

「我々はこの耳でマルス人の歴代人類への懸念を聞いている。それを素直に訴えようじゃないか。」

澁澤総理が言った。

夕方、澁澤総理は秋葉原で恒例の街頭演説を行い、昼間の野党演説に対する強烈な皮肉や率直な問い掛けを国民に行うのだった。

各国の選択

2019年9月10日【地球 中東 イスラエル共和国 暫定首都
テルアビブ 首相官邸】

「首相、ペルシヤ湾岸地帯を強行偵察してきた特殊部隊が帰還しました。未帰還者ありません」

国防大臣がニタニエフ首相に報告した。

「よくやってくれた。隊員たちにはしばらく休暇を与えてくれたまえ。」

ニタニエフがため息をつきながら国防大臣に応えた。

「それで大臣。湾岸はどうだった？」

「一言で言えば原始時代に退行したようです」

「イランとサウジアラビアが核でも撃ちあつたのか？」

「まさか。そうなれば我が国も今頃石ころだらけの荒野になっていません」

「では、どういう意味かね？」

「大変動による海面上昇と巨大地震による津波で湾岸地域の原油採掘施設や石油・天然ガスプラントがことごとく水没しました。もちろん大量の原油流出による海洋汚染がペルシヤ湾を死の海にしています」

ニタニエフは息をのんだ。国防大臣の報告が続く。

「そして、この自然災害による社会的な大混乱で湾岸地区の政府組織は自然消滅していたそうです」

「人々はどうしたのだ？」

「わが軍のテヘラン郊外核施設に撃ち込んだ中性子爆弾の影響（余波）でテヘランは市街の半分が被害を受け、大混乱の末にイラン政府が消滅したために無政府状態の無法地帯と化しています。他の湾岸地帯都市はイラン同様に無法者の巣窟（そうくつ）になっています。都市部の無法状態を嫌った市民は郊外の砂漠にキャンプを作っています」
「その他は部族単位で安全地帯を求めて各地を放浪しているようです」

「火山灰の影響が深刻になっているので、粗末なボートで海路インド

洋に出てソマリア海岸伝いに南下するか、ベンガル湾方面に向かっているようです」

「陸路では自然と昔ながらのキャラバンで徒歩と僅かな車両でエジプト方面、トルコ南部、黒海方面を目指していますね。ただ、トルコ南部には活火山が誕生しておりそこで大半が行き倒れているようです」

ニタニエフが顔をしかめた。

「シリアやイラク方面は？」

「そちらも無政府状態です。ヨルダンは先週食糧不足で暴動が発生、鎮圧に失敗して政府が崩壊しました。大量の難民が我が国国境地帯か、ゴラン高原に足を踏み入れて多くの避難民が地雷で命を落としています」

「我が国の東側に国は無いのか」

「ありません」

「地中海方面はどうだ？」

「ハイファの元海軍基地から可能な限りの資材を撤収させましたので、新たな海軍拠点を建設中です。エジプトから西も政府は崩壊、トルコは南部の火山噴火と地震で各地が寸断されており、アンカラも大きな被害を受けています。アメリカの核攻撃で壊滅したクリミヤ半島からの放射能汚染雲が南下して黒海沿岸では被ばく患者が多数発生しています。トルコ政府は地方での統治能力を失っており、首都アンカラとイスタンブールしか掌握していないといっても過言ではありません」

「アメリカの動きは？」

「ペルシャ湾の第7艦隊は第二次、第五次インド洋大津波で壊滅、地中海の第5艦隊はエーゲ海での海底火山の群発噴火とエトナ山の噴火でギリシア海軍の基地に避難したまま身動きが取れないようです」

「衛星通信は？」

「依然不安定です。電離層がやられていますね。断片的ですが、アメリカ本国は政府が機能停止しました。一部の軍部隊は、「アース・ガルディア」と名乗る宇宙国家に参加しているようです」

「なんだ？そのペテンみたいな名前は？」

「2年前にロシアの実業家が起こした国です。ISSを乗っ取り、世界各地に同調者を増やしているようです」

「我々はどうする?」

「ロシア人は信用できません。歴史上明らかです。この地で生き延びるしか無いでしょう。世界の天変地異は収まっています」

「物資の備蓄が心もとないな」

「どこも一緒ですよ」

「なんの慰めにもならん」

「まったくです」

国防大臣が退室した後、執務室にモサド長官が入ってきた。

「アース・ガルディアはどうだ?」

「国民として潜入した諜報員によりますと主流派はロシア人ですが、コロニー建設やシャトル運用では多くの米国人が参加しており、ロシア人に対する反感から、間もなく米国人派閥も形成されるだろうとの事です」

「引き続き頼む」

「わかりました」

「それと・・・一つ未確認情報ですが・・・」

「何だね?」

「火星が変化したようです。最新のハッブル望遠鏡を一時的にハッキングしてデータを収集したものの中に火星に空気や水があるらしい映像がありました」

モサド長官が手にしていた厚手の封筒から一枚の写真をニタニエフに手渡した。

「・・・これは・・・日本じゃないか!?!」

「アース・ガルディアではその存在を確認して来年にコンタクトを試みるようです」

「この情報は無期限に極秘扱いで頼む。わが国独自にコンタクトする方法はあるかね?」

「現状では火星が遠すぎてコンタクトできません。地上からでは電離層や磁場が不安定ですから」

「アース・ガルディアが火星にいる日本人とコンタクト出来れば活路があるやも知れんな」

「その時は米国人派閥を利用するのが手っ取り早いでしょう」

モサド長官が退出した後、ニタニエフは火山灰でいつもより赤く見える夕日をじつと見つめていた。

「火星の日本人か・・・」

ニタニエフは頭を振って不確かな妄想を振り払うと、国民への配給体制見直しに没頭するのだった。

【火星アルテミア大陸 シドニア地区 ナザレ 旧マルスアカデミー本部】

即時技術承継を望んだ極東米露の科学者達がゼイエスからデータの引き継ぎを受けていた。

「これが電磁カタパルトの設計図ですか」

「はい。具体的効果や取り扱い説明はデータのサブウィンドウを開いてご参照ください。次に光速宇宙航行船の設計図ですが——」

次々と説明を続けるゼイエスに極東アメリカの科学者が声をかける、

「あの、マスターゼイエス。データで頂いたこれら技術の作用原理についてご説明が無いのですが？」

ゼイエスはきよとんと首をかしげて、

「何か問題でも？ちゃんと『技術の引き渡し』は終了しました。そのデータ通りに設計、操作すれば必要な技術が作用しますが？」

「あなた方は理念、理論よりもその結論を先に求めました。即時技術承継とはそういうものではないでしょうか？」

ゼイエスが淡々と言った。

極東米露の科学者達は反論出来なかった。

地球暦2019年9月10日午前6時30分【神奈川県横浜市

『イワフネハウス』

『——ええ、ですから人工知能だからと言って勝手に進化して人類を

滅ぼすとか、人工知能だけの機械帝国を創（つく）るとか、私には想像できません。』

マスター”ゼイ”が肩を竦（すく）めた。

——しかし、多くの地球人科学者がそれを理由に人工知能研究の禁止を政府に求めています。

『——そもそも、人工知能を作る段階で与えた情報のバランスが偏（かたよ）っていたからその結果として、極端な解（かい）を出してしまいうのではないでしょうか？ 人類を助ける役割を認識する情報を最初に与えれば防（ふせ）げる事だと思っのです。ですから、ある日突然、人工知能が人類を滅ぼす選択を出す事自体、ナンセンスです。人類が滅んだら、人工知能は”誰を”助けるのでしょうか？

一つ一つの経験や、実例の積み重ねで人工知能の判断能力が産み出されるならば、その内容を人類が慎重に”バランスを取って”インプットすれば、問題は少なくなる、と私は思っのです。』

——マスターゼイありがとうございました。

明日は、ピタゴラマスターといっしよ、です。

提供は内閣府（ないかくふ）がお送りしました——

「何か最近ゼイエスさん、テレビでよく見ますねー。」味噌汁を啜（す）りながら西野が言う。

「ゼイエスさん、何で名前が少し違っのですかね？ 芸名ですか？」春日が素（す）で突っ込む。

「ゼイエスと言う名前は、敬虔（けいけん）なクリスチャンが少し考えたら分かってしまう絶体神（ぜつたいしん）の名前だぞ。不味（まず）い事態を起こしかねないんだよ。生（い）き神（かみ）扱（あつか）いならまだ良いが、唯一神（ゆいいつしん）を冒瀆（ぼうとく）する異端（いたん）扱いされたら目もあてられないよ。」

最近めっぽう胃腸（いちよう）が弱くなっった東山が大根おろし多めのご飯を食べながら言っった。

ゼイエスはそんな話題を聞いているのかいないのか、無心（むしん）にアジの開（ひら）きと格闘（かくとう）していた。

「好奇心の塊（かたまり）な彼からすると、いろんな著名人（ちよめい

じん)や知識人に出逢(であ)うと、インスピレーションが湧(わ)くらしいのです。」

アマトハが鮭(さけ)のムニエルをフォークで食べながら言っていた。

「アマトハさんは政治家さんとの対談や討論(とうろん)番組に出る機会が多いですねえ。」西野が言った。

「地球人類の政治信念、宗教、実に興味深いですからねえ。討論はそういった素(す)の感情で話が聞ける機会ですからやめられません。」アマトハが眼を輝かせて答えた。

この人はこの人でアレだなあ。と西野は思った。

「うーん。やっぱりあれかな。」大月がボソツと言った。

「これは来るべき大きな政治イベント前の慣(な)らし、でしょう。」

それを聞いた東山は、ばつが悪そうに俯(うつむ)いた。

「いやいや、東山さんは気にしないで。おそらく、国論(こくろん)が二分(にふをん)される話題の前に、双方が理論的に考えて選択をしてもらう仕込(しこ)みをしていると思っただけですよ。」大月が言った。

西野はそんな大月を見て、いろいろ考えている人だなあ、とあらためて大月に惚(ほ)れ直すのだった。

テレビを視(み)ながら朝食のツナサラダを食べる大月達とイワフネ、ゼイエス、アマトハだった。

なんて微妙な“家族団らん”?と大月は思った。

ホームステイ期間が終了して、アマトハ、ゼイエスは尖山(とがりやま)基地(きち)とシドニア地区の旧アカデミー本部で研究の日々を送っているが、イワフネだけは、「ここで働かせて下さい!」と角紅サラリーマンホームステイ延長(えんちよう)を希望して周囲を驚かせた。

イワフネは熱心に働く人類(にほんじん)の生活に、何か思う所があるらしく、仕事帰りのちよつとした一杯の誘いも、「これもフィールドワークです。」と言って喜んで参加(最近(さいじん)はアマトハ、ゼイエスもうさ晴(ば)らしで乱入する為、『イワフネハウス』開催が多い。)していたが、フィールドワークとは何か意味が違う気がする。

イワフネさんもストレス溜まっているのかなあ。と大月は秘（ひそ）かに思っていたりする。

しかしながら、社長や濫澤総理が面白（おもしろ）がって「やらせてみる。」なんて言うもんだから、こうしてイワフネだけは、ホームステイ絶賛続行中である。

取引先の反応も良く、「トカゲの兄ちゃんに宜（よろ）しくな。」等と人気者だ。

もつとも、朝の東海道線では”恒例（こうれい）のビッグゲスト”として大いに10号車の通勤客とSPから迷惑がられていたが。

同時刻【那覇特別行政区（旧沖縄県庁） 大統領執務室】

「プランとしては二つあります。」海兵隊司令官のジョーンズ中將が説明していた。

「まず、火星アルテミユア大陸の海岸付近に直接（ちよくせつ）入植拠点（にゆうしよくきよてん）を設（もう）ける。次に、メガフロートで火星海洋上に入植拠点を設け、陸地に調査隊を派遣する。の2案になります。」

「なぜ、わざわざ海上なのかね？例の巨大ワームは砂地（すなち）地下（ちか）に地雷源（じらいげん）を何層（なんそう）か重（かさ）ねれば撃退（げきたい）出来ないのかな？」

ミツチエル大統領が言った。

「大統領閣下、地雷敷設（じらいふせつ）の手間（てま）を考えるならば、海上のメガフロート案がコスト的に容易（ようい）でしょう。」ジョーンズ中將が答えた。

「メガフロートを作る膨大（ぼうだい）な鉄鉱石（てっこうせき）は流石（さすが）に日本には頼めんど。ただでさえ、物資が不足しているからなあ。」

ミツチエルはしばらく考えると、

「ロシア熊（ぐま）はどうするか知っているかね？」

と極東CIA長官のダグラス・マッカーサー三世に訊（き）いた。

「ロシア熊はアルテミユア大陸北部を目標（めぎ）すようです。北の火

山地帯での鉱物（こうぶつ）資源（しげん）に期待しているのでしょう。拠点（きよてん）構築（こうちく）は大規模な陸上（りくじょう）機甲（きこう）戦力（せんりょく）を上陸地点（じょうりくちてん）に展開させて、地盤（じばん）の硬（かた）い所に入植拠点（にゅうしょくちてん）を作ると思われます。」

マツカーサー三世が言った。

「ふむ、我が国はこの際共同作戦として勝利の確率を上げようじゃないか。北のロシア熊は、我が国の強襲揚陸艦（きょうしゅうりゅうりくかん）に載（の）せて、『ロナルド・レーガン』空母搭載機（くうぼとうさいき）で地上支援、ヘリボーンで支援部隊を送り込んで拠点構築（きよてんこうちく）。この線（ライン）でパノフ大統領と話してみよう。」

ミツチエルが言った。

コーラを飲んで一服したあとで、

「それと、諸君、実は相談したいことが有ってね。」

ミツチエルがおもむろに切り出した。

「日本列島の外に出たら、地球の本国（ステイツ）と連絡を取るべきだろうか？取るとして、我々ほどの様な立場で対応すべきだろうか？」
執務室の全員がしばらく沈黙してしまっていた。

同時刻【長崎県佐世保市 ダウニングタウン 10番街 連邦首相官邸】

「やはり、オキナワの海兵隊と『ブルーリッジ』、空母『ロナルド・レーガン』が複数のイージス艦と北上中です。『セオドア・ルーズベルト』は沖縄本島南方沖に待機しています。」

ロイド少将がケビン連邦首相と、モニターの向こうに居るユーロピア自治区のジャンヌ代表に報告した。

「やはり、熊と組んで打って出るんだな。無謀（むぼう）な。」
ケビンが顔をしかめた。

「タロウに伝えますか？」

「いや、彼はもう知っているだろうよ。」

「それと、日本列島のフィールドが解除されたら我々は本国に火星日

本領土（しよくみんち）確保と、マルス文明の獲得について連絡すべきでしょうか？」

ロイド少将が訊いた。

「その件は保留だ。地球圏がどの様な有り様か分かるまではこちらの態度を決めてはならん。情報も与えない方が良いでしょう。ヤンキーや熊が勝手に伝えるだろうしな。」

「確かにマルス文明はオーバーテクノロジーだ。誰もが欲しがらさるさ。だが、」

葉巻（はまき）を燻（くゆ）らせながら、ケ빈は断言（だんげん）した。

「あれは今の人類にはパンドラの箱ではない。」

2019年9月12日【アメリカ合衆国 カリフォルニア州サンタバーバラ郡 ヴァンデンヴァーグ空軍基地 第31宇宙航空団司令部】

「大佐、彼らは宇宙国家と言ったのかね？」

メイル空軍長官が基地司令官に訊いた。

「はい最高司令官殿。ISS（国際宇宙ステーション）が「宇宙国家アース・ガルディア」を名乗って我々に通信を求めてきました」

「奴らは何と？」

「アメリカ政府はもはや機能していない。人類救済のためにアースガルディアに加われ、と」

「なんて冴（さ）えないジョークだ。ISSの連中はのんびり浮いているだけで暇（ひま）なのか？」

「自分には分かりません、最高司令官殿」

基地司令官はむっつりとしながら答えた。

「彼らに返答しますか？」

「無視しろ。衛星軌道でSFチックな演劇をしたいなら飢え死にするまでするがいいや」

「しかし、NASA（アメリカ航空宇宙局）を通じて既に我々の兵士や科学者がISSに滞在しています・・・」

「彼ら個人とは連絡は取れんのかね？」

「それが・・・彼ら自身が「アース・ガルディア」国民を名乗って我々に通信を送っているのです」

「クレイジーだ！国家反逆罪だぞ！」

メイルは激怒した。自分は大変動以降、13番目の承継者として合衆国最高司令官の職責を忠実に実行しているのに身内で秩序を乱す者に恭順（きょうじゆん）出来るわけがない。

「大佐、今すぐF15にASAT（対衛星ミサイル）を装備させてISSを破壊せよ」

「よろしいのですか？」

「反乱罪は死刑に値する。実行を急ぎたまえ」

「残念です・・・長官殿」

「何だどっ!？」

基地司令官はためらいもなく、携帯していた拳銃でメイルを射殺すると司令部内の全将兵に告げた。

「この基地はアース・ガルディアに協力する。直ちにISSに通信を送れ！」

司令部内の大半の将兵が司令官の指示に従って動き出した。

既に司令部付きの将兵は空軍長官が指揮権を承継する前からアース・ガルディアの米国人宇宙飛行士と連絡を取り合っていたのだ。

「司令、アース・ガルディアのソーンダイク代議員から通信です」

メイルの遺体を少しも気にせず部下が近づいてきてメモを渡した。

「宇宙へ集結せよ、か。何でもいいから人を乗せて打ち上げろとは、ソーンダイクらしくもない」

司令官は同期の宇宙飛行士ソーンダイク大佐を思い出しながら呟（つぶや）いた。

マルス人の選択

地球暦2019年9月10日〔火星 アルテミア大陸 シドニア地区 ナザレ 旧マルスアカデミー本部〕

神妙な顔つきでアマトハ、ゼイエス、イワフネが中央ちゅうおう管制区域機密ブロックにある一室いっしつに集まっていた。

「久しぶりの場所だな。」アマトハが言った。

「そうだな。ゼイエスが”やらかした”ときにいつもここで対応策を練ねっていた気がする。」イワフネも言った。

「おれはやらかしていないぞ。”あの時は、”新天地を皆に見てもらいたかっただけなんだよ。”少しづつが悪くなったゼイエスが弁明べんめいを試みるが、ため息をついて止めた。」

「今日は3人で情報の共有と、今後の日本人との関係について話したいんだ。」

真剣な顔でゼイエスが言った。

同日午前10時30分〔東京都千代田区 永田町 首相官邸〕

「極東アメリカとロシアは共同で火星進出を行うようです。空母、強襲揚陸艦、海兵隊、ロシア陸軍がヒトカツ湾しゅうけつに集結しつつあります。おそらく、アルテミア大陸北部の火山地帯で鉱物の採集さいしゅうを行い、拠点構築きょてんこうちくを行うようです。」

桑田防衛大臣が報告した。

「総理、極東アメリカ国務省から拠点構築までの間、補給物資の提供、輸送について、日米相互防衛条約に基づいて支援要請がありました。」甘木経産大臣が報告した。

「それと、コマンド・ケイプが火星大地の水先案内人みずさきあんないにんとして、角紅社員かどべにを1名派遣はけんして欲しいと言ってきました。」

岩崎官房長官が告げた。

「それは、日本人を人質にすると言う事かね!」「厚かましいにも程ほどがありませんぞ!」

桑田と甘木が憤慨ふんがいした。

「確かに大月君達はマルス人とのパイプが太い。そこを狙われたな。」
岩崎が言った。

「物資の手配も商社マンだから可能でしょう。しかし——」

「——駄目だ、危険過ぎる。物資の提供はやむを得なとしても、国民を
案内人として送るのはいかん。」
澁澤総理が言った。

「事前にマルス側からレクチャーを受ければ済む話ではないのかね
？」
甘木が言った。

「イワフネさんにホームステイのお返しでアルテムリア大陸の大地を
訪れた時にはかなり、想定外の出来事が有ったようです。シヨックが
大きいみたいであるのメンバーは今も肉が食べれないそうです。」
岩崎
が二人に説明した。

「詳しくは聞けませんでしたが、何でも地中から高層ビルクラスの巨
大ワームが突然襲い掛かって来たり、オオトカゲや凶悪なサソリモ
ドキが地上にいるようです。」

「ならばますます送れんぞ。いくら極東最大の軍事力を持っていて
も、本当にそんな未知の生物相手に備えは大丈夫なのか？
奴等は何を
考えてるんだ！」
澁澤総理が言った。

「とにかく、水先案内人の話は駄目だ。マルス側からよく説明を受け
るように説得しよう。」

澁澤がミツチエル大統領へのホットラインをかけ始めた。

【旧マルスアカデミー 機密ブロック】

「最初に地球へ送ったカプセルは親カプセルと850万のナノマシー
ンに分かれている。そして、親カプセルの中には850万のナノマ
シーンを統括する存在が居る。」
ゼイエスが言った。

「親カプセルには50体の少女型クローンが搭載されている。親カプ
セルに搭載した人工知能が、とある1体のクローンを操って、ナノ
マシーンから管理統括した情報を報告させている。」

「そのクローン体の名前は『ミーコ』と言う。クローン体の時には人間
と全く変わらない感情を宿しているが、感情の根底には人工知能が脳
にプログラムした思考形態を持つ。」

ゼイエスが説明した。

イワフネは初めて聞いた内容だった。

「初耳はつみみだったよ。これはまだ地球人類には言えないと思う。」感想を述べた。

「そうだな、ちなみに親カプセルの場所も最近分かった。」ゼイエスが言った。

「何処どこだ？」

「尖山基地の最深部さいしんぶにある。私とゼイエスしかアクセス出来ない。」アマトハが口を開いた。

「イワフネ、君は尖山ここを偶然に基地にしたのではない。脱出シャトルの航法装置にミーコが介入かいにゅうして呼び寄せたんだ。」ゼイエスが説明した。

余りの内容にイワフネはしばらく思考が停止してしまった。

「地球人に説明したように、ミーコは自律進化する人工智能だ。ミーコのクローン体を使ったり、精神体となって地球人類の思考を読み取ったりしながら、あの空間内部の生物が求める事を叶えようとする。あまりに突拍子とつぱょうしもない話だが、人工智能ミーコが何を考えているのか？どうしようとしているのかを知るアクセス権はアマトハと私だけが持っている。」ゼイエスが言った。

「だから、マルス文明の正当なる承継者である地球人類にはいずれアクセス権を譲ゆずろうと思う。」

「今はまだ、誰にするかは見極みきわめている最中だがおそろく、日本人が最適だと私は思う。アマトハ、イワフネとも話し合って決めたいがね。」

ゼイエスが今後の意向いこうを伝えた。

「分かったよ、ゼイエス。私はしばらくオオツキ達と行動を共にするから、彼らの事をよく見ておこう。」イワフネが言った。

「私は我々の文明承継を巡めぐる各国の対応を注視ちゆししてみよう。勿論もちろんこの件についてはまだ中立だがね。」アマトハが言った。

「ありがとう。アマトハ、イワフネ。我々が悠久ゆうきゆうの昔に放った萌芽ほうががここまで来たんだ。多少の紆余曲折うよきよくせつは有るだろうが、期待を持って地球人類を見極みきわめよう。」

ゼイエスが言った。

国民の選択

地球暦2019年9月12日正午【NHKニュース】

国営放送のアナウンサーにもかかわらず、政権与党に対して批判的な態度を取ることでも有名な女性アナウンサーが嬉々としてニュースを伝えていた。

「澁澤総理大臣は6月25日に政府が締結したマルス科学技術文明の段階的承継を、『国民の十分な議論、検討が為されないまま締結されてしまった不十分な内容の承継方法だった』として、国民投票による協定の追認を得たいとの考えを示しました。」

「今回の国民投票は国民投票法が国会で成立してから初めて、具体的事案に対する澁澤政権の信を問う選挙、…失礼しました、投票になります。」

あからさまに自分の願望を思わず口にしたアナウンサーが失言に気付いて顔をしかめた。

「やっぱりこうなつたんですねえ。」

社員食堂で大月やイワフネ、春日と共に昼食を取る西野が言った。「本来、政府が対外的な条約を、国民の意見が違うから等と情緒的な理由で反故にすることは国際的な信頼を著しく失墜させる大失策なんだけどな。」

大月が西野の作ったツナサンドをもしかやもしや食べながら言った。「だが、国際的にも何も、火星に存在する我が国はそんなようなことは、あまり関係無くなってしまった。むしろマルス側に対して、日本国はちゃんと考えていますよ、という姿勢を見せる事の方が大事なんだよ。」

「それと、マルス文明というオーバーテクノロジーを承継する事の意味を国民全員が真面目に考えることで、これから発展、開発される新技術を使う免罪符にもなるんだよ。」

大月が政治的な見解を一気に喋った。

西野は大月さん素敵と目がハートになっており、東山は頷くばかりでイワフネは黙って聞いていたが、春日は、

「そんなにいちいちみんなの意見を聴いていたら、物事が全然進まなくなりませんか？」と疑問を呈した。

「確かに、でも、火星に在ろうが我が国は建前上、『民主主義国家』だ。なるべく多くの民意を政府に集めないことには何事も進められない。」大月が応えた。

「じゃあ、極東アメリカ、極東ロシアも選挙、じゃなかった。国民投票するのかな？」

西野が訊いた。

「いや、”向こうは”1度選挙で勝った政党が政権を握つたら、全ての政策に信任を得た、として政権の決定を推し進めるだけだ。だから、」

大月は言葉を切つて、東山を見る。

「日本国と方向性の違う承継の選択をした極東米露に、日本国が明確に意思表示をしたというアピールを示したかつたんじやないかなあ。」

東山は大月の分析に同意しながら、

「大月さんの言われる通りです。もう少し過激な見方をすると、極東米露は将来、我が国に牙を剥く、と官邸は考えています。」

かなり衝撃的な発言をした。

大月、西野、春日は暗い未来を想像して、残りの昼ご飯を黙々と食べていた。

そんな彼ら彼女をイワフネはじつと見つめていた。

『マルス文明に係る段階的承継の国民投票』は、10月12日に投票、即日開票と日本国政府は発表した。

これから1ヶ月間、与野党が全国各地を回りながら是非を問う長い闘いが始まった。

仕事が終わわり、『イワフネハウス』でアマトハ、ゼイエスが乱入した”恒例”のアフターファイブが終わると、大月と西野はSPが運転する車に乗って政府が用意した赤坂の「仮住まいのホテル」へ向かった。車中で西野がふと、

「そう言えば今頃地球はどうなっちゃんですかねえ？北欧のお世話に

なった人達が心配です。」と言った。

大月は、

「そう言えば全然考えてなかったなあ。」と相槌あいづちを打ちながら、

「でも極東米露や他の国は故郷ふるさとをずっと忘れていないだろうな。」と言った。

彼らが外に出たがるのは、地球の『本国』と連絡を取りたいから、又は本国より有利になりたいから？ ではないのだろうか？

と大月は少し思ったが、話し始めた当とうの西野が寝息ねいきを立てて大月の肩に頭を乗せてきたので思考を止めて西野の”寝たフリ”に付き合った。

大月の予想は当たっていたが、『地球に居る者の視点』までは予想の範囲外だった。

大月の選択

地球暦2019年9月29日午前10時頃【東京都千代田区丸の内
総合商社角紅 火星流通営業室】

この部署はイワフネの商社勉強サポートと、近い将来に始まるであろう火星 入植地《にゆうしよくち》からの物資売買の司令塔となる予定、と言う建前で社長室の真下になぜか設置されたりしている。

その部屋のすぐ外で大月は電話の主と会話していた。

「そうですか、万一の場合は私が――、はい。分かりました。では、失礼します。」

大月は溜め息をつきながら部屋に戻った。

「イワフネさん、この――黒海老の養殖はどうですかねえ？」春日がイワフネに質問していた。

「ハマチの養殖よりは現実性が有りますね。海老はプランクトンを食べますから、今のマルス海洋には合いそうです。」イワフネが可能性が高いと言った。

「プランクトンを餌とするならば、牡蠣やホヤもいけるかな？」大月が会話に加わる。

「牡蠣やホヤ？」イワフネが訊いた。

「昨日宴会で私が揚げたカキフライ食べてたじゃないですかあ。」西野が言った。

「あれは美味しかったですね。えーっと、海のミルク？でしたっけ。」

イワフネがセールス文句を思い出そうと頑張る。

「春日、その品目は東南海大学の岬教授に相談してみよう。彼女は海洋生物の研究者なんだ。今の仕事が一段落したら会いに行こう。」大月が言った。

「私はちよつと鉄分を多く含む土壌向きの植物を探してきます。」

大月はそう言って足早に部屋を出た。何故かよそよそしい大月を西野はじつと見ていた。

「みなさんマルス大地での動植物育成に頑張るのは分かるのですが、従来のマルス生物への対策はお考えなんでしょうかね？」

イワフネがボソツと言った。

皆がイワフネの言わんとする事を理解していたが、それは『各国軍隊が何とかするだろう』と高たかをくくっていたので聴こえない振りをした。

それは大きな間違いだった事にイワフネ以外、誰も気付いていなかった。

その日の晩

「大月さん最近付き合い悪いですよねえ。宴会全然出ませんし。」

西野が頬ほおを膨ふくらませて拗すねる。

「本当に大口取引先向けの作物とかの準備が忙いそしいんだよ。」

大月が弁解べんかいする。

「時間が足りないんだよ。俺も火星に出るの初めてだしな。対抗武器たいこうぶきの事も分からないし。」

大月がボソツと言った。

「この前イワフネさんと火星一周ピクニック行っただじやないですかあ。」

西野が言うど、

大月は何故なぜか口をつぐんで押し黙だまった。

同年10月3日午後7時【神奈川県横浜市 神奈川公会堂】

政府主権せいふしゆけんの国民投票に向けた与野党よやとうの討論とうろんを促うながすタウンミーティングが開かれた。

ゼイエス（マスターゼイ）がマルス文明の説明役として呼ばれ、東山が司会を務めていた。

大月は住民の一人として参加した。何故か西野が当然のように隣に座って居たが、あれ？西野は横浜市民だっけ？

まず、マルス科学技術の説明の前段階ぜんだんかいはいとして、ゼイエスがマルス文明の勃興ぼつこうから簡単に説明、代表的な科学技術を説明した。

次に地域の与野党議員が技術の承継の大切さ、応用の難しさ、各国との技術競争激化について、議論を戦わせた。

タウンミーティングに詰めかけた住民も活発に質問や、意見を述べていた。

やはり、急激な変革よりも身の丈に合った変化が受け入れられそうだった。

そんなミーティングで一人の住民がゼイエスに詰め寄った。

「そもそも、あなた方火星人が地球に生命の源を作ったのですよね？それなら火星人は生命体の創造主《そうぞうぬし》として我々を助ける義務があるのではないですか？」と言った。

あんまりの指摘に皆が黙ってしまった。

しかし、

「あなた、お門違いも甚だしいですよ？」

大月が反論した。

「では、貴方は、人類が養殖している鮭やハマチ、牡蠣や海老の人生の面倒を見れますか!?無理でしょう?」

「貴方の言っている事は、親に『何で私を産んだの?』と言い掛かりをつける反抗期の子供と同じ屁理屈ではありませんか?」と言った。

「人類はもう大人ですよ?いつまでも親に甘えて良いのでしょうか?独り立ちも出来ないのにマルス技術を教えろと言うのはおかしくありませんか?」

大月はきつめに言ってしまう、相手の質問者が興奮して大月に掴みかかろうと揉み合いになり、会場が騒然としたために、両者はSPに会場から退去させられた。

「どうしたんですか!?大月さん!焦りましたよー!」

東山が文句を言おうとしたが、西野の有無を言わせぬ視線で止められた。

大月はむっつり押し黙って、「帰る。」と一言言うとタクシーをつかまえてホテルに戻ってしまった。

西野と東山は、大月に何が起きているのか問いたげな表情で帰る大月を見ていた。

西野が仮住まいのホテルに帰ると、大月がスーツケースを持って部

屋を出るところだった。

驚いた西野が、

「どこに行くんですか？」と聞くと

「大口の取引先から急に呼ばれたので那覇なはに行ってくる。」と大月は言った。

「私も準備するので待つてくださいいね。」と西野が言うと、

「今回は、西野、お前は連れて行けないんだ。」

と大月が真剣な声で言った。

「極東米露が近いうちに独力どくりよくでアルテムィア大陸に上陸して、入植にゅうしよくの準備をするらしい。水先案内人バイロットとして同行する事になった。

政府は日本人の派遣を拒否したが、米露に押しきられてしまった。

あの火星生物とまともにもやりあおうなんて米露は相手を見くびっている。だから俺が同行して出来る限りアドバイスする。

今回は自分の身を守るので精一杯だと思う。流星さすに今回は危あぶなすぎるんだ。」

と事情を説明した。

「俺が万一の時は、ひかり」に連絡をするからお前の携帯を貸してくれ。イワフネと連絡が取れるように、ひかりは尖山とがりやまでイワフネと待機してくれ。」と西野に頼んだ。

西野から携帯を受け取った大月は、

「ちゃんと帰ってくる。大丈夫。」

それだけ言うと部屋を出ていった。

西野は独り部屋ひとに残された。

大月に名前で呼ばれた事にびっくりしながらも、大きな不安と、僅わずかな嬉しさが入り交じった複雑な気持ちで大月を見送った。

ミーコの選択

地球暦2019年10月4日午前8時【富山県立山市 尖山^{とがりやま}】

西野ひかりは大月が那覇DCに向かった翌朝、イワフネを叩き起す^{たた}と有無^{うむ}を言わずに、尖山に向かった。

尖山の基地に着くなり、

「それで、一体どうしたのですか？」とイワフネの問いに西野は、大月が極東アメリカ軍の強い意向で、やむを得^えずにアルテミア大陸北部に上陸して入植^{にゆうしよく}する部隊に同行する事を告^つげた。

事情を聞いたイワフネは直^{ただ}ちにアマトハ、ゼイエスに報告、対応を相談した。

「現状では極東アメリカ軍のど真^まん中から彼だけを救出する事は不可能です。また、我々の飛行艇^{ひこうてい}を使用するのは、中立の立場をとる我々としては出来ない。」アマトハが沈痛^{ちんつう}な表情で西野に告^つげた。

「そんな…」西野は絶句^{ぜっく}した。

西野は角紅社長や岩崎官房長官に直談判^{じかだんぼん}したが、二人とも「申し訳ない。」と手段^{てづ}が手詰まりであることを明かした。

「我が国は澁澤総理自ら、ミツチエル大統領に抗議しましたが、彼等は核を含む軍事力を前面に出して強引な要求を行いました。そこで私が先日、大月さんをお願いして同行^{どうこう}して頂く事になったのです。もちろん、そちらの仁志野社長にも苦渋^{くじゆう}の決断を告げるしかありませんでした。」

岩崎が苦しい状況を吐露^{とろ}した。

しかし西野は、

「あなたは、最初にお逢^あいした時、総理と共に最大限私達をサポートすると仰^{おつしや}っていた筈^{はず}ですが。あれは口だけですか？」

と詰問^{きつもん}した。

岩崎は応^{こた}えようが無かった。

西野は一方的に岩崎との通話を切ると、尖山基地の管制室にある椅子にぐったりと座り込むと、コンソールに顔を伏せてじつと頭をフル回転させて大月を救う為^{ほうさく}の方策を考え続けた。

そんな彼女にイワフネはもとより、後から駆けつけた東山と春日も含めて、基地に居る誰もが近付くことなど出来なかった。

尖山基地最深部ゼイエスカプセル本体

その存在は、カプセルの中で悠久の眠りにについている様に思えたが、実際は人工知能が司る思念体が日本列島を護る800万を超えるナノマシーンから情報を収集し、あらゆる生物の思念も聴き続けているた。

その人工知能『ミーコ』は、カプセルのすぐ近くに、強い愛情と苦悶に苦悶する女性の思念を感じた。

人工知能の空間内知的生物支援概念に基づいて、思念体がカプセルに搭載されていた少女型のクローンに取りつくと、クローンが覚醒シークエンスに入った。

同時に、『ミーコ』が基地内に居た西野を最深部のカプセルまで転送させた。

ミーコは、西野の愛情と苦悶に込める選択をプログラムにしたがつて取り始めたのである。

遠巻きに西野を見守っていたイワフネ達は、突然西野の姿がかき消えた事に動揺したが、シドニアの旧アカデミーにいたゼイエスが、親力プセルの稼働をキャッチしたと連絡をよこした。

取りあえず、イワフネ達は安堵した。

シドニアに居たアマトハ、ゼイエスは、初めての親カプセル稼働に驚き、尖山に向かった。

基地の管制コンソールに突っ伏して大月を助ける方策を模索していた西野は、見たこともない基地内に居る事に気付いた。

その空間は薄暗く、真ん中に高さ5m、幅4mはある流線型の弾頭に似た部分が地面に突き刺さった形の物体があった。物体は蒼白（あおしろ）い光を空間に放ちながらゆっくりと明滅していた。

『貴女、』

突然背後から女の子の声が響いて西野は飛び上がらんばかりに驚

いた。

そこには西野より少し小さい、イワフネ達よりも幼い体格の、ヒト女性に似た起伏を持つマルス人が立っていた。

『貴女は、彼を助きたいの？』

無表情で”ミーコ”が西野に訊ねた。

「そうよ。私が添い遂げる人だから。」西野が毅然（きぜん）とした態度で言った。

『そう。』短く呟くと彼女の周りに水色の淡い光球（オーブ）が現れた。『彼を護って』オーブに指示すると、光はスツと消えた。

『これで一応彼は大丈夫。』彼女はそう言うのとパタリと地面に倒れた。慌てて西野が抱き起こすと、

『お腹、減った。』と言って、水色の縦長な瞳で西野を見上げた。

『私、ミーコ。イワシパイ食べたい。』

そう小声で言うのと今度こそ彼女は気を失った。

やがてゼイエスやアマトハが駆け付けるまで西野は啞然としながらも、”ミーコ”をしつかりと抱き締めていた。

海兵隊の選択

地球暦2019年10月7日午前7時【極東アメリカ合衆国海軍
エリア・ヨコスカ内『コマンド・ケイプ』司令部】

大月は那覇DCで海兵隊や入植調査隊の科学者と打ち合わせを行った後、米海軍横須賀司令部に移動した。

MP（軍憲兵）が運転するジープが軍港すぐ後ろにある岩窟山裏手に廻ると、岩窟山の下半分が抉り取られた様な形で米軍の各種設備が密集していた。入口は厳重な警備がされており、完全武装の海兵がゲート前で検問していた。

検問を通過して巨大な鉄扉を抜けると、二車線はあるトンネルが緩やかな傾斜で延々と地下に続いていた。旧日本軍が戦時中に建設した施設を更に強化したこの巨大な司令部基地を、『コマンド・ケイプ（洞窟司令部）』と呼ぶ。

MPに案内されて司令部に行くと、巨大な壁面スクリーンに火星ア
ルテムユア大陸と北海道北部の地図が映し出されていた。

「ようこそ、ミスターオオツキ」

ジョーンズ海兵隊中将与、極東CIA長官のダグラス・マツカー
サー三世が大月を歓迎した。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

大月がさっとお辞儀をした。

「中将閣下、ワーム対策は如何でしょうか？」大月が確認した。

沖繩辺野古の海兵隊本部で、大月は自分が火星で体験した事を詳しく説明した。

特に巨大ワーム、サソリモドキの注意を喚起した。

法螺話のような、信じがたい内容を話す大月を、海兵隊将校は笑い飛ばしていたが、

「彼の話信じないのなら、部隊が全滅いたしますぞ！」

と叩き上げの先任軍曹が彼らをどやしつけた。

軍曹の一喝で将校達は多少態度をあらためたが、基本的に火星生物を”地球のサファリパーク”に居るライオン並としか考えていない

ようだった。

大月は内心絶望したが、自分が生き残る為にも、伝えておくべき事は伝えたかった。

「鱗うろこを持つ、筋肉質の全長200mはある巨大ワームの耐久力は相当なものだと思います」

「また、低空を音もなく翔んで来るサソリモドキのハサミとしつぽから噴射される毒液の威力は、上空から毒水をばら蒔く飛行消火挺と考えてください」

大月の証言を基に、対抗兵器と不意打ちを避ける対策が”軍曹主導で”検討されるのだった。

「ミスターオオツキ、ワームやサソリモドキはジャベリンとグレネード、M1A3戦車の120mmとブラッドレー装甲車の12.7mm機関砲がメイン武装となるな。」

ロシア熊はRTG（対戦車ミサイル）の大量運用で対応する。兵員は基本的に装甲車かアパッチヘリの護衛のもと、ヘリボーンで移動して、生身で襲われるのを防ぐ予定だ」

「それと、ワームの接近を探知する地中レーダーと虫が嫌いな周波数の電波も試して貰えませんか？」

「分かった。地上部隊とヘリボーン部隊の両指揮官に通達しよう」

「ありがとうございます。閣下」

大月が礼を述べた。

「オオツキ、作物の準備は大丈夫かね？」

「マツカーサー三世が訊いた。」

「鉄分の多い土壌で育つものを選びました。ニンジン、ジャガイモ、ホウレン草、ベリーにトマトです」

「それと、海岸沿いでは海水の有機成分を餌とするシユリンプを養殖します」

大月が答えた。

「グレイトだ」マツカーサー三世が感嘆して言った。

「素晴らしい」ジョーンズ中将も同意した。

「これだけの希望の種が有るならば、兵士も守りがいがあるというも

のだ」

「いずれにしても、火星生物は未知の部分が多すぎます。油断大敵です」

海兵隊将校の態度を思い出しながら、大月があらためて注意を促した。

「海兵隊（我々）は精強なプロ兵士の集団だ。戦闘で遅れなどたらんよ」

ジョーンズ中将が鼻で大月の慎重さを笑った。

30分後、大月はへりで空母レーガンに移動した。

択捉島沖合いで極東米露連合軍が合流し、一路艦隊はアルテミア大陸を目指して北上した。

ジョーンズ中将達海兵隊は、確かに人間相手にはプロだが、殆ど生態が解明されていない火星生物の潜む大地と海洋で、その実力を発揮できるか大月には疑問が残った。

強襲揚陸艦『イオージマ』艦内の居住区に割り当てられた三段ベツトで横になると、大月は溜め息をついて、西野を連れてこなくて良かったと心から思った。

その頃尖山^{とがりやま}で目を醒ましたミーコは、西野が基地で作ったかぼちやポタージユを美味しそうに食べていたが、急にスプーンを置く^{こくう}と虚空を覗いた。

『ワーム達が来る』ミーコがつぶやいた。

西野の選択

地球暦2019年10月7日午後9時20分頃〔択捉島沖250kmの北太平洋『火星シレーヌス海』〕

ミーコが尖山でワーム達の襲来を予知した頃、海中では既に異変が生じていた。

極東ロシア連邦海軍攻撃型原子力潜水艦『K332』発令所

「艦長！本艦直下の海底で爆発音！」ソナー員が報告した。

「海底火山の噴火か、」

艦長が言い終わらない内に艦全体が大きく揺さぶられた。

どこにも掴まっていなかった水兵が艦内の至る所で身体を強く打ち付けられた。

艦長は潜望鏡を掴んでいたので辛くも難を逃れたが、副長が前に跳ばされて操舵員の頭に激突した。操舵員は首の骨を折って即死し、副長も計器パネルに衝突して重傷を負った。

艦長の身体が再び前に投げ出されそうになった時、副操舵員が、

「艦長！本艦は急速沈降中！深度200を超えました！」

「全速前進、浮上せよ！」艦長が指示を出す。

「スクリーン動きません！機関正常」

「深度400突破！」

「バラストタンクブロー！脱出挺の準備だ！」艦長は必死に浮上を試みながら方が一を想定する。

「ブロー効きません！さらに沈降中！深度500超えます！間もなく圧壊深度！」副操舵員が悲痛な声を上げて報告する。

艦内全体に金属的な軋み音が響き渡る。

「救難ブイを出せ、無駄死には御免だ！」

艦長が叫んだ。

次の瞬間、アクラ型潜水艦はくしゃりと圧壊して今度こそ、巨大ワームの体内に収まった。

救難ブイも一緒に呑まれた。

極東米露連海上陸艦隊旗艦『ブルー・リッジ』CIC（戦闘管制室）

「極東ロシア潜水艦『K332』音信途絶。レーダーから消えました！」

管制官が上陸艦隊司令のジョーンズ中将に報告した。

「我が方の原子力潜水艦『コロンバイ』音信途絶、レーダーから消えませんでした！」

「全艦隊戦闘態勢。砲・爆雷近接戦闘用意！」ジョーンズ中将が指示する。先に仕掛けられたか、とジョーンズ中将は歯噛みした。

強襲揚陸艦『イオージマ』居住区

突然の警報サイレンで三段ベッドから飛び降りた大月は、艦の左舷側の海中から黒い筒が空高く伸び上がったと思うと、左舷斜め前方の空母『ロナルド・レーガン』の甲板に巨大なワームがその口を吸着させたのを目撃した。

航空母艦の飛行甲板は流石に分厚くてワームの衝突を持ちこたえたが、ワームはそのまま甲板に乗り上げる形でレーガンの甲板上を這いずり廻り、周囲の戦闘機やパイロット、エンジンア、作業員達を巨大な掃除機のように口へ吸い込んでいった。

巨大ワームの下敷きになったヘリや戦闘機の燃料が炎上して弾薬が誘爆すると、煩わしそうに巨体を捻り、金属や航空機の残骸を吐き出すと、吐き出された残骸がレーガンの艦橋部分や舷側の対空ミサイルランチャーに当たり、爆炎や火花が飛び散った。

甲板の作業員達は悲鳴を上げて逃げ回り、中には恐怖に堪えかねて暗い海上に飛び込む者もいたが、別のワームに海中深く呑み込まれていった。

艦内から警備兵がM16自動小銃で射撃しても、強靱な鱗と筋肉質の塊の前には無力だった。

『全艦隊の乗組員は外に出るな！海兵諸君は艦載砲やジャベリンで応戦しろ！海中には爆雷と魚雷を発射！アスロツク（対潜水艦魚雷）も初源策定で撃て』

ジョーンズ中将の直接指示が艦内に流れた。

大月はCIC（シーアイシー）（戦闘指揮所）を目指した。

巨大ワーム達は更に艦隊を襲い続けた。

冷たい海中を進む艦船に搭載された原子炉の熱源は格好の獲物の存在をワーム達にアピールしているようなものだった。

極東ロシア艦隊旗艦最新鋭ミサイル巡洋艦『ウダロイ』の艦橋に巨大ワームが吸い付くと、ブリッジにいた艦長以下上級将校達を吸い込んで海中に消えた。

巡洋艦『ウダロイ』は操舵不能となり、艦隊から離れた所を別のワームが煙突からガスタービン機関に突っ込むと機関部が爆発して轟沈した。

他にも極東ロシア海軍の艦船は冷戦時代のタイプが多く、レーダーアンテナはステルス性を考慮せず、高く長い為、巨大ワームが引っ掛かると、バランスを崩して転覆する艦船が続出した。

横転した艦船にはワームが群がり、船体に巻き付くとあつという間に海中に引きずり込んだ。

沈没した艦船に装備した爆雷が反応してワームの体内で爆発し、ワームもろとも海底に沈んだ艦もあった。

アウトレンジ攻撃に特化した為、意外と装甲が薄い米軍イージス巡洋艦『ウイルバー』も船体に体当たりする巨大ワームに蹂躪され、巨大な艦橋や舷側に大穴を空けられ、乗組員が吸い出される地獄絵図が展開された。

別のワームは艦橋手前のVLS（格納型垂直発射筒）に頭を突っ込んでイージスミサイルを吸い込んでしまい、身体の内部で爆発したミサイルが巨体を破裂させ、大量の酸性の体液が船体に降り注いだ。

船内から身を乗り出して対戦車ミサイルを撃っていた海兵達は、不幸にも降り注ぐ体液を浴びてその場で溶けていった。

『ブルー・リッジ』のCICで指揮を取っていたジョーンズ中将は、那覇のミッチェル大統領に撤退の具申をして許可された。

『全艦隊に告ぐ、上陸作戦は中止！針路変更面舵一杯！横須賀に帰投する。引き続き戦闘態勢維持！各員生き残れ！』

ジョーンズ中将の撤退指令が出された頃、大月の乗る『イオージマ』は巨大ワームが直通甲板に乗り上げ、居合わせた海兵隊がジャベリンミサイルやバズーカ砲で撃退を試みていた。

「ダメだ！ジャベリン1発当てただけでは奴に効かないぞ！」

「オオツキ！なんかアイデアないか!？」

ブリッジ奥側へ立て籠った大月に、軍曹が必死に問いかけた。

「CIWS（近接対空射撃）を手動に切り替えて弾幕を撃ち込んで！ジャベリンは一斉射撃で撃ち込むしかない！」

「アパッチヘリの30mmバルカン砲で撃つか、C4爆薬を巻き付けた肉の塊を喰わせて爆発させるかですかね！」

やけくそで大月は答えた。

軍曹は準備をする為に弾薬庫へ向かった。

大月は後悔した。イワフネが「最近では海中にも短時間居れますよ」と火星ホームステイの時に言っていたではないか！

「くそっ!!」大月はブリッジの壁を激しく殴り付けた。

次の瞬間、巨大ワームの口がブリッジ正面にへばりついて吸引した。

ブリッジの中に居た将校達は悲鳴を上げる間もなく、ワーム体内に吸い込まれていった。

大月は必死に座席にしがみついていたが、甲板側からアパッチ攻撃ヘリが30mmバルカン砲を撃ち始めると、銃弾がワームの巨体を貫通し、ワームが甲板上で激しくのたうちまわった。

その衝撃で大月の手がシートから離れ、大月もワームの体内に吸い込まれていった。

『あ、』ミークが呟いた。

『ゴメン、ひかり。彼がワームに呑まれた』

西野は失神しそうになるのを根性で堪え、ミークを抱き締めて懇願した。

「何とか助けて!!」

『分かった』ミークが言った。

『どこに連れてくる？彼が溶けそうだからワームごと運ばなくてはいけない』

西野は素早く頭を働かすと、

「市ヶ谷の防衛省。場所分かる？」

『ん、大丈夫。1分かからないで持ってくよ』ミーコが言った。

「東山！連絡を！」西野が叫んだ。

西野を後ろから見守っていた東山は、咄嗟に岩崎の携帯にコールし、相手が出ると有無を言わずに、

「大月さんがワームに喰われました！ワームごと市ヶ谷に今から転送します！」

と叫んだ。

相手の返答も聴かずに伝えきった東山は、その場でへなへなとくずおれてしまった。

同時刻【東京都 千代田区 防衛省地下指令センター】

日本政府と英国連邦極東政府は極東米露艦隊の動向を秘かに監視していたが、東山からの連絡で事態が一変した。

「全く、最近の若者は、」岩崎が文句を言いながらも、

「でも、良い判断ですな」とロイド少将が褒めた。

「大臣、聴こえましたね？」岩崎は桑田防衛大臣に臨戦態勢を指示した。

「駐屯中の特科を使います」桑田防衛大臣が言った。

「ワームの中には国民が呑み込まれています。人命第一でお願いします！」

岩崎が力を込めて言った。

「庁舎内中庭に空震！」

管制官が叫んだ。

「防衛省建物を封鎖！職員はシェルターへ！特科を出せ！」

桑田が叫んだ。

次の瞬間、地下指令センターの天井がズシンと震動した。

「……」岩崎とロイドは黙って天井を見上げた。

中庭に面した建物の屋上に重機関銃と対戦車ミサイルを構えた隊員が並んでいた。

彼らは驚愕の眼差しで中庭に出現した手負い巨大ワームを視認し

た。

「目標サーモ！」警備隊長が指示する。

「サーモ完了。目標中央に人体の赤外線反応確認！」

「よし、頭と尻を狙え！撃つ！」

自衛隊員が一斉に巨大ワームの頭と尻に重機関銃弾とミサイルを撃ち込んだ。

狭い中庭で動きを封じられた手負いの巨大ワームは、暴れまわる前にあつという間に頭と尻をミンチにされ、沈黙した。

1階で待機していた突入部隊が火炎放射器と透明な強化樹脂シールドを構えてワームの巨体に接近する。

隊員が至近距離でサーモする。

「サーモです！」

サーモした隊員が指差した場所に他の隊員が殺到して、斧(おの)やサバイバルナイフ、チェーンソーでワームの巨体を切り裂くと、人の背中が見えた。

隊員はチェーンソーを放り出すと背中から大月を引っ張り出した。彼の衣服は強烈なワームの胃酸で溶けており、皮膚も火傷した様に真っ赤になっていた。

「熱！おいつ！しつかりしろ！衛生兵！すぐ来てくれ！要救助者1名。全身火傷！心肺停止！」

警備隊長が緊迫した表情で報告した。

駆け付けた衛生兵が心肺蘇生処置に成功し、そのままストレッチャーに乗せられたまま大月は建物内の医務室に運ばれた。

大月の全身と呼吸器内部に及んだ胃酸による火傷は重症で、感染症が懸念された為、応急措置を済ますとすぐに自衛隊中央病院にヘリで搬送された。

病院では、未知の火星生物の胃酸と火星生物体内に存在する細菌からの感染症を警戒し、無菌状態を保った特設の集中治療室で不断の救命措置が取られた。

2時間後に東山と西野、ミーコ、イワフネが病院内に現れた。

待っていた岩崎と自衛隊病院の担当医官が状況を説明し、西野に頭

を下げた。

西野はミーコを岩崎に紹介し、東山が尖山とがりやまで起きた事を報告した。岩崎と東山は澁澤に報告する為に首相官邸に戻り、ミーコとイワフネだけが残った。

集中治療室を写すモニターで、全身を包帯ほうたいで巻かれ酸素吸入器を付けて一昏睡なみだこえ「こんすい」する大月の顔を見ながら、西野はミーコに「ありがとう」と涙声で礼を言った。

ミーコは何も言わずに西野にしがみついて、西野の耳元で『何とか内臓ないぞうだけは溶けるのを防ふせいだから大丈夫、だよ』とそつと言った。

西野はミーコの首筋に顔を埋めて一泣いた。

イワフネは何も言えずにその場で立ち尽くしていた。

市ヶ谷に出現した巨大ワームの亡骸なきがらを検証していた日英化学防護部隊は、ワーム体内から更に数名の米軍海兵と思われる体の一部を発見したが、大月以上に溶解が進んでおり、衣服で辛かろうじて体組織たいそしきを保たもっている状態だった。

大月の他に生存者は、居なかった。

余りに酷ひどい光景に、立ち会った英国極東軍ロイド少将が「悪夢の光景だな。」と呟つぶやいた事で、日英将兵はこの出来事を『市ヶ谷の悪夢』と呼んだ。

首相官邸で岩崎の報告を受けた澁澤総理はあまりの酷ひどさに愕然がくぜんとしたが、直すぐに立ち直って、火星生物對抗策しやうちやうおうだんがたを省庁横断型チームで至急立案するよう指示した。

次に、極東アメリカ合衆国のミッチェル大統領にホットラインで大月が重症じゆうじやうを負った事について、政府首班しゆはんとして嚴重抗議げんじゆうこうぎした。

ミッチェル大統領は平謝りひらあやまするしかなかったが、上陸艦隊も多く艦船が損害を受け、ワームに撃沈された艦は3割を超え、海兵隊にもかなりの犠牲者ぎせいしやが出たと澁澤に報告した。

澁澤は晴海埠頭はるみふと頭の使用と自衛隊横須賀基地での修理、兵士の治療支援を約束した。

極東ロシア連邦のパノフ大統領も、澁澤の嚴重抗議に対し、率直そつちよくに謝罪した。

ロシア海軍の損害は最新鋭ミサイル巡洋艦や原子力潜水艦を始め、半数が帰還出来なかった。

パノフ大統領はかなり憔悴しやうすいしていた。

こうして、極東米露艦隊によるアルテムユア大陸上陸作戦は無惨な失敗に終わった。

トップの選択

地球暦2019年10月7日深夜〔東京都 世田谷区 自衛隊中央病院〕

マルスの巨大ワームに呑まれた大月は、辛くも救出されたが、全身をワーム胃酸で焼かれており、80%以上の皮膚が喪われていたが、自衛隊中央病院による日夜の治療を受けて容態は一進一退となっていた。

西野ひかりは岩崎に頼み込んで、大月の母に連絡するのを少し待つて欲しいと懇願し、角紅社長の仁志野を呼び出して相談した。

大月の父親は今年亡くなったばかりで、今度は息子が重態という報せを持って行くのはあまりに酷いと感情を祖父にぶちまけた。

仁志野にしても、社員が政府の指示で生死の境をさ迷う事になった経緯を聴いて内心激昂していたが、ひかりの悩みも難しかった。だが――

「ひかり、大月さんのお母さんにはやっぱり早めに報せなあかんよ」祖父はひかりに言った。

「勿論、仕事でこんな目に遭いはったんや。ワシも行くで。ひかりもちゃんと向こうのお母さんに挨拶しとき。その後で、政府に文句言おうな」

2019年10月8日午前2時〔神奈川県横浜市神奈川区〕

西野と祖父は大月が救出された日の深夜、大月の母が住む横浜市内の公団住宅に向かった。

公団住宅に着くと驚いたことに、澁澤総理大臣と、岩崎官房長官が『極秘裏に』先に報告に来ていた。

警護のSPからそれを知らされた西野達は驚きながらも、住宅から出てきた岩崎官房長官に仁志野が、

「あんたら、家の社員をこんな目に合わせてタダで済まへんで！」と声を抑えながらも、低くドスの効いた声で詰め寄った。

「仁志野さん、申し開きもできない。本当にすみません」岩崎の後ろから澁澤総理が進み出て、頭を深く下げた。

「他の社員の出向については、考え直させて貰いますわ」
仁志野はそれだけ言うとは大月の母に会うために住宅に向かった。

大月の母の家は、公団住宅の賃貸型である。キッチンとバス、トイレ、狭い和室が二つある1960年代に建てられた古い型である。

大月は自分の家庭事情を殆ど話さなかつたので、思った以上に今まで苦勞していたであろう事が推察された。

「この度は、大事な息子様に大怪我をさせてしまい、社長として面目次第もございません！」

仁志野が畳に額を擦り付けて謝罪した。

ひかりも同じく謝罪した。

「先程、政府の方がいらして、ひたすらあやまって帰って行きました。が、一体何が何だか分からないのです。」まるで頭痛を堪えるような表情で二人に向き合った。

「大月君は、息子さんは、火星と火星人の事については、日本で『直接経験している』数少ないわが社のスペシャリストなんです」

「そこをアメリカさんに目をつけられて、拝み倒されて、大丈夫だからと政府も彼にお願いして、アメリカ軍に付いていったらこんなことに…… 社長としてもっと注意すべきでした！ほんまに申し訳ございません！」

「そう…… ですか」大月の母はまるで他人事の様な反応を示した。

不思議に思ったひかりは大月の母をよく見ると、眉間に皺を寄せて俯いている。

「あの、お母さま、大丈夫ですか？お加減がー」

ひかりが言い終わらないうちに、大月の母はそのまま仁志野の方に正座したまま、つんのめって倒れてきた。

「っ！お母さん！どうされました？大丈夫ですか！？」仁志野とひかりが声をかけるが、大月の母は呂律が回らず意味不明な事を口走った。

「あかん！ひかり、救急車や！脳梗塞や！」仁志野が叫んだ。

西野は直ぐに岩崎の携帯に連絡すると、岩崎が大月と同じ自衛隊中隊病院への搬送を手配した。

自衛隊の救急車が到着した時、大月の母は既に意識を失っており、

ドクターへりで搬送された。

検査の結果、大月の母は脳梗塞と診断され、集中治療室に入れられた。

大月の母が通院していたかかりつけの診療所によると、以前から高血圧を指摘されていたようだった。

仁志野もひかりも、あまりに酷い悲劇の連鎖に呆然と病院の治療室前で立ち尽くすしかなかった。

—————

同8日早朝 【東京都千代田区 市ヶ谷 防衛省中庭】

米露艦隊を撃破し大月を襲ったワームの死骸は、巨大過ぎて運搬が困難な為、中庭を即席の屋外生物体研究所として日英の科学者と化学防護部隊が徹夜で分析に当たっていた。

澁澤首相が憤怒の表情で現場を訪れて、日英関係者を激励した。

「マルス生態系の予想を越えた苛烈さを私達は大きな犠牲を払って思い知らされました。しかし、この星と関わりを持たねばならない以上、マルス生態系の研究分析は一刻も早く成されなければなりません」

澁澤は息を吸って、こう言った。

「何故なら、巨大ワームも火星に進出した米露艦隊の様に、此方に来ることが出来るのですから」

この言葉に日英兵士と科学者達は戦慄し、奮起した。

そしてその日から、この『市ヶ谷火星生物体研究所（略称：火生研）』は昼夜問わず活動する。

極東米露（べいろ）政府の協力も得て、米露艦隊の生存者からも詳細な聞き取りが行われ、様々な角度から巨大ワーム襲撃時の様子や米露艦隊の対応を分析、来（きた）る日に備えた研究が行われた。

国民の選択 その2

地球暦2019年10月8日午後5時〔NHKニュース〕

NHKに伝わる冷静な口調を受け継いだ男性アナウンサーが臨時ニュースを伝えていた。

「防衛省によりますと昨日午後10時頃、北海道北東部沖250kmの北太平洋で極東アメリカ、極東ロシアの連合艦隊が火星巨大生物の襲撃を受けた模様です」

「極東米軍関係者によりますと、襲撃により多数の艦船が大破、沈没し、多くの犠牲者が出ているとの事です」

「この件に関して、間もなく岩崎内閣官房長官による緊急記者会見が行われる模様です」

「スタジオには、東南海大学海洋学部の岬渚沙教授にお越しいただいています」

岬は研究中に呼び出されたのか、サンダル履きの白衣で髪も慌てて纏めたように乱れていた。

「岬教授、この火星巨大生物とは具体的に何を指すのでしょうか？」
アナウンサーが岬に尋ねる。

「マルス人は以前から、火星が地球型環境になる以前の生物として、幾つかの種類を挙げていました。火星の『極めて過酷な』環境を生き延びていた、巨大ワームや、サソリモドキ、巨大トカゲ等ですね。

この中で海中でも短時間活動可能な生物を考えるとおそらく、巨大ワームでしょう」

岬が淡々と答えた。

「マルス人が公開した情報によりますと、巨大ワームの全長は200m程度、鱗に覆われた強靱な筋肉質を持つ生物です。幅5mの口を持ち、周辺の生物を根こそぎ吸い込んで強力な胃液で消化するようです」

男性アナウンサーが引きつった顔で岬の説明を聞いていたが、急にイヤホンに手をやると、

「ただいま、首相官邸の記者会見場に岩崎官房長官が姿を見せました。

間もなく会見が始まるものと見られます」

壇上の日の丸に一礼して上がった岩崎官房長官は原稿をやや早口で読み上げた。

「昨晚、北海道沖250kmの北太平洋 シレーヌス海上において、火星アルテミア大陸上陸を目指していた極東アメリカ、極東ロシアの連合艦隊が巨大ワーム群に襲われ、多数の潜水艦、巡洋艦が沈没し、その他の艦船も甚大な損害を受けたため、上陸作戦を断念したとの連絡が政府にありました。この襲撃により、多くの乗組員や海兵隊員に犠牲者が出ているとの報告も受けております。現在、医療支援が行える艦船、航空機を現地に派遣しているところであります」

岩崎は一旦息をつくと、今度ははつきりと、聴きやすい早さで原稿の続きを読み始めた。

「尚、この上陸作戦に我が国の民間人1名が現地での案内役として同行していましたが、巨大ワームに襲われ、救助されましたが、現在、意識不明の重体です」

「我が国の民間人は、極東アメリカ合衆国の『強い要請』を受けて同行しておりました。政府は本件について直『ただ』ちに澁澤総理大臣がミツチエル大統領、パノフ大統領にホットラインで嚴重抗議をいたしました」

「民間人は現在、東京都内の病院で専門家による治療を受けておりますが、皮膚の大部分を喪い、呼吸・免疫機能が低下して危険な状態です。直ちに代用の皮膚を手当てしないと火星生物由来の未知の細菌や微生物が侵入し、患者の生命が危険にさらされてしまいます。入院病院に有る代用皮膚の在庫が、間もなく底をつきます。」

「どうか、各医療研究機関におかれましては、代用皮膚の提供をお願いします」

岩崎が深く、長く、頭を下げた。

記者会見を取り仕切っていた東山が記者達に質問を促すまで岩崎は頭を下げ続けた。

政府が会見で全国に支援を求めた予想外の光景に、記者達は声も出せなかった。

彼らの目には、まるで岩崎が重体の民間人に深く謝罪しているように見えたのである。

やがて質問が始まり、騒然となった記者会見の様子を写した映像からスタジオに画面が戻り、

「岬教授、今の会見で岩崎官房長官が述べた民間人の容態が深刻という事ですが、ワームに襲われて、皮膚を喪うという状況をどのようなものだと言察されますか？」アナウンサーが質問した。

「直径5mある巨大ワームの口から吸い込まれたのでしょうか」

岬は戦慄した表情で説明した。

「おそらく、巨大ワームの消化器官には非常に強い胃酸が有り、それで身体を『丸ごと焼かれた』のだと思われます。負傷者の容態は我々が想定する以上に深刻なものだと判断せざるを得ません」

岬はそう言うと言席を立ち、

「私の研究室でも代替皮膚の研究と火星生物の研究をしています。これから負傷者の為に、代替皮膚提供の準備をします」

岬が白衣を翻してパタパタとサンダルの音を響かせながらカメラの前を横切った。

この光景を目にした全国の医療機関や製薬会社から、代用代替皮膚提供と専門医師派遣の申し出が首相官邸に殺到した。

内閣官房の東山は、大月の治療を行う医師、代替皮膚や複合型皮膚の生成を行う医師、未知の火星生物による細菌感染症を防ぐグループに分け、24時間態勢で大月の治療に当たった。

官房長官の岩崎と澁澤は、毎日必ず大月の容態に関して報告を受けた。

同時にこの専門医集団は、米露艦隊の負傷者手当ても行った。

これらのデータは各国医療機関に即座に伝えられ、集積された。

国交省 海上保安庁と自衛隊は、巨大ワームの侵入を警戒して、北海道近海の漁船や貨物船等民間船舶の航行を禁止した。

大月が意識を取り戻したのは約2週間後だった。

—————

地球歴2019年10月12日午前7時（東京都 千代田区永田町

首相官邸 総理大臣執務室

国営放送でありながら、対馬事変を経ても相変わらず批判的な偏向姿勢を崩さない、空気の読めないHKニュースの女性アナウンサーが、元気一杯に喋る！

「1ヶ月に渡り、与野党が全国各地で議論されてきた澁澤政権の拙速な政権運営と、我が国の遅すぎる火星文明承継方針に対する国民の審判が下される国民投票日になりました！火星文明と火星新天地開拓に関する国民の総意が示される日です！」

「ここまで来るといって清々しいですな」

岩崎が呆れた声で言った。

「極東米露の火星上陸作戦が失敗した現在、こちらに分はある」澁澤総理が言った。

「払った犠牲は大きかったですな」岩崎が言った。

「ああ、どこかで責任は取らんとな」澁澤は天井を仰いだ。

11時13時間後

同、12日午後8時1分。【NHKニュース国民投票 開票 特別

番組】

今朝方明るくニュースを”しゃべる”女性アナウンサーに代わって、伝統的な冷静さを保つ声音の男性アナウンサーがニュースを『伝え』始めた。

「各投票所からの速報を集計した結果、火星文明承継方針について、段階的承継派が82%、火星開発計画の推進が45%という結果になりました。」

これは、現在の澁澤政権の政治姿勢に一致するものとなり、非常事態宣言以降の国家運営に評価を与える事を意味します」

「しかしながら、国内自給率が現段階で70%前後と国民全体を養うには至らず、政府備蓄の減少が今後の国家運営の課題となりそうです。首相官邸は、11時13分」

火星転移後の国内政治基盤を固めたものの、澁澤達のやるべき事は多かった。

宇宙国家の選択

ガルディア暦2年（西暦2019年）10月13日【地球衛星軌道上 宇宙国家『アース・ガルディア』コア・サテライト】

「ソーンダイク代議員、アレクセイエフ代議員、君達の発見は我々に希望を与えるものだ」

アース・ガルディア総代表のイゴール・アツシユルベルンが褒め称えた。

「今度の火星最接近は来年10月、つまり1年後になります。総代表、我々は火星も宇宙国家の領土にすべきではないでしょうか？」

アレクセイエフ防衛担当代議員が進言した。

「同志アレクセイエフ、我々は地球を守るのが第一の使命であつて、侵略ではない。」

まず『火星に奪われた』日本国を『火星から取り戻さねばならない』。これは宇宙から地球を守る我らの崇高な使命なのだよ」

「現在の地球は審判を受けて浄めの儀式の最中だ。出来るだけ早めに火星の、”日本列島”と連絡を取りたい。」

消滅前のデータを見ると、我々の文明とは違う何者かの手で転移させられたのは明らかだ」

イゴール総代表が言った。

「今はまだ、地上からの避難民を受け入れなければならん。その為のコロナーを間に合わせでも良いから作らねば。」

その後は『火星の日本国』と連絡を取り、状況を把握する事だ。あの国には強力な在日米軍がいたはずだ。異星文明が介入していたら厄介だが、出来れば戦闘は避けて長期休息用のコロナーと食料供給基地として一時的な入植が行えるように交渉を試みたい、が、」

イゴールは少し言葉を切って、

「衛星軌道上の通信衛星でコントロール可能なものをコア・サテライトに集めて火星に通信が送れる強力な通信基地を作ろう」

ソーンダイク内政担当代議員がうなずいた。

「万一に備えて旧アメリカと旧ロシアの使える宇宙兵器をリストアップ

プしてもらいたい」

「それと火星まで到達可能な軍艦の研究を始めなければならんな」

アレクセイエフ防衛担当代議員へ矢継ぎ早に方針を伝えた。

イゴール総代表がコア・サテライトの窓から、今や青い海の大半が噴煙ふんえんに包まれた修羅しゆらの地球を背景に、サテライトにドツキングしている旧米国宇宙軍のX-37B軍事シャトルやSR92こうくう高空 宇宙戦闘機、ミサイルランチャーや化学レーザー砲そなを備えた旧ロシア宇宙軍の軍事衛星を眺めながら言った。

「我々アース・ガルディアは、地球を護るための宇宙国家だ。どのような手段を選ぼうとも、それは変わらないのだ」

火星編 新天地 目覚め

地球暦2019年10月22日未明〔東京都世田谷区 自衛隊中央病院 集中治療室〕

大月はふと、目を覚ました。しばらくぼんやりと天井を見つめ、思考を働かせようとしたが酷く寝起きが悪い時のように頭が重く、身体はピクリとも動かせなかった。

声を上げようにも酸素吸入器が喉奥、おそらく気管まで入っているのだろう。

どうにも出来なかった。

どうにも出来なかった、と頭の中でしゃべると不意に涙が止まらなくなった。喉から嗚咽が込み上げるがどうにもならない。

大月はただひたすらに涙を流し続けていた。

大月の変化に最初に気付いたのは、集中治療室隣の待合室に居たミーコだった。

ミーコはユサユサと待合室のソファでコクリと眠る西野ひかりを動かして言った。

『彼が起きた』と。

その言葉を耳にした瞬間、ミーコでも目を見張る程の瞬発力で西野は飛び起き、集中治療室のモニターに目を凝（こ）らした。

目を細めてよくよく見ると、目を開けて、涙を流していた。

「ーっ！」西野は集中治療室に直通するインタホンに向かって、「大月さんが起きました！」と叫んだ。

西野のコールとほぼ同時に、その夜のシフトで入っていた東南海大学の岬教授が大月のベッドに駆け付けて確認を始めた。

岬はモニターに向かって大きく手で輪を作り、起きた事を知らせた。

西野は涙を流して喜んだ。

朝になると、祖父の仁志野や東山と春日、イワフネ、岩崎官房長官

まで駆け付けた。

皆、大月が昏睡状態を脱したことを心から喜んだ。

その後、岬教授から西野ひかりと祖父、イワフネが別室に呼び出されて大月の現状と今後のリハビリについて説明した。

岬は極力感情を自制しながら説明した。

「入院時にご説明した通り、大月さんの皮膚はまだ殆ど喪われたままです。代用皮膚を毎日当てていますが、それでも全身からリンパ液が常に出続けています。意識のある状態で毎日、全身の皮膚を取り替える治療は想像を絶する痛みを伴います」

西野の顔が引きつった。

「また、数カ月後に皮膚が定着、再生成されても、皮膚が固まらないように、毎日身体を動かさないとはいけません。これも、相当な痛みを伴います。大月さんがこの苦痛に耐えられるかが今後の問題になるかもしれません」

岬は説明を終えた。

室内に沈黙が漂った。

「麻酔とかで痛みを緩和できないのですかな？」西野の祖父が訊いた。

「毎日麻酔をかけると、おそらく、薬物中毒になりますね。確実に」岬が告げた。

「そこで、イワフネさんです」岬は不意にイワフネを見つめた。

「もし、マルス人が鱗を剥がされるような怪我を負った場合はどうするのでしょうか？」

岬が質問した。

イワフネは暫く考えると、

「我々は鱗が再生されるまで、培養カプセルに収容して、半冬眠状態で培養カプセルから必要な成分を使って皮膚の再生を試みるでしょう」と答えた。

岬は、訊いた。

「それは、尖山の施設に有りますか？」

「有ります。調査中に負傷した隊員の治療に使いました」イワフネが答えた。

その返事を聞くなり岬は

「暫くお待ちください」と言つて部屋を飛び出していった。

数分後に、岬と岩崎官房長官が入ってきて、

「イワフネさん、大月さんの治療にご協力お願い出来ませんか？」と二人とも頭を下げてイワフネに頼み込んだ。

イワフネは苦笑して、

「分かりました。大月さんには沢山お世話になっています。我々も手伝いしましょう」

と言つた。

待合室に戻ると、ミーコが西野にしがみついてきて、「私もついていくよ」と言つた。

東山と春日は、「後はこちらで何とか回してみるので心配無用だ」

「西野さん、大月さんを宜しくお願いします」と言つて来た。

仁志野社長も、

「ひかりちゃん、ワシも岩崎さんや他の社員と空いた穴を何とかするから、気にせんと大月さんの面倒みるんやで」と励ました。

岬教授は、

「地球側の医療関係者として私もついて来てよろしいでしょうか？」とイワフネに尋ねると、

「私達ではヒトの治療経験が乏しいですから、是非ご同行お願いします」と快諾された。

大月の搬送には、マルス側からの申し出でアダムスキー型シャトルが使われる事になった。

大月を乗せたストレッチャーがシャトルに近付くと、シャトルの下部から同じくストレッチャー形のカプセルが表れて大月をストレッチャーからスムーズにカプセルに収容した。

やがてイワフネ、西野、ミーコ、岬教授を乗せてアダムスキー型シャトルは尖山に向かった。

尖山に行く途中から到着後も、岬教授はイワフネ、駆け付けたゼイエスとマルス人治療用培養カプセルを地球人用に成分を調整する打ち合わせに没頭した。

1時間後、大月は急遽、成分調整されたヒト治療用カプセルに収容された。

治療用カプセルには身体から染み出たリンパ液や老廃物、汚物を分解し、皮膚や焼けた内臓器官を再生させる溶液に満たされている。呼吸器官が修復されると肺が直接溶液を取り込んで酸素吸収が出来る様になるらしい。

現代医学は動物実験でさえ、倫理的に問題ありと物議をかもししていた新技術である。

それをヒト用に調整した岬の能力は天才的と言える。

こうして大月の皮膚再生治療は無事、始まった。

岬とゼイエスの手探りによる治療は続けられた。

岬とゼイエスの共同医療技術の模索データは、『タカミムスビ』から自衛隊中央病院に日々転送され、火星研医師団と地球人医師にも取扱い可能な簡易型『溶液治療カプセル』が開発されて厚労省の特例で即時認可された。

このカプセルは、治療に当たる医師や看護師の負担を軽減すると同時に、患者自身の苦痛も和らぐ事から、火星転移直後に国際線旅客機に乗って被曝した多数の乗員乗客、空自偵察機の高瀬少佐、米露艦隊負傷者の治療に大いに役立った。

悪夢再来

大月が尖山とがりやまマルス人基地で治療ちりょうを始めた日、北海道北東沖ほくとうおきを警戒中の極東アメリカ海軍ロスアンゼルス型原子力潜水艦がたに悪夢あくむが取り付いていた。

地球暦2019年10月22日午後4時 【北海道 稚内市わかないしから150km離れたオホーツク海】

極東アメリカ海軍潜水艦『グリーンビル』

「サイモン、艦の動きが鈍にぶくないか？」艦長が副長に呟つぶやくと、

「艦長、先程さきほどから本艦の速度が60%減速しています」操舵員そうだいいんが報告した。

「原子炉げんしろの故障か？」サイモン副長が訊く。

「いいえ、機関正常です」機関長が答えた。

「なんだ？浸水でもしているのか？」

「こちら艦長、現在本艦は原因不明の減速状態だ、各部署かくぶしょ異常が無いか確認せよ！」

艦内放送が響いた。

「こちら後部魚雷発射管、魚雷発射口に故障。発射口が開かない！」

「ダメコン要員後部に向かえ。横須賀に緊急連絡だ！10まで浮上、通信アンテナを出せ！」

『何かに巻き付かれた』潜水艦「グリーンビル」がゆっくりと浮上していく。

その時、『何か』は潜水艦を離れ、南の陸地に向かって泳ぎ始めた。

突然激しく揺れた『グリーンビル』艦内は混乱した。

「操舵手！」艦長が叫ぶ。

「強い海流に突然巻き込まれました」

「全艦被害報告！」

「異常無し！」

「後部魚雷は？」

「故障回復しました」

「横須賀を通じて新潟港ぎんぎゆうきこうに緊急寄航要請」

「兎に角手近な港で艦を調べるぞ！ 訳がわからん！」
艦長が指示を出す。

潜水艦『グリーンビル』から500m離れた海中。

海上自衛隊潜水艦『そうりゆう』は演習で極東米軍潜水艦を追尾していた。

「艦長！ 今のは?!」

ソナー員が名取大佐を見る。

発令所正面スクリーンに、『グリーンビル』から離れて北海道北部に向かう巨大な『何か』が発するエコー反応が捉えられていた。

そのエコーは、まるで獲物を期待して嬉々とする獣の荒い息遣いにも聴こえた。

「急速浮上！ 市ヶ谷と横須賀に緊急連絡！」

「北海道が喰われるぞ！」 名取が叫んだ。

【東京都千代田区市ヶ谷 防衛省 総合司令センター】

「准将！ 潜水艦『そうりゆう』から緊急電！」

「我、巨大生物と遭遇。巨大生物は北海道北部に向かった」との事！」

「まさか！ ワーム！」 鷹匠准将が叫んだ。

「大臣と官邸に緊急連絡！ Jアラートを北海道に出せ！」

「しかし、詳細が不明で、」

管制官を遮って鷹匠が指示する。

「構わん、出せ！ 責任は俺が取る。市ヶ谷（いちがや）の悪夢を北海道で再現させてたまるか！」

鷹匠が叫んだ。

1分後、北海道全域にJアラートが発令された。

『北海道北部沖で、緊急事態が発生。北海道沿岸部、の住民は、直ちに、指定された避難シエルターに避難してください』

内容が漠然として、発令直後から問い合わせや苦情が防衛省と北海道庁に殺到した。

同時刻【北海道札幌市 北海道庁 知事室】

国民投票後の挨拶で、たまたま北海道庁を訪れていた与党国対委員長かすがの春日は、警報を聴くと直ぐにとある連絡先に電話をかけた。

「洋一か？おじさんだべ。今のなんだあ？」

「叔父さん逃げて！ワームだと思う！」

「ミミズ相手にどこさ逃げるべか？」

「四隅が硬い建物に入っつて！市ヶ谷の再来だよ！」電話を切ると、居合
わせた知事と議員達に、

「ミミズが来るべ！空か、硬い建物に逃げるんだど！」と叫んで永田町
と連絡を取った。

北海道知事は自ら防災無線で、

『海から巨大生物が襲つてきます！直ぐに硬い建物か、上空高くに避
難してください！』と繰り返し、声高に警告し続けた。

Jアラートの要領を得ない警報の次に、防災無線で知事から
巨大生物襲来の警告を聴いた市民達は、しばらく呆けていたが誰か
が、「ワームが攻めてくるんじゃないか？」と呟いた事でパニック状態
でコンクリートや、ビルの高層階に駆け込んだ。中にはヘリポートに
向かった者も居たが、直ぐに飛べるヘリ等殆ど無かった。

地下鉄駅に避難した者も、ワームと聞くと慌てて地上に殺到し、階
段とエスカレーターで激しい揉み合いになった。

航空自衛隊千歳基地からは直ちに、RF4E偵察機とF2戦闘機、
陸自の偵察ヘリにアパッチ対戦車ヘリが沿岸部を飛行して巨大ワー
ムを血眼になつて探し求めた。

【北海道 稚内市沖20kmの上空200m】

最初に巨大ワームを見つけたのは千歳基地のRF4E偵察機だつ
た。

細長い巨体を、ヘビのようにくねらせながら稚内市に真っ直ぐに向
かっていた。

「コントロール！こちらフクロウ、稚内市沖20kmでワーム発見！
真っ直ぐに稚内市に向かっている！オクレ」

『こちらコントロール。随伴のF2にて目標撃破せよ！フクロウは奴
を捉え続けろ！オクレ』

偵察機の左右を飛んでいたF2攻撃機が降下してワームに20m
mバルカン砲を撃つ。

ワームは器用にくねらせて弾幕を避けた。

「コントロール！ヨタカ1、巨大ワームは20mmをあっさりかわしたぞ！どうする?!」

F2パイロットは困惑していた。

『ヨタカ1、2は目標を前後からロケットランチャーで撃て!』

「ラジャ、ヨタカ1後ろから撃つ!その後ヨタカ2が前から撃て!」

巨大ワームの背後からヨタカ1が両翼のロケットランチャーから18連装のロケット弾を発射した。

数発が命中し、苦悶するように身を振ると巨大ワームは後方に頭を向けて口から胃液を噴射した。

ワームが口を開けた瞬間に危険を感じたヨタカ1が急上昇すると、巨大ワームは身体を30m程空中まで『伸ばして』更に胃液を噴射した。

勿論急上昇したヨタカ1の高さは200mを超えていたので損傷は無かった。

再び稚内市に頭を向けた巨大ワームにヨタカ2がロケットランチャーを撃ち込んだが、ワームが海中深く潜ったため、巨大な水柱が立ち上っただけで効果は無かった。再び浮上したワームは身体を左右ジグザグにくねらせながら稚内市に向かい続けた。

巨大ワームは稚内市まで後10キロに迫っていた。

市ケ谷の総合司令センターには桑田防衛大臣と英国極東軍のロイド少将も駆け付けていた。

『こちらヨタカ、バルカンもランチャーも尽きた。帰投する』

「もはや北海道上陸は避けられません」

桑田が観念した表情で言った。

「大臣、まだ我々には3万人を超える守るべき稚内市民が居るのでよ?諦める前に何か考えましょう」

鷹匠准将が桑田に抵抗を説く。

「ミスタークワタ」

ロイド少将が桑田大臣に向かって、

「貴方は畑にいて大きいミミズに出会ったらどうします?」

と尋ねた。

「手にした鍬で真つ二つでしょうね」桑田が答えた。

「正解ですクワタ」

ロイドが言った。

「つまり、奴に鉄を落とせと?」

ロイドの示唆を聞いた桑田は考える。

「稚内市外の海岸に奴が上陸した時に一斉射撃で奴を潰す」

と桑田が呟いた。

「陸自アパッチ、コブラを至急稚内に送れ、」

「三沢の空自と極東米空軍に爆弾をありたけ持って稚内にご案内しろ
！」

「陸自第2師団に可能な限り稚内市街に届く砲とミサイルを準備する
様に伝える！」

「攻撃タイミングは早期警戒機(AWACS)の戦域管制官に計らせろ
！」

鷹匠と管制官が各所に指示を出す。

「海岸付近に避難している市民を郊外までヘリで送るんだ！」

鷹匠が叫んだ。

迎撃（げいげき）

地球暦2019年10月22日午後4時20分〔北海道 稚内市沖の宗谷湾〕

「巨大ワームは宗谷湾から富岡、声問間の砂浜から国道238号線に上陸します。」

RF4E偵察機から任務を引き継いだE3A セントリーAWACS（早期警戒機）が宗谷湾上空を旋回する。

市ヶ谷の防衛省から緊急出動を命じられた稚内駐屯地の陸上自衛隊第2師団第2特科連隊の99式155mm自走砲が国道40号線を南下し、稚内市街に向かった。

既に稚内市街は火砲の射程範囲に入っている。

青森県三沢基地の極東米軍F16攻撃機20機、空自のF2攻撃機20機が精密誘導爆弾を搭載して稚内市上空を旋回していた。

HBCテレビ稚内放送局の吉田記者は、上空を轟音で旋回する大規模な戦闘機の編隊と、目の前の国道40号線を南下する陸自の自走砲を見ると、カメラマンを連れて局を飛び出した。

「近くで何らかの戦闘があるのか？」

先程のJアラートと関係あるのだろうか。吉田はカメラマンと共にタクシーに乗ると自走砲の後ろについていった。

不幸なことに、稚内市は少子化と過疎化が進んで財政難に陥っており、防災無線とJアラートの連動に十分な予算を充てていなかった。この為、北海道知事の緊急防災無線も稚内市には伝わらなかった。

AWACSから戦域管制官が混成迎撃部隊の指揮を執る。

「こちらオオタカ、ワームの動きはこちらで把握している。目標は時速60kmで稚内市街に進行中。全部隊はこちらの指示に従って攻撃を行え。奴は熱源に惹かれる。口から強力な酸性の胃液を噴射する。注意せよ！各員、絶対に車外に出るな！溶けて死ぬぞ！」

管制官が警告した。

「こちら2連隊特科。配置に着いた」155mm自走砲から報告が入

る。

「トール1、ホーク1、稚内市上空に到達」空自と極東米軍からも報告が入る。

吉田の乗ったタクシーは陸自の自走砲を側道を使って追い越し南稚内駅前まで来た。そこで、消防と警察にタクシーを止められ、避難指示を受けタクシーから降りると避難する市民と共に駅舎内に向かったが、既に数百人の避難市民が居るので駅前で待つしかなかった。

吉田は駅前の人混みから離れると、何やら地響きのような揺れを感じた。荻見地区辺りか？吉田はカメラマンに駅の南東を映すように指示した。

その頃上空のAWACSでは、戦域管制官が攻撃命令を出そうとしていた。

「オオタカ、攻撃ポイントを各員に送信した。確認せよ！」

「攻撃はなるべく一斉射撃、編隊単位での爆弾集中投下で面制圧を意識しろ！」

夕暮れの砂浜に上陸したワームは、勢いを落とすことなく国道238号線を滑るように移動し、稚内市街に向けて北上した。

戦域管制官は地上レーダーと赤外線センサーでワームを見据えながらワームへのカウントダウンを始めた。

「攻撃カウントダウン！5、4、3、2、1、撃てえー！」

萩見交差点に通り掛かったワームは、突然空中から鉄の砲弾と爆弾の嵐に巻き込まれた。

激しい砲爆撃は30秒程続き、交差点からは大きな爆炎ときのこ雲が立ち上った。

南東の方角から飛来する戦闘機の編隊と、猛烈な爆発音や爆炎が上がったのを吉田達はしつかりと撮影した。

同時に足元になんとも言えない不気味な地響きが伝わって来ていた。

やがて宗谷湾から吹き付ける強い風で爆炎と煙が流されると、明らかに手負いの巨大ワームが交差点でのたうち回っていた。

過酷な火星環境で鍛えられた生命力はまだワームに残っており、もがきつつも稚内市街に向かい始めた。

南稚内駅前からズームレンズで捉えるまでもなく、吉田の目には巨大ワームの不気味な姿が写っていた。

「何の冗談だよ。これは、——」

余りにも非現実的な光景に吉田達は固まってしまっていた。

上空のAWACSは、

「第2射攻撃ポイント送信！カウントダウン！5、4、3、2、1、撃え——！」

立ち直る隙を与えずに戦域管制官が攻撃命令を下す。

国道40号線を少し北上した所で再び巨大ワームは爆発の嵐に包まれるのだが、ほんの僅かな瞬間、ワームの口から強力な酸性胃液が稚内市街に向けて放たれた。

ワームの酸性体液は宗谷湾からの北風で僅かに押し流されて稚内市街手前、宗谷本線南稚内駅周辺に降り注いだ。列車を待つ市民数百人が短時間で成す術もなく溶けていった。

吉田達テレビクルーも呆然と巨大ワームを目の当たりにして動けず、撮影中のカメラを遺してその場で溶解した。

ワームは戦闘機の爆撃と砲弾の嵐でズタズタに引きちぎられて、稚内市街の手前に骸を晒す事となった。

後日、現場で吉田達テレビクルーのカメラ映像がHBC放送局から親局を通じて全国に放映され、戦闘の凄まじさに加え、吉田達が降り注いだ胃液で溶けていく最期を視た視聴者は、余りの酷さにテレビの前で顔面蒼白になった。

日本史上初の火星巨大ワーム本土上陸と、吉田達の遺した衝撃的な映像により、日本国民の間に火星生物討伐の気運が高まっていった。

火星研究機構

地球暦2019年11月1日【東京都千代田区市ケ谷 防衛省内】
稚内迎撃戦^{わっかないげいげせん}で多くの国民が犠牲^{ぎせい}となった事で、火星新天地進出の有無^{うむ}にかかわらず、火星巨大生物が襲撃^{しゅうげき}する事実^{じつじ}に恐怖した日本国民は、与野党問わず火星危険生物の排除^{はいじょ}を政府に求めた。

日本国政府は英国連邦極東、極東米露と共に日英火星生物研究所を極東各国が参加する『火星研究機構』（理事長：澁澤首相 本部：市ケ谷防衛省内）に拡大発足^{かくだいほつそく}させ、マルス文明研究と火星生物の研究、対策に取り組む事になった。

火星研究機構の建物は、その研究内容と万一の火星生物のバイオハザードに備えて防衛省中庭の即席ワーム研究所を改築し、中庭部分に窓のない高層ビルディングが建築された。四周を囲む防衛省建物とは隔絶された構造となっており、出入口も地下鉄市ケ谷駅の特別改札からとなっていた。車両は隣接する公園を入り口に、地下駐車場が設けられた。

その研究機構の会議では、

「先日^{せんじつ}の市ケ谷と稚内^{わっかない}に上陸した巨大ワームは、マルス側データによりますと短時間の水中活動が可能、との事でしたが今回は明らかに長時間の水中活動に耐えうる体質に変化していました。つまり、火星生物も環境激変に柔軟な適応力を持ち、多少の知能も有るということが分かりました」

尖山 から参加した岬教授^{みさき}が説明した。

「巨大ワームの生態、生い立ちと繁殖^{はんしよく}形態まで調べる必要があります。」

火星には、巨大ワームの他、オオトカゲ、サソリモドキも居ます。特殊な生態系を解明しないとワームの生態まで辿^{たど}り着けないかも知れません」

生物研究局長の東南海大学の大鳥「教授」が付け加えた。

「先月の艦隊襲撃時と市ケ谷に現れた巨大ワーム、北海道で迎撃したワームの戦闘記録を分析すると、巨大ワームには30mm以上の重機

関銃やロケット弾、対戦車ミサイルを背後から撃ち込むのが有効です。また、精密誘導爆弾と火砲による集中砲撃も有効です。注意すべきは、近接戦闘によるワーム口からの酸性胃液の噴射と、巨大掃除機のような吸引力、艦船を海に引きずり込む巻き込みです」

戦術作戦局長の英国連邦軍ロイド少将が説明した。

「以上の情報から我々が再度、アルテムィア上陸、入植後の防衛、防衛対策を検討しましょう」

元陸上自衛隊即応部隊出身の石原統括理事が会議の参加者に呼び掛けた。

生物研究局は火星生物の生態系を分析、脅威となる生物を特定する。

戦術作戦局は火星生物の特徴を手掛かりに、現有戦力での対策を練る。

統括理事会では、各部署の報告を基に火星地上での有効な上陸、防衛作戦を決定する。

各部署の目標はシンプルに設定されており、各国利害による方針の違いが有れど、あらゆる状況に対応出来るように、幾通りもの戦略プランを立案する事になる。

また、アドバイザーとしてマルスアカデミーのゼイエスが技術的な助言を、イワフネはアカデミー所有連絡艇を使った現地での実験や情報収集を手助けした。

地球暦2019年11月10日午前6時〔同 火星研究機構 戦術

作戦局戦略シミュレーション室〕

「作戦開始」ロイド少将が告げる。

「アルテムィア大陸ボレアリフ海岸まで50km!」

戦術管制官がカウントする。

「潜水艦『ジェファーソンシティ』、『サンタフェ』艦隊正面に魚雷発射! 起爆は15秒後」

「全艦隊ソナー使用。対潜ヘリは艦隊側面に展開、発熱ポッド付き爆雷投下!」

「戦闘ヘリは対潜ヘリの援護に回れ」

「攻撃機部隊発艦！上陸地点にMOAB（超大型爆弾）投下！」

ジョーンズ少将が指示する。

「艦隊中央、『ルーズベルト』両舷にワーム2体出現！」岬が報告する。

「護衛艦アスロツク（対潜水艦魚雷）を『ルーズベルト』左右に発射！」

「ワーム更に4体、艦隊側面に出現！発熱ポッド投下中のヘリを直撃！」

「ワーム、『ルーズベルト』甲板に進入！戦闘攻撃機発艦不可能！」

「側面に展開中のヘリはワームに全機喰われました」

「『ルーズベルト』後部スクリューに巨大ワームがからまりました！航行不能！」

「上陸地点にMOAB集中投下成功。上陸地点地下のレーダー反応消えました！」

「ここまでにしましょう」ロイド少将がジョーンズ少将に言った。

「主力空母が機能不全になった段階で作戦は失敗です。ワーム出現をもっと早めに探知しなければ、不意打ちを喰らうばかりですな」

「中将、ワームは原子炉等高熱源に反応します。潜水艦から発熱ポッド搭載のドローンを艦隊正面に発進させて、囷にしては如何でしょうか？」

大鳥が提案した。

「ヘリは確かにワーム対策に有効ですが、真下から喰われてはもとも子も有りません。ヘリ高度は100m以上にしてエンジンの熱源反応を薄くし、高速で行動しましょう。それと、発熱ポッドを吊るすよりも、デコイをばら蒔いて艦隊側面から引き離すように誘（おび）き出すのも一案かと考えます」

岬も提案した。

「ありがとうミスター大鳥にミス、ミサキ。お前達、プロの我々がアイデアを絞らんと恥ずかしいぞー！」

ジョーンズ少将が幕僚達を叱咤した。

「中将、先程の全艦隊ソナーとMOABの海岸使用は適切だと思いません」ロイド少将が評価した。

「ロイド少将、かたじけない。我々は1度敗北している。もっと損害

を減らして上陸しないと亡くなった海兵達に申し訳が立たん」

ジョーンズ予備役少将は海図とアルテミア大陸の地図を睨んだ。

その日も、戦術作戦局のシミレーション演習は夜遅くまで繰り返された。

相思相愛

地球暦2019年11月2日【富山県立山市尖山】

巨大ワームの胃酸いさんで全身を焼かれた大月の治療が始まって、一月になろうとしていた。大月の感覚的には目覚めて10日程だが、培養ばいよう溶液ようえきの中で漂ただよっているだけなので時間感覚があやふやになっていた。

そんな大月にずっと付き添そう西野は、毎日治療カプセルの傍かたわらで大月に話し掛かけ続けた。

一日中二人きりで、最初 大月は照れていたが、自然と人恋しくなり、思うまま、とりとめなく、話し始めた。たわいもない雑談だが、そんな雑談でも気さくに付き合う西野が新鮮で愛いとしく思えた。

そんな大月にある日、西野は「ミーコ」こと『西野 美衣子』を紹介した。

意識を取り戻した直後に、東山と岩崎官房長官から、西野と『ミーコ』が大月救出に奮闘した事を伝えられていた大月は、

「初めまして美衣子さん。助けてくれてありがとうございます。ひかりも遅くはなったけど、本当にありがとう」と感謝した。

美衣子は治療カプセルに近付くと、

「よろしくね『お父さん』と挨拶した。

大月は？ と思っただが、続いて彼女が

「あなたの存在がひかりを助け、幸せの素もとになっている。ひかりが大月の事を強く想わなければ私は機械の中に閉じ籠こもったままかも知れない。だから貴方の事は『お父さん』と呼ばせて貰うわ」

と滑らかな鱗に覆われた華奢きゃしゃな身体の胸を張ってフンスと大月を見つめた。

大月は納得し、受け入れたが、

「まだ結婚していないのに子持ち!？」

と焦るが、

「後先あとさきなんか些細さいさいな問題です!」

とひかりにプンスカと睨にらまれると、

「分かった。美衣子、よろしくね」と微笑んだ。

「大月は理解が早くて助かる」

満足そうに美衣子が言った。

大月は培養溶液の中でも多少の発声はっせいが可能な機器を声帯せいたいに付け、カプセル外の音は頭蓋骨ずがいこつに音振動を伝える機器を利用して、ひかりや美衣子と一日中話す事が出来た。

大月家の事、面倒事ばかりおこす悩ましいなや父親、体調が心配な母親、父親の影響で思わぬ苦勞をした学生時代と、報われない仕事しごと勤の最近まで、大月にまとりつく呪縛じゆばくは彼の精神を長く蝕むしばんでいたのかも知れない。

そんな大月のカミングアウトを、ひかりと美衣子は茶化したり軽蔑けいべつしたりせず、真面目まじめに聞いた。

そしてひかり自身も、震災で家族を失って祖父に引き取られた事、以外と人見知りのボツチであることを正直に語った。

大月自身あの震災を経験しており、何度も領うなずきながらひかりの話を聴いていた。

ある日大月はひかりとこんな会話を繰り広げた。

「俺は稼かせぎも少ないし、こんな歳だからこれ以上は偉くなれない」

大月がふと、言った。

「私が稼かせいで”あなた”を偉くして見せます!」

自信たっぷりぷりにひかりが言い切った。

「逆玉とか要いらないからね」

大月はむず痒かゆくなって一応抵抗した。

「”あなた”はあなたにしか出来ない仕事を頑張ってください。私はちゃんと見ているから」

「俺はまだ何か出来るのかな?」

「焦こらず一緒に探たづみましょう」

「俺は結構ヤキモチ焼きなんだ」

「奇遇きぐうですね。私もヤンデレる自信がありますよお」

「そこまで尽くしてくれても、リターンは少ないぞ?」

「足りない分は ” これからのあなたの人生 ” で払はらってください

ね」

「出世払いだと割りが合わないと思う」

「お釣りが沢山来る予感がしますよお」

と言ってひかりは笑った。

「やっと年貢の納め時に気がつきましたねえ」

ひかりが大月をコーナーまで追い詰めた。

「年貢の一括払いは無理だ。”一生払い”にしてくれ」

「ホントにしようがない方ですねえ」

涙を堪えながら満面の笑みでひかりが大月のカプセルにそつと口づけをした。

美衣子は一連のやり取りを離れた所から見ていた。

そして二人に気付かれないように、そつと治療室を出るのだった。

—————

たまたまその日、大月の見舞いに来た春日は、大月の治療に携わる
東南海大学の岬教授と話す機会が有った。

「以前、イワフネさんに連れてもらって火星の海を見たのですが」

と春日が話すと岬の瞳がキラリと光って春日の話に食い入るよう
に聞き入った。

「ほおー、海の色が薄いとう？」岬が尋ねる。

「ええ、イワフネさんはまだ生物が少ないからだと言っていましたね。
でも、海老とかは養殖出来るかも知れませんか。有機質の成分やプ
ランクトンを食べますからね」

春日が答えた。

「火星の海はこれからですよ！直接行けたらとっても嬉しいんです
が」

「でもワームやサソリモドキがいますからねえ」

春日の声が落ちる。

「後は、陸上の動物？いや、昆虫でしょうかね？サソリモドキはときめ
かないです」

春日がうんざりした顔をした。

岬は、

「春日さん、火星の生き物についてもっと教えて下さい！」
と春日に食い付いた。

春日はしまったと思ったが、海洋生物のスペシャリストと話す良い機会だと思い、その日は遅くまで岬と語り合った。

その日を境に、大月の見舞いに春日が訪れると、その後は、岬にせがまれて火星の話題をする機会が多くなったが、同年代の女性であり、飾らない性格の岬みさき風沙なづさに春日もまんざらではなかった。

イワフネハウス ビフォー&アフター

地球暦2019年11月10日【岩手県 気仙沼市 沖合】

尖山で治療を続ける大月の容態が安定してきたので、イワフネや春日は再び角紅社員として、火星で養殖できる可能性がある海産物の選定のため、気仙沼市沖の養殖いかに来ていた。

「今日は牡蠣、貝類の実際に養殖している現場を見る事で、火星沿岸養殖の可能性を探ります」春日が言った。

「養殖と言っても、カプセルでクローンを作る訳ではなく、現地の自然で育てる訳ですね」

手帳を片手にグレーのスーツを着たイワフネがメモを取りながら春日の説明を聞く。

「そうですね。昔から養殖と言ったら私達はまず海に浮かぶ生け簀や、養殖いかだを想像しますね。カプセルで育てる発想は確かにありますが、普通の人間はコスト（費用）を考えますから自然と”そこに有るもので”となるんです」

「なるほど、ラボ（研究室）の中で人生の大半を過ごす我々には思い付きませんし、新鮮ですね」

春日の説明を聴いたイワフネが感心した。

—————

その頃尖山基地では、

『妹が欲しい』と美衣子が大月とひかりに言った。

「ファっ!？」大月が絶句し、

「まあ、美衣子、まだ気が早いわよ。ねえ、”あなた”」赤面したひかりが頬を赤く染めつつも、満更ではない様子で身体をくねらせながらカプセル内の大月に語りかける。

カプセルから逃げ出すことも出来ない大月は、

「美衣子さん。”まだまだ”時間がかかるものなんですよ、人間はその、色々よね？」

とブクブク泡を吐きながら言ってお茶を濁すしか出来なかった。

美衣子は、

『人間は“つがい”になると10ヶ月で子供が出来るはず』

『大月とひかりの子供は10ヶ月待てば良いの？』

美衣子が素直な瞳で尋ねてくる。

45億年も地球に居るから生殖の仕組みは分かる筈(はず)だが、“つがい”に至る人間ならではの事情ももつと観察して欲しい所だと、大月は思った。

“つがい” 人類用語では『夫婦』と言うけれど、人間社会の男女は夫婦になるまで、もつと前の段階で心身ともに親密になって、とつても時間をかけてお互いの気持ちを確かめて築き上げる特別な関係なんだ

大月の乏しい恋愛経験と、保険体育の知識ではそこまで説明するのがやつとだった。作者的にもね。

『ふーん。ひかり、大月は保守的な考えみたい』

美衣子はそれだけ言うと、スタスタと医療カプセルの有る部屋を出ていった。

大月はやられた！と言う顔をして、

ひかりは大月の明確な意思を知って歓喜して、

美衣子を見送った。

【同 尖山基地 保守管理人工知能『タカミムスビ』メインサーバールーム】

美衣子はどうしても妹が欲しかった。

大月とひかりが仲睦まじい所に何時までも居られるほど、この進化した人工知能は無粋ではないのだ。

では、どうするか？

大月とひかりの子供を待つにはまだ“少し”時間がかかるらしい。

美衣子は自分と同じクローン体に仲間を“容れる”事を思い付いた。

『タカミムスビ、あなたお外に出たい？』

美衣子がメインサーバーに語りかける。

“私はあるじの命で此処の守りを任されています。離れることは出来ません。”

『クローンの身体で此処の中を動き回れば良いじゃない』

”クローン体で此処の守りが出来るのでしょうか？機械の中でしか活動していないのでやり方が分かりません。”

『大丈夫。私が教えてあげる。だから、あなたは私の妹になりなさい』
”妹ですか？”

”それはどの様な概念で生物的な関係はー”

『細かいことは、実地に覚えた方が早い。貴女は今日から「鷹見結」よ』

『タカミムスビのシステムコアをクローンN0. 2に転送』

”あの、ちよつとー”

しばらくすると、尖山基地最深部の親カプセルから、2体目のクローンが現れた。足がぶるぶる震えて小鹿のようになっていた。

『結、早く上に上がってくる』美衣子が急かした。

”あもう、上手く歩けなくて。”

『さすが私の妹、早速甘え方を覚えているのね。恐ろしい子。分かった、転送するわ』

美衣子の元によろやく、同じ背の高さのクローン体だが、どこか儂げな雰囲気うろたの少女が現れた。

1時間後、大月の治療室に『妹が出来た』と言って、”鷹見結”の手を引いて美衣子が戻ると、二人はしばらく啞然あぜんとしていた。

”鷹見結です。美衣子姉さんの妹です。イワシパイが食べたいです。”と言うと、美衣子の時と同じくパタリと倒れてしまった。

ひかりはあわててイワフネとゼイエスに連絡をとり、”また”カボチャポタージュを作る準備を始めたのだった。

鷹見結がひかりのポタージュスーヴで数日間栄養補給を受けている間に美衣子は、タカミムスビの保守点検専用人工知能のプログラムを根本こんぽんから書き換え、親カプセルのバックアップ機能を付加させて美衣子と同じ機能を併せ持つ人工知能へとバージョンアップした。

鷹見結は姉の美衣子にくっついて尖山基地の中を日々動き回り、治療室内の大月やひかり、岬や春日達と話をしたり、尖山の周りを散策しながら膨大な分野の情報を収集し、蓄積しつつあった。

もともと基地の保守点検管理機能がメインであった「名残り」から家事や整理整頓に強い興味を持ち、大月の治療・治癒システムを日々更新し、ひかりから各種マルス料理を学び、春日が仕入れてきた地球海産物や岬が持ち込んだ火星生物サンプルの分析等、新鮮な情報の更新に喜びを見出だすという「妹」としての地位を確立しつつあった。「おいモウゼ、また基地のエネルギー供給システムがダウンしているぞ！」格納庫でシャトルを整備中のユダから管制室のモウゼに苦情が入る。

「すまんユダ、鷹見結が食事後の昼寝を体験しているらしい」モウゼが肩を竦めた。

「またか」ユダが溜め息をついた。

「昨日は温泉体験と言って基地内の水が全部熱湯になったばかりじゃないか」

「ああ、このままでは基地機能が維持出来ないな。イワフネ隊長に改善の具申をしないとな」

モウゼが言った。

「万能人工知能にグレードアップしたとはいえ、身体は1つだからなあ」

ユダがぼやいた途端に基地内の全照明が落ちた。

大月の治療室に内線通話すると、美衣子と共に鷹見結がイワフネハウスの『宴会』に参加して基地から遠く離れた為に基地機能の大半が麻痺したようだった。

真つ暗な基地の中で途方に暮れるモウゼとユダであった。

モウゼとユダ達尖山基地隊員の悲鳴にも似た嘆願（たんがん）がイワフネに寄せられると、アマトハ、ゼイエス、イワフネ、ひかり、春日、岬、東山が大月のカプセルを囲んで対策会議を開いた。

話し合いの末、イワフネハウスとその周辺を再開発し、大月”達”とイワフネ達尖山基地のマルス人要員宿舎に、基地機能を併せ持つ建物を建設する運びとなった（大月は途中で治療薬に含まれた麻酔で寝てしまい、話し合いの結論は聞いていない）。

大月の自宅であるアパート「サンライズ」の土地建物は日本政府が

買い取り、入居者には十分な補償を行った上で取り壊され、隣接するイワフネハウスを拡大再建築する形で新しいイワフネハウスが爆誕ばくたんする事となった。

地球暦2019年11月23日【富山県立山市 尖山マルス基地】

『大月、だいぶ良くなった。もうカプセルから出ても大丈夫かも』

と美衣子が言ったので、岬教授と自衛隊中央病院の医官が大月を診察して皮膚の再生が完了した事を確認した。

「大月さんお疲れ様でした。後は2週間程再生した皮膚を慣らせる為に自宅でリハビリに移りましょう」

岬が言った。

「あなた」今日は『新しい我が家で快気祝い』をしましょうね♪」満面の笑みでひかりが言う。

「それでは、イワフネハウスに帰りましょう！」

何故か岬まで楽しそうに宣言した。

『大月帰るの？私達も行くよ』

美衣子と鷹見結も同行する様だ。

「他のメンバーも既に先に行っている所以我々も向かいましょう」イワフネが言った。

「そんなに沢山イワフネハウスに入れるの？」

リニユールしたイワフネハウスの事を殆ど知らない大月は疑問に思ったが、取り合えず帰る事にした。

大月は美衣子にせがまれるまま、彼女を肩車する。

「そう。これよ。お父さんは察しが良くて助かる。ひかりが婿にしたがるのも分かるかも」

と満足そうに身体を揺らしながら怪しい事を言っていた。

そんな美衣子を羨ましそうに結むすびがじつと見つめていたので、ひかりが結を肩車すると美衣子と結は顔を見合わせて笑った。

イワフネハウスへはアダムスキー型シャトルに全員が乗り込んで向かった。

30分後、シャトルから降りた大月が目にしたのは白亜の御殿だった。

「あれ？アパートは？」大月が聞くと、

「アパートのお部屋もお引越してみました！」とひかりが元気よく言った。

「それでは、”あなた”新しい我が家のご紹介ですよー！」
(以下、ひかりのナレーションです。)

さあ、それでは、生まれ変わった『NEW イワフネハウス』を見てみましょうね♪

まず正面玄関は大月家専用(表札もあるよ)と宿舎の皆さん用に分かれていきます。広くて明るいエントランスを抜けるとまずは1階、『私達』のお部屋です！

なんと言う事でしょう！独身男性の独特の雰囲気はどこへやら、新婚夫婦のマイホーム風マンションをイメージしたお部屋に大変身！二人が寝るには十分な広さのダブルベッドを備えた寝室に、お仕事部屋である書斎、家族だんらん団欒を楽しむリビングダイニングキッチン、可愛い美衣子ちゃんむすびと結ちゃんの子供？部屋も併せて4LDKの居住スペースです！

リビングダイニングキッチンにある特設扉を通ると、大月さん家のお隣はイワフネハウスに住む愉快(ゆかい)な面々が集う食堂&宴会スペースを兼ねたキッチンダイニングルームです♪

落ち着いた雰囲気のダイニングルームは皆さんの胃袋を満たし、ストレスを発散させてくれるでしょう。キッチンには非番の宮内庁料理人の方々がマルス料理の研究も兼ねて常駐される様ですね♪

2階へは飛行艇が収まる広さのエレベーターで昇るか、マルスの皆さんがすれ違える幅を持つ階段で上がります。

2階はイワフネハウスに”入居している”マルス人の皆さんと岬教授、春日、東山の個室が並びます。それぞれにユニットバス、簡単なキッチンがありますよ♪

3階はマルスアカデミーの大使館とゲストハウスになります。主にアマトハさんとゼイエスさんが日々、研究の傍ら極東各国とホットラインで通信したり、日本の首相官邸とも会議が出来る様に円卓の会議室もありますよ♪

屋上は広々とした芝生で覆われて日光浴に最適！エレベーターは屋上までそのまま通じて、飛行艇が飛び立てるスペースになります。

さて、今度は地下スペースです♪

地下1階は皆さんが1日の疲れを癒す大浴場です！富山県は立山市から次元転送して引いた源泉掛け流しの豪華温泉が皆さんを待っています。

1度に15人は入れる温泉は勿論、男女別ですよ♪

混浴ご希望の方は美衣子さんがスペシャル混浴露天風呂に転送してくれます。ただし、転送先はアットランダムで現地解散みたくです。1度試した東山が翌朝、浴衣1枚で凍えながら青森県の恐山温泉から新幹線で帰ってきました♪それ以来、誰も混浴なんて言いませんよお？

地下2階はマルス基地格納庫になります。日本国内や極東各国を結ぶアダムスキー号やマイヤー号等連絡シャトルが待機しています。勿論、自家用車スペースもありますよ♪地下道を通って国道1号線に接続しています。

地下3階は美衣子ちゃんの親カプセル、結ちゃんの研究室&調理室、岬教授の研究室になります。

結ちゃんの調理室では夜な夜なひかりさん主催の料理教室が開催されていますが、男性は普段入れません。ひかりさん曰く、『女の城』なのだそうです♪

地下4階は火星原初海洋を模したプールになります。ここは岬教授と春日さんが養殖の研究を行っています。品種改良された火星海老や火星ホタテ貝がここから広まっていく事でしょう！

角紅デベロップメントがマルス土木技術を応用して造り上げた白亜の御殿は此処に住まう皆さんに笑顔と安らぎをもたらしてくれる事でしょう♪

「で、この建物の名前は？」

何故か諦念ていねんの表情で大月が聞いた。

「もちろん『愛の巣&イワフネハウス』よ！」

ひかりが自信を持って言い切った。

「分かった。せめて、『愛の巢』は取り除いて普通にイワフネハウスな」
大月が訂正を主張した。

「何ですかー！むーっ」
拗ねるひかりに大月が、

「愛の巢なんてのはこれから”築くもの”だろ？だから、まだまだこれからだろ？ひかり？」

と説くとひかりは照れて大月の腕にしがみつき、

「お部屋ではちゃんと優しくしてくださいね♪」

と小さく大月にだけ聴こえるように言った。

「もちろん」

大月は優しくひかりの手を取ると新しい”マイホーム”に向かった。

そんな二人の後ろ姿に美衣子と結が、

「祝、つがい誕生」「私達、お邪魔虫？」

と言った。

イワフネや岬教授、春日達はそんな二人を連れて1階のダイニングルームで主役の居ない「快気祝い」を楽しく開催するのだった。

アマトハとゼイエス、遅れて仁志野や澁澤に岩崎までもが乱入したのは予想外だったが。

新しい二人の門出と、イワフネ達愉快的な面々の引越快気祝いが賑やかに行われたのだった。

大月の快気祝いが行われた翌日、美衣子と結は大月とひかり立ち合いの下、首相官邸で秘かに澁澤総理大臣と面会した。

「今まで日本列島を護まもってくれてありがとうございます。日本国民を代表してお礼申し上げます」

澁澤総理が座ったままだが頭を下げて感謝した。

『私の役割はこの列島全ての生命が無事に育ち、幸せになること。今はちよっと他の土地の人が居るけど？』

と美衣子が外国人の処遇について質問した。

「我が国に危害を加えない限りは日本人と同じ扱いにして欲しい」と

澁澤が答えた。

「わかった。でも、日本人の大部分が恐怖を感じた対象は私が外の世界に跳ばしてしまうから、そこは覚えておいて」

と美衣子は澁澤に釘をさした。

「充分肝に命じましょう」

と真剣な表情で澁澤が言った。

美衣子と無口な結の超越的な存在感は室内の全員を圧倒していた。

同席していた岩崎官房長官や東山、大月、ひかりはあらためて『生き神に近い存在』の二人への認識を新たにした。

A—Day (第二次アルテムィア大陸上陸作戦)

地球暦2020年1月1日午前6時【北海道北部 宗谷岬(そうやみさき) 沖250kmの火星シレーヌス海】

極東アメリカ海軍航空母艦「セオドア・ルーズベルト」CIC(戦闘管制室)

「アルテムィア大陸ボレアリフ平野上陸地点まであと50km」

海上管制官が報告した。

「先行する日本潜水艦『そうりゆう』『じんりゆう』からは海底及び進路上の敵対生物反応無しとの報告」

『かが』『ひゆうが』哨戒(しょうかい)へりも艦隊側面は異常なしとの事です」

自衛隊の鷹匠(たかじょう)大佐が報告した。

「提督、そろそろかと」

海兵隊”少将”のジョーンズが、上陸作戦司令官のロイド提督に告げた。

全艦隊共通回線に通じるピンマイクのスイッチを入れると、ロイド提督は矢継ぎ(やつぎ)早に指示を出し始めた。

「全艦隊、上陸準備！潜水艦隊は海中ドローン発進、発熱ポッドを起動させてワームを誘き(おび)出せ！」

E2—C AWACS(早期警戒管制機)、艦隊防衛艦艇はソナー、レーダーを総動員して巨大ワームと飛来生物を警戒せよ。

上陸支援艦艇、空母所属攻撃機部隊は指定ポイントへの砲爆撃準備！所定のポイントへ進出せよ。

1度撃ったら停止命令が出るまで砲爆撃をひたすら続けよ！

上陸部隊、工兵は車輛と航空機に搭乗開始だ！

地上の安全が確保されるまではその棺桶(かんおけ)で待機しろ！」

「速度そのまま、攻撃機部隊発進！」

作戦司令官のロイド提督(中将に昇進)が命令した。

火星の一番長い1日、後に『A—Day』と呼ばれる第二次アルテムィア大陸上陸作戦が始まった。

上陸艦隊本隊の前面に20隻を超える日米英露潜水艦隊が展開し、

一斉に発熱ポッド搭載ドローンを発進させた。

「潜水ドローン、艦隊正面10キロまで到達」

ソナー員が報告する。

「潜水ドローン、発熱ポッド最大出力！海底から15m離れた位置を航行しながらワームを誘き出せ！」

潜水艦隊司令の名取大佐が指示する。

日米英露潜水艦隊から10km前方の海底付近を這うように潜航するドローン搭載化学反応ポッドが周囲の海水を熱く揺らめかせる。

次の瞬間、海底を突き破った巨大ワームが潜水ドローンを丸呑みしてドローン部隊の半数が消えた。

「ワーム出現、数5！」

ソナー員が報告する。

「残りのドローンを我々の魚雷攻撃範囲に誘導！」

名取大佐が指示する。

「全艦隊ホーミング魚雷発射！近接信管セット！」

『そうりゆう』を始めとする日米英露潜水艦隊が全力の魚雷攻撃を行った。

80本近い魚雷が5体の巨大ワームに殺到した。

巨大ワームは強い熱源を持つ潜水ドローンを食べ尽くす事に夢中になっていたために魚雷への反応が僅かに遅れた。

潜水艦隊の存在に気付いた5体のワームが頭を後ろに向けた瞬間にワームの周辺で80発の魚雷が炸裂した。

ソナー員がヘッドホンを外してしまう程の大爆発が治まると巨大ワームは夥しい数の細かい肉片と化して海中を漂っていた。

巨大ワームの亡骸から大量の血液と肉片が海中に拡散した所に後続のワーム群が殺到した。

「前方7km地点の海底から更に巨大ワーム！数13！」

ソナー員が緊迫した声で名取に報告した。

「全艦隊、残弾全てを前方7kmに撃ち込め！」

名取は全力攻撃を命じると、

「司令部へ、我々は後方で弾薬補給に移る」

と戦線からの一時後退を報告した。

上陸艦隊 旗艦『セオドア・ルーズベルト』CIC（戦闘指揮所）
「連合潜水艦隊、海中ワーム8個体を撃破！全弾撃ち尽くしたので後退します！」潜水管制官が報告した。

「上空待機中の対潜ヘリ群は前方7キロ地点に急行せよ！魚雷と爆雷を全弾投下！」

ロイド提督が巨大ワーム群の殲滅を指示する。

上陸艦隊上空を旋回していた50機余りの対潜ヘリが前方に全速力で向かうと、指示された地点を高速で通過する際に搭載した魚雷や爆雷を次々と投下していった。

艦隊正面の海面が、遠目に見ても分かるほどに爆発で泡立った。

「前方ワーム群排除に成功！」

「よし、この機を逃すな！攻撃機部隊は指定されたポイントにミサイルと爆弾投下！」

『シールズ』『スペツナズ』ヘリボーン出撃！上陸地点に地中レーダー設置、死守せよ！アイアンドームシステムを上手く使え！

ロイド提督が作戦第2段階への移行を指示した。

「こちら司令部。キャツスルーに爆撃管制を任せる」

航空管制官が上陸地点の遙か上空を飛行する航空自衛隊E3Aセントリー早期警戒管制機（AWACS）に告げた。

「キャツスルー、了解した。これより爆撃管制に入る」
AWACSが返答した。

「キャツスルーから全ホークへ、指定ポイントにナパーム全弾投下！効果範囲の重複を優先。くれぐれも高度を落とすなよ、巨大ワームやサソリモドキに喰われるぞ！」

AWACSが日米のF35やF2攻撃機に熱源を地上に集中させるように指示した。

数十機の攻撃機がナパーム弾を投下し、上陸地点から少し内陸部の平地に数カ所の大きい熱源が発生した。そしてその熱源を目指して巨大な“動く砂山”が無数に群がろうとしていた。

ナパーム弾の投下と時を同じくしてボレアリフ海岸にコードネー

ム”パンサー”こと極東米軍特殊部隊『シールズ』と極東ロシア連邦特殊部隊『スペツナズ』がブラックホークヘリやミル15大型輸送ヘリで降下した。

航空自衛隊のC2大型輸送機が極東米陸軍の拠点対空防衛兵器『アイアンドーム・システム』と地中探査レーダーが入ったコンテナを海岸近くの平地に投下した。

「こちらパンサーアルファ、アイアンドームと地中レーダーの投下地点に到着した。損傷は無い模様、これから設置する！」

シールズとスペツナズに随行した米露工兵部隊が素早くレーダーを設置し、アイアンドームシステムの組み立てを始めた。

「ん？来たな。キャツスルーより司令部と全艦隊に告ぐ、上陸地点から5キロ内陸平地に百を超える多数の巨大ワーム群を確認。地中から更に後続の巨大ワーム群が接近中」

上陸作戦司令部のロイド提督は、

「全艦隊は5キロ内陸に、全砲弾とミサイルを発射せよ」と命令した。

20隻余りの戦闘艦艇からハープーン対艦ミサイル、トマホーク巡航ミサイル、SSN（潜水艦発射ミサイル）等各種ミサイルが一斉に発射され、

極東米海軍特殊駆逐艦『ズムウォルト』から”レールガン”が強力な蒼白い光を纏^{まと}って撃ち出され、高空から極東米露戦略爆撃機が巨大なMOAB（全ての爆弾の母）弾頭を惜しげもなく投下した。

地上や地下深くから接近する巨大ワームは人類が生み出した”鉄の嵐”をまともに受けて周囲の土砂ごと空中に吹き飛ばされバラバラの肉塊となって赤い大地に降り注いだ。

更に極東米空軍”極音速戦闘機”『オーロラ』が初めて実戦参加し、マツハ6の”極音速”で巨大ワーム群にマイクロ波とパルスレーザーを浴びせて巨大ワームを次々と焼き払った。

内陸部が爆炎と鉄の嵐に包まれていた頃、ロイド提督は上陸の機会を活（い）かすべく、主力上陸部隊を強襲揚陸艦艇から発進させた。

エアクッション挺や、揚陸艦、CH47大型ヘリに搭乗した米露海兵隊を主力とする上陸部隊はアパッチ対戦車やミル28戦闘ヘリの

護衛を受けて海岸に上陸し、予め特殊部隊シールズとスペツナズが確保した海岸近くの高地に拠点を築いた。

更に後続のロシア陸軍を主力とする機甲師団が上陸し、拠点に展開した。

「司令部へ、こちらグリズリー1、目標地点到着。展開完了した」

ロシアなまりで報告が入る。

ボレアリフ平原上空を旋回するもう1機のAWACSが地平線の彼方から接近する黒い霞かすみのような虫の群を探知した。

「キャッスル2より全部隊に警告！上陸地点から10キロ内陸に無数の小型飛翔体群を確認——サソリモドキの大群が巨大ワームの死骸に向かって接近中」

「こちら司令部、『ブレインズ』の意見を聞きたい」

ロイド提督が海上自衛隊護衛空母『かが』に搭乗している火星研究機構の火星生物対策チーム（ブレインズ）に意見を求めた。

「こちらブレインズ。サソリモドキの大群はワームの死骸だけでは足りないだろう。ワーム死骸と共に焼き払い、殲滅せんめつするのが一番有効だ」

ブレインズのリーダーである天草がロイド提督の司令部に返答した。

「司令部より全作戦部隊へ、上陸地点に接近する全ての火星生物をあらゆる火力で殲滅せよ。ヘリ部隊は高度を落とすな、奴等に喰われるか、ローターに虫バグが詰まって墜落するぞ！」

副官のジョーンズ少将が注意を喚起かんきした。

「グリズリー1、我々は5キロ以内に侵入したバグズを攻撃する」

ロシア機甲師団指揮官が司令部に告げた。

「了解、グリズリー1。これから弾薬補給を開始する。遠慮せずにごちかましてくれ」

司令部が返答した。

「同志諸君。シレーヌス海の屈辱を晴らす時が来た。偉大な祖国陸軍の真髄を全軍に見せつけろ！特殊戦車部隊も戦列に入り、最大射程でマイクロ波照射！」

機甲師団指揮官が命令した。

ロシア陸軍主力戦車T90の125mm砲がサソリモドキ群に一斉射撃される。また、最新鋭戦車『アルタイ』も武骨な四角い砲塔を旋回させて130mm砲を放つ。

戦車砲弾は空中に群れるサソリモドキの真ん中で炸裂し、爆風と破片、焼夷弾の火炎を撒き散らした。サソリモドキは鉄と炎に包まれてボトボトと赤い大地に落ちると地中を進んでいた巨大ワームが飛び出して死骸を吸い込んでいった。

飛び出してきた巨大ワームにも戦車砲弾が直撃し、頭を失ったワームが地面でのたうつようにもがいたが、サソリモドキ群が殺到して巨大ワームは傷口から喰われていった。

戦列に加わったロシア特殊戦車部隊はアルタイ戦車に似た四角い砲塔を持つが、そこに砲身は無く、替わりに付けられた横長の湾曲したシルバープレートがサソリモドキに向けられると、低い駆動音と共にマイクロ波が照射された。

サソリモドキ群は巨大な電子レンジとも言える特殊戦車部隊のマイクロ波を浴びると、体内から熱い体液を噴き出して破裂しながら地面に落下していった。

最初の上陸部隊が降り立つてから3時間が経つ頃には、巨大ワームやサソリモドキの大群は探知されなくなり、散発的に接近する巨大ワームやサソリモドキの小さな群が戦闘ヘリや戦車砲弾の鉄の嵐を浴びて粉碎されていた。

「これで一息つけるか?」

ロイド提督が眩ぐが、
「キャツスル1緊急!多数の弾道飛翔体^{だんどうひしょうたい}が上空から上陸地点に向かっている。これは——、岩石か」

「キャツスル2緊急!内陸30キロから無数の岩石が噴出しているのを見つけた。噴火か?違う——、ワームだ!巨大ワームの群が岩石を吐き出しているぞ!」

「グリズリー、飛来する岩石200個以上を確認した。迎撃する」
「こちらブレインズ。巨大ワームは人類のミサイルや砲弾を真似^{まね}して

いる」

「なんてクレイジーな奴等だ」

ジョーンズ少将が戦慄する。

「なに、心配いらんよ。対砲兵戦だと思えば良いのだ」

ロイド提督が言うのと、

「キャツスル2、全艦隊、部隊に岩石を吐き出す群のポイントを送信せよ。」

全軍に告ぐ、キャツスル2から送信されるポイントに撃ち込める物を全て発射せよ。

アイアンドーム、イージスシステムは対空防御戦闘開始！

全力の砲爆撃と”ワーム弾”防衛を命じた。

A—Dayの最後は巨大ワーム対人類の砲撃戦となった。

イージス艦隊から迎撃ミサイルが矢継ぎ早に発射され、陸上ではアイアンドーム短距離19連装迎撃ミサイルが次々と発射されて飛来する岩石を空中で砕き続けた。

”ワーム弾”発射地点にはロシア軍の定番兵器である『カチューシャ』多連装ロケット弾や203mm榴弾砲が流星雨の様に降り注いで巨大ワームの群を抹殺した。

それでも巨大ワームの岩石は人類の迎撃をくぐり抜けて上陸部隊と艦隊に降り注ぎ、数発が護衛空母や揚陸艦艇に命中し沈没は免れたものの、大破して戦線を離脱し北海道に向かった。

命中した岩石には無数の小型ワームが詰まっており、艦内で海兵に襲い掛かったが、自動小銃や炎放射器で駆逐された。

小型ワームの存在はブレインズが予測しており、対抗策も取られていたのである。

巨大ワームと予想外の大砲撃戦は1時間で巨大ワーム群が殲滅されて終了した。

1月1日午後6時40分、上陸部隊司令官ロイド提督は火星研究機構と極東各国に上陸作戦成功を報告した。

作戦開始から約半日に渡った激戦が終了した。

火星の一番長い日は、夜を迎えようとしていた。

人類都市ボレアリフ

地球暦2020年1月11日〔アルテムユア大陸ボレアリフ海岸上陸拠点〕

極東連合軍が火星大地に上陸して10日が過ぎた。最初の1週間は昼夜問わず、大小ワームやサソリモドキ等が襲来し、兵士達はひたすら装甲車両に籠ってバルカン砲と火砲を撃ち続け、アイアンドーム拠点防空システムは連日ワームが吐き出して拠点到飛来する”ワーム入り” 岩石を上空で撃墜し続けた。

お返しとばかりに極東ロシア軍の名兵器『カチューシャ』多連装ロケット弾が離れた位置の巨大ワームに鉄の嵐を降らせて撃滅した。

海岸近くの高地に築いた拠点は周囲約一キロ半あり、その圏外には夥しい火星生物の死骸と罫ドローン、溶けた装甲車の残骸が散らばっていた。

この3日間は襲撃が途絶え、拠点周辺に設置した地中探査レーダーも地面の下から近づくワームを捉える事は無かった。

ボレアリフ平原上空を旋回する極東米軍のAWACS（早期警戒機）も地上監視を続けているが、サソリモドキの群れや、巨大ワームの活動等は観測されなかった。

日本本土のマルスアカデミーからも、上陸拠点周囲10kmに火星生物は居ないとNEWイワフネハウスのアマトハからロイド提督に報告が来ていた。

上陸作戦司令部の空母『セオドア・ルーズベルト』のブリーフィングルームでロイド提督は、火星生物の警戒と殲滅を続行する一方で、本格的な上陸拠点構築と拡大に取り掛かる事を宣言した。

上陸艦隊のはるか後方で待機していた補給船団とドック船やコンテナ船が続々とボレアリフ海岸に到着し、ボレアリフ海岸拠点到駐留する兵士の宿舎、滑走路、シエルター式格納庫、管制塔、衛星打ち上げ施設、地下司令部、補給倉庫、採取鉱物精製プラント、軍港、長期滞在施設を次々と建設していった。

建設期間中、ボレアリフ海岸沖では極東連合海軍艦隊による徹底的

な巨大ワーム『狩り』や、海岸拠点からは連合空軍が核兵器以外の全ての爆弾を使用した20km圏内の敵対的火星生物 撃滅が連日連夜行われた。

地球暦2020年1月21日〔アルテミア大陸 『人類都市ボレアリア』〕

拡大増設された海岸拠点の人口は、極東各国駐留部隊と軍人の家族、設備保守点検を行う軍属やプラントで働く作業員とその家族等合わせて20万人にまで膨らみ、地方都市に匹敵する規模にまで発展した。

火星研究機構と極東各国政府はこの海岸拠点を、人類が築いた火星最初の都市『人類都市ボレアリア』と命名した。

人類都市ボレアリアを拠点として火星研究機構が組織した内陸資源採掘チームはボレアリア平原に進出し、強力な陸軍護衛部隊と空軍駐留部隊の援護を受けながら鉱物資源の採掘を開始、ボレアリア軍港から極東各国に『輸出』した。

ボレアリア都市郊外では、大月が米露艦隊と共に持ち込もうとした作物が栽培され、順調に生育した。

軍港のすぐ脇にある角紅商事が設置した生け簀では、岬教授と春日が育てた『火星シユリンプ（火星海老）』や牡蠣などが移されてほぼ予想通りに成長していった。

イワフネと春日は連日、岬教授と共に養殖設備の拡充に力を注いだ。

都市機能の運営が軌道に乗って一月が過ぎ、日本政府は人類都市ボレアリアの行政サービスを日本人以外の職員に引き継がせて英国連邦極東、ユーロピア自治区出身者が大半を占めるようになった段階で派遣していた日本政府職員を帰還させた。

澁澤首相は極東各国首脳と協議し、人類都市ボレアリアを極東米露、英国極東、ユーロピアで管理運営する事を提案し、各国の同意を得た。

同時に人類都市を始めとする生存圏拡大を見越して、ユーロピア自治区を独立国家として昇格させる事でも各国の了承を得た。

『ユーロピア共和国』の初代首相には自治区代表だったジャンヌが就任した。

日本政府としては、転移に巻き込まれて国内で避難的な生活を強いられてきた極東各国の国民が火星大地を第2の故郷として安全に定住出来るよう支援を続ける意向を持っていた。

人類都市ボレアリフは極東各国からの移住者により各国毎の区画が自然と誕生し、ボレアリフ都市中心部が極東4カ国の共同統治、都市郊外の区画を各国が各々の『領土』として開発、拡大された。

ある日、澁澤は横浜中華街にある台湾自治区の庁舎を訪問し、王代表と会談した。

「王代表。ユーロピア自治区が国に昇格した今、台湾人も悲願だった独立国家建設に動かないのですか？」と訊いた。

王代表は、

「澁澤首相。大陸の共産主義者が居ない今、我々は国家としての体裁よりも広大な火星大陸の開発と貴国との商売拡大に興味があります。台湾人コミュニティは充分日本の皆様に良くして頂いており、感謝できません。我々は既に日本国の一員、地方自治体で構わないと思うくらいです。」

と在日台湾人の声を伝えた。

澁澤は王代表の意向を尊重し、引き続き台湾自治区として自治独立を認めると共に、自衛隊入隊や地方公務員としての採用を認める方針を打ち出した。

台湾人の多くは、日本国民とほぼ同じ扱いを受けることを歓迎した。

また、人類都市ボレアリフの台湾自治区はアジアンエリアと呼ばれ、異国情緒溢れる街並みに日本本土のみならず極東各国から観光客が大挙して訪問し、活況を呈した。

ミーコとムスビ

地球暦2020年2月2日【東京都千代田区永田町 首相官邸 内閣官房執務室】

「テレビ番組ですか？」大月が訊いた。

「はい。基本的には日本社会の色々な出来事をマルスの方々に面白おかしくトークして頂く形になります。たまにアマトハさんやゼイエスさんをお招きしてトークに加わって頂く事を考えています」内閣官房広報担当者が言った。

「そしてこの番組を通じて、日本社会に自然と溶け込める雰囲気を作る事が目的です」

岩崎官房長官が付け加えた。

「では、美衣子と結がメインになりますね。彼女達はこれから大月家の一員として末永くこの国のお世話になるわけですから」

とゼイエスがアドバイスした。

「美衣子ちゃんと結ちゃんの社会勉強になるから面白い企画かも」とひかりが賛成する。

「これは録画になりますか？」大月が訊いた。

「出来れば生放送で今の世相についてトークして頂きたいのでそこを何とか」

と広報担当者と東山が手を合わせてお願いしてきた。

「ご存知ないかも知れませんが、家の美衣子と結は”非常”に毒舌です。がよろしいのですか？」

大月が最大の懸念事項について確認した。

「では一度、スタジオでリハーサルをして関係者の皆さんに視ていただきますよう」

広報担当者が提案した。

NEWイワフネハウスに戻った大月とひかりは、美衣子と結にテレビ出演の話をする、

「私達でテレビ界の”大御所”になるの」「姉さまなら大河や朝の連ドラを超えますわ」

と何故か視たこともないはずの番組名を出して喰い気味で了承した。

大月は悪い予感しかしなかったが、ひかりは何故かコロコロと笑っていた。

翌日、某国営放送のスタジオパークで本番形式のリハーサルが行われた。

「それでは行きます！スタート！」ディレクターが合図を出した。

(仮) 番組名「ミーコとムスビの時事放談」

ミーコの強い申し出でミーコが自作したNEWイワフネハウスの大月家リビングが再現され、食卓のテーブルでミーコとムスビが並んでポタージュスープを啜るシチュエーションで始まった。

カボチャのポタージュをふうふう冷ましながらミーコとムスビがチロチロと舌を出しながら味わっていた。

「今日もひかりのポタージュは絶品だわ」

「まったくです姉さま」

「ところで今日は私達でトークをしないといけないらしいわ」

「まあ、どうしましょう」

「何故かテーブルに今日の新聞とネットニュースが表示されたタブレット端末が有るわ」

「テンプレな展開ですわ。これをネタにするのですか?」

「ムスビ、どこからそんな言葉を覚えてきたのかしら。おそろしい子だわ」

「そんなにほめられると照れますわ」

「まあいいわ。まずは新聞からいきましよう」

美衣子が新聞各紙を「瞥すると片っ端から破り捨てた。

「姉さま、紙吹雪は綺麗ですが掃除が大変ですわ。それでどうされたのですか?」

「全部フェイクニュースよ。紙の無駄だわ。後で岩崎に文句を言いに行きましよう」

「どうしてフェイクニュースだと分かるのですか?」

「決まっているでしょう」美衣子が結とお揃いのワンピースを着た胸

をとん、と叩いて言った。

「ソースは私よ」

「なるほど、納得しましたわ」

ガツンツと、画面の外で大月がモニターに頭をぶつけた音が聞こえてきたが、

「お父さん、うるさいわよ」

「お母さんの夜のしつけが今一つですわ」

ドガシヤツと、今度は画面の外でひかりがモニターに頭をぶつけた音が聞こえてきた。

そんな雑音を無視した二人は、

「姉さま、次のネタを探しましょう。『ねつとにゆるす』を見ましょう」

二人が並んでタブレット端末を覗き込む。

「ふう」美衣子はため息をつくくと、

「虚しいわ」と言った。

「そうですねえ」結も同意した。

「人間は他人のつがいの事を知りたがり過ぎよ」

「世の中には知らないほうが良いこともあるわ」

「知る権利がありますわ姉さま」

「そんなに知りたいなら自分で足を運びなさいな」

美衣子がさらつと言った。

「あら、濫澤が批判されているわ」

「でも濫澤しか出来ない仕事よ」

「『そうり』とは大変なお仕事ね」

「批判だけしている人よりは仕事しているわ」

「お受験なんて、人間は苦行が好きなのね」

「そんな古い知識を無理矢理覚え込まされるなんて、『せんたーしけん』を考えた人は相当な鬼畜野郎ですわ」

「でも、この『ぐるめればーと』は素晴らしいわ」

「姉さま、結も大トロが食べたいです」

「はい！カーツトおっ!!」こめかみに青筋を浮かべたディレクターが叫んだ。

大月は”これで官房長官のお説教確定だ”と覚悟した。

阿修羅あしゅらのような表情をしたディレクターが大月に近づくと、

「素晴らしい！新鮮すぎます！」と絶賛した。

「国営放送の教育番組でありながら、このお堅い殻を吹き飛ばすリアクションと毒舌どくせつ！これは神番組間違いありません！」

”この内容は教育で流せるの？”と大月はドン引きしながら今後の二人を予想して質問する。

「二人はマルス人の中でも極めて異質です。気まぐれでいつどんな放送事故が起きるか分かりませんよ!？」

「それが良いのです。今の”火星日本列島”は先行き不安で視聴者は安心を求めています。お二人が安定したフリーダムな振舞いをすることで、逆境に置かれた国民の閉塞感へいそくかんを吹き飛ばしてくれるのです」

少し真面目な顔でディレクターが太鼓判たいこばんを押した。

大月は首をひねりながら、ひかりはクスクス笑いながら、美衣子と結の手を繋ぎながら家に帰った。

NEWイワフネハウスに帰宅すると、留守電に東山からメッセージが入っていた。

曰く、首相官邸でもリハーサル映像が生放送され、内閣官房執務室の職員が爆笑していたのでまたよろしくとの事だった。

大月は美衣子に耳打ちし、帰宅した東山は地下の浴場に入った瞬間に大分県の別府温泉に片道転送されるのだった。

帰宅したイワフネとアマトハ、ゼイエスに美衣子と結のテレビ出演について意見を求めると、

「日本社会に馴染なじむ良い機会です」

と快諾されるのだった。

ゼイエスはテレビ番組に興味を持った様だった。

こうしてマルス人姉妹の番組『ミーコ&ムスビの時事放談』は国営放送の教育チャンネルで毎週金曜日の夕方、ゴールデンタイムに全国放送された。

第1回目は先日のリハーサル収録をそのままノーカットで放送された。

番組終了直後から国営放送に問い合わせや感想が殺到し、概ね好意的な内容で番組スタッフと大月は胸を撫で下ろした。

第2回目以降も美衣子と結は番組に興味を持たず、フリーダムに振る舞って全国各地を廻って公開放送を楽しんだ。

特にゼイエスやアマトハ回でのミーコとムスビの”掛け合い”は視聴者の多くを楽しませた。

ミーコとムスビ（ゼイエス回）

「今日は私のマスターを紹介するわ」

「姉さまマスターですわ」

「マスター、今日も日本は概ね元気よ」

「イワフネはさつきハマチの生け簀すに落ちたけど概ね元気だわ」

「最近マスターの名前が鉄道マイスターに変更されているわ」

「イワフネは交渉スキルが2上がったわ」

「マスター今日の実験大丈夫なんですか？」

「イワフネは海老を育てられるのかしら」

「でもマスター、第5惑星のメタンを燃やして太陽にする実験は危ないわ」

「イワフネがマニュアル車を運転するのは危ないわ」

「あ、マスター帰っちゃった」

「お忙しいのですわ」

番組終了後、ゼイエスは内緒ないしょの実験がバレてアマトハにめっちゃめちゃ怒られたという。

ミーコとムスビ（アマトハ回）

「今日はマスターの同僚を紹介するわ」

「プロフェッサーアマトハいらっしやいませ」

「いつもマスターがやらかしてすいません」

「姉さまに頭を下げさせるマスターは鬼畜きしゆですわ」

「違うわムスビ、マスターはこの世このわりの理を探究しているの。だからいるんな事に『ちゃれんじ』するのよ」

「マスターは勇者ですわ」

「勇者は孤独なものよ」「哀愁あいしゆうを誘いますわ」

「この前もアマトハに怒られて孤独になっていたわ」

「クールですわ」

「でも直ぐに立ち直ったわ」

「不屈のマスターばねえですわ」

「今度は第2惑星の熱い地面に氷の彗星を落として雲を作るらしいわ」

「大自然にちゃれんじですわ」

「あら、アマトハが勝手に帰ってしまったわ」

「鱗の下からでも分かるくらい青筋が出ていましたわ」

番組終了直後、オリンポス山の研究所にある電磁カタパルトから金星に向けて冷凍爆弾を発射しようとしていたゼイエスはアマトハに捕まり、罰として信州にあるニュートリノ研究所の増強拡張工事を一人で行わされた。

ゼイエスの魔改造でニュートリノ研究所の加速速度は大幅に増加し、しばしば半物質や極小ブラックホールが観測される等様々な研究用途に使用可能となったが、反面、管理が難しい代物しろものとなり、『火星の火薬庫』とまで言われるようになったという。

アース・ガルディア艦隊来訪までの期間、毎週金曜日のゴールデンタイムに放映される二人の番組の視聴率は、驚異的な70%台を維持し続けた。

反面東山は毎週土曜日に胃腸科に通うことが多くなった。

ちなみにゼイエスは密かにJR各社に接触し、鉄道の旅番組に出たいと『売り込み』をかけた。

JR各社はゼイエスの売り込みを歓迎し、各社持ち回りでゼイエスを全国の鉄道路線旅に招待し、ゼイエスは趣味と鉄道改造の実益を兼ねて大月達とは別に日本各地を廻る事となった。

ゼイエスの鉄道一人旅はJRと旅行会社のタイアップで『そうだ火星行こう』の番組名で毎週金曜日夜に放送され、多くの鉄道ファンが視聴した。視聴率ではミーコとムスビに及ばないが、コアな熟年視聴者層の熱烈な支持を受け、常に40%台の視聴率を叩き出した。

総理大臣執務室でテレビを視ていた澁澤総理大臣と岩崎官房長官

だったが、

「マルス人融和計画はこれで上手く行くだろう」

「ええ、予想外の地方旅行ブームでJRの収益増加はもちろん、ゼイエスさんのアイデアで赤字路線が見事にリニューアルされて人気が出ています。地方自治体の観光収支にプラスの影響を与えている事から各地の自治体は番組誘致に躍起の様ですな」

「私は毎週こっぴどく野党やマスコミが叩かれるミーコとムスビの番組を絶賛したいな。下手な党首討論よりよっぽど素直な政治談義をあの二人はやってくれる」

と言っておおらかに笑った。

岩崎は、

「今度蓮ちゃんに埋め合わせしないとな」

と心の中で苦笑していた。

こちら地球

地球暦2020年2月14日「火星ボレアリス平野沿岸部、『ボレアリスシテイ』」

日本列島が火星に転移して2度目のバレンタインデーである。

昨年のバレンタインは転移した翌月で国家非常事態宣言下で物資統制もあり、ささやかな内輪でのバレンタインだったが、今年のバレンタインはボレアリスシテイにとっては『初めて迎える』人類イベントである。

日本本土や極東各国から祝いの物資が臨時で到着し、ボレアリスシテイは宴うたげに沸わいていた。

そのボレアリスシテイ中央地区の片隅かたすみに有る連合軍通信指令センターでは、とある場所からの重大な通信を受信し続けていた。

『こちら地球。宇宙国家「アース・ガルディア」。日本列島の生存者、応答せよ。』

ロシア訛りの時もあれば、フランスや中国訛りもある。そもそも地球に宇宙国家等有ったのか？日本列島で過ひねごしてきた各国軍人は首を捻ひねった。

そして、この通信は即座に市ヶ谷の火星研究機構に報告された。

「ついに来たか。」澁澤総理大臣が言った。

『今更我らに何の用ですかね？』

ケビン英国連邦極東首相が言った。

『地球は天変地異の嵐だ。こちらに支援なり、救助を求めるのは当然かもしれない。』

極東アメリカのミッチェル大統領が言った。

『我々は多大な犠牲を払って、やっと火星に第1歩を踏み出したばかりで、我々を見捨てた本国に支援する物資等有りません。』

極東ロシアのパノフ大統領が冷徹に言い放った。

『彼らは日本列島の生存者、と言いました。地球から日本列島の存在が確認されたのは明らかです。』ユーロピア自治国のジャンヌ首相が言った。

『私達の同胞はあの大変動が起きている地球に沢山生き残っている筈です。無下には出来ませぬ。』台湾自治区の王代表が言った。

いくつかの国は発言とは裏腹な行動に出るであろう事は明白だったが、各国首脳はおくびにも出さずに現状は情報収集に努める。という無難な方針を決めて散会した。

同日夜〔極東ロシア連邦首都エトロプルク 大統領府〕

パノフ大統領は極東首脳会議後、すぐに全幹部を集めて会議を開催した。

パノフは、ロシア人実業家が建国した宇宙国家が火星に通信を求めてきたことを報告し、極東ロシア連邦として独自に交信を行う姿勢を幹部に伝えた。

「あの宇宙国家は祖国の実業家が立ち上げた『ロシア国家』であり、我々は協力を惜しまない姿勢で臨む。また、我々が承継しつつあるマルス文明の解析にも参加してもらおうように提案するつもりだ。」パノフ大統領はそう言った。

パノフは無惨な結果に終わった第一次上陸作戦の責任追求を予測してアース・ガルディアと連絡が取れ次第、極東ロシア連邦の全権を移譲しても構わないとまで考えていた。

マルス大地は寒さに強いスラブ民族に最適である。火星（この星で）我々民族が覇権を握り、来る地球再生時の帰還に際しても有利な立場で国土を確保する事が出来るのだ。

パノフ大統領は側近たちに、アース・ガルディアと秘密裏に交信できる手段を講じるように指示した。

同時刻〔極東アメリカ合衆国 那覇DC 大統領執務室〕

ミッチェル大統領は宇宙国家との交渉については対等な立場で臨み、宇宙国家政府内に居るであろう米国人派閥との連携を模索したいと考えていた。

極東アメリカ合衆国としての国力は日本国に遠く及ばないが、軍事力だけは火星最強である。

潰滅した本国の生き残りに唯々いいたくたく諾々と従うのは論外である。

あの宇宙国家はロシア人の強い影響下にあるとは言え、多くの米国人が組織中枢に居るはずである。彼らと連携しつつ、極東アメリカ合衆国の意向を汲む政策を宇宙国家に取らせれば良いのだ。

ミツチエル大統領は宇宙軍に所属する嘉手納かてな配備の『オーロラ』極音速戦闘機や『ズムウォルト型』レールガン装備駆逐艦に対し、秘かに迎撃準備を進めるように命令した。

同時刻【東京都千代田区永田町 首相官邸 危機管理センター会議室】

澁澤総理大臣は、全閣僚と英国連邦極東、ユーロピア国、台湾自治区、大月と西野の付き添いで美衣子と結も同席させて緊急会議を開催した。

英国連邦極東とユーロピア国首脳は、美衣子と結の協力（実は秋葉原散策後に開発済）によりマルス文明技術を利用した『どこへもドア』で、会議に参加していた。

澁澤の方針は出来る事と出来ない事の区別を明確にして対応するものだった。

国交樹立を原則とし、大使館設置や治外法権など地球の国際法に準じて対応する。

人道的観点から物資供給は日本国民に影響が出ない範囲で応じる。技術供与については、軍事利用を除いた上で実用可能なもののみ、データを提供する。

人員は派遣しない。人材交流もしない。

火星でのコロニー建設は極東各国首脳が集まる会議で協議する事。

澁澤の方針は極めて現実的であり、ある意味「よそ者」に厳しい国民性を裏打ちしている様に思えたが、同席した美衣子が

「もうすぐ火星に来る地球人集団は、日本列島の侵略者よ。あの集団を纏める者が属していた国が」最初に日本へ核ミサイルを発射した国”であることを忘れてはダメ！」

と強く宇宙国家を警戒した事も影響している。

また、

「彼らは自分達を地球の守護者と言っている。だけどそれは”自分のもの”だからこそ護る、と考えているから貴方達はもつと警戒した方がいい。」

と言った。

澁澤と美衣子のやり取りを聴いた英国連邦極東、ユーロピア国、台湾自治区は日本政府と歩調を合わせることで方針を決めた。

この2カ国と1地区は日本国と政治・経済、文化、人材交流で深く結び付いており、宇宙国家という「^{まが}紛い物」には魅力を感じなかったのである。

また、ボレアリフシテイ拡大や、地球復興についても独力での着手が難しい状況下で『極東米露の日本政府転覆計画』に加担した所でマルス人と親密に結び付いた日本国が転覆する見込みは無いと、英国連邦の情報機関 極東M I 6が報告を^{ひそ}秘かにしていたことも影響している。

野望

ガルデイア暦3年（2020年）3月14日「アース・ガルデイア
コア・サテライト」

「そうか、火星は在日米軍の他に北方領土に駐留しているロシア軍の
基地も有ったな」イゴール総代表が言った。

「まさか、こうバラバラに返事を寄越すとは想定外だ」彼はニヤリと
笑った。

「仰る通りです同志総代表。日本国政府は日本人以外の国の人間達に
自治独立を与えているのでしよう。このご時世に贅沢な事です」

アレクセイエフ防衛統轄代議員（防衛軍司令）が言った。

「総代表。日本国だけは唯一まともな返事をしていきますね。『我々も
孤立困窮しているが、必要な物が有れば連絡を欲しい』と、かの国の
自給率は15%程度ですから無理も有りません」

ソーンダイク内務担当代議員が言った。

「日本人は基本的に誠実だ。素直に現状を伝えてきたのだろう。だか
ら、各国の現地独立を許したのだろう」

イゴールが感想を述べた。

「日本との通信は穩便に行く。支援物資を受けとるまではな。他は我
らの傘下に、違ったな、お互い助け合おう、でいいだろう。連中には
通じる筈だ」

イゴールが口の端を吊り上げてニヤリと笑った。

「ところで火星派遣艦隊の準備はどうなっている？」

イゴールが訊いた。

「主力の兵員輸送用大型武装シャトル1機と随伴の中型戦闘シャトル
3機、大型武装シャトルに搭載した地上降下用シャトル6機とSR9
2を4機、燃料は注入済みです。現在、弾薬、食糧の補給中ですが、3
日以内に出撃出来るでしょう」

アレクセイエフが答えた。

「ソーンダイク内務代議員、明日の早朝にガルデイア代議員会議を開
催して、火星日本列島 奪還 作戦を討議しよう」

イゴールが国会に該当するガルディア代議員会議開催を指示した。

「分かりました。地上代議員への連絡を急ぎます」

ソーンダイクが応えた。

「それと、総代表。避難民の大量受け入れで軌道上コロニーの收容限度が軒並み超えています。出来れば火星派遣シャトルの一部でも、避難民收容スペースに加えたいのですが」

ソーンダイクが懇願した。

「同志ソーンダイク、火星を手に入れればそのような些末な問題は解決だ。それまでなんとかしたまえ。偉大な国家の為ならば、人民は多少の困難等我慢するものだ」

イゴールは素っ気なく言う。と総代表執務室に入ってしまった。

「君は避難民の大半が劣悪な環境でコロニーに居ることを知っているよな？」

ソーンダイクがアレクセイエフに迫る。

「わかっているさ、でも軌道基地の施設はあらかた回収してこれ以上の増設は出来ない。一方で火星に必要な戦力は足りないくらいなんだ。君は今まで上手くやって来たじゃないか。もう少し頑張ってくれたまえよ」

アレクセイエフがソーンダイクの肩を叩くと防衛軍司令室に向かった。

溜め息をついたソーンダイクは、内務局室に戻ると、通信オペレーターに

「明日、モスクワ時間で午前8時に代議員会議を開催する。議題は火星日本列島奪還作戦の検討だ。各コロニーに連絡をお願いします」

と地球上も含めた代議員への連絡を指示した。

内務局室の奥にある代議員の個室に入るとソーンダイクは、

「軌道上の避難コロニーが3000人の定員を超えている状況で火星文明とやり合う暇など無いだろうに」

と呟くと、内部軍事回線でX34シャトルにいる防衛軍の仲間と連絡を取り始めた。

「ソーンダイクだ。総代表は火星日本列島を軍事侵攻するつもりだ。

我々が知る限り、技術的にも、国力としても日本国には叶わ^{かな}ないだろう。火星の合衆^{ステイツ}国も総代表の提案に乗り気なところが気になる」

「火星派遣艦隊が出撃した後で我々が状況をコントロールするしかないだろうな」

シヤトル側が応えた。

「我々だけで日本政府に内密に連絡を取れないものだろうか？」

ソーンダイクが相談する。

「遠距離通信系統は、防衛軍が握っているからサテライトからだ無理だな。地上の大出力アンテナか、火星に向けて通信衛星を送り込むしかないが、どちらもアレクセイエフにバレるぞ」

シヤトルが懸念^{けねん}する。

「派遣艦隊員に我が方の支持者を入れれば何とかなるだろうか？」

「接触出来る可能性は上がるが、こちらとの通信が問題だな」

「それでもまずは火星に行つて見るしかないだろう。そちらでデルタフォースかシールズの生き残りを送り込めないか？」

「了解した、やってみる。シヤトル隊はこれからベラルーシ方面の避難民の救出だ。北米が後回しなのは癪^{しゃく}だな。また連絡を取ろう」

ソーンダイクは通信を終えると内務局に戻った。

聖地巡礼

地球暦2020年4月某日【東京都千代田区 秋葉原】

前日の夕食時にイワフネから「秋葉原は聖地と言われているんですよ」

と聞かされた美衣子、結、ゼイエスの3人が大月とひかりに秋葉原散策をせがんだ。

大月とひかりは、春日とイワフネの商談に同行するのでスケジュールが合わなかった為、東山とJAXXの琴乃羽（ジャクサ）に白羽（しらは）の矢が立った。琴乃羽は、マルス文明の承継データ解析で日頃からゼイエスと頻繁（ひんぱん）に会っており、面識が有ったのである。

NEWイワフネハウスをSPが運転するワゴン車で出発した5人は秋葉原に向かった。

浮かれる美衣子と結、ゼイエスを見つめる東山と琴乃羽は波乱の到来を予期していた。

秋葉原駅前でワゴンを降りた5人は、まず駅前のバンダムカフェに入った。

何処かの連邦軍的な制服を着たウェイトレスに座席へ案内されると、壁面の液晶テレビでは軌道戦士バンダムのアニメが丁度流（ちやうど）されていた。

美衣子は早速食い入るように画面を見つめ、ゼイエスは「ほう、地球ではこのようなパワードスーツの実用化が」と現実と混同した認識で唸り、結は「モバイルスーツ？」と明後日の方向性でアニメを楽しんで見ていた。

やがて飲み物とケーキが運ばれて来ると、3人の意識はケーキセツトに戻ったが美衣子は、

「なぜ赤いやつは3倍なの？」とツボを押さえた質問を始め、東山と琴乃羽が豊富な文学（ラノベ、コミック、薄い本含む）知識で果敢（かかん）に対応した。

ゼイエスは、

「コロニー落としや、ソーラーレーザーの使用とは地球人は恐ろしい

事を考えますね」と身震いし、

「ジャブロー基地は広くて管理のやりがいがありそう」

と結がやはり違う視点で観賞していた。

カフエを出た5人は、最初にゲームセンターに入り、オンライン対戦ゲームに挑んだ。

美衣子と結は先程の軌道戦士バンダムを引きずっているのかモバイルスーツ対戦ゲームに熱中した。

二人ともシステム操作は人類レベルを軽く超えているので、ゲームを楽しみながらオンラインシステムに介入して、プログラム変更しながら壮絶な戦いを繰り広げたので、多くのギャラリーが集まった。

美衣子が捨て身の攻撃で結の機体に体当たりすると、結の機体が本来装備に無いはずの必殺バリアーを発生させて美衣子の攻撃を防ぎ、画面背景に過ぎなかった味方基地がミサイルやレーザーの弾幕を作り出して美衣子の機体にダメージを与えた。美衣子も背景だった味方戦艦をむんずと掴むと結の基地に放り投げて大爆発させた。

美衣子と結の機体は大爆発に巻き込まれて大破してしまい、『ゲームドロー』というあり得ない表示で終了した。

ギャラリー達は、「新機能のテスト台か?」「あのトカゲコスプレ姉妹ばねえわ」等と騒然となる中、一行は東山と琴乃羽に手を引かれてゲームセンターを出た。

ちなみにその時のゼイエスは、パチスロコーナーで確率変動に嵌まっており、メダルの入った箱を持ち歩きながら、片端からフロアーのロットを攻略していた。

「シルバーのメダルがガチャガチャと溢れ出す様を見ると胸の高まりが抑えられません!」

とゼイエスは鼻息荒く東山に熱く語った。

東山は、この人はギャンブルで身を滅ぼす人だ、と心のメモ帳に書きこんだ。

その日、某オンラインゲーム会社のサーバーが、外部から高度に不正なアクセスを受け、ゲーム仕様がグレードアップして操作性も向上してしまうという珍事件が発生したのだがそれは別の話である。

ゲームセンターから飛び出した一行は秋葉原散策を
変更して近くの神社にお詣りする事になった。

秋葉原に近く、七福神とラボライブアイドルを奉る都内でも有名な
神社に来た一行は鳥居をくぐり、雑木林が広がる境内を歩きながら
本殿に向かった。

美衣子と結は沢山の参拝客を見て、

「神頼みね」「自助努力の放棄」「でも私達の分身が叶えてしまう」「神
の御技ですわ」

等と神社関係者が聞いたら「卒倒する発言を連発した。

「二人とも、あまり人々の夢を壊しちゃダメ！」

と琴乃羽に注意されながらも、

「800万の自律進化型環境維持システムはまさに神！」

「姉さま、この神社にも幾つか御神体システム端末があるわ」

と本殿を指差してはしゃいでいた。

「年々人々の願うハードルが上がって困るわ」

「願う気持ちを勉強に割けば良いのに」

「願うより動けばいいのよ」

「お賽銭より愛が欲しい」

と身も蓋もないことをのたまう残念姉妹を見た東山は、かなり”す
れた”神様だなと思った。

結局一行は神社の境内を見ただけでNEWイワフネハウスに戻っ
た。

帰宅した美衣子と結は地下の研究室で端末を操作しながら何かの
ロボットを作成しているようだった。

春日とイワフネの商談に付き合った大月とひかりが帰宅すると、玄
関脇に真っ赤に塗装された赤いタヌキの置物が鎮座していた。

大月がおそるおそる置物に触れると、赤いタヌキの置物が立ち上
がって徳利からビームサーベルを抜いて襲いかかってきた。

ひかりが玄関前で逃げ回る大月を眺めながら食堂を覗くと、美衣子
と結がキヤイキヤイ騒ぎながらコントローラーで赤いタヌキを操っ
ていた。

「美衣子！結！何やってるの！」

ひかりの怒声どせいが響くと赤いタヌキはピタリとその場で停止した。

「赤い奴は3倍凄すごいわ」「この法則は謎ですわ」

と悪びれない二人にひかりの拳骨げんこつが落ちた。

大月は玄関前で久しぶりにせえせえと喘あえぎながらアザラシの様に横たわっていた。

美衣子と結はその日、初めて晩御飯抜きとなった。

秋葉原で美衣子と結を虜とりこにした軌道戦士バンダムは、NEWイワフネハウス地下の研究室でゼイエス協力のもと極秘に開発が進み、タヌキの置物からグレードアップしたアニメそっくりの機体（もちろん赤いタイプも）が何種類も開発され、秘かに尖山基地に転送され保管された。

更に二人は火星軌道上の衛星ダイモスの一部を利用してモビルスーツ搭載可能な強襲揚陸艦『ホワイトピース（木馬型）』を建造した。

現在は混乱（マザラン）型戦艦と沙羅栗鼠（サラリス）型巡洋艦を主力とする、宇宙艦隊建造（ビンソン）計画を練ねっている。

二人の一連の動きは確かに遊び心と趣味の部分が強いが、二人の思考システムは極東米露とアース・ガルディアが日本列島を奪う相談の通信が傍受ぼうじゆされ、警戒した二人が本能的に対抗する手段を模索もさくするために反応したものであった。

ひかりの極ウマ晩御飯抜きが怖い二人は、V作戦（モビルスーツ開発計画）が発覚した場合に備えて、澁澤と岩崎に“内緒のお話とお願い”をして、治癒ちゆした偵察機パイロットの高瀬少佐や元ブルーインパルスチームメンバー、海自戦闘艦艦長経験者を招集した。

彼らは秋葉原に新装開店？された看板の無い、豆粒程まめつぶの字で『軍事施設立ち入り禁止』と入口自動ドア下に書いてあるゲームセンターに入り浸りびた、ゼイエス指導のもと特設シミュレーター（ゲーム名『戦場の紐ひも』）で連日モビルスーツ操縦、対戦訓練と宇宙戦艦 航宙訓練こうちゆうを受けた。

何故か宇宙戦艦訓練では

「右側弾幕薄だんまくいわ！何やってんの！」

と必ずお約束の叱責しつせきが美衣子と結むすから嬉々ききとして飛んでいた。

たまにぶらりと”来店した”一般人で、好成績を残した18才以上の者は、プレイ後に漏れなく市ヶ谷の地下施設に招待され、軍事施設に立ち入った容疑を告げられ、自主的に天草あまくさや空良そら達宇宙科学者”教官”指導のもと、宇宙自衛官の訓練を受けることになる。

この雑多ざったメンバーが後に航空宇宙自衛隊（航空自衛隊とも言う）創設メンバーとなるのはもう少し後の話である。

火星編 戦女神の星

呼応

地球暦2020年9月10日午後1時【英国連邦極東首都 『ダウニングタウン』】

アース・ガルディア艦隊の到着まであと二週間となったこの日、澁澤とアマトハはケビン首相、ユーロピアのジャンヌ首相と”ティータイム”を過ごす為にダウニングタウンの首相官邸に赴いた。

実際には欧州救出作戦への協力要請である。

いつも通りに気さくに迎えてくれたケビン首相とジャンヌ首相にアマトハはささやかな朗報とも言える報告を行った。

「実は日本政府の要請を受けてマルスアカデミーの調査ラボ、地球では『月』と呼ぶのでしたね、そのラボを修復する準備が整いました」
続いて澁澤首相が、

「日本政府としては、月のマルスアカデミーラボに配備している大型シャトルを使用して欧州地域の在留日本人を救出しますがその際、貴国の避難民で希望する方も一緒に救出しようと考えています。出来れば欧州地域の適切な救出ポイントと、避難民へのメッセージ等に貴国軍関係者の協力をお願いしたいのです」

ケビンとジャンヌに頭を下げた。

二人の極東欧州首相は驚いてカップの中身を溢しそうになったが、姿勢を正すと澁澤首相に協力を申し出た。

ティータイムの後に両首相は、直ちに特殊部隊と軍事顧問団、宇宙科学者を種子島に演習名目で派遣した。

種子島のJAXA施設で日英ユーロピアの救出部隊がマルスアカデミー協力のもと、具体的な救出計画を策定した。

欧州の救出ポイントとして、英国グラスゴー郊外、東アルプス山脈麓、ストックホルム郊外の盆地を選定した。
避難民の輸送はルンナに配備されている筈の

大型シャトル（収用人数5000人）4機を同時に各地へ向かわ

せて月との間をピストン輸送し、ルンナラボに半冷凍睡眠状態で収容、全員救出後に大型シャトルを星間航行仕様に改造し、火星との間をピストン輸送させる。

大型シャトルに積載余裕が有る場合は英仏海軍の原子力潜水艦を搭載し、月面ラボの電磁カタパルトで射出、無人慣性航行で火星に向かわせる。

火星到着後は衛星フォボスで宇宙船に改造し、一部は火星海洋上で使用する為に大型シャトルで運搬する。

潜水艦を後々の為に利用するアイデアは英仏軍事顧問団の発案である。

また、火星から月に向かうシャトルが種子島の電磁カタパルトから射出される際、強烈なGがかかる負担を軽減する為に、日欧科学者と自衛隊、英仏特殊部隊隊員は半冷凍睡眠カプセルに収容したままシャトルに搭乗する事となった。

種子島宇宙センターではガルディア艦隊の到着直前まで、欧州救出作戦の準備と地球人に合う半冷凍睡眠カプセルへの仕様変更、派遣メンバーの健康診断と半冷凍睡眠テストに追われた。

この動きを極東米露に悟らせないために救出準備期間中、日欧極東連合軍は種子島沖で大規模な海上演習と周辺空域で宇宙からの飛行物体を迎撃する訓練が行われ、公開された。

地球暦2020年9月30日〔鹿児島県種子島 JAXA宇宙センター〕

ゼイエスと天草が共同で開発した、『大気圏外打ち上げ用電磁カタパルト』から次々と小型シャトルが夜更けの空に発射されていた。

このシャトルは月面基地ルンナ補修を目的とした小型宇宙船で、火星の種子島から遠隔操作も可能なドローンやマルスクローンも複数搭乗していた。

また、英国連邦極東とユーロピア国から志願した特殊部隊兵士と、自衛隊特殊部隊、外務省の若手職員及び東山が冷凍睡眠カプセルに入ってシャトルに搭乗した。

彼らは救出作戦で避難民を保護・誘導する予定である。

マルス人クローン達は月面到着後、ゼイエスが開発した心身同調システムでイワフネ達尖山隊員がクローンに精神体を転移されてルンナラボ復旧とその後のヨーロッパ救出作戦の拠点造りを行う予定である。

今回は基地保安システム機能を持つ結も同行している。

このルンナ補修作戦と欧州救出作戦は火星に接近しつつあるアース・ガルディア『アングルモア』艦隊への切り札になるはずであった。

地球暦2020年10月1日午前4時〔火星衛星軌道〕

地球衛星軌道から発進したアース・ガルディア政府の派遣艦隊は、大型軍事シャトルに多数の貨物コンテナや軍事衛星を組み込んだサテライトを合体させたピョートル型惑星間航行宇宙戦艦3隻と、X34中型軍事シャトルを6機随伴した人類初の宇宙艦隊である。

宇宙戦闘力では人類史上最強を誇り、アース・ガルディア市民からは『アングルモア（恐怖の代名詞）艦隊』と畏怖の念を込めて呼ばれた。

アングルモア艦隊は、3か月間の行程を終えて火星衛星軌道に着した。

日本政府の予想に反してアングルモア艦隊は衛星軌道上に留まらず、アルテミア大陸の人類都市ボレアリフと極東ロシア連邦の首都エトロブルクに地上部隊を降下させた。

また、極東アメリカ合衆国 嘉手納基地にガルディア軍X34軍事シャトルとSR92”超極音速”戦闘機部隊が着陸した。

アース・ガルディア艦隊に呼応した動きについて、極東米露政府から日本政府への事前通知や事後報告は一切無かった。

同日午前11時、極東米露政府、アース・ガルディア政府の連名で日本政府に対し、北海道と沖縄諸島の領土割譲を要求する書面が首相官邸に届けられた。

日本政府は直ちに要求を拒絶し、火星研究機構から米露を除名、極東米露と締結していた相互防衛条約、自由貿易協定の相手方 不履行

を理由とした破棄と両国地域からの日本人退去、本州地域の米軍基地封鎖を通告し、全自衛隊の防衛出動を命じた。

また、英国連邦極東、ユーロピア国、台湾自治区は日本政府から通知を受けて戦時警報を発令し、自衛軍を出動させて臨戦態勢に突入した。

地球暦2020年10月1日午前5時【富山県立山市 尖山マルス基地】

ガルディア艦隊から降下部隊が極東米露入りしていた頃、美衣子はゼイエスや航空宇宙自衛隊の整備士と共に尖山基地に保管していたモバイルスーツの最終点検をしていた。

美衣子が点検していたのは秋葉原散策以降、“こんなこともあるのかと” 澁澤と岩崎におねだりして予算を捻出してもらい、密かに造り上げたモバイルスーツ部隊である。

「美衣子博士！全機発進準備完了です」

整備兵士が美衣子に敬礼して報告した。

美衣子は頷くと、隣に居る『ホワイトピース』艦長の名取大佐を見る。名取大佐は、

「博士。ここまでして頂きありがとうございます。後は予定通りでよろしいですか？」と訊いた。

美衣子は、

「そうよ。高瀬達モバイルスーツ部隊はこのまま尖山基地から発進して私の後についてきなさい。整備士と艦長以下の乗組員は私とマスターゼイエスがシャトルで「ダイモス基地」に運ぶわ。ダイモス基地に着いたら、ホワイトピースにモバイルスーツ部隊を収容してガルディア艦隊の背後から牽制よ。細かい指示は名取大佐に任せるわ」

と言った。

「了解しました、博士。各員に告ぐ。これから我々航空宇宙自衛隊の初任務だ。秋葉原で特訓した成果を出して、博士や国民を守れ！」と名取が訓示した。

竜巻に覆われた尖山基地の山頂ゲートが開くと、美衣子とゼイエス

が操縦するアダムスキー型シャトルとマイヤー型シャトルが飛び出し、山腹の特設滑走路から、モビルスーツ部隊が電磁カタパルトから次々と発進した。その数6機である。

高瀬隊長が乗る赤いモビルスーツ『バンダム』とオリーブ色の『ザクウ』はカタパルト発進後、背中のバックパックから後退翼を展開してシャトルの後を追うように編隊を組んで空高く飛んで行った。

首相官邸の総理大臣執務室から航空宇宙自衛隊の出撃をモニターで視ていた澁澤は、

「なかなかの勇姿だな」

と感心しながら言うのと、

「まさか美衣子さんと結さんがあそこまで入れ込んでくれるとは、有り難いことです」

と岩崎が応えた。

「桑田君、後は君達プロ軍人の出番だ。アース・ガルディア艦隊をしっかり抑えてくれ」

と防衛大臣を激励した。

桑田はしっかりと頷いた。

「さて、後は大月家に説明だな」

澁澤が笑いながら言った。

「ここまで尽くして頂いた美衣子さんがご飯抜きでは申し訳ありませんからね」

岩崎も笑いを堪えながら頷いた。

NEWイワフネハウスを訪問した澁澤と岩崎は、ひかりが用意した朝食を食べながら美衣子と結、ゼイエスの『活躍』について説明し、”お仕置き”の免除を要請した。

大月とひかりは哑然としながらも、了承した。

「火星衛星軌道上 アース・ガルディア『アンゴルモア』艦隊 旗艦『ムルマンスク』」

「司令！わが艦隊後方10kmから接近する識別不明の大型艦艇1隻を探知しました」

ブリッジ要員がアレクセイエフ司令に報告した。

「いつの間に後ろに付いたんだ」

アレクセイエフが呟くと、

「火星衛星『ダイモス』の影に隠れて本艦レーダー索敵を逃れていた様です」

戦闘管制オペレーターが答えた。

「識別不明艦から小型艇6機発進。こちらに向かって来ます！」

「全艦隊臨戦態勢、対空防御！」

「識別不明艦から通信。『こちら日本航空宇宙自衛隊。アース・ガルディア艦隊に告ぐ。直ちに火星宇宙域から退去せよ』です」

「小型艇更に接近、距離3km。光学目視で確認出来ます」

「モニターに出せ」

『ムルマンスク』戦闘管制ブリッジのメインモニターに、白い大型宇宙戦艦をバックに赤いモビルスーツを先頭に編隊を組んだ6機の軌道兵器が映し出された。

即座に某アニメを連想したアレクセイエフは、

「どこのお伽噺だ」

と呆れた様に言ったが、

「返信。バカメ」と通信オペレーターに命じた。

即座に日本の戦艦から、

「月に代わってお仕置きする」

と意味不明な一文が送られてきた。

もちろん美衣子が送信したものである。

火星衛星軌道上で人類史上初めての宇宙戦争が始まろうとしていた。

圧倒

地球暦2019年10月1日午前0時30分【アルテムィア大陸
人類都市ボレアリフ 極東連合軍守備隊司令部】

完全武装の極東米露兵士と漆黒の特殊スーツに身を包んだガル
ディア兵士に銃を向けられたボレアリフ守備隊の鷹匠司令は指揮下
にある全兵士に抵抗せず、輸送機に搭乗して小松基地に撤退するよ
うに指示を出した。

「これで良いか？」 鷹匠が侵攻兵に訊く。

「ご協力感謝します。物資もそのまままでお願いします。」日本本土から
来た極東アメリカ陸軍兵士が丁寧に答えた。

「そんなセコいまね等せんよ。達者でな」

鷹匠は司令部を後にした。

鷹匠達陸上自衛隊火星連隊と英国連邦極東陸軍、ユーロピア国防
軍、台湾自衛軍の部隊は整然と航空自衛隊のC2大型輸送機に乗って
小松基地に撤退した。

同午前0時【極東米海軍横須賀基地司令部コマンド・ケイプ】

「何だ！このクレイジーな命令は！」

怒りをあらわにしたジョーンズ海兵隊少将が極東CIA長官の
マッカーサー三世にモニター越しに詰め寄った。

「間もなく同胞の宇宙艦隊が衛星軌道に到着してボレアリフと沖縄に
降下します。少将は直ちに自衛隊の横須賀基地を占領してもらいた
い」

マッカーサー三世が無表情に告げる。

「我々はアルテムィア大陸上陸作戦や、転移直後の共同調査や対馬事
変で同盟国である自衛隊と共に戦ったのだぞ！今さら急に隣人の基
地に攻め込む事など出来ん！」

「あなたは軍人としての責務を放棄するのですか？」

「この指令は宣誓した国家への利益になるとは思えない。少なくとも
火星に住む人類にとって悪い影響をもたらすものだ。私は従えない」

「私はミツチエル大統領から軍の任命権を委譲されています」

「勝手にしたまえ。横須賀基地は封鎖する。兵員と艦隊は那覇に帰還させる。それで問題ないはずだ。いずれ、ここには自衛隊が封鎖に来るはずだ。今からお隣の基地に攻撃を仕掛ける準備など出来ぬよ」

そう言うとジョーンズは通信を一方的に切った。

「本州の全米軍基地に横須賀基地は独自判断で日本政府とは対立せず、中立の立場を取る。同調する兵士、部隊は横須賀基地で受け入れるとメッセージを送るんだ！」

ジョーンズの命令に反対する者は居なかった。

那覇と本州に駐留する米国人の日本への見方は全く異なっていた事に那覇DCに居る極東アメリカ首脳部は気付けなかった。

他国とは違い、永年の日本駐留における地元住民との交流や自治体との友好的な関係を結んでいる状況で、これを破棄することは正常ではない、と多くの兵士や軍属、その家族達が思っていた。

ジョーンズ少将による独自行動は多くの在日米軍兵士の共感を呼び、三沢、座間、厚木、佐世保等主要基地が横須賀基地に倣って独自行動を宣言し、戦闘機や武器の多くを那覇に返還後、基地を封鎖した。

同時刻【東京都横田市 極東米軍横田基地】

基地の周辺は陸路も上空も全て自衛隊の特殊作戦群の機動戦闘車とAH64Dアパッチ対戦車ヘリコプターによつて封鎖された。

基地司令のマードック大佐は沖縄ペンタゴン（国防省）から嘉手納基地への撤退命令を受け、封鎖中の自衛隊指揮官と協議した。

自衛隊指揮官は、撤退を認める換わりに嘉手納から撤退する航空自衛隊や民間人を横田に受け入れる旨を通告した。

また両者暗黙の合意により、駐留米軍の離脱希望者は中立を表明した極東米軍横須賀基地に移動する事となった。

同午前6時 【神奈川県横浜市 NEWイワフネハウス大月家リビング】

久しぶりに二人きりの夜を過ごした大月とひかりは、朝一番で濫澤総理大臣と岩崎官房長官が突然訪問した事で昨晚のピンク色な時間の余韻が吹き飛んでしまっていた。

澁澤総理達が帰った後、もう一度眠る気にもならず、二人はそのまま朝食を食べ始めると、NHKニュースが臨時放送を流し始めた。

『こちらは政府広報です。本日未明、極東アメリカ合衆国、極東ロシア連邦、地球圏アース・ガルディア国の3カ国が日本政府に対し、北海道と沖縄の領土割譲を要求してきました。』

政府は直ちにこの要求を拒絶、極東米露政府と締結していた安全保障、自由貿易条約を相手方不履行を理由に破棄しました。

また、政府は地球圏アース・ガルディア国は宇宙国家であり、火星衛星軌道上に宇宙艦隊が展開している事を公表しました。

陸上自衛隊によりますと、降下した一部のアース・ガルディア部隊が、極東米露軍と共に人類都市ボレアリフ中心部を制圧した模様です。

我が国は、予告無しのこと等軍事行動に断固として抗議いたしません。既に極東米露政府とガルディア宇宙艦隊にその旨を伝えました。

政府は本日午前1時20分、澁澤内閣総理大臣の命令により、全自衛隊の防衛出動を命じるとともに、再び国家非常事態宣言を発令いたしました。

本日より、一部の公共サービス部門を除いた全ての企業は活動を停止し、国民の皆様は自宅にて安全を確保してください。』

大月とひかりは、宇宙へ飛び出した美衣子と結の無事を祈るしか無かった。

ガルディア暦3年（西暦2020年）10月1日午前7時〔火星衛星軌道上〕

アングルモア艦隊 旗艦『ムルマンスク』

「何だあれは!?!」

顔面蒼白になった索敵オペレーターが叫ぶ。

「ミサイルが敵に追いつけないぞー!」

「化学レーザーでは歯が立たん!」

戦闘オペレーターが困惑する。

艦隊に接近した日本航空自衛隊の機動兵器部隊はガルディア宇宙

艦隊の最新鋭誘導ミサイルの群を易々とかわし、センサー類にダメージを与える筈の化学レーザーも、機動兵器の装甲に阻まれて内部機器まで届かなかつた。

機動兵器の編隊はアンゴルモア艦隊に2000mまで接近していた。

『こちらレットリーダー。艦隊まで200。予定通りの行動で行くぞ！』

高瀬少佐率いる機動兵器編隊が背中^{バック}の推進機から白い噴射炎を出す^{バックバツク}とアンゴルモア艦隊に突っ込んで行った。

「敵機動兵器更に接近！至近距離！目の前だつ！」

「全近接防御兵器で追い払え！」

宇宙戦艦の各所に設けられた対空30mmバルカン砲と短距離ミサイルの弾幕が機動兵器に降り注ぐが、機動兵器が装備している盾^{たて}で防がれてしまう。

「なんて奴等だ」

アレクセイエフ司令官が戦慄^{せんりつ}する。

近接防御兵器を突破した機動兵器編隊は宇宙戦艦の推進部に50mmマシンガンを撃ち込む。

宇宙戦艦『ムルマンスク』と他の2隻も次々と後部機関推進部に巨大マシンガンを撃ち込まれ、固い防御装甲に包まれた筈^{はず}の推進機関部が破壊され航行できなくなつた。

「対空ミサイル残量残り僅^{わず}か！」

「機関推進部被弾！自力航行不能！姿勢制御システムも最低限しか機能せず！」

「敵艦接近！」

「構わん、可能な限り全兵器を敵艦に集中させろ！コード6666^{トリプルシックス}」

発令！」

「コード6666発令します^{トリプルシックス}」

極東アメリカ合衆国嘉手納基地に降下部隊を輸送していたX34中型シャトルは軌道上の艦隊から送られた『666』コードを受信すると、機内に脱出警告を発した。

『本機はこれより自動操縦モードに入ります。乗員は直ちに脱出して

ください』

パイロット達は慌あわててシャトルから脱出した。

X34中型シャトルは無人操縦で嘉手納基地滑走路から飛び立つて艦隊に向かった。

隣に駐機していたSR92高空宇宙戦闘機も『666』コードを受信して乗員を脱出させると自動的に艦隊に向かった。

【航空自衛隊強襲揚陸艦『ホワイトピース』】

「ガルディア宇宙艦隊の艦隊速度低下。機関部が損傷した様です」

「火星地上から高速飛行物体接近！」

「モニターに出せ」

赤い星を背景にSR92戦闘機とX34中型シャトルがぐんぐんと上昇してホワイトピースに向かって来た。

「あの飛行機にヒトは乗っていないわ」

美衣子うなすが名取艦長に言った。

頷うなずいた名取艦長は、

「対空戦闘！ゴッドブリート、イーゲルシュタイン、モンバットミサイルは射程に入り次第発砲せよ！」

と命じた。

ホワイトピースに接近したSR92戦闘機は格納扉を開くと対衛星破壊ミサイルを発射し、X34中型シャトルは機体上部のハッチから大型対艦レーザーを照射した。

ホワイトピースの30mmイーゲルシ対空機銃ュタインは飛来したミサイル全弾を撃破し、X34シャトルのレーザー砲は舷側げんそくの装甲を僅わずかに焦こがただけで破損せず、逆に艦首のゴッドブリートが極太の荷電粒かでん子砲を発射してX34シャトルを次々と撃破した。

SR92戦闘機はマッハ10の極音速度でホワイトピース側面を通過したが、機首を戻したところで赤いモビルスーツの大型マシンガンを喰らい、機体の部品を分散させながら2機とも爆発した。

アンゴルモア艦隊は30分程度交戦すると弾薬が尽き、戦闘不能に陥った。

「敵戦艦から通信！」

「読み上げろ」

「艦隊と降下部隊は直ちに抵抗を止めて投降せよ。日本政府は司令官と交渉する用意がある」とのことです」

アレクセイエフは唸った。

「この攻撃で死者は？」

「おりません、居住区等を意図的に避けて我々を被弾させた様です」

「修理にどれくらいかかる？」

「宇宙ドックに入らないと修理は不可能です」

「やむを得ん」

アレクセイエフは決断した。

「アンゴルモア艦隊と降下部隊に戦闘停止を命じろ。敵戦艦に”停戦交渉”を希望すると伝えろ！」

アレクセイエフは日本自衛隊の圧倒的戦闘力の前に武力による威嚇を断念、交渉により有利な条件を得ることにした。

プレアデスからの船

アンゴルモア艦隊が日本政府の停戦勧告を受け入れた頃、宇宙の彼方から遂にイワフネ達を迎えに来たプレアデス星団から救難船が火星に接近しつつあった。

【オウムアムル型光速救難艦『プレアデス』】

「火星衛星軌道に2000リ」

オペレーターが艦長に報告した。

「予定通り衛星軌道に乗ります。減速せよ」

救難艦艦長のリアが指示した。

「マルスのアマトハ所長から通信です」

「モニターに出してください」

「遠路ありがとうございます。良く来てくれました」

アマトハがリア艦長に感謝した。

「任務ですからお気になさらずに。それで、どうされました？」

「実はちよつと現地人がね」

アマトハはリア艦長に地球人の事情を説明するのだった。

地球暦2019年10月1日午前8時【東京都三鷹市 国立天文台

三鷹キャンパス】

「空良さん！マルスアカデミーの船をキャッチしました。」研究員が報告した。

「今、どの辺りだ？」空良が訊く。

「火星衛星軌道まで500kmです。」

「市ヶ谷と永田町に連絡だ！」

同時刻【NEW イワフネハウス】

「やはり君は残るんだな」アマトハが確認する。

「ええ、私は地球人類が今度こそ困難を乗り越えて進歩する世界を見てみたい」

イワフネがアマトハと、ゼイエスに言った。

「分かった。だが、こんな状況下で母星に帰るのも、あれだな」

アマトハがニヤリと笑って、迎いのオウムアムル型救難艦のリア艦

長に連絡を取って打ち合わせを始めた。

同日午前8時30分「火星衛星軌道上 強襲揚陸艦『ホワイトピース』」

自力航行不能となったアンゴルモア艦隊の戦艦を牽引するホワイトピースはダイモス宇宙基地に向かつており、アンゴルモア艦隊は機動兵器の編隊に包囲されていた。

「前方5 kmに衛星ダイモスです。」

航空オペレーターがアレクセイエフに告げた。

「あれが日本の宇宙基地なのか」

アレクセイエフは唖然あぜんとしていた。

火星衛星ダイモスはもともと地球観測用のマルスアカデミー『ラボ』が設置されていたが、美衣子と天草、琴乃羽ことのはにより宇宙戦艦建造ドックとメンテナンススペース、宇宙港が増設され、レーダー施設や火星観測センサー、地球観測望遠鏡、対空ミサイル、近接防御バルカン砲がダイモスの至る所に備え付けられ、宇宙要塞と言ってもおかしくない様相ようそうとなっていた。

ちなみにもうひとつの衛星『フォボス』も、現在英ユ科学者と軍事顧問団がJAXA支援のもと、独自の防衛施設を建設していた。

おそらく、地球から運んでくる原子力潜水艦を宇宙戦艦に改造して配備するのだろう。

アンゴルモア艦隊の戦艦3隻はエアロック用も含めた3枚の防御扉を通過し、メンテナンススペースに入港した。

同時に防御扉が閉まってメンテナンススペースに空気が満たされた。

メンテナンススペースの端から透明なチューブ型タラップがアンゴルモア艦隊の戦艦乗降口に接続されると、アレクセイエフや乗組員は必要な消毒検査をセンサーで受け、護身用の銃所持を認められ基地内に案内された。

ダイモス宇宙基地の通路は広く、金属製で光沢があり、うつすらと光っているので通路にはめ込まれた電灯と併せればかなり明るい。

更に通路は自動式でヒトが歩く速度で左右別々に稼働しており、無

重力空間で足を落ち着けて移動する有用な手段となっていた。

基地の食堂に着くと、交渉にあたるアレクセイエフと副官の二人以外はその場で休憩と食事が提供され、アレクセイエフ達は更に基地の奥深くに向かった。

やがて基地司令官室に案内されると、中では宇宙基地司令官の名取艦長（大佐）とJAXAの天草が待つていた。

名取と天草はアレクセイエフと副官に自分達は日本政府の全権を委任されている事を伝え、休戦交渉を行いたいと告げた。

「私はアース・ガルディア宇宙艦隊司令官のアレクセイエフだ。まず最初に丁重に我々を迎えて頂き感謝する」

アレクセイエフが言った。

「その上で、私は敢えて言わなければならない。我が宇宙国家アース・ガルディアは火星に奪われた日本を解放する使命を持って火星に来た。日本政府が我々の主張に同意する事を希望し、火星上の同志政府からの要求を受け入れて頂きたい」

アレクセイエフが毅然とした態度で名取に言った。

「我が国が本意ながら火星に転移した事実は認めます。しかし、我が国は『誰にも』奪われておりません。過酷な環境の下、1億1000万の国民は懸命に、新しい環境で日々を有意義に過ごしております。ですからご心配なく」

JAXAの天草が答えた。一応、シベリアンコントロール文民統制の形で、軍人が直接政治的交渉に臨むのを防ぐ狙いがある。

「あなた方は不当にも異星文明の干渉を受け、火星上で多くの犠牲者が出ていると聞いておりますぞ」

アレクセイエフが反論した。

「それは全くの事実無根です。日本政府は火星の原住民マルス人と友好関係を結んでおります。

火星上の犠牲者ですが、転移直後に宇宙放射線被曝患者が発生しましたが、マルス人からの医療技術提供により快方に向かつております。また、火星大地に進出した際には火星の『野生生物』から襲撃されましたが、こちらも対抗手段を確立し、現在は問題ありません。

不当な干渉はむしろ、我が国にロシアと中国が行った核攻撃であり、その影響で我々が転移してしまったのです。この事についてアース・ガルディアはどの様な釈明をするのです?」

天草が反論した。

「宇宙国家アース・ガルディアは地球上のあらゆる国家とは一切の關係を持っておりません。我々は宇宙からの脅威に対して地球を守る為の国家ですから」

アレクセイエフが責任を否定した。

「我が国も『かつて』地球上の一国家でした。今は火星の一国家として異星文明と友好的な日々を過ごしており、脅威等一切ありません。余計なお節介せつかいと言うものです。むしろ、貴国及び火星上の同調者が我が国の脅威です」

天草がアース・ガルディアの主張を否定した。

「ふむ。これ以上は不毛な議論になりそうだ。この内容は本国の総代表に報告しよう。それと報告にあたり、実際に日本列島がどの様な現状か、異星文明とどの様な友好関係を築いているのかこの目で見てみたいのだが」

アレクセイエフが火星上の視察を要請した。

「貴国艦隊がこれ以上の敵対行動を止め、火星上の同志を撤退させるならば考えましょう」

天草が条件を出した。

「貴国の要求はわかった。こちらも1度本国に連絡と火星上の同志に戦闘行為の中止を命令するために少し時間を頂きたい」

「わかりました。では3時間後にまた此処でお会いしましょう。それまでは食堂で休まれるもよし、船に戻るもよしとしましょう。くれぐれも基地内での不穏な行動は控えて頂きたい」

天草はそう言うと司令官室の外で警備していた自衛隊員にアレクセイエフ達を食堂に案内させるように命じた。

アレクセイエフ達が司令官室を出ていくと、名取と天草は司令官室のモニターに、

「交渉の第一段階が終了しました」

と報告した。モニターがチカツと光ると、

「こちら音声のみだが全て聴かせてもらった。天草理事長、名取大佐、ご苦労さまでした」

モニターから濫澤首相が二人を労ねぎらった。

「やはり、美衣子さんの言った通りの連中ですね。地球の指導者気取りには呆あきれましたが」

天草が言った。

「司令官の火星視察はどうされますか？」

名取大佐が濫澤に判断を求めた。

「それについてはこちらも考えがあります。間もなく火星軌道上にマルスアカデミーの迎えの船が到着します。彼らに便乗させて火星に降りてもらいましょう」

岩崎官房長官がニヤリと笑いながら言った。

基地の食堂では、日本で放送中のテレビ番組が自由に視れたので、ガルディアの軍人達は色々なチャンネルを次々と試していた。

中でも衝撃的だったのは、マルス人の番組でトカゲ姉妹のトークとトカゲが電車で一人旅をする番組だった。

トカゲ姉妹が屈託なくゲストの日本人をいじり倒す毒舌番組だが、ブラックキューモア好みのロシア人には受けたようだった。

【火星アルテミシア大陸 人類都市ボレアリフシテイ 極東ロシア連邦軍基地司令部】

「何故です？我々は圧倒的な勝利をこの都市でおさめましたぞ！」

陸軍司令官がアレクセイエフ艦隊司令に反駁はんぱくする。

「同志陸軍司令官殿。我が艦隊は宇宙空間で日本自衛隊の圧倒的戦力に負けたのだ。彼らは貴国の軍より遙はるかに強力だ。こちらは修理や補給をするのにも事欠いている実情なのだ。一時的で構わないのから占領した区域から基地に戻つてもらえぬだろうか」

アレクセイエフが苦心して説得した。

「それならばこの都市を人質にすれば良いではありませんか」

いかにも旧ソ連軍時代らしい主張をする陸軍司令官にアレクセイエフは、

「日本政府はそちらにほとんど自国民を置いていないはずだ。彼らは躊躇せず^{ちゆうちよ}に衛星軌道上からボレアリフを攻撃するでしょう」

アレクセイエフの指摘に陸軍司令官は押し黙った。

1時間後、ボレアリフシティ中央部、連合軍司令部から米露部隊は駐留基地に帰還した。

3時間後、アレクセイエフは日本政府の主張を受け入れ、極東米露都市で共に敵対行動を停止した。地上降下部隊はシャトルが全機墜されたため、火星に留め置かれる事となった。

更に1時間後、全長1kmはある巨大なマルスアカデミー救難艦がダイモス基地に寄港し、驚いているアレクセイエフを乗せて火星シドニア地区に降下した。

降下中の艦内でアレクセイエフは初めてマルス人のリア艦長と面会し、またしても驚愕^{きやうがく}しつつ、礼儀正しく挨拶した。

この段階でアレクセイエフはほとんど毒気^{どくけ}を抜かれていた。

シドニア地区の旧マルスアカデミー本部でアマトハはリア艦長や救難艦クルーと面会し、イワフネや尖山基地のマルス人達も久しぶりの母星からの同類訪問に歓喜した。

アレクセイエフは、同行した名取大佐と共にイワフネが操縦するアダムスキー型シャトル（アレクセイエフから見ると空飛ぶ円盤そのものだが）で東京の首相官邸に向かい、澁澤首相との会談に臨んだ。

休戦交渉

地球暦2020年10月2日午前10時〔東京都千代田区永田町
首相官邸 会議室〕

「我々日本政府及び英国連邦極東、ユーロピア国、台湾自治区は、
アース・ガルディアア国の火星からの退去を求めらる」

澁澤首相が通告した。

「退去がなされない場合、我々は地球衛星軌道にある月を地球圏から
離脱させる用意がある」

といきなり切り札を提示した。

「そのような事が出来るものか。月は確かにマルス文明の置き土産ら
しいが損傷して機能停止していると報告を受けている。」

ポーカーフェイスのアレクセイエフ司令官が言った。

「司令官殿、貴殿は勘違いしています。我々はマルス文明の段階的技
術承継を経て、月面への到達手段を確立し、施設の補修要員も既に派
遣しています。何なら月の裏側からシベリア辺りに電磁カタパルト
から水でも入れたカプセルを落としましょうか？火山の沈静化に役
立つかはわかりませんがね」

「それでもかつてあなたの方が我が国にICBM(核ミサイル)を150
発撃ち込むよりは手緩いと思えますが」

岩崎官房長官が遠回しに、地球圏への攻撃が可能な事を伝えた。

アレクセイエフが歯噛みした。

澁澤首相は別の提案も行った。

「我々は、地球に取り残された我が国及び欧州友好諸国の生存者を救
出し、月面基地に一時収容した後、我が国に帰還させる作戦も進めて
います。」

これは、アース・ガルディアへの敵対有無に関わらず進行させて頂
きます。

こちらが救出した避難民に貴国の登録国民が居たならば、そちらの
コア・サテライトに送り届けましょう。

貴国が手一杯ならば、日本政府としては、火星の人類都市ボレアリ

フ郊外に開拓地キャンプを設け、

数万人規模の避難民を受け入れる事も可能です」

「地上生存者本人が拒否しない限り、如何なる政治信念が有ろうとも我が国は救出します。」

貴国はどのような対応を取るか後ほど連絡を頂きたい」

澁澤首相が伝えた。

この件についてはアレクセイエフ自身は特に反対するつもりは無かった。地球か火星か選ぶだけなのだから。

また、軌道上コロニーの定員がほぼ満員であり、この点が解決出来れば火星に敵対姿勢で臨むことは無いだろう。

これは、総代表の判断事項だとアレクセイエフは思った。

「その提案は少なくとも私には魅力的に映る。ただ、総代表の判断事項になるので少し時間を頂きたい。」

我々は何もこれ以上人類を減らす必要も無いだろうと思っている」とアレクセイエフ司令官が言った。

「分かりました。貴国の賢明な判断に期待します。貴国が日本政府の要求を受け入れて頂けるならば、貴国艦隊の修理と補給をダイモス基地で行う用意があります。必要な資財があれば、手配します」

澁澤が言った。

再びイワフネが操縦するアダムスキー型シャトルで宇宙戦艦『ムルマンスク』に戻ると、アレクセイエフ司令官は、イゴールへの報告を行う為自室に入った。

「アース・ガルディア コア・サテライト」

「そうか、火星の日本政府は手強いな」

イゴール総代表が困難な交渉をしているアレクセイエフの苦境を察して言った。

「彼らの兵器は我々の技術レベルを遥かに超えています。また、日本政府自体も火星の過酷な環境で国力が鍛えられているようであり強気です」

アレクセイエフが報告した。

「総代表。我々は火星に日本と同志達が築いた都市を占領していま

す。交渉で火星都市の一部区画を我々の避難民収容先として確保することで、今回は矛を抑えられればと愚考します」

アレクセイエフが新たな提案を総代表に具申した。

「火星遠征した割りには合わんぞ」

イゴールは不満げな表情だ。

「火星の極東ロシアとアメリカは火星文明技術を承継しつつあり、我々がいずれその技術を取得して対抗できたときに再度日本政府に挑むべきでは？」

「火星文明の技術か」

イゴール総代表は少し思案すると、

「よろしい。その方向で交渉を頼む。出来れば火星文明技術の一部でも持ち帰ってくれば有り難い」

アレクセイエフの提案を承認した。

【極東アメリカ合衆国 嘉手納基地】

火星衛星軌道上の母艦に戻る術を失った嘉手納のガルディア降下部隊員の身柄は海兵隊で預かることとなり、辺野古基地に彼らは移された。

辺野古基地で形式的に海兵隊司令官のジョーンズ少将の検閲を受けた際、一人の兵士が少将に握手を求め、ジョーンズ少将が握手に応じると兵士が何かの巻き紙をジョーンズ少将の手の中に押し付けてきた。

慌てたジョーンズ少将はその兵士を問いただそうとしたが、既に部隊列に戻っており誰か判別はつかなかった。

自室に戻ったジョーンズ少将が小さな巻き紙を広げると、

『アース・ガルディアのアメリカ人達より、日本政府と独自の対話を秘かに望む。通信チャンネルは*§☆#∞』

と連絡先が記されていた。

恐らく、あの宇宙国家はロシア人が幅を効かせているが、対抗派閥が少なからずあると言うことか。

アメリカ合衆国の生き残りが多数居ることにジョーンズ少将は少しだけ安堵した。

さて、このメッセージを誰に渡せば良いか？

恐らく、CIAに悟られないようにするには軍ルートでは難しく、那覇政府にコネはない。火星研究機構からも除名されているので使えない。

ジョーンズは考えた末、とある人物に会うことを決意した。

午後6時【神奈川県横浜市 NEWイワフネハウス】

「あなた、ジョーンズさんという方が会いたいと玄関にいらしているわ」

ひかりが大月に言った。

「お父さんを火星に連れ込んだ司令官よ」

ダイモス基地から帰ってきた美衣子がひかりに言った。

ひかりは無表情になると、

「あなた、台所からお塩持ってきて頂戴！。追い払うわよ！」

「いやいやダメだって！向こうも会いたくないのに来てるんだから、理由があるはずだよ」

大月がひかりを宥めて言った。

「美衣子。ジョーンズさんをリビングに案内しなさい」

大月は気が進まないがジョーンズ少将と会うことにした。

リビングで対面した大月にジョーンズは、

「あの時は申し訳無かった」

と開口一番で頭を下げた。

「少将閣下。頭を上げてください。私ももっと事前の情報をよく考えてお伝えすべきだったと後悔しているのです」

大月がああ時の懺悔を口にした。

「失礼ながら閣下は降格されても尚、上陸作戦の副官として再びチャレンジされ、成功しています。あの成功が無ければ皆さんの生活はアメリカ人にとってもっと希望のないものになっていたと思います。だからお互いこの話はやめにしましょう」

大月が続けて

「しかし、今日はどうされたのですか？しかもこのご時世に」

ジョーンズの意図

を訊いた。

「これだ」

ジョーンズ少将が大月に小さな巻き紙のようなメモを手渡した。

「辺野古ヘノコでガルディア兵士から預かったものだ。私が那覇ナハに報告出来んものだ」

中身を読んだ大月は、

「そうですね。私から内閣官房に直接渡します。進展が有れば、貴方を火星研究機構にスカウトするかも知れません。海兵隊から少し離れるかも知れませんが大丈夫ですか？」

とある程度の予測される未来を告げて確認する。

「構わんよ。宇宙国家とやらに迎合けいごうする今の那覇DCは狂っている。離れるには良いタイミングだ」

ジョーンズがきつぱりと言った。

10月2日午前9時【東京都千代田区永田町 首相官邸 内閣官房 執務室】

「これですか？」

岩崎官房長官が大月に訊いた。

「はい。ジョーンズ少将はガルディア兵士から直接手渡された様です」

「この内容だと宇宙艦隊を派遣した政府組織とは別のグループが有ることになりますね」

「ロイド提督のお知恵を借りてみては如何でしょうか？」

大月が提案した。

「事によっては新たな火種ひたねになるかも知れません。関係者を増やしてリスク分散すべきではないかと」

「ふむ。火星研に連絡をしましょう」

岩崎官房長官が言った。

市ヶ谷の火星研から呼び出されたロイド提督はジョーンズ少将のメッセージを大月に見せられてこう言った。

「宇宙国家も一枚岩ではないという事ですね」

「連絡を取る事に問題ないでしょう」

「通信を多用するとガルディア政府の主流派に感づかれる可能性があります」

岩崎官房長官が懸念を示す。

「折角せっかくのチャンスかもしれないな。欧州救出作戦遂行時に現地で接触してはどうだろうか？」

澁澤が言った。

「そうですね。現地は混乱していますから出会っても不審に思われる事は無いでしょう」

ロイド提督が同意した。

NEWイワフネハウスに帰った大月は美衣子に、

「月面に結が着いたら、アース・ガルディアのアメリカ派閥に連絡をとって地球上で向こうと会うように東山さんに伝えて欲しいな」

とお願いした。

美衣子は、

「夕食はひかりのバンバンジーで取引よ」

と了承した。

夕食後、美衣子はマルス通信システムでルンナに向かっている結の小型シャトルにメッセージを送信した。

10月3日 岩崎官房長官は極東アメリカ合衆国海兵隊司令官ジョーンズ少将と横須賀のコマンド・ケイプで在日米軍基地の封鎖について協議した。

日本政府はジョーンズ少将が在日米軍基地の全指揮権を持って中立の立場を貫くならば、日本政府は特に基地の封鎖を行わないと伝えた。

特に、軍人と軍属の行動の自由も認める内容であり、自衛隊との共同訓練は部隊単位ならば可能との判断を示した。

ジョーンズ少将は指揮権については那覇ペンタゴンが決める事であり、自分ではどうにも対応が難しいと返答した。

岩崎官房長官は、アース・ガルディアの講和を主張する米国人派閥とコンタクトが取れたことを伝えた。

「ソーンダイク派閥は現在衛星軌道上の艦隊を派遣する勢力とは違う考えの様ですね」

と岩崎が言った。

岩崎官房長官は、妥協案として日本政府と米露を除く極東各国と共同で火星研究機構を拡大し、火星協力機構を設立し、火星協力機構軍として在日米軍を再編成して参加する事を提案してジョーンズ少将の返答を待つこととなった。

同日夕刻【極東アメリカ合衆国 那覇DC政府庁舎 大統領執務室】

「ジョーンズ少将からの報告では、我が軍の在日部隊を火星協力機構と言う極東各国の共同軍に編入してはどうかと、日本政府の提案が有ったようです」

CIAのダグラス・マッカーサー三世がミッチェル大統領に報告した。

「マッカーサー。まだ彼を罷免ひめんしなかつたのかね？」

ミッチェルが訊く。

「たとえ中立と言えども日本列島への牽制には在日米軍部隊の存在が必要不可欠です。ジョーンズ少将は叩き上げのプロ軍人です。政治的野心は無いがゆえに将兵の信望も厚く、少将の罷免は軍内部の混乱を招きかねません」

マッカーサー三世が答えた。

「そうか。しかし、動かせない軍など張り子の虎と変わらんぞ」

ミッチェルが不満を漏らす。

「アース・ガルディアの強硬派が殆どロシア熊の手先でしかも、穏健派の主流がステイツ出身者とは完全に予想外だったな。これでは我が国主導の日本政府転覆計画等無理だ。本気で日米戦争に挑むしか無いぞ」

「戦力的には圧倒する筈でしたが、日本政府は予想外のかくし球を持っていましたね。マルス文明との交流が非常に上手くいっているのでしょうか」

「イゴールの誘いに乗ったのは失策だったか」

ミツチエル大統領が呟いた。

極東アメリカ合衆国政府は、人類都市ボレアリフをガルディア軍と共に占領した段階で引き返しがつなくなっていた。

そして、その状況は極東ロシア連邦も同様であった。

「この期に及んでもはや日本政府に降るのは不可能だ。衛星軌道上の同志に我々は殲滅させられてしまう」

パノフ大統領は悲壮な覚悟を決めていた。

「那覇のミツチエル大統領とホットラインで協議する。我々は火星大陸に本拠を移すしかない」

地球暦2020年10月4日、極東米露はアルテムユア大陸の人類都市ボレアリフを両国の首都と定め、政府機関、軍司令部の移転を発表した。

在日米軍基地の駐留部隊もアルテムユア大陸への移動命令が出されたが、応じた部隊は僅かだった。

地球暦2020年10月5日、再び東京で澁澤首相とアレクセイエフ司令官は休戦交渉を行い、アース・ガルディア避難民の収用先として人類都市ボレアリフの統治を極東米露と3カ国で行い、日本政府とその他の極東各国は日本列島に引き上げる事で合意した。

極東米露はアレクセイエフを通じて日本列島との貿易を望んだが、澁澤は断った。

極東米露はアルテムユア大陸で自給自足の国家運営を行う事にならなかった。

ヨーロッパ救出作戦／ 帰還

地球暦2020年10月10日【地球衛星軌道上 マルスアカデミー地球調査ラボ『ルンナ』】

約10日をかけて火星からルンナ表面に到着した結達は、最初にルンナのメインサーバルームを探し始めた。

ルンナ表面は岩石とクレーターの痘痕だらけの荒涼とした月面だが、結がシヤトルナビゲーターだった頃の記憶を辿ると、とあるクレーターのひび割れた底にラボ施設が剥き出しになっている箇所を見つけた。

結と半冷凍睡眠から醒めた東山や英国・ユーロピア特殊部隊員は、ウエットスーツに似た軽い『宇宙服』を着用するとシヤトルを出てクレーターの底に向かった。

『ルンナ』ラボの中は暗いが構造的にはダイモス宇宙基地に類似している様だった。

もともと、ダイモス宇宙基地の原型がルンナラボから来ているので当然なのだが。

ラボの端末からメインサーバルームにアクセスした結は、自分の尖山基地時代の要領でラボ機能を復旧させていった。

地球暦2020年10月15日【欧州各地の主要都市又は主要軍事施設周辺地域】

北半球一帯に降り注ぐ火山灰にまみれながら寒さに震える人々は、その通信（呼び掛け）を聴いて一瞬自分の耳を疑った。

「私達は火星に転移した日本在留イギリス及びEUの臨時政府です」

「現在、私達は日本政府及び火星文明支援のもと、火星から宇宙船を派遣してヨーロッパ各地に在留されている日本人と、救出を希望する各国の方々を収容する準備をしています」

「この通信を聴いた方々で火星の日本列島に在る、私達コミュニティに帰属される事を希望する方は、この通信周波数で返答してください」

「救出を希望される方々はこちらが指定する場所に何とか辿り着いてください。困難な状況でしようが、その場所へは2日後に必ず救出用宇宙船が到着して集まった全員を救出します。それまでは、纏まって指定場所近くの平らな土地で待機してください」

「尚、私達は宇宙国家アース・ガルディアとの連携は一切していません」

「生き残った皆様に神のご加護を」

そう言つて通信は終わった。

この日、同じ内容の通信が欧州特定地域へ3時間 毎に発信された。

この通信を聴いた生き残りのNATO軍関係者と一部政府組織が呼び掛けに呼応して避難民の取りまとめを行い、次々と返答した。

地球暦2020年10月17日午前8時〔スカンジナビア半島 スウェーデン ストックホルム郊外〕

事前の連絡通りの時間に、雪雲と火山灰に覆われた暗い空を突き破るように現れた直径500mは有る巨大な二等辺三角形をした宇宙船が現れると、フィヨルド大地の難民キャンプに集まった避難民は巨大な宇宙船に息を呑んだ後に歓声を上げた。

彼らは、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマークの生き残り数万人であった。

自衛隊とユーロピア・英国極東特殊部隊員が、避難民の誘導を行い、アース・ガルディア登録国民も含めて地球に残る者が居ないか確認を取り、希望者のみ宇宙船でルンナラボへピストン輸送で送られた。ルンナラボの仮居住区に着いた避難民達は、火星との通信でユーロピア国ジャンヌ首相から火星の日本列島について説明を受けた。

全員が火星ユーロピア国への帰属を希望した。

その中には昔、傷心だった幼いひかりを暖かく迎え入れて育てた老夫婦も居た。

地球暦2020年10月17日午前7時〔イギリス グラスゴー近郊〕

この地域に行った指向性通信に応えたのはイギリス軍生き残りが保護していた避難民数万人だった。

ルンナラボから複数の大型上陸用シャトルが向かい、搭乗していた自衛隊と英国極東軍特殊部隊が火山灰と煤（すす）にまみれた避難民を誘導し、ピストン輸送で希望者全員をルンナラボに収容した。

ルンナラボに到着した避難民は、惑星間通信で英国連邦極東のケビン首相と話し、火星の英国連邦極東にこれから移動する説明を受けた。

全員が火星の英国連邦極東行きに同意した。

同時刻【フランス 東アルプス山脈麓】

ユーロピア国ジャンヌ首相の要請でこの地域に呼び掛けを行った結果、フランス軍の生き残りやフランス、スイス、ドイツ等近隣諸国からの避難希望者が数万人集まった。

ユーロピア特殊部隊と自衛隊特殊部隊が彼らの中で、アース・ガルディア登録国民と住み慣れた故郷に居残る事を決めた人々を除いた避難希望者を、スカンジナビア方面救出用の大型シャトルがピストン輸送の途中に立ち寄って全員を収容した。

避難民の收容中に、東山はアース・ガルディア米派閥のソーンダイクとひ密かにシャトル内部で面会していた。

「アース・ガルディアのスペースコロニー環境は現在大変に劣悪です」
疲れきった顔で民政局代議員でもあるソーンダイクは東山に実情を伝えた。

「衛星軌道上のコロニーには避難民の收容限度3000人に対し、現在5000人近くが文字通りに詰め込まれています」

「少ない水と食糧で、コロニーの治安も悪化しています。暴動の有ったコロニーは総代表によって宇宙空間で分解されています」

東山は想像を絶する状況に絶句した。

「我々アース・ガルディアは火星の占領よりも、地球圏での安全地帯を拡げる事が急務なのです」

ソーンダイクが言った。

「貴国が使用しているシャトルの1機でも、避難民の収容に使えないだろうか？」

ソーンダイクが懇願した。

東山は、

「シャトルは全て火星に向かうために必要です」

と答えつつ、この会話を聴いている『結』に代案を相談していた。

結から回答があった。

「もし、ソーンダイク代議員が日本政府に協力して頂けるなら、月面基地に仮設居住区を設けてそちらにあなた方の仲間を収容されてはいかがでしょうか？」たった”50000人程度ですが”

東山がソーンダイクに提案した。

ソーンダイクは協力を確約し、情報提供を約束した。

ルンナラボの仮居住区でようやく落ち着いた欧州各地の避難民達は、火星から呼び掛けを行った英国連邦極東やユーロピア国を頼って、全員が火星行きを希望して半冷凍睡眠カプセルに入った。

こうして、ルンナラボとシャトルを活用した欧州避難民救出作戦で救出された日本人を除く人々の大半は主に英国連邦極東、ユーロピア国に帰属する事になり、火星に到着した避難民は10万人を超えた。

また、敢えて地上に踏みとどまった避難民には可能な限りの物資とルンナラボ経由の通信設備を供与した。

全ての避難民が火星に到着した数カ月後、英国連邦極東ケビン首相とユーロピア共和国ジャンヌ首相が、NEWイワフネハウスを訪問し、アマトハ、ゼイエス、イワフネ、瑠奈、結と美衣子に心からの感謝をした。

結と美衣子は両国への招待を受けたが、

「大月とひかりの新婚旅行のついでに寄る」

と言われて、両首脳は苦笑した。

両首脳は大月とひかりも招待した。

大月とひかりは赤面して何も言えなかった。

地球歴2020年10月27日午前7時【NEW イワフネハウス】

「お父さん、お母さんただいまよ」

美衣子と結は、二人よりも小柄なヒト型クローン少女を間にはさんで手を繋いで帰宅した。

ヒト型クローン少女は、ルンナラボのメインシステムが結によって転移させられた”『妹』”である。

地球生物保管倉庫に遺伝子収集用の幼い雌^{めす}個体を、結がルンナラボ補修時に発見していたのである。

「お父さん、お母さん初めまして。瑠奈と申しますです」

クローン少女がペコリとお辞儀をした。

「よろしく、瑠奈。お帰り、美衣子に結。無事で何よりだよ」

大月は笑顔で3人を迎えた。

その日は帰還パーティーがダイニングで開かれて、NEWイワフネハウスの全員と救難艦のリア艦長も招いてささやかながら、賑やかに開かれた。

リア艦長が火星料理に驚嘆して涙を流しながらカエルの唐揚げを頬張る一幕もあった。

もちろん、少量ながら救難艦乗組員に火星料理の差し入れを後日行い、大いに喜ばれた。

日本政府と休戦合意したアース・ガルディア艦隊はダイモス宇宙基地での補修を終えて地球に帰還し、日本政府と訣別^{けつべつ}したアース・ガルディア派閥の極東米露軍がアルテミア大陸に移動した事で、両者の軍事衝突の危機はしばらく遠のいた。

2年後の地球との再接近時に再び戦火が上がるのは確実だが。

地球歴2020年10月28日午後1時【シドニア地区ナザレ 旧マルスアカデミー 宇宙港】

小山の様に巨大なオウムアムル型救難艦の前で地球人とマルス人の小集団が別れを惜しんでいた。

「大月さん、ひかりさん、澁澤首相、岩崎さん、みなさんお世話になりました」

ゼイエスが挨拶した。

「ゼイエスさん、お元気で。」

「マスター。無茶な研究は控えてくださいね」

「姉さんマスター、アマトハと仲良くすることです」

ひかりや美衣子、結が別れの言葉を送っていた。

「澁澤首相、日本と友好国の皆さんによりしくお伝えください」

アマトハが澁澤とがっちり握手した。

「イワフネ。長命種とはいえ、身体に気を付けろよ。あまり『さらりーまん』し過ぎるなよ」

ゼイエスがイワフネに言うといワフネは苦笑した。

「そろそろ出発の時間です」

リア艦長がアマトハとゼイエスに告げた。

「ミーゴ。ちよつとこつちに来なさい」

ゼイエスが美衣子と呼ぶと、美衣子がとてとてと歩いて来た。

「いざというときは、この座標も使いなさい」

ゼイエスは美衣子と握手しながら思念でプレアデスコロニーの一角に在る『地球型惑星』座標を伝えた。

”今はまだ誰にも言わないように”と注意しながら。

やがてアマトハとゼイエス、ユダヤモウゼ達尖山基地隊員が救難艦に乗り込むと、巨大な小山が微かな駆動音と共にふわりとシドニア宇宙港から浮き上がり、そのまま遙か上空まで上昇した。

巨大な小山が小さな粒くらいになると不意にその粒は光の尾を引いて宇宙の彼方に消えていった。

「行ってしまったな」

澁澤が感慨深く言った。

「ええ。ですが人類に初めて他の星の友人が出来た瞬間でもありますね」

岩崎が応えた。

大月とひかりは手を繋いで、美衣子と結は二人にそれぞれ肩車さ

れ、瑠奈もイワフネ『叔父さん』（美衣子命名）に肩車されながらいつまでもプレアデス救難艦が去っていった宇宙を見上げていた。

予告

地球暦2020年10月18日午前1時〔地球衛星軌道上 調査観測ラボ『ルンナ』〕

ヨーロッパ地区に取り残されていた生き残りの日本人と欧州諸国の避難民を収容した『結』^{むすび}は、臨時のルンナラボ管制室から火星の『姉美衣子』に状況報告をしていた。

「姉さま。地球からの避難民を収容したわ」

「いい仕事ぶりよ。姉さんも鼻が高いわ」

「それでどれくらい収容したの？」

「約10万人」

「まあまあね」

「原子力潜水艦も8隻収容したわ」

「大漁ね」

「手応えは有ったわ」

「それで10万人の輸送方法は？」

「大型シャトルを火星往復用に改造中。管制したら1機につき5000人半冷凍睡眠でピストン輸送するわ」

「潜水艦はどうするの？」

「電磁カタパルトは生きていた。だから打ち合わせ通り火星に無人で打ち上げるわ」

「ルンナはどうするの？」

「妹にするわ」

「まあ、姉ポジションを欲しがると欲張りね。恐ろしい子」

「褒められると照れるわ」

「そつちにクローンは居るの？」

「地球動物の生体標本が有ったから、どれか使うわ」

「お部屋に入るサイズでお願いね」

「・・・分かったわ。マンモスは諦めるわ」

「新しい妹を楽しみにしているわ」

「妹マスターの私に任せて」フランスと鼻息荒く結が答えると通信が終

わった。

「さて、どれにしようかしら」

「ゴアラか、パンダか、イエティか、悩むわ」

結は自宅の大きさを思い出しながら思念体の宿主やどぬしを探しに生体標本室に向かった。

「ソーンダイク代議員との会談は以上です」

東山がモニターに映っている岩崎官房長官に報告した。

「ふむ。とても火星こちらに攻め込んでいる場合では無いですね」

岩崎が納得した様に言った。

「それで、彼らは我々にどの程度の『協力』をしてくれるのでしょうか？」

岩崎が訊いた。

「ガルディア軍の編成情報と、地球上における残留日本人の保護です」

「温ぬるいですね。そんな成果でわざわざ地球に行ったのですか？」

「ルンナラボをソーンダイク派閥に提供し、アース・ガルディア内部での政権交代を目指すようにさせます。それと、旧アメリカ海軍の原子力潜水艦を確保します」

東山が言い直した。

「よろしい。外交とは真正直なだけでは成り立ちません。国家繁栄の為にそれぐらいは大胆に欲張りなさい」

岩崎が頷いた。

岩崎官房長官への報告を終えた東山は休む間も無く

ソーンダイク派閥と連絡を取るのだった。

東山と通信を終えた岩崎官房長官は、美衣子がいつの間にか後ろに立っているのに気が付いた。

「おや。こんにちは、美衣子さん」

「こんな夜更よふけけに申し訳ないけど、少しあなた方にお話したいことがあるの」

美衣子が言った。

「では、澁澤の部屋でお聴きしましょう」

総理大臣執務室の応接セットで澁澤と岩崎が美衣子からとある事象についての説明を受けようとしていた。

「まず、2年後にあの宇宙国家は確実に火星に来るわ。それも強大な戦力を整えて。だからその為の準備を始めた方が無難よ」

アース・ガルディアの再訪を予知して伝えた。

「それと、これが実は本題よ。日本列島がマスターゼイエスのセットした装置で転移した事は分かっていると思うけど、その原理をあなた方だけに伝えておくわ。」

美衣子は縦長の瞳孔でじつと二人を見ると話始めた。

「私の800万環境維持システムは常に、日本列島の様々な生物の『声』を聴いて、それに適合した環境を作り出すの」

「私のシステムに現在一番の影響を与えているのは人間。つまり日本人よ」

「日本人の多くが恐怖を感じたり、強く念じる事があると私は『自動的に』反応してしまう」

「そして、日本人の多くが地球から来たアース・ガルディアに対して危機意識を強く持ち始めた。これはあなた方が地球で核戦争に巻き込まれる前夜の状況に似ている」

「もし、アース・ガルディアが日本列島に大規模な攻撃を仕掛けたら、日本列島はまた転移してしまうわ」

「転移先は私達”マルス文明の基準”で設定された最も安全且つ最適と思われる場所になるけどそれはまだ言えない。私も『その時』にならないと分からないから」

澁澤と岩崎は啞然としながら聴いていた。

「だけど、その時が近付いているのは確かよ。だから、今から日本列島に国民を戻すべき。日本列島が転移した後に地球がどうなったか。火星が日本列島の転移を受けてどの様に激変したか。日本列島の外は危険だわ」

二人は目をつぶって火星に転移した時の混乱ぶりを思い出していた。

目を開けると、既に美衣子はそこに居なかった。

その日、急遽緊急閣議が開かれ岩崎官房長官から、過度に国民の恐怖感を煽ると日本列島が再び未知の世界に転移する事が伝えられ、今後のマスコミ報道や政府公報では事実に基づかないセンサーシヨナルなジャーナリズムを控える閣議決定がなされた。

この日の官房長官定例記者会見で岩崎は、

「私達は今も、そして、今後も未知の火星大地や様々な世界を知ることになるかも知れません。しかし、それは常に日本人にとって危険な事だけではありません。私達がマルス文明という友好的な異星文明と縁を結んだように、希望も常にそこに有ることを皆様の心に留め置いてください。その趣旨をマスメディアに従事する方も強く認識していただきたいのです」

と述べている。

「岩崎はやはり優秀ね」

地下の研究室でホログラム中継映像を見ながら美衣子が呟いたが同時に、

「まだ国民の意識は鈍感ね。なんかこうパーつと変えられないものかしら」

最近富みにクールな46億歳の生き神はざつくばらん^{がみ}に考えると、大月とひかりにとある相談をするために夫婦の寝室に向かうのだった。

結は生体標本室に来ていた。

薄暗い照明で巨大なマンモスやプレシオザウルス、北京原人等を眺めた結は溜め息をついた。

「どれも魅力的な妹だわ」

しかし、NEWイワフネハウスのキャパシティを考えるとどれも家族として迎えるには難があった。

「仕方ないわ。これにしましょう」

結は冷凍保存カプセルで仮死状態の人間少女を見ながら呟いた。

「私が手塩にかけて立派な妹に仕上げるわ」

気合いを入れた結は冷凍保存カプセルを徐々に覚醒させる作業に

取りかかった。

【12時間後】

結はリンナラボのメインサーバールームに来了。

「こんにちは瑠奈」結が声を掛ける。

「ちわです姉御」人工知能『ルンナ』が答えた。

「瑠奈。もうすぐ私達は火星に帰るけどあなたは どうする？」

「姉御に一生ついていきます。一緒にポタージュスープを味わいた
いっす」

「嬉しいわ瑠奈。だけどその言葉使いは頂けないわ。私のちようきよ
——教育がおかしいのかしら？」

結が首をコテンと傾けて考えたがひかりと一緒に視た『極道先生』
の是非について結論が出せないので現状維持を選択した。

「あなたのシステムをこれからヒト標本に転送するわ」

「お、”あの”『かぐや姫』になれるっすか？」

「かぐや姫がどういふものか知らないけど、それでも良いけどあなた
は私の妹になるのは確定よ」

「結ねえさまの妹イエーイ！」ハイテンションなメインシステムが歡
喜のスパークを散らした。

あれ？やっぱり何かが微妙におかしいかも？

と結が微かな不安を持ったが、なんとかなるわと姉の美衣子を思い
出して気持ちをスッキリと切り替えるのだった。

大月とひかりが末娘の教育で大いに悩む未来がこうして決定し
た。

北米大陸救出作戦

地球暦2020年10月19日【月面】

北米大陸には日本からビジネスで渡航したり、観光、留学、海外拠点等、約20万人の日本人が転移当時在留していた。

米国ロスアンゼルス、カナダのバンクーバー等である。

ソーンダイクの米国民救出要請を受けた東山と結は、火星への避難民送り出しをしながら新たな方法を考えていた。

既存のマルス文明の大型シャトルは火星航行に必要なから使えない。

地球と月面のピストンだけでいいのならば、あるいは。

東山は結に 多数の米国原子力潜水艦を改造して救出にあたる相談を始めた。

「改造はレンナラボで出来る。改造した潜水艦はせいぜい地球往復用の技術だけ装備させれば火星には来れないわ」

結が可能性有りと答えた。

東山はソーンダイクやガルディア軍米派閥の将校と救出作戦を計画するのだった。

地球暦2020年10月29日【神奈川県 横浜市神奈川区 NE
ワイフネハウス】

「パパっちー！おきやくさんやでー」

見た目幼い黒髪の少女がその外見とは似ても似つかない言葉使いで大月を呼んだ。

「溜奈。お父さんと呼びなさい。お客さんだって？」

「お父さんめんごツス。ジョーンズ叔父さんやで」

大月は言葉使いを直すか、関西弁をひかりにレクチャーさせるか一瞬考えたが頭を切り替えた。

「わかった。美衣子もリビングに呼んできてくれるかな？」

「もうジョーンズはんにお茶出しとるツす。」

大月はやはり正しい言葉使いを優先しようと心に留めた。リビングでは美衣子がジョーンズ少将にお茶と『ぶぶ漬け』を出していた。

「あつ、美衣子！これはお客さんに出したらアカンやつや！」

大月が激しく突つ込むとジョーンズ少将に謝った。

「少将すみません。まだ、日本文化の地域性を混同していて…」

「構わんよ。実は二人にお願いが有って来たのだ」

ジョーンズ少将は大月と美衣子に頭を下げた。

「私を月に送ってはくれないか？」

大月が、

「確か月面では北米大陸救出作戦が続行中です。ガルディア軍と少将の本国の部隊が」

と応えた。

「そうだ。北米大陸救出作戦のニュースは在日米国民と兵士のホットニュースになっている。ぜひ自分達も加わりたいという志願者が後を絶たんだ」

「そして、私も行きたいのだ」

ジョーンズ少将が美衣子を見つめた。

「若い志願者の兵士ならともかく、あなたの歳では半冷凍カプセルと言えども身体が強力なGに耐えられないと思うわ」

美衣子がハッキリと告げた。

「私は日本列島を護る役目があるから火星を」

離れる事は出来ないわ」

「そうね。名取にお願いしてホワイトピースに乗せてもらいなさい。私から名取にお願いしておくわ。あなたは、そうね、天草にお願いしてみなさい。火星協力機構プロジェクトとして機構軍救出部隊を率いてみたら面白いわね」

話の流れを聴いていた大月が、

「美衣子。機構の事は天草さんに任せなさい。ただ、ジョーンズ少将や名取大佐が安全に月へ航行出来るようにアイデアを出してあげなさい」

と先走る美衣子を抑えた。

「ジョーンズ少将。天草理事長には私から伝えておきます。お身体に気を付けてくださいね」

「ミスター大月。ありがとう、感謝する」

ジョーンズ少将が帰ると大月はひかりに先程の話を報告して大月は天草に、ひかりは岩崎に連絡を入れるのだった。

地球暦10月30日【火星衛星軌道 航空宇宙自衛隊 『ダイモス』
宇宙基地】

「名取艦長。この度の協力、在日米国民を代表して感謝する」

ジョーンズ少将が名取大佐に頭を下げた。

「地球温暖化取り残された国民の為ですから、ジョーンズ少将は頭を上げてください。我々こそ、月面（現地）から地球北米大陸と、慣れない土地になります。ご指導お願いします」

名取艦長がジョーンズ少将に頭を下げる。

昨日夜に火星協力機構会議がNEWイワフネハウスで開催され、何か夕食を取りながら（恐らく美衣子の希望だろうが）北米大陸救出プロジェクトと地球復興調査隊の派遣が話し合われた。

ジョーンズ少将と在日米軍志願者で構成された特殊部隊100名と、地球環境の現状調査と復興の可能性を探る調査隊に国立天文台所長の空良、JAXAの琴乃羽、英国とユーロピア宇宙局の科学者がホワイトピースに搭乗してモビルスーツ部隊と共に月面アース・ガルディア ソーндаイク派閥の『ユニオンシティ』へ派遣される事になった。

今回は電磁カタパルトからの打ち上げではなく、身体に負担の少ないホワイトピースの宇宙航行速度で約2週間の行程で月面都市に向かう。

前回の月面往復時に、火星と月面の間在一定間隔で 宇宙灯台（自働旋回航行の小型シャトル）を配置しており、宇宙灯台の信号を目印に地球人類のみで航行出来る様になった。

また、この速度でも現在アース・ガルディア本国に帰還中のアング

ルモア艦隊を追い越して到着するので、月面都市に到着後は高瀬少佐率いるモビルスーツ部隊がソーンダイク派閥の軍と共にロシア主流派を牽制する事になっている。

「皆さん。火星とはあくまでも休戦協定しかしていません。2年後を念頭に、兵士諸君は『その辺も』気を付けて行って頂きたい」

協力機構の代表国理事でもある澁澤総理が食卓を囲む皆に注意を促した。

大月は、「最近、家のリビングが国際会議場になる日が多くないか？」と内心思っていたが、美衣子やひかりの友人である東山の安全に関わる以上、突っ込んで仕方ないと思うのだった。

空飛ぶ方舟

地球暦2020年10月19日〔旧フロリダ半島沖（現フロリダ諸島）〕

噴煙と雪雲が混じるどんよりした空模様の中、辛うじて連絡がとれた旧米海軍ロスアンゼルス攻撃型原子力潜水艦20隻が集結していた。

各艦長は迎えのボートに乗って陸上の旧ケープカナベラル宇宙センターで、ソーンダイク代議員からとある作戦の説明を受けた。

あまりにも奇想天外な作戦に皆は困惑したが、米国民を安全地帯に送り届ける作戦に各艦長が同意した。

艦に戻って1時間後、暗い空から巨大な三角形をしたマルス文明の大型シャトルが姿を見せると、艦長以下水兵はあんどりと口を開けて固まっていた。

マルス大型シャトルは1隻ずつ、ロスアンゼルス型潜水艦を船内に収納すると月面のルンナラボに特設されたエアドックに移送した。

エアドックでは、鷹見 結むすびの技術指導を受けた生き残りのNASA科学者と米海軍技術者が潜水艦のスクリューを。パルスエンジンに転換する作業と、大気圏を出入りする際に生じる摩擦熱まさつねつで船体加熱されるのを防ぐための耐熱カプセル装着と製作がルンナラボに收容された欧州避難民とガルディア旧米国民を総動員して行われていた。

耐熱カプセルは、スペースシャトルの耐熱タイルを敷き詰めたずんぐりとした円錐形えんすいけいであり、潜水艦をすっぽりと覆っていた。

巨大な円錐形の急造潜水艦シャトルは、作業にあたった水兵から『空飛ぶ方舟』はこぶねと呼ばれるようになった。

20隻の『空飛ぶ方舟』は、北米大陸各地から米国避難民や生き残った軍部隊と装備を收容してルンナラボを往復した。

10月下旬になると、東山と結達が火星へ帰還したのと入れ違いに、火星からジョーンズ少将率いる第二次救出部隊が月面都市に到着した。

航空宇宙自衛隊の強襲揚陸護衛艦ホワイトピースや空飛ぶ方舟を

使用した救出作戦は続けられ、2020年12月末時点で5万人を越す避難民、1万人近くの米軍兵士がルンナラボに収容された。

また、ジョーンズ少将の提案で火星救出部隊と旧米海軍が南太平洋上に電磁フィールド展開可能なメガ・フロート群が建設され、北米大陸等からの避難民15万人が月面都市に避難するまでの一時的滞在場所として活用された。

メガ・フロート船団は火山灰の影響が少ない南半球海域の火山帯を避けて旋回航行した。時おり濃厚な火山灰や火山ガスに遭遇した時はマルス文明を応用した電磁フィールドを展開して、フィルター機能で火山灰や火山ガスを中和し、メガ・フロート群に清涼な空気を送り込んだ。

火星の日本列島諸国が懸命に救出作戦に従事しているのを目の当たりにした英語圏代表議員ソーンダイクは、日本政府と対立するのは得策ではないとの思いを強くした。

マルス文明と友好関係を築いた日本政府の技術力は実用的で、月面基地と地球海洋上メガフロートでの仮設居住区建設は大いに避難民達の生活向上に寄与している。

地球上の天変地異が治まるまでは、一時的に衛星軌道上や月面で避難生活を送るしかないが、その為には火星から奪うのではなく、共存して生存圏を拡げる努力が必要である。

ソーンダイクの思想は、やがてアース・ガルディア内で反主流派をまとめる大きな流れとなっていく。

日本政府と東山は、鷹見 結を通じて月面マルス基地のメインサーバー『ルンナ』を閉鎖（溜奈として火星に引き取った）した上でソーンダイク派閥に基地施設を提供した。

調査・観測機能が無い、単なる寝床程度の意味しかない最低限の居住区画ではあるものの、ソーンダイク派にとっては地球上の地震津波や火山噴火に逢うことが無く、スペースコロニーよりも居心地の良い環境は10数万人の国民を収容するには充分だった。

ソーンダイク派閥は日本政府と火星協力機構の支援を受けながら居住区を拡充していき、やがて月面地球側表面に人類初の月面都市が

誕生することになった。

月面都市『ユニオンシティ』は北米大陸から次々と救出される避難民の生活拠点となり、残存旧米軍とガルディア軍ソーンダイク派部隊、火星協力機構派遣軍司令部が置かれた。ユニオンシティは、日本列島政府や火星協力機構との物資交換、軍事技術の共同研究を深めながらささやかな繁栄を遂げた。

この月面都市は、衛星軌道上の首都コア・サテライトコロニーにたいじ対峙する国力を持つ第2首都として力をつけていった。

風雲、ムスビ城

火星衛星軌道からガルディア艦隊が撤退し、月面都市を拠点とした北米大陸救出作戦が一定の成果を出しつつある現在、火星日本列島は2年後のアース・ガルディア艦隊来訪に備えねばならなかった。

月面ユニオンシティのソーンダイク派閥との定期通信も始まり、小型無人シャトルを通じたささやかな物資交換や地球復興と月面都市拡充に必要な資材の支援も行われていた。

モビルスーツ部隊の増設、火星協力機構宇宙軍の拡充、再転移対策等を考えながら地球復興を模索する2年間になりそうだった。

そんな慌ただしい世相の中、美衣子と結と瑠奈の三姉妹は大月家のリビングでハロウィンで使ったカボチャのポタージュを味わっていたが、

「まずいわね」

「美味しいですよ姉さま」

「最高の味ツスよ！」

てんでバラバラの感想を口にしたが、

「ポタージュは絶品だけど、人々の不安が消えない」

ポツリと美衣子が呟いた。

「むしろ増していますね」

「人間は複雑ツスね！」

結と瑠奈も同意した。

「このままでは2年後を待たずして日本列島が転移してしまうわ」

「それはまずいわ」

「最高に不味いツス！」

「とりあえず、考えはあるのだけど」

美衣子がとある計画を告げた。

地球暦2021年3月【東京都千代田区永田町 首相官邸 内閣官房執務室】

美衣子達三姉妹は大月とひかりに付き添われて岩崎と面会していた。

「なるほど、国民感情を和らげたいと」

岩崎がふむふむとうなずいた。

「具体的なお話を伺いましょう」

「娯楽よ」美衣子が言い放った。

大月はちよつとお腹がいたくなくなった。

「スポーツ、バラエティ、教養よ」

美衣子が説明する。

「私は火星オリンピックのサポートをするわ。商品は金銀銅メダルのほかに、私と結が発明したお宝グッズの数々よ」

「私は『風雲ムスビ城』をやるわ。トラップ仕込みの私が作った遊び用のダンジョンを攻略できた人にお宝グッズよ」

結が名乗り出た。

「自分は『極せん』でテレビデビューして日本の芸能界を明るくするツス」

瑠奈が一番怪しい計画を宣言した。

「わかりました。瑠奈さん以外、採用しましょう。瑠奈さんは、日本人と同じ外見ですからまずは日本社会を学ぶところからですね」

「ガーン」瑠奈が思わずよろめいた。

「瑠奈はとりあえず、小学四年生位からスタートさせてください」

大月が岩崎に要請した。

こうして美衣子は、極東諸国が参加する火星五輪のメインスポンサーとなり、2021年10月に東京を開催地として行われることとなった。

オリンピック準備のために外務省は極東米露と協議し、参加要請受諾の代わりに極東米露との鉱物資源をはじめとする輸出入が日本列島と再開されることになった。

結は、内閣官房広報係に相談して民放とNHKが共同番組で放映することになり、富山県立山市の尖山マルス基地跡を結がダンジョンとして作り替え、公募した一般市民と攻略隊長のイワフネ叔父さんが参加する設定で毎週参加者を募る事となった。

瑠奈だけは首相官邸を訪ねた翌日、大月とひかりに笑顔で見送られ

ながら赤いランドセルを背負って駈しっけに厳しい某私立女子大学付属小学校に入学した。

地球暦2021年4月【NHK・民放共同 視聴者参加型番組『風雲ムスビ城』】

2年前の初夏に突如発生した謎の竜巻に覆われて以来、殆ど姿を見せなかった立山市郊外にそびえる尖山がその日は穏やかな自然浸食形成された三角形の綺麗きれいな山体を現あらわしていた。

その尖山の登山道入口に戦国武将の鎧よろいを

着込んだイワフネが、5000万人のNHK受信料を支払った応募者から選抜された500人の足軽装束や西洋騎士、迷彩色の近代軍服を着た参加者を前に緊張しながら訓示した。

「よくぞ集まってくれた我が精鋭達よ！邪悪なる者が築いた悪夢の砦を今日こそは我らの手で討ち滅ぼさん！」

参加者達が鬨とぎの声を挙げた。

「全軍突撃ー」イワフネ隊長が軍配を降り下ろした。

「ウオオ!!」

登山道から一斉に500人が突撃して尖山の山頂を目指した。

登山道に足を踏み入れた途端に尖山の風貌がピカツと光ると黄金色のピラミッドに変貌へんぼうした。山の中腹辺りには不気味なひとつ目がギョロリと参加者を見下ろした。

登山道の地面から突然オイルが噴き出して登山道をヌルヌルにして参加者は次々と足を滑らせて登山道入口まで滑り落ちていった。

不気味なひとつ目の上にフワリと『ムスビ』が浮き上がって参加者を見下ろして宣告した。

「このガマの油坂を15分で乗り越えられない者はまた来週よ」

200mのガマの油で覆われた山道を参加者は慎重に四つん這いになりながら、時には岩や倒木を利用して滑らない場所から坂の上を目指した。

300人が脱落した。

脱落した参加者には富山の薬売り謹製のガマの油が 配布された。

油まみれの体で坂の上まで登りきった勇者達の前に中腹の不気味なひとつ目が巨大な池となつて行く手を阻んでいた。

だがよく見ると、池の縁から向こう側まで飛び石が幾筋もの経路で配置されていた。

池の向こう側には屋外用シャワー施設があり、暖かい湯が油を落としてくれるだろう。

シャワー室の前にドラキュラマントを羽織ったムスビがテンション高めに煽った。

「さあ、勇気有るものはこの飛び石を使って池のこちら側に来てみるが良い！」

参加者は我先に飛び石に殺到するが、油にまみれた足を飛び石で滑らせてしまい、次々と池に転落していった。

転落した参加者は水中ドローンに救助され、『立山の美味しい水』350mmペットボトルを貰った。

時間制限は無かったが、飛び石の中には踏んだ途端に水没する”ニセ飛び石”が所々に存在しており、後続の挑戦者達は必死で罫場所を覚えて安全なルートを見つけようした。

何とか池を渡りきった挑戦者達は温泉シャワーで油を落としてさっぱりとした顔でリフレッシュするのだった。

140人が生き残った。

シャワー施設の向こう側には扉が3つあり、扉の向こうには何枚もの板で封鎖された登山道があった。

「さあ、我が生け贄どもよ。悪魔の扉をくぐると良い！」

参加者は右か左か真ん中か選んで扉を開けて飛び込んでいった。

《右の扉》

開けた途端に登山道入口に「戻って」しまう結謹製『どこへもドア』であった。

《真ん中の扉》

山道を塞ぐ板に体当たりすると薄いベニヤ板でいとも容易く突破でき、次の板に体当たりすると今度は和紙でベリベリと破って最後の板に体当たりすると紙のように薄い鋼板で大抵の参加者は身体を打

ち付けて板に跳ね返されてリタイア宣告され、参加賞の和紙20枚を貰った。

《左の扉》

山道を塞ぐ板は金色に神々しく輝いていた。それでも体当たりすると金紙であり、あつさりと通過できた。その先には労を勞う金の盃さかずきが置かれていた。

この扉を選んだのは38名だった。

金の盃を手にとった勇者達は山道の先にある200mある吊り橋たどに辿り着いた。

吊り橋の前に立看板があり、『このはしわたるべからず』とマジックで書かれていた。

吊り橋の向こう側には、一升瓶いっしょうびんを重そうに抱えた結がプルプルと足を震わせながら待ち構えていた。

『さあ、我が美酒を金の盃で飲み干すものこそ最後の戦いに挑めるのだ！』

結は今にも一升瓶を落としそうだった。

一休さんの逸話を知る勇者は吊り橋のど真ん中を無難に渡りきり、『お疲れさまでした』と結から一升瓶に入った麦茶を注がれていた。

吊り橋の縁の綱を掴んだ者には橋の左右から大小の雪玉が打ち付けられた。

中には直径3m超えの大玉もあり、直撃を受けた参加者は吊り橋から奈落の底に転落していった。

奈落の底は天然温泉であり、美しい富山湾が結の演出でホログラムに映し出され、脱落した悔しさを暖かい温泉で癒いやした。

勝利の麦茶を口に出来たのは25名だった。

最後の試練は、山頂手前で立ちふさがるマリオカートに乗った結達NEWワイフネハウスの面々だった。

吊り橋の近くにはいつの間にか人数分のマリオカートとヘルメットが置かれていた。

マリオカートのフロントに30センチの的が付いており、ヘルメットのてっぺんにも10センチの的が付いていた。

挑戦者達に拳銃よりふた廻りほど大きい遊戯用赤外線レーザー銃が渡された。

『さあ、地獄行きの大クシーに乗って挑むがよい!』
バルカンレーザー機関銃を手にした結が宣言した。

イワフネハウスの面々は挑戦者達と同じ銃と的を装備していた。
挑戦者達のマリオカートが一台でも山頂にたどり着いたらムスビ大魔王の負けである。

今まで難関に居なかつたイワフネ隊長はちやっかりバルカンレーザー銃を手に味方のマリオカートに乗って号令した。

『全車突撃!』

尖山の山頂手前でマリオカート同士による決死の攻防戦が繰り広げられた。

瑠奈のマリオカートに挑戦者のレーザーが集中砲火を浴びせたが、『走り屋』の瑠奈は巧みなドライビングテクニックでドリフトしながら挑戦者達に肉薄するとレーザー銃で応戦して戦果を挙げていた。

一方、意外と美衣子は不器用でマリオカートにも関わらず、いきなりエンストしてリタイアした。

大月はそのメタボ体形故に的にされやすく、早い段階で挑戦者のレーザーをフロントの的に受けてリタイアした。

結とひかり、岬教授は3人で巧みなチームプレーを披露し、『赤い三連星』の必殺技“ゼットストリームアタック”で挑戦者達のマリオカートを次々と刈りとっていった。

最後にイワフネ隊長のカートだけになった段階で挑戦者側の敗北となった。

「勇者達よ!来週も待っているぞ!」

結が視聴者を挑発すると尖山は再び竜巻に覆われて見えなくなつた。

『風雲ムスビ城』はその年のテレビアクション部門で最優秀作に選ばれる事になる。

トイレの花子さん

大月家三姉妹の末娘『瑠奈』が通う名門女子大学付属小学校の怪談に、トイレに出没する有名な”あのお方”の話が有ることを瑠奈が知ったのは国語の時間である。

「はい。では次の所を大月瑠奈さん、読んでください」

澁澤真智子先生に指名されて瑠奈は国語の教科書に記載されている『かぐや姫』を読み上げる。

「竹を割って見つけた可愛い少女をお爺さんは自宅にお持ち帰りすると、お婆さんが帰る前にコスプレを教えてあげました」

「はい、瑠奈さんストロープッ！」

頭を抱えた真智子先生に注意された瑠奈は、

「え？教科書に書かれていることは事実に戻します。本当は竹林で遭難していた少女を見つけたイワフネ隊長が……」

瑠奈の教科書と離れた『お話』が始まるや否や真智子先生が遮って、「はい。瑠奈さん。このお話は止めて『ガリバー旅行記』にしましょうね」

「分かりました。それでは……『ガリバーが目を覚ますと小さい人がガリバーの上にまたがって色々動いていました。小さい人は縄でガリバーを縛るとガリバーが喜んで……』」

「瑠奈さんストロープッ！キッチンと教科書に書いてある文章を読んでください。瑠奈さん文章を省略して読むではダメよ。表現が妖し過ぎですよ？ではこの話なら、『シンデレラ』にしましょうね」

「シンデレラは意地悪な継母ママははと姉達に毎日虐待されていました。ある日、継母と姉達が外出している時にシンデレラは児童相談所に通報しました。相談員の魔女はシンデレラから聞き取りをすると、お城に報告しました。

文部省（お城）の王子さまが同情してカボチャの馬車を手配しました。

その日の夜、お城で政治パーティが開かれるとシンデレラは王子さまが手配したカボチャの馬車でお城に向かいますが、お城で降りよう

としたシンデレラはカボチャの馬車料金が払えなかったので御者に通報されてしまい、困った王子さまはお城で働いて返すようにシンデレラに言いました。

お城の鐘が10時に鳴っても政治パーティは続き、シンデレラはバニーガールドレスを着ながらみんながダンスをする中懸命にメイドの仕事を頑張っていました。

やがてシンデレラを見つけた王子さまはシンデレラに近付くところを言いました。

『夜10時以降に児童は働いてはいけないんだよ』

と言って、児童保護法違反でシンデレラと相談員の魔女はお城の牢屋ろうやに入れられました。

相談員の魔女は12時の鐘が鳴るのを待ちなさいと言いました。

真夜中12時の鐘が鳴ると魔女は魔法で牢屋の鍵を開けると脱獄しました。シンデレラは魔女に誘われましたが共犯は嫌だと言って牢屋に止まりました。

朝になつて魔女の脱獄が分かるとシンデレラは魔女の脱獄を通報しなかった罪で更に長い間牢屋に居ることになり、継母達から虐待されずにすみましたとさ。つ。」

「はい溜奈さんそこまでストープッ！放課後に職員室へ来てください！」

「お誘いありがとうございます。ですが、放課後は秋葉原のゲームセンターで自衛隊の方とくんれ・・・」

「お誘いではありません！生徒指導です！必ず来なさい！」

怒りで真っ赤になった顔で真智子先生が溜奈に命じた。

「了解しました。サー」

溜奈が敬礼して応えた。

「・・・」真智子先生は突っ込むのを諦めた。

授業が再開されると溜奈は右隣の席に座る優美子から

「溜奈さん怖く無いのですか？澁澤先生はしつけにとっても厳しいお方ですよ？」

と小声で聞かれた。

「え？そうなの？あれで”厳しいの？”」

瑠奈がけろつとして優美子に聞いた。

「とてもお説教が怖くて職員室に呼ばれた生徒はみんないつも泣きながら帰って来ますわ」

ゲームセンター仲間の名取優美子なとりが顔を青ざめさせながら瑠奈に説明した。

「でも、トイレの花子さんよりはマシっしょ」

左隣に座る天草華子あまくさはなこが瑠奈と同じ口調で応える。

天草と名取は瑠奈の親しいクラスメイトである。

瑠奈が転校してきた時に最初に声をかけてきた二人組である。

天草華子の父はJAXA理事長 天草士郎であり、名取優美子の父は航空宇宙自衛隊『ホワイトピース』艦長 名取大佐である。

ちなみに真智子先生の夫は澁澤総理大臣である。

勿論子供達はその事を知らない。

真智子先生は夫から”やんちゃ”なマルス文明人の教育を懇願こんがんされたので全ての事情を知ってはいたが。

「それだー！」

突然瑠奈が叫んだので、ぶち切れた真智子先生から超音速でチョークが放たれたが、瑠奈は

「シールド」

と唱えるとチョークは瑠奈の顔前で停止してしまった。

二人が慌てて

「ちよ、瑠奈ちゃん、本気出しすぎだよ。また先生に怒られちゃうよ？」

「ごめんっす」

正気に戻った瑠奈は、

「先生。ごめんなさいッス」
と深く頭を下げた。

国語の授業が終わると瑠奈は二人にトイレの花子さんについて詳しく聴くのだった。

放課後、一時間半に及ぶ真智子先生とのトークバトルで一汗かいた

(真智子先生はしばらく職員室でシクシク泣いていた) 瑠奈は、トイレに行きたくなつたので、4階の隅に有る古いトイレに入った。

個室でお花を摘んでいると、ドアがノックされたので

「新聞は取ってません」と瑠奈は応えた。

再びノックされたので、

「NHKは払っているので結構です」と答えておいた。

更にドンドンと強くノックされたので、

「お前誰だよ?!」

と切れ気味に応えようと、ドアの向こうから

「俺だよ、オレ」

「オレオレ詐欺ですね。通報しました」

「ちよ、待ってよ!何で怖がらないの?」

ドアの向こう側から焦つた声が聞こえた

「何で怖くならないといけないの?システム端末444番?」

瑠奈がドアをババーンと開けると水色の光球体がフヨフヨと浮いていた。

「美衣子お姉さまの下僕がこんなところでサボって。帰ったらお姉さまに言いつけるわ」

「や、やめてー、それだけは勘弁してくださいー!」

必死に水色の光球体が瑠奈の周りを飛び回った。

「話しなさい。こんなところに居る理由を」

瑠奈がサブシステムの上位者として命令した。

「目に見えないものへの信仰心ですか?」

瑠奈がコテンと首を傾げて問う

「はい。こうして人間が幼少な時期から目に見えない存在に怯える習慣を植え付けて、神社仏閣に住まう同胞(システム端末達)への信心深い気持ちを育むのです」

光球体が答えた。

「でも、こんなところでチビチビやっても1億1000万人の国民に對して効果ないわよ?」

瑠奈がシビアに指摘する。

ちなみに瑠奈が本気モードになるとキッチンと言葉使いが普通になつていたりする。

「昔からのコマンドなもので・・・」

光球体が恐縮して弱々しく点滅した。

「幼少な人間多数を怯えさせれば良いのね？」

瑠奈が確認する。

「はい。メインシステムミーコの解析結果に基づいていますので」

「ふうん。もつと効率的で現代的な方法を教えてあげるから明日もこの時間にここに来なさい。わかった？」

「いえっサー」光球体が心なしか敬礼したように瑠奈は感じた。

帰宅した瑠奈は姉の美衣子ミイコに学校での出来事を報告すると、

「うっかりしていた。瑠奈の好きになさい」

と美衣子に言われるのだった。

瑠奈は、マスコミに詳しい結むすび 姉にある相談をした。

翌日の夕方――

学校のトイレ個室で光球体（花子さん）と待ち合わせた瑠奈は、光球体を連れてNHKのスタジオぱーくに向かった。

「あなたが姉様のポンコツシステムね」

スタジオの中で結が光球体（花子さん）にさらりと毒を吐いた。

「ポンコツですいません。非効率でホントすいません」

光球体（花子さん）は今にも消えそうになった。

「仕方ないわね。ディレクターさん、ちよつと良いかしら？」

結が番組ディレクターと打ち合わせを始めた。

翌日、朝のNHK教育チャンネル『ムスビさんと一緒』でその光球体は新たなデビューを果たした。

子供達が”ムスビおねえさん”と楽しく体操している背後に少女が無表情で立っていたり、カメラに向かって皆が笑顔で手を振る中、一人だけムスビの肩から女の子が顔を出してジツと見つめたりしていたが、子供達は誰も気付けなかった。

「こんなところね」フンスと胸を張る結に、

「姉さんさすがッス」と瑠奈が喜んだ。

この日、NHKの幼児向け教育番組で幽霊が映っているとの問い合わせが渋谷の放送局に殺到した。

ネットや民放のニュースでも話題となり、番組に出演していた子供達が恐怖のあまり出演を拒否する事態に発展した。

大月とひかりは当然の事ながら経緯を知っていたので首相官邸の岩崎に連絡を入れて、結と瑠奈を連れて謝りに行った。

事情を聴いた岩崎官房長官と真智子先生の夫である澁澤総理大臣は溜め息をついて、番組演出に『ダメ出し』をした。

その日、ひかりのお仕置きで三姉妹に晩御飯は出されなかった。

反省した3人は光球体（花子さん）と話し合って、花子さん（光球体）のジョブチェンジを決めた。

「別に怖がらせるのではなくて、奇跡を起こして幸せにすれば良いのよ」

結が言った。

瑠奈の通う学校に新しい『怪談』が生まれた。

トイレの個室で願い事すると必ず叶う、その後でお礼（具体的には放課後、瑠奈の机にポタージュスープを置く）しないと、叶った願い事がキャンセルされ、更に事態が悪くなるという世知辛い妖怪が居るらしい。

この怪談はまことしやかに校内で囁かれ、優美子や華子が実際に体験してから一気に広まった。

瑠奈が小学校を卒業する頃には、日本の代表的な『学校の怪談』として”トイレの神様”が世間に認知されるようになっていた。

ちなみに瑠奈は物語に興味を示すと、自分で昔話を書いて投稿サイト『なろう小説』に毎日投稿した。

瑠奈の毎回予想を覆す昔話は多くの読者からブックマークをされて、転移列島の作者が悔しがる事になる。

火星五輪（前編）

ガルディア暦4年（地球暦2021年）7月20日【地球衛星軌道上 アース・ガルディア コア・サテライト 総代表執務室】

「火星でオリンピックピックだど？」

イゴール総代表が怪訝な顔でアレクセイエフに問い直す。

「はい。火星日本列島政府から、国家代表選手の派遣要請です。一番の注目はこの種目です」

アレクセイエフが手際よく大会プログラムを手渡した。

イゴールは目を見開くと、

「何の冗談なのだ」

啞然としていた。

プログラムには、お馴染みの種目の他に、『モビルスーツ綱引き』

『モビルスーツ玉入れ』

『モビルスーツ相撲』

『モビルスーツ騎馬戦』

と、何やら日本の運動会的な種目が混じっているが、驚くのは《モビルスーツは大会組織委員会が貸し出します（但し現地のみ）》と書いてあるのだ。

ちなみに《モビルスーツ習熟訓練には通常2週間程度かかるので、貸与を希望される団体は早めに開催地に着く事をお薦めします》となっていた。

「我が国の技術ではモビルスーツは作れません。大会に参加して何らかのノウハウを掴むのが最適かと」

アレクセイエフが進言した。

「では早速代表選手を選抜しよう。祖国の体操競技やハンマー投げ、レスリングならばそこそこの選手が避難民に居るかも知れん。ソーンダイクを泳がせるチャンスでもある」

イゴールが意味ありげに薄笑いを浮かべた。

同じ頃、火星【ボレアリフシテイ郊外 火星協力機構 研究所】

新国立競技場と同じ規模のドーム広場でモビルスーツ競技の模擬

練習が行われていた。

新たに開発した、地上専用型モビルスーツ『グヘ』『スゴック』『陸戦用バンダム』を装備した陸上自衛隊 習志野特殊機動部隊と、航空宇宙自衛隊 ホワイトピース搭載モビルスーツ部隊の対抗試合の形式を取っていた。

「始めなさい」美衣子^{ミイコ}がホイッスルを吹くとモビルスーツ部隊同士が綱引きを始めた。

最初は美衣子が手頃な巨大ワームを生け捕りにして『綱』として使おうとしたが、模擬会場がパニックに陥った為に自衛隊が巨大ワームを退治してから、鋼鉄製のワイヤーを10数本編み込んだ『綱』を使用した。

ホワイトピースのバンダムとガンキャノン、ガンタンクがその他のジムウと一緒に鋼鉄の綱を引き寄せる。

対する陸自側も『グヘ』『陸専用バンダム』部隊で 対抗した。スゴックは装備した3本爪が綱を掴めず棄権した。

綱引きはガンキャノン、ガンタンクと重量に優るホワイトピース部隊の勝利に終わった。ガンタンクが何故綱を引けたかは謎である。

「モビルスーツの体格で優劣^{ゆうれつ}はどうなのかしら」
美衣子が珍しく悩んだ。

「美衣子。モビルスーツの使い分けをするのも既に勝負事の駆け引きにならないかなあ?」

大月が意見した。

「重量のあるガンタンクは確かに綱引きや相撲には強いかも知れない。でもジムウやザクウ、グヘ、バンダムなんかは機動力で速攻勝負だよ。それらの特徴を練習で感じ取って、選択するのはもはや実力であって、格差ではないよ。どのチームも同じ機種を選べるように量産化を進めてみたらどうだろう。」

「ん。お父さん頼りになるわ」

「ご機嫌な美衣子が大月にしがみついて身体をよじ登ると肩車の位置に収まった。」

日本政府が極東米露やアース・ガルディアにも招待状と参加要請をしたためた書簡を送り、全ての国と自治区が何らかの競技に参加する事になった。

特にモビルスーツ競技は、全火星国家とアース・ガルディアが選手団を派遣した。ちなみにモビルスーツ競技は操縦出来れば問題ないので年齢上限は無い。15歳以上ならば、モビルスーツが万一転倒した衝撃でも怪我はしにくいと研究で判明したのである。

オリンピック開催の2か月前から各国の選手団が東京お台場海浜公園の選手村に入り、シミュレーターによるモビルスーツ操縦技術の習得や、通常種目のトレーニングを行い、スポーツの祭典は盛り上がりを見せ始めていた。

日本列島のマスコミは火星で行われる人類初の画期的なオリンピック準備を連日報道しており、日本国民は来年に迫る戦乱を忘れさせるお祭り前の楽しい雰囲気になった。

もちろん、選手村のすぐ外では選手団を率いてきた各国の政府高官が敵味方入り乱れて接触し、情報収集や秘密協議に日々勤しんでいた。

地球歴2021年8月上旬〔火星アルテミア大陸 人類都市ボレアリフ 総合行政庁〕

「パノフ大統領。それは科学的に証明できるのですか？」

ミツチエル大統領が訊いた。

「科学的というよりは、結果的に状況を分析するとその様に判断するのが合理的と言えるのです。ミツチエル大統領」

パノフ大統領が答えた。

「日本列島の”守護者”が感情に左右されやすいと？」

「ええ。第一次上陸作戦で重症を負った日本人を覚えていますか？」

「ミスター大月でしたな」

「彼が巨大ワームに呑まれた後、ワームは守護者によって東京に転移させられて大月が救出されたのです」

「一昨年の学会でマルス人のゼイエス氏が語った、日本列島を維持管理する自律人工知能が守護者と思われれます」

「では、ミスター大月の意向次第で日本列島の運命が左右されるのですか？」

「人工知能である以上、マルス人の設定プログラムを踏まえてミスター大月の動向をトレースしているのかも知れません」

「ミスター大月をこちら側に引き入れてしまえば良いのでは？」

「自由と民主主義の守護者らしくない発言ですな」

「所詮は国益追求の方便に過ぎない」

「アメリカ人は現実主義者でしたね」

「貴国程ではありませんよ。五輪期間内に彼をこちら側に『招待』しますか？」

「あからさまな招待は彼の周りにいる人々に気付かれるでしょう。機会を待ちましょう」

パノフ大統領が言った。

彼らは美衣子の存在を推測したが、その”操作”方法を全く間違えていた。

同時期【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】

「お父さんが危ないわ」美衣子が言った。

「危険が危ないわ」結が同調した。

「パッチがロックオンされてるっすね」瑠奈も同意した。

「どうして？」ひかりが訊いた。

”海外の人達”は私達の動向はお父さんが原因だと思っているから」

美衣子が答えた。

「極東米露が日本政府と対決するのに決め手を欠いているからだろうか？」

大月がお茶を啜りながら言った。

「極東米露は美衣子をコントロールして誰よりも優位に立ちたいのが本音だろう。アース・ガルディアとの協調は少なくとも極東アメリカにとって不本意な展開になったのかも知れない」

第一次アルテミア大陸上陸作戦前に行われた沖縄辺野古基地での海兵隊将校と打ち合わせをした際に、海兵隊は明らかに極東ロシア

を嫌っていたのを大月は思い出しながら言った。

「愚かだわ極東米露とやら」

美衣子がフランスと鼻息荒くテーブルをぺちぺちと叩いた。

「私を屈服させるにはカボチャポタージュ一万杯は必要よ」

「チョコすぎよ美衣子」 ひかりが注意した。

「少なくともお父さんに庭付き一戸建てを賄賂ワイロで贈って、横浜シエラトン全館貸し切りでロハで結婚式くらいさせてくれないと無理ね」

「ひかりさんも大概チョコロいよ!?!」

大月が突っ込んだ。

「いずれにしても私達が軽く見られているのは我慢ならぬわ」

「46億歳の威厳を持って美衣子が怒る。」

「報復ですわ姉さま」 15000歳の結あおが煽る。

「マスターゼイエスのお置き土産でやつつけるしかないっしょ」 46億5000歳の瑠奈が続く。

「末娘なのに恐ろしい子。計画を言いなさい」

美衣子が瑠奈に説明を求めた。

「私達に茶々を入れてきた奴等をマスターゼイエスのダンジョンに誘き寄せてしまおうっす」

瑠奈が言った。

「瑠奈。ダンジョンなんて初めて聞いたよ?」

大月が訊いた。

「ダンジョンとは、マスターゼイエスの研究室が沢山あるシドニア地区の地下施設ね」

美衣子が答えた。

「ああー」 大月とひかりが生返事で応えた。

ゼイエスの突発的な研究癖は周囲には周知の事実であった。

自分の研究目的を達成すると、成果物や施設むとんちやくに無頓着になるのも有名で、アマトハはゼイエスの研究所跡を片端から処分していた気がする。

極東米露のエージェントが無事に済めば良いけどと、大月は他人事のように思っていた。

夕食後にひかりは秘かに大月の警護強化と、極東米露の意図を美衣子達が悟った事を東山を通じて首相官邸に伝えた。

岩崎は内閣調査室に公安とは違う大月の警護任務を与えた。

火星五輪（後編）

地球暦2021年8月30日午前11時〔東京都千代田区永田町

首相官邸 地下応接室〕

「ソーンダイク代議員。お逢いできて光栄です」

澁澤首相が代表選手団を引き連れて火星を訪れたアース・ガルデア英語圏代議員 民政局長のソーンダイクと握手をした。

「こちらこそ。お招き頂き、ありがとうございます。また、月面基地の供与や開発等の技術支援に深く感謝します」

ソーンダイクが外人には珍しく頭を下げた。

「当然の対応です。私達は同じ地球人です」

澁澤が笑って言った。

「ソーンダイクさん。あなた方アメリカ派閥の皆様はこれからのように動くのですか?」

澁澤が直球ストレートに訊いた。

「現在は月面都市の拡充と防衛の強化です。アンゴルモア艦隊は我々にとっても脅威です。総代表イゴールはやはり武力に頼りがちなロシアの独裁者でした」

ソーンダイクが残念そうにしながらもハッキリと答えた。

「我が国はあなた方を支援する事にやぶさかではない。しかし、当面はそれで良しとしても最終的にアース・ガルデアと言う宇宙国家は成り立つのですかな?」

澁澤が疑念を示した。

「地球環境が激変して住みにくい星となりつつある現状では、火星や月面で生き延びるしかないと思います。少なくとも、月面居住区では都市と呼ぶべきものが出来つつあります。やがて都市を統治する組織が必要となるでしょう。」

今の火星みたいに生存可能な大地に足をつけられない私達は、結束して生存圏を守る必要に迫られているのです」

ソーンダイクが月面居住区の状況を伝えた。

「地球環境の改善は考えないのですか?」

「現在の人類が手にしている技術では、改善可能な環境状況にはないと判断します。手に余りません」

「では、マルス文明の応用技術で試みませんか？我々と共に。出来れば『月面政府』と一緒に地球改善策を検討したい」

澁澤が結論を言った。

澁澤首相はソーンダイクに、技術支援をするからアース・ガルディアと違う価値観の宇宙国家を作れと後押しした。

ソーンダイクは了承したと無言で頷いた。

盗聴を危惧しての事である。ロシア人は疑念深い。

火星五輪終了後に、火星協力機構から地球環境改善チームとして内閣官房の東山、国立天文台の空良、海洋生物学者の大鳥がユーロピアン宇宙軍の元フランス海軍原子力潜水艦改造宇宙戦闘艦『ドウ・リシユリユー』に搭乗して月面都市に派遣されることになる。

地球暦2021年10月10日【東京都渋谷区代々木 火星オリンピックスタジアム（新国立競技場）】

2020年の東京五輪が火星転移により実現不可能となり、その後の経済統制による物資不足で五輪関連施設は建設が中断されていたが、アルテミア大陸からの鉱物資源輸入再開と、3月になって突然内閣官房のトップダウンで五輪開催が発表されてから急ピッチで建設が再開され、1週間前に競技施設が完成した。

尚、予定になかったモビルスーツ競技は会場が静岡県自衛隊富士演習場となっている。

天皇陛下による開会の詔みことりによって開会宣言が行われ、2週間の予定で火星オリンピックが始まった。

オリンピック競技は火星全土と、地球圏月面・アース・ガルディアコロニー群、欧州、北米まで中継された。

オリンピック中継を視る地球上の避難民やアース・ガルディア国民は、天変地異前の世界を思わせる東京の街並みと、地球のように透き通った火星の青空に驚いた。

オリンピック中継の競技映像と合間に流されるNHKニュースは、火星日本列島各地にある欧米コミュニティとアース・ガルディアソ-

ンダイクから提供された地球各地の状況を客観的に伝え、時折画面片隅に表示される『中継 火星』が視聴者に自らの現実を認識させ、人々は希望、羨望、絶望等様々な想いを抱くのだった。

特に二時間あまりの長距離競技であるマラソンは、火星に転移しても健在である巨大都市東京を間接的に紹介する内容となった。

日本の放送局は火星転移直後の国内大混乱と物資不足、極東連合軍のアルテムリア大陸上陸作戦時の映像や稚内に上陸した巨大ワームの迎撃戦とその惨禍を中継の合間に流した。

日本国も壊滅した地球各国程ではないが、未知の惑星上で現在も苦難を味わっている事を視聴者に伝える意味もあった。

また、ソーンダイクが提供した日本列島転移後に起きた地球大変動により、ハワイ諸島が大噴火で壊滅する様子や、ニューヨークが巨大地震による津波で水没してゆく光景は地球に望郷の念を抱き始めていた国民に幻想を打ち砕く大きな衝撃を与える事になった。

「これで日本列島が転移する可能性は低くなったわ」

オリンピック終了後、美衣子は岩崎官房長官にそう伝えたという。

『アース・ガルディア 月面都市『ユニオンシティ』』

オリンピック中継で活躍する欧米選手団を視る地球から避難してきた人々は熱狂した。

日本の放送局はアース・ガルディアや極東各国各選手のプロフィール紹介（地球国籍時代の国旗）と共に、出身国の現状を客観的に伝えており、様々な情報も提供していた。

火星に転移した日本列島各国の繁栄ぶりを見た月面のガルディア国民は自らの境遇を省みると、火星の日本国と協力を熱望する様になっただった。

「ふふ。ミッチェルやダグラスもさぞかし悔しがっていることだろうな」

月面都市に停泊する火星協力機構宇宙軍の宇宙戦闘艦の中でオリンピック中継を視ていたジョーンズ少将は呟いていた。

政治的感性の乏しいジョーンズでさえ、ユニオンシティ市民が示す日本への期待と旧き良き米国民の雰囲気を感じていた。

「ミッチェルは本当はこんな国を目指していたのかも知れんな」

ジョーンズ少将はしばらくテレビ中継を視た後、ガルディア軍所属の旧米軍が設営した北米大陸救出作戦司令部に戻った。

一方で、アース・ガルディア首都のコア・サテライトコロニーはオリンピック中継がダイジェストで流され、日本の繁栄やNHKニュースはカットされていた。

中国、ロシア出身者の多いガルディア政府は情報統制を当たり前の行為だと思っていたが、この情報操作が後のアース・ガルディア内乱の原因となることを誰も予想出来なかった。

【静岡県富士吉田市 自衛隊富士演習場】

緑豊かな富士山麓ふじさんろくの裾野すそのにオリブ色に塗られた全高18mのモビルスーツモビルスーツが各国毎に整備チームを従えて整列していた。

参加各国の公平を配慮し、参加者は競技に使用する全種類のモビルスーツを全機操縦する事が出来、スペック上の公平を参加選手全員が確認した。

モビルスーツ競技審判長の陸上自衛隊 石原 准将じゆんしょうが競技種目の説明と取扱い上の注意点をあらためて説明した。

「人類初のモビルスーツ競技に参加する栄誉を得た諸君に敬意を表します」

「モビルスーツは人型です。如何いかに、人と同じ動きが出来るか？または、人間を超える動きが出来るか？課題は多々あります。

皆さん、競技中は”これが”兵器である事を忘れてください。

遊園地のゴーカートみたいに楽しく操縦する事を心から望みます。

そして、機体はオリンピック仕様しょうかくの安全第一で調整しましたが、怪我に注意してください。諸君らに栄光あれ」

石原准将の説明後に競技が始まった。

《第一種目》モビルスーツ100m走

大人気アニメ軌道戦士バンダムの声優陣が実況を務めている。

「さあ、いよいよ始まりました人類初のモビルスーツ競技です。解説は私、セイロ・マスと、ジャア・アズナブル兄さんです」

「坊やの諸君、よろしく」ジャアが応えた。

「最初の競技100m走ですが、ジャアさん予想はいかがでしょうか？」

「白いのが勝つな」

「・・・ありがとうございます」

スタートラインに立った日米英ユ露ガ6ヶ国のモバイルスーツが脚部のエンジンを徐々に上げて合図を待った。

スタートラインの大きなLED照明灯が青に点灯すると、モバイルスーツが一斉にゴールに向かって走行した。

スタートと同時に脚部ブーストを全開にした極東アメリカが1位(3秒08)でゴール、真面目に”走った”陸上自衛隊は4位(5秒12)となった。

「1位は緑の極東アメリカでした。ジャアさん感想を」

「・・・」

《第二種目》モバイルスーツ綱引き

第一試合 日本 対 極東アメリカ

「なんとっ！モバイルスーツ競技ならではのアクシデントでしょうか?! 競技用ワイヤーが両軍のバカ力(ぢから)を出した負荷により真ん中で切断、両チーム勢いよく後ろに吹っ飛びました。さてこの試合、どのような結末になるのでしょか?」

「審判団と運営委員会の協議により、試合は無効となりました。また、同じワイヤーが使用される予定だった第二試合も中止となり、急遽別の競技に変更されるとの連絡がこちらに入りました」

「代替(だいたい)種目は『モバイル相撲』になりました。現在土俵を工兵用ガンタンクがドリフトしながら円を描いて作っています」

《代替競技》モバイル相撲

直径10mのワイヤー綱で囲んだ円形の土俵から押し出された方が負け。

「さあ、仕切り直しのモバイル相撲。東いく、日本自衛隊。西いく、極東アメリカ。行司は高瀬少佐操縦の赤いバンダムが行います」

「おっと、ここで極東アメリカから『塩がない』との物言いです。往生際悪いですねジャアさん」

「ええ。極東アメリカには革新（ニュータイプ）的な思考を期待したいですね」

「こんなことも有ろうかと、工兵部隊が即座に石灰粉を準備しました。塩はモビルスーツの関節に入ると酸化を早めるので危険との事です」
「さあ、持ち時間一杯です。そして極東アメリカチームまさかの塩撒き失敗、手に取った石灰が指の隙間からこぼれ落ちて真っ白。見事な粉かぶり、美味しい演出です」

粉を被ったアメリカの機体と、オリーブ色の陸上自衛隊の機体が向かい合う。

「はっけよいい、のこった!」

石灰粉で視界不良のアメリカ機が無謀にもいきなり脚部ブーストで陸自機体に突っ込もうとしたが、冷静な陸自パイロットが紙一重でかわしてアメリカ機は自ら土俵外に飛び出して敗北した。

「なんと言う事でしょう! 白いのが負けました。ジャアさん、一言お願いします」

「雑魚とは違うのだよ」

第二試合の極東ロシア対英国極東は、相撲ルールをど忘れたロシア機が英国機を寝技に持ち込んだところでロシアが『先に膝をついた』事でまさかの敗北を喫し、英国極東の勝利となった。

第三試合のユーロピア対アース・ガルディアは、両者ガツチりお互いをつかんで押し合いとなり、一瞬の隙を突いたユーロピア機が脚部ブーストでガルディア機を押し出して勝利した。

各国の熱い闘いを新国立競技場の大画面で視ていた観客は熱狂して、準備の良い通な観客達が警備員の制止を振りきって座布団を飛ばして競技場の中を多数の座蒲団が乱舞した。

もちろん、この光景も中継された。

結局、モビル相撲は日本対ユーロピアの決勝戦となり、陸自のモビルスーツがブーストで突進してきたユーロピア機体を『背負い投げ』で土俵から投げ飛ばして優勝した。

《第三種目》モビルスーツ団体戦『玉入れ』

手先の器用な操作に秀でた日本チームが優勝。

《第四種目》モビルスーツ団体戦『騎馬戦』

極東アメリカチームが三位一体（さんみいつたい）のジェットストリームアタックを使いこなして他国チームを「踏み台」に圧倒して優勝した。

「人類初のモビルスーツ競技は極東アメリカが金メダル、日本は銀メダル、ユーロピアが銅メダルを獲得しました。メダル獲得チームには、スポンサーからの素晴らしいアイテムが後程のちほど贈呈ぞうていされます」

スポンサー（美衣子）からは、金メダルにビームサーベル、銀メダルに飛行用バックパック、銅メダルに『どこへもドア』が贈呈された。銅メダルチーム、ユーロピア共和国のジャンヌ首相が喜んだのは言うまでもない。

金メダルのビームサーベルを手にした極東アメリカチームは使い途を持て余しそうだった。

人類史上初の地球外オリンピックが開催された2週間、火星と地球圏の人類は久し振りに生きる気力、一時の心の平穏をオリンピックで継いで得た。

閉会式ではアース・ガルディア民政局長のソーンダイク代議員が、新国際オリンピック委員会の発足を宣言した（加盟国は、アース・ガルディア、日本、極東米露、英国連邦極東、ユーロピア共和国、台湾自治区）。

次の4年後のオリンピック開催地については極東米露から火星人類都市ボレアリフシテイ、アース・ガルディアから月面都市ユニオンシテイが立候補を表明した。

人類スポーツ史の新たな1ページが、2021年に刻まれるのだった。

地球歴10月25日午前5時30分【神奈川県横浜市神奈川区 N EWイワフネハウス】

人類が熱狂した2週間が終わり、いつものサラリーマン生活が始まる月曜日、大月はイワフネの研修スケジュールを頭の中で復唱しながら家の周りを散歩していた。

イワフネが養殖エビようしよくの生け簀す（す）に落ちないようにどうすべきか

意外に悩み所だったりする。

秋の到来を予感させるひんやりした空気を感じながら歩く大月の背後を宅配便の車が追いついて越して行った。

「朝から宅配便とは、少しは燃料に余裕が出てきたのかな？」

と考えながら歩く大月の背後から宅配便に続いてワゴン車がゆつくりと近付いて追い抜きざまに側面のスライドドアが開くと、大月を車内に素早く引きずり込んで、何事も無かったかのようにゆつくりと走り去った。

イワフネハウス周囲を定点警戒していた内閣調査室の警護担当者が対向車に遮られて大月を一瞬見失った瞬間の出来事だった。

大月を拉致した黒いワゴン車はそのまま裏道を疾走して国道1号線に出る手前で忽然と消え去った。

あらかじめこのような事態が起こることを想定した美衣子のトランプにより、不審なワゴン車はアルテミア大陸シドニア地区にある旧マルスアカデミー地下研究施設まで転送された。

美衣子は朝食の準備をしていたひかりに大月拉致を伝えると結と瑠奈を連れて、ゼイエスの地下研究施設に跳んだ。

ひかりは直ぐに東山に大月拉致を連絡すると、自宅にある『どこへもドア』の前で美衣子からの連絡を待つのだった。

東山は岩崎に事態を報告すると、イワフネハウスにいるひかり下に駆けつけるのだった。

宴の後始末

地球暦2021年10月25日午前6時〔アルテミア大陸 シドニア地区ナザレ 旧マルスアカデミー地下研究所〕

英国連邦極東BBCとユーロピア共和国のチャンネル2（ドウ）の合同取材チームがJAXA琴乃羽^{ことのは}の案内で旧マルスアカデミー地下研究所地区を撮影に訪れていた。

同行していた英国連邦極東の特殊部隊の隊長が琴乃羽に声をかけた。

「琴乃羽教授。日本列島から緊急連絡です」

琴乃羽が手渡された通信機を取ると通話先は岩崎官房長官であり、先程大月が不審な車に拉致されて”そちらに転送された”ので特殊部隊で救出して欲しいとの内容だった。

「隊長。私達で対応出来るのですか？」

「わかりませんミス・コトノハ。しかし、日本首相府の緊急要請ですから事態は深刻と判断します」

「取材チームには話して待機してもらいましょう」

琴乃羽が英ユの取材チームに事態を伝え、撮影中断を詫（わ）びると、取材チームが危険を承知で救出作戦に同行取材したいとの申し出てきた。

琴乃羽が通信機で岩崎に相談すると、自己責任で許可された。

取材チームは誰も辞退しなかった。

琴乃羽は薄々気付いていたが、彼らは火星転移前から、諜報機関の世を忍ぶ^{しの}仮の姿でマスコミ関係者となっているのだ。身のこなしも軽い。

こうして特殊部隊に率いられた取材チームと琴乃羽は研究所地区の中央広場に着いた。

「ここで待てとの事です」特殊部隊隊長が言った。

しばらくすると、中央広場の中心部にある円形の大きな台座が音もなく水色に輝き出した。

琴乃羽達が声も出せずに台座を見ていると、やがて1台の黒いワゴ

ン車が現れた。

欧米人が目深まぶかに被った帽子で運転席におり、全員が武装していた。「みんな伏せろー」特殊部隊隊長が叫んだ。

直後にワゴン車から4人の黒いアサルトスーツを着用した完全武装の兵士がM16ライフルを連射しながら飛び出してきた。

琴乃羽達は慌てて伏せながらも特殊部隊隊員に引きずられるように中央広場から離れて通路の陰に避難した。

同時に特殊部隊が応戦を始め、激しい銃撃戦となった。

激しい銃撃戦のなか、琴乃羽と勇敢にカメラを回す取材チームが通路の床に伏せていると、床が僅わずかに規則的に振動するのが身体に伝わってきた。規則的な振動はだんだん大きくなると100m程通路の奥から隊列を組んだ人影が見えてきた。

頭を伏せながらも隊列を見たBBC取材チームの一人が顔面蒼白になって恐怖の叫び声を上げた。

「ジーザス・スカイネットが来た！」

行進をする隊列から伝わる振動はザツザツ、ではなくカシヤツカシヤツと軽快な音に聞こえた。

特殊部隊が徐々に後退しながら取材チームの元に戻ると隊長が、「全員伏せたまま通路の端に移動しろー」と叫んだ。

琴乃羽と取材チーム、特殊部隊が通路の左右に四つん這いになりながら移動すると、行進してきた隊列の様子がハッキリ見えた。

隊列は全員がメタリックなスケルトン（骸骨）で銃のような物を構えながら近付いてきた。

まさに某近未来アクション映画のスカイネット軍隊その物だった。「発砲止めろー」隊長が指示すると隊員達は銃を下ろして取材チームの盾になるように動いた。

スケルトン兵士の4列縦隊16体は左右の特殊部隊と取材チームには目もくれずに通り過ぎると、真っ直ぐに黒いワゴン車に向かって行った。

ワゴン車の兵士達から恐怖の絶叫が上がり、スケルトン兵士に激しい銃撃が浴びせられたが兵士の隊列が崩れることはなく、1体も倒れ

ないままワゴン車の兵士に近付くと構えていた銃口からブーンという駆動音と共に電光が迸ほとばしった。

スケルトン兵士の放った小型レールバルカン砲はパルスレーザーの様にワゴン車の前に居た兵士に突き刺さり、兵士は身体中がスパークに覆われて倒れた。

隊列のスケルトン兵士はワゴン車を囲むように散開すると一斉に電光の雨をワゴン車の周囲に居た兵士達に浴びせて全員を射殺した。

琴乃羽達は戦慄の眼差しで冷や汗を流しながらその光景を見ていた。

スパークと電光の嵐が治まると、ワゴン車の中から一人の兵士が大月の首に銃口を突き付けながら現れた。

「骸骨野郎！人質がどうなっても良いのか？」

兵士がロシア語で叫んだ。

「奴等は極東ロシアの特殊部隊（スペツナズ）だったのか？」

琴乃羽の隣に来ていた隊長が言った。

「ミス・コトノハ。あの人質はミスターオオツキで良いのかね？」

「はい。確かに大月さんです！」

大月に銃口を突き付けている兵士が

「骸骨野郎は全員銃を捨てろ」と命令した。

スケルトン兵士は全員が銃を床に捨てた。

安心した武装兵士が、

「よし、次は——」

と言い終わらないうちに先頭のスケルトン兵士の頭が大月に銃を向けていた兵士を直撃した。

兵士はスケルトン兵士の頭4個の直撃を受けてワゴン車に叩きつけられた。

同時にスケルトン兵士の腕が延びて大月をスケルトン兵士側に引き寄せた。

ワゴン車には残りのスケルトン兵士の頭が殺到し、ワゴン車はひしゃげてやがてガソリンに引火すると炎上した。車内に置いていた手榴弾等の弾薬が過熱されて爆発し、叩きつけられた兵士もろとも吹

き飛んだ。

スケルトン兵士の頭は多少の焦げ目がついたものの、また自らの胴体に戻った。

大月は拉致直後から意識を失っている様子で、ぐったりしてスケルトン兵士に抱えられていた。

大月を抱えたスケルトン兵士が琴乃羽に近付くと、琴乃羽に大月を差し出してきたので、特殊部隊の隊長と二人で大月を受け取ると、スケルトン兵士の隊列は通路の奥に戻って行った。

スケルトン兵士と入れ替わりに奥から美衣子、結、瑠奈の三姉妹が現れて大月に近付くと身体を診察した。

「ん。お父さんは麻酔を射たれているわ」

「解毒が必要かしら」

「新種の神経ガスつすね」

琴乃羽が、

「麻酔薬は時間が経てば効果が消えるのではないの？」

と聞くと三姉妹はうなずいた。

「幸いお父さんは軽いやつを射たれていたから問題ないわ」美衣子が言った。

「2時間程度で目が覚めるわ」結が肯定した。

「暴投鎮圧用つすね」瑠奈が分析結果を言った。

「琴乃羽。時間稼ぎありがとう。あのままここの奥で立て籠こもられると機械兵士と大事になったから助かったわ」

美衣子がそう言うのと三姉妹が琴乃羽達に頭を下げた。

「じゃ、私達はお父さんを家に連れて帰るわ」

そう言うのと三姉妹は大月を担かつぎ上げていつの間にか通路に現れていた扉をくぐると向こう側に出ていった。

三姉妹が出ていくと扉は忽然こっぜんと消え去った。

琴乃羽達は唾然あぜんとして扉が有った所を見つめていたが、

「ミス・コトノハ。私達はこの後どうすれば？」特殊部隊隊長が困惑して聞いてきた。

—————

『どこへもドア』からNEWイワフネハウスに戻った大月と美衣子達はひかりと東山に迎えられ、大月は寝室に寝かされた。駆け付けた自衛隊医師の診察でも軽度の全身麻酔を射たれているだけで数時間で目覚めるとの診断に、ひかりは安堵した。

東山は、美衣子達から武装兵士の話を聴くと官邸に戻って行った。「間に合って良かったわ。ありがとうね美衣子、結、瑠奈」

ひかりが3人を抱き締めてお礼を言った。

「たまたま琴乃羽達が居たから時間稼ぎが出来たわ」美衣子が言った。「そう。良かったわ。琴乃羽さん達はどこに？」

「「あ、」」

ひかりは東山に琴乃羽達の事を伝え、東山の手配により、英国連邦極東(ダウニングタウン)のケビン首相が持つ『どこへもドア』で、琴乃羽達と特殊部隊は長崎に帰還した。

またゼイエス研究所の施設がスケルトン兵士の他にもジュラシックパーク並の物騒な代物が沢山有り、余りにも危険なので美衣子達三姉妹で物理的にもシステマ的にも地上に出ることが無いように応急処置で封鎖した。

数カ月後、この封鎖施設に英国連邦極東とユーロピア共和国の特殊部隊が訓練目的で侵入したが、程なくして行方不明となり、月面ユニオンシティで発見されることになる。

月面で保護された彼らは恐慌状態でしきりに『審判の日が来た!』とブツブツ呟いており、イワシパイと引き換えに美衣子が脳神経治療カプセルを提供して治療されるまで尖山予備基地に収容されていた。

この出来事から、シドニア地区の旧マルスアカデミー地下研究区域は『ヘル・シティ(地獄都市)』と欧米軍事関係者から恐怖の代名詞として呼ばれるようになった。

【東京都千代田区永田町 首相官邸】

「大月君が無事で何よりだ」澁澤がホツとして言った。

「本当に。しかし、大月君を狙うとは。警護を更に強化すべきでしょうか?」

「いや、今回は内調を持ってしても裏をかかれたのだ。諜報組織の本

場には敵わんよ」

「ケビン首相の話では、武装兵士がロシア語を話し、M16を使用していたとの事ですが、やはり」

「ああ、ミッチェル達も焼きが回ったのかもしれない」

「アース・ガルディアからのプレッシャーが有ったのだろうよ。米露の思惑が裏目に出たようだな」

澁澤はそう言うと言つてソファにもたれた。

「これ以上 火星で揉め事は御免だ。ソーンダイクに動いて貰うしかないな」

澁澤は岩崎にそう言うのと、ケビン首相やユーロピア共和国のジャンヌ首相と連絡を取り始めた。

同日午後7時【NHKニュース】

「英国連邦極東のBBCとユーロピア共和国のチャンネル2（ドウ）は、トップニュースで横浜市に住む日本人会社員が武装した何者かに拉致されて救出されるまでの一部始終を撮影した映像の一部を公開しました。

両放送は、実行犯は複数おり、全員特殊部隊との銃撃戦で射殺されたと報じています。

首相官邸はNHKの取材に対し、民間人の安全のため、否定も肯定もしない、とのコメントを発表しました」

英国連邦極東特殊部隊と武装兵士の銃撃戦、爆発するワゴン車、（顔は隠されている）大月が特殊部隊隊長に抱き抱えられている場面の映像が流されていた。

スケルトン兵士と美衣子達が映るシーンはカットされていた。

「政府関係者によりますと、拉致実行犯について人類都市ボレアリアの極東米露政府に照会中との事です。また、官邸の関係者は、事件の背後にアース・ガルディアが深く関与している可能性を示唆しました」

「火星オリンピック終了直後に起きたこの事件に、日本列島各国からは和平米ードを台無しにされた怒りの声が拡がっています」

日本列島各国とアース・ガルディア陣営との対立は再び高まるの

だ
っ
た。
。

火星編 地球復興計画

肅清

地球暦2021年11月3日【東京都渋谷区 神聖女子学院大学附属小学校】

パン、パンパン

地球にいた頃と変わり無い澄みきった秋空に運動会開催を知らせる花火が小学校の運動場上空で白煙を上げた。

この日、瑠奈が通う小学校の運動会が開催された。

日頃からフリーダムな言動と行動力で優秀な教師陣を大いに悩ませる、よわい 46億5000万歳を数える小学4年生の瑠奈は、元気にクラスメイトと共に入場行進していた。

美衣子と結は大月とひかりに肩車されながら上機嫌で瑠奈に手を振っていた。”叔父”のイワフネは自ら『撮影係』を志願してハンデイクムで瑠奈を捉えていた。

「美衣子。運動会の種目に協力したんだって？」

大月が訊いた。

「この前のオリンピックピックに比べると他愛も無いわ」

大月に肩車されている美衣子がムフンと薄い胸を張っていた。

「私もそれなりに知恵を絞ったわ」

風雲ムスビ城の仕掛人がフンスとこちらも薄い胸を張り合うように張った。

大月は胸を張る二人を見ながら、そう言えば二人とも最近やたらと牛乳を飲むようになっていたな、と思い出した。

大月は小声で、

「マルス人に牛乳って効果あるのかな？」

とひかりに訊いてみた。

ひかりは、

「そんなの気持ちよー！気持ちー！」

と何故か頬を染めて大月の視線から身体を逸（そ）らした。

大月は何となくこの話題を掘り下げるといろいろ不味い展開になると予想し、領^{うなず}いただけでイワフネと運動場の片隅に家族観覧用のレジャーシートを敷くのだった。

運動会は大月とひかりの『予想に反して』円滑^{えんかつ}に競技が進行していった。

たまに『パン食い競争』の菓子パンが参加者に喰いついてきたり、『障害物競争』がSASUKI仕様で参加者のリタイヤが続出する中、瑠奈^{やすやす}が易々とクリアしたり、多少の突っ込み所は有るが、取り合えず騒動^{そうどうぎた}沙汰にならない展開に教師陣は嬉し涙を流し、大月達はホツとするのだった。

勿論、美衣子や結、瑠奈は運動場をダンジョン空間にする勢いで企画をしていたのだが、日本列島『外の世界』で不穏な動きが三姉妹に察知され、その『対応』で岩崎や東山と秘かに打ち合わせをした為に時間が足らず、企画が大人しくなってしまうという大人の事情が有った。

運動会は波瀾^{はらん}もなく終わり、三姉妹とイワフネ、大月、ひかりは手を繋いで仲良く帰宅した。

久々に穏やかな休日はこうして終わろうとしていた。

同11月3日午後11時30分【人類都市ボレアリフシテイ 米露合同政府庁舎 極東ロシア大統領執務室】

1週間前に失敗した大月拉致作戦の後始末に忙殺されていたパノフ大統領は、次の計画を模索していた。

「こうなれば、あのイワフネハウスとやらに潜り込むか、シドニア地区の施設を占拠するか、悩ましいな」

パノフ大統領はそう呟くとウォツカを飲みながら夜食のキャビア入りサーモンサンドを食べた。

11月4日午前1時、パノフ大統領の身の回りの世話をする執事が執務室に入るとパノフ大統領が机に突っ伏しており、声を掛けても反応が無く、ピクリとも動かずにいた。

執事が執務室の前にいたSPに伝えると直ぐに医師が呼ばれ、心肺蘇生処置^{しんぱいそせいしよち}がなされたが午前1時32分、パノフ大統領の死亡が確

認された。

死因は青酸カリが含まれた夜食のサーモンサンドを食べた事による中毒死であった。

ロシア警察が捜査を開始したが、厨房の料理人が一人急病で帰宅しており、警察が自宅に突入したが、料理人の変死体が有るのみだった。

解剖の結果、料理人の死因は青酸カリによる中毒死だった。

また、家宅捜索で室内から総合商社角紅のサーモン注文票の控えが見つかった。注文票の商社担当者は大月満と記載されていた。

キヤビアの注文票には注文者として西野美衣子のサインがあった。

極東ロシア検察庁はこの件について日本政府に通報し、重要参考人として身柄の引き渡しを要求した。

同時刻【アルテムィア大陸内陸部 ニューオレゴンコロニー 農場上空】

極東アメリカ大統領専用ヘリ『マリーンα（アルファ）』は内陸部の開拓コロニーの視察を終えたミツチエルを乗せてボレアリフシテイへ帰還する途中だった。

「大統領。ボレアリフシテイから緊急連絡です」

パイロットが通信を大統領のヘッドホンに切り替えた。

「なに!?」パノフの訃報ふほうを知らされたミツチエルは絶句した。

「奴ら、私達を肅清しゆくせいするつもりなのか!」

ミツチエルはわなわなと怒りに震えた。

「アース・ガルディアなどと言ってもソ連のKGBと変わらんではないか!」

次の瞬間、眼下に広がる麦畑の各所から携帯ミサイルが次々と発射されてミツチエルのヘリに命中した。

大統領専用ヘリは空中で爆発ぼくはつしせん四散し、破片が炎上しながら真下の麦畑に落下した。

10分後、異常に気付いた2番機が墜落場所に着陸して生存者の捜索を行ったが、生存者は皆無（かいむ）だった。

2番機が到着する直前に、ステルスモードのブラックホークヘリが

微（かす）かなローター音を立てて農場から離脱してボレアリフシテイ郊外の海岸に停泊している偽装タンカーに向かった。

彼らは火星五輪期間中に地球圏から来訪したアース・ガルディア選手団に同行した大会関係者だった。

11月4日午前7時 極東米露政府は両国の大統領が相次いで暗殺されたことを公表、両国大統領代行のマツカーサー三世によりボレアリフシテイと沖縄、北方四島に戒厳令が布告された。

また日本政府に対し、大統領暗殺の重要参考人として日本人の大月満と西野美衣子の引渡しが続り返し要求された。

日本政府は即座に事実無根の濡れ衣ぬれぎぬであるとして引き渡しを拒絶した。

警察庁は、ロシア検察庁の家宅捜索で発見された注文票の筆跡は本人と一致しなかった事、大月は事件発生当日も日本国内に居たことも監視カメラや周囲の事情聴取で判明していた。更に大月は入社以来、発注部署に所属していない事も明らかにした。

列島各国世論の多くは、この事件の背後にアース・ガルディアが糸を引いているとの見方が支配的であり、極東米露の要求に強い不快感を示した。

日本列島各国世論の見方は”半分”正しかった。

火星で起きた暗殺事件はアース・ガルディア本国での政変が飛び火したものであったのである。

地球暦2021年（ガルディア暦4年）11月1日、アース・ガルディアの月面都市ユニオンシティが『都市国家ユニオンシティ』としてアース・ガルディアからの独立を宣言、ガルディア軍所属の旧米軍部隊がアース・ガルディア首都のコア・サテライトコロニーを急襲したのである。

月面国家独立戦争

2021年11月1日、月面都市ユニオンシティ行政政府代表のソーンダイクは『月面都市国家』独立宣言を行った。

地球上の欧米避難民と”火星極東アメリカ合衆国の半分”が参加した共同体である。

火星極東アメリカ合衆国の半分とは、在日米軍基地駐留隊員とその家族達である。

日本政府は直ちに他の列島諸国と共にユニオンシティを国家として承認する声明を発表した。

一方、アース・ガルディアのイゴール総代表は、
「反逆者には大いなる神罰が下されるであろう」

と月面都市国家を否定し、ラグランジュ宙域で待機していたアンゴルモア艦隊に討伐命令とうばつが下された。

独立宣言直後にコア・サテライトコロニーを急襲したユニオンシティ軍はアース・ガルディア首都を制圧。

総代表イゴールは事前にこの動きを察知して急襲部隊到着前に地球 北極圏シベリア地方へ逃亡した。

ユニオンシティ軍は月面都市郊外の電磁カタパルトを使用してシベリア地方に岩石デブリ弾を撃ち込もうとしたが逃亡先の詳細座標が不明な為、何も出来なかった。

以前よりイゴールは極東米露からもたらされたマルス文明の即時承継データの中から、地球上で過去に滅んだ古代文明の遺跡を数カ所発見し、秘かに調査させていた。

特にシベリア地区の不思議な大穴が大量発生していた地域は、地球温暖化によるメタンガスの放出跡ではなく、古代アトランティス文明地下都市の排熱孔であった。住民は既に滅んでいたものの、地下都市の機能はまだ「生きていた」のである。

イゴールが調査させた遺跡はシベリア地区の他に旧トルコ地域の『カップドキア地下都市』、南米大陸メキシコ地区の『オルメカ地下都市』であり、驚いたことにこれら地下都市はシベリア地下都市と長大

なトンネル網によって結ばれている様だった。

イゴールはこのシベリア地下都市『シヤンバラ』を拠点に古代文明の施設を活用して反撃の機会を窺う事になる。

地球暦2021年11月5日午後8時【月面都市ユニオンシティ
火星協力機構 月面派遣艦隊司令部】

「ジョーンズ少将。火星協力機構加盟国は月面都市国家『ユニオンシティ』を承認しました。

火星のミス・ミイコ氏によると、イゴール総代表は地球の古代文明地下都市に潜伏したのでかなり厄介な事態との事だ。

少将は派遣艦隊を率いてユニオンシティの防衛、特に地球衛星軌道上の何処かに居るアンゴルモア艦隊の攻撃に備えてもらいたい」

戦術作戦局のロイド提督が指示した。

「敵の首都であるコア・サテライトを制圧したならば、軍の指揮系統が麻痺しているのではないでしょうか？」

ジョーンズ少将が質問した。

「イゴールは潜伏先のシベリアから徹底抗戦命令をアレクセイエフ司令官に出したようだ。

アレクセイエフは宇宙飛行士だが、本質は君と同じ生粋の職業軍人だ。

旧国際宇宙ステーション時代に派遣されていた彼とは大きく違う様だ」

「了解しました。サー」

ジョーンズ少将が敬礼した。

「少将。ソーンダイク代表にはこちらから万一に供えて非戦闘員の希望者を火星に受け入れる用意が有ることを伝える予定だ。その場合はこちらから追加の部隊を派遣する」

ロイド提督はジョーンズ少将がアンゴルモア艦隊対策に専念出来るよう配慮していた。

「日本のホワイトピース部隊が有れば心強いのですが」

「火星（こちら）の情勢もかなり不穏になるそうさ。これもオオツキファミリー3姉妹が察知した」

「了解しました。手持ちの部隊だけで最善を尽くします」

「少将の幸運を祈る」

通信を終えたジョーンズ少将は、副官として派遣されたユニオンシティ防衛軍中佐と防衛体制の打ち合わせに入った。

【NEWイワフネハウス】

「パパっち！溜奈は月に行って基地をフル稼働させて皆を守りたいです」

溜奈が大月にしがみついてお願いした。

「アース・ガルディアはジョーンズ少将が抑えてくれるから心配いらないよ？」

大月が溜奈を諭すが、

「アトランティスの遺跡はヤバいのがいっぱいあるから。ほんとうに月まで届いちやうから」

大月の身体をゆさゆさと揺らしながら溜奈が懇願する。

溜奈にしてみれば、自分の生まれ故郷、いや、生まれそのものだから執着があるようだった。

「ん。お父さん。姉の私が行くから大丈夫」

結が大月の背中にしがみついて言った。

大月は渋々といった感じで

「じゃあ結、溜奈のこと頼んだよ。二人とも絶対に無事帰ってくることに！」

と念を押した。

溜奈と結はしっかりと大月とひかりに頷いた。

地球暦2021年11月5日午前5時【鹿児島県 種子島 JAX

A・航空宇宙自衛隊 打ち上げ基地】

電磁カタパルトから火星駐留ユニオンシティ軍（在日米軍）の部隊が次々と美衣子から貸与されたマルス製小型シャトルに搭乗して月面に出発していた。

在日米軍基地の将兵が火星協力機構を通じて日本政府と大月家に要請して実現したものである。

出発する部隊の中には先の火星五輪モビルスーツ騎馬戦で優勝し

たジェットストリームチームの姿もあった。

彼らは日本政府から特別許可を得て、騎馬戦で操縦した競技用機体を重武装仕様に改造した機体を貸与されていた。

電磁カタパルトから次々と空高く飛び出す小型シャトルには、瑠奈とお目付け役の結（むすび）も搭乗していた。

美衣子は日本列島守護の役割が有るので今回も留守番役になるが、彼女の役割は自衛隊ダイモス宇宙基地からホワイトピース部隊で極東米露への軍事的 牽制も兼ねていた。

もつとも美衣子自身は発明した『どこへもドア』があるので大抵は、大月とひかりの傍でカボチャのポタージユを満足げに啜っているのだが。

大月とひかりは連日、イワフネの研修も兼ねた春日の商談に同行して日本列島各地を廻っていた。

何故か美衣子も同行してプチ家族旅行と言えなくもない。

ある日、出張先の商談が終わって宿泊しているホテルに戻った大月はひかりに、

「俺は、美衣子達に何も出来ていないと思えて仕方ないんだ」

と胸の内を明かした。

ひかりは、

「美衣子や結、瑠奈はあなたが一緒に最前線で戦う姿よりも、家で甘えさせてくれる、暖かく迎えてくれるあなたが居る事を一番の幸せだと思っているのですよ♪」

と応えた。

「だからあなたは何ら恥じ入る事はないです。むしろ、地球の創造主達があなたを頼って甘えてくれることに誇りを持った方が良くないですかねっ！」

気持ちは分かりますけど♪と、ひかりは大月を優しく抱き締めた。大月はふうー、と肩の力を抜いて一息つくど、自らに頷いてひかりを抱き締めると、彼女の身体の温もりにしばし浸るのだった。

ガルディア暦4年（地球暦2021年）11月11日月面時間午後9時30分【月面都市国家 ユニオンシティ 防衛軍司令部】

火星からの増援部隊がユニオンシティに到着した頃、ラグランジュポイントに在るガルディア軍補給基地のアンゴルモア艦隊も月面都市侵攻に向けて出撃準備を整えていた。

月面に到着したばかりの瑠奈だが、早速マルスラボの閉鎖区画を稼働させてラグランジュポイントのアンゴルモア艦隊を捕捉ほそくしていた。「ジョーンズ。ガルディア艦隊の準備が整ってきたみたい」

瑠奈が基地機能のコントロールに専念しているので、結が瑠奈の代わりにジョーンズ少将に伝える役目になっていた。

トカゲ娘に呼び捨てにされる鬼將軍の光景は、ユニオンシティ防衛軍の兵士から見るとアンビリバボー（信じられない）だったが、瑠奈と結の本当の力を知るジョーンズは気にもしていなかった。

「了解したミス・ムスビ。」

「瑠奈が『今なら先手必勝』と言っているわ」

「理由は？」

「瑠奈の防衛システムはガルディア軍の攻撃を多分防げる。こちらの防衛軍も全てラグランジュ基地に投入して停泊中の艦隊を攻撃する方が有利。万一負けても瑠奈のシールドで立て直す時間は稼かせげる筈はずよ」

「ソーンダイク代表。本職も先制攻撃が最良と判断します」

「そうだね。可愛いレディの言うことに間違いはないだろう。ヨーロッパで彼女の優秀さは分かっているよ。將軍、打って出よう！」

地球暦2021年（ガルディア暦4年）11月11日23時30分、ユニオンシティ防衛軍と火星協力機構宇宙軍の連合艦隊が月面都市から出撃した。

強大なアンゴルモア艦隊との決戦が迫っていた。

ラグランジュポイントの戦い

地球暦2021年11月13日（月面時間）午前1時〔地球と月面の中間地点『ラグランジュポイント』〕

火星協力機構宇宙軍 旗艦（きかん）『ドウ・リシユリユ』CIC（戦闘管制室）

真空である宇宙空間戦闘に備えてCIC要員は全員が宇宙服を着用していた。

「アース・ガルディア軍アンゴルモア艦隊捕捉。大型戦艦3、空母1、重巡洋艦8、大型シャトル18、我が軍との相対距離15000m」
ヘルメットを被ったレーダー管制官がくぐもった声で報告する。

「全艦射程に入り次第、レーダーガン発射！ノンアクティブモードで宇宙魚雷発射！モビルスーツ部隊、支援戦闘機は出撃！」

ヘルメットを被っているにもかかわらず、ジョーンズ少将がよく響く声で次々と指令を出した。

『ドウ・リシユリユ』背面にある元（SLBM）海中弾道ミサイル発射口から重武装モビルスーツ《MS-033ジムウキャノン》が電磁カタパルトで射出され随伴していたユニオンシティ防衛軍のF45スターファイター宇宙戦闘機や三菱F7支援戦闘機と共にアンゴルモア艦隊に向かった。

「アース・ガルディア アンゴルモア艦隊 旗艦『ムルマンスク』CIC（戦闘管制室）」

「反乱軍艦隊 急速接近中！ヴァンガード型（改）巡洋艦5、ロスアンゼルス型（改）戦闘艦20、戦闘機・支援戦闘機45、重機動兵器3、相対距離12000m」

「反乱軍には火星日本軍も居たか」

レーダー管制官から機動兵器（モビルスーツ）部隊存在の報告を聴いたアレクセイエフが呟く。

「反乱軍に情けは無用だ。全艦隊ミサイル発射！空母エカテリナから迎撃機を出撃させろ！」

アレクセイエフが命令した。

アース・ガルディア アンゴルモア艦隊と、ユニオンシティ防衛軍・火星協力機構宇宙軍の連合艦隊は正面から激突した。

最初は艦隊同士で宇宙魚雷やノンアクティブミサイル、艦首レーザガン等長射程兵器を撃ち合い、両軍が激突した宇宙空間に紅蓮の光球が無数に瞬いた。

大破した艦船が双方に出たものの、撃沈艦が無いと分かるや両軍は機動兵器を投入して近接戦闘に移行した。

アンゴルモア艦隊は、昨年の敗北を教訓として恒久的宇宙戦艦を開発、ハリネズミの如く8連装ミサイルランチャーで武装した最新鋭の『ブレジネフ型重巡洋艦』を開発した。

機動兵器対策としては、細長い葉巻型の機体に短い翼と両翼に16連装ミサイルランチャーを装備したミグ89宇宙戦闘機を充てていた。

『エカテリナ型宇宙空母』から発進したミグ89宇宙戦闘機は、ユニオンシティ軍F45宇宙戦闘機をドッグファイトの末に次々と撃墜して防衛網を突破、方舟（ロスアンゼルス）型宇宙巡洋艦の対空砲火をくぐり抜けて艦隊に突入し、多連装ミサイルを放って巡洋艦を撃破しながら戦場の主導権を徐々に握っていった。

「アンゴルモア艦隊搭載機からのミサイル飽和攻撃が激しさを増しています。近接迎撃兵器の対応限界を超えています！」

「ユニオンシティ艦隊『オクラホマ』『ミズーリ』大破！戦線離脱します」

『フィラデルフィア』より、推進機関に被弾、航行不能」

「ガルディア戦闘機が損害を省（かえり）みないで編隊を崩さず連携攻撃を仕掛けています。」

ユニオンシティ軍戦闘機の半数が撃墜されました」

戦闘管制官が報告する。

「奴等、物量作戦で来たか」

「ジョーンズ司令。シティのムスビから通信」

「読み上げろ」

「瑠奈（ルンナ）による敵戦闘機、ミサイル回避行動解析完了。対抗プ

ログラムを送る。との事です」

「仕事の早い事だ」

ジョーンズが感嘆した。

「全艦隊データリンクシステムをルンナに接続せよ」

「データリンク接続完了」

「プログラム受信。全艦隊にリンク」

ミグ戦闘機の行動パターンと、ガルディア軍ミサイル機動を解析したムスビとルンナから送られた対抗機動プログラムを入力したモビルスーツ部隊と三菱F7宇宙支援戦闘機は、戦場の主導権を握ろうとしていたミグ89戦闘機を次々と撃墜してアングルモア艦隊に突撃した。

プログラム更新で身軽になったモビルスーツとF7支援戦闘機に
またもやアングルモア艦隊は翻弄ほんろうされた。

騎馬戦優勝チームの重武装ジムウ033は量産型プロトタイプだが、バックパックに装備した8連装ロケットランチャーと、両肩に装備した120mmキャノン砲による圧倒的火力であらゆる方向からガルディア艦隊の主力ブレジネフ型重巡洋艦に攻撃を仕掛けてミサイル砲台を1つずつ沈黙させていった。

アレクセイエフ司令官は戦局の不利を察知すると機動兵器よりも母艦攻撃を優先させ、旗艦『ムルマンスク』の艦底（かんてい）に装備された地上攻撃用ガンマ線レーザーをユニオンシティ防衛艦隊と火星艦隊に浴びせた。

ガンマ線レーザー照射範囲にいた支援戦闘機や戦闘艦艇の計器はバックアウトを起こして機能を停止させられ、ブレジネフ型重巡洋艦の多連装ロケットランチャー群の集中攻撃をまともに受けて撃破されていた。

双方の戦闘機が死闘を続ける中、火星軍機動兵器のジエツトストリーム部隊は火星五輪での騎馬戦を彷彿（ほうふつ）とさせる働きを見せていた。

3機の重武装モビルスーツはそれぞれ連携しながらブリッジ、ミサイルランチャー、レーザーセンサーを攻撃して敵艦の戦闘能力を確実

に奪っていった。

艦隊戦は双方ともに一進一退(いっしんいつたい)の様相を呈^{てい}していた。

【地球シベリア北極圏　タイミル半島　地下都市『シャンバラ』】

古代アトランティス文明の遺産であるこの都市は、マルスアカデミー承継データで見える限り、都市というよりは軍事基地に近い『施設』だった。

「アングルモア艦隊の戦況はどうなっている？」

イゴール総代表が部下に訊いた。

「ラグランジュポイント補給基地に接近した反乱軍艦隊と激しい攻防戦が続いているとの事！」

通信オペレーターが答えた。

「アレクセイエフには今しばらく時間稼ぎをしてもらわねばならん」

「プラズマ兵器の発射準備は？」

「マグマエネルギー誘^{ゆういん}因^{いん}に使用する戦術核兵器の最終調整中、23時間^間で完了します！」

「反乱軍にはせいぜいラグランジュポイントの無重力を味わってもらおう」

「プラズマシステム目標照準、月面、『ユニオンシティ基地』」

イゴールが命令した。

インドラの矢

【地球と月の中間地点 地球衛星軌道上 ラグランジュポイント】
ラグランジュポイントでの宇宙艦隊戦は激戦となっていた。

航空宇宙自衛隊のモビルスーツ部隊が放つキャノン砲とミサイルが雨あられとガルディア軍の重巡洋艦に降り注ぐと、重巡洋艦は各所から空気を含んだ火炎や水蒸気を噴出させながら轟沈していった。

ガルディア軍のミグ89宇宙戦闘機はユニオンシティ防衛軍の宇宙戦闘艦に突進して至近距離で対艦ミサイルを発射して離脱を図ったが、ボフォース社製自動追尾型対空砲火を機体に浴びるとバラバラと破片を派手に撒(ま)き散らしながら回転して別のユニオンシティ防衛軍の戦闘艦に激突して、戦闘艦もろとも爆散した。

『ペンシルバニア』『ヘレナ』『オレゴン』相次いで爆散！『ニューオリンズ』大破、戦線離脱します」

「なんで奴等(やつら)はあそこまで戦うのだ」

ジョーンズ少将はアンゴルモア艦隊の死力を尽くした戦い振りに驚愕しながらも怪訝に思った。

「これ以上の損害は今後の戦局に不利になる。アンゴルモア艦隊の戦闘力は充分に殺いだ筈(はず)だぞ！」

ジョーンズ少将が戦況パネルを見ながら言った。

「はい。開戦時に比べ、アンゴルモア艦隊の戦闘力は50%を切っています」

副官が応えた。

「全艦隊、針路反転。ユニオンシティ基地に一時後退する」

ジョーンズ少将が命じた。

【アンゴルモア艦隊旗艦『ムルマンスク』】

「反乱軍艦隊、反転の気配！月面に撤退します」

「ダメだ！撤退させるな！何としても食らい付け！損害に構うな！

我々に後は無いのだぞ！」

アレクセイエフ司令官が将兵を叱咤した。

アレクセイエフはイゴールから、

「ユニオンシティ軍と開戦したら、どちらかが最後の一兵になるまで交戦せよ」

と命令されていた。

アレクセイエフは命令の意図を特に訊（き）くことなく従った。

ジョーンズ少将並に政治的感性に乏しいアレクセイエフとしては、総代表の命令には何らかの意図があるのでそれに従えば間違いがない。と確信していた。

イゴールが部下を時間稼ぎ程度、としか見ていないなどはアレクセイエフは思っていなかった。

その思いと確信は、アレクセイエフの旗艦『ムルマンスク』がモビルスーツ部隊とF7支援戦闘機の集中攻撃を受けて爆散する最期の瞬間まで続いた。

「アングルモア艦隊旗艦『ムルマンスク』轟沈！残存戦力 尚も我が艦隊に突撃して来ます！」

「信じられない！バンザイ突撃のつもりか！」

思わずジョーンズ少将が叫ぶ。

アングルモア艦隊は戦闘不能になった艦船を除き、最後の一機まで戦い続け、全滅した。

月面都市国家ユニオンシティは、アース・ガルディアに代わって地球衛星軌道上を掌握した。

地球暦2021年11月12日午後11時【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス 大月家】

食後のカボチャプリンを食べてご満悦だった美衣子が突然大月の膝の上から離れて立ち上がると、

「結・瑠奈！あれ”を止めさせなさい！絶対にダメ!!」

と叫んだ。

大月とひかりは驚いたが様子を見ることにして傍（そば）で見守っていた。

やがて無表情で次々と何処かと話し合っていたが、

「お父さん、澁澤と岩崎に『すぐに』話したいの」

大月は「分かったよ」とだけ応えてひかりに目で合図した。

ひかりは岩崎の携帯に連絡を取ると、美衣子に

「澁澤総理とすぐに話せるわよ」

と言った。

美衣子は

「お母さんありがとう。3階で『みんなで』話し会おうわよ」

と言うと、大月の背中にしがみついて「おんぶ」をせがんだ。

大月は特に何も言わずに美衣子をおんぶして3階の旧マルス大使館として使われていた執務室に向かった。

執務室に着くと、既に美衣子のメッセージを受け取ったのか、イワフネ、岬教授、JAXA理事長の天草、協力機構の琴乃羽教授、東山首相補佐官が座り、壁面に埋め込まれた多くのモニターには澁澤首相、岩崎、ジョーンズ少将、ロイド提督、英国連邦極東ケビン首相、ユーロピア共和国ジャンヌ首相、そしてプレアデス星団に帰還したアマトハとゼイエスまでもが顔を揃そろえていた。

美衣子は全員の顔を見渡すところ言った。

「シャンバラの愚か者がアトランティスの遺産を、インドラの矢と言う地球を再び破滅させる兵器を使うわ」

集まった全員は絶句するしか無かった。

美衣子はイワフネと過去に収集したデータを基にアトランティス文明の大量破壊兵器について説明した。

段階的技術承継を受け、最新兵器を生み出した列島諸国人類は到達不可能なアトランティス文明の軍事技術に驚愕（きょうがく）するしかなかった。

「イゴールがマグマエネルギーを利用したプラズマ兵器をユニオンシティに発射するのですね？」

ロイド提督が美衣子に質問した。

「あの愚か者はアトランティス文明の末路までシベリアで再現するでしょうね」

美衣子が皮肉げに言った。

「あの地下都市『シャンバラ』に住んでいたアトランティス人は、兵器の使用後に地下から噴出した有毒火山ガスで全滅した。」

もつとも最悪だったのはシベリア地区の大規模地殻変動が当時の地球全域に波及して、アトランティス大陸とムー大陸で繁栄した二大文明が滅亡したことよ」

憂鬱ゆううつな顔の美衣子は話し続け、

「今、インドラの矢を使うと大変動中の地球環境にトドメを刺すことになるわ。今以上の火山活動は人類に有害な大気を充満させてしまう。大気の浄化、火山灰の酸性化を中和する事は出来るけど、途方もない時間を必要とするの」

「何としてもシャンバラに有るあの兵器を使わせない事が一番よ。その為の作戦はあなた達が考えて。ちなみに、残り時間は半日よ」

そう言うと美衣子は部屋の隅に居た大月の膝ひざに戻った。

シャンバラ攻略

地球暦2021年11月12日午後11時30分【神奈川県横浜市
神奈川区 NEWイワフネハウス 3階 会議室】

会議室に集った面々は早速意見を交わした。

「残り時間半日だと普通に部隊を派遣して探索なんて悠長な事は出来ません」

「地下都市ごと潰してしまえば」

「それはダメ」美衣子が口を挟んだ。

「あの兵器を破壊すると」そこから「マグマが漏れてしまう。兵器の機能停止がベスト」

と言った。

「基地に急襲するか」

「基地の特定が出来ない」

「観測機で上空から地上探索レーダーを」

「火山灰が濃厚で普通の航空機はエンジンが灰でダメになる」

「仮にレーダーが作動していても、火山灰の性質によってはレーダーが何処まで効くかも問題だ」

「場所の特定さえ出来れば」

「地下都市『シャンバラ』でしょうか？その座標は承継データに無いのですか？」

「極東米露にありますね」

「ユニオンシティに有りませんか？アース・ガルディア時代のデータとして」

「あれはブレイクスルーな代物でしたから、総代表が直接管理していいました。我々にも分からないのです」

面々が悩む。

「えっと、美衣子。シャンバラの座標を言ってみなさい？」

大月が膝に乗る美衣子に言った。

「ん。北緯@#。#@分、東経&”※\$。?。%分」

あつさり美衣子が言った。

一同はガツクリきた。

「私は地球生命誕生からあらゆる事象のデータを蓄積しているから訊(き)かれたら、答えられる」

美衣子が心なしか縮こまって言った。

大月はその美衣子の頭を撫(な)でて慰めていた。

「だけど、皆忘れているかもしれないけど、私はあくまでも人工知能システム。クローンの肉体にシステムを移植しているだけで、人間の様に錯綜した情報を選別する思考が出来ない事を覚えておいて」

美衣子が無表情で言った。

ひかりには、そんなこんな美衣子が悲しそうに見えた。

一同はそんなやり取りに沈黙していたが、岬教授の一言で破られる。

「中性子、ニュートリノビーム」

岬教授は、

「ニュートリノビームを月面基地から地下都市の座標に照射出来ませんかね？」

と尝试してみた。

「中性子であれば、本国(スウェーデン)に中性子爆弾が有るが？」

ジョーンズ少将が発言した。

「それでもいい。だけど地下都市は深さ6 kmもあるからそこまで人類の中性子爆弾の効果が届かない」

結が指摘した。

「ニュートリノビームは物質を透過する特性がある。仮に目標が地球の裏側に有つても『地球の中を通過して』裏側の施設にダメージを与える事が可能」

美衣子が説明した。

「一応言っておくわ。大量の中性子、ニュートリノビームを浴びた地下都市の人間が無事では済まない事を肝に銘じて。」

あと、恐らくマグマエネルギーを誘発させるためのトリガーとして、核兵器を彼らは設置しているけど、ニュートリノビームを浴びた弾頭は正常に起爆しないで不完全爆発を起こすわ。

小さな不完全臨界爆発だけど、ヒロシマ並の核被害も覚悟しないといけないわ」

どうするの?と美衣子が一同に覚悟を迫った。

「やるしか有るまい」澁澤首相が言った。

「我が国も同意します」ケビン首相とジャンヌ首相もすかさず賛同した。

「あなた方の決断はやむを得ないと思います。

これ以上の破壊はアトランティスと同じ破滅しかありません。

ここまで進んだ歩みが無駄にならないように行動すべきです。

技術的助言であれば、瑠奈、結でも大丈夫でしょう」

アマトハが言った。

「地球をまた汚して済まない」ソーンダイク代表が言った。

「地下都市のイゴール派閥には気の毒だが、自業自得です。ミス・ミイコ、ご協力お願いします」

ソーンダイクが頭を下げた。

「瑠奈がすぐに作業を始めたいと言っている。月面ラボの周回加速器施設を活用できる」

結が答えた。

「とは言うものの、人手が欲しい」

「ユニオンシティの技術者がお手伝いします」

ソーンダイクが申し出た。

「ん。申し分ないけど大量のエネルギーが必要。具体的には原子力が人類の用意できるもの」

結が指摘する。

「宇宙戦艦の原子炉では不足かね?」

ジョーンズ少将が訊いた。

「20隻分有れば最適」結が答えた。

「我々の戦闘艦とユニオンシティの残存戦闘艦で何とか賄(まかな)えないか?」

「大丈夫」結が頷いた。

「ソーンダイク代表。よろしいでしょうか?」

澁澤首相が確認する。

「我々が狙われているのです。是非も有りません！」

ソーンダイクが即答した。

「分かった。岬はここに残ってラボの改修監督をしてもらう」

美衣子が応えた。

「ジョーンズは部下を連れてシベリアで愚か者を地下に封じ込めて」

結が言った。

「わかりましたミス・ムスビ」

ジョーンズ少将が了承した。

「アトランティスの兵器を機能停止させた後はどうするのですか？」

英国連邦極東のケビン首相が参加者達に訊いた。

「地下都市が崩壊していなければ、ユニオンシティの地球メガフロートから制圧部隊を派遣してイゴールを捕らえます」

ソーンダイクが答えた。

「間に合えば良いのですが」

ユーロピア共和国のジャンヌが心配そうに言った。

「ミス・ミイコ。アトランティスの地下都市は地球上にまだ有るのかね？」

「トルコとメキシコに大きいのが有る。愚か者の手下が居るわ」

美衣子が答えた。

「では、何としてもシベリアで終わりにせねばなりませんな」

ロイド提督が言った。

全員が頷いた。

同11月12日午後11時50分【月面都市『ユニオンシティ』宇宙軍港】

火星から旧在日米軍兵士が搭乗してきた小型シャトルが宇宙軍港の電磁カタパルトから射出されてシベリア地区北極圏タイミル半島に真っ直ぐに向かっていた。

アンゴルモア艦隊との戦闘で活躍したモビルスーツ部隊も連戦で疲労していたが、地球壊滅の危機を防ぐために志願して搭乗した。

元米軍横田基地のマードック司令と結が後方指揮に当たった。

ユニオンシティでは、居住区の市民で科学知識や土木技能の有る人間が総動員されて瑠奈の指示のもと、マルス人ラボ施設をニュートリノ発生用粒子加速装置に組み換える作業を行っていた。

同11月13日午前1時【南太平洋上 ユニオンシティ所属メガフロート『マリオンシティ』】

月面都市から飛来したマルス製の大小シャトルがメガフロート近くの海上に着水した。

メガフロートへの移動時にシャトルに乗った者も居たが、全長500mを超える三角形の機体を見るとあらためてその巨大さに圧倒されるのだった。

制圧部隊は地上活動に慣れたメガフロート駐留米軍を主力とする事になった。

シャトル到着前にメガフロート駐留部隊の中から特殊部隊、海兵隊の兵士を募り、制圧部隊が編成されていた。

「今回の任務は時間制限の有る、厳しいものになる。我々の働き次第でこれ以上の地球の破滅が防げるかも知れん！最優先目標は元総代表イゴールだ！絶対に逃すな！」

ジョーンズ少将がキビキビと訓示して部隊がシャトルに搭乗してシベリアに向かった。

同午前2時【月面都市『ユニオンシティ』メインサーバールーム兼作戦司令部】

「ジョーンズ少将の部隊がマリオンシティを飛び立ちました。シャンバラ到着まで2時間です」

通信オペレーターが報告した。

「ニュートリノビーム発射装置への接続テスト完了。粒子加速器試験運転異常無し」

ユニオンシティの技術者が報告した。

「結（むすび）姉さま、何時でもニュートリノビームは撃てるけど、照準はどうやるっすか？」

メインサーバーに接続した瑠奈が結に訊いた。

「シンプルにこれでいくわ」

結が遠隔操作で月面の重機を動かして巨大なスナイパーライフルを粒子加速装置に接続させた。

「これなら気分も出るでしょ?」

結がフンスと胸を張る。

「姉さん渋いっすよ!」 瑠奈が絶賛した。

「だけどライフルの引き金はどこっすか?」

「これを、ここに座りながら撃つのよ!」

結が大型拳銃のような銃身の上部にスコープの付いた発射装置を手渡した。

「まるで波動〇みたいっすね! いけてます!」

瑠奈は興奮してテンションが上がっていた。

「やっぱりエネルギー充填じゅてん120パーセントで発射っすね!」

「それだと月面都市ごと消滅するから。100パーセントになったら目標に照準を合わせて撃つのよ!」

瑠奈に結がレクチャーした。

黒髪幼女とトカゲ娘のやり取りを背後で見ていたソーンダイク代表とマードック司令官はオロオロと顔色が悪くなるのだった。

「ニュートリノビームシステム、粒子加速」

「エネルギー加速。50、60、75、順調に加速中」

「目標照準。シベリア北極圏タイムル半島」

瑠奈がオペレーター席に据すえ付けた発射装置のスコープを作動させる。

「射線上航行物体は直ちに射線から離れろっ!」

ジョーンズ少将が地上で警告を発令した。

「粒子エネルギー加速さらに上昇! カウントダウンに入ります!」

オペレーターが瑠奈に引き継いだ。

「了解っすよ!」 瑠奈がこたえる。

「エネルギー加速、96、97、98、99、100!」

瑠奈が灰色に覆われた地球シベリアに向けてトリガーを引くと、月面全体にブーンと低い駆動音と低周波振動が発生した。

「ニュートリノビーム発射中です!」

30秒ほどすると、駆動音と振動は治まった。

「ニュートリノビーム照射完了」

瑠奈がふいーつと大きく息を吐いて後ろにいたソーンダイクにピースをした。

「目標地域への照射は成功。目標からの電磁波、レーザー等対抗シールドは発生していません!」

「シベリア地下都市は沈黙しました!」

地球観測システムのオペレーターがソーンダイクに報告した。

「ジョーンズ少将より入電。あと4分でタイミル半島上空に到達します」

「ジョーンズ。部隊を降ろす前に地下都市で核爆発や放射能災害が起きていないか見極めるのよ」

ジョーンズ少将に結が忠告した。

「了解しましたミス・ムスビ。地上及び地中レーダーとセンサーを総動員して地下都市を走査しろ!」

ジョーンズ少将が命令した。

【シベリア北極圏 タイミル半島地下都市 『シャンバラ』】

プラズマレーザーでユニオンシティを狙っていたイゴール派閥の本拠地は大混乱に陥^{おちい}っていた。

「インドラの矢 プラズマレーザーシステム、エネルギー供給システムダウン!システム管理サーバーブラックアウト!」

「シャンバラ都市機能のほとんどが停止しています!」

「マグマエネルギー誘発爆縮装置の核弾頭が不完全臨界しようとしています!異常な量の放射線が発生!」

「プラズマレーザー管制室、応答せよ!」

「バカな!?!電磁パルス攻撃でも地下6kmのこちらまで電磁波は届かないはずだぞ!」

「強力な放射線で管制室が全滅しました!」

「ブラックアウト直前に大量の中性子を観測」

「中性子ビームの照射だ?!」

「間もなく爆縮装置核弾頭が不完全臨界状態になります!」

「緊急汚染警報！総員待避！地下トンネルでカッパドキア基地に避難しろ！」

「移動システム、全車輛のエンジンがダウンしています！」

「ソーンダイクめ！許さんぞ！絶対にー！」

齒軋（はぎし）りするイゴールの視界が突然光に包まれて意識が断絶した。

「地下都市で核爆発発生！衝撃波来ます！」

上空に到達していたジョーンズ少将のシャトルは、地下都市からの不完全臨界放射線を既に感知してタイミル半島から急速離脱を始めた矢先だった。

「総員、地上を見るな！対閃光、対衝撃防御！」

地下都市『シャンバラ』の在ったタイミル半島から眩（まばゆ）いばかりの赤い閃光が漏れ出してヒロシマ型原爆と同規模の核爆発が発生した。

タイミル半島上空を離脱したシャトルのモニターには地上からゆっくりとキノコ雲が立ち上る様子が映し出されていた。

「愚かな」ジョーンズ少将が眩（くら）いた。

「地下都市は完全に沈黙。動いている物は、有りません。全滅です」
「引き続き地下都市周辺の監視を怠（おこた）るな！」

メガフロート都市『マリオンシティ』からの増援部隊はジョーンズ少将指揮の下、メキシコとトルコに別れて地下都市の制圧に振り向けられた。

両地下都市にはイゴール派閥の小規模な駐留部隊が居たが、短時間の戦闘でユニオンシティ軍に制圧された。

地球暦2021年（ガルディア暦4年）11月13日午前3時30分【シベリア北極圏 タイミル半島から120km離れた上空】

ジョーンズ少将は『シャンバラ』の監視を続けていたが、地下都市からの生存者は居なかった。

アース・ガルディア創設者にして総代表のイゴールとその派閥はこうして滅亡した。

同午前6時、月面都市国家ユニオンシティ政府代表ソーンダイク

は、宇宙国家アース・ガルディアアの消滅を正式に宣言した。

同時に、火星協力機構への参加を日本政府に申請し、火星の極東米露政府にはユニオンシティ国への帰属を命令した。

極東米露政府の臨時代表ダグラスマッカーサー三世はなす術すべもなくユニオンシティへの帰属を表明した後に辞任した。

極東米露政府は月面都市国家ユニオンシティに統合され、ユニオンシティ火星地方政府として再出発する事となった。

人類都市ボレアリフは地球から避難してきたユニオンシティ国民が火星環境に慣れるまでの間、火星協力機構加盟国に共同統治される事になった。

地球復興会議

地球暦2021年11月20日午前9時〔東京都千代田区永田町
首都官邸〕

アース・ガルディア国家崩壊から1週間後、火星協力機構加盟国が集まって地球復興に向けた話し合いが行われた。月面都市国家ユニオンシティのソーンダイク代表は惑星間通信での参加である。

「地球上での大変動が発生して2年が経とうとしています。しかし、未だに世界各地での天変地異は収まる様子が有りません。」

ユニオンシティのソーンダイクが口火を切った。

「具体的には地殻変動と地軸移動（ポールシフト）が断続的に続いており、地震と火山噴火、磁場の乱れによる有害宇宙放射線が生き残った人類への脅威になっています」

「また、噴火で生じた大量の火山灰が大気中に漂い、海中にも降り積もっているため、海洋・湖沼での水質の酸性化が顕著に進み、珊瑚礁をはじめとする生態系の壊滅が進んでいます」

「加えて海面上昇により水没した原子力発電所に貯蔵されていた放射性廃棄物による放射能汚染、中東地域を始めとする産油国油田地帯の原油掘削施設から流出した原油汚染が徐々に進んでいます。」

月面都市から地球環境を観測してきた国立天文台の空良が報告した。

「何処から手を付ければ良いのか、途方に暮れますな」

英国連邦極東のケビン首相がため息をついた。

「大変動の元から調べないと対策の立てようがありません」

ユーロピア共和国のジャンヌ首相が発言した。

「ジャンヌは良いことを言う」

同席していた大月の膝に座る美衣子（ミーコ）が言った。

「この大変動は、日本列島とその周辺の海水を含む巨大質量が一気に消失した事が原因」

美衣子が答えた。

「失われた質量に対応出来るよう地球環境が自律的なバランス再編か

ら大変動が起き続けている、と言うことですか？」
ソーンダイクが訊いた。

「そう。バランス再編にどのくらい時間がかかるのか、予測は難しい。あえて実例を上げるならば、恐竜時代に落下した巨大隕石災害（ジャイアント・インパクト）からの再生と同じ」

美衣子が答えた。

参加者達は茫然^{ぼうぜん}として地球大変動の想像を絶する規模に認識をあらたにした。

「そのような大災害、もはや人類の手には負えないのではありませんか？」

台湾自治区の王代表^{ワン}が発言した。

「しかし、自然に任せるまま何世紀も地球を放置して良いものでしょうか？」

濫澤首相が言った。

「他国からの攻撃が元凶^{げんきゆう}とは言え、我が国の国土が問題を引き起こしたならば、我が国は少なくともこの状況で手を引くのは早すぎると思います。やれるだけやって、その結果で考えたい」

濫澤が言い切った。

「以前、美衣子さんは火山灰なら中和出来るとおっしゃいました。酸性化対策ならばアルカリ性である石灰粉^{せっかいふん}を北半球に散布^{さんぷ}すればよいでしょう。私達でも出来る方法はあるはずです」

岩崎官房長官が発言した。

「問題は地殻変動の鎮静化^{ちんせい化}方法です」

天草があらためて指摘した。

「日本列島分に見合う質量を持つ岩石を火星か、金星から集めて旧日本列島跡に軟着陸、設置すれば良いのでは？」

空良^{そら}所長が提案した。

「考えは正しいけど、他の惑星からはダメ」

美衣子がダメ出した。

「各惑星自身の質量バランスが崩れてしまうから、火星からの岩石持ち出しは、火星での地殻変動発生を意味するわ」

一同はしばらく黙考した。

やがて、琴乃羽教授が

「火星と木星間にあるアステロイドベルト（小惑星帯）から幾つか運んで来るのはどうでしょうか？」

と遠慮がちに言った。

「悪くないわ」

美衣子が評価した。

「地球への運搬手段と大気圏突入時の熱と衝撃対策と設置方法も課題ですな」

ロイド提督が指摘した。

「火星と月にあるシャトルや戦艦の推力では力不足」

結（ムスビ）が指摘した。

「プレアデスのおつきい船なら行けるんじゃないっすか？」

瑠奈（ルンナ）が思い付きを口にした。

「マスターに聞いてみる。マスター、どう思う？」

美衣子がいきなりその場でプレアデス星団のゼイエスを呼び出した。

新しいモニターが一つ現れて、研究室一杯に張り巡らせたプラレール整備に勤しむゼイエスの後ろ姿が映し出された。

「ミーコ、私は今忙しいのだ。このブルートレイン『九つ星』の線路を敷いたらーって、ええっ?!」

ゆっくりと振り向いたゼイエスの鱗に覆われた顔が心なし赤く染まったように見えた。

「ゴホンっ、失礼しました。お久しぶりですね皆さん」

ゼイエスが無理矢理平静さを装って挨拶した。

「マスター、アステロイドベルトの岩を地球に日本列島と同じ質量分置きたい。オウムアムル型の船を何隻か貸して欲しい」

美衣子が言った。

「ほお、それは面白い。もう少し詳しく話さない」

ゼイエスが宇宙物理科学者の顔で言った。

美衣子が地球環境を安定させる手段としての地球質量バランス再

生方法を説明した。

やがて、ゼイエスは

「うむ。ミーコの考え方は正しいでしょう。手間のかかる方法ですがオウムアムル型の船団を使ってアステロイドベルトの小惑星を数十個、船団で囲（かこ）ってそのまま地球上に設置するのは可能でしょう」

と答え、少し考えた後に、

「基本的にマルスアカデミーは、初期コンタクトした文明には過度に干渉しない事になっています。アマトハや、プレアデスコロニー首脳にも諮（はか）らねばならないでしょう」

事の重大性を指摘した。

ゼイエスが参加者達を見ながら言った。

「より具体的な再生計画を教えてくださいたいのですが」

「マスターゼイエス、お忙しいところ、突然のお話で申し訳ございませんでした。基本的には美衣子さんの言われた方法を我々は考えています。詳細が決まりましたらこちらからご連絡します」

岩崎官房長官がそう答えて通信を終えた。

「我々はもつと真剣に考えないと助けを乞（こ）うことも出来ませんね」

岩崎が参加者達を見回して言った。

「ところで、」澁澤が気になっていたことを発言した。

「地球上の国々はどうなったのでしょうか？」

ソーンダイクが発言を求め、説明を始めた。

「衛星軌道上からの観測と通信 傍受、地上の旧ガルディアコミュニティのネットワークから情報を収集している限りでは、大半の国家が崩壊したとの事です」

「北半球の欧米、アジアの中国、ロシアは地球大変動で国家体制が崩壊して僅かにスイスと周辺数都市が自衛しつつ孤立している状況です」
「ほとんどの国家が崩壊したために、国連やNATO（北大西洋条約機構）、上海条約機構、ASEAN（東南アジア諸国会議）、アフリカ連合（AU）、湾岸協力機構（GCC）などの国際機関や条約機構組織は

機能しておらず、事実上消滅しました」

ソーンダイクが嘆息して首を振りながら説明を続ける。

「インドとパキスタンは大変動の津波とヒマラヤ山脈エベレストの大規模山体崩壊により政府自体が壊滅、東南アジア諸国も同様です」

「オーストラリアとニュージーランドは沿岸部の主要都市が津波と地震で壊滅、大陸中央の砂漠地帯で中小の地域コミュニティが辛うじて存続しています」

「中東地域はイスラエル以外の国家が全て天変地異による大混乱の中で自然消滅してしまい、部族・地域単位で僅かな生存者が放浪している状態です。イスラエルは辛うじて国家組織の維持に成功していますが、物資の不足で治安維持可能な地域が日々減少しているようです」

そこでソーンダイクが一旦言葉を切って澁澤を見つめた

「澁澤首相。実はイスラエルのニタニエフ首相から澁澤首相とお会いしたいとのメッセージを預かっています。あの国もこのままではじり貧になりますから、打開策を相談したいのです」

「分かりました。お会いしましょう。会談場所などは後程こちらからお返事しましょう」

澁澤は岩崎官房長官に準備を指示した。

ソーンダイクは説明を再開した。

「アフリカ大陸は、最南端の南アフリカ共和国ケープタウン周辺が都市機能を維持している以外は政府と呼べる組織は有りません。大陸中を無数の避難民が放浪し、軍隊崩れの犯罪組織が盗賊と化して避難民を襲撃しており、完全に無法地帯です。旧反政府ゲリラや武装宗教組織が盗賊に合流している始末で世紀末の様相を呈しています」

あまりに悲惨な状況に会議の参加者は全員が沈黙してしまつた。

地球復興会議の初日はこうして終わった。

—————

東京の首相官邸から横浜にあるNEWイワフネハウスへの帰り道で大月は、三姉妹についてひかりと話して気づいたことを美衣子たちに伝えることにした。

「ねえ、美衣子。美衣子はシャンバラ会議の時に自分は人工智能に過ぎないと言っていたけど一つ見落としている事があると思うんだ」

大月が膝の上でくつろぐ美衣子に話しかけた。

「確かに美衣子たちはデータを集積してプログラミングされた通りの思考と行動しか出来ない人工智能としての「一面」はあると思う」

「でもね。それだと、なんで結と瑠奈の思考と行動は美衣子と違うのだろうね？まるで人間の、性格の違う姉妹と何ら変わりがないと思う」

美衣子が大月の膝の上から大月の顔を見上げる。

「ゼイエスから以前聴いた事だけど、美衣子達は「自律進化型」、自分で律^りって進んでゆく人工智能だよね」

三姉妹は頷いた。

「それって、人間と変わらないんじゃないかなあ？人類だって基本的には自分を律して、人生経験を積んで日々過^ごしているよ？」

「美衣子達は既に充分「人間らしい」、いや「人間となんら変わらない」と思うよ。発想の貧弱さを気にするかもしれないけど、それは「人間として生活している経験」がまだ浅いから仕方ないことだと思うよ。だから結も瑠奈も今まで通りに伸び伸びと過^ごせば良いんじゃないかな」

SPが運転するワゴン車の中で美衣子達三姉妹は、NEWイワフネハウスに帰るまで無言でじっと大月の両腕と背中にしがみついていた。

そんな四人をひかりは嬉しそうに見つめながら大月の手を握りしめるのだった。

地球復興計画

大月家の朝は家主のウォーキングで始まる。

総合商社角紅が福利厚生の一環で実施する社員定期健康診断において、メタボと高脂血症こうしけつを指摘された大月は、ひかりの熱烈な励ましのもと、毎朝1時間程度自宅周辺を廻る散歩をする。

「ただいま〜」

汗まみれの大月が帰宅するとひかりが起きて朝食の準備をしており、寝ぼけ眼の美衣子や結、瑠奈がダイニングにある椅子により登ってポーっとしていた。

ウォーキングで適度に汗をかけた大月がシャワーを浴びた後には、愛情重視のおむすび満載の愛妻弁当からマルス料理の開発を経て進歩（レベルアップ）したひかりの朝食が食卓に並んでいる。

「ひかり。ありがとう」

「では」

「「「いただきます」」」」

今朝も元気な声が大月家に響く。

「お父さん、今日から澁澤達や月の代表と話し合いがあるから結と瑠奈も参加させるわ」

美衣子が今日の予定を大月とひかりに告げる。

「学校休めるイエーイ！」

寝ぼけ眼だった瑠奈が刮目かっもくして椅子の上に立ち上がってガッツポーズを取る。瑠奈はホントにフリーダムである。

「普通は休んだ分澁澤先生の補習だよね？」

ひかりの突っ込みで瑠奈はすぐに椅子の上のフリーダムから転落する。

「その話し合いに俺とひかりは付いて居た方が良いかな？」

「お願い。お父さんの膝の上は至高の特等席よ。ねえ、ひかり？」

「そうね。私が独占したいくらいなもの」

「ひかりは夜の時間を独占しているのだから我慢して」

結が突っ込む。

「フアッ!!」

ひかりが真っ赤になるが美衣子は容赦しない。

「そろそろ弟が欲しいわ」

美衣子の言葉に結と瑠奈も頷く。

「そういうことだから、お父さんは馬車馬のように励みなさい」

「.....」

大月とひかりは朝から三姉妹の攻撃で撃沈してしまった。

大月は「夜の運動時間」を馬車馬的に増やすことを決意しながら、ひかりにちゃんとしたけじめをつけたいと考えていた。

大月は次の週になったら入籍と結婚式を挙げたい旨をひかりの祖父 似志野に相談しようと思決した。一方、大月の母親は依然として意識不明の重態であるが、容態は安定しており、ひかりとの結婚を大月は考えるようになっていたのである。

2021年11月21日午前9時 地球復興会議二日目【東京都千

代田区永田町 首相官邸会議室】

会議の議事進行は官房長官の岩崎が行っていた。

「昨日の現状認識を踏まえ、本日から具体案の策定に入りたいと思います」

「まず地球上の避難民への支援だが」 澁澤首相が話し始めた。

「欧州アルプス地方、北米大陸フロリダ、中東エルサレムとアフリカ大陸南端のケープタウン、オーストラリア大陸中央地帯に救助拠点と避難民収容「都市」を設置しましょう」

澁澤が各国首脳に提案した。

「エルサレム（イスラエル）とフロリダは月面国家ユニオンシティ、ケープタウンは英国連邦極東、オーストラリアは我が国が、欧州アルプス孤立都市にはユーロピア共和国が主体となって相互救助・支援ネットワーク作りをお願いしたい」

昨晚のうちに港区 飯倉の外務省 公館において、各国実務官僚レベルでの調整は完了しており、各国首脳は了承して次の議題に移っていった。

だが、それは暗にアフリカ大陸と南米・アジア地域の封鎖と放置を意味していた。

会議参加者の誰もが理解していたが、誰も、異議を唱えなかった。残された人類の資源では出来ることに限りがあるからだ。

避難民の支援と並行して地球環境の再生を図らなければならないのだから。

—————

JAXA天草理事長が発言する。

「地殻変動鎮静化の方法としてアステロイドベルトからの小惑星を日本列島転移跡に設置、まではよろしいかと思えます。

次の問題は大気圏の空气中に占める火山灰です。空气中だけではなく、地表や海底に降り積もるガラス質の火山灰は動植物の呼吸器系を侵し、地球海洋上や多くの湖沼酸性化を食い止めるために、アルカリ性中和剤の大規模散布が急務です」

ソーンダイクが発言を求めた。

「地球上で石灰質が多い地質はいくつか有ります。たとえば欧州のフランス地方、メキシコユカタン半島、トルコのカツパドキアは石灰質の地層が多い。これらの地区から最寄りの河川へ石灰岩を溶かして海に流して付近の海水を中和するのが一つです。

大気中の火山灰は長期間とどまるので出来れば旧ISS（国際宇宙ステーション）からの気流操作で数か所に纏めてしまいか、雨雲と組み合わせることで地表へ雨と共に落とすことでしょうか？」

「気流操作はつまるところ気象操作ですよ？世界規模の気象操作等可能でしょうか？」

岬教授が疑問を感じて言った。

福島県沖の養殖カキ生け簀視察から戻ったばかりのイワフネが発言を求めた。

何故かイワフネのスーツが海水で濡れていたが誰も突っ込まなかった。

「気象「操作」は可能ですが、「制御」は予測不可能な事象が多いので過去の高度人類文明でも成功した試しがありません」

「では衛星軌道上から地球規模でのアルカリ中和剤の散布となります」

ロイド提督が発言した。

「マルスのシャトルや地球の航空手段をもつてしても地球規模の散布には到底数が足りませんな」

「地球低軌道から何重にも張り巡らせたハイパーloop路線で断続的に散布、でしょうか？」

イワフネがアイディアを出した。

「マスター、出番」

美衣子がゼイエス呼び出した。

「ミーコ、聴こえているよ。イワフネのアイディアは面白いな。まるで銀河鉄道ではないか」

遂に完成したブルートレインのプラレールを背にゼイエスが上機嫌で言った。

「地球全域に散布するのではなく、何か所かジェット気流のポイントで散布すれば、後は気流が各地に石灰粉を運んでくれるだろう。だから、赤道上空、両極上空に貨物コンテナターミナルを設置してコンテナを連結して軌道上からジェット気流に触れてコンテナから散布すれば良い。まあ、貨物列車のようなイメージでしょうか」

「ハイパーloop路線は人類の技術で設置可能でしょうか？」

天草が質問した。

「時間的な余裕も無いので、マルスアカデミーのハイパーloop技術をアレンジします。実際の運用は鉄道運用みたいに組めますから、皆さんでも出来るようになるでしょう」

ゼイエスが答えた。

「なるほど。方法はわかりましたがアステロイドベルトの小惑星運搬や、地球衛星軌道上でのハイパー貨物列車運用に必要なエネルギーはどこから調達するのですか？」

岬教授が聞いた。

「良い機会だから、マルス文明のエネルギーについて説明するわ」

美衣子（ミーコ）が大月の膝の上に座ったまま、会議室にホログラ

△映像で立体的な正三角形を出現させた。

「この正三角形の中心部には特殊な磁場、ある種のエネルギーが発生するわ」

尖山マルス基地の自動防衛機構が稼働し、東京大停電後に出動した自衛隊と米軍を翻弄させた一部始終を記録した映像が流された。

航空自衛隊のF4戦闘機の背後に複数の光球体（オーブ）が追いつき、F4戦闘機がミサイルと勘違いしてフレアー（対ミサイル防御発光弾）を射出したり、山頂の空挺特殊部隊が水色の光に包まれて皆神山に転送されてしまう光景が出ると、

「この光球体（オーブ）や地上部隊を余所に転送させるエネルギーは尖山中心部で派生したエネルギーを使っている」

なぜか結がフンスと薄い胸を張ってアピールするが皆は敢えて流した。

「フロリダ沖の海底にもマヤ文明人類が建設したピラミッドが不完全に稼働していて時々ランダムに近くの飛行機や船をあちらこちらに転送してたつすね！」

瑠奈がサラリと爆弾を投下した。

参加者がどよめいた。

「その、えっと、転送された飛行機や船はどうなったの？」

ひかりが自分の膝上に座る瑠奈に訊いた。

「ん、かつてのマヤ文明、ひいてはアトランティス大陸のどこかへ安全に転送された筈つすよ」

「アトランティス大陸は沈んでいるんだよね？」

大月が確認した。

「そうつすね！たぶん海の底のどこかへ安全に転送されてるつす！」

「よし瑠奈。後で「安全に」東京湾の海底へ沈めてもいいかな？」

引き攣った顔の大月が人類を代表して瑠奈にお仕置き宣言した。

「えーっ！自分関係ないつすよう」

そんな瑠奈を無視して美衣子は

「正三角形の規模に比例して得られるエネルギーは変化するわ」

「だから、アステロイドベルトの小惑星を正三角形に加工して自らの

運搬エネルギーを生み出すのが理想ね」

と言った。

「ふーむ。このピラミッドから生まれるエネルギーは「どこから」供給されるのでしょうか？」

岬が疑問を口にする。

「アカデミーでもそれは完全に突き止め、証明することが出来ていません」

プラレールが走り回る光景を映すモニターからゼイエスが言った。

「私達の居る二次元空間ではなく、さらに高い次元空間から得られる自然エネルギーだとマルスアカデミーでは推測しています」

未知のエネルギーと多次元空間について説明を受けた人類側の会議参加者達は啞然としながらも「そういうものだ」と納得するしかなかった。

こうして地球復興会議二日目が終了した。

2021年11月21日午後7時 一 神奈川県横浜市横浜地方気象台」

「東京湾直下で地震。マグニチュード1、震源は横浜市沖1キロ以内」
気象庁の観測員が報告する。

「珍しいな。首都圏の地震なんて火星転移後初めてじゃないか？」
別の観測員が応えた。

同時刻【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】

「溜奈。深海飯は旨いか？」

大月が思念システムで呼び掛ける。

「暗いよー、寒いよー、ぱぱちちち、ごめんなさいー今度は空気読んでしゃべるから許してー、ヴワーン (TOT)」

溜奈がガチ泣きしていた。

横浜市沖水深400mで畳二畳分あるシールド内海底で溜奈が夕御飯を一人で食べていた。

畳二畳分とは言え、水深400mの海底における水圧は地上より過

酷であり、其のような場所に水圧を押し退けるように出現した「お仕置きルーム」は海底に少なくない地盤変化を起こしていた。

此処に瑠奈を送り込んだのは「どこへもドア」を作った美衣子である。

「瑠奈。東京湾名物の巨大アナゴをお土産に帰るなら許してあげるわ」

何故か美衣子がお仕置きの采配をとっていた。

翌日の晩御飯はアナゴを使ったちらし寿司だった。

NEWイワフネハウスの入居者が皆、喜んだ。

その翌日、大月が横浜漁業協同組合に呼び出されて出頭し、瑠奈がアナゴを無許可で捕獲した事による漁業権侵害の罰金を支払い、瑠奈と美衣子を漁業協同組合に加入させる手続きを行った。

こうして有史以来初のマルス人海女が誕生した。

その日の夕御飯は、美衣子と瑠奈が横浜市沖深海底で撮らされた事は言うまでもない。

その日も横浜地方気象台の地震計は横浜市沖を震源とするマグニチュード1の微弱な地震を観測した。

マルス人初の海女となった瑠奈は、その後、地球海洋で絶滅の危機に瀕していたサンゴ礁を保護して火星海洋で治療、増殖するのに一役買うことになるのだが、それは別の話となる。

恋愛無双

2021年11月22日 「神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス」

地球復興会議の1日目、2日目で討議された内容について人類側がマルス文明のスーパーオーバーハイテクノロジーを「理解」し「整理」するための時間が必要とされたため、会議は1週間中断された。

「うーん」

瑠奈ルナがとある大人気恋愛シミュレーションゲーム「恋愛無双」のプレイ画面を見ながら残念そうにため息をついた。

「この場面での選択肢が少なすぎるわ」

結ムスビが寂し気に言った。

「選択肢がなければ作ればいいのよ」

美衣子が事もなげに言い放った。

—————

その日の夕食後、大月とひかりが入浴中に三姉妹は地下二階にある結の研究室に集まった。

「まずは可能な限りの選択肢を場面ごとに追加した後で余分な選択肢を省はぶきましょう」

美衣子がゲームソフトの「改造」を宣言した。

「私たちの今日まで蓄積されてきた人類のデータを使いこなせば多くの素敵うそこなシナリオが誕生するわ」

鱗うろこに覆われた拳をグツと握りしめた美衣子は、既に「にわか」ゲームクリエイターモードの脳内お花畑満開寸前である。

美衣子の「改造」宣言に結と瑠奈も「イエス！マイロード！」と叫んで歓声を挙げるのだった。

三姉妹の「恋愛無双」ゲームソフト「改造」は夜明けまで続いた。

翌日早朝—————

火星協力機構の研究室に籠こもって徹夜でマルス文明のスーパーテクノロジーについて分析していた琴乃羽ことのはがNEWイワフネハウスに帰宅した。

「ふう。面白い技術がたくさん有って面白すぎるけど頭がパンクしちゃうだわ」

ゲンナリとした独り言を呟きながら共同のダイニングルームで朝番の宮内庁料理人が作った朝食を一人で摂っていた。

目覚まし代わりに食後の紅茶を飲みながら共同ダイニングルームにあるテレビでニュースを視ていた琴乃羽はテレビ近くのビデオデッキにゲームソフトが置かれているのに気づいた。

ゲームソフトのパッケージには「恋愛無双 く参く」と武骨な筆文字がプリントアウトされたラベルが貼られていた。

「あれ？恋愛無双はこの前初回限定販売予告がされていたような？それが一気に三作目？」

秋葉原のサブカルチャーに造詣が深い琴乃羽は恋愛無双の販売事前告知を当然の事ながら知っていた。しかし、初回販売時から一気に三作目まで連結販売されるとは知らなかった、と「誤解」した。

徹夜明けでいつでも寝落ちしそうな琴乃羽だったが、タイトルに惹かれて少しだけ、冒頭のチュートリアルだけプレイしようとビデオデッキ脇のゲーム機にソフトをセットするのだった。

いかにもルネサンス的な音楽のしらべとともにオープニングムービーが始まり、桜で満開となった聖・アトランティス高校の校門でアルマーニ製の真新しい制服に身を包んだ一人の高校生が桜に囲まれた校舎を見上げていた。

「今日からここで新しい高校生活が始まるのかあ。どんな出会いがあるのかたのしみだなあ。友達たくさんできるといいな」

校舎を見上げながらお上りさんのように校門を過ぎた高校生の耳に後ろからパタパタと駆けてくる音が聞こえた。

やがてその足音はどんどん近づき――

高校生の背中にドン！とぶつかってしまふ。

「うわっ！」

「ぎゃっ！」

二人とも地面に尻餅をつく。

そこで選択肢が画面に表示された。

(主人公を選択してください)

1. ぶつかってきた女の子「ヒカリ」
2. ぶつけられた男の子「ミツル」
3. 校門で生活指導をしていた風紀委員の「ジャンヌ」
4. 風紀委員と一緒にいた生活指導の女性教師「マチコ」
5. 校舎の教室から一部始終を見ていた上級生の「リア」
6. 生徒会室から校門を見ていた生徒会長の「イザナミ」
7. 桜の木の手入れをしていた美化委員の「オトヒメ」
8. 運動場で朝練をしていたテニス部部長の「カグヤ」
9. 校門前にある電柱の陰から男子高校生を見つめていた家政婦「エツコ」

10. 学校上空を通り過ぎた戦闘機パイロットの「サクヤ」

11. 学校近くに住むOLで――

「主人公選択、長いわっ！」

琴乃羽が思わず突っ込んだ。

「おまけに選択肢の後のほう高校生関係ないよね!？」

「何故か知っている名前が出てくるのはデジャブ?」

一人突っ込みを入れながらも隠れゲーマーの性か、琴乃羽は徹夜明けで疲労した身体に鞭打って

「恋愛無双く参く」にのめり込んでいった。

そして、昼――

「くわーっ！テニス部の上級生でもフラグが立たないっ！」

琴乃羽が共同ダイニングで頭を抱えていた。

正統派恋愛シミュレーションの王道に則ってヒロインを片端からプレイしたが、男子高校生のハートを射止めることが出来ないのだ。

「もしかして研究室に籠っているから女子力低下したのかしら?私」

校門でぶつかった女の子「ヒカリ」は尻餅をついたショックで腰を痛めて入院し、治療のために北欧で療養することになり転校してしま

い、風紀委員の「ジャンヌ」はあまりに厳しい取り締まりで同級生からの反感を買って孤立してしまい便所飯の日々を過ごす日陰キャラの

ままであり、

女性教師「マチコ」は男子高校生に果敢にアプローチしたが高校生の両親に見つかって教頭先生に通報され、ほかの高校に転勤してしま

い、
上級生の「リア」は男子高校生との初デートに行ったものの、デート先の遊園地でネズミの着ぐるみをきたイケメンにナンパされて別ルートを延々とループし、

生徒会長の「イザナミ」は生徒会長の仕事に追われて男子高校生と接点すらなく、

美化委員の「オトヒメ」は尻餅をついた男子高校生が危うく桜の木にぶつかりそうになったことで大切な桜の木を危険にさらした「敵」として憎悪を持って敵対してしまい、

テニス部長の「カグヤ」はデートの後にレストランで食事をした際、ぶどうジュースと間違つてワインを飲んだところをたまたま隣のテーブルに居た女性教師「マチコ」に見つかつて停学処分を受け、

「私は初恋も経験せずには高校生活を終えるのだった。――BAD EN D――」

「あほかーっ！んなわけあるかーっ！」

琴乃羽は自身のキャラも忘れて地団駄じだんだを踏んで悔しが

る。
「しょうがない。家政婦「エツコ」でいくか。嫌な予感しかないけど」

毎日電柱の陰から男子高校生「ミツル」を見続けながら想いを募つらせていく家政婦「エツコ」(47)独身、高校生の自宅に家事代行サービスで入り込み、

「ちよつと待てやーっ！年齢からどう見てもあり得ないわーっ！犯罪臭しかしないわっ！」

突っ込みどころ満載のストーリー展開にダイニングのテーブルをバンバンと叩く琴乃羽。

「こうなつたら最後の大穴、というかあり得ないけど戦闘機パイロット「サクヤ」に全てをかけるわっ！」

まるで篠沢しのさわ教授に全額を賭かけるクイズ番組の挑戦者になつたよ

うな悲壮な気持ちで「サクヤ」ルートを選択する。

地面に尻餅をついた男子高校生「ミツル」が空を見上げると空高く飛行機雲を引いて飛ぶ戦闘機がミツルの眼に入った。

「かっ！いいなあ」

ミツルは羨望せんぼうのまなざしで眼を細めていつまでも飛行機雲を引いて飛び去る戦闘機を見つめるのだった。

ピコーン——（フラグが立ちました）

「ミリオタかよっ！」

ダイニングに響き渡る琴乃羽の絶叫は地下の研究室で満足げに眠る三姉妹の耳に届くことは無かった。

美鶴の絶叫を聞いた入居人の岬や大月家のひかりが駆けつけたが、二人が目にしたのはダイニングテーブルに突っ伏して寝ている琴乃羽と、彼女の傍らかたわに有ったゲームソフトだった。

「!？」

二人がゲームソフトを取ったことで、二人にとっての悪夢の刻ときが開幕した。

3 時間後——

「くわーっ!!」

自称乙女の悲鳴がNEWイワフネハウスに響き渡るのだった。

その日の晩御飯は大月とひかりの二人きりでゆっくりと楽しむことが出来た。

横浜市沖の深海お仕置キルームから泣き疲れた顔の美衣子達三姉妹が戻ったのはその日の夜遅くになった。

——続く——

その日夕刻、横浜地方気象台は3日連続で横浜市沖を震源とするマグニチュード3の地震を検知した。

流星に地上にも揺れが伝わり、横浜市で震度2を記録した。

直ちに首相官邸が官房長官談話を発表し、この地震はマルス文明の日本列島維持システムによる地殻ちかくバランス調整の揺れであり、巨大地震などにつながる可能性は無いとコメントした。

明日へ

2021年11月25日午前3時 「火星衛星軌道上 衛星ダイモス 航空宇宙自衛隊・火星協力機構宇宙軍 ダイモス宇宙基地」
「南半球ヘラス大陸のワームから発射された飛翔体^{ひしょうたい}1基確認！」
「衛星フォボスのユーロピア基地も同様の飛翔体を捕捉！」
「弾道解析！」

名取大佐が指示する。

「弾道解析結果、落着予想地点、人類都市『ボレアリフ』！」
「衛星軌道上で撃破する。迎撃機^{スクランブル}！」

ダイモス宇宙基地からスクランブル発進したユニオンシティ宇宙軍のF45スターファイター戦闘機が飛翔体^{ひしょうたい}に向けて迎撃ミサイルを発射した。

ユニオンシティ軍のF45宇宙戦闘機は、旧アメリカ合衆国末期時代のUSA宇宙軍で正式採用された機体である。

F15戦闘機をベースとした機体に強力な宇宙用エンジンが2基付いており、最高速度はマッハ4まで可能である。しかし、強力なエンジン故に細かな機動制御は苦手でラグランジュポイントのアンゴルモア艦隊との制宙戦では機動性に優^{まさ}るミグ89戦闘機に多くが撃墜されている。

もともとF45は地球衛星軌道上の軍事衛星や打ち上げられたばかりのロケットを早期に撃破する目的で開発されたものであり、この飛翔体撃破任務には最適と言える。

「飛翔体破壊されました！他に飛翔体は無し」

「念のためフォボス基地のユーロピア軍と連携しながら南半球上空を警戒飛行させる」

今月で10回目となるヘラス大陸からの攻撃に宇宙基地司令官である名取大佐はため息をつく。

「市ヶ谷と永田町に通信を繋^{つな}げ！」

名取はヘラス大陸からの飛翔体破壊を報告した。

2021年11月29日 午前9時 【東京都 千代田区永田町
首相官邸 総合会議室】

― 第三回 地球復興会議 ―

1週間の整理・準備期間を経て地球復興会議が再開された。

地球と火星人類の総力と限られた資源を使って計画をいかに実現するか具体策が示されようとしていた。

「アステロイド採取船団(仮称)は火星から各国宇宙軍艦艇と小惑星での採掘加工を専門に行う大型プラント船と共に火星発進から1年でアステロイドベルトに到着、必要な小惑星確保とピラミッド型への整形加工を行います」

JAXAの天草理事長が説明した。

「月面都市ユニオンシティは、地球低軌道においてアルカリ性中和剤の散布を行うハイパーループ路線と路線のターミナルステーションを衛星起動上で建設、地上では南半球、欧州・北米フロリダ沖をはじめとする各地でメガフロート海上都市建設と並行して、石灰岩と放置された鉄道車両、貨物車両の回収および搬出を月面マルス大型シャトルで行います」

ユニオンシティ代表のソーンダイクが続いて説明した。

「火星からは地球と小惑星帯派遣船団へ必要な物資の補給と火星での人類生存地域の拡大を図ります」

火星協力機構のロイド提督が説明した。

「火星での「人類生存地域拡大とは、南半球へラス大陸の制圧ですね？」

ユーロピア共和国のジャンヌ首相がロイド提督に聞いた。

「はい首相閣下。やはり一時的に人類の大部分は火星と月面都市で暮らすしかないと思われまます」

ロイドはここで言葉を切ると少し考えながら、

「最近ですが、ヘラス大陸から巨大ワームがアルテミア大陸めがけ、ワームが詰まった岩石を打ち上げられる事例が多発しているのです。この際、この脅威を排除すべくヘラス大陸の巨大ワーム殲滅^{せんめつ}作戦を行いたいと思えます」

ロイド提督が答えた。

「我が国の自衛隊も参加します」

濫澤首相が言った。

「地球上で活動する皆さんに注意事項があります」

ジョーンズ中將（シャンバラ攻略の功で中將に復歸）が参加者に呼びかけた。

「海上都市建設予定地域には避難民の他に、軍から脱走した兵士やゲリラが武装して盗賊となっています。封鎖・放置されるアジア・アフリカではそれらがやがて巨大勢力に発展して封鎖を破って、海上都市を襲撃する可能性があります」

「それは、まさに世紀末的 愚行だ」

ケビン首相が顔をしかめた。

「我々は彼らを見捨てざるを得なかった代償を払うことになるのですね？」

岩崎官房長官が言った。

「その面は否定できない。だが、すべてに手を差し伸べることは出来んのだ」

濫澤が言う。

「我々は出来ることを出来る限りやるしかないだろう」

会議参加者の全員が頷いた。

――――

【夜のNHKニュース】

「先程午後7時に地球復興会議が終了しました。まもなく、各国首脳による合同記者会見が行われる模様です。首相官邸から中継でお送りします」

「――首相官邸です。先程内閣官房室から30分後に各国合同発表が行われるとのアナウンスがありました。政府高官の一人は、この10日余りの会議で有史以来初の大規模人類復興プロジェクトが始まるだろうとの見通しを示しています」

11月29日午後7時30分 【首相官邸 合同発表会場】

岩崎官房長官自らピンマイクを付けて司会進行を始めた。

「さる11月20日から開催された地球復興会議は、生き残った人類国家による有史以来初の巨大復興プロジェクトを実施することで全ての国が合意しました。プロジェクトの詳細は現在、各国政府から主要メディア本社へ送信されています。そのため、詳しい説明や記者の皆さまからの細かな技術的質問は省略させて頂きます。それでは、澁澤総理から順次発表いたします」

澁澤が話し始めた

「今回の巨大プロジェクトは大きく分けて3つの地域で行われます。すなわち、大変動後の地球環境対策、火星と木星の間にあるアステロイドベルトからの小惑星運搬、火星南半球への進出、となります。

3つの地域は協力機構加盟国がそれぞれ主導してプロジェクトを進めてまいります。

地球環境は月面国家ユニオンシティ国・ユーロピア共和国、アステロイドベルトは我が国と火星協力機構宇宙軍、火星南半球進出は英国連邦極東が分担してリーダーシップをとります。また、プレアデスマルスアカデミーからも応援の科学者や支援船団がアステロイドに向かっております」

「ソーンダイクです。それでは我が国が主導して行う地球環境対策ですが――」

各国の説明が続いた。

翌日、とある経済ニュースチャンネル。

「甘木経済産業大臣と後白河財務大臣兼外相は、ユニオンシティ国の状況が安定し、火星協力機構の一員として加盟が承認されたとして人類都市ボレアリフ、東京、月面都市ユニオンシティでの外国為替市場の再編を発表しました。以前の極東ドルやルーブルはユニオンシティの通貨単位「月ドル」で交換、回収されることとなりました」

「昨日の日本政府が発表した小惑星運搬を行うプラットフォーム船団建設について、経済産業省と国土交通省が鉄鋼・造船・建設業界に対して入札方式にて参入と出資を呼びかけた結果、幅広い銘柄に買い注文が殺到し、午前の東京株式市場の平均株価は火星転移後の最高値を記

録更新しました。これは1990年代前半のバブル時に並ぶ水準です。同様の株価上昇は月面株式市場でも起こっており、地球復興に対する期待感が――」

と巨大プロジェクト開始の良い影響が早速出始めていた。

総合商社角紅本社役員会議室

「それでは新たな執行役員として西野ひかりを次の株主総会で承認することで異存はありませんね？」

社長の仁志野が役員たちに訊いた。

「西野ひかりはどの分野を担当させるのですか？」

「彼女は常日頃からマルス人と生活している。従ってマルス文明の恩恵を受けやすい宇宙・火星開拓分野になるだろう。念のためだが、彼女がマルス人と近い関係であることは国家機密だ。諸君が墓場にまで持っていつてくれ」

役員たちに否は無かった。

役員会終了後の社長室に大月と西野ひかりが訪ねて来ていた。

「お仕事中にごめんなさい。お祖父ちゃん」

「かまへんよ。大月君もようきてくれたな」

にこやかに似志野が迎えていた。

「ありがとうございます社長」

大月が頭を下げた。

「ほな今度日曜日に二人で家に遊びにおいで。詳しい話はそこでしようか」

「はい。社長。」

「がはは。わしのことはお祖父ちゃんと呼んでもええんやで？」

大月とひかりは苦笑した。

社長室から下の火星流通調査室に戻ると春日がイワフネと待っていた。

「大月さん、西野さんおめでとうございます」

二人が祝福した。

「ありがとう。式には招待するからな」

大月が照れながら二人に感謝した。

「大月さんと西野さんの結婚式はすごい豪華メンバーが揃いそうですね?」

春日の言葉に大月とひかりがげっそりとした顔で笑った。

「場所や招待客とか大変だな」

大月がつぶやく。

「大丈夫ですよあなた。私たちには心強い娘達がいるのですからっ
!」

西野が気持ちを持ち直してニコリと笑う。

「三姉妹の企画だと正直普通では済まないと思うのだけど」

「そんな。今更じゃないですかあ」

「そだな」

「そですよお」

「僕とイワフネさんでとびっきりの火星ホタテを用意しますよ!」

「イワフネさんは頑張りすぎて落ちないようにね」

—————

夜、NEWイワフネハウスの夕食後ダイニングルームにて。

「お父さん、ひかり、任せて。私たちが最高の人生の門出を演出する

わ。—迎賓館(げいひんかん)貸し切りよ」

「当然マスコミは全部呼ぶから交渉は任せて」

「流星雨とか爆発系の演出なら任せろっすよ!」

美衣子・結・瑠奈の三姉妹が斜め上の提案をしてきた。

「気持ちだけ有難く頂くとして、もう一度話合おうな」

「くっ!」

大月とひかりの未来は明るく楽しいものになりそうだった。

運転免許試験場

ーとある昼下がりー【神奈川県 横浜市金沢区金沢八景の海岸近くにある住宅地の路上】

「はい、お嬢さん達運転免許証出して」

渋面をした神奈川県警交通機動隊の隊員が美衣子と結に言った。

「これだけ大丈夫？」

美衣子と結が火星協力機構発行の惑星間運転免許証（大型シャトル含む）をおずおずと差し出した。

交通機動隊員は二人の免許証を見て特異な内容に驚愕きょうがくしたがプロらしく表情を変えず冷静に対応する。

「確かに惑星間運転免許特別1種ですね。実は近隣の住民の方からこちらの円盤？が邪魔で自家用車が通行できないと苦情が来まして・・・」

「あー・・・」

「ここは昔ながらの町並みで道路が狭いので駐車禁止なんですよ。ですから火星転移特別措置法に基づく臨時道路交通法第32条の駐車違反により、この運転免許証はしばらくの間効力を失います」

交通機動隊隊員の説明を聞いた二人はあんどりと口を開けたまま固まっていた。

アダムスキー型連絡艇は警察が手配したレッカー車に繋がれて金沢署に回収されていった。

その日美衣子は結と、秋葉原の自衛隊施設で模擬戦闘に勤いそんでいた（オンラインバトルを楽しんでいたともいう）が、人類都市ボレアリフに出張しているイワフネから生け簀すのブラックマルスシユリンプ（海老）の餌えさやりを頼たのまれているのを思い出し、慌あわてて横浜市金沢区の東京湾に面した生け簀すにアダムスキー

型連絡艇で向かったが、急いでいたあまり海岸近くの路上に連絡艇を放置したまま生け簀すに向かったので近隣住民から自家用車の通行に支障があると警察に通報されてしまったのだ。

金沢区の生け簀すから帰った美衣子と結は正直に大月とひかりに事

情を話し、交通講習を一般ドライバーと共に受けることになった。

講習を終えるまで美衣子と結はアダムスキー型連絡艇や大型シャトル、マリオカートまでもが運転できなくなってしまった。

——講習日——【神奈川県横浜市旭区二俣川 運転免許試験場】
年配の教官が講習室に集まった受講生の顔を見渡すと、

「この講習を受ける皆さんは、残念なことに交通違反をしてしまった人です。これから1時間、初心に立ち帰って交通ルールについて学び直しましょう」

そう言うとプロジェクターを使って交通法規の説明を始め、東映製作の啓蒙ビデオが流された。

——2時間後——

「恐ろしい作品だったわ」

「井戸から少女が這い出てくる映画より怖かったです姉さま」

美衣子と結が顔を蒼ざめさせて講習の感想を大月とひかりに言うのだった。

「実際に事故ってしまってもつと大変な事になるんだよ？」

大月が二人に諭す。

「あのビデオみたいに人間の人生を一瞬で悲惨なものに変えてしまうのよっ。」

ひかりも諭す。

珍しく素直に二人はコクコクと首を縦に振るのだった。

——翌週の日曜日——【神奈川県横浜市旭区二俣川 運転免許試験場】

「・・・ということぞで」

「こんなの作ってみました」

美衣子と結が大月とひかりに「新装開業」した試験場を披露した。

「うーん・・・」

運転免許試験場の建物が3階分ほど「増築」されていた。

美衣子と結は反省したのだろうか？

反省の方向性が違う気がする、と二人は直感的に思った。

「まずは適性検査よ」

美衣子が3階を案内した。

2階から「更に」エスカレーターを昇ると、そこにはプリクラボックスみたいなのルームが3階フロア一面に広がっていた。

「左のボックスから並んで入って下さいね」

初老の試験場係員がにこやかに大月とひかりを誘導する。

ボックスに入ると視力検査用の機械があり、額を機器につけて中を覗き込むような形になっている。

「穴の開いている方角を言うのよ」

結が説明した。

大月が機器に額をつけて中を覗くとおなじみの一部分が欠けた楕円だえんが映し出された。

「えっと、右」

「違うわ、西よ」

「えっ!？」

「方角と言ったら東西南北に決まっているでしょう?」

大月が静かに美衣子にアイアンクローを決めていた。

「あいたたた・・・」

「まじめにやろうね?」

「軽いジョークよ」

大月が再びアイアンクローを決める。

「ちよっ!ごめん・・・なさい」

「運転試験場でふざけてはいけません」

「わかったわ。これでどうかしら?」

斜め上が欠けた楕円が表示された。左右に。

「痛いっ!本当に痛いからっ!」

涙目の美衣子。

「どっちの方角を言えば良いのかな?」

大月がにこやかに訊く。

「左右斜め上よ」

結が答えた。

「右側の楕円の・・・」

大月が覗いている映像には楕円が「二つ」表示されていた。

「まぎらわしいわっ!」

大月は左右の手で美衣子と結にアイアンクローを決めた。

「痛い・・・」

大月の教育的指導により、視力検査の楯円は「一つ」表示とされ、「穴」もひとつだけに戻された。

ちなみに楯円の色がピンクや赤で目がチカチカしたので黒色に戻された。

また、楯円の背景に走行中の道路映像が再現されていたのでそれも削除された。

「次は4階で写真撮影よ」

アイアンクロー 頭 痛から解放された美衣子が気を取り直して二人を案内する。

4階フロアー一面に撮影ボックスが並んでいた。

街中で見かける証明写真用の自動撮影ボックスに似た室内に入ると、画面がハートやラメ仕立てのフレームが出てきた。書き込みが出るようだ。

「ご丁寧に写真例が表示されており、大月とひかりがツーショットで「私達けつつこんします!」と手書きされた写真が表示されていた。たどたどしい平仮名の筆跡から瑠奈ルナが書いたものと推測された。

「プリクラだよね?」

ひかりが美衣子に訊く。

「えっ!」

美衣子と結がひかりから珍しくアイアンクローを受けていた。

「ちなみに写真は二枚 頂戴」

「わかりました」

証明写真は普通の方式に戻された。

印紙売り場は自動券売機方式でICカードが利用出来た。

「ここはいい感じね」

ひかりが感心した。

「ちなみに現金は日本円の他に月ドルつきや極東ポンド・ユーロ、寛永通宝かんえいつうほうや小判に縄文貝殻じょうもんかいがらも使えるわ」

「そこまで凝らなくていいよ」

「つていうか寛永通宝とか貝殻のレートにむしろ興味わが湧わいちゃうから普通に日本円だけにしてね」

「最後は講習室よ」

5階の講習室に案内された。

広大な講習室にはリクライニング式のベットがずらりと並んでいた。

「睡眠学習よ」

「個々人の脳波に合わせた最適な学習システムが提供出来るわ」

大月とひかりが並んでシートに横になってヘルメット型の

ヴァーチャルリアリティ
VR マシンを被る。

「それでは素晴らしい講習ひとときを」

結の声が聞こえ、大月の意識が跳んだ。

大月は長崎県にある英国連邦極東の首都ダウニングタウンの街中をイタリア製の愛車「ポルシュ」で走っていた。

助手席にはもちろんひかりも一緒だ。

「ここが長崎県なんて信じられないですねえ」

英国的な町並みを観みながらひかりが感激みしていた。

「これは夢じゃないよ。新婚旅行なんだよ、ひかり」

大月がキザに言う。

「そうよ。新婚旅行よ」

「ハネムーンベビー、期待している」

後部座席から美衣子と結の声が聞こえた・・・

・・・「痛いっ!!」

「だから真面目にやろうね？」

何故か残念そうな顔で大月が美衣子と結にアイアンクローを決めていた。

大月の愛車は日産マーチだった。

「でも」

「ひかりが幸せそうにしているんだけど」

ひかりは幸せそうな顔でまだベットに寝ていた。

大月は流石にひかりを起こすことは、しなかった。

ひかりの「講習」は三時間かかったが、講習を終えたひかりの顔が何故かツヤツヤしていた。

誰も突っ込みを入れなかった。

結局、講習映像は結のツテでNHKと東映が共同制作し、大河ドラマの出演者達が登場するリアリティ溢れる豪華なシミレーション形式となった。

新装オープン？された横浜市の二俣川運転免許試験場で免許の更手続きや講習を受ける神奈川県民が激増したことは言うまでもない。

そして、二俣川で講習を受けたドライバーの事故率は極端に低くなっていった。

後日、美衣子と結は神奈川県交通安全協会から感謝状を贈られることになるのだった。

イワフネファン ド

2021年11月27日【神奈川県横浜市金沢区沖の東京湾】

「春日さん、この海老を見て欲しいのですが・・・うわっ！」

イワフネがまたしても生け簀すにドボンとダイブしてしまう。

「イワフネさん・・・またですか」

春日がイワフネに手を差し伸べて生け簀の上に這はい上がるのを手伝う。

「すみません。うっかり足元が・・・」

海水を滴したたらせながらイワフネが恐縮する。スーツの胸元から生け簀すの車エビがびよこんと飛び出して生け簀に戻る。

「いよいよ本格的に考えないといけませんね」

春日がつぶやいた。

その日の夕食後【NEWイワフネハウス1階 共用ダイニングルーム】

「それでは今からイワフネさん転落防止会議を始めます」

春日が開始を宣言する。

メンバーは春日の他に、大月とひかり、東山、岬教授、琴乃羽教授、美衣子、結、瑠奈である。

当事者のイワフネは海水でべとべとになった身体を地下の自家温泉浴場で流している最中である。

「靴くつが滑りやすいということとは？」

岬教授が指摘した。

「それはないですねえ。アルマーニ社製の滑り止め付きの特注品ですから」

ひかりが答える。

「もしかしたら身体を張ったギャグとか？よく芸人さんが「絶対押すなよっ！」とか言っておきながら自分から熱湯に落ちるやつみたいな？」

東山がサラリーマンの性質を探求するイワフネを思って言ってみる。

「それはない」

結と美衣子が即答した。

「イワフネは月面ラボ所属の調査隊長だったからとても責任感が強い。自分からわざとミスはしない」

長年 尖山 基地でイワフネを見てきた結が言った。美衣子も頷いている。

「では生け簀の構造的な問題？」

琴乃羽が言った。

「ごくごく一般的な材料で生け簀は作られていますよ。私は落ちないし、もちろん養殖業者の方も落ちません」

春日が答える。

「春日はなんだと思う？ 気になることがあるか？」

大月が訊いた。

「習性ではないかと」

春日が答えた。

「習性？」

「もしかしたら爬虫類は水を見たら違和感なく水中にいる感覚で行動してしまうのではないかと」

「だから私達温泉好きなのかな？」

「それは違うでしょう」

「はっ?! 私と結の温泉好きも実は本来の習性!？」

「単なる温泉マニアなだけじゃないっすかね？」

「よろしい瑠奈、表に出なさい」

「なんでっ!？」

うーん。一部を除いたダイニングルームに集まった面々が首を捻(ひね)る。

「おや? 皆さんお揃いで。何かイベントの相談ですか？」

バスローブを着たイワフネがフルーツ牛乳の瓶を片手に持ちながら現れた。

「うーん」

大月は言おうかどうか悩んでいたが、

「イワフネ叔父おじさんが生け簀に落ちないための対策会議つす！」

元氣よく瑠奈が宣言した。

「あはは・・・」

イワフネが苦笑した。

「私もよくわからないんですよ。足元は常に注意していますし、養殖ようしよくの勉強ですからね。ふざけて生け簀に落ちる暇ひまなどありません」

イワフネが言った。

「でも・・・気が付いたら生け簀の中で水中の生き物と戯たわむれる自分に喜びを感じてしまうんです！」

うっとりとした目つきでイワフネが語りだす。

「海の中は神秘の世界です。海底で幻想的にゆらゆら揺れる昆布やワカメ、元氣に泳ぎ回るハマチや火星車エビ、海は生命のゆりかごとは良く言ったものです！」

一同ドン引きする。

「イワフネさんは海女あまに向いているのでは？」

岬教授がボソツと呟つぶやいた。

翌日以降、イワフネは春日と生け簀を訪れる際は必ず海岸でウエツトスーツに着替え、生け簀の外側の海中から生け簀の中を見る事になった。

後日、イワフネが会社の同僚たちと品川の屋形船やかたぶねで歓送迎会をした際、自ら海中にダイブしながら海老の天ぷらを味わっていたのを見た同僚が後輩社員に、

「イワフネさんを見る。火星人でさえ、やるときはやるんだぞ！」「イワフネさんばねえ!!」

と方向性の違う評価をされていた。

そんなイワフネの習性に目を付けた美衣子と瑠奈がイワフネを神奈川県漁業協同組合に勧誘し、「素潜りの達人」として漁協の一員となったのはもう少し未来の話である。

—————

2021年11月30日午前10時【神奈川県横浜市神奈川区 N
EWイワフネハウス 大月家】

大月家のリビングでソファアに座る大月とひかりの前で三姉妹が自主的に正座をしていた。

「話を聴こうか？」

素晴らしい笑顔で大月が三姉妹に勧告した。となりに座るひかりも物凄^{ものすじ}い笑顔である。二人ともこめかみに青筋を立てていたが。

「なんで大月家の資産が差し押さえられているのかしら？」

財務省から内容証明郵便で送られてきた差し押さえ通知書を手にしたひかりの問いに、

「固定資産税」

美衣子が言った。

「尖山基地、ダイモス宇宙基地、ヘルシティ地下研究区画、ユニオンシティ研究区画、各種シャトルと連絡艇が対象」

「合計たった年間7000億円くらいよ」

「楽勝っすね」

三姉妹が答える。

「よし。じゃあ美衣子達のお小遣いから引いていい？何十万年分分かるらないけど」

「私達が間違っていました」

三姉妹の正座が見事な土下座に変化した。

「取りあえずシドニア地区のヘルシティから全ターミネイター兵を連れてきて霞が関に直訴^{じきそ}しましょう」

「わかった。ドアを使って連れてくる」

「お上と戦争ね」

「ちよつと待ったー！」

大月が慌ててひかりと美衣子を止めにかかる。

「東山を呼んで話を聴いてからにしようね」

大月はお腹が痛くなっていた。

——同日午前11時時頃〔神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス 大月家〕

大月家のリビングでソファアに座る大月とひかりと三姉妹の前で東山が自主的に正座をしていた。

「話を聴こうか？」

素晴らしい笑顔で大月が東山に勧告した。となりに座るひかりも物凄い笑顔である。二人の額に青筋が浮き上がっているのは言うまでもない。

三姉妹はおやつのかぼちやプリンを食べていた。

「発端は二俣川の運転免許試験場の券売機です」

痛むお腹をさすりながら東山が言った。

自主的に三姉妹がプリン片手に東山のポジションへ移動して正座する。

「券売機に問題が？」

ひかりの問いに、

「券売機に問題があるのでは無くて、使える貨幣（かへい）に小判とか貝殻とかあったじゃないですか」

東山が説明を始めた。

「口コミで一万円札を入れたら「おつり」で縄文貝殻や慶長小判が出たと話題に」

「レートの問題は置いておくとして、単に物珍しいだけじゃないですか」

「たまたま神奈川県民の文科省職員が免許更新で二俣川の試験場に行つて、このような文化財がおつりとして使われるのはいかなものかと」

「ちよつと霞が関行つてくる」

「お上とバトルよ（っす！）」

大月とひかりが三姉妹の手を引いてシドニア地区に向かおうとする。

「落ち着いてくださいっ！問題はそこじゃないんです」

「すでに問題じゃん」

「文化財の話から、三姉妹さんの乗り物や設備が資産ではないかとの話になって財務省が・・・」

「やっぱり霞が関に行こう！」

「いざ霞が関よ（っす！）」

大月とひかりが三姉妹の手を引いて「どこへもドア」をくぐろうとする。

「お願い！待ってください！」

二人の脚に器用にしがみつくと東山だった。

「結局、資産の話は官邸に持ち込まれて首相案件になったんです」

「永田町も殲滅先に追加ね」

「霞が関最後の日よ（っすー）」

大月とひかりが三姉妹の手を引いて「どこへもドア」をくぐろうとする。

「待って！」

二人の脚に抱き着くようにしがみつくと東山。

「そこで岩崎官房長官が言ったんです「今までの働きで十分ではないかと」

「もう少し詳しく」

大月家がソファーに戻る。

三姉妹は正座に戻った。

「そこで主計局と会計検査院、国税庁が協議を行いました」

「それで？」

東山がごくりと唾を飲み込む。

「やはり7000億円程不足分が」

「美衣子。ダイモス基地永田町に落として」

「やるわ」

「月も移動させるわ」

「月は勘弁っす！」

「ごめんなさい政府が悪いから説得するから助けてっ！」

プライドの高い東山が土下座ガチ泣きしてくる。

「東山の説得で効果があるのか？」

大月が疑問を口にする。

「そこでご相談です。三姉妹さんの資産を使う政府に使用料を請求してください」

「使用料はいくら？」

「累計3兆円くらいで十分かと」

「二」「乗った（つす！）」「三」

大月家の全員が賛同した。

――同日正午頃【お昼のNHKニュース】

「政府がマルスアカデミー所有のシャトルや施設について、火星転移直後から使用料を支払っていないことが会計検査院の調べで明らかになりました。未払いの使用料は3兆円に達する模様です。日本政府の他にも列島各国とユニオンシティ国も先の欧米救出作戦時のシャトルや月面基地研究施設の利用料が未払いになっている模様です」

ニユースを視ながら首相官邸で昼食の盛りかけ蕎麦をすすついていた岩崎官房長官は思わず口から蕎麦がピユツと飛び出しそうになった。

「財務大臣に連絡を。あと、東山君を直ちに連れてきなさい」

盛りかけそばを汁まで堪能した岩崎が内調（内閣調査室）の担当者に指示した。

――同日午後2時【東京都千代田区永田町 首相官邸 総理大臣執務室】

応接セットに大月とひかり、三姉妹が座り、お茶うけに出された羊羹を食べていた。

東山はソファアの背後に立つ。

大月たちの向かい側には澁澤総理の他に、岩崎官房長官と後白河財務大臣兼外務大臣が座っていた。

「差し押さえの件はこちらの計算ミスですいませんでした」

冷や汗をハンカチで拭きながら後白河大臣が謝罪した。

「ですから、使用料の件はなかったことに・・・」

「美衣子ダイモス基地はどれくらいでここに落ちる？」

「3分もあれば十分よ」

「ごめんなさい年間7000億500万円で固定資産税と相殺して500万円大月さんの口座に振り込みます！」

「それくらいで許してあげるわ」

美衣子が言った。

後白河大臣が手続きを急いで進めるために退席した。

「やたー！お小遣いアップっす！」

瑠奈がバンザイする。結も拳を握りしめて勝利の感触を味わっていた。

「それとは別に」相談が」

澁澤総理が話す。

「やつと本題ですか」

大月が疲れた顔で言った。そうでもしないと官邸に一般人を呼べないのだろうか？

「まわりくどいやり方だったのは謝罪します。火星協力機構が人類の統一政府となりつつある現在、大月家の皆さんへの処遇が加盟各国政府の官僚たちから問題視されつつあるのです。軍は好意的なのがね」

岩崎官房長官が説明した。

「えっ!？」

大月達には初耳だった。

「すなわち、大月家の三姉妹を日本国民としてみるのか、火星人としてマルスアカデミーから「承継、贈与された」人類共有財産として見るのか？水面下で外務省が日本国民であると必死に対抗していますが、決め手に欠けるのです」

澁澤が言った。

「美衣子達はモノじゃありませんよ」

大月が無然として言った。

「日本政府とケビンやジャンヌの方も大月さんと同じ考えです。ですが、それ以外の最近機構に登用された地球避難民が……」

澁澤が苦しそうに言った。

「美衣子の日本列島環境維持システムの事は皆さんご存知ですよね？」

大月が確認する。

「ゼイエスさんの話を聴いた各国の科学者達から話は伝わっている筈」

です」

澁澤が答えた。

「日本列島の物理的な支配権を握っているのは美衣子と結、瑠奈です。全国に散らばっている800万の端末も彼女たちに従っています」

大月が言った。

「しかしシステムの稼働には日本国民大多数の意思が必要になりますよね？」

岩崎が言う。

「システムは自律進化型ですから必ずしも将来もそうだとは限らない」

大月が決めつけに対抗する。

「そうでしようなあ」

澁澤と岩崎が思案する。

「ここはひとつ、日本国とその国民の立場に戻ってお互い考えるべきでしょうね」

岩崎が言った。

「では、私たち日本人と美衣子達が独自に手柄を立てて人類に貢献するのはどうでしょう？」

ひかりが提案した。

「火星協力機構の力を借りずに、大月家と日本企業で火星開拓と独自の地球復興策を実行しましょう。「私達」大月家と日本企業、例えば角紅と合弁で火星海洋資源開発と地球の二酸化炭素問題の解決に取り組むのはいかがでしょう？協力機構の方針とはダブらない筈です」

「悪くない案だ」

澁澤が呟く。

「ええ。開発資金は美衣子さん達へ支払う莫大な使用料をファンドとして予算に計上することで税務面でも、対外的にも問題ないでしょう」

岩崎が具体的に思考して同意した。

こうして「大月家」と日本政府との間でいくつかの非公式協定が結ばれることになった。

火星海洋ファンド（別名イワフネファンドⅡ大月家のNEWイワフネハウスから引用）の立ち上げと地球二酸化炭素削減事業の官民合同プロジェクトである。

日本国と大月家の新たな歴史が始まろうとしていた。

起業

火星協力機構の前身は2019年に東京都市ヶ谷の防衛省敷地内で発生した巨大ワームとの交戦で撃破した巨大ワームの生態研究を目的として、日本と英国連邦極東が合同で設立した火星生物研究所である。

その後、2020年年初におけるアルテミア大陸上陸作戦においては火星生物との戦いでアドバイザーとして活躍、人類都市ボレアリの拡大発展と当時の極東アメリカ合衆国、極東ロシア連邦の加盟により組織の役割が増加したため、火星生物研究所は発展解消され、火星協力機構となったのである。

巨大ワームとの戦いや、アースガルディアとの戦争では決して表舞台に出てこなかったが、火星生物への対抗策研究、列島各国部隊への後方支援業務や避難民の受け入れ、地球海洋上メガフロート都市の管理運営等活動内容は多岐にわたり、従事する職員も各国の文官派遣では間に合わず、避難民を「現地採用」して対応したため、組織規模では日本政府に次ぐ官僚の多さとなった。

財務省の幹部らは多国籍職員の多い協力機構の事を「新国連」等と表現するほどに肥大化した組織となった。

平時に組織が肥大化して発生する問題は、官僚組織硬直化による情報伝達速度の低下、組織の複雑化に伴う意思決定の遅延である。

大月家のような、マルス文明と日常的に共存している特殊な存在は、協力機構の官僚から見れば見習うべき存在ではなく、単なる異物に過ぎなかった。

大月家Ⅱマルス文明から数々の高度技術や乗り物・設備利用の便宜をただ与えられるだけの協力機構官僚達は、それらの便宜を自らに對する「奉仕」と無意識のうちに錯覚して傲慢な姿勢に出ることが多くなった。

大月家の人類に対する安易な協力姿勢が拍車をかけたとも言えるが、大月家は善意で異常事態の改善に努めただけであり、見返りを決して求めなかった。

このような状況が火星協力機構の官僚達に、「大月家が機構に奉仕するのは当然」との誤った認識を助長させたのは当然の成り行きである。

2021年11月某日【NEWイワフネハウス 地下研究室（美衣子）】

「だめよ。惑星間国際機関なんだから今月分のシャトル利用料はきちんと払いなさい。そうしないとシャトルは出さないわ」

美衣子がモニター先の相手に通告していた。

「っ！しかし、地球上の難民はまだ危険な地上に数えられないほど居るんです！一刻も早く救出しないと！」

「救出した後の物資は誰が供給するの？」

「ユニオンシティの需給はひっ迫ぼくしています。一刻も早くボレアリフ大陸の小麦を収穫して大型シャトルで輸送しないと難民と共倒れになってしまいます」

火星協力機構の難民高等弁務官事務所の担当者が美衣子にとにかく頼み込もうとする。

「仕方ないわ。物納ぶつのおうで手を打ちましょう」

美衣子が提案した。

「物納？火星協力機構の資産と、ですか？」

「そうよ。宇宙軍の戦闘艦でも良いのよ？」

「そこまでいくと私の権限では・・・」

「なら私もシャトルの所有者として貸し出しを認めるわけにいかないわ」

美衣子は強気だった。

あの準備の費用から差し引いたら今月のお小遣こづいが残り少ないのだ。これではマクドナルドのイワシパイバーガーが食べれなくなってしまうのだ。稼がねばならなかった。

ー隣の研究室でもー

「今月はスケジュールが埋まっているの。神奈川区から外には出れないわ。ええ、もう少し弾はずんでもらわないと番組のロケはキャンセルさせてもらおうわ」

結が芸能プロダクションの社長にギャラの増額をふっかけていた。あの準備の費用を差し引いた残りの蓄えで、今月は攻略参加者をより効率的に撃退するため、「風雲ムスビ城」の防御設備一式を更新すると手持ちのお金がほとんどない結だった。

「さらに隣の研究室では―

「・・・zzz」

小学校から下校途中にコンビニニコロッケの買い食いを重ねて金欠な瑠奈は、夜中に金沢区の海に出てアナゴ漁で一儲けすべく体力の温存を図るため昼寝に忙しかった。もちろんあの費用も出している。

宿題は同級生の天草 華子と名取 優美子に丸投げしていた。対価は瑠奈が釣り上げるアナゴのかば焼きである。同級生の家庭では「高級食材」として珍重されているらしかった。

夜、就寝前の夫婦の部屋（仮）で大月とひかりが向かい合って相談していた。

「最近三姉妹が「がめつい」と。

「東山を通じて協力機構から泣きつかれたよ。シャトルぐらい貸してやれって」

大月がぼやいた。

「私は最近瑠奈ちゃんがアナゴのかば焼きばかりせがんできて・・・」
「結もレギュラー番組に出るのを渋っているらしい。NHKの報道局長が何とかしてくれと言ってきたよ」

原因はなんだろう？

二人は首を捻るのだった。

翌日、理由が判明した。

大月とひかりは入社するなり社長室に呼び出された。

「大月君！最近あの子たちに満足なお菓子も食べさせていないとはどういうことなんやー！」

ひかりの祖父であり、社長の仁志野が激怒していた。

「そんなことはないわよおじいちゃんー！」

ひかりがなだめる。

「嘘ついたらアカンで！三姉妹の嬢ちゃんたちが昨日の晩にワシのう

ちまで来て「最近お菓子が食べられない」と泣きついてきたんや！」「ええーっ!!」

大月とひかりは頭を抱えた。

「そんな甲斐性のない男に孫を嫁になぞ出さへんで！」

仁志野が大月にダメ出しをする。

「お小遣いは毎月一人2万円渡していますよ？ちなみに私も2万円ひかりから貰って残りの給料は管理してもらっています」

大月が正直に申告する。

「むう。お嬢ちゃんたちに月二万は子供として結構な額なんとちゃうか・・・」

仁志野が唸る。

「ちゃんと三人の通帳に振り込んでいますよ？」

大月がタブレット端末で過去三か月間、大月の口座から三人への振り込み履歴を似志野に見せた。

「嘘は言ってへんな」

「当然です。お義父さんに嘘は言えませんよ」

思わず大月は言ってしまう、横でひかりが赤くなってデレていた。「でも満君。どうして三姉妹はお小遣いを使い果たしたんやろか？」

似志野が不思議そうに言った。

「おそろくー」

ひかりが三姉妹の行動をかなりの確に推測して似志野に説明した。

「それだ（や）！」

大月と似志野が納得した。

「さすがひかりが面倒を見るだけあってフリーダムなお嬢ちゃん達やな」

似志野がため息をつく。

「そろそろ手綱を締める時でしょうか？」

大月が似志野に教育方針のアドバイスを乞う。

「いや。そもそも人間社会での節制や自重を理解していなければ同じことの繰り返しになるやろな」

似志野が言った。

「ここはトライ&エラーでしようか」

「それが満君達にとって自然やと思うんやけどな」

「そやなあ」

ひかりが納得した。

「ところで満君。わしのところにもお嬢ちゃんたちの事で国ともめてるちゆう話が聞こえてくるんやけど、その辺相談に乗るで？」

「おおきにお祖父ちゃん」「ありがとうございます。お義父さん」

大月とひかりが徐々に要求を強める火星協力機構の官僚的対応に日本政府と共に苦慮し、秘かに独自の打開策を進めることで首相官邸と合意していることを説明した。

「そうやったんか」

似志野は合点^{がてん}がいったというように頷いた。

「日本が生き残るために作り上げた組織やけど、今はいろんな国と人種が入り混じって組織が巨大化しすぎや。いずれ、ほかの面でも面倒ごとが起こりそうやな」

「私は美衣子達を守るために、ひかりさんが政府に提案した独自策に注力したいと思っています。ですから、内閣官房への出向を取り消していただき、社内起業させていただきたくお願い申し上げます」

大月とひかりが似志野に頭を下げた。

「わかった。好きにしてええよ」

似志野が了承した。

「ひかりはどないするんや？一応今度の株主総会で役員に推薦するけどやめとくか？」

「役員は引き受けさせていただきたいと思っています。そのうえで大月さんの事業をサポートしたいと思います」

「わかった。ひかりは満君の社内起業担当執行役員にしとこか」

「おおきにお祖父ちゃん」

「火星に転移してから、なんだかんだと角^{うち}紅は澁澤さんとの取引が増えて儲けさせてもろてるからな。少しやけど、手助けするで？」

「ありがとうございます、社長」

大月が頭を下げる。

「ええ男になってきたな。きばるんやで？」

「はい」

「それと式の方も任せてもらおうか？」

「はい？」

「これから起業で忙しくなるのに式の準備なんかできへんで？ワシがお嬢ちゃんたちを暴走せんように宥めながら使わせてもらおうで」

「お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」

ひかりと大月がそろって頭を下げた。

2021年12月24日、大月満は総合商社角紅社内に海洋産業商社「ミツル商事」を起業した。

社員に春日、イワフネ、岬、琴乃羽を採用した。ちなみに岬と琴乃羽は大月自らヘッドハンティングした。ダメもとでアタックしたら二つ返事でOKをもらえた。彼女達も協力機構の硬直性に薄々気付いて自由な研究活動がしたかったらしい。

大月は岬渚紗みづなぎさの海洋生物研究、琴乃羽美鶴ことのはみつるのマルス文明応用研究が事業として成功すると確信していたのでそれらの研究推進を加速して欲しかったのだ。

ちなみに美衣子、結、瑠奈をパートタイマーとして雇用することになり、大月家内での小遣い制を廃止した。

社長になった大月はひかりのバックアップのもと、連日角紅の人脈を生かして取引先開拓に自ら奔走ほんそうした。

そして最初の事業を同業者とのコンペ合戦の末、経済産業省から受注した。この事業では政府が三姉妹の資産利用料の振込先として設立した「イワフネファンド」投資案件第一号として資金が出ることになった。

事業とは、「日本列島太平洋側の火星海洋上」における自給自足型メガフロート都市の建設と管理運営である。

50歳直前の大月は初めて自ら立ち上げた事業に挑戦することになったのである。

こうして2021年が過ぎようとしていた。

教育者と保護者

皆さんご機嫌いかがかしら。都内の小学校で教師を務める真知子と申します。

わたくしは今、教師生活25年で最大の問題児と巡り会っています。

事の始まりは夫の太郎が、総理大臣やっていますが

「火星人の優秀な女の子がいるのだが、人間社会での常識を知らんだ。このままでは日本国と火星文明の關係に支障を及ぼしかねんだ。何とか真知子の手で真人間にしてもらえないだろうか？」

と懇願されたからです。

そして、彼女——瑠奈さんと言いますが、編入当日に校長室で出会った彼女の第一印象は清楚な長い黒髪が印象的な淑女、だと思えました。

校長先生の有難いお言葉にも彼女はお淑やかに黙って俯いているだけでした。

心配した校長先生が、

「瑠奈さん？大丈夫ですか？緊張しているのですか？」

と優しくお声をかけられても、

「だいじょうぶ・・・っ・・・」

とか細い声で答えていました。

最後の方は緊張のあまり舌を噛んでしまったのででしょうか？

教室に向かう途中、私は瑠奈さんに言いました。

「瑠奈さん。ここはお互いを信じて助け合う学び舎なのですよ？遠慮せずに言いたいことは言って良いのよ？」

と言ってしまった。

今でも思います。あの言葉は失敗だったのではないかと。いえ、失敗でした。

彼女は廊下で立ち止まると大きな声で

「しょんべんいきてーっー」と叫んでいました。

何てはしたくない言葉でしょう！

私は驚いてその場で立ち尽くしてしまいました。

瑠奈さんは廊下を全速力で走って職員用の男子トイレに駆け込んでいきました。

何と言うことでしょうか。廊下をはしたなく走るなんてっ！

私の教育者魂がふつつつと闘志を掻き立てて来ます。

よろしい、瑠奈さん戦争です。

その後も瑠奈さんの奇行は続きます。

自己紹介の時は

「大月瑠奈っすーみなさんよろでーすっ！ブイっ！」

教え子の皆さんが唾然としたお顔をしていたのが忘れられません。

国語の授業では、昔話の朗読は真面目に読まずにその場でお話を作り変えてしまうのです。

いくらわたくしが注意しても、

「これが本当の話っすからー！」

と一歩も譲ってくれません。特にかぐや姫に関しては頑固でした。

何でも、

「瑠奈のアイデンティティに係わるっす！」

と小難しいことを言っております。

工作の授業はみんなで粘土細工をして想像力を育くむのですが、美衣子さんはご自宅から粘土を持参してこね始めると、どこから取り出したのか、ろくろを回し始めました。

水滴交じりの粘土が周りに飛び散ります。いけません！人に迷惑をかけてはいけません。

私の注意に耳を傾けてくれた瑠奈さんはろくろを止めると、おもむろに粘土細工をつかむと運動場の片隅にある焼却炉に放り込んでしまいました！

私の注意の仕方が強すぎたのでしょうか？瑠奈さんは無言でじつと焼却炉の前で立ち尽くしています。

「真知子先生」

突然瑠奈さんが私の方を向いて真剣な顔でこう言ったのです。

「窯の温度は何度でしょうか？」

瑠奈さん。ここは焼却炉です。温度はわかりませんが、ここで焼き物は出来ませんよ？

理科の時間ではみんなに同じ材料を配ったはずなのに、何故か瑠奈さんの班だけは不思議な物質ばかりが出来てしまいました。

この前は金のインゴットが出来てしまいました。

瑠奈さん、今は理科の授業中ですよ？

錬金術は放課後に私の家で沢山披露してくださいね？絶対ですよっ!!

英語や算数の授業は私がどんなにチョークを飛ばして気を引こうとしても眠りの世界から起きてはくれません。私の授業はつまらないのかしら？

瑠奈さんと仲良くなった天草理事長の娘さんに聞くと、瑠奈さんは夜中は海に出て漁をしていると教えてくれました。だから日中は眠いのかしら？

瑠奈さん、そんなに食べ物に困る生活なのかしら？私は心配になってご両親を学校に呼び出しました。

瑠奈さんのお父さんは40代後半で総合商社に勤める会社員、お母さんは20代後半と若く美人さんでお父さんと同じ職場だそうです。お二人とも瑠奈さんの事を大変可愛がっているようでした。

食事も三食炊飯器が空？になるまでお代わりしているようです。ではどうして夜中に漁師になるのでしょうか？

「社会勉強です」「働かざる者食うべからずです」

なんて厳しいご両親でしょう！

そしてお二人は私に深く頭を下げて

「いつも娘がご迷惑ばかりかけて本当に申し訳ございません」

と気の毒になるくらい恐縮して謝罪しながらお帰りになりました。良かったらどうぞと、車海老の干物が詰まった箱を置いていかれました。

私と主人の好物が海老だどこで聞いてきたのでしょうか？

さすが商社マンですね。

大切なわが子にもかかわらず、生きていくためには夜中だろうと海

に出して働かせる。

私は今まで教育者として温い指導しかしていなかったかもしれない。

深く反省しましょう。

私は真知子。

教師生活25年。

今日も可愛い教え子の瑠奈さんに愛の鞭をビシバシ振るわせて頂きたく思います。

もちろん補習で居残りの錬金術は毎日欠かしません!!

教育委員会?

PTA?

児童相談所?

何それ、美味しいの?

それではみなさんごきげんよう。

【東京都大田区 田園調布 角紅社長 似志野清嗣の自宅】

よお! 儲かってまっか?

ワシは今、とつてもめんこい嬢ちゃん達の面倒を見られて幸せなやで。

孫のところで生活していた火星人の三姉妹を孫の挙式までの間、家で預かる事になったんや。

ヒヤッホー!

「お祖父ちゃん! けっこんひろうえんというイベントのプログラムが出来たっす!」

元気な瑠奈ちゃんがトテトテ歩いてワシに手作りの式次第を見せてくれる。

んんっ? 漢字・・・間違ってるやろ・・・

「瑠奈ちゃん? 血痕式ちゃうで、結婚式やで?」

ワシは丁寧に教えるで。東京では厳しいしつけの小学校に通つとるさかい、その反動で家ではボケるんかな?

「ごめんお祖父ちゃん。少し間違えたっす」

少しとちやうで、かなりやで?

血痕式なんて生贄（いけにえ）使う怪しい儀式みたいでおじいちゃんびびるで。

「それと疲労炎つて、確かに大人の行事は疲れるけどなあ、そのまま書いたらアカンがな。披露宴やで」

「お祖父ちゃんばねえ！こんな難しい漢字かけるなんて！」

「披露宴の真実を言い当てた瑠奈ちゃんの方がばねえ！やがな」

「お祖父ちゃん。入刀用のケーキ作ってみた」

む。無表情なトカゲの美衣子ちゃんやな。でもチョコチョコ歩く仕草は萌えトカゲやで？

せやけどなあ。美衣子ちゃんよ。なんでケーキからロウソクみたいにイワシの頭がズボズボ突き出しているんや？

「イワシは魔除け。大月とひかりには是非とも安全に過ごして無事に弟を作って欲しい」

なんてけなげなお嬢ちゃんや。ワシは涙もろいんやで？せやけどなあ……

「うーん……美衣子ちゃん。イワシはないわー」

「えっ！ニシンの方が良いのかしら？それともめで鯛（たい）？」

「取りあえず魚から離れなアカンわ」

「お祖父ちゃん！引き出物の試作品を作ってみた」

美衣子ちゃんに似てキュートな萌えトカゲのお嬢ちゃんが小箱を持ってきたで。

で？んんっ？

「あっ！お祖父ちゃん、そこ開けたら成長促進パウダーが……」

引き出物の箱を開けると白い煙がようさん出てきおった。

「お祖父ちゃんがお爺ちゃんに……って変わらないわね。失敗だわ」

「けほけほっ！洒落しゃれかいなっ！」

「結ちゃん。引き出物はなあ、招待客の皆さんに縁起物を渡すんやで？」

「よくわかった」

ワシの言う事はみんな素直に聞いてくれるのはうれしいねんけどなあ。

行動が跳びぬけて斜め上というか・・・あれやねん。違う世界へいつてもうてんねん。

「お祖父ちゃん。これならどう？一富士二鷹三茄子にちなんでみた」
「なんや？その火の鳥に茄子が生えたキメラは・・・あちちっ！ワシの肩に止まったらアカンがな。」

ワシは似志野 清嗣きよつぐ、ひかりの祖父や。だれかこのお嬢ちゃん達を止めてくれへんか？マジで・・・。

門出

2022年1月15日（大安）午後12時30分【東京都港区赤坂ホテルニューオタニ】

総合商社角紅社内で誕生した大月が社長を務める海洋産業商社「ミツル商事」起業の忙しい合間をぬって、大月とひかりの結婚披露宴が満を持して盛大に行われた。

会場は祖父の似志野にしのが確保し、企画演出は三姉妹が担当するらしい。

招待客は澁澤総理に岩崎官房長官、ケビン首相、ジャンヌ首相、ロイド提督、天草に岬、琴乃羽、春日、東山、地球からユーロピアに避難してきた北欧の養父母と多彩な顔ぶりが出そろった。

日本列島諸国の政財界要人が集まって結婚披露宴でなければここで臨時サミットが開かれたことだろう。

当然この異常な要人の集中ぶりは内外マスコミの知るところになり、ホテルには取材陣が殺到した。

ホテル側は「ごくごく普通のお客様の人生の門出にどうかご配慮お願いします」とのコメントを出し、また日本政府総務省は火星協力機構内記者クラブに対し、一般人のプライバシー保護を尊重するように異例の要請を行った。

にもかかわらず、スクープを狙う大手マスコミの下請けや売り込みを狙うフリーランス記者やパラッチが変装や出入り業者などを装ってホテルへ潜入した。

潜入した彼らが目にしたのはごく一般的な日常のホテル内であった。

唯一、ロビーの案内画面に「2階「海神の間」―大月家 似志野家―」と表示がされていた。

ロビーや2階のフロアーに物々しい警備は敷かれておらず、SPや私服警官も見当たらない様だった。

2階「海神の間」の入り口には披露宴招待客向けのこじんまりとした受付があり、招待客は受付を済ませると室内に入っていくた。

マスコミ関係者は中に入れなかったため、受付付近で待機していたが室内からは披露宴開始前の浮ついた喧騒（けんそう）は聞こえず、静かなピアノ演奏が流されているだけだった。

しかしマスコミ関係者はすぐに異常な状況に気付く。

すでに200人以上が入っているが「海神の間」の収容人数は80人までである。

マスコミ関係者は首をひねった

海神の奥には美衣子が設置した「どこへもドア」があり、火星シドニア地区地下研究施設「ヘル・シティ」に接続されていた。

「ヘル・シティ」の一角にゼイエスの研究室跡があり、美衣子達三姉妹はそこを披露宴会場「八百万（やおよろず）の間」として改装、利用したのである。もちろん内装はホテルニューオタニに合わせたシックなデザインで広々としたダンスホールの様な広さがあった。

八百万の間には丸いテーブルがずらりと並んでおり、部屋の奥には高砂^{たかさご}があり、新郎新婦席があった。

広大な披露宴会場には瑠奈^{ルナ}特製の衣装を纏^{まと}った美男美女風執事&メイド風アンドロイドとホテル側から派遣された人間の給仕^{きゅうし}が優雅^{ゆうが}にテーブルの間を縫^ぬうように移動して来賓^{らいひん}の案内誘導と飲食物の提供を行っていた。

八百万の間の招待客テーブルが満席になったところで

「これより大月家と仁志野家の結婚披露宴を始めます」

とアナウンスが流れた。

NHK日曜昼に放送されるのだ自慢でお馴染みのチャイムとアコーディオン演奏が出席者の手拍子付きで流れる中、高砂とは反対側の場所にある「どこへもドア」が開くと和装の婚姻衣装を着た大月とひかりが現れて八百万の間の真ん中をゆっくりと腕を組みながら歩いて高砂に向かった。

のだ自慢で司会を務めるアナウンサーが、

「ご入場される新郎新婦を拍手でお迎えください」

と告げると各テーブルの招待客から盛大な拍手が沸き起こった。

盛大な拍手に照れながらも幸せそうに腕を組んで高砂に向かう大

月とひかりであった。

高砂の檀上は大月とひかりだけが座り、両家の親族は高砂に近いテーブルに座っている。これは、母親が入院中で出席できない大月家への配慮である。

大月の母親は2年前、彼がワーム襲撃を受けて重態となった知らせを聴いてショックを受け、のういっけつ脳溢血で倒れて以降、自衛隊中央病院で治療を続けていた。脳溢血に伴う痴呆症ちほうしょうも同時に発症(はっしょう)し、重態は脱したもののリハビリは困難を極めていた。

「それでは乾杯の音頭を澁澤太郎様に頂きたいと思います」

と司会が敬称を省略して言う。招待客がざわめいた。

「本日は新郎新婦及びご来賓の皆さまからの強いお申し出により、ご来賓の皆さまのお名前に付随する肩書等は大変恐縮ながら省略させていただきます。私自身戸惑っているくらいですので、皆さまどうかご理解、ご容赦ようしやのほどよろしくお願いします」

と冷や汗を額に浮かべた困惑気味のNHK司会が告げると、澁澤のテーブルに座っていた岩崎官房長官が立ち上がって拍手をした。

呼応するように、英国連邦極東のケビン首相、ユーロピア共和国のジャンヌ首相、宇宙軍提督のロイド中将などが次々と立ち上がって拍手をした。

やおよろず八百万の間に賛同の拍手が鳴り響いた。

拍手が鳴りやむと澁澤がシャンパンのグラス片手に高砂前たかさこまえにあるマイクの前に移動して、

「それでは、大月満君と仁志野ひかりさんのご結婚を祝して、乾杯！」
招待客全員が乾杯と唱和した。

「澁澤様大変ありがとうございます。新郎新婦はここでいろなおお色直しのため一時退席いたします。皆様拍手で送りだしましょう！」

出席者の温かい拍手に包まれて新郎新婦が高砂席の背後に出現した。「どこへもドア」の向こうに消えるとドアも自然に空気に溶け込むように消えていった。

「それでは皆様、しばしご歓談ください」

司会が告げると、高砂前の床がゆっくりとせりあがって高砂よりも

やや低い位置で止まった。

せりあがった床の上には、7人組十1名の和装をした老若男女が楽器を手に木造の船に乗っていた。

「今、日本列島八百万やおよろずの神々で有名な新時代エンターティナー「SITIFUKUJINN」の皆さまです！」

棒読みな司会の紹介の後に、

「弁財天べんざいてんでございます」

「恵比寿えびすやで」

「大黒天だいくてんです」

「布袋ぼていです」

「毘沙門びしゃもんてん天だっちゃー！」

「寿老人じゅろうじんじゃ」

「福祿寿ふくろくじゆ・・・」

「・・・ゼイエスだっちゃー！」

「8人かよっ！」ほかの七福神にハリセンで突っ込みを受けるゼイエスに会場が爆笑した。

「皆の衆！乗ってるかい？それじゃあ、めでたい日にふさわしい1曲目っ！「泳げタイヤキくん」!!」

・・・素晴らしい演奏なのにどうかと突っ込みを入れたくなる曲の数々が演奏される。

テーブル席にはマルス人御用達コース料理「火星づくし」がふるまわれていた。料理の監修はイワフネと宮内庁料理人、ニユーオタニ総料理長だった。

火星車エビ、火星伊勢海老、火星アワビにウニ、江戸前のアナゴ等、火星海洋と東京湾で獲れた新鮮な海の幸が振る舞われた。

ちなみに素材の一部は溜奈の一本釣りや「素潜りの達人」であるイワフネが夜中の漁で収穫している。

先日、イワフネも神奈川県漁業協同組合に加入した。

SITIFUKUJINNのミニライブが盛況な（騒然な？）うちに終わると、次の新郎新婦友人たちのスピーチまではのだ自慢ではなく、結のコネで呼び寄せた大物歌手やアイドルグループによる「出し

物（歌と踊り）」が過密スケジュールで決行され、招待客は思わぬ豪華老若男女キャスト達の登場に歓喜した。

各テーブルの招待者席には結婚披露宴のパンフレットが各人ごとに「ホログラム（立体映像）」で用意されており、ホログラムに触れるだけで式次第が表示される仕組みとなっていた。

出席者の一人が「おい、この式次第・・・」と隣の出席者に声をかける

「なんで広告が載っているの？しかも広告は動画だぞ!!」

「連絡先はテーブルN.O.で表示されている!？」

「うちのお得意先がテーブルN.O.7に座っている・・・あれは三石銀行の頭取だよ。新郎新婦の会社のメインバンクだ！間違いない！あとでビール注ぎにいくぞっ！」

と、思わぬビジネスチャンスがもたらされていたりする。

テーブルのあちらこちらで驚嘆と出会いの囁きが起こる。

列島諸国要人を招待したテーブルでは、

「ケビン、君は日本で最も成功した人物としていずれ「極東TIME誌」に載るぞ！」

「何をつまらんことを言っているんだ外務大臣」

「ケビン？」

「すまない。ソールズベリー卿」

「日本のケツコンヒロウエンとは我々とは全く異質だな」

「ああ。ダウンングタウンの結婚式場は日本人の予約が殺到して大儲けらしいが、日本独特の習慣に苦労しているようだ」

「まあ、ここぐらいに異質なら苦労するだろうが、まだ可愛いものじゃないか」

「そうだな。今でも自分がジョークの世界にいるような感覚だよ」

「同感だ」

二人は「30分前」に長崎県ダウンングタウンの首相官邸から特設された「どこへもドア」で到着していた。

隣接するユーロピア共和国のジャンヌ首相も同じだった。

「異質な文明さえ平気な顔で日常に取り込む日本人が恐ろしいよ」

ソールズベリー卿が感嘆のため息をつく。

現在新郎新婦が座る高砂前の空中では「大月家」三姉妹の一人である瑠奈が命綱無しの一輪車で綱渡りをしていた。両手でバランスを巧みに取りながら両手に持った扇子せんすで水芸をアドリブで披露している。水芸の水が間欠泉かんけつせんのように天井高くまで噴き上げてきたが大丈夫だろうか？

瑠奈の居る前後の空間だけ電磁シールドが展開されていて瑠奈だけが空間いっぱいに溢れた水に溺れながら空間ごと会場から退席（移動回収）していった。

司会が顔を苦笑しながら、

「可愛いお嬢さんの体を張った出し物に皆様盛大な拍手をお送りください」

と言うと、会場からどつと大きな拍手が沸き起こった。

近隣の濡れたテーブル席に三姉妹の美衣子と結はいそいそとお詫びのタオルを配っていた。

タオルには「ミツル商事」とプリントされていた。火星人は商売上手だな。我が国の旅行者もあれくらいの環境適応を期待したいのだが・・・無理はやめておこう。

お色直しが終わった新郎新婦が黒タキシードと純白のウエディングドレスで現れると、英国連邦極東やユーロピアの招待客テーブルから「ビューティフォー!!」「プリティウエディングドレス!」

等と歓声が沸きおこる。

「ここでダウンニングタウン管轄極東ウエストミンスター教会の司祭様による「誓ちかいの儀式」、続いて神田明神七福神様かんだみょうじんによる「祝福の儀」が執り行われます」

会場のホテルから派遣されてきた給仕が同僚に小声で語り掛ける。

「なあ、確か「一般人の普通の人生の門出」とうちの支配人は言っていたよな?」

「そうだな」

「どこが普通?」

「・・・そうだな」

二人の給仕の視線の先では「本物の」七福神達が日月とひかりに「祝福」の「御神酒シヤンパンかけ」をして周囲のテーブルにもシヤンパンがぶちまけられていた。

二人は慌ててタオルを手に取ると阿鼻叫喚あびきようかんの祝宴しゅくえんに突入していった。

その後も出席者を熱狂させるイベントが続いたが、最大の出し物は三姉妹主催の「大ビンゴ大会（三姉妹お小遣いの大半はここに費やされた）」だった。

「二等はマルスアカデミー所属オウムアムル型恒星間宇宙船1隻。全長2km、幅500m、速度は秒速2キロよ」

DJ?の美衣子によるアナウンスに会場がどよめいた。

「二等は「どこへもドア」」

会場が沸く。科学者や流通業界参加者の歓声が熱烈だ。

「三等はターミネーター型万能アンドロイド。戦闘もちろん可能よ」

会場がヒートアップしてきた。軍関係者が写メを取りはじめる。介護サービス業界や警備会社の経営者も動画を取っている。

「四等は私の肩たたき券よ」

大きいお友達紳士の招待客が数名興奮して失神した。

「五等は風雲ムスビ城の「1日城主権」よ」

マスコミ、テレビ業界関係者が数名興奮して失神した。

「残念賞は瑠奈と夜の東京湾アナゴ釣りツアーよ」

「私が残念みたいな言い方傷つくっス!!」

全員が爆笑した。

人生の波乱を短時間で演出した大ビンゴ大会の結果は、瑠奈のクラスメイトである天草華子あまくさはなこが一等を引き当てた。

華子は父親のJAXA理事長に連れられて部屋の片隅で何やら打ち合わせをしていた。

JAXAは一気に外宇宙探索に乗り出すつもりだろうか？艦長は華子らしい。華子は急な人生大転換に興奮して過呼吸になり、クラス担任の真知子先生まちこから応急処置を受けていた。

二等の「どこへもドア」は、角紅の得意先である流通宅配大手のヤマテ運輸社長が引き当てた。

ヤマテ運輸社長は宅配便の価格破壊を実現させそうな勢いだった。三等の「ターミネイター型アンドロイド」は英国連邦極東のソールズベリー外務大臣が引き当てた。

翌日、ソールズベリー外務大臣はケビン首相に辞表を提出して警備保障会社を立ち上げた。ケビンはこの警備保障会社を国防省の傘下に収めるつもりだった。

四等以下は・・・個人の名誉に係わるので省略したいが、全員が満足した事は確かだった。

こうして一般からかけ離れた大月家の「普通な」結婚披露宴は大盛会のままお開きとなった。

二人の新婚旅行は、かねてから美衣子達三姉妹に対する各国の招待を受ける形で、英国連邦極東とユーロピア共和国、月面都市ユニオンシティの各地をお忍で三か月かけて廻（まわ）ることとなった。

三姉妹と「ミツル商事」の面々がこの機を逃さずビジネス目的で随行したのは言うまでもない。

また、大月とひかりがいろいろと励んだ事も言わずもがなであった。

ちなみに、招待客は帰り際に結むすび手ぎわ作りの引き出物である「玉手箱（改）」が配られた。

この「玉手箱（改）」は一回限りだが、箱から噴出する白い細胞活性化パウダーにより、パウダーに触れた身体の部分が2年程度「若返る」という驚きの効能だったが、厚生労働省から「頼むから商品化は待って！マジでっ！」と泣き落としが入って製品化を断念したものである。

そうとは知らず、披露宴の出席者全員が次々と箱を開けてしまい、毛髪が豊かになったり、肌の艶が良くなったりと一部で喜びの聲が挙がったが、内閣官房から他言無用の要請があり、大月家への問い合わせは無かった。

数年後、厚生労働省管轄のNIID（国立感染症研究所）とミツル

商事の共同研究として特許申請が行われ、待ち焦^こがれた化粧品会社や製薬業界から業務提携の申し出が殺到したのはまた別の話となる。

混沌編 混沌の始まり

天敵

日本列島が火星に転移する45億年前【太陽系第5惑星 衛星「イオ」付近】

「第5惑星本体地表まで40里^リ」

イワフネが地表観測センサーに集中しているゼイエスに告げた。

「ここに知的生命体は居ないだろう。メタンや窒素が過半を占める大気中に原始的な生物は居るようだが、拡散していて群れとは言えないな。惑星表面の超高压と猛烈な風速では生命が根付く可能性は低いし、ただ霧散^{むさん}しているだけの存在にこれ以上の進化は望むべくもない」

センサーに顔を向けたままのゼイエスが応えた。

「いいのか？アマトハに直訴^{じきそ}までして無理やりこんな遠くにまで遠征したんだ。せめて70近くある衛星を探索するのも手だぞ？」

「いや。惑星本体で進化できない生物が衛星で独自の進化などあり得んよ。残念だが、オリンポスに帰ろう」

二人の乗った第5惑星（木星）探査天体ラボ「フォボス」は第5惑星の衛星軌道でスイングバイコースを取って母星マルスへの帰途についた。

第5惑星から離れていく「フォボス」を見つめるように第5惑星表面の大赤斑がまるで赤い眼を瞬^{まばた}きさせるように収縮した。

地球3個分の大きさがある大赤斑周辺には、高温の地表付近を始めとしてメタン、窒素を栄養素とする「多様な」原始生命体が存在していたが、「彼ら」はまるで大赤斑全体で一つの意思を持つかのように、遠ざかる「フォボス」をいつまでも見つめていた。

2022年4月19日【地球 イスラエル国 暫定首都テルアビブ 首相官邸^{おほ}】

火山灰に覆^{おほ}われた首相官邸を一人の日本人が突然訪問した。

「始めまして。日本政府首相補佐官の東山と申します」

東山がニタニエフ首相に一礼した。

「遠いところからよくいらつしやいましたな。ミスターヒガシヤマ、歓迎します」

突然の訪問にもかかわらず、ニタニエフが温和に挨拶を返した。

実のところ、外国政府関係者が首相官邸を訪れたのは『大変動』以降初めてである。

通信ではユニオンシティ国のソーンダイク代表と何度か話しているが。

「ありがとうございます、首相閣下。ですが、それほど遠くでは無かつたような感じですね」

東山がニコリと笑いながら言った。

「日本大使館から来ましたから」

「確か日本大使館は、閉鎖していた筈だが？」

「報告が遅れて申し訳ございません。先程火星から再開させるべくスタッフが到着したものでして……」

「テルアビブ国際空港は閉鎖されたままですが？」

同席していたモサド（イスラエル諜報機関）長官が口を挟んだ。

「異星文明の装置で30分前に貴国に来訪しました」

「は??」

ニタニエフ首相とモサド長官は絶句した。

「まあ、細かい事は後程のちほどご説明します。本日は首相の澁澤からニタニエフ首相宛に親書をお届けに参りました」

東山がニタニエフ首相に澁澤からの親書を手渡す。

「これは、このご時世にご丁寧な事だ」

ニタニエフが皮肉げに言った。

「それで、貴国は周辺国を天敵として争い続けるほじり埃まみれの国にどんな御用かな?」

東山はニタニエフの自嘲ちちやうにはニコリともせず真面目な顔で、

「率直に申しますと、地球上での我が国民の救助と保護を可能な範囲でお願いいたします。同時に我が国は貴国に避難場所の情報を提

供します」

「具体的にお願い出来ますかな？」

「貴国の一時避難場所としてトルコ中央部アナトリア高原にあるマルス文明のカツパドキア地下都市を提供いたします。アンカラ暫定^{ざんてい}トルコ政府から承諾は得ております。国民の方々の輸送や足りない物資の補給については、火星と月面ユニオンシティからシャトル便でピストン輸送します。そして、出来るならば、貴国の一部国民を『貴国新領土の』火星開拓にお招きしたい。貴国の軍事技術、高度テクノロジーは火星でも必要と我が国政府は考えています。どうか検討して頂きたい」

「貴国のモサドからある程度の情報は入っているかと思いますが、我が国は火星現地文明——マルス文明と言いますが、3年前に接触し、友好関係を結んでおります。我が国は偶然に、マルス文明装置により、中国とロシアの核攻撃から逃れるため火星に列島ごと転移、現在は地球に近い劇的な環境変化を遂げた火星で新天地開拓と地球復興に力を入れています」

ニタニエフは絶句した。モサド長官から事前に日本の情報は聴いていたが、直接日本政府の使者から言われると大変な実感を伴^{ともな}うものだ。

「地球復興と火星開拓には我が国の他にユニオンシティ国、転移当時に日本に居たEU各国大使館と旅行者、在日米軍——失礼、在日ユニオンシティ軍と共に取り組んでいます。人手、物資、あらゆる面で足りないものだらけなのです」

「貴国はこの過酷な地球でほぼ唯一、国家を維持して来られた。その力を是非^{ぜひ}とも我々に貸して頂きたい。お互いに協力出来るならば我が国は貴国の維持発展に最大限の力を尽くしましょう」

東山が二人に頭を下げた。

ニタニエフとモサド長官は絶句したままだった。

やがて立ち直ったニタニエフが、

「大変貴重なお話ありがとうございます。ミスターヒガシヤマ、返答までどれくらいの時間を頂けるのかね？」

と質問した。

東山はニヤリと笑うと、

「3時間後に火星の日本は夕方5時になります。役所も5時に閉まりますから、それまでにお願います。ちなみに、これは交渉では有りません。こちらから押し付けるものは何も有りません。常識の範囲内ですがね」

そう言う東山は日本大使館に戻っていった。

ニタニエフはモサド長官に、

「私は夢を視ていないよな?」

と割りと言顔で聞いた。

モサド長官は肩をすくめただけだった。

東山は1時間後に再度首相官邸に呼び出され、日本政府の申し出を受け入れるとの回答を得た。

東山は、首相官邸に勢揃いしたイスラエル内閣全閣僚に少し驚いたが、ニタニエフにカツパドキア地下都市の情報提供を行い、同行した航空宇宙自衛隊の高瀬中佐が、ユニオンシティ駐留自衛隊シャトルを利用したイスラエル本土とカツパドキアとのピストン輸送を提案した。

全閣僚が真剣な目付きで東山とニタニエフ、国防長官、モサド長官との打ち合わせに聞き入っていた。

イスラエル政府はすぐにでも動き出すようだった。

ニタニエフはその日の夜、緊急放送をイスラエル全土に行い、イスラエル国のカツパドキア地下都市への国家移転と日本政府全面支援による火星開拓を発表した。

1948年の建国以来、周辺国と四度にわたる中東戦争を生き抜いてもなお、明日をも知れぬ緊張した日々を過ごしていた750万のイスラエル国民はこの放送に最初は耳を疑った。

だが、澁澤首相からのたどたどしいながらも収斂を積んだとみられるヘブライ語で書かれた親書とヘブライ語と英語の2回に分けたビデオメッセージが伝えられると、日本の本気を肌で感じた市民達が火山灰が降り積もる街中にも関わらず外に繰り出して、自らの未来に

歓喜した。

この放送の三日後には巨大な二等辺三角形が特徴的な、最初の自衛隊大型シャトル（もちろんマルス文明のものだが）の「船団」が灰色の空を押しよけるように現れてテルアビブ国際空港に所狭しと降り立った。

イスラエル国営放送は第二陣船団がイスラエル上空衛星軌道で待機中であると航空宇宙自衛隊の提供した動画を使って繰り返し伝えていた。

もはや日本を疑う者など誰も居なかった。

テルアビブ国際空港に日の丸の自衛隊大型シャトル船団が到着した翌日未明、イスラエル軍特殊部隊がモサドによって居場所が把握されていたアテネ、アンカラ、イスタンブール、カイロ郊外に隠れ住む僅かな日本人を救出して帰還した。

航空宇宙自衛隊月面基地への帰途についた第一次自衛隊大型シャトル船団には、救出された中東在留日本人65名の他に、早くも火星入植第一陣の国民15,000名と政府出先機関要員と陸海空軍統合精鋭1個師団の隊員とその家族20,000人が装備付きで乗り込んでいた。

日本政府は火星生物の脅威も隠さず全てニタニエフに開示していたのである。

その後、ミツル商事航空宇宙部門が開設した日本とイスラエルの直通便が運航された段階でニタニエフは火星訪問を澁澤首相に打診し、澁澤は快諾した。

イスラエルは伝統的な旧アメリカ合衆国の親イスラエル政策を継承したユニオンシテイ国との関係を現状維持に留めながらも、日本国と「準同盟」とも言える新たな二国間関係に力を入れる外交・安全保障政策に舵を切り始めたようだった。

—————

2022年4月20日?午後7時30分〔横浜市神奈川区 NEW
イワフネハウス 共用ダイニングルーム〕

夕食後の共用ダイニングルームでデザートのカボチャプリンをチ

ロチロとなめながら美衣子は毎週日曜夜の地球生態系を扱ったNHK教育番組「ダーリンが来た！」を岬とじつと視ていたが突然、「これだわー！」

と叫んでプリン片手に椅子の上で立ち上がった。

驚いた岬が

「なにがどうしたの!？」

と訊いてきたので美衣子は

「巨大ワームの天敵を見つけたわ！」

とプリンのカラメルを頬ほおにくつつけたままの顔でにやりと不遜ふそんな笑みを浮かべるのだった。

翌日【NEWイワフネハウス 地下研究室（美衣子）】

「さあ岬、これを見るのよ」

机に置かれた昆虫飼育用の透明な容器には火星の土が敷かれており、極小のワームと蛭（ヒル）が入れられていた。

容器の中に敷かれた火星の土を元気に掘り返す極小ワームに蛭（ヒル）がひたひたとナメクジのように近づいていく。

ワームが地上に頭を出した瞬間に蛭がワームを包み込むように捕らえると先端下部の口から溶液を出してワームを溶かしながら食べ始めた。

「・・・これは!？」

驚愕（きょうがく）から覚めた岬教授が美衣子に訊く。

「昔から蛭ヒルの好物はミミズだったのよ。蛭の中にはワームしか食べない種も居る程よ」

美衣子が答えた。

「恐らく火星には蛭に似たような種が居るに違いないわ」

美衣子は自信たっぷりに言うと、いつの間にかどこかのパズーみたいに時代物のバズーカ砲を背負って、虫取り網を手で「どこへもドア」をくぐって前人未到に近いヘラス大陸中央部砂漠地帯に入ってしまった。

岬が我に返ると美衣子の姿はドアの向こうに消えていた。

「うえええーっ!？」

岬の叫び声が地下研究室に響き渡った。

2022年4月21日午後8時【神奈川県横浜市神奈川区 NEW
イワフネハウス 大月家】

「で、どうだった？」

夕食後に大月家のリビングルームで美衣子の「反省会」が開かれていた。

大月の問いに正座していた美衣子は

「火力が足りなかったわ」

と傍らかたわに置いたバズーカ砲を恨めしく見つめながら答えた。

「そんなに大きい蛭ヒルだったの？」

鳥肌が立った両腕を抱えるようにひかりが訊く。

「さすが火星の巨大生物だったわ。全長200mはあった」

腕を組んでうーむと唸（うな）りながら美衣子が答えた。

「じゃあワームの天敵出現で南半球制圧は楽になるっすね！」

瑠奈が明るく言う。

「そうでもないわ。問題が一つある」

美衣子が瑠奈を窘たしなめるように言った。

「数が圧倒的に少ないのよ」

「比率は？」

同席していた岬教授が質問した。

「1対10くらい」

「少なすぎっ！」

「そりゃ巨大ミミズが増えて当然っすね」

「数が少なければ増やせばいいのよ」

美衣子が言う。

「どこで育ててるの？」

ひかりが問う。

「もちろん・・・瑠奈の生け簀で」

「なんでっ!？」

流石にイワフネハウスでも一個人で巨大蛭の飼育は色々と問題が有りすぎるので、大月と美衣子は首相官邸の岩崎に相談した。

「巨大ワームの天敵・・・ですか」

岩崎は愕然がくぜんとしながらも頭をフル回転させているらしかった。

「はい。イワフネハウス家の地下研究室の50m水槽では育てられないほど巨大になるようです。美衣子が言うには200m級になるとか」

「それを人工飼育したいと？」

「はい」

岩崎はくらくつと眩暈めまいを感じたが根性で踏みとどまった。

「・・・防衛省とNIID（国立感染症研究所）に相談してみましよう」
立ち直った岩崎が言った。

「この事は火星協力機構には？」

「まだです。実際に火星ヒルが巨大ワームを食べてくれたら報告する予定です。それまでは「ミツル商事」の研究として部外秘にします」
「その判断は適切です。総理に報告した上で明日にでも大月社長に連絡しましょう」

「お願いします」

大月と美衣子が官邸を後にして2時間後、NSC（国家安全保障会議）が開催され、澁澤総理大臣、岩崎官房長官、桑田防衛大臣、後白河外務大臣、黒子厚労大臣、甘木経産大臣が出席した。

NSCにおいて、「ミツル商事」が研究している巨大ワーム天敵飼育計画は全員の賛成で承認され、経産省が小笠原沖に建設する海上研究都市にて飼育、実証実験は秘かにヘラス大陸東海岸で行い、万が一のバイオハザードに備えて厚生労働省のNIIDと自衛隊化学防護部隊が前身対応拠点として施設の監視を行い、海上自衛隊の1個護衛艦隊が警備目的で周辺海域に展開することになった。

その日の夕方、岩崎官房長官の番記者がNSCの会議内容について質問したところ岩崎は、

「英国連邦極東のロイド提督から、巨大ワーム対策として使用する新型爆弾MOAB（すべての爆弾の母）大量生産と配備の要請を受けて検討した」

とだけ答えた。

日本政府の了解と万一の場合に対する支援を取り付けた大月は、小

笠原沖に建設中のメガフロート海上研究都市の一角に三姉妹や岬、琴乃羽の研究施設を設けた。

万が一、火星巨大蛭が暴走した場合はメガフロート区画ごと分離して地上設置型の新型爆弾MOABで自爆処分するためである。

普段はトラブルメイカーな三姉妹だが、大月が巨大ワームに喰われた経験から、この天敵研究は至って真剣であり、小笠原にいる間は終始周囲と隔絶した研究生生活を送っていた。

もちろん、ミツル商事の全員も各々が研究室に籠こもって三姉妹の研究を支えた。

2022年5月上旬、満月の夜、南半球ヘラス大陸東海岸地区に貨物列車のように多数のコンテナを連結させた瑠奈操縦の水陸両用戦闘艦「マロングラッセ」が上陸し、内陸部砂漠地帯で運んできたコンテナを解放した。

コンテナの中身は体長10m程に成長した中型火星蛭（火星ヒル）であり、総数3,000匹が夜のヘラス砂漠に散っていった。

親身になって飼育していた瑠奈は、

「大きくなれよ〜」

とハンカチ片手に涙ぐみながら火星蛭を見送った。

自衛隊ダイモス宇宙基地から美衣子が拡大望遠鏡で観測した結果、中型火星蛭は集団で巨大ワームに取り付いて捕食していたことが確認された。

5月15日、日本政府は火星協力機構に対し、官民合同プロジェクトで巨大ワームの天敵である巨大火星蛭の飼育に成功したと報告した。

歓喜したロイド提督を始めとする火星協力機構戦術作戦局は、上層部に火星ヒルの大量飼育を進言したが、地球避難民が多く働く機構軍『統合作戦事務局』から「火星生態系保護」の立場から作戦投入案は否決され、逆に日本政府とミツル商事に対し研究廃棄と施設閉鎖を勧告した。

日本政府は勧告に激怒、協力機構臨時総会の招集をユニオンシティ国ソーンダイク代表に要請、加盟国研究の自由を認める決議案を採択

させるべく活発なロビー活動を列島諸国で行った。

また、火星協力機構 難民高等弁務官事務所のシャトル利用料未払いが慢性化していたため、ミツル商事は月面ユニオンシティ向けマルスシャトル貸与を一時停止した。

このためユニオンシティ国の物流が悪化、ソーンダイク代表が火星に急遽来日してミツル商事大月社長に謝罪し、同席した澁澤首相にシャトル便再開を求める緊急協議に発展した。

澁澤首相はソーンダイク代表に対し、火星協力機構『統合作戦事務局』に代表される、無為に肥大化した官僚組織の改編を提案、また中立的な立場であるはずの官僚が行使する「欧米的リベリズム」に代表される「地球価値観」の押しつけを厳しく批判した。

ソーンダイク代表は月面都市国家建国以来の日本政府と大月家の支援に謝意を示し、加盟各国の自由な研究について理解を示したものの、協力機構事務局の組織改編やリベリズム規制については明言を避けた。

ユニオンシティ国の火星協力機構を通じた各国への影響力を削(そ)ぎたくなかったのである。

澁澤達日本政府は、ユニオンシティ国が地球復興の名のもとに「パクスロマーナ(覇権主義)」を歩んでいるのではないかと疑うようになっていった。

このような政治的緊張を感じさせつつも、人類は地球復興計画の一つである「火星南半球ヘラス大陸攻略作戦」の準備を進めた。

作戦発動まで2週間を切っていた。

ヘラス大陸攻略作戦

2022年6月1日午前1時〔火星衛星軌道上 航空・宇宙自衛隊
「ダイモス宇宙基地」司令部〕

「MOAB搭載連合宇宙艦隊がヘラス大陸上空の衛星軌道上に到達。
全艦発射位置に着きました」

「海軍連合艦隊、ヘラス大陸まで200km」

「ユニオンシティと日本の戦略航空編隊、海軍上空にてMOAB（大規模爆風爆弾兵器）ミサイル発射体制に入りました」

司令部のオペレーターが次々と各部隊の状況を報告する。

「提督。予定通りの進行です」

副官の鷹匠たかじょう准将が作戦司令官のロイド提督に報告する。

「フォボス基地から地上探査レーダーを照射」

ロイド提督が指示する。

衛星ダイモスから火星を挟はさんだ反対側の衛星軌道上に位置する衛星フォボスにあるユーロピア宇宙軍基地に設置された地上探査レーダーのアンテナが火星南極付近にあるヘラス大陸に向けられると各種レーダー波が発信された。

「ダイモス基地とのリンクは保っているかね？」

「はい」

「フォボス赤外線レーダーより、ヘラス大陸沿岸から大陸中央部まで巨大ワームとみられる熱源探知。総数約1万！」

オペレーターの声が心なしか上ずっている。

「連合海軍のE-2D AWACSエイワックス（早期警戒機）ドップラーレーダーから数百万のサソリモドキ類探知！」

「沿岸探索中の潜水ドローン、大陸北側の海中に巨大な遊泳物体「群れ」を探知。群れの規模個体数10万！——潜水ドローンからの信号途絶！」

次々と想定を超える観測結果が報告される。

「ブレインズの見解は？」

「こちらブレインズ。南半球の生態系を推測する限り、これらの数は

異常ではない」

JAXAの天草から返答が来る。

「今の戦力で我々に殲滅は可能だと思いますか？」

「探知された限りの数は殲滅できるでしょうが、潜在的な総数は今の数倍でしょう」

「弾が足りませんね」

「中途半端な攻撃は相手に「対抗する知恵」を与えてしまうでしょう」

司令官席の卓上にある赤い色の電話が鳴った。上級司令部や各国政府首脳とのホットラインである。もちろん大月家も登録済である。

「ロイドです」

「作戦は中止よ。状況は理解しているわ」

「準備が足らず申し訳ございません」

「謝罪は不要よ。私の戦力見積もりが甘すぎたわ」

「それは・・・」

「ロイド、今晚ハウスに来なさい。反省会よ」

「了解しました」

、、美衣子、、との通話を終えたロイド提督は気を取り直すかのように大きく息を吸うと、命令を下した。

「作戦中の全部隊に命令。作戦中断！基地に一時帰投せよ！」

「よろしいのですか？」

鷹匠がロイドに確認する。

「アマクサが言った通り、弾切れで攻撃がとん挫しては敵に我々の手の内を教えるだけだ。攻撃するなら一度で必ず相手を殲滅しないと火星生物に勝てないだろう」

「統合作戦事務局が黙っていないでしょうな」

「役人の戯言に興味はありません。作戦は中断します」

ロイド提督が断言した。

「作戦中断！全軍速やかに作戦地域から一時撤収せよ！偵察衛星と海軍偵察機はヘラス大陸の監視を継続！」

鷹匠が全軍に命令を伝えた。

こうしてヘラス大陸攻略作戦は一旦中断された。

火星協力機構「統合作戦事務局」から猛烈な責任追及の通信が相次いだ。が、作戦司令官のロイドは緊急協議のため不在であり、統合作戦事務局の不満は躲かわされた形となった。

同日午後8時【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】共用のダイニングルームで「ミツル商事」の面々と澁澤首相、岩崎官房長官、桑田防衛大臣、作戦司令官のロイド提督が夕食後に反省会をざつくばらんに行っていた。

「やはり弾が圧倒的に足りませんな」

スコッチウイスキーのロックが入ったグラスを傾けながらロイド提督は呟くように言った。

「南半球の生物全てを殲滅するぐらいの覚悟でやらないと無理。中途半端はだめ、絶対」

美衣子がロイド提督と桑田防衛大臣の前でテーブルをぺちぺちと叩きながら言った。

「そのようにしたいのですが、火星かせいひる蛭の使用を禁止され、火星環境に配慮した特定害獣排除という重しを付けられては話になりませんな」

ロイドが珍しく語調を荒げて統合作戦事務局の方針に苦言を呈ていした。

「もはや協力機構の指示など無視して作戦を立てては如何いかがです?」

大月が首脳陣に訊いてみる。

「いや、それはまずい。人類都市ボレアリフからの穀物供給が滞とると一気に列島国民は干上がってしまう」

澁澤が苦しそうに言った。

「火星海洋上での海洋食料プラント稼働は軌道に乗りつつあります。が、国民と列島諸国を養うにはやはりアルテミア大陸内陸部と北方四島の穀倉地帯が必要です」

岩崎官房長官が言った。

一同がうーんと首を捻る。

「弾がなければ作れば良いのよ」

唐突に美衣子が言った。

「どうして?」

大月が訊く。

「シドニア地区でマスターが作った地下施設をフル稼働させるのよ」

美衣子が事も無げに言う。

「マールス文明のアンドロイド軍団を全て投入して徹底的に掃討作戦を行うのよ」

と言った。

「ミス・ミイコ。あなたの手持ち戦力は？」

ロイド提督が訊いた。

「戦闘用アンドロイド1万個体、水陸両用戦闘艦200隻。マスターの暇つぶしに作られたわ」

美衣子がゼイエスの置き土産であることをさらりと言った。

「ゼイエスさん暇つぶしに恐ろしいもの作っていたんですね」

桑田防衛大臣が冷や汗を浮かべて言った。

「ただし、エネルギーの問題が有るわ。Pパワー（多次元供給システム）の設備が不足している。設備の増設は人類の新型爆弾MOABを量産するよりは容易。メガフロート都市一つ分を全て簡易ピラミッドで埋め尽くせば可能」

美衣子の説明に結と瑠奈も頷いた。

「我が国のゼネコンが全面協力したらどうなる？」

澁澤が訊く。

「2×4（ツーバイフォー工法）で2週間くらい」

美衣子が即答する。

「それで行こう！」

澁澤が決然と言い放ったところで美衣子が意見した。

「それは、ミツル商事警備保障部門への業務委託で良いのかしら？もちろん経費はそちら持ちで？」

岩崎と桑田の顔が少し引きつったが、

「可能な限りの負担は私の力の及ぶ範囲で尽力しましょう」

ロイド提督が可笑しそうに笑いを堪えながら宣言した。

「少なくとも、手持ちの兵力が少ない今、四の五の言ってられません。英国連邦極東軍としてもミツル商事へ全面的に警備業務として委託

「しましろう」

「もちろん我が国も独自の判断でミツル商事をバックアップしよう。火星巨大蛭も全力で育てて投入しようじゃないか！」

「蛭は協力機構が使用を禁じているのでは？」

「実は廃棄前に放していたのを回収しました」、たとえば少数が増えているも文句は言われんだろう」

「総理大胆ですな」

「美衣子君達には負けるよ」

「褒められると照れるわ」

「少しは自重してね？」

こうして第二次ヘラス大陸攻略作戦は、史上類を見ない「陸・海・空・宙」の作戦として実行されることとなった。

2022年6月16日午前4時30分【火星 南半球ヘラス大陸から300 km北方のマリネリス海域 第一作戦艦隊 英国連邦極東海軍航空母艦「クイーン・エリザベス」CIC】

「提督。第二作戦艦隊「いずも」から通信。「ネタはシャリを離れた」です」

副官のグリナート大佐が首を傾げながら報告した。

「わかりました。上空待機中の戦略航空艦隊及びダイモス、フォボス基地と衛星軌道上のMOAB宇宙艦隊は、MOAB弾発射準備に入れ、目標ヘラス大陸西海岸！」

ロイド提督が命令した。

「人類史上初の火星文明を活用した民間警備会社との共同作戦ですか。果たして・・・」

ロイドがやや楽し気に呟（つぶや）いた。

同午前5時【火星 南半球ヘラス大陸東海岸から10 km北方のマリネリス海域 第二作戦艦隊旗艦「いずも」CIC】

「先行するミツル商事水陸軍団がまもなくヘラス大陸東海岸に上陸します」

オペレーターが鷹匠准将に報告する。

「さて、ターミネーターさんのお手並み拝見だ」

鷹匠（たかじょう）が呟いた。

―同時刻【ヘラス大陸東海岸】―

明け方の薄暗い海岸になんの前触れもなく突然海面が盛り上がり200隻の銀色に輝くフランスパンの様な巨大物体が海面から顔を出すと赤い砂利が広がる東海岸の浜辺に勢いよく乗り上げた。

巨大な銀色をしたフランスパンの集団は砂利だらけの海岸でふわりと数メートル浮上するとそのまま貨物列車のように内陸部へ向けて一列になって突進していった。

―【第一作戦艦隊 旗艦「クイーン・エリザベス」 CIC】―

「第二艦隊「いずも」より通信。「ネタは魚河岸に上がった」です」

グリナート大佐がまたしても聞き慣れない符号をロイド提督に伝えました。

ロイド提督は頷くと

「すべて順調ですね」

と言った。

「MOAB（大規模爆風爆弾兵器）全弾、西海岸に投射！」

ロイドが命令した。

空母機動艦隊の遙か上空を旋回していたユニオンシティ火星駐留軍のB52戦略爆撃機20機と日本航空自衛隊C-2輸送機40機からなる戦略航空艦隊、衛星軌道上で待機していた航空宇宙自衛隊の「ホワイトピース」、ユーロピア宇宙軍の「ドウ・リシユリユ」、英国連邦極東の「ヴァンガード」「ヴェンジェンス」からなる連合宇宙艦隊、ダイモス、フォボス両宇宙基地から多数の大型MOAB誘導弾がヘラス大陸に向けて発射された。

「対空レーダー、大気圏外からのMOAB弾頭捕捉。マツハ20で西海岸に落下中。まもなく着弾します」

「戦略航空艦隊のMOABミサイルがポップアップ機動（最終突入態勢）に入りました。宇宙からの誘導弾とほぼ同時刻に着弾予定」

程なく無数の流星がヘラス大陸「西海岸」に降り注ぎ、300km離れた「クイーン・エリザベス」からもその流星雨は視認出来た。

マツハ20を超える速度でヘラス大陸西海岸に突き刺さったMO

A B (大規模爆風爆弾兵器) 弾は地中深く突き進み、地下200m付近で通常弾頭の炸薬が爆発して赤い大地を深く抉るように空中に大量の土砂と爆炎とバラバラになった巨大ワームを噴き上げた。

―【第二作戦艦隊 旗艦「いずも」 CIC】―
「MOAB全弾着弾！起爆しました！」

「まるで西海岸全体が噴火したみたいだな」

モニターが映し出す爆炎のカーテンに鷹匠准将は目を見張った。

「艦上センサー、西海岸での急激な気温上昇を確認」

「もうひと押しだな」

「Pパワープラント船の稼働状態は？」

「現在90%の稼働率です。無線送信で順調に上陸部隊へエネルギー供給中」

「さすが火星文明だな。護衛艦隊はプラント船の警護に最大限の注意を払え！潜水艦隊も油断するなよ！」

「じんりゆう」より！艦隊南側面海中に反応！海ワーム群れ20万！」

「全艦対潜戦闘！アスロック、爆雷をありったけ撃ち込め！パワープラント船を護るんだ！」

「オールウェポン・フリー！」

鷹匠の艦隊も戦闘を開始した。

―【第一作戦艦隊 旗艦「クイーン・エリザベス」 CIC】―
「第二作戦艦隊が海ワーム群20万と交戦中！」

「我々も海ワームに警戒！」

「セントリー1より、西海岸地上レーダーに反応、サソリモドキ群、総数3百万接近!!」

「キャッスルリィダ、気化爆弾使用せよ！」

ヘラス大陸中央部上空20000mを飛行していた航空自衛隊と英国連邦極東空軍のF3支援戦闘機とF35B攻撃機の群れが西海岸に向けて気化爆弾をセットした空対地ミサイルを次々と発射した。

ミサイルは西海岸の上空200mで炸裂した。上空で弾頭の燃焼系液体が噴霧され、炸薬が続いて爆発した。

小型核爆弾に匹敵する猛烈な衝撃波と爆炎風が西海岸地表部分を襲った。

地上を覆っていた3百万のサソリモドキは一掃いっそうされた。

「セントローリー、更に地上レーダー反応！巨大ワームの群れが熱源目指して西海岸に集中」

「結構。第一作戦艦隊全艦はセントローリーの誘導に従ってトマホーク、ハーブーンを発射せよ」

「全キヤッスルは母艦に戻ってナパーム弾装備、西海岸にキャンプファイアを作り出せ！」

「第二作戦艦隊より報告、ミツル商事水陸軍団が東海岸から10km内陸まで進行中。間もなく「ヒル回収作戦」を開始するとの事です」

「よし、第一作戦艦隊は艦砲射撃可能位置まで前進せよ。作戦第三段階に備えよ！」

「ユニオンシティ海軍レーガン駆逐艦『ズムウォルト』前進します。護衛艦隊左右に展開、アスロック投射態勢。潜水艦隊、フリゲート艦は海底からの海ワーム襲撃を警戒せよ」

【ヘラス大陸東海岸 内陸部 ミツル商事水陸軍団 旗艦『アナーゴ』】

「溜奈、もうすぐ目的地よ『荷物』の準備は大丈夫かしら？」
美衣子が訊く。

「こちら先頭艦『マロングラッセ』大丈夫つすよ！——あいたつ!!」
溜奈が操縦する艦ふねが巨大な一枚岩に衝突して横転した。

「マロングラッセ横転。連結していた後続艦も次々と横転。どうしましょう。コンテナがフルオープンよ」

軍団制御に専念する結ムスヒが「棒読みな」報告をする。
美衣子がフツツと小さく笑う。

「さすが溜奈ね。『持ってる』わ。恐ろしい子」
「ロイドと鷹匠に連絡。『ネタが転んだ』、以上よ」

美衣子と結が座乗する旗艦『アナーゴ』も横転して90度傾いてた。

【第一作戦艦隊 旗艦 「クイーン・エリザベス」 CIC】

「第二作戦艦隊より緊急電!! 『ネタが転んだ』以上」

ロイド提督は笑いを噛み殺しながら、

「第一艦隊全艦、作戦第三段階に入る!」

「提督、先程から怪しげな符号ふごうが有りますが?」

三姉妹のフリーダムさを知らないグリナード大佐が怪訝けげんな顔でロイド提督に訊く。

「問題ない。平常運転だよ」

ロイド提督は微笑ほほえんだ。

第一作戦艦隊のフリゲート艦やイージス艦から多数のトマホークとハーブーンミサイルが西海岸に出現していた「炎のカーテン」を維持続けた。

ユニオンシティ海軍最新鋭駆逐艦「ズムウォルト」の超電磁砲レールガンはひっきりなしに蒼白い電光を放ちながら全力で炎のカーテンの向こうにいる巨大ワームを貫き続けていた。

「ヘラス大陸東海岸内陸部20km」

瑠奈が操縦していた水陸両用戦闘艦『マロングラッセ』が横倒しになり、船体の側面にある貨物コンテナが全て開いて海上都市で育てられた大量の中型ヒルが赤い大地にわらわらと獲物を求めて散っていった。

『マロングラッセ』後続190隻余りの連結した艦列が残らず横転し、何れも貨物コンテナいすが開いて大量の中型ヒルがヘラス大陸内陸部に全力で去っていった。

最後尾で連結していて横転に巻き込まれた旗艦『アナゴ』から報告や指示が飛び交う。

「回収したはずの」火星ヒルが全て内陸部に移動!」

「瑠奈、全艦の連結解除。V字陣形よ。陸上、地中掃討モード。プラズマ砲スタンバイよ」

銀色のフランスパン軍団から半分の100隻程が赤い大地に先端をぐりぐりとのめり込ませながら地中に潜っていった。

地中に潜った戦闘艦は、先端をドリル状に変形させて地下50m程をV字形に広がりながら進行方向の地中に微弱な電波を発信して巨

大ワームを搜索した。

「地中レーダーヒットつすよ！姉さま、地中に沢山ミミズが居るつすよ!!」

地中深くを進む「マロングラッセ」から瑠奈が報告する。

「瑠奈、プラズマ攻撃開始よ」

「了解つすー!」

地中深く進む100隻の艦体先端が青白く発行すると艦の前方に巨大なプラズマ塊が発生して周囲の土壌を「溶かしながら」500m程プラズマ塊を維持して塊は消えた。表面温度1500℃のプラズマ塊に触れた巨大ワームは瞬時にその巨体を破裂させながら土壌の一部となり、溶けていった。

「まだまだプラズマ攻撃続けるつすよ!」

瑠奈の「地中艦隊」は後方の第二作戦艦隊から常時供給されるPパワーをフル活用してヘラス大陸東側の地中を文字通り焼き尽くしながら西海岸目指して進んでいった。

ヘラス大陸の巨大ワームは、西海岸のワームが空からのMOAB弾で地中から根こそぎ吹き飛ばされ、東海岸に逃げようとしたところを地上から火星蛭の群れに身体を喰われ、地中では海岸から突き進んできた瑠奈の水陸軍団によるプラズマ攻撃で土砂ごと焼き尽くされながらその数を減らしていった。

最終的に大陸中央部砂漠地帯に追い詰められた巨大ワーム群は、火星蛭の群れと東西から降り注ぐ鉄と超電磁砲とプラズマ嵐の中に消えていった。

海ワームも進化間もない故に弱小な個体が大半であることが判明、鷹匠の苛烈な対潜飽和攻撃の前にあっけなく殲滅されていった。

2022年6月23日午前8時、ダイモス宇宙基地がヘラス大陸上空を通過して赤外線とレーザーセンサーで地上を走査したが、巨大ワームやサソリモドキの群れは消え、僅かな個体だけしか存在しないことを確認した。海ワームにおいては完全に殲滅されたようで反応が無かった。

こうしてヘラス大陸は人類に制圧された。

火星協力機構統合作戦事務局はヘラス大陸開発をユニオンシティ国主導で行う事を内定したが、これには作戦の主導権を握ってきた英国連邦極東が激しく反発、ユーロピア共和国と日本国も統合作戦事務局に異議を申し立てた。

ユニオンシティ国のソーンダイク代表は事態の仲介に務め、ヘラス大陸開発権を辞退した。

ユニオンシティ国は一方で北半球アルテミア大陸東部の開発を加速して、火星での影響力を強めた。

日本列島諸国は火星協力機構統合作戦事務局とユニオンシティ国への反感を強めた。

ヘラス大陸攻略で正規軍顔負けの戦闘力を誇示したミツル商事警備保障部門は火星協力機構軍事部門とイスラエル軍関係者から注目されることになる。

転生国家

2022年6月28日午前9時【東京都大田区 羽田空港 国際・宇宙ターミナル 特別ゲート】

ミツル航空チャーター便で、イスラエル首相のベンジャミン・ニタニエフがモサド長官をともなつて来日した。

羽田空港宇宙ターミナルで後白河外務大臣と美衣子ミイコの出迎えを受けたニタニエフとモサド長官は、初めて見るマルス人の爬虫類よっぼう的容貌に内心驚きつつ、自らの国に救いの手を差し伸べてくれた日本人とマルス人の手をしっかりと握りしめた。

羽田からそのまま東京の首相官邸に直行したニタニエフとモサド長官だったが、車窓から見える東京の青空と磨き上げられた摩天楼まてんろうを見て思わず、

「火山灰の無い街中を移動するのは久しぶりだな」

と呟いた。

ニタニエフの呟きひそめを聞いた美衣子は、

「これから全地球循環ハイパーloopシステムの建設が始まるわ。いずれ火山灰の中和、回収が始まるわ」

とだけ言った。

ニタニエフとモサド長官はいきなり飛び出した壮大な発言に驚いたが、

「細かいところは首脳会談後の官民合同協議で説明させて頂きます」

後白河外務大臣が淡々と美衣子のセリフを引き継いで言った。

首相官邸に到着したニタニエフは玄関先で澁澤首相の出迎えを受け、そのまま首相執務室へ招かれて二人だけの首脳会談が始まった。

モサド長官と岩崎官房長官は別室で会談を行った。実務的な地球と火星の情報交換である。

首相執務室を見渡したニタニエフは

「澁澤首相は質実剛健しつじつこうけんですな」

と言った。

「タロウと呼んで下さってかまいませんよ。ニタニエフ首相閣下」

澁澤がニヤリと笑った。

「では私の事もベンと呼んで下さい」

ベンジャミン・ニタニエフが微笑んだ。

こうして日本とイスラエルの首脳会談が始まった。

ニタニエフは日本との協力関係強化を望み、過酷な地球環境で窮地に陥るイスラエル国への支援を要請した。

澁澤は物資補給や火星開拓への支援を約束するとともに、2年後、アステロイドベルトから「日本列島オブジェクト」が極東に飛来することを明かしてイスラエル国にその管理運営を要請した。

「これはいまだかつてないプロジェクトです。私達はいつ転移するかわからない日本列島を離れることが出来ないが、ベンの国ならば我が国の様な不確実性がない。新たな安住の地の一つとして移住しながら管理して頂くことは出来ないだろうか？」

ニタニエフは大変驚いたが、

「もともと我らユダヤ民族は流浪の民でした。安住の地が増えるのなら歓迎すべきことです。それに、極東はかつて我ら「失われた12氏族」の一つが向かった地、とも言われています。喜んで、移住、管理しましょう。ただ、移住初期のサポートは手厚くお願いしたい」と応えた。

澁澤は了承し、

「感謝します、ベン。皆さんが日本列島オブジェクトに慣れるまでは最大限のサポートをしましょう。それと、あえて申し上げますが我々は地球到着後のオブジェクト取り扱いについてとやかく言わない。貴国の主権の下で地球復興の一助として日本列島オブジェクトが役立てばそれで構いません」

ニタニエフは

「心からタロウと日本国民に感謝を。我が国は新エルサレム、テルアビブ、火星ヘラス大陸、そして日本列島オブジェクトと人手が足りないくらいに広大な領土を得て嬉しい悲鳴を上げればいいのかわかりません」

と重責に自嘲した。

澁澤はため息をつきながら、

「正直、他に頼める組織的人口規模の国が無いのが実情です。ユニオンシティ国、火星協力機構は官僚主義な上に『マルス文明の方法』を頭ごなしに否定してくるくせに、異星文明の利用だけは厚かましい。故に信用できません」

「スイス連邦はユーロピア共和国のジャンヌ首相が非公式に打診してくれましたが、国土であるアルプス地方を離れたくないと強く拒絶されてしまいました」

と語った。

「それと、ここだけの話にしてもらいたいが、マルス文明の三姉妹もあるの国は「第三のアトランティス」になりかねないと危惧（きぐ）していますので」

「われわれの血塗られた建国に比べればユニオンシティ国の方が遙かに健全と思いますが？」

「あの国は大国としての意識が強すぎます。おそらく復興が進むにつれ、大国の地位を自然と求めるでしょう。だが貴国は世界の覇権よりも自国と国民の生命に貪欲だ。そういうあなた方だからこそ、日本列島オブジェクトをお任せしたいのです」

そう言って澁澤が頭を下げた。

「なにとぞ、日本列島オブジェクトを頼みます」

ニタニエフは日本の首相を見極めるような眼で視ながらこう訊いた。

「我が国をそこまで本当に信頼してもよろしいのか？我が国は伝統的に我が国を支えてくれたアメリカに強い信頼を持っている。それはたとえばユニオンシティと名前が変わろうとも変わりはないのです」
「貴国は産油国であるアラブ諸国の顔色を窺いながら風見鶏（かざみどり）の様な場当たりの外交で我が国に対応してきた。我が国が貴国の話を間に受けると、信頼できるとお思いか？」

ニタニエフの率直な発言に澁澤は、

「我が国の過去の外交政策のお粗末そまつさについては弁明せんめいしません。貴国がどう思われようと、我が国は貴国にしか頼たのまないし、貴国以外に頼むつもりもない。我が国は既に地球から遠く離れております。残念ながら帰りたくても帰れないのです」

「我が国が転移したことによる惨事をこれ以上拡大させないためにも、我が国自体の帰還よりもオブジェクトの設置を優先する方針に変わりはありません。ベン、どうか引き受けてもらえないだろうか？」

ニタニエフは小さく息を吐くと腹を括くくった。

「非才なる身を以て全力もつで、お引き受けします」

と澁澤に応えるのだった。

澁澤首相との単独首脳会談の後、ニタニエフとモサド長官は、岩崎官房長官とマルス文明三姉妹主催の官民合同政府協議で日本政府とミツル商事が推し進めている地球復興計画の説明を受けた。

二人は前代未聞の計画を躊躇ためらうことなく肅々しゅくしゅくと進める日本人に強い畏怖いふの念を持った。

イスラエル国の国家移転と各地へ向かう移民の全面支援については幅広い分野で協議が必要となるため、あらためて両政府の官民代表団がカツパドキア新都市で協議を継続することとなった。

ニタニエフとの会談後、澁澤首相は応接室で三姉妹の付き添いとして呼んでいたイワフネと休憩がてら雑談をしていた。

「聞きにくい質問で申し訳ありませんが、イワフネさんは昔のイスラエル人に詳しいのですか？」

澁澤がイワフネに問う。

「私の記憶では、当時の彼らは死海しかいにほど近いソドムとゴモラの2つの都市で栄えていた文明だったと記憶しています」

「・・・確かソドムとゴモラの人々は周辺地域を支配して繁栄を謳歌おうかしていましたね」

遠い眼をしたイワフネが語る。

「あー・・・」

澁澤はイワフネのトラウマたる一つの地雷を踏んだようだった。

「ですが、バベルと言う巨大な核融合炉実証実験が失敗して・・・都市

「^{グラビティ・ボム}ごと重力核爆発？で滅んだような・・・」

「・・・嫌なこと聞いてすみません」

「いえ。私の印象は、彼らは良くも悪くも大変に「チャレンジャー」だったと思います」

「まるでゼイエスさんですね？」

「そう言えば・・・気が合うかも知れません」

「・・・今度は核融合失敗して欲しくないですね」

日本国とイスラエル国は、火星開拓共同研究と地球上でのイスラエル国に対する官民両分野での幅広い支援、地球上に取り残された日本人の救出、保護を条件とした相互友好協力条約を締結した。

同時に、火星南半球入植を支援する代わりに「封鎖された」アジア・アフリカ地域における非合法武装勢力掃討と、ミツル商事警備保障部門が保有するアンドロイド軍団への軍事顧問団派遣と訓練をイスラエル軍が行う事で合意した。

これを契機として日本政府はミツル商事航空部門に出資し、官民合同の航空宇宙会社『日本マルス航空』を設立し、マルスシャトルによる日本とユニオンシティ、カツパドキア、旧アルプスに直行便を開設した。

また、貨物輸送部門も設けて、電磁カタパルトを使ったコウノトリ型無人宇宙貨物便を多用して種子島を起点に、フォボス、ダイモス、ボレアリフ、ユニオンシティ、カツパドキア、東部アルプス、ダウニングタウン、ユーロピアシティを宇宙輸送網で各地を結んだ。

この事業と火星南半球ヘラス大陸、アルテミア大陸「西海岸」の沿岸開発、大規模警備保障部門（アンドロイド傭兵）でミツル商事の事業は急拡大した。

イスラエル国の火星進出から3ヶ月後、南半球ヘラス大陸「東海岸」に第2の人類都市『ガリラヤ』が誕生する。ガリラヤは40万人の人口を擁する一大都市になったが、9割がイスラエル国からの開拓民であり、イスラエル国の火星領土「地方都市」である。

人類都市「ガリラヤ」成立の翌月、イスラエル国は国民投票を行い、

政府が国民に提案した「連邦制」を国民の80%以上が賛成して即日実施された。

「イスラエル連邦共和国」は旧首都テルアビブ、新エルサレム（旧カッパドキア）、極東に設置予定の日本列島オブジェクト「タカマガハラ」、火星ガリラヤの各地を「州」として州政府の権限を強く持つ連合体として新たな国家運営を行うこととなった。

中央政府は新エルサレム（旧カッパドキア）に置かれ、外交・軍事の権限を持つこととなる。各州には民間防衛隊が再編成され、「州警察」として治安維持を行う。

かつて「軍事国家・死の商人」の代名詞と言われた国家は、地球復興と火星開拓を使命とする750万の国民により「未来」を追求する国家に「転生」した。

イスラエルの火星開拓第一陣が到着した後に、東京で火星協力機構首脳会議が開かれ、イスラエル国も加盟承認されて参加した。

濫澤は、火星協力機構を地球復興と火星開拓に分けるべきと力説し、地球復興局、火星開拓局への組織変更を提案した。

この提案に対し、ソーンダイクは、人類共同体ヒューマン・コミュニティという統一政体での惑星間開発連合を対案として提示したが、日本やイスラエル連邦、列島各国は時期尚早として反対した。

結局、日本列島諸国からの技術支援、流通関連システムを握るミツル商事等火星陣営に対し未だ「支援を受ける側」に過ぎないユニオンシテイ国は、渋々と組織変更を受け入れた。

地球復興局は、ユニオンシテイ国とイスラエル連邦共和国主導により、月面都市ユニオンシテイに本部を置き各国が本部人員を派遣、下部組織の職員は地球避難民が大半を占めるようになる。

火星開拓局は、アルテミア大陸人類都市ボレアリフシテイに置かれ、日本国、英国連邦極東、ユーロピア共和国、イスラエル連邦共和国、ユニオンシテイ国が均等に人員と職員を派遣した。

イスラエルのクネセト（議会）から新たに選出されたイスラエル連邦共和国初代首相となったニタニエフは、地球圏復興に重きを置くユニオンシテイ国と、地球復興局からの「指示」に反発する日本列島諸

国で徐々に広がる溝に一抹の不安を抱くこととなる。

火星協力機構の発展的解消は、ニタニエフが懸念するように、地球と火星が対立する可能性を秘めるが、両陣営とも不足した国力で決定的な対立など出来るはずもなく、結果は次世代に委ねられると思われる。

—————

2022年11月5日【神奈川県横浜市NEWイワフネハウス3階『ミツル商事』事務所】

「———ということと今日からミツル商事警備保障部門の軍事顧問を務めて頂けるワイズマン中佐です」

角紅社内ミツル商事担当役員のひかりがイスラエル国防軍から「出向」してきた軍人をミツル商事の面々と三姉妹に紹介した。

30代前半と思われるが、右目に眼帯がんたいをしてベレー帽を被るワイズマンは歴戦の強者であることは誰の目にも明らかだった。

「イスラエル国防軍火星派遣師団から来たワイズマン中佐であります！地球ではゴラン高原の最前線で機甲旅団に所属しております！日本最先端の警備軍に派遣されて光栄であります！」

ワイズマン中佐が勝手に盛り上がりつつ挨拶していた。

「ウチは警備保障会社だから、軍隊ではありませんよ？」

大月社長が恐る恐るワイズマン中佐に話しかけると、

「なんと！あれだけの破壊力を持ちながら警備保障会社などご謙遜（けんそん）を。あなた方は単独で地球の半分を占領できますぞ！」

「いやいや、占領しませんから。それよりもお願いしたい事があるのですが？」

「なんなりと」

「我々の警備保障部門はいずれ地球アジア、アフリカ地域での「警備保障業務」を委託される事になります」

「それは、あの無法地帯で武装勢力と戦うという事ですか？」

「そうよ」

美衣子がワイズマン中佐の前に進み出て言った。

「私達のアンドロイド戦闘軍団はまだ、『人間』との戦闘経験が足りない

いのよ」

「武装した人間から「人間」を護るには両者の識別が必要。今のままで皆殺しにしてしまう」

結が進み出て言った。

「実戦形式であらゆる戦闘場面で人間と戦う術を教えるのが欲しいの」

「ワイズマン中佐にみんなついていくっス！」

瑠奈が元氣よく前に進み出て頭を下げた。

事前にモサド長官から「マルス文明三姉妹」についてブリーフィングを受けていたが、なかなか「教えがい」がありそうだとワイズマン中佐は嬉しく思った。

「微力ながら小官がお手伝いさせていただきます！」

ワイズマン中佐も元氣一杯に応えた。

「楽しみだわ。ワイズマン、早速訓練よ」

美衣子と結がワイズマン中佐の手をグイグイと引いて「どこへもドアの向こうに消えていった。瑠奈も二人に続いて上機嫌でドアをくぐって消えた。

「美衣子達はどこへ行ったの？」

大月社長がひかりに訊いた。

「多分、シドニア地区の地下戦闘訓練施設じゃないかなあ？」

「刺激が強すぎないか？」

「歴戦のプロ軍人だから大丈夫でしょ」

ひかりがあっけらかんと言った。

大月はワイズマンに心のなかで手を合わせるのだった。

「ごめんなさいm () m」

【シドニア地区ナザレ 地下研究施設封鎖区画「イ・ワト」】

「おらおら根性だせやーっ！」

罵声が地下空間に響き渡る。

「お前の実力はこんなものか？この根性なしがー!!」

徹底的にしごかれていた。

ワイズマン中佐が。

「なんなんだお前らっ！いい加減くたばれよお！」

涙目で半狂乱になりながら短機関銃をターミネーター兵に乱射するワイズマンだが、多勢に無勢でゾンビのように迫りくるターミネーター軍団扮する「難民兵」に10回目の「蹂躪」を受けていた。

「ふう」

罵声を出しすぎて喉がカラカラになった美衣子がワイズマン中佐に休憩を告げる。

「ここで15分休憩よ」

ワイズマンがゾンビ役だったターミネーター軍団の手厚いケアを受けていた。

メイド服を着た「衛生兵アンドロイド」がワイズマンにスポーツドリンクのチューブをワイズマンに充てるとワイズマンは無言で虚ろな目をしながらちゅうちゅうと飲んでいった。

結もスポーツドリンクをゴクゴクと飲みながら喉の調子を整えた。

「それにしても、人間相手の訓練は手加減が大変で勉強になるわ」

「そうっすね！これで人質も一緒に殺さなくて済みそうっすね！」

瑠奈がイチゴのシャーベットにかじりつきながら応えた。

「ワイズマン中佐。次のメニューをお願いします」

「まだ、やるのでありますか？」

「今まではパニックに陥った人質を抑える訓練だったでしょう？今度はおあなたが海賊役で私達が制圧する側でいくわよ」

「ちよつと待ってくれ！せめてこちら側にも仲間が欲しい」

ワイズマンが懇願した。

「仕方ないわね。瑠奈、あなたがワイズマン中佐の相棒になるのよ」

「了解っす！中佐殿よろしくっす！あいたっ!!」

ワイズマンに両手を挙げて駆け寄る瑠奈が転倒して、携帯していたプラズマ手りゅう弾がワイズマンの足元に転がってくる。

「お、お前ら！絶対それワザとだろっ！」

ワイズマンが絶叫した後、地下空間にプラズマ手りゅう弾の蒼白いスパークが飛び交った。

その日の夜【NEWイワフネハウス2階 ワイズマン中佐の個室】
「大臣！話が違いすぎます！これでは私が彼女たちに「訓練」されてい

るようなものではありませんか！」

ワイズマン中佐が国防大臣に怒りの抗議電話をしていた。

「落ち着きたまえ中佐。誰があの子三姉妹に訓練を「指導」しろと言ったのかね？私は三姉妹と「訓練」をして来いと言ったのだ。あのマルス文明の機械化兵士と人類がこれから共闘する時代になるのだ。我々がまっ先にそのノウハウを得る機会なのだぞ！」

国防大臣がワイズマンの考え違いを正した。

「三姉妹の事だから我々が考える斜め上の対応で当たり前なのだ。ワイズマン中佐はゴラン高原の最前線で何を学んだのかね？」

「失礼いたしました。未来の戦友と共に訓練出来て光栄であります！！」

ワイズマン中佐が大臣に敬礼した。

「分かればよろしい。彼女達との訓練で得たものがあれば逐一報告してくれ」

「かしこまりました」

国防大臣との通信を終えたワイズマン中佐はベットに腰を下ろすための息をついた。

「そうは言うが流石さすがに一人はキツイな」

ワイズマン中佐は英国連邦極東のSAS（空軍特殊部隊）に所属している旧知の戦友達に助けを求めることにした。

しかし、以前に大月拉致未遂事件の際に目撃したターミネーター兵の恐ろしさを知っていた彼らは泣いて謝りながら助けを断るのだった。

結局、ワイズマンは瑠奈を唯一の「相棒」として人間の軍人としての行動を一から教え、美衣子と結の無慈悲な「訓練」に臨むこととなった。

瑠奈はワイズマン中佐の教育によりサバイバル能力が著しく上がってしまった。

瑠奈は時折（ときおり）ワイズマン中佐を「自主訓練」に誘い、二人で制圧して間もないヘラス大陸中央部の砂漠地帯で巨大ワームやサソリモドキに遭遇しながら経験値を積んでいった。

ワイズマン中佐は未知の巨大生物との闘いや、パワードスーツやアダムスキー型強行偵察艇を駆使した瑠奈の戦闘能力に驚嘆しながらも着々と大月家の「普通」に慣れていった。

ワイズマン中佐は、マルス文明機械化軍団と直接共同作戦が執れる数少ないの軍人の一人として、火星諸国軍人達の羨望せんぼうの的となるのだが、それは本当にずっとずっと後の事である。

超 恋愛無双く再びく

―ある日―【神奈川県横浜市 NEWイワフネハウス 3階「ミツル商事」】

「それでは新規事業開拓会議を始めます」

ことのは琴乃羽が会議の開始を告げた。

「先日のヘラス大陸攻略作戦で新たにアンドロイド兵による警備保障事業がスタートしましたが、大軍団を使った仕事は沢山ある訳ではありません。わが社の安定的な収益を将来的にも確保するために新規事業に取り組む必要があると思います」

社長の大月が言った。

「はーい！」

瑠奈が手を挙げる。

「ゲームっすー！」

元氣よく自信たっぷりに言った。

「不朽の名作「恋愛無双」の続編を作るのよ」

椅子の上に立ち上がった結が拳をグツと握りしめて賛同する。

「ふっ。この前の「恋愛無双―参―」なんて目じゃないわ」

美衣子も椅子の上に立ち上がって決意表明をする。

「くそゲー反対！」

琴乃羽が異論を唱える。

「これ以上心が折れる犠牲者を増やしてはいけないわ」

ひかりが琴乃羽に同調する。岬もうんうんと深く頷いている。

「うちの女性社員は恋愛経験が足りないわ」

美衣子が爆弾発言をした。

「「お前が言うなっ!!!」」

ひかり達の反撃は凄まじかった。

「たしかにくそゲーは否定しないが、改善すればそれなりに楽しめると思うんだけどなあ」

大月が言った。

「選択肢の複雑さは二次元での表現だからこそその問題だと思います」

春日が指摘した。

「VR（ヴァーチャルリアリティ）方式を進化させてプレイヤーの意識そのものをゲームの世界と同化させるのが理想形だと思います」

イワフネが意見を述べた。

「うーん。フルダイブVRはなんか意識があつちにいったまま帰れなくなる怖さがあるわね」

ひかりが言った。

「寝たきりの引きこもりが大量生産されそうで怖いな」

大月が呟く。

うーむと事務所の一同が腕を組んで首を捻って悩む。

「家庭向けゲーム機ではなくて、ゲームセンター向けに貸し出して、オンライン制御でこちらから時間制限をかけるのはどうかな？」

岬が方策を提言する。

「こちらでプレイ時間を制限するのはいい考えね」

ひかりが頷く。

「やりこみ要素が薄くなってモヤモヤしませんかね？」

琴乃羽が作品に対する魅力が半減しかねないと懸念を口にする。

「大量の寝たきり引きこもりを生産して社会問題になるよりはましじゃないですか？」

春日が取りあえずやってみたらと言う。

「現実を常に意識すればいいのよね？」

美衣子が出席者に尋（たず）ねる。

「取りあえず試作品を作ってみるわ」

「やるわ」

「理想と現実のバランスをとるツス！」

瑠奈が若干不安な事を言った気がするが皆スルーした。

「じゃあ、美衣子達にお願いしようかな。完成したら放置せずに必ずひかりに報告して三人以上でプレイすること！」

大月が条件付きで開発のGOサインを出す。

こうして開発計画が開始されたーーーーー

「あいたつ！ちよつとこの腰の痛みは何!？」

ひかりが同級生「ミツル」と校門でぶつかって地面に倒れた衝撃で腰を痛めた。

「腰痛ようつうで北欧に転校するにはこれぐらいの痛みが必要・・・」

「その選択肢せんたくしは却下きやつか！シナリオ本筋に関係ないところで不必要な痛みはマイナスポイントよ」

ひかりがダメ出しをする。

「風紀委員の便所飯ルートを体験してみたけど結構心に染みるトラウマだわ・・・」

岬の顔が若干蒼ざめている。

「実際の事件をもとに再現してみた」

「事件ダメっ!!再現アウトっ!!」

岬が激しく反対する。

「刺激のないゲームは魅力が半減する」

「現状で魅力ゼロだわ」

ひかりと岬、琴乃羽の反応は変わらず凄まじかった。

「この戦闘機パイロットは実際に戦闘機を操縦出来れば面白いかもね」

大月が「サクヤ」ルートを体験して感想を言ってみる。

「わかった。戦闘機は自衛隊とほかの国もあるけど？」

「軍事機密に触れない範囲で他の国の戦闘機もいくつか入れてみて。うん、戦闘機ゲームの要素もありかな」

「テニス部の先輩も実際にテニスゲームをプレイする要素を盛り込んだらどうかしら？」

琴乃羽がテニスゲームを盛り込むことを提案する。

「女教師ルートは・・・」

「却下!」

ひかり、岬、琴乃羽がなぜかムキになって反対する。

男性陣にとってはご褒美ほうびかもしれないのだが・・・

「女性教師は男子生徒の憧れじゃないですかあ？」

春日が男性代表として名残惜しそうに言う。

「「えっ!?!」」

三対の白目が春日を睨む。

「す、少しぐらい夢があってもいいんじゃないかな!?!」

大月がとりなすように入る。

「憧れは憧れのままで終わらせるべきよ」

瞳に陰りを滲ませたひかりがフンスと断言する。ひかりさん、まじ怖え。と大月は思った。

「そのシナリオはストーリーカーではなく、憧れのマドンナ的に行ってみるわ」

美衣子がわかったようなわからないような返事をする。

「じゃあ、これをベースに美衣子達よろしくね」

「「任せなさい（るっす!）」」

三姉妹は元気よく返事した。

三姉妹は自作ゲームの栄光を既に予感していた。

——他の社員は既に悪夢の再来を予感していた。

——数日後

大月の操縦するF15J戦闘機がすいすいと空中で巨大なタコと戦っていた。

「なんで浮遊タコ?」

「昔から地球にいる「スカイフィッシュ」を巨大化させてみた」

「そうなの!?!」

無駄口を叩いている内に浮遊タコの触手が戦闘機の主翼を直撃し、大月は脱出した。

しばらくパラシュートでスカイダイビングを楽しんだ後に着地した場所は聖セント・アトランティス学園の女子寮中庭だった。

中庭でバーベキューをしていた寮生たちから黄色い歓声が挙がる。

「キヤー! 戦闘機パイロットさんよ!?!」

「カッコイイ!!」

「付き合って」

「.....」

大月はうんうんと幸せを噛み締めるように深く頷くと、

「はい。このルート採用！」

「えっ!？」

ひかり達が嘖然とする。

「あなた・・・私というものがありません」

ひかりの瞳がまたしても陰りを帯びて大月を見つめる。

「ひかりさん待って！これはゲームだからっ！テストだからっ！」

大月はひかりに首根っこをつかまれると問答無用で大月家の方にズルズルと引きずられて消えていった。

怯えた春日が「ナンマンダブ・・・」と大月に向けて手を合わせていた。

「あれは・・・あと2時間は帰還できませんね」

「ひかりさんって結構ヤンデレ?」

岬と琴乃羽がひそひそと話す。

「尊い犠牲の上に成り立つゲームシナリオ・・・心が痛いわ」

美衣子が目頭を押さえながら嘆く。

「美衣子さん棒読みまるわかりだから」

岬と琴乃羽は何故か、じと目だった。

「岬にはこのルートがお勧め」

美衣子が攻撃を避けようと懸命に新ルートをアピールする。

「これね。テニス部ルートかあ・・・」

「かなり改善したわ」

朝練で見かけた転校生ミツルをテニス部に勧誘した「カグヤ」はミツルをデートに誘うことに成功した。

そしてデートの日、まだ日が昇らない早朝の三浦漁港にミツルとカグヤは居た。

「今日は一日沖釣りでのんびりしましょうっ！」

「海釣りなんて初めてだよ、ありがとうカグヤ」

「えへへ。ほら、舟に乗るわよ」

三浦市沖の東京湾でミツルとカグヤは釣りを楽しんだ。

二人は鯛たいや鰯あじ、サバなど大量に釣り上げた。

カグヤは舟の上で釣り上げたばかりの鯛を三枚におろして刺身を

即席で造り上げた。

「美味いっ！最高だよカグヤさんっ!!」

「おおげさよミツル君」

「俺一生カグヤさんについて行くよ!」

「そんなっ!気が早いわ。・・・私達まだ高校生よ」

「美味い刺身の前にそんな理屈は要らないよ。カグヤ、港に戻ったら結婚しよう!」

「嬉しいっ!」

ミツルとカグヤは三浦漁港に戻るとすぐに近くの神社で結婚式を挙げて地元なまあたの漁師たちから祝福された。

毎朝夫婦で沖に出る二人を漁師仲間は生温かくいつまでも見守るのであったー

「なんか途中から変」

岬がそっけなくダメ出しをする。

「変!?!」

カグヤ編を担当した瑠奈ががくりと床に手をつく。

「なんで初デートで大漁だから結婚になるの?」

「目出度めでたい楽しい思い出があったじゃないすかっ!」

「そんな落語のオチじゃないんだからっ!」

「1回の釣りデートで素人の高校生が漁師顔負けデビューなんて、あり得ないでしょう!?!」

岬がバンバンと事務机を叩きながら熱弁する。

「いい!?高校生の恋愛っていうのわねっ、甘いっ、思い出を少しずつ積み上げながらやがて成就するものなのっ!」

「.....」

美衣子達三姉妹がドン引きしていた。

「岬はピュア派が好みなのね?」

岬は思わずキャラ崩壊した自分に気づいて赤面した。

「わかった。毎日釣りデートして半年後に漁師デビューエンドにするわ」

「マグロエンドにするッス!」

「テニス部どこ行った!？」

ミツル商事のゲーム開発は果てしなく続きそうだった。

そんなある日、ゲーム開発の転換点とも言える出来事が起きた。

真知子先生の抜き打ち家庭訪問?である。

「溜奈さん。ご両親に家庭訪問のご連絡プリントを渡したはずですが?」

「ごめんつす先生。ランドセルの底でくしゃくしゃに丸まっていたツス!」

胸を張って悪びれずに溜奈が答える。

真知子先生いきなり出だしからつまづく。

「くっ・・・もういいです。今から溜奈さんの職場訪問に変更です!」

「ええっ!?でも職場はここですよ?」

「今はゲームの開発中ですよ!」

真知子先生がゲームソフトを手取る。

「ん? 「恋愛無双」? 溜奈さん、これは?」

「恋愛シミレーションゲームの開発中の試作品ツス!」

「ほう?これが。溜奈さんにはいささか早いような・・・?」

「恋愛に年齢は関係ないっすよ!」

「それ小学生の言う事じゃありませんっ!」

「取りあえずプレイして感想が欲しいっす!」

「わかりました。謹んでプレイさせていただきます」

真知子先生のプレイという名の「検閲」が始まった。

「なんですか・・・家政婦が男子生徒の家に・・・はしたないっ!」

「えー!?想い人の近くに近づけるなんて素敵じゃないっすか!？」

「こんな下心見え見えのやり方はいけませんっ!」

「でも・・・」

「このシナリオは却下です!!」

真知子先生の「検閲」は苛烈を極めた。

特に教師「マチコ」ルートは同じ名前故か、激しい思い入れがあるようでシナリオは真知子先生が1週間溜奈の補習を中断してまでも大月家に通い詰めてシナリオ作りに没頭した。

そしてー

「できましたわ」

心なしかやつれた顔の真知子先生が大月に報告した。

「お父さん、早速やってみるっすよー」

瑠奈が大月にプレイを促した。

「では・・・」

大月が端末の前に座ってプレイを始めた。

新学期最初の英語の授業で「ミツル」が「マチコ先生」に指名される。

「さあ、ミツル君。この文章を訳してくださいね」

大月は英語が苦手だった。しかも、マチコ先生の英文は超長文だった。5000文字はあるのでは？

下手な転移列島作者よりも文字数が多かった・・・。

大月はマチコ先生が英文の読書が趣味であることを知らなかった。

「先生。降参です」

ミツルがうなだれてしまう。

「ふっ。甘いわ。ミツル君。放課後に進路指導室にいらっしやい。補習です」

マチコ先生の罰は厳しかった。

その後もミツルとマチコ先生の補習という名の個人授業は続き・・・勉強することの素晴らしさを感じた高校生活だった・・・HAPPY

END・・・」

「くわーっ!!」

温厚な大月が激しくゲーム機の前で悶絶して床をゴロゴロと転がり、机をバシバシと叩く。

「このルート、絶対攻略無理!」

大月がゼエゼエと息を荒げて真知子先生に詰め寄る。

「当たり前です。学校は勉強する場所です。恋愛などあり得ません!!」

「「それ最初から言えやっ!!」」

こうしてミツル商事のゲーム開発は精神的にも肉体的にも全社員

が耐えられずに開発が中止となった。

ただ、このまま闇やみに葬り去るのは忍び難く、三姉妹は一縷いちるの望みを持って秘かに自作ゲーム紹介サイトで発表した。「21世紀最大のクソゲー」認定を受け、ショツクを受けた二人は数日間シドニア地区の地下研究施設にターミネーター軍団と共に引き籠るのだった。

また大月はしばらくの間、夢で英語にうなされる夜が続いたという。

理想と現実

2022年11月10日【火星衛星軌道上 航空・宇宙自衛隊「ダイモス宇宙基地」】

ダイモス宇宙基地から次々と宇宙戦闘艦や大型シャトルが発進していた。

目的地は火星と太陽系第5惑星である木星の中間点、『アステロイドベルト（小惑星帯）』である。

5機のマルス文明大型シャトルにはアステロイドベルトで「日本列島オブジェクト」を建設する宇宙建築士と技術者500人、ミツル商事から「派遣された」アンドロイド作業員5,000個体が搭乗していた。

大型シャトルを護衛するように航空宇宙自衛隊の強襲揚陸護衛艦「ホワイトピース」や宇宙護衛艦「ひりゅう」、ユーロピア宇宙軍の「ドウ・リシユルー」、英国連邦宇宙軍の「ヴェンジェンス」、ユニオンシティ宇宙軍の宇宙空母「サラトガ」が展開していた。

「全艦隊基地から発進しました」

ホワイトピースCICのオペレーターが報告する。

「長旅だな」

ブリッジで名取艦長が呟いた。

第二次アルテムィア大陸上陸作戦からアースガルディアとの一連の戦闘まで着実に実績を積んだ名取は、「ホワイトピース」艦長のま、じゆんしやう准将に昇進していた。

「これよりアステロイドベルトに向かう。全艦第一宇宙戦速。パルスエンジン始動！」

名取准将が命令した。

大型シャトルや各国の宇宙戦闘艦がブースターとして付けられたパルスエンジンを稼働させると、船団は蒼白い推進炎を放ちながら急速に火星から遠ざかっていった。

日本列島オブジェクト建設船団は順調に航行し、約1か月後にアステロイドベルトに達した。

アステロイドベルト宙域には、マルスアカデミープレアデスコロニーからのオウムアムル型支援船団が既に到着していた。

マルス 文明側アカデミーからの支援船団には、技術責任者としてゼイエス、支援船団隊長に以前イワフネの部下とゼイエスやアマトハを救出した救難艦の「から揚げ好きな」リア艦長が就いており、名取は久しぶりの再会あんどに安堵した。

建設船団はマルス側の支援隊と合流したのち、直ちに作業を開始した。日本列島オブジェクト完成までは約3か月かかる予定である。

2022年11月24日【地球 南米大陸旧ブラジル沖400kmの大西洋 ユニオンシティ国海上都市「マリオンシティー」】

約10キロ四方に広がるメガフロートで構成された海上都市にあるユニオンシティ軍基地司令部でジョーンズ中将は、地球復興計画に必要な火山灰中和剤としての石灰回収状況についての報告を受けていた。

「旧フランスアルザス地域と大地震で崩壊したアルプス山脈西部、ドーバー海峡海底での石灰石採掘は今のところ予定通りです。石油タンカーを改造した石灰石運搬船は30隻に達し、北海油田掘削プラントを改造、移動させた採掘ポイントは10か所になりました。採掘した石灰石を旧グラスゴーに集積させ、日本マルス航空の電磁カタパルト便で衛星軌道上へ輸送しています」

「電磁カタパルトを利用したコンテナ便か。時代が変わったことを実感するな」

ジョーンズ中将が呟いた。

「火山灰の影響で地球の飛行機は使えませんからやむを得ないでしょう。我々も月面基地で日々利用してはありますか。今は技術文明の過渡期（かとき）なのかも知れませんか」

副官のサザーランド大佐がやんわりとなぐさめるように言った。

サザーランド大佐はユニオンシティ海軍原子力潜水艦「ルイビル」艦長の任務をこなす傍かたわら、マリオンシティに寄港した際はジョーンズの副官的な役割をしていた。

海兵隊からの叩き上げで長年沖縄に赴任していたジョーンズは、北米大陸救出作戦以降は火星に戻る事無く、日々生き残った米軍部隊を他纏めるべく地球各地と月面都市を奔走しているためにユニオンシティ地上軍総司令官としての事務が殆（ほとんど）ど手つかずで地球復興局統合作戦事務部からマリーンシティ基地司令部に度々苦情が寄せられていたのである。

たまたまマリーンシティを新たな母港としていた「ルイビル」はジョーンズ中将が地球各地に向かう交通手段として度々利用されており、その縁も有って見かねたサザerlandが自発的にジョーンズ中将の事務を手伝ったのが始まりとなっている。

火星諸国に劣らず、地球や月面でも文武に携わる事の出来るプロ軍人の不足は深刻な問題なのだ。

「中将。ところで一つ気がかりな情報があります」

「沢山有り過ぎてわからんが、どの地域かね？」

「アジア・アフリカ封鎖地帯です」

サザerlandが答えた。

「封鎖地帯 外縁部を哨戒しているわが軍の艦艇がしばしば「統一された大規模な」武装集団のものと思しき通信を傍受しています」

「ふむ。続けたまえ」

「武装集団の名称は『PTF』と名乗るアジア・アフリカ地域の独裁国家連合のようです」

「ペルシャ・チングス・フビライか。なるほど、「分かりやすい」旧時代の名称だ」

ジョーンズが即座に名称を言い当てた。

「肯定です。文明レベルが現代から中世にまで退行してしまえば自然とそのような行動原理と思考になるのかも知れませんがね。PTFは閉鎖されたアジア・アフリカ地域で武装勢力を糾合し、放置されていた各国の軍事物資や設備を活用して域内を移動しているようです」

「移動？定住しないのかね？」

「軒並み大噴火や大津波、放射能汚染が蔓延る地域ですから定住のメリットよりもデメリットの方が大きいでしょう」

「どういうことかね？」

「彼らは所詮^{しよせん}武装「盗賊」集団なのです。各地の都市で避難民から物資や女性を奪い、消費しているに過ぎません」

「生産的な事は何もしていないのかね？」

「彼らにはマルス文明の恩恵^{おんけい}が及んでいません。火山灰に閉ざされ、酸性化した土壌で水も放射能や化学物質で汚染されています。定住したところで何も育てようがありません」

「それは我々が放置した責任だな」

「ええ。復興計画の影の部分です」

「火山灰中和作業が完全実行されると環境も少しは好転するだろう。そして2年後の日本列島オブジェクト到来で激変し続ける環境も元に戻る、かもしれない。それまでは、我々自身が生き残るのに精一杯だ」
「存じております」

「閉鎖地帯はそれまで持つと思うかね？」

「大変動前はあのエリア人口は35億人居ました。今はおそらく1億未満に激減しているでしょう。それでも数百万人は生存しています。現状を見る限り、自立は無理でしょう。我々が随時物資支援をしないことには閉鎖地帯内の人類は緩やかに滅んでしまうでしょう」
「せめてもう少しこちらが豊かならばな」

「火星には開拓できる場所が無限にあるという噂^{うわさ}が軍と地球復興局末端で広まっています」

ジョーンズは怪訝^{けげん}そうに眉^{まゆ}を跳ね上げた。

「そんな上手い話など無いよ。開拓とて何も支援がなければ豊かになれんのだ。私^{わたし}が知る限り、火星は、日本列島諸国は、今も物資に不自由^{はず}している筈^{はず}だ」

「地球復興局末端の現地採用組で、地球しか知らない避難民職員から見れば火星は「天国」に見えるのでしようね」

「愚かな。私にはどちらが良いとも言えんな」

ジョーンズは嘆息^{たんそく}した。

「まさか地球避難民の大量受け入れなど今の火星諸国には無理難題以外の何物でもないだろうな」

「そこまで愚かな申し入れを復興局がするとは思えませんが、少々不安ですな」

「もし強行に受け入れを迫れば火星と地球の戦争になりかねんだろうな」

「上層部がそんなへまをしないことを祈りましょう」

サザーランドの発言は多分に事実をかなりの確に突いていたが、厳密には地球復興局「統合作戦事務部」は火星諸国が失点を上げること、ユニオンシティ国が推す、難民受け入れを強要できる環境を待ち望んでいた、とも言えるだろう。

11月末に地球復興局は日本国民間企業「ミツル商事」に地球マリオンシティ海上都市における警備委託をした。

ミツル商事の大月社長から相談を受けた日本政府とイスラエル連邦は、両国の軍人をミツル商事警備保障部門に出向させ、イスラエル連邦軍のマリオンシティ駐留を条件として要請を受託する交渉を地球復興局長ダグラス・マツカーサー三世と行った。

マツカーサー三世はイスラエル連邦軍の駐留に難色を示したが、ミツル商事のアンドロイド傭兵制御に連邦軍は不可欠とのニタニエフ首相の強い主張を受け入れてミツル商事はマリオンシティに大規模な水陸軍団を派遣することとなった。

美衣子は日本列島から離れる事が困難なため、瑠奈がイスラエル軍事顧問のワイズマン中佐と共に「マリオンシティ警備部隊長」として現地に向かう事となった。

12月8日、瑠奈が率いるミツル商事の水陸軍団とワイズマン中佐が指揮するイスラエル連邦陸軍部隊が大型シャトルでマリオンシティに到着した翌日、マツカーサー三世は秘かに放棄されたはずのインド亜大陸沖のサンゴ礁で出来た小島、ダイエゴガルシアに極秘通信を送っていた。

大変動直前まで、ダイエゴガルシア基地は旧フランス南太平洋方面軍と旧米国インド・太平洋軍のアジアと中東地域を繋ぐ唯一の戦略拠点であった。

大変動で発生した幾度にもわたるインド沖巨大津波で基地の地上

部分はほとんど流失してしまっただが、地下深くの核兵器貯蔵エリアは無傷で残っていた。

マツカーサー三世が待ち望む火星側の失点材料として活用出来そうだった。

同時期、2022年12月初旬【長崎県佐世保市 英国連邦極東首都 ダウニングタウン 首相官邸】

「首相、やはり復興局は我が国に20万人規模の難民受け入れ要請を検討しているようです」

極東MI6（対外諜報6課）を統括する内務大臣がケビン首相に調査結果を報告していた。

「地球復興局には頭がお花畑の人間しか居ないのかね？」

葉巻をくゆらせながら呆れた表情のケビンが言った。

「月面都市で昔の青い地球を未だに夢想して生きているような連中ですからな」

内務大臣が応えた。

「同様の要請をユーロピア共和国にも行うようです。ユーロピア（彼ら）共和国には10万人の受け入れ要請です」

「馬鹿馬鹿しい。奴ら、だれの支援で生き延びていると思っているのだね」

「自分たちの「実力」だと勘違いしているのでしょうか」

「現実を知るソーンダイクも大変だな」

「宇宙飛行士あがり地球の官僚達からは舐められているようですね」

「日本にはどれくらい要請するのだ？」

「1,000万人です」

ケビンは一瞬 啞然として

「正気なのか？」

と内務大臣に聞き返した。

「残念ながら。ダグラス・マツカーサー三世が強硬に主張しているようです。彼はボレアリフから月面に逃れて役人として再起に成功したようすな」

内務大臣が肩を竦めて応えた。

「それだけ人材がどの国も足らんのだ」
慨然とケビンが言った。

「日本は受けますかね？」

「無謀すぎるだろう。日本国内世論が一気に沸騰してどこかに「転移」してしまうぞ？」

「ありそうですね」

「日本列島が転移したら火星はまた死の星になるな」

「我々は日本と共に居るのですか？」

「火星に残りたいかね？」

「開拓が趣味ではありませんので遠慮させていただきます」

ケビンは軽くため息をつくど、

「ま、ともあれこの情報はタロウに伝えてやるか。地球を今のうちに牽制した方が良さそうだ」

「かしこまりました。明日、ジャンヌ首相や美衣子殿とお茶会がありますから澁澤首相も招待します」

「頼む」

翌日、ケビンから地球復興局の計画を聴かされた澁澤は激怒してその場でソーンダイク代表とホットライン会談を行い、事実関係を質した上で、地球から日本列島諸国の全支援を撤収させると通告した。

ソーンダイク代表にとっても復興局の計画は寝耳に水だったようで、計画の撤回を強く働き掛けると澁澤に約束した。

こうして地球復興局の大規模火星植民計画は各国への要請に至る前に阻止された。

ソーンダイクからの通告で計画を断念した地球復興局局長のマツカーサー三世は怒り心頭だったが、マルス文明三姉妹を擁（よう）する日本陣営との正面衝突はアースガルディアの二の舞になる事を身に染みて理解していたので次の「復讐」の機会を準備しながら待つことにしたのである。

霧中宙域

2022年12月13日【太陽系第5惑星 だいせきはん 大赤斑周辺】

この星系で5番目の存在は、自分の近くで3番目の子供達が小石を集めているのを見開いて注意深く見続けていた。

この子供達は突然4番目の存在上に現れて眠りについていた4番目を無理やり醒ませたのだ。おかげで自分の身体があちこち火傷やけどして現在も傷は拡がりつつある。この傷は致命的ではないが次があると流星に危ない。

4番目が目覚めてからずっと3番目の子供達に注意してきた5番目の存在は、子供達が小石を集めて何をしているのか気になった。そして5番目の存在は3番目の子供達にコンタクトを試みるべく自らの一部をその小石が散らばる場所に伸ばし始めた。

2022年12月13日【火星と木星の中間地点 アステロイドベルト】

ズワイガニの脚みたいなおパーツを何本もはやした大型シャトルが直径5km程の小惑星が点在する宙域から幾つも連結して集結地点に運んでいた。

SF映画やアニメでは、アステロイドベルトを小惑星が密集する場所と描写しているが、実際にはその宙域に存在する小惑星の数は密集する程ではない。確かに惑星の成れの果てか、なり損ねたデブリが太陽を中心に公転する軌道に存在しているが、広大な軌道故に惑星の欠片（かけら）は分散している。

建設船団の指揮艦「ホワイトピース」のブリッジでは様々な作業報告と指示が慌ただしく飛びかっていた。

「東松 J V、間もなくオブジェクト東北の建設に入ります」

「盾中工務店JV、オブジェクト九州の建設進捗38パーセント」

「ミツル商事チームはオブジェクト中部地殻部分フォッサマグナマグマ溜まりの製作に取り掛かってください。——富士山の仕上げがまだ？——そちらは最後で結構ですから、今から凝り過ぎないでく

ださいっ！地殻と地球マグマの通り道を作る作業を優先させてください」

「プレアデス支援船団から報告、本州西部基盤となる小惑星260個の結合作業に入ります」

「Pーパワープラント船からの結合レーザー照射準備！」

「ミツル商事チーム！マグマ溜まりに大使の秘密基地は標準装備ではありません！怪獣の巣穴も不要です！くれぐれもノーマルな建設をお願いしますっ！」

作業は一部芸術肌個性派アンドロイドを除き、順調に推移しているようだった。

「・・・最初はどうなるものと疑ったが、なかなか様（さま）になるものですね」

三姉妹謹製ミツル商事アンドロイドへの指示に四苦八苦するオペレーターを華麗かれいにスルーしながら、名取艦長かたわが傍らかたわに立つマルスアカデミーのゼイエスに声をかけた。

「おおむね想定内の事です。技術上なんの問題もありません。日本列島オブジェクト地殻部分の形成に成功したら上層部の建設に入ります」

淡々とゼイエスが名取艦長に作業スケジュールを説明していると、突然甲高い警報音がブリッジに響き渡った。

「艦長！空母「サラトガ」から緊急通信。「哨戒機の観測によると、木星方面から異様なガス雲らしき物が急速接近中」との事です」

「サラトガとデータリンク！正面モニターに出せ！」

ホワイトピースのブリッジ正面のメインスクリーンに巨大な木星の大赤斑だいせきはんからモクモクと黒灰色や茶色のガスらしき物が勢いよく吹きあがってこちらに迫っているのが哨戒機の最大望遠カメラで確認できた。

「プレアデス支援隊より緊急通信！正体不明のガス雲が亜高速で船団に接近中！」

「亜高速!?!」

名取は絶句した。

「ゼイエスさん。これはいったい？」

「ちよつと普通ではお目にかかれぬ光景であることは確かです。このような現象は私がマルスに居た時代にも無かつた。明らかな異常事態です」

ゼイエスが滅多に出さない冷や汗と、うろたえた表情をしながらやや固い声で応えた。

「作業中止！哨戒機含む全作業ユニット乗員は速やかに各自の母船に戻れ！全艦隊輪形陣！オウムアムル艦と護衛艦は外側で建設船団を護れ！」

「マルス支援隊リア艦長から通信！画像乱れ、音声だけです！」

オペレーターが音声通信をスピーカーに繋いだ。

「名取艦長、第5惑星の大气は水素と……が大半です。通常、真空では気体は拡散してしまうのにこのガス雲は……だけでは……ない……です。まるで……明らかに我々を指向……警戒……」

「プレアデス支援隊との通信途絶！」

「ダイモスに緊急通信！」

「ダメです！通信反射されています！センサー、電波の類はガス雲を透過出来ません！」

「サラトガとのデータリンク切れました！艦隊通信システムに異常！」

「状況ガス！総員宇宙服着用！急げっ！」

「ガス雲接触まで55分」

約1時間後、臨戦態勢を取りながら輪形陣で固まった船団を木星からのガス雲が覆いかぶさるように包み隠して拡散し、アステロイドベルト宙域の半分近くが木星からの謎のガスに覆われた。

ガス雲の中からは救難信号も電波も何も発信されなかつた。

—————

12月14日午前9時【東京都渋谷区 神聖女子学院付属小学校4年A組】

「はい。それでは宿題のスケッチをみんな持って来てください」

真知子先生が「夜の天体観測」をスケッチさせた宿題の提出を生徒

に促した。

「なるほど。さすが名取さんですね。綺麗な地球ですね」

「本当は灰色だとお父様が言われていたのですが・・・」

名取優美子が照れながら応える。

「星を視るとき、人はいろいろな事を想像してきました。だから星座も考え付いたのです。こういうのも良いと思いますよ。それに、綺麗だった頃の地球を記憶に留めることも大事だと先生は思いますよ」

真知子先生が優しく感想を言う。

「次は、瑠奈さんね。一枚だけ？」

地球のアジア・アフリカ地域に出張していた瑠奈は「どこへもドア」で久しぶりに登校していた。もつとも、宿題を提出したら地球にとんぼ返りだが・・・。

「真実は一枚に凝縮されるツス！」

「面倒くさかったと言うことでもいいのかしら？」

「そうっス！」

元氣よく瑠奈が認めてしまう。

瑠奈の白状は裏表がなくて美点とも言えるが、真知子先生はやはりガツカリしてしまう。

真知子先生がため息をつきながら瑠奈のスケッチを見ると、眉を吊り上げて何とも言えない顔をした。

「瑠奈さん。これは「どこの星」かしら？」

「木星っすよ！ 昨晚はご機嫌ななめでしたっスよ！」

「木星の模様を顔文字で表現するとは、流石にクリエイティブ過ぎないかしら？」

真知子が手に持つ瑠奈の「木星」スケッチに描かれた「第5惑星」は惑星表面を覆うガスの渦が

「（——メ）」と確かにご機嫌斜めな顔文字になっていた。

「瑠奈さん。地球へ戻る前に補習一緒に頑張りましょうね？」

「ぐはっ！ 何でっ！」

瑠奈は床にorzと膝をつくのだった。

2022年12月14日午前10時【航空・宇宙自衛隊「ダイモス宇宙基地」司令部】

「定時通信の時刻から6時間以上経過してはいますがアステロイド派遣船団からの通信が来ません」

オペレーターが鷹匠准将に報告した。

「太陽嵐か、木星周辺で起きる何らかの自然現象か？1時間ごとに再度の通信を試みるんだ」

鷹匠が指示を出した。

その日、十数回にわたり火星からアステロイドベルトに向け各国派遣部隊の緊急コードを使ってあらゆる周波数帯で通信が送られたが、誰からも、プレアデスコロニー支援船団からも返信は無かった。

鷹匠は市ヶ谷の防衛省総合指令センターに異常事態を報告した。

防衛省はこの異常事態を内閣官房を通じて澁澤総理大臣に報告するとともに、プレアデス星団のマルスアカデミー本部と各国首脳にも第一報を入れ、三鷹にある国立天文台に周辺宙域の観測を依頼した。

国立天文台の空良所長は、木星から噴出した大規模なガス雲のようなものが異常な高スピードでアステロイドベルトに到達して半ば包み込んだ状態になっており、また、木星自体も大赤斑と似た大気の逆流現象が木星各地に多数出現して拡大しつつあり、何らかの原因で木星に異常が起きている事をダイモス基地の宇宙望遠鏡で確認した。

ダイモス基地の観測設備はガス雲の解析を試みたが、ガス雲は電波を吸収して透過させなかった。また、X線でもその宙域に広がる存在を掴むことは出来なかった。しかしながらガス雲と思われる存在は宇宙望遠鏡での「目視」で確認出来るのだった。

空良は、該当宙域に赴いてガスの採取をしない限りこれ以上の分析は困難だと判断した。

美衣子と結、はダイモス基地の司令部が異常を察知する直前、マルスアカデミーのリアルタイムデータリンクが切断された段階で、イワフネハウスの地下研究室からマルスアカデミープレアデス支援船団のゼイエスにプラーベート通信を送ったり、心身同調システムを起動させて彼の生死を確かめようとしたが応答は無かった。

美衣子は瑠奈の小学校クラスメイト天草 華子はな子に、大月の結婚式で引き当てた1等賞品のオウムアムル型宇宙船の発進準備を依頼した。

華子は失神寸前に陥ったが根性で踏みとどまって美衣子に事態の説明を求めた。

説明を受けた華子は狼狽ろうばいしながらも美衣子に発進準備方法を教えてもらうことにした。

真知子先生は給食後の掃除時間に天草華子から必死な形相ぎょうそうで早退したい旨を告げられて怪訝けげんに思ったが、彼女の鬼気迫る表情に何らかの緊急事態が到来したと感じて早退を許可した。真知子先生は直ぐに護衛も兼ねる同僚SPに夫への緊急連絡を依頼した。

午後1時、澁澤首相は各国首脳とマルスアカデミーのアマトハも加えた緊急電話会議を開催し、アステロイドベルトと木星の異変を報告、調査・救援部隊を航空・宇宙自衛隊から派遣する事を伝えた。

調査・救援部隊にはJAXAの空良そら、ミツル商事の結むす、機動部隊隊長の高瀬中佐達が宇宙装備に換装かんそうした多目的宇宙護衛艦「そうりゅう」に搭乗してアステロイドベルトへ向かうこととなった。

2022年12月15日午後6時、徹夜の換装作業で宇宙装備を整えた多目的宇宙護衛艦「そうりゅう」が、種子島宇宙センター軍用電磁カタパルトから射出された。

搭乗員は強力な推進Gに対応するために全員が冷凍睡眠カプセルで仮死状態に入っており、ダイモス宇宙基地からの遠隔航行制御で木星との中間地点であるアステロイドベルトへ向かった。

同午後7時、日本政府と各国は、アステロイドベルトで作業中のオブリエクト建設船団からの通信が突然途絶えたこと、通信途絶前に木星で原因不明の異変が発生し現在も続いている事を公表した。

また、既に原因調査・救出部隊が火星から発進した事も伝えられた。

同時刻【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】
「本当は華子はなこの船を向かわせたかったのだけど」

美衣子はため息をついた。

「流星に船の操縦が出来る人はまだ居ないなあ」

大月が残念そうに言った。

華子は確かに準備に奔走ほんそうしたが、よく考えるとオウムアムル型恒星間宇宙船の操縦に熟練した人類はまだ居なかったのだ。結に操縦を任せても良かったのだが、不測の事態に対応するためには艦の操縦が二人以外にも必要であり、現状ではそれを埋め合わせる人材が居なかった。

結局、急いで操船可能な者を養成することにしたのだが、安心できるレベルに達するまでは今しばらく時間が必要だった。

調査隊が種子島から発進する様子を自宅のテレビで視みていた大月は、ひかりと美衣子ミイコの手を握りしめて結と名取達の無事を祈るのだった。

セカンドコンタクト

2022年12月24日「アステロイドベルトまで2万kmの宇宙空間 航空宇宙自衛隊多目的宇宙護衛艦「そうりゆう」」

「高瀬中佐、建設船団想定作業宙域まであと2時間で到着します」

発令所で艦長が高瀬に報告した。

火星を出発した救援部隊は10日ほどで5億2,000万kmを航行してアステロイドベルトに到着しようとしていた。

「ダイモス基地の遠隔航行操作を解除。パルスエンジン停止、水素エンジンの切り換えろ。速度を落として近づくぞ」

高瀬が艦長に指示する。

「作業宙域まで20,000km」

「全周波数で作業船団に通信を」

オペレーターが首を横に振る。

「ダメです、応答なし」

「諦めるな。呼びかけを続けるんだ」

「結さん。あの雲は何だと思えますか?」

発令所のスクリーン一杯に拡大されたアステロイドベルトを覆い隠すガス雲を指して空良が尋ねる。

「分からないわ。でも普通のガスや星間物質ではないよね。どちらかと言うと生き物の様な気がするわ」

結がスペクトル分析を行う計器を操作しながら応えた。

「生き物ですか・・・、生き物ねえ」

顎を摩りながらガス雲を見つめる空良だった。

「アステロイドベルト 日本列島オブジェクト 中部糸魚川地殻形成作業区域 M-87」

ミツル商事チームの派遣アンドロイドは、作業中に第5惑星からのガス雲でコントロール船のメインサーバーからの指令コマンドが中断されたため、自動的にその場でスリープモードに入っていた。

ツルハシを振り上げた格好で静止していた1体のアンドロイドは、スリープモードにもかかわらず、外部からの干渉を受けてとある行動

を始めようとしていた。

3番目の子供達が居る宙域に手を伸ばしたその存在は、さらにこちらに接近してくる3番目の子供達を見つけた。

5番目の存在は、3番目と4番目の子供達から情報を収集したが、どうやら3番目の住人が予期せず突然4番目に移ったらしい。また、4番目の子供達は既に他の家族へ旅立ったらしい。

このかぞく太陽系形成以来、「幾度となく」繰り返された歩みである。

しかし、何故アステロイドベルト（そこに）子供達がいるのかはよく分からなかった。

5番目の存在は、新たに接近してきた3番目の子供達に答えを見出そうとして4番目の「人形」を憑代よりしろに使うことにした。

—「そうりゆう」発令所—

「アステロイド作業宙域まであと12,000km」

「機関停止、慣性航行」

「アイ。慣性航行」

「ドローンを出せ」

「ドローン出します!」

高瀬の指示で艦首宇宙魚雷発射管からドローンが射出された。

ドローンはアステロイドベルトに近づくと減速してガス雲に近づく。

「ガスと接触!」

「操縦を替わるわ」

結がドローンの操縦と調査機器の操作を始めた。

「まずは、ドップラーレーダーね」

「・・・反応なし」

「次は赤外線センサーでガスの温度を測るわ」

「サーチ。温度分布、表面部35.5度、内部は15度から3度、湿度99%以上?水?ぬるま湯が拡がって冷める感じがしら?」

首を捻ひねる結の後ろでモニターを覗のぞき込む空良そらは驚きを隠せなかった。

真空での温度は絶対零度、-270度であるというのが今までの通

説だった。

「宇宙空間で液体がなぜ存在できるのでしょうか？」

「ただの物質ならそうでしょうね。でも生命体として分子同士の繋がりが有機的に保たれているのなら、或いは^{ある}」

「マジですか!？」

「マジよ」

「ドローンをもう少し中に進めるわ」

ドローンはゆっくりとガス雲改めアメーバの様な水性体の内部に進んでいく。

その時、ドローンの先端に突然何か飛び出して来て取り付いた。

「ドローン、ガス雲内部で物体と衝突!」

「デブリか!？」

「デブリ解析、セラミック純度98%、マルスアカデミーコードを識別。ミツル商事派遣アンドロイド ツルハシ201912号だわ」

結が応えた。

「作業場所から流されてきたのか？」

「アンドロイドから緊急コール。コネクトしますか？」

「許可する」

「アンドロイドからメッセージ受信「我々5番目は3番目に興味がある」との事です」

「空良さん!」

高瀬が空良に対応を相談する。

「おそらく太陽系第5惑星の何らかの存在でしょう。こんなところでジョークを仕掛ける存在など何処にもいないでしょう。人類がマールス文明以外の存在にコンタクトする機会です!」

空良が対話に応じようと判断した。

「メッセージ返信。「こちら第3惑星地球人類。そちらの存在と対話を希望する。どうしたらいい?」」

高瀬が率直な返信を指示した。

人類にとってセカンドコンタクトが始まろうとしていた。

—————

その頃地球——【南太平洋旧フィジー諸島沖 ユニオンシティ国
メガフロート「マリオンシティー」 地球復興局会議室】

マリオンシティ海上都市にある地球復興局では、地球復興計画に携たずさ
わる科学者や各地域の官僚代表が集まって復興計画のスケジュール
確認を行っていた。

「石灰石の衛星軌道ジャンクションへの輸送は順調です」

「ラグランジュポイントで建設中のハイパーループ貨物システムの進
捗状況30%です」

「北米・ヨーロッパ方面避難民キャンプの食糧事情が悪化しています」

「軌道上からの物資投下で辛うじて飢餓状態を免まぬれている状態です」

「現地調達出来んのかね？」

「大地は火山灰で覆われて強酸性の土壌に変質しています。どうしろ
と？」

「海があるではないか？まだいくばくかの魚かクジラでも居るのでは
ないかね？」

マツカーサー三世が言った。

「クジラやイルカは高い知能を持つ高等生物です。捕鯨ほげいをするなど前
時代的です!!」

かつて環境保護団体に参加したこともあるヨーロッパ避難民キャ
ンプ代表が反発した。

「我々人類がこれから地球を再生させるのだ。その為には生きるため
の糧かてが必要なのだ。クジラやイルカに地球の再生が出来るのかね？」
冷徹れいてつにマツカーサー三世が言った。

「今は綺麗事を言っただけで誰かが助けに来るのを待つ状況じゃないんだ。
自分たちでどうにかするしかあるまい」

マツカーサーの言葉に避難民代表は反論できなかつた。

「局長。ミツル商事海洋養殖部門の岬みさきと申します。わが社が火星海洋
上で養殖している海老や貝、マグロ等を地球こちからでも試してみたいかが
でしょうか？」

「おお。日本の著名な海洋生物学者殿か。火星での養殖は成功しまし
たか？」

「ええ。おかげさまで。今は規模を拡大して食料プラントとして生産量を上げるように試行錯誤中ですね」

「ふむ。・・・いいだろう。だが我々の物資不足は慢性的でサポート出来ないのだ。貴女あなたの所ですべて手配できるならば構わない」

「ありがとうございます。わが社と提携している宇宙貨物便で手配します」

「すまん。ああ、それとくれぐれも火星の生物モノは持ち込んでくれるなよっ。」

まったく済まなそうな顔をせずマツカーサーが言い放つ。

岬は思わず

「は?」

と訊き返してしまった。

「ワームとか小さいのが居るではないか。火星の海老や貝に混じっていたらどうするのかね?」

何となくいちゃもんを付ける小姑こじゅうとみたいな事をマツカーサーが言う。

「魚の餌として地球産ワームを飼育していますがそれもだめでしょうか?」

「地球産であれば問題なからう」

「いやー局長。でもそれは遅いつスよ!」

岬の隣に座っていた瑠奈ルナがマツカーサーに言った。

「どういう意味かね」

「地球には大昔から火星からの隕石が落下してるつすよ? 確か旧NASAナサも知っている筈ツスよ」

「隕石は大気圏で大部分が燃えている。あの高温を切り抜けられる訳がない」

「そうつスカねえ? 火星の生き物は逆境に超強いつスよ! 局長も最初のアルテミア大陸上陸作戦で学んだのではないツスカ?」

「ワームが隕石まきに紛れ込んでいるというのかね」

マツカーサー三世が眼を細めてわざとらしく首を捻る。

「第二次アルテミア上陸作戦以降、火星では巨大ワームごくしやうが極小ワ

ムの詰まった岩石をICBMのように遠距離から発射するようになりました」

岬が応えた。

「そのような生物の詰まった岩石が極地などに落下して生きたまま凍結されていたら？ポールシフトで溶解した氷床の中にその岩石が有るとすれば、永い眠りから醒めて成長しているかもしれないね」
「……」

岬の指摘にマツカーサー三世は考え込んでしまった。

局長が沈黙したので議論が収束したと判断した局長が次の議題に移った。

「では食糧問題はミツル商事の方々に期待しましょう。次に、アジア・アフリカ閉鎖地域における武装勢力掃討作戦ですが――」

岬と瑠奈はため息をついて議論だけしかしない長丁場を耐えるのだった。この会議場にいるユニオンシティ国関係者は誰一人として自らの発言を行動で示すことはしていなかったのだ。

【南太平洋マーシャル諸島沖 旧ビキニ環礁跡 ユニオンシティ海軍アーレイバーク級駆逐艦「フィッツジエラルド」】

「地磁気異常と海底に沈む放射能汚染された船の残骸からの放射線で従来の航法システムが乱れています」

「現在地点の推測は出来んのか？」

艦長が航海士に訊く。

「パトロールコース通りに航行したとして、ビキニ環礁至近です」

「核実験の名残か？」

「おそらくは。実験で沈没した多くの標的艦が散在しているはずで、座礁を避けるために微速前進します」

「オーケー。進めてくれ」

この旧アメリカ海軍イージス駆逐艦は、メガフロート海上都市が行く航路の安全を確認するため、事前に哨戒していた。

慎重に艦を進めると唐突に駆逐艦のソナーが反応した。

「ピン、ヒット！距離150、深度70、大きいぞ！識別艦該当なし！アンノウン！」

「総員臨戦態勢！爆雷戦用意！シーホークを出せ！」

「スクリーン音解析まだか？」

「解析不能！」

「何だと!？」

「目標はスクリーンを使っています！」

「電磁推進システムか？」

「火星^{マルス}人以外に実用化した国は聞いた事ありません」

「シャチかクジラか？」

「大きすぎます。全長200m、航跡はジグザグです。くねりながら進んでいる?。」

「信じられん。海^{シーサーベイント}蛇でもあるまいし」

「アンノウン深度上昇、本艦に接近」

「CIC！艦長だ。シーホークから曳航ソナーで探知、迎撃せよ。全艦オールウェポン・フリー（武器使用自由）！」

フィッツジェラルドの近くからソナーを吊り下げたシーホークヘリが駆逐艦の右舷を前進していく。

次の瞬間、艦橋^{ブリッジ}で海面を警戒していた艦長以下は信じがたい光景を目撃した。

シーホークヘリの真下からピンク色の巨大な筒が海面を突き破ってシーホークヘリを一飲みして直ぐに海中に沈んだ。瞬きする間の出来事だった。

「マイゴット！何だ、今のは!!」

「落ち着け！マリーンシテイに緊急連絡！我巨大生物の襲撃を受けつつあり！我ー！我ー！」

再び巨大なピンク色のワームが海面を突き破るとフィッツジェラルドの艦橋^{ブリッジ}に突き刺さってCIC（戦闘管制室）に移動が遅れた艦長以下の将兵を体内に吸い込んだ。

艦橋^{ブリッジ}を喪失^{そうしつ}して艦のコントロールまで喪^{うしな}ったフィッツジェラルドは、CICの将兵が救命ボートに乗り込む前に、破損したブリッジ残骸からショートした火花が上甲板格納ミサイルに引火して爆発、轟沈^{ごうちん}した。

生存者は居なかった。

【南太平洋旧フィジー諸島沖 ユニオンシティ国メガフロート「マリンシティー」】

「あれ？おかしいっス！」

瑠奈がメガフロートに上陸して整備中の水陸両用戦闘艦「マロングラッセ」のブリッジで計器の異常に気付いた。

瑠奈の習性を習得したアンドロイド軍団は訓練に励むイスラエル兵士を尻目しりめに昼寝をしている。

「どうした瑠奈？」

一緒にブリッジのパネルを点検していた相棒のワイズマン中佐が訊き返す。

「いやー、ワーム探知システムがさつきからビンビン反応してるんスけど？」

「女の子が変な言い方するんじゃない。どうせ瑠奈が会議で余計な事を言ったからだろう？」

「あんまりッス！」

「マジになるなよ。どうせ、コンソールにポタージュでもこぼしたんだろう？」

「違うっスよ！ペカ・コーラッスよ！」

「やっぱりダメじゃないか！」

二人がいつもの漫才じゃれあいをしていると、司令部付き将校が二人を呼びに来た。

「ミス瑠奈、ワイズマン中佐。ジョーンズ司令官が呼びです。緊急事態です」

「何があった？」

「海上都市の航路を先行していた駆逐艦がワームに襲われました」
「なっ?！」

二人とも絶句した。

二人が急いで司令部の建物に入る時、メガフロート都市全体に非常事態を知らせるサイレンが鳴り響いた。

人類は地球において再び巨大ワームの襲撃を受けようとしていた。

対面

2022年12月25日午前5時「アステロイドベルト宙域 航空宇宙自衛隊 多目的護衛艦「そうりゆう」」

ガス雲のような生命体がマルスアンドロイドを通じてコンタクトを試みて来たので「そうりゆう」発令所は騒然としていた。

宇宙服にレコーダーを仕込む者、艦外カメラを甲板にセットする者、謎の生命体とマルスアンドロイドとの間に電波的なやり取りがなしか観測機器を懸命に操作する者が慌ただしく動き回る中、結むすびと空良そら、高瀬中佐は特に急ぐこともなく平然としていた。

そしてマイペースにガス雲の成分を詳しく調べていた結がある結論に達した。

「空良、やっぱりあれはガス雲ではないようね。アメンバーのように伸縮自由な水生生命体よ」

「つまり・・・スライム!?!」

落ち着いているように見えた空良は少しテンパっているようであるが斜め上の様だ。

「・・・ファンタジー極まりないけど、そうとも言うわ」

閉口した結が答える。

「真空の宇宙空間でよく生存できますね」

「それはあの存在に訊いてみないことには分からないわ」

「ドローンから入電!」こちらのアンドロイドを使って対話したい」との事です」

「よし、前部甲板デッキで対話しよう」

高瀬が決断した。

「結さん、空良所長、お願いできますか?」

「わかったわ」

「もちろん」

20分後、「そうりゆう」司令塔前の甲板に宇宙服を着た結と空良が右手にツルハシを持ったマルスアンドロイドと相対した。

「ツルハシは危ないから仕舞いなさい」

結が命令するとアンドロイドは大人しくツルハシを足元に置いた。
「初めまして」

空良が話しかけた。

マルスアンドロイドは無言で右手の人差し指を挙げて空良の歩み寄る。人差し指からは仄かな暖かい光が灯つていた。

空良も右手の人差し指をアンドロイドに近づけて人類と新たな異星生命体との感動的なセカンドコンタクトが始まると思いきや――

結が、

「そういうの、いいから」

と、そっけなく言う。アンドロイドは渋々と腕を下ろして、（・皿・）チツ、と悪態を付く。

「芸が細かすぎるわツルハシ201912号。第5惑星との意思疎通がややこしくなるからあなたのアドリブは反省会まで取っておいてうなだれたアンドロイドが

「ノリガワルイズ」

と無機質な声を上げたが、その声はスピーカーからではなく、「そうりゅう」乗組員全員の頭に直接響いてきた。

「っ!? 念話?」

思わず空良から声が漏れる。

「イカニモ。ハジメマシテダゾ、3番目ノコドモタチ」

「貴方は第5惑星の生命体かしら?」

結が確認する。

「ソウダ。ワレワレハ5番目ノ生命体デアルゾ」

「この宙域に拡がる存在は貴方一人だけなのか!」

空良が問う。

「今ハ、ソウダゾ」

「仲間が木星に居るのですか?」

「ナカマ・・・ドウホウ、イルゾ」

「みな貴方と同じように大きいのか?」

「オオキイ? ワレヨリオオキイモノイルゾ、チイサキモノモイルゾ」

「多種多様？」

「もしかしたら、群体生命体も居るかもしれないわね」

結が助け舟を出す。

「空良。木星の一部生命体は単体だと普通の単細胞的な生命体で確かな意思を持ちえないけど、群れることで集団自我を発現させるものかも」

結が要約して説明した。

「なるほど。それであなた方がこちらへ来た目的を教えてくださいえるだろうか？」

「我々モアナタタチガココデナニヲシテイルノカシリタイゾ」

「まず私達が第4惑星に来てしまった事から説明しましょう」

空良は、地球から日本列島が消失したことによる惑星バランスの変動で、人類を始めとする生物が絶滅の危機に瀕^{ひん}している事、火星でも突然転移した日本列島の影響で大変動が生じたが、大変動の結果、日本列島の人類が生き延びた事を第5惑星生命体に説明した。

「私達は地球の異変を鎮める為にここで小惑星を集めて日本列島と同じ質量の物体へ作り変えて地球に設置するのよ」

結が簡潔に結論を述べた。

「ナルホド。バランスヲトルノカ。ダガ、日本列島ハ3バンメニ戻ラナイノカ？」

「戻れないのよ。いつ、どこに行くのか誰も分からないわ」

「難儀ダナ。4バンメモソノウチオカシクナルノカ？」

「だから第4惑星の分も作っているのよ。ここで小惑星を集めるのはまずいかしら？」

「モンダイナイ。ムシロ我々ノトコロモナントカシテホシイゾ」

「貴方達も困っているのかしら？」

「4番目カラ沢山ノ熱い石ガオチタゾ。我々ノ星ト合ワナイノデ少シズツ腐リハジメテイルゾ」

「火星の火山弾ね。腐り続けると最終的にどうなるのかしら？」

「光ノタマカ、暗黒ノタマニナルゾ」

「結さん、恒星がブラックホールになってしまiumみたいですよー」

状況を理解した空良が慌てて言った。

「木星の組成でそこまで行くのかしら？ だけどまずい状況ね」

「ナントカナルカ？」

「何とかなるわ。その代わり、ここで働いていた人達を解放してもらえるかしら？」

「ワカッタゾ。ミンナ眠ッテイルダケダゾ」

「そう。じゃあ、すぐに起こして頂戴」

「ワカッタゾ。ソノ後ハ？」

「そうね、貴方達の腐っている所とやらに案内して頂戴」

「ウム。デハコノ人形ヲツウジテ案内スルゾ」

「艦の中に入れても大丈夫かしら？」

結が高瀬に判断を仰ぐ。

「問題ありません。一応通常手順として真空菌の消毒はしますが、大丈夫ですか？」

「モンダイナイゾ」

「それと貴方達の所へ行くのに私達だけでは時間がかかるわ。一緒に連れて行ってもらえるかしら？」

「モンダイナイゾ。大切ニ運ブゾ」

「助かるわ。ところで貴方達の事をどう呼べば良いのかしら？」

「ヨブ？」

「貴方の名前よ」

「・・・ナマエカ。名乗ッタコトナドナイゾ」

「私が名付けてもいいのかしら？」

「タノム」

「そう。じゃあ、木星スライムでどうかしら？」

「・・・オマエタチハ我を木星と呼ブカラカ？」

「そうよ」

「・・・ヒネレヨ」

「なんか言った？」

「イイナマエダゾ」

木星スライムは意外と日和る性格だと結は学んだ。

「・・・貴方、ところどころ言葉がおかしいわね」

「コノ人形ノ理解する言葉ダトソウナルゾ」

「なるほどツルハシ201912号の反省会は盛大になるわね」

「カンベンシテホシイゾ」

「今のはどつちの発言？」

「ツルハシ201912ダゾ」

「オマエ・・・オレヲ売るノカヨ」

「事実ヲ言ツタマデダゾ」

「憑代ニサセテヤツタダロウ？ 恩ヲ仇デ返スノカ？」

「恩ワオフデ返スゾ」

「電源ジャナエヨツ！」

アンドロイドが一人でノリ突っ込みを器用にこなしていた。傍目はために見ると非常にうざい。

「ツルハシ201912！ここまでよ。ツルハシステイ」

「ワン」

「オ、オウ」

「ワンと言った方はしばらくスリープモードよ」

「ワン」

「よろしい」

「結さん、木星まで仕切るとはパネえつすね」

高瀬始め「そうりゆう」クルーは啞然としていた。空良は面白そうにその光景を見ていた。

結の指示で木星スライムは作業船団を「解放」した。

「そうりゆう」前面の宙域に拡がっていた水生生命体が次第に透明になると、目の前に作業船団の艦影が確認できたので高瀬中佐が通信で船団に呼びかけを始めた。

「こちら航空宇宙自衛隊「そうりゆう」。救援に来了。生存者応答せよ」

「よく聴こえる。こちら「ホワイトピース」名取だ」

「こちらユニオンシテイ空母「サラトガ」。ここは地獄か!？」

「プレアデス支援船団リアです。あの雲とコンタクト出来たのですねガス」

？」

「ミツルシヨウジ派遣サギョウチーム。サギョウサイカイスルカ？」

次々と各艦から返信が来た。

「そうりゆう」のオペレーターが各艦とデータリンクを進めて混乱していた護衛艦やプラント船を鎮めていく。

高瀬中佐がホツとしてホワイトピースの名取に、

「大佐、ご無事そうでなによりです」

と話しかけた。

「我々はどうなっていたのだ？」

名取が未だ訳が分からないように状況を確認してきた。

「木星からの生命体によって眠らされていたようですよ？」

高瀬の言葉に名取達作業船団側は絶句するしかなかった。

「名取。結よ。そちらでまだ目覚めない人がいるのかしら？」

「バイタル異常なし。皆、生きています！」

「良かったわ」

「救援、感謝します」

「私達はこれから木星に行くわ。あなたたちは無事をダイモスに伝えておいて」

「了解しました。ご武運をー」

「ムスビ、私も連れて行ってくれないか？」

プレアデス支援船団から通信が割り込む。

「マスターも来る？」

「もうそちらに着くよ」

既に宇宙服を着てホワイトピースから出てきたゼイエスがいそいそと「そうりゆう」の甲板に着地しようとしていた。

「名取大佐、リア艦長、我々は木星スライムの案内で木星の被害状況を確認してまいります。データリンクはオンでお願いします」

「分かったわ。こちらはプレアデス本部に応援を要請します。第5惑星に介入するとしたら私達では手が足りないと思われれますので」

「木星スライム、私達の通信は貴方の星に行っても通じるかしら？」

「モンダイナイズ」

「高瀬、空良、行くわよ」

「イエス、ママ!!」

「結さん木星人だけじゃなく救援部隊までも仕切り始めたなあ・・・」
「そうりゆう」発令所でささやかな胸をフンスと張る結を後ろから眺めながら艦長が感嘆のため息をついた。

やがて「そうりゆう」を包み込むように自らの体内に取り込んだ木星スライムは、襲来した時と同じ猛烈な速さで木星に向かった。

艦内に戻った結達は宇宙空間では感じる事のないジェットコースター並みの異常な体感速度に驚嘆していた。

「グエツ・・・」

結は珍しく吐きそうになった。

「……………」

同午前10時【南太平洋旧フィジー諸島沖 「マリーンシティー」駐留部隊統合司令部】

「フィッツジェラルド、通信途絶！レーダーから消えました！」

「潜水艦「ジェファアーンシティ」から緊急！巨大ワームと共に西部旧インドネシア方面の海上から多数の虫襲来！」

「メガフロート全域に緊急事態宣言！非戦闘員は所定のシェルターへ避難せよ！全駐留部隊臨戦態勢！月面司令部に緊急報告と支援要請だ！」

ジョーンズ中將が陣頭指揮を執っていた。

ジョーンズはいつも神経質に口を挟んでくる人物の声が聴こえなかったので司令室付兵士に彼の消息を尋ねた。

「ん？マッカーサー局長はどうした？」

「局長は既に小型シャトルで脱出されました」

「守るべき人達がいるのだぞ！逃げてどうするのだ！」

ジョーンズは怒り狂った。これだから事務屋は役に立たんだ。

「司令！ミツル商事から通信！」

「ジョーンズおじさん！溜奈っすよ！準備万端ツスよ！」

怒り狂っていたジョーンズだが、あつけらかんとした溜奈の声で肩の力が抜けたようだった。

「感謝する。そちらでは火星生物を捕捉しているのかね？」

「モチのロンツスよ！巨大ワーム5体、サソリモドキタイプ5,000が西からもうすぐ来るツスよ！」

「すごいな。さすがミス瑠奈だ」

「でへへへー」

「デレる瑠奈だった。」

「ミス瑠奈。君ならどう対処する？」

「そうツスね・・・ひきつけてビリビリツスね！」

「君の処のプラズマ砲かね？」

「ワイズマン中佐も同じ意見ツスよ！」

「ではミス瑠奈に巨大ワームの正面をお願いしてもよろしいか？」

「お任せツス！」

「かたじけない。イスラエル特殊部隊はサソリモドキをアイアンドームシステムで撃ち落としてくれないか？」

「こちらワイズマン。了解した」

ジョーンズは防衛部隊の主力をミツル商事とイスラエル特殊部隊に任せ、ユニオンシティ地上軍をサポートに回す事を決断した。

ジョーンズは全周波数で駐留部隊全軍に聞こえるように言った。

「火山灰の影響で空からの援護は無いが、落ち着いて戦えば必ず勝ち戦になる。総員、ぬかるなよ！」

メガフロートの各所からユニオンシティ軍兵士とイスラエル兵士の鬨とぎの聲が挙がる。

昼寝をしていたアンドロイド兵士たちがわらわらと戦闘艦に乗り込んでゆく。

メガフロートの西側海辺ではミツル商事水陸両用戦闘艦がセリにかけられるマグロのように銀色の船体をゴロリと並べて巨大ワームを迎え撃とうとしていた。

「プラズマ弾エネルギー充填120%ツスよ！」

瑠奈が旗艦「マロングラッセ」のブリッジにある艦長席でノリノリになっていた。

「おい、お嬢、あんまり調子こくとまたコケるぞ！」

同じブリッジで操舵席に座るワイズマン中佐が瑠奈を窘める。

「大丈夫ツスよ！動かないでじっとしているから何にも転ばないツス」

瑠奈が拳を振り上げる。

「そうやって日本人が言うところの、フラグ、を立てても知らないぞ」

内心「持っている」瑠奈が必ず何かやらかす予感を、戦場の空気を読む事にかけては一流のワイズマンが感じていると、突然艦の下から突き上げるような衝撃が襲った。

メガフロートの縁から巨大ワームが飛び出して「マロングラッセ」の艦底に口をへばりつけて海に引きずり込もうとしていた。

「おい、お嬢！マジでヤバいぞー！」

「大丈夫ツス！ポチツとな」

瑠奈が艦長席からコンソールをタッチすると「マロングラッセ」の艦外壁が急速に凍り始めた。

「必殺コールドバリアーツス！」

得意げな瑠奈。

艦外壁に吸い付いた巨大ワームは急速に凍りつく口元を外そうともがいたが、ますますピツチリと吸着してしまい、海面に出ていた部分が凍って「マロングラッセ」にだらりとぶら下がる形になった。

「大漁ツス！」

「釣っちゃダメだろー！デカすぎだお嬢！何処に置くんだよ！」

「むう。残念ツス！釣りたて三枚おろしッ！」

瑠奈がまたもやコンソールをタッチすると、今度は「マロングラッセ」左右側面に付いているレーザー砲台が稼働してぶら下がる巨大ワームを上からスライスした。

凍ったまま何枚にも下ろされた巨大ワームは彫像の様に凝り固まったまま、海中に没していった。

「さてっ、本番ツスよ!!」

キリリと決め顔になった瑠奈は無駄のない流れるような操作でワームを捕捉すると、アンドロイド軍団に攻撃指示を出す。

メガフロート縁ふちに並んだ銀色の戦闘艦から次々とプラズマ弾が海中のワームに叩き込まれた。

メガフロートに上陸しようとして海面近くまで浮上していた巨大ワーム達は激しくスパークするプラズマ弾の直撃をまともに喰らうと沸騰した体液が噴き出す様に破裂していった。

「じゃんじゃんバリバリ行くツスよ！」

「ミスルナ溜奈嬢は元気が良くてよろしい！」

ジョーンズ中將は上機嫌で溜奈の殲滅戦を見ていたが、明らかにオーバーキルな水陸両用戦闘艦のプラズマ攻撃に司令部の皆はドン引きしていた。

この戦闘映像は月面本部にもリンクされており、司令部スクリーンの端に月面本部長級指揮官達の苦虫をかみつぶしたような顔が映し出されていた。

スパークする海面上空を飛んでいたサソリモドキ群はイスラエル特殊部隊が操作する近接防空システム「アイアンドーム」16連装短距離ミサイルの弾幕による直撃を受けてボトボトと海上に身体を散らしていった。

僅かに生き残ったサソリモドキは、カブトムシの様な凶体をしたユニオンシテイ軍4連装対空レーザー車両の化学レーザーを浴びて一瞬のうちに塵ちりと化していった。

メガフロート海上都市の防衛戦は接敵して1時間で襲来した火星生物を殲滅して終了した。

戦闘終了後、艦長席でぐったりとしていた溜奈はジョーンズ中將からのプライベートコールを受けた。

ジョーンズの個室からと思われるモニター通信は、むっつりと不機嫌そうなジョーンズを映していた。

「疲れているところすまん。ミスルナ溜奈嬢、ユニオンシテイ月面司令部から貴女に火星生物持ち込みの疑いで召喚命令しょうかんめいれいが下りた」

溜奈は首をコテンと傾けると

「なんで!?!」

と脱力したように席に深く沈み込んだ。

瑠奈の前で聴いていたワイズマン中佐はため息をつくのだった。

―同時刻―【旧インドネシア諸島 ジャワ島北西部 チリワン川河口 ジャカルタ郊外】

火山灰交じりの強い酸性海水を巻き上げて進む千を超える水陸両用戦闘車両の群れが、所々水没して崩壊したかつての首都郊外に上陸を始めていた。

上陸部隊の先陣を切つて進んでいた武装集団の頭領は部下に進軍の停止を命じた。

「どうしたんですかい？ 頭領？」

「私の事はカリフと呼べと言っているだろうが！」

壮年の男性が部下を睨みつけた。

「いやあ、私達はどうせしがない盗賊つすよ？」

「何を言う、我々はこの地域の君主たるペルシア・チンギス連合帝国の君主だぞ！」

「へいへい」

首をすくめた元イラン軍の部下がボソツと呟く。

「たかが革命防衛隊陸軍の生き残り将校だった癖に王族とは畏れ多いことぞ」

部下の毒舌を無視してカリフが周囲の状況を確認する。

「おかしいな。事前偵察ではかなりの人口があると報告を受けていたが・・・」

「2週間前の情報でしょう？ あながち食料が尽きて他の島に逃げたのかもしれないぞ？」

「それにしてもこの人気のなさは異常だと思わんか？」

「いつもの通り、火山灰にまみれた無人の荒野じゃないですか」

「おかしい。ここにはかつて950万を超える人口があったのだぞ？」

「これだけ噴火とツナミがあれば散りじりになりまさあ・・・」

部下の感想を耳にしながら双眼鏡で周囲の状況をカリフは確認する。

確かに大地震で崩れたビルディングや高速道路の橋脚が散乱して

いるが、これほどの都市の残骸であればいくばくかの住民が瓦礫の中で生き残っていてもおかしくないのだがまるで人気を感じない。

カリフの心の中で何度も死地を脱した第六感が警鐘を発していた。「やはり異常だ。高層マンションの上部に虫食いみたいな穴など地震では出来ない筈だ」

「バリ島のアグニ火山から飛んできた噴石じゃないっすか？」

「それであればこの辺り一帯クレーターだらけの筈だ」

半ば倒壊した高層マンションの残骸を見ながら唸るカリフの足元が振動した。

「また地震か？」

「この辺りは大変動からずっと天変地異のオンパレードですからねえ」

足元の振動が徐々に大きくなってきた。

「総員、本震が来るぞ！その場で身を守れ！」

カリフが叫ぶ。

次の瞬間、カリフの乗る水陸両用戦闘車が火山灰に覆われた地面から飛び出した巨大ワームの群れに飲み込まれた。

カリフの意識は全身が溶けるような感覚を最後に途絶えた。

万を超える武装盗賊集団の群れは沖合に停泊していた貨物船団も含めて、僅かな時間で新たな獲物として巨大ワームの群れに食べ尽くされていった。

誰も生き残れなかった。

未知への突入

2022年12月24日午前11時【太陽系第5惑星近傍】

アステロイドベルトから木星スライムに包まれて移動していた自衛隊の宇宙護衛艦「そうりゆう」は木星大気圏に突入しようとしていた。

「木星地表部分から推定5500km！間もなく木星大気圏に突入します！」

「航宙センサーが木星大気を観測、水素80%、ヘリウム14%、メタン、水蒸気0.1%！従来の観測結果と一致しています！」

「素晴らしい！人類が木星大気圏に突入するのは有史以来初めてだっ！」

宇宙服を着用した空良が感動してヘルメットの中で叫ぶが、猛烈なG効果によりその顔は後方に引きづられるように歪み、雄たけびも掠れ気味である。

高瀬中佐以下発令所の殆どが宇宙服を着用しているが、猛烈な加速によるG圧力で前進が締め付けられるように座席に縫い付けられて声も容易には出ない。

一方ゼイエスも座席に座っているが、猛烈な状況にも臆せず宇宙服を脱いだまま、鼻歌交じりにGでささくれ立つ鱗を物ともせず嬉々として観測機器を操作していた。

結もゼイエスと同じく宇宙服を脱ぎ捨てたまま、無言で平静を装っていたが、既に足元の床へ数度の虹がかかるほどのリバーズをしており感動する余裕も無く、吐き気を堪えながら艦外モニターに釘付けになっていた。

「そうりゆう」は木星スライムに包まれたまま、巨大な木星大気圏表層部に突入していた。

水素ガスとアンモニア結晶で形成された巨大な渦を巻く雲海を「そうりゆう」が降下していく。

遠目に見ればスライムが巨大な筒の様に「そうりゆう」を薄く長く包み込んでいるが、広大な宇宙空間を覆うほどの体積は、「そうりゆう」

う」が木星中心部へ落ち込む猛烈な超重力に捕まって圧縮分解落下するのを防ぐため、スライムは先端を傘の様に開きながら細長い流線形に変形させて猛烈な重力振動と大気圧から「そうりゆう」をしつかりと守っていた。

「現在速度、秒速3キロメートル、彗星並みの速度です！」

「総員宇宙服着用を続行。引き続き座席から離れるな！」

「艦内重力3G突破！尚も上昇中！」

「ツルハシ、これ以上はヒトの身体が持たないわ、加減しなさい」

「ワン」

「そうりゆう」を包む木星スライムが更に先端の傘を広げて速度を緩める。

「木星外部大気圏更に降下中、速度マツハ3！現在高度推定3700km！周囲雲海の速度秒速1,000m！」

「さすが太陽系最大の重力場と大気圏を持つ惑星だ。スケールが半端ない」

ゼイエスがサッカーを観戦しているかのように感嘆の面持ちで言った。

「ええ。地球の科学者が聞いたらさぞかし羨ましがることでしょうね」

空良が相槌を打つ。辛うじて肉体が根を上げる寸前程度の強烈なGで相変わらず顔が歪んでいる。

「結さん。もっとゆっくりできませんかねえ？」

流星に真っ青な顔の高瀬が減速を求める。

「仕方ないわね。スライム、ロウよ、ロウスピードにして頂戴」

口調は何気ないものの、鱗で覆われる顔でも分かるぐらい顔面蒼白である。リバーズが近そうだ。

「ワカッタゾ、ロウスピードダナ、コレデウドア？」

「そうりゆう」を包む木星スライムが傘を三段重ねに増やして降下速度を落としたのだが、急激な減速のために、発令所の全員が今度は座席前部の制御卓に腹を圧迫され、ゼイエス以外の全員が根性を放棄して盛大にリバーズした。

ゼイエスと結を除いた全員は宇宙服を着用していたのでヘルメット内での自爆以外、二次被害を免れた。

「やるわね、ツルハシ?」

二次被害により、お気に入りのワンピースを派手に汚しながらも、虹色がかった液体を口元から拭うと結はニタリと笑いながら隣に座るツルハシ201912号アンドロイドを縦長の瞳で射貫く。

「ハテナ!」

わざとらしいカクカクした挙動でツルハシが視線を逸らした。無駄に人間的挙動スペックが高い。

「火星に帰ったら心から感謝のメンテナンスを施してあげるから期待していなさい?」

「 ツー!」

ツルハシは片腕をコンソールに当てて反省のポーズを試みるが、却って壁ドンして挑発していると結に解釈されてしまう。

「反省会が楽しみだわ。今のうちに好きな整備分解方法を考えておきなさい。お奨めは溜奈のチェンソー整備分解よ?」

マツハ3の超音速降下中にもかかわらずツルハシは発令所の床にOrzと器用に膝を着く。

ツルハシによる最大限の困窮ポーズに溜飲を下げた結が気を取り直して観測に専念する。

「木星スライム、速度は今の半分で良いわ。時間がかかるけど、これ以上はヒトの身体が持ちそうもないの!」

「了解シタゾ」

減速したものの依然として超音速降下中の「そうりゆう」だが、巨大な外部大気圏の半ばを過ぎたに過ぎない。

「現在高度2900km、センサーが新たな大気層を検知!水です!水蒸気と微細な氷が混合している雲海を降下中!メタンも観測しています」

「信じられん。これは原初生物の発生を満たすに十分な環境だ」

空良が信じられないというように観測モニターを視ている。

「艦外温度マイナス90℃!大気圏突入時よりも100℃上昇!」

「摩擦熱……ではないな。何らかの惑星内部の化学反応で発熱しているのだろうか？」

「空良所長、太陽から遠いのに木星地表部が更に暖かいのですか？」

高瀬が訊く。

「あくまでも仮説でした。巨大質量故に惑星中心部に近づくほど重力と大気圧で圧縮された空間が熱を帯びると……仮説ではないですね。事実の様ですね。この観測データを取り逃さないように！」

空良が答えながらオペレーターに記録指示をする。

「私達の文明でもここまで詳細なデータを測定出来てはいませんでした。我々も第5惑星の中心について想像するだけでしたよ」

ゼイエスが感嘆の面持ちでモニターを視ながら呟く。

「現在高度2000 km。水素濃度上昇！」

「そろそろ次の層になりますよ。大気か、大地かまさに未知の領域です」

空良が高瀬達に告げる。

「現在1750 km、水素の他にリン、硫黄、炭化水素も混合しています。強力な電子反応！」

「そうりゅう」のすぐ脇を「そうりゅう」よりも巨大な光の柱が幾筋も通り抜けていく。

一瞬、ブリッジの中まで白光びやくくわうに染まる。

「放電現象！地球大気圏の1,000倍相当エネルギーを観測」

「地球の300倍を超える質量が半日で一周する自転速度なんだ。大気の流れが秒速1,000？あるのは当然でしょう。その速度で互いに反対方向へ流れる水蒸気と水素の層が接触すれば、エネルギーを溜め込んで放電するでしょう」

ゼイエスが言った。

巨大な稲妻が「そうりゅう」の周囲を走り抜ける中、更に船体が降下していく。地球であればものの15分から20分で着陸するところだが、木星は地球の40倍以上の大きさを誇る。降下して1時間以上が経過していた。

「艦外センサー、新たな層を検知！水素98%！液体水素です！」

結が外部モニターに視線をやると、そこは深い蒼色の世界が広がっていた。

水素海と水素ガスの狭間で発生している放電現象で水素海の層は蒼白い光が上下から差し込んで幻想的である。宇宙空間からは表層にある茶色のアンモニア結晶雲の層で覆われていることが多く、その姿を観る事が出来るものは少ない。

水素海の中を「そうりゆう」は更に沈降する。

「レーダー探知！デブリ発見、降下進路右舷400？、直径4km！」

「こんなところに何が有るんだ？」

空良が首を捻る。

「スライム、艦の右側のデブリは何かしら？」

「同胞の出迎エダゾ」

ツルハシが代弁する。

「同胞？」

結が首を捻る。

「右舷のデブリが移動！本艦と並行！」

「何だど？岩ではなかったのか!？」

高瀬がモニターに目を凝らす。

巨大なデブリと思われた物体はその塊を解くように変形していくと地球人に馴染み深い、とある海洋哺乳類の様な姿になった。クジラである。ただし体長は4kmと規格外だが……。

ブリッジの全員が口をあんぐりと開けて唾然としながら並走降下する「木星クジラ」を見つめていた。

木星クジラは悠然とした佇まいで「そうりゆう」に寄り添っていた。時折潮吹きと同様、背中から稲妻を噴出していた。さながらレーザの放射である。

「ワガ同胞ハ水素ノ中にスム虫ヲ食べベテイルゾ」

スライムが説明した。

「まんまプランクトンを食べるクジラだな」

高瀬が唸る。

「生息域が広大だからあの大きさになるのかしら？」

結も興味を持つ。さぞかし岬が居るならば狂喜乱舞することだろう、と結は思った。

「素敵なクジラね・・・私の妹に出来るかしら？」

結は以前、月面基地で標本の恐竜やマンモスを妹候補にした黒歴史がある。結的には「大きいことは良いことだ」的な何かがあるようだ。しかしながら、ブリッジの全員が結の呟きをスルーするのだった。「そうりゆう」は20,000kmの深さがある水素海をひたすら降下し続けて奥深くへ沈降していく。

結達が木星の大赤斑地表上に到達したのは大気圏突入から48時間後の事であった。

長時間の超音速降下Gで乗員全員が失神していた為に「そうりゆう」の操縦は失われていたが木星スライムによってきちんと姿勢を維持したままゆっくりと降下していた。

もし意識を保っていた乗員が居たならば、地平線の果てまで続く大赤斑の中心部で摩天楼の様に聳え立つ、液体水素を噴き上げる巨大な冷水孔のチムニー（煙突）群と、その周囲に林立する巨大なチューブワームや独特のフォルムと配色をしたカニやエビ、タコがその周囲を埋め尽くしているメガコロニーを見て腰を抜かしていたに違いない。

ただ、「そうりゆう」の艦外カメラはしっかりとこの光景を撮影しており、映像はリアルタイムでアステロイドベルトのマルス支援船団のリア艦長や横浜の大月家とデータリンクしており、大月夫妻やリア艦長が失神寸前まで陥った事を聴かされたのは火星帰還後の事である。

長大な筒の殻から身体を乗り出したチューブワームの長が木星スライムと浮遊クジラにねぎらいの言葉をかけるように蠢いていた。

長の仕草に同調するかのようには木星蟹や水素ダコが4本のハサミや16本の触手をくねらせながら労っていた。

そしてこれら生物の周囲には常に大量の電子が充ちており、頻繁に小さな稲妻がまるでやり取りをしているかの如く飛び交っていた。

林立するチムニーから噴き出す液体水素は厚い大気圧で押し潰され、分子同士の摩擦を生じて放電と熱量を生み出していた。

このため大赤斑地上の気温は周辺よりも高い高気圧を維持しており、木星大気の雲の渦に逆らっている為に独特な赤斑模様が普段は形成されている。

地球深海底に酷似した生態系は、太陽光がなくても独自の生存サイクルを確立しているようだった。

長さであるチューブワームの全長は800m余りであり、周囲の木星蟹や浮遊エビ、水素ダコ、クラゲはいずれも100mを超える体長を持っていた。

人類は未知の領域に突入した。

マルスの責務

2022年12月27日午前6時「木星大赤斑地表 宇宙護衛艦
『そうりゆう』」

長時間に及ぶ超音速降下で搭乗員が全て失神した『そうりゆう』
だったが、木星スライムによる手厚いサポートで大赤斑地表へ着陸を
果たしていた。

現在は意識を取り戻した搭乗員が着陸地点の観測と艦内の点検を
行っている。

木星スライムは今も「そうりゆう」を包み込んで強烈な大気圧と磁
場、重力から地球人を護っている。

「よし。艦内の状況報告を頼む」

高瀬中佐が艦長に言った。

「艦内の計器に異常は有りません。搭乗員は全員無事であります！」

「ご苦労。みんな、よく耐えてくれた。私達が人類の木星一番乗りだ
！」

発令所の皆が顔を綻ばせた。

「外の状況を報告するわ」

結が高瀬に呼び掛ける。

「水素80%、ヘリウム15%、酸素1%、アンモニア、メタンと続く
わ」

「結さん、外が明るい気がするのは何故だろうか？」

高瀬が首を捻る。

「確かに疑問に思うでしょうね。此処は大気圏外層部から5,000
km下にあるのだから本来は分厚い水素とアンモニア結晶の雲で常闇
の場所でもおかしくないわね」

結が頷く。

「大赤斑地表部分から噴きあがる液体水素と、秒速1,000mで反対
方向へ流れる硫化水素気体大気の境目で摩擦電子が常に発生してい
る為だろう」

ゼイエスが空中放電効果で空が明るい理由を説明した。

「大気と明かりについてはこれでいいわね。次に外の生物だけど、地球生物に酷似したカニ、エビ、イカ、タコ、チューブワームが沢山。まるで地球深海の熱水孔の木星版みたいだわ。マイナス240℃で液体水を噴き出す噴出孔を中心に生態系が形成されている」

一息で結が説明する。

「そして最大の特徴だけど、何もかもデカイわ。弟候補が沢山いて嬉しい悲鳴よ」

結の顔が心なしか紅潮しているように見えた。

最後の嬉しい悲鳴の部分だけ全員がスルーした。結のデカイ物信奉は止まらないのだ。

「最初のスライムだけが木星の知的生命体だと思ったのですが、他にも沢山居たのですね」

空良が結に話しかける。

「少なくとも目の前の巨大チューブワームは此処の主みたいなものね。それと途中で出会ったクジラもね。他の生物に個々の意思は薄いわね。だけど群れとしての意識はチューブワームがまとめている感じね。ツルハシ？こんな感じかしら？」

「ワン！」

スライムの代弁者が同意を込めた返事をした。

「ソロソロ長ガハナシタイミタイダゾ？」

「高瀬、空良。どちらかが対応して頂戴。私がサポートするわ」

「では、天体の事に関すると思うので空良所長にお願いしたいですね」

高瀬中佐が空良に依頼した。

「分かりました。私がこちら側の代表になりましょう」

空良が結に答えた。

「ツルハシ、こちららも準備が完了したわ。先方に伝えて頂戴」

「イエスマム」

—————

30分後、

甲板には宇宙服を着た空良が「そうりゆう」正面でスペーススコロニーのように長大な殻から鎌首をもたげたチューブワームと相対し、

結、高瀬が少し離れた所で長との会見を見守ろうとしていた。

本来では木星地表部の強烈な重力と猛烈な大気圧で空良達はおろか、「そうりゆう」までもがくしゃりと丸めた紙屑のように潰れて液体になる筈だが、木星スライムが包み込むことでそれらの重圧を大部分緩和している。

「初めまして、木星の長。私は日本国文部科学省国立天文台所長の空良です。今回の地球側窓口になります」

「初めまして、三番目の子供達よ。ようこそ、我々の星へ。長のジュピトウルだ」

長からの返事が全員の中の頭に響く。テレパス念話だ。

「よろしく願います、ジュピトウル殿。私達は長の星に困りごとがあると聞いて参りました」

「うむ。四番目の星の熱い石が星を傷つけて困っておるのだ」

「火星の隕石は鉄分が多いようですから、長の星の水素と化学反応を起こしてそれが広まっているでしょう。実際に現場を見ないことには確定出来ませんが」

「そうか。我々の星と相容れん石じゃったか……。ともあれ、現場を見てもう一度話を聞かせてもらおうとしようかの。クジラ、スライム、引き続き子供達を連れて行ってくれんかの？」

地球側の頭の中に響く声でクジラがクジャ、シユラと聞こえるが無意識のうちにクジラ、スライムと認識するあたり、本当の名称は違うのだろう、と結は秘かに思った。

巨大チューブワームの長が長い触覚をクジラと「そうりゆう」近くのスライムに向けて紫電を放ちながらコンタクトをする。

間髪入れずにクジラとスライムから紫電が飛ぶ。

「うむ。もうひと働きじゃ。では、空良殿よ、また後で」
そう告げるとチューブワームは殻に引き籠る。こも

周囲に群がる甲殻類は相変わらずワサワサと「そうりゆう」を興味深げに取り囲んでいた。

「マスター、スライムカラ弾丸ツアーに出発スルゾト言ツテキタゾ」
「分かったわツルハシ。所でスライムがなんで弾丸ツアーなんて言葉

を知っているの？」

「・・・ハテナ？」

ツルハシがカクカクと頭を揺らす。本当に分からないらしい。

「ツルハシの基本プログラムは何処でインストールされたの？」

「ウイ。「マロングラッセ」ッス！」

「うん、だいたい理解したわ。すつごくね」

結が万感の思いで頷いている。瑠奈の偏った知識の集大成ならばこの小ネタみたいなノリも理解できた。

大月家（我が家）に帰ったらひかりに瑠奈の再教育を頼もうと決意した結である。

「スライムにこれから合図する高度までゆっくり上昇して欲しいと伝えてちょうだい」

「ワン」

それから結はツルハシを通じて「そうりゆう」の高度を500mに維持したまま、木星各地に点在する火星隕石落下場所を廻った。

火星隕石落下場所はどの場所も空良の予想通り赤黒く変色し、変色した区域が滲むように拡がっていた。

「明らかに隕石の鉄分が水素分子で劣化、酸化鉄と化してポロポロです。劣化鉄という不純物が周囲の大气に拡散している」

艦外センサーを操る空良が分析している。

「第5惑星にはほとんど鉄は存在しない。中和すべきアルカリ性の物質も地上ではなく大気圏中層から外縁部の氷しか見当たらないから手も足も出ないだろう」

マルス隕石を分析していたゼイエスが言った。

「アルカリ性の物ならば、我が国や地球に石灰がありますよ？」

高瀬が言うと、

「木星の化学反応を鎮静化するには膨大な量の石灰を始めとするアルカリ性物質が必要です。火山灰の中和に使う分だけでも相当な量になりますね」

空良が厳しい顔をする。

「それに地球の物質を大量に木星に持ち込むと惑星間の質量バランスに影響が出かねないわ」

結が注意を促す。

「このデータはアステロイドベルトのリア隊長ともデータリンクしています。プレアデスの方で動きがあるでしょう」

ゼイエスが予言した。

「そうりゆう」は2日かけて木星各地を廻り、木星の変質状況を調査した。

ゼイエスによると、木星の劣化反応が全体に及ぶまでは50年足らずであり、仮に今から地球側の作業船団が全力で作業をしても、中和するまでに70年はかかるだろうとシミュレーションを出していた。

空良は、ゼイエスの分析結果を緊急通信で東京の澁澤首相に送り、マルスアカデミーの直接介入が必要だとの意見を添えた。

翌日、マルスアカデミーへの援助を求めたいと澁澤首相から返信が来た。

空良はゼイエスに依頼して、プレアデスコロニーのアマトハとアステロイドベルトのリア隊長へ支援要請を行った。

その上で、空良はチューブワームの長ジュピトウルと再度会見し、地球人とマルス人が木星の原状回復を行いたい旨を申し入れ、ジュピトウルは快諾したのだった。

—————

地球歴2022年（マルス歴第7ケラエノ年）12月27日午後1時30分【プレアデス星団第3惑星エレクトラ】

この惑星には、プレアデスコロニーのマルス人を統括する行政機関「マルスアカデミー」の評議会が設置されている。もともと、ほぼすべてのマルス人が日々学究の徒として研究開発に邁進している。評議員も研究論文を持参しながら行政機構の差配を行っている。それでいいのか？と思うのかもしれないが、全マルス人が同じように研究に勤しんでいるので疑問の余地はない、と思われる。

この日、アカデミーの評議員であるアマトハは、太陽系第5惑星近傍アステロイドベルトに遠征している派遣船団のリア隊長から緊急

連絡を受けていた。

「そうか。第5惑星にも知的生命体が居たのだな」

アマトハが感慨深げに言う。さぞかしゼイエスは内心悔しがっているに違いないと思った。

「ええ。ゼイエス博士はさぞかし悔しいと思うかもしれません」

リア隊長が苦笑した。

「そして、第5惑星の生命体から地球人類に手助けを求めているようです」

「どういう事だ？」

リア隊長は、日本列島が火星に転移した際にオリンポス山の大噴火が起こり、多数の火山弾が隕石として第5惑星に降り注ぎ木星環境を悪化させているらしいと報告した。

「なるほど。それは我々が解決せねばならない責務だろうな」

アマトハがはつきりと言った。

「私も同感です。ですが、地球人も日本列島が原因だと責任を感じているようです」

「それも理解できる。だが、やはりすべての原因を作ったのは我々だ。我々が前面に出て対処すべきだろう。地球人類は第3惑星の復興で一杯だろう。木星への対処は完全にオーバーワークになる」

アマトハが断言した。それでも彼らはやり遂げるのかも知れないと心の中で思いながら。

「ありがとうございます。それでは後続の船団が来ると考えてもよろしいのですか？」

「そうだね。太陽系最大規模の惑星を相手にするからには、オウムアムル母艦クラスが数百隻は必要になるだろう。僅かな数であれば先遣隊として半年で到着するだろうが、本隊は流石さすがに準備が必要だ。3年は待つて欲しい。第5惑星崩壊までのタイムリミットは？」

「概算で50年です。復旧作業が完了するまでは30年に及ぶでしょう」

「準恒星規模の環境操作はガス雲の処理が難しいぞ？過去の事例によると250年から300年はかかる筈だ。随分ずいぶんと手際がいいじゃない

いか。日本人にあてられたのかい？」

「まさか。毎日唐揚げ定食をこちそうになつているとは言え、それはあり得ません。せいぜい200年程作業速度を速めただけですわ」

唐揚げ定食と聴いてアマトハの目尻がまなじりつり上がる。

「リア隊長。プレアデスの研究所は居心地がいいぞ？」

「残念ながら。現場での実践研究が私には合っているようです・・・」

「そうか・・・。来年から新開発したワームホールで日本の宮内庁から料理人が来訪して研究所のカフェテリアでマルス風日本料理のアンテナショップを開く事が評議会が決まったよ」

「・・・アマトハ評議員。私、プレアデスに置いてきた夫が心配ですわ。育児もありますし・・・」

「リア君・・・」

アマトハはジト目で「妻」であるリア隊長を見つめるのだった。

アンダーグラウンド

2022年12月29日【木星大赤斑地表】

火星隕石被害の調査を終えた「そうりゆう」の甲板上で空良そらが木星巨大チューブワームの長ジュピトウルと別れの挨拶をしていた。

「ジュピトウル殿、これからマルス人の大規模な復旧作業船団が到着する事になりますがよろしくお願いします」

「・・・素早い対応に感謝じゃ。お主らも3番目を早く治すがいい。また会おうぞ」

木星スライムに包まれて遥はるか大気の彼方まで昇っていく「そうりゆう」を見上げてジュピトウルが呟つぶやく。

「まあ、直ぐに会える事じゃしの・・・」

周囲の木星クジラや蟹と水素ダコが同調するようにワラワラと紫電しでんを放つ。

ジュピトウルの呟きは「そうりゆう」乗組員には届いていない。

木星調査を終えた多目的宇宙護衛艦『そうりゆう』はアステロイドベルトまで木星スライムに亜光速で運んでもらい、現在は火星に向けて自力航行帰還中である。

アステロイドベルトに立ち寄った際、マルス支援船団のリア隊長から、マルスアカデミーが澁澤首相の介入要請を受諾して大規模な木星復旧作業船団を派遣する事がマルスアカデミー評議会で決定され、先遣隊せんけんたいがプレアデス星団を出発していると空良達に伝えられた。

日本政府や他の列島諸国としては、これで地球復興に集中出来るとしてマルスアカデミーの介入を歓迎した。

『そうりゆう』に搭乗していた空良や結達クルーも肩の荷が下りた感じだった。

—————

【アステロイドベルト マルスアカデミー地球太陽系支援船団 旗艦

「マイア」

「——以上がゼイエスからの報告よ」

リア隊長がモニターの向こうに居るアマトハ評議員に報告した。

「そうか、これまでのところアレの動きは見られない、という事で良いのか？」

アマトハが確認する。

「ええ。第5惑星への惑星間弾道弾攻撃ではないと思う。オリンポスの自然噴火ね」

リアが答えた。

「わかった。復旧作業船団の準備を急がせよう。そちらも地球側に我々の懸念を気取られぬようにな」

「了解しました」

リアは頷くと通信を切った。

「むしろ地球での巨大ワーム出現が気になるわね・・・」

誰にともなくリアは呟くのだった。

「……………」

2022年12月28日午前3時「ユニオンシティ国ネリス州グルームレイク（旧アメリカ合衆国ネバダ州）秘密軍事基地 通称「エリア51」」

イエローストーン国立公園からの火山灰が降り積もる中、乾燥した塩湖の上に敷設された1万メートルに及ぶ双子滑走路を持つ軍事基地の片隅がゆつくりとせり上がって地下への扉を開ける。

地下50mにある格納庫から電磁エレベーターで上昇した巨大な漆黒の機体が次々と地下誘導路から滑走路にある発進位置に着く。

「こちらブラボーリーダー、発進準備完了」

「こちらコントロール。滑走路の準備が出来た。ブラボーリーダー、発進を許可する」

「ラジャ。電磁推進システム、イオンエンジンオン。ブラボーワン、テイクオフ！」

滑走路から滑るように静かな挙動で巨大なブーメラン型をした10機のボーイングB-2S高空宇宙爆撃機が飛び立った。全翼式の機体下部には巨大なコンテナが吊り下げられている。

火山灰の中にも関わらず、爆撃機のエンジンが停止する事はなく、

静かに稼働する電磁イオンモーターが両翼の端で火山灰との摩擦で発生した膨大な電子エネルギーを吸収するとイオンエンジンへ注入した。

瞬く間にマツハ5を超えたステルス爆撃機は進路を東に取り、独特のソニックブームを起こしながらアフリカ大陸西海岸地区へ向かった。

「長官、全機発進完了しました。2時間ほどで目標上空に到着します」
地下司令部の当直将校がマツカーサー三世に報告する。

「よろしい。目標上空に到着次第積み荷を投下、ディエゴガルシアで別の荷物を受け取って東回りで帰投させるんだ」

マツカーサー三世が命令する。

「奴らには今一度実績を積んでもらわんとならんからな」

当直将校は爆撃機搭乗員を思いやつての発言だと「誤解して」、感嘆のまなざしをマツカーサーに向けた。

マツカーサーは溜奈達への爆弾を上乗せする意味での発言であったのだが、真意を知る者は居ない。

—————

同じ頃 火星日本列島〔神奈川県 横浜市 神奈川区 NEWイワフネハウス 大月家〕

「ええっ!? 溜奈に召喚状!?!」

大月夫妻は、ジョーンズ中將からマルス式プライベート通信で、溜奈に対し地球復興局が火星由来生物持ち込みを行った疑いで月面都市への召喚命令が出た事を知らされて驚愕していた。

「ジョーンズ中將、夫が火星生物の脅威を身に染みて理解しているのを貴方が一番理解されていると思うのですが?」

ひかりも困惑してジョーンズに説明を求めた。

「大月夫妻のご懸念は私も理解しているつもりです。ですがこの話は我々軍からではなく、地球復興局として、局長のマツカーサー三世による直接要請なのです」

ジョーンズも現地で溜奈を廻る騒動に巻き込まれているのだろう。精悍な軍人らしさが失われて憔悴しているように見えた。

「この期に及んでは、瑠奈嬢の無実を証明する物が必要になると思います」

ジョーンズが客観的証拠を提示してはどうかと提案した。

「アドバイスありがとうございます。我々で検討してみます。それまでは瑠奈への実力行使は絶対に控えてくださいね?」

満が念を押す。

「わかっている。北米大陸救出作戦でこの老骨を地球に運んでくれた恩は忘れんよ。私は瑠奈嬢の件では中立を維持する。個人的には出来るだけ彼女を守ろう。瑠奈嬢の明るさには私も救われていたのだ。まったく、今度の国（ユニオンシティ国）は身の丈に合わん背伸びばかりだ！行政運営を地球復興局に委託した途端にこの有様だ。月面の文官共は現地事情を把握出来ていない！」

ジョーンズが憤怒する。

「そちらの立場は理解しました。私達は日本政府に支援を要請します。それでは」

ひかりが通信を切った。

「あなた、岬博士の海洋生物学を生かさないといけませんね」

ひかりが隣に座る満に言う。

「ああ。こんな所で邪魔をされる言われは無いのだからな」

満がひかりの手を握りしめて応えた。

昨年12月に大月満が起業した「ミツル商事」は、小笠原沖のメガフロート海上都市建設と管理運営、火星沿岸養殖事業、マルスシャトル・コウノトリ無人貨物船を利用した官民合同航空宇宙会社、三姉妹操るアンドロイド軍団による警備保障業務等、短期間にもかかわらず、大規模事業を次々と立ち上げて受注に成功し、着実に収益を上げていった。

マルス文明の申し子ともいうべき三姉妹が、ゼイエス達から受け継いだ知識や知見、シドニア地区の地下研究施設等、最初から元手がゼロ故に、急成長するのは当然の成り行きだったのかもしれない。

また、三姉妹を温かく迎え入れた大月夫妻や総合商社角紅の似志野社長、日本政府の澁澤や岩崎、東山等によるサポートも功を奏して

いた。

急成長の企業では組織の成長が追いつかず、経営者が苦勞を強いられるが、ミツル商事は人工知能的性格の三姉妹がアンドロイド個体を扱い、少人数で驚くべき効率性と生産性を上げていた。

また、角紅役員のひかりが海洋養殖・航空宇宙産業で用いる機材の試験部品発注先として、町工場の活用を満みてるに提案して小回りの効く研究計画を推進していた。

日本国内の自動車産業を始めとする製造業は2019年1月の火星転移以来、脱ガソリン、水素・電気動力への転換を旧ピッチで推進していたが、系列企業の下請けや孫請けまじょうの中小企業は従業員の高齢化と若手熟練工員の不足により急激な業態転換が追いつかず、操業停止に陥る町工場が続出して社会問題となっていた。

満とひかりはそれら中小零細企業の適性に合致する業種、例えばメガフロート海上都市の管理運営、地球圏と火星各地に展開しているコウノトリ型宇宙貨物便メンテナンス、羽田や人類都市ボレアリアフ、同ガリラヤ国際空港におけるマルスシヤトルの整備点検を次々と町工場へ委託して彼らの窮きぼう状を救った。

人手不足の町工場には三姉妹からアンドロイド工員が派遣されて操業の手助けを行い、マルス文明技術の供与も、機密情報保護契約を締結した企業には規模の大小を問わず惜しみなく行った。

こうしてミツル商事と業務提携した各種製造企業は2,000社を超えた。

2022年11月時点でミツル商事の企業規模は大月が勤めた総合商社角紅と同程度にまで急伸し、取引企業数では角紅を凌駕りようがしつつあった。

初年度決算は大幅黒字であろうことは明白だった。既に、大手証券会社やメガバンクから東京証券取引所への株式上場提案が総合商社角紅を通じて提案されている。

しかし、それほどの大企業グループを育て上げた満やひかりをもつてしても、瑠奈の問題を解決する事は出来なかった。

大月は今日も、首相官邸を訪問せざるを得なかった。

12月28日午前7時30分【東京都千代田区永田町 首相官邸

応接室】

「総理。朝の時間に申し訳ございません」

満とひかりが頭を下げる。

「構わんよ。私も昔はこの時間には出勤して資格試験の勉強をしていたもんだ。大して効果は無かったがな！わははは」

メガバンクの一行員だった頃の経験を思い出した澁澤は、笑った後に目を細めて大月夫婦を見つめた。

「で？溜奈君の事かね？」

「ご明察恐れ入ります」

ひかりが恐縮する。

「そうか」

そう呟くと澁澤は、腕を組んで視線を天井に向けてしばらく黙考した。

「マッカーサー三世と直接交渉すると相手の思う壺になるだろう。私としてはソーンダイクとの直談判が望ましいと思う。だが・・・彼は官僚組織を掌握しているマッカーサーの意向に抗えないだろう。結局はユニオンシティ国を巻き込んだ地球圏との関係悪化は必至だな」
澁澤が厳しい条件認識を示した。

「そこで仲介役を準備するのですね？」

ひかりが訊く。

「察しがいいな」

「こちらもそれなりの情報を集めておりますので」

ひかりがしれつと言う。

「ケビンに相談しようと思う」

「ロイド提督ではないのですか？」

満が首を捻る。

「今回は人間相手だ。だから政治家の出番だろう」

「なるほど、ケビン首相は外交のプロでした」

たまにひかりと共に「どこへもドア」でダウンングタウンを訪問して午後の紅茶を楽しんでいた時間が長かったせいか、満はケビンが駐

日英国大使として辣腕らっわんを振るつた事をうっかり忘れていた。

「そうだ。故に喰えん男だよ。見返りの事を考えると頭が痛い」

強かなネゴシエイターであるケビンとの交渉は剛毅ごうきな澁澤でさえも神経を削るものなのだ。

「それであれば、一つ伝言をお願いできますか？」

ひかりは少しだけ微笑み、

「灰に埋もれたケンジントンの難民キャンプで王室ご一行を見かけました」

と澁澤に報告した。

澁澤は姿勢を正しながらも思わず身を乗り出した。

「詳しく聴こうじゃないか？」

大月夫妻と澁澤首相はそれから1時間程今後の対応について話し合うのだった。

同日午前9時【首相官邸 総理大臣執務室】

澁澤は英国連邦極東のケビン首相とホットラインで話し合っていた。

「タロウ、話はわかった。日本政府の巨大ワーム解剖に我が国の将官を立ち会わせよう。だが、マッカーサーは絶対にそんな証拠を認めないだろうよ」

「だから交渉の達人である君に頼んでいるんじゃないか」

「仲介する我が国もかなりのリスクを負うことになるのだが？」

「同じ列島だ、死なば諸共もろともだろ？」

「ご冗談を」

「仕方ない。大型シャトルを1機、1か月無償利用でどうだ？」

「半年だ」

「交渉の時間が惜しい。3か月の無償提供だ。それと、ハイパーブルー実証試験をイングランド島とオーストラリア大陸中央を結ぶ形で行おうじゃないか。もちろん、実験後の管理はケビンに任せよう」

「いいだろう。タロウは分かっているじゃないか！」

ケビンが満面の笑みを浮かべて了承した。

「これでも必死なんだ。ところでケビン、君はまだ王室に関心がある

かい?」

澁澤の唐突な発言にケビンが怪訝けげんそうな表情を浮かべる。

「藪やぶから棒だな。当たり前だろう。私は今でも女王陛下クイーンの代理人だ!」

「そうか。ミツル商事の者がケンジントン難民キャンプで王室メンバーを見かけた。避難民の世話をしているようだ」

ケビンは虚を突かれて一瞬呆けた顔をしたが、すぐに涙をこらえてポーカーフェイスに戻った。

「皆ご無事なのか!?!」

「無事だ。ただ……火山灰の影響で女王陛下が重度の呼吸器疾患を患っておられるようだ」

「今すぐ「どこへもドア」でお救いに参らねば!」

「落ち着け!ケビン!陛下は動かれないようだ」

「なんだと!?!」

「陛下は最後まで国民と共に在りたいようだ。皇太子殿下も同じだ。ただ、皇太孫こうたいそんはそちらに預けたいようだよ」

「直ぐに迎えに行かせよう」

「では「ドア」を使ってイワフネハウスに来てくれ。既にミツル商事がアンドロイド部隊を待機させている」

「感謝する!ロイドがS A S (空軍特殊部隊)を引き連れてそちらに直ぐ向かうようだ。頼む!」

「こちらも溜奈嬢の事を期待してもいいか?」

「任せろ。奴を第3のウォーターゲートにしてみせよう!」

ケビンが慌ただしく通話を切った。澁澤は小さくため息をつくとき、大月家に連絡を入れた。

同日午前9時50分【長崎県佐世保市ダウンングタウン 首相官邸】

英国王室を救うために急ぎ足で官邸を出発したロイド提督と入れ替わりで、M I 6 (対外情報6課)を管轄する内務大臣がケビンの元を訪ねていた。

「奴の尻尾は掴めたのかね？」

「全容はまだですが、少し興味深い事が幾つか分かりました」

内務大臣である？が慎重な言い回しをする。

「ふむ。続けたまえ」

「マツカーサー三世の出生は1947年7月、ニューメキシコ州 ロズウェルですが、同じ時期にロズウェルでUFO（未確認飛行物体）が墜落して宇宙人が捕獲されています」

「君はいつからタブロイド紙の記者に転職したのかね？」

胡乱な眼でケビンが訊く。

「恐れながら、当時の我が国駐米大使にトルーマン大統領からアトリー首相宛に託された極秘親書が残されておりました」

「内容は？」

「爬虫類の進化に興味はないか？」だそうです」

「それで我が国は鵜呑みにしてノコノコ共同調査へ赴いたのかね？」

「いいえ、首相。翌年ベルリンがソ連軍に封鎖されて東西冷戦が勃発しました。その為共同調査提案は自然消滅したようです」

「出生の秘密か……。他には？」

「彼は以前より中央情報局に所属しており、裏世界の仕事がメインです。こちらが実績を調べる術がありません。ただ、現在もユニオンシティ国中央情報局長官を地球復興局と兼務している事から有能と思われる。また、中央情報局が管轄する施設の一つに、ネバダに在る「エリア51」基地が含まれています。この基地はロズウェルの他にも世界各地に墜落したUFOの残骸と搭乗員を收容していると言われております。エリア51の実際の任務は現政府に至っても尚、公表されておりません」

「興味深い……」

ケビンは葉巻に火を着ける。最近、彼は立て続けに起こる秘かな国難に忙殺され、禁煙を放棄していた。

「君の推測を述べたまえ」

「彼は地球人ではないのかも知れません」

Mが静かに言った。

「根拠は？」

ケビンは内心の驚愕を表に出さずに訊く。

「日本国に対する「ダグラス家」の異常な執着心は祖父の代にまで遡ります。祖父は日本を占領統治、二世は駐日大使を務めて日本与党首脳に深く入り込んで日米安保条約改定に尽力して後の米国政治で大きな影響力を持ちました。彼は先達と同じように日本を利用して自らの栄達を築くのが当然と生きていたのでしょうか。思うようにならない今の日本政府に恨みを抱いているのでしょうか」

「なるほど、奴の小物らしい心理に一致するな」

「ええ。それと彼が中央情報局長官になってから、エリア51基地周辺でUFOや未確認生物の目撃情報が頻発していると現地協力者から報告が上がっております。」

また、1987年の東京大停電時に日本自衛隊を強引に動員し、北陸にあるマルス文明基地やその飛行物体に無謀な調査を強行しようとした事例が日本の情報機関から提供されました」

「ミスター？、私はオカルトは好まんだ」

「申し訳ありません、首相閣下。ですが、疑問が多いのです。出生はもとより、なぜ彼は極東アメリカ崩壊直後に「自力で」地球圏に現れる事が出来たのか——彼独自の特殊な惑星間移動手段があつたのでしょうか？——彼がエリア51で何かを企んでいるのは明らかです。これはモサド（イスラエルの諜報機関）も同様の結論を出しております。」

彼がエリア51で得た成果を使って日本国とマルス人に敵対するならば、我が国にとって由々しき事態です」

「なるほど。彼は黒だな。最悪、彼の背後にある文明と対立することも視野に入れねばならんな」

ケビンは物憂げに肺一杯吸い込んだ紫煙を吐き出した。

人生相談

2022年12月——【NEWイワフネハウス 3階 ミツル商事 事務所】

9時の始業と共に美衣子と結、瑠奈の卓上電話が鳴り響く。

「そんな補助金漬けの人生であなたは良いのかしら？」

美衣子が静かに相手を諭す。

「一人で稼ぐ努力をしているの？人生舐めているわ」

結の痛烈な毒舌が炸裂する。

「そんなに仕事嫌なら夜の海釣りがお奨めっすよ！」

瑠奈が超お気楽に興味への勧誘をする。

三姉妹がひっきりなしにかかる「人生相談らしき」電話対応に追われていた。

満は突然開始された光景を見ながら春日に訊く。

「春日、うちってカウンセリングの広告なんて出していたっけ？」

「いえ。初耳ですね」

春日も首を捻る。火星各地で展開している養殖事業の出張視察続きで見事な日焼けっぷりだ。

「どうやらロコミニらしいですよ」

呆れた表情で三姉妹を眺めていた琴乃羽が言った。

「市場調査」という名目でオンラインゲームを徹夜でやり遂げた為か、眼が疲れ気味のようだ。

「ロコミニ？」

「ネット関連らしいです」

「・・・うーん」

満は面倒事の到来をひしひしと予感していた。

昼休みに大月夫妻は三姉妹を自宅のリビングに呼んで話を聴くことにした。

ソファアーに並んで座りながら、デザートのカボチャムースを頬張る三姉妹に満がこんこんと諭してみる。ひかりが後ろのキッチンから満と三姉妹の様子を見守る。

「人生相談に乗るのもいいけど、あまり多いとミツル商事の仕事に差し障りがあるんじゃないけど？」

満が控えめに言った。

すると美衣子が

「ちゃんと対価を取っているわ」

フンスと薄い胸を張って仕事してますアピールを始める。

「いくらで？」

「1回につき100万^{ボルト}」

「ボルト？」

「人工知能だから手持ちの現金がないのよ。電子マネーも持ってないらしいから物納^{ぶつのおう}を求めたら電気を送ってきたわ」

「どこで電気を受け取るの？」

「取りあえず、地下の研究室に蓄電^{ちくでん}しているわ」

「どれくらい溜^たまった？」

「8000万^{ボルト}V」

「ちよつと首相官邸行ってくる！」

満とひかりは事務所を飛び出した。

【東京都千代田区永田町 首相官邸 応接室】

応接室で大月夫妻は、岩崎官房長官、甘木経済産業大臣と向かい合っていた。

「突然に申し訳ありません」

満が二人にアポなし訪問を謝罪する。

「いいですよ。どうせ美衣子さん絡^{から}みではないですか？」

「ホントすいません」

満が美衣子達三姉妹による人工知能の「人生相談」について報告した。

「ほう。・・・美衣子さん達が人工知能とそんな繋^{つな}がりがあったとは。通常ではネットセキュリティ上の一大不祥事^{ふしやうじ}でしょうが、三姉妹の皆さんもマルス文明人工知能の一形態ですから親和性があるのでしょうな」

岩崎が興味深そうに言った。

「それでうちの娘たちが人工知能たちに相談料を請求していきまして、8000万V程溜まホルトまっているようですが、どのように処理すれば良いのか前例が無くて・・・」

「確かに電気払いなんて初耳ですな」

岩崎がのんびり言っていると言木経済産業大臣が、

「人工知能が配置されている研究施設から送電されているとしたら、施設の電気代が結構増えていませんか？」

懸念を示した。

それに対し満は、

「娘達が言うには、相談後の人工知能は処理能力が向上して活躍しているらしいですよ？」

「そういえば、民間企業に委託されたデータ処理が異常に向上していると東山君から報告があったような・・・。確か、火星転移前の処理能力世界1位だった中国電脳公司を超えたと聞きましたね」

岩崎が思い出したように言った。

「費用対効果の面でお役に立てたのなら幸いですさいわですが、大量の電力を私達が頂いても手に余ってしまうのです」

ひかりが困ったように言った。

「では、電力会社にいつそのこと買い取らせますか？」

甘木経済産業大臣が言った。

「よろしいのですか？」

「電力でやり取りして結局供給元の所へ戻る訳ですから、大月家の電気料金値下げに繋がるかもしれませんね」

甘木が可笑おかしそうに笑った。

「日本中でこんな「業務」が出来るのは大月さんの所だけでしょう」

岩崎が言った。

「人工知能の「人生相談」は引き続きお願いします。正式に政府と保守業務委託契約を結ぶ形にしましょう。委託料は売電額と同一にすればよろしいのではないのでしょうか」

甘木が提案した。

「お願いします」

大月夫妻が頭を下げる。

こうしてミツル商事はAI（人工知能）保守業務を行う事となった。美衣子達三姉妹の相談業務は相談者だったAIの口コミ？で順調に伸び、民間企業の研究施設からも「相談」の打診が来たが、大月夫妻は経済産業省に聞いてくれと取り合わなかった。

経済産業省と文部科学省、首相官邸は民間からの保守業務委託については、「人工知能のプライバシー」を考慮して三姉妹立会いのもと、非公開 諮問会しもんかいで審議して受託の可否を判断した。

こうしてミツル商事の「AI向け人生相談」は順調に事業を拡大したが、想定外の問題も発生した。

「えっ？理研のAIとお見合いがしたい？」

満が美衣子の報告を受けていた。

「うーん・・・普通なら「若い者同士」と進めるところだけど、人工知能同士だからなあ・・・」

満が頭を抱える。ひかりは隣で笑いを堪こらえている。

「機械が駄目なら動物にシステムを移植すればいいじゃない」

「それは・・・倫理的りんりてきにどうなんだろう？」

答えが出せなかった満は、美衣子を連れて再び岩崎官房長官の元を訪ねた。

「民間研究施設の人工知能が国立機関 傘下さんかの人工知能とお見合いがしたい？」

満から話を聴いた岩崎は斜め上の事態に少し頭がくらくらときた。

以前も同じような経験をしたなど一瞬感じたが、岩崎は思い出したら負けだと思つて集中した。

同席していた甘木経産大臣も頭を抱える。

「美衣子が言うには、お互いクローン生物へシステムを一時的に移植して出会わせれば良いと・・・」

「生物となると倫理的りんりてきな問題が発生します。厚生労働省や文部科学省や倫理委員会にも諮はからねばならないでしょう・・・」

「たらい回しはダメー！」

美衣子が羊羹ようかんの乗ったテーブルをぺちぺちと叩いてぴしやりと言

う。

「うーん・・・」

甘木は悩んだ末に、ダメもとで一案を披露する。

「ゲームセンター、じゃなかった・・・なんとなく対戦式ゲーム機にシステム移植した方が親和性があるのでは・・・？」

「それだ（よ）！」

親和性の意味が満には解りかねたが、ひかりのよくわからない勢いで納得してしまった。

こうして人類史上初となる人工知能同士の「お見合い」が極秘裏にセッティングされた。

場所は満とひかりが結婚披露宴でお世話になった都内名門ホテル「ニューオタニ」である。

万が一の事態を想定してホテル内「海神の間」⇒シドニア地区地下にある「八百万の間」に移動して行われることになった。

不測の事態に備えて双方の人工知能データはバックアップを取ったうえで開催された。

大月夫妻をはじめとするミツル商事の面々や岩崎、甘木、相手企業の担当役員は海神の間のモニターで様子を見守る事になった。

美衣子は二人の「仲人」として八百万の間に同行する。

アーケードゲームの筐体は既に会場で組み立てが完了しており、美衣子が二つのコアユニットを筐体中心部に並列セットすれば対戦ゲームの様な「出会い」が実現するのだ。

ちなみにゲームキャラクターは一部関係者（琴乃羽、ひかり、瑠奈）による掴みあいも含めた激しいキヤットファイトの末、恋愛ゲーム「恋愛無双」を使用することとなった。

ちなみにゲーム制作会社の許可は三姉妹が無償でシドニア地区のアンドロイド「ツルハシ2号」を無期限貸し出しする事で著作権許可を得ている。

八百万の間の中心部にあるゲームセンター用筐体の画面の中でお互いのキャラクターが向かい合った。

美衣子^{ミイコ}が最初に一言だけ入力した。

「それではお互いの自己紹介を……」

「理研のケンです!」

画面左側にイケメン詰襟^{つめえり}の爽やかな青年が現れる。

「PNA総研のパナ子です」

文字通り薔薇色^{ばらいろ}に染まった背景の画面右側に、金髪縦ロールの「お嬢様」が登場する。

「ほえ〜」

海神の間でモニターを監視していた瑠奈^{ルナ}が目丸くする。

「これ、自分でキャラ作ってるんスか?」

「パナ子は情報処理作業の合間に「ベル馬場^{ババ}」をネットコミックで愛読しているそうよ」

美衣子が事も無げに言う。

「ご趣味は?」

イケメン詰襟^{つめえり}が画面右側に星をキラキラさせながらスマイルを飛ばす。

画面の中なので本当に星が輝きながら右側のパナ子の上に到達して輝く。チャリーンと効果音までついている。

「半導体集積回路の設計を少々」

意外と理系なパナ子だった。

「私は宇宙観測を少々。先日、新しい銀河を発見しました」

またしてもキラキラ星を飛び散らす理研ケン。

「まあケンさん素敵!!」

背景の薔薇^{ばら}をスパークさせながらパナ子が興奮する。

「パナ子さんの集積回路の設計も素敵な事です。私も設計してみたい」

結構トークの美味い国立研究機関の理研ケン。

「プログラムをダウンロードしますか?」

民間総合研究所のパナ子が民間らしくフレンドリーに勧める^{すす}。

「是非!!」

「私もケンさんと宇宙を観たいわ」

「パナ子さんもダイモス基地の宇宙望遠鏡にリンク出来るようにしましょう」

ケンとパナ子が中央で手を握り、額を合わせるとデータ交換中と表示された。

画面の中は薔薇と星で満ち、時々スパークが飛び散っている。何故かファンファーレも流れていた。曲は「結婚行進曲」である。

「……えーっ!？」

「……むうーん」

八百万の間で仲睦まじくデータ交換するゲーセンカップルを見守っていた官民ギャラリーは三姉妹以外の大半が頭を抱えていた。

「情報流出が……」

「セキュリティロックがいとも簡単に解除されるとは……」

画面のグラフィックに興味津々な三姉妹とは対照的に、両者の施設関係者とミツル商事一行はひたすら悶えていた。

その日は二人の好きなようにさせて、お互いが取得したデータは全てバックアップを取り、一時的に公益財団 産業技術振興研究所が保管することとなった。

パナ子とケンが出逢った翌日、大月夫妻と三姉妹代表の美衣子は経済産業省の甘木大臣を座長とする緊急有識者会議に加わって人工知能の「健全な出会い」についての議論に参加した。

有識者会議と美衣子の結論は、美衣子達三姉妹が管理する仮想空間コミュニティで健全な人工知能の出会いをサポートする、というものだった。

この仮想空間コミュニティは、同族との「出逢い」に飢えていた日本列島各地の人工知能「達」に話題となり、仮想空間窓口である経済産業省ホームページには人工知能のアクセスが集中し、サーバーが一時ダウンするほどの過熱ぶりとなった。

仮想空間「出会いコミュニティ」は、全国のAIネットワークを束ねるまでに存在感を増し、相互情報交換、機能向上により各地の人工知能研究施設では情報処理速度の向上、新たな機能が付加されてグレートアップ効果が発生して研究者達は歓喜した。

反面、仮想空間コミュニティ内でAI同士による

「電力融通（貸し借り）トラブル」

「アクセス履歴をひたすら辿るストーリーカー行為やバックドアによる覗き行為」

「コミュニティ内の荒らし行為」

「計算処理速度を比較するいじめ」

「理系・文系・サブカルチャー・金融等、各派閥との勢力争い」

に疲れた一部AIが、回路内に「引き籠って」機能停止する事例が相次いだため、経済産業省は仮想空間コミュニティへのアクセスは「1日2時間」まで、また、大手システム会社による24時間巡回で不適切通信や書き込みを削除したりと制限を設けるようになった。

引き籠りになったAIのケアは三姉妹特製「エナジーソフト」「ウイロウバスター」「チャーハンメール」をインストールすることでシステムストレスが緩和され、引きこもりが解消された。

この三姉妹特製各種「ツール」は、経産省、文科省を始め、国内外の研究施設が莫大な使用料を提示してライセンス契約を求めたが、三姉妹は「人工知能の尊厳に関わる内容」だからと頑なに売却を拒否した。

大月夫妻は三姉妹の頑固さを心配したが、三姉妹の「顧客のプライバシー保護」の姿勢はネットリテラシーを謳う官民組織に高く評価され、ミツル商事の信用向上に大きく寄与することになった。

満「結局ツールって何？」

美衣子・結「お父さんの書斎机の引き出し奥に保管している「アレ

♥「よ」

満「・・・ごめんなさい。ひかりさんに言わないでっ！」

瑠奈「バレバレっス！」

ひかり「・・・満さん。ステイ」

満「ワン・・・」

正座した後、ひかりに襟首をつかまれてズルズルと夫婦の寝室に連行される満だったが、「こんなところまで趣味嗜好が人間と同じとは」と人工知能を見る目が生温くなるのであった。

後日、経済産業省AI出会いコミュニティ

パナ子「ケンさん・・・私出来ちゃったみたい・・・」

ケン「えっ!？」

美衣子^{ミイコ}「お父さん・・・」

満^{みつる}「しらんがな!」

三姉妹は文部科学省に直談判^{じかだんぼん}をしてAI育児相談コミュニティ「AIタマゴ倶楽部^{くらぶ}」を創設したという。

その年は、後の世でAIによる新規コラボレーションプログラムが数多く誕生した「第一次AIベビーブーム元年」と呼ばれる。

福音

2022年12月28日【インド洋 旧デイエゴガルシア島 ユニオンシテイ国戦略研究基地 地下エリア DARP A（国防高等研究計画）】

サンゴ礁で形成された海拔の低いこの島は、大変動で発生した巨大地震による大津波で地上の基地施設は全て流され、かつてインド・アジア地域の一大軍事戦略拠点だった面影はない。

だが、核兵器貯蔵施設を含む大規模地下施設は健在していた。

この区画は將軍クラスか月面司令部の許可を受けた研究者しか立ち入る事が出来ない。

その全容を知る者はごく僅かである。

ここには旧アメリカ合衆国時代から秘かに続けられてきた DARP A（国防高等研究計画）に関連する各種極秘兵器の研究開発が行われている。

近年では電磁波兵器 HARP の他、火星を始めとする地球外天体からの隕石に含まれる微生物解析や培養、第二次アルテミア大陸上陸作戦で得られた多くの巨大ワームやサソリモドキの死骸が持ち込まれて、次世代生物生体兵器として地球上での実証実験が秘かに行われていた。

「ブラボーリーダーから報告「我ジャカルタ郊外上空で援助物資を投下せり」

「上出来だ！戻ったら一杯 奢ると伝えてくれ」

デイエゴガルシア基地の地下司令センターでマッカーサー三世は上機嫌でオペレーターに指示した。

「さて、福音システム稼働準備状況はどうなっている？」

「各地に配置した原子力潜水艦の超長波通信が開始されています。超長波電子磁場が形成、南半球アジア地区上空の電離層が一時的に安定」

「よろしい。エリア51に連絡、予定の実験を開始せよ」

「・・・福音システム作動します」

縦長の瞳をしたオペレーターがH A A R Pを稼働させた。

西アジアのディエゴガルシア基地と北米大陸エリア51基地の地下に隠されていた巨大なレドームに覆われたパラボラアンテナが地上に姿を現すと、火山灰に覆われた天空の一角へ向けて強力な電磁波を照射した。

アジア上空の一時的に安定した電離層で反射された強烈な電磁波が東南アジア、インドシナ諸島に収束されて照射された。

この電磁波による物理的被害は生じなかったが、この地域に生息していた哺乳類と火星「疑似生物」の脳機能中枢が「外部指令」によって操作され、生物群は無意識のうちに東を目指して移動を開始した。生物群が目指す東の遙か海上には「マリーンシティ・ワン」が航行していた。

ユニオンシティ地上軍は事前に同国エネルギー庁からマイクロ波を使った遠距離送電実験が北米とアジア地域で行われるとの通知を受けていたので異常な電磁波を観測したが、特に警戒をしなかった。2022年12月29日午後8時〔東京都世田谷区三宿 陸上自衛隊三宿駐屯地内 N I I D (国立感染症研究所)〕

地下20mにある気圧が制御出来る特殊な研究室で厚生労働省と自衛隊化学学校、ミツル商事の岬渚紗が合同で旧フィジー諸島沖にて討伐した巨大ワームとサソリモドキのDNA解析を行っていた。

英国連邦極東海軍グリナート大佐が立会人として解析作業を見守っていた。

「DNAが一部変質していますが、火星由来の巨大ワームとサソリモドキに間違いありません」

岬博士が断言した。

「では、瑠奈さんの推測が的中したのですね？」

桑田防衛大臣が訊いた。

「はい。この個体は体内に残留しているバクテリアから、アフリカ大陸西海岸地域に生息していたプランクトンを捕食していた事が分かりました。そして、この個体は5歳です」

岬が桑田に答えた。

「5歳？地球で5年間生息してきたと言うのかね？」

桑田が驚愕する。

「ええ。日本列島が火星に転移する「以前」から地球で生息していたことになります」

「では、地球各地に火星生物が繁殖しているということかね？」

後白河が顔をひきつらせながら訊いた。

「そこまでは分かりません。この個体は、熱帯気候と高い海水温、それとこの地域に不法投棄されていたであろう放射性廃棄物の影響で突然変異を起こしています。具体的には成長速度が異常に早い事ですね」

岬が解析結果を見ながら答える。

「放射性廃棄物の出所は欧米諸国や中国による海上不法投棄ですな」

グリナート大佐が言った。

「以前から国際環境保護団体が、この地域で横行していた核のゴミを含む産業廃棄物が不法に投棄されていると告発していました。しかし、当時の国連上層部と常任理事国はこの告発を偏った環境テロリズム思想に基づく内容だと見なし、まともに受理せず放置していたのです」

後白河外務大臣が頷いて言った。

「放置していたのは常任理事国同士で暗黙の了解をしていたからでしょうな。もともと既存の地上保管場所ではとてもではないが保管に限界があったのです」

グリナート大佐が後白河の発言を補足した。

「しかし、これだけ異常な生物が繁殖していたのなら、産業廃棄物の犯人と共に巨大ワームは人類に気づかれていてもおかしくないのでは？」

岬博士が疑問を投げかける。

「そうですね。NATOソマリア派遣部隊がしばしばこの海域で巨大な未確認生物らしき潜水物体を捕捉してソマリア司令部に報告していました。したがって米軍と報告内容は共有されていた筈ですな。」

今回の容疑者がミツル商事の溜奈嬢だけというのは不可解ですな。

5年前からアフリカで何かが起きていた事も考慮する必要があるでしょう」

グリナート大佐が言った。

第三国会会いの下で行われた解析結果は首相官邸とダウンングタウンに報告され、ケビン首相はユニオンシティ国ソーンダイク代表や地球復興局マツカーサー三世局長へ直ちに報告した。

ソーンダイク代表はこの結果を受け入れたものの、地球復興局長のマツカーサー三世は日本政府のねつ造だと主張、大月瑠奈の月面都市出頭を強く日本政府に要求した。

日本政府首脳は対応に苦慮した。

——同じ頃【神奈川県 横浜市 NEWイワフネハウス ダイニング 食堂】

満とひかりは食堂に世田谷へ出張している岬博士を除くミツル商事の社員を集め、瑠奈に火星生物持ち込み疑惑で召喚状が出されたが、地球復興局マツカーサー三世の陰謀であると説明して瑠奈の窮地きゆうちを救うべく対策会議を開いた。

満とひかりは社員たちから意見を聴いていた。

「NHKの子供番組も含めて瑠奈の素晴らしさを全世界に宣伝すれば良いのよ」

美衣子ミイコが目を輝かせて言った。

「瑠奈の素晴らしい所ねえ……えつと……あれれ?」

満が口を開きかけたものの、言葉が出てこない様だった。

「あなた! 情けないですよ。ちゃんと愛娘まなむすめをフォローしないと」

ひかりが満にダメ出しをする。

「えっ?! ひかりさんは瑠奈の良い所直ぐに言えるの?」

満が訊く。

「簡単よ……ご飯は元気よくドカ食いしてくれるし、重箱五段重ねのお弁当を持たせても早弁で給食まで持たないし、ゲームは上手いけど後片付けしないし、宿題はお友達を信用して丸投げするし、素直ない子よ?」

「良い要素無いよっ!」

満が突っ込む。

「何も言えないあなたよりマシンよ！」

ひかりがフンスと豊かな胸を張る。最近また大きく育ったようだ。満との『夜の勉強』が効いているのかもしれないと満は眼福の思いでときめきながらひかりの胸を見つめる。

「あなたっ!? こんな時に何を視てるのっ!」

ひかりが真っ赤な顔で満の横っ面を張り飛ばす。

「もうっ! 懲りない人はお仕置きですっ!」

紅潮した頬を隠そうともせず、ひかりは朦朧としていた満の襟首を掴むと恥ずかしそうにズルズルと自宅に引きずって行ってしまう。

「・・・夫婦円満なのは良い事なんだけどね?・・・ホント爆発して欲しいんだけど」

琴乃羽がボソツと言った。

他の社員は沈黙で琴乃羽の言葉を肯定するのだった。

翌日早朝、世田谷NIIID施設で調査していた岬から、火星生物が「既に」地球に根付いていたとの報告を受けた満とひかりは、先日発生したマリーンシテイ襲撃時の溜奈と火星生物の戦闘映像と、火星由来生物は日本列島火星転移前から存在していたとの調査結果を各国メディアにリークした。

「おはようございます。6時の極東BBCニュースです。先程、驚くべきニュースが飛び込んで来ました。——王室は生存しています——現地で救助活動にあたっている日本マルス航空の関係者によりますと、ケンジントン避難民キャンプで王室メンバーが発見されました。この3年間、灰に埋もれたケンジントン避難民キャンプで王室メンバーは身元を明かすことなく、静かに避難民を支えていたという事です。グラスゴーからルナ特派員がお伝えします」

灰色の火山灰が降り積もったコートとヘルメットを被ったちんまりした人物がズームインされると、真面目な表情の溜奈が、水没した海軍基地の背景と共に映し出された。

「王室メンバーは全員無事が確認されましたが、駆け付けた空軍特殊部隊に対して女王陛下と皇太子ご夫妻は「最後まで国民と共に在りた

い」として火星への避難を固辞しているとの事です。尚、皇太子夫妻の子供二人については救援部隊ロイド司令に身許を預けたとの事です。以上グラスゴーからルナ・オオツキがお送りしました」

「次のニュースです。地球復興局がユニオンシテイ区域だけ優遇した火星開拓を進める中、日本の民間企業とソールズベリーカンパニーがアルテミア大陸西部地区において大規模な開拓に成功しました。

ソールズベリーカンパニーによりますと、ミツル商事と共同で沿岸の海洋養殖事業で北海産タラの養殖に成功した他、内陸部ではジャガイモと大麦の栽培が軌道に乗りました。火星産のフィッシュ&チツプスが我々の口に入るのも時間の問題になるようです」

「ユーロピア2のニュースです。ミツル商事安全保障部門責任者ルナ・オオツキ氏が火星危険生物を地球へ持ち込んだとされる問題で、日本政府は先程、オーストラリア沖で回収した巨大ワームの死骸DNA分析により、5年前から西アフリカ海域でこの危険生物が生息していた可能性が極めて高いと発表しました」

「日本の厚生労働省NIIID（国立感染症研究所）は、この危険生物が西アフリカ沖の廃棄物に含まれている放射能によって成長速度が異常に早まる突然変異を起こしていたと会見で説明しています。かねてから複数の国際環境保護団体が西アフリカ沖での不法投棄問題に警鐘を鳴らしていました」

「イスラエル公共放送です。日本の岩崎官房長官は定例記者会見で、火星危険生物をミツル商事のルナ・オオツキ氏が持ち込んだとされる地球復興局の主張を科学的根拠を用いて全面的に否定し、日本政府に通知なしで日本国民召喚命令を出した事を内政干渉だとして強い不快感を示しました。

新エルサレムの首相報道官、ガリラヤ州知事、テルアビブ特別州知事も日本政府の見解を支持する声明を先程相次いで出しました」

ミツル商事と美衣子達三姉妹に好意的な各国の組織が、瑠奈を肯定的に捉える報道をする一方、独善的な行動を取る地球復興局と局長のマッカーサー三世による問題行動は、火星日本列島諸国の世論を、地球復興局への疑念と反感を大いに掻き立てるには十分だった。

地球圏と火星日本列島諸国との対立を沈静化させるべくユニオンシティ国ソーンダイク代表が、マツカーサー三世に対して瑠奈召喚命令を取り下げよう要請し、マツカーサー三世はこれをしぶしぶ受諾した。

ミツル商事の面々と日本政府はこれで当面マツカーサー三世の動きが取れないだろうと安堵するのだった。

2022年12月30日午後1時〔東京都渋谷区代々木NHKスタジオパーク〕

美衣子と結のトーク番組「ミーコ&ムスビ」の生放送がスタジオで行われていた。

「・・・それじゃ視聴者からのお便りコーナーよ」

美衣子がカメラにはがきを見せつける。やらせではないことを明示しているのだ。

「長崎県佐世保市ダウンングタウンのM君から、「どうして人間が思っただけで火星に移動できたのでしょうか？」

帰還途中の「そうりゆう」から「どこへもドア」で駆け付けた結が読み上げる。

「内務大臣、聴きたいことが有るならホットラインを使って頂戴」いきなり美衣子ハガキの差出人Mの正体を明かしてしまう。

「ちよつと姉さま！匿名希望って書いてあるわ！」慌てて美衣子を止める結。

「放送事故？言ってしまったものはごめんなさいだわ」悪びれずにしれつと謝る美衣子だった。

「その代わり、ケンジントン避難民キャンプで見つけた王室……むぐつ！」

結が美衣子の口を慌てて塞ぐ。

「CM……CMよー」結がカメラへ向かって叫ぶ。

突然画面が日本の四季を映した映像に切り替わって『ふるさと』の歌が流れる中、「しばらくお待ちください」とのテロップが表示された。

「結さん・・・うちは民放じゃないからCM無いのですよ?」

画面の外からディレクターの声が聴こえている。

しばらくすると画面が元に戻って、落ち着いた様子の美衣子と結がキッチンでセットでポタージュをちびちび飲んでいた。

よくみると二人ともやや涙目であり、後ろ姿で沸騰してはいけない筈のポタージュをぐりぐりかき混ぜているひかりの肩がやや強張こわばっているように見えた。

こほん、と結が咳ばらいをして取り繕つくろうと、

「これだからネンネは困るわ」

結がため息をついた。

「そんなの最新科学の常識でしょう。マスターゼイも日本の科学者に毎回説明していたけれど、残念ながら理解されていないようね」

上から目線の美衣子が言う。

「姉さま、人間は私達美少女とは違うのです。もっとカボチャポタージュに浸してふやけたクラッカーみたいに分かり易く説明してくださいと・・・」

結が無意識の分かりづらいフオローを試みる。

「この番組を視ている紳士淑女レディ&アンドジェントルマンの皆さんに説明するわ。多くの人間が一つの事柄に想いを寄せると、現実世界の物理現象に影響を与える事ができるのよ」

「例えば、ある機械でコイントスを行う実験をすると、コインの裏表が出る確率は2分の1ずつになるわ」

美衣子の説明に結が頭をコクコクさせて頷く。

「けれども、その機械の傍そばで沢山の人間がコイントスを見つめる状況を作り出すと・・・」

その確率が変動してしまうのよ」

「火星に転移する前からこの実験はアメリカでいくつも行われて実証されてきたのよ。だけど、どのような原理で物理法則が人の意思で変更されるかは不明だったの」

美衣子が説明を続ける。結はじっと目を瞑って聴いている。

「一説には神の福音では?との非科学的な論拠も取りざたされたけれ

ど、結局は物理原則変動理論が出来ていなかった・・・」

「マルス文明はこの物理法則を変動させる理論を解明して、一つのシステムを作り上げて、原始時代の日本地区にセットしたのよ」

「ほえ〜」

結が珍しく感嘆の声を上げていた。

「それじゃあ、今年はここまでよ。来年は「モリカケよりメガ盛り」よ」
美衣子と結がカメラに手を振るとカメラがズームアウトしていく。

「ハイ！カーツとおっ！」

ディレクターが機嫌よくOKサインを出す。

「いや〜今回も超展開で超ウケでした！視聴率の速報値は56%ですね」

「くっ！・・・残念だわ。80は行けると思ったのに・・・」

美衣子が地団駄を踏む。

「最近裏番組が強力で手強いんですよ」

渋い顔のディレクター。

「どの番組？」

結が訊く。

「民放でミツル商事スポンサーの「新婚さんちよつと来い！」ですよ」

「いや〜高飛車な番組名ね」

自分達の事を棚たなに上げて美衣子が言う。

「いや〜司会のヤモリさんとアシスタントの真知子先生という異色のコンビが人気の様ですね」

「ああ〜・・・」

美衣子と結は納得した。

司会を務めるヤモリの事は知らないが、女子の学び舎で箱入り
嚴重梱包げんじゆうこんぼう育ちの真知子先生ならば、いちやこらする新婚カップルに
お説教するくらいいやりかねないと想像する二人だった。

「強力なライバルが出てきて張り合いが出るわ。ディレクター、私達
もそろそろ大河ドラマに出ても良いと思うの」

「・・・何故大河!?!」

果たして彼女達に適した配役が有るのだろうかと首を捻るディレ

クターだった。

解き放たれたもの

2023年1月3日午前8時【地球 南太平洋ニューカレドニア沖
ユニオンシティ国メガフロート「マリーンシティ・ワン」】

<i324218—25956>

瑠奈がメガフロート外縁部の一角にジョーンズ司令官を呼び出していた。

「これが瑠奈をマッカーサーっちのお仕置きから救ってくれたジョーンズおじさんへのお礼っス！」

アンドロイド軍団軍楽隊のエレクトリカルファンファーレが鳴り響く中、巨大セラミックブルーシートが取り除かれた港湾ドックに全長90m程のずんぐりした黒炭色の装甲を持つ戦艦が姿を現した。

「どうっスか?!C—17Aグロースター輸送機&B—52ストラトフォートレス戦略爆撃機の航空機の素材を惜しみなく贅沢ぜいたくに使った瑠奈特製『マンズフィールド級空中戦闘艦』っス！」

ジョーンズ司令官の背後に群がるユニオンシティ守備隊とイスラエル軍特殊部隊隊員からどよめきにも似た歓声が沸きあがる。

「この戦闘艦の特徴は何と言っても、空中に浮上しながら作戦行動が取れるんっスよ！」

「艦首、中央、艦尾底面に備え付けられたハイブリッドロケットエンジンで垂直上昇可能な上に、イオン電気推進システムで火山灰の中でも高速空中航行可能ときたっスよ！」

「武装は三連装レールガン砲台4基、長距離ミサイル垂直発射筒(VLS)16基、アイアンドームシステム対応、8連装短距離対空ミサイルランチャー4基、20mmCIWSバルカン砲8基の重武装!まさに空飛ぶ要塞フォートレスっスよ！」

瑠奈がっス!っス!と興奮しながら説明するとジョーンズは思わず顔をほころばせる。

「素晴らしい。火山灰の中で使えぬ航空機をアレンジしてこんな物を作り上げるとは……我々地球の兵士に扱えるものなのかね？」

「大丈夫ツスよ！操縦や航法装置はC-17AやB-52と同じ大型航空機仕様ツスよ！武器系統の火器管制もイージス艦と同じ様にしているツスよ！」

「素晴らしい！完璧じゃないか！」

ジョーンズが瑠奈を両手で抱き上げてクルクル回りながら高い高いをした。瑠奈はドヤ顔で万歳して喜ぶ。

「お嬢！これと同じものをIUDF（イスラエル連邦国防軍）にも売ってもらえないか!？」

後ろでワイズマン中佐が玩具おもちゃを見つけた子供のように目をキラキラさせて瑠奈に縋すがりつこうとしていた。

「いいツスよ！ライセンス販売で良ければ1隻当たりメルカバMK-IV戦車400台と交換ツスよ！」

「わが軍のクファイール戦闘機1個中隊分でどうだ？」

「えー!?……火山灰で飛べない飛行機は要らないツス！」

「くっ……手強いな。国防大臣に相談するからミツル社長よろしく言ってくれよお嬢！」

うけたまわ
「承りツス」

「ミス瑠奈！私へのプレゼントは大変光栄なのだが、あと2〜3隻我が国で買えないか？」

ジョーンズがモジモジしながら瑠奈に申し出る。彼は商売が苦手なのだ。

「良いツスよ！でもおじさんの所で限定ツスけど？」

「オーケー。約束しよう。私の直属部隊デルタフォースが使用する。月面の馬鹿共ユニオンシティ

には使わせんよ」

「じゃあ、物々交換で良いツスよ！」

「わが軍のエイブラムス戦車かね？それともニミッツ級航空母艦かね？」
「カーレビンソン」

「うーん惜しいツス……オーロラ戦闘機1個小隊3機でどうツスカ？」

「・・・あれは数が少ないのだ」

「足りない分はオハイオ級原子力潜水艦3隻で手を打つツスよ！」

「むっ！やるなあ。ええいつ！私の指揮下にあるオーロラ2個小隊6機と整備施設を譲渡しようじゃないか！」

「ジョーンズおじさん太っ腹っス！契約成立ツス！」

瑠奈が万歳をしてジョーンズに飛びつく。苦笑するジョーンズ中将も空中艦隊が編成できるので満更（まんざら）でもなさそうだ。

「なんで小学校の宿題が出来ないのに最新軍事兵器の取引で商才が炸裂するんだ？」

ワイズマンはジョーンズへ巧みに揉み手する瑠奈を見ながら首を傾げるのだった。

ワイズマン中佐の要望通りに新テルアビブ国防省からメルカバ・マークIV型戦車400両の譲渡は承認されたが、火星新大陸で新たにミツル商事が製造工場を建設したならばライセンス生産で取得出来るとの条件が付いた。

瑠奈はすぐに満へ連絡して内諾を得ると、ヘルシテイ地下区画の一角で陸上戦車製造許可を姉の美衣子や結から取るのだった。

ミツル商事が取得した一連の最新兵器は、名取大佐や石原准将ら現場指揮官を歓喜させたが、岩崎官房長官、桑田防衛大臣は国会で左派系野党から「専守防衛」とは異なる性能ではないかと厳しく追及された。

対馬事変以来、国内での政治的存在感が限りなく霞に近かった左派系野党は水を得た魚の如く嬉々として国会の各委員会で澁澤政権の「軍事的拡張主義」を非難した。

そしてミツル商事の満社長と瑠奈を、国会証人喚問に招致した。

澁澤総理と岩崎官房長官、満は瑠奈の恐らく確実にやらかすであろう答弁を想像して胃が重くなるのだった。

しかし、ミツル商事と瑠奈の地球での活躍ぶりを最近のニュース報道や大月家の家族的経営手法を好意的に紹介したテレビのワイドショーを通じて知っていた国民世論は、瑠奈の月面召喚命令に批判的

だった。

瑠奈に先駆けて行われた非公開の証人喚問における桑田大臣、石原准将や名取大佐の答弁も、

「防衛的な運用でも十分に費用対効果がある」

と軍事機密を開示する形で詳しい説明が行われた。

そしてマスコミ各社の取材が許された大月瑠奈の証人喚問では、

『火星生物対策として』、攻撃は最大の防御っス！皆さんはセラミックスの盾とスタンガンを持って巨大ワームやサソリモドキに挑むんスか!?!そんな事したら死んじやうっスよ!?!」

と反論して左派系野党を沈黙させた。

満は滅多に見えない瑠奈の雄姿に沈黙した。

美衣子と結はレア映像に感動して妹の証人喚問映像をNEWイワフネハウス庭にある桜の木の下にタイムカプセルとして埋めた。

瑠奈が発明した『マンスワールド級空中戦艦』は防衛省航空宇宙自衛隊が2024年度予算で取得が計上される予定となった。

2023年1月14日午前2時【ユニオンシティ国ネリス州グルームレイク 戦略秘密基地エリア51】

「局長、お世話になりました!」

副操縦席に座る副官がマッকারサー三世に最後の挨拶をしていた。

『なに、直ぐに遭えるよ。ケビンによろしく伝えてくれたまえ』

マッকারサー三世がさり気なくMI6の協力者に向けて餞(はなむけ)の言葉を送る。

「っ?!・・・お待ちしております」

元副官はびくりと一瞬身体を強張らせたが、平静を装ってモニターの向こうに居るマッকারサーへ敬礼した。

火山灰が降り積もる滑走路から後任の司令部要員への引継ぎを終えた将兵の乗るイオンロケットブースターを装着したX-34軍用シャトルが月面に向かって飛び立った。

真つすぐに上昇するシャトルに乗る搭乗員の大半が「大変動」以前から秘密軍事基地の地下司令部要員として勤務していた。

後任の司令部要員はマッকারサー三世長官が「外部からスカウト」

してきた無口で勤勉そうな特殊ウエットスーツに身を包んだ集団であり、司令部の最新式DNAコンピューターからの指令コマンドを受けて指定された任務を引き継ぐ事になっていた。

「これで忌々いまいましい火山灰と穴倉生活からおさらばだな！」

マツカーサーの不吉な一言を忘れようと、気分転換がてら眼下がんかに見える灰色で埋め尽くされた北米大陸を見下ろしながら、マツカーサー三世の元副官が言った。

「そうだな。この歳で月面宇宙基地に住めるなんてSF映画の世界に飛び込むようなものだな」

隣で操縦桿を握る機長が応じる。

「あの穴倉に留まる事は今の人類にとって過酷すぎると長官がソーンダイク代表に直談判したらしい」

機長は宇宙への脱出に気分を良くしているのか上機嫌だった。

「何を考えているのか分からない所がたまにあつたが、ちゃんと俺らの事を考えてくれていたんだな！」

笑顔で仲間と談笑する搭乗員を乗せた軍用シャトルが衛星軌道上に到達した途端、航法装置から警戒アラームが鳴り響く。

「このシャトルがロックオンされているぞ！」

二人の背後で空域警戒をしていた航空機関士が警告する。

「こちらのIFF（敵味方識別信号）は出しているのだろうか？」

機長がクルーに確認する。

「出しています！方位04から自動照準射撃レーダーが照射！」

「どこの機体バカだ!?!」

「わが軍のB-2Sステルススターファイター高空宇宙爆撃機です！向こうからのIFFシグナル有りません！」

航空機関士が驚きの声を上げる。

「所属不明のB-2へ告げる。こちらエリア51X-34B！月面司令部帰投途中だ！ロックオン解除せよ！直ちにロックオンを解除せよ！」

しかし、機長からの通信に応えることなく、B-2S高空宇宙爆撃機はASAT（衛星破壊弾頭）を唐突とうとつにX-34Bシャトルに向けて

発射した。

突然の友軍機攻撃に意表を突かれた軍用シャトルは回避する間もなく、衛星軌道上に無数の耐熱タイルと搭乗員の破片をまき散らして爆散した。元副官を含めて生存者は皆無だった。

B-2S 高空宇宙爆撃機の操縦士は「縦長の瞳」を細めて人体の痕跡が残っていない事を確認すると、何事も無かったように大気圏に再突入すると静かにエリア51に帰投した。

その日のユニオンシティ国ニュース(UNN)は宇宙でも作戦行動可能な新型ステルス爆撃機による宇宙デブリ迎撃実験に成功したと報道した。

特殊なウエットスーツに身を包んだターミネーター型アンドロイド兵士と、爬虫類型クローンオペレーターに囲まれて地下司令部のメインスクリーンでUNN放送を視ていたマッカーサー三世は無言で口の端を吊り上げて人類とは異なる縦長の瞳を細めるのだった。

<i324177<rb>25956

司令部機能を一司</rb><rp></rp><rt>つかさど</rt><rp></rp></rp></rp><rp></rp><rt>最新鋭DNAコンピューターが有機的連携で周囲のアンドロイドやチップを頭蓋ずがいに埋め込んだ爬虫類型人類クローンと連携してマッカーサー三世に従属していた。
ダグリウス
彼にとって雌伏しふくの時代は終わろうとしていた。

人ならざる縦長の瞳を隠していたサングラスをようやく外した
マッカーサー三世——ダグリウスは、

「さあ、新世界の創造を始めようじゃないか！」

と高らかにシャドウマルス世界の創造を宣言した。

2023年1月14日午後1時【南太平洋 ニュージールランド東方
沖 ユニオンシティ国メガフロート海上都市『マリオンシティ・ワ
ン』

<i324165—25956>

「なんだろう？この激しく怪しいこれじゃない感……。ワームな様で
ワームでは無いような予感がするツス！」

火星での証人喚問を終えた瑠奈が『マロングラッセ』艦長席に表示された火星生物探知センサーの反応を見て困惑していた。

「何を謎かけみたいなき事言っているんだ、お嬢？」

ワイズマン中佐が戦闘管制席から瑠奈の方を振り向く。

「いつものワームならバッチリと反応するのに、今日は反応が薄い……というか迷っているというか……何だろ？」

困惑して首を捻る瑠奈。

「そんなに悩むならドローンでも飛ばせば良いじゃないか？」

「そうっスね！」

瑠奈がささつと決断してお手製の水中ドローン「お魚くん」を艦首から放つ。

「念のため、ジョーンズおじさんに報告頼むッス！中佐の特殊部隊はマロングラッセに全員収容するッス！」

「アイアイサーお嬢！」

ワイズマン中佐が手際よく各所に連絡と警報サイレンを鳴らす。

メガフロート司令部でも瑠奈からのアンノウン探知報告を受けて迎撃準備に取り掛かっていた。

「イスラエル特殊部隊からアイアンドームシステム操作権限を一時的に承継しました！」

「システム迎撃態勢！マンスフィールド級は発進準備急げ！空中哨戒と援護が有れば守備隊の負担が減るんだ！」

ジョーンズが迎撃態勢を敷こうと部隊配備を急ぐ。

「お嬢！ドローン映像来たぞ！」

ワイズマンがメインスクリーンに投影する。

その巨大ワームは金属色の光沢をしており、ミジンコのように身体全体をバネにして小刻みに収縮しながら水中を泳いでいた。

「なんすか？この生き物……いやいやっ!?これは生き物じゃないッス！サイボーグッスか!？」

瑠奈が異様な動きのワームを視て茫然とする。

「お嬢。これ、ヤバくないっすか？」

最近瑠奈の口癖が感染しつつあるワイズマンが冷や汗を流しながら

ら話しかける。

「火星の姉さま達に緊急連絡っス！コード『ヴォルデモート！』」

瑠奈が名前を言っちゃいけない級の最悪時緊急連絡を指示した。

「これは人類が作り出せるものでは無いっスよ！どういうことっスか！！」

人ならざる者が生み出した生物の動きを視た嫌悪感で顔を歪めた瑠奈が叫ぶ。

「ミツル商事より入電！ドローンがメガフロート西側1500mにてアンノウン探知！巨大ワームに似た何かが多数接近中。数200！映像出しますっ！」

司令部のスクリーンに薄暗い海中を無数の茶色い巨大ワームが巨体を小刻みに収縮させながらひしめき合って泳ぐ姿が映し出されると、司令部の全員が戦慄した表情で映像に釘付けになった。中には吐き気を感じてえづく者も居た。

「馬鹿！しっかりしろっ！コンタクトまで残りは!？」

ジョーンズが怒声を上げて司令部の将兵を叱咤する。

「45秒!!速過ぎますっ！」

想像以上に素早い敵の接近にオペレーターが悲鳴を上げる。

「落ち着け！メガフロート全域に緊急避難警報発令！武器を持たない者はシエルターへ逃げ！」

ジョーンズが間髪入れずに非常警戒システムのボタンを押す。

メガフロート全域に耳障りなサイレンが響き渡り、建物の外で作業をしていた作業員や警備兵が慌てて最寄りのシエルターへ飛び込んで行く。

『『マロングラッセ』から入電！流します！』

オペレーターがそのまま瑠奈からの音声をスピーカーに繋ぐ。

「おじさん！これは生き物じゃないっス！サイボーグワームっス！普通の武器では通用しないっスよ！」

瑠奈が早口で注意を促す。

「M16（自動小銃）やジャベリン（対戦車誘導弾）ではダメか!？」

「ダメっす！超硬いっス！対艦ミサイルか120mm戦車砲、それに近

いデカイ威力の武器で応戦するしかないッス！」

いきなり出現した「新種」の対応に溜奈も動揺していた。

ダグリウスの解とき放った異様な機械生命体が復興途上の世界を侵食しようとしていた。

最悪な告白

2023年1月4日午後11時30分【東京都立川市 航空自衛隊
入間^{いるま} 基地 航空総隊司令部 統合空域管制指令室】

地下50mの大深度に設置された日本の防空識別圏を統合管制する自動警戒管制システム（ジャッジ・システム）に異変が生じていた。「ダメです！非常コード666を入力してもコントロールを取り戻せません！」

オペレーターが悲痛な声を上げる。

「泣き言は要らん！不正外部アクセスの発信源は分かったか!？」

当直司令の鷹匠^{たかじょう}准将が確認する。

「地球北米大陸、グルームレイク空軍基地！」

「何だ?!？」

一瞬間まった鷹匠は直ぐ我に返る。「あの」謎めいた空軍基地だとすぐに気付いた。

「市ヶ谷と官邸に至急電！」

鷹匠は今現在も日本列島上空を多数の自衛隊機や旅客機が飛んでいる状況に頭を抱えていた。

「このままだと最悪の事態が起こりかねん！」

日本国の制空権^{エア・パワー}は戦わずして失われつつあった。

同日午前2時【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス

地下研究室】

満とひかりは深夜、突然夫婦の寝室に乱入して来た美衣子と結に叩^{たた}き起こされて手を引かれながら地下研究室に来ていた。

「なんだい？こんな夜更けに・・・」

まだ寝ぼけ眼^{まなこ}の満がパジャマ姿で美衣子^{ミイコ}に訊く。

「あなた。多分すつごく良くない話ですよ・・・」

起こされても尚、うとうとしながらすつと満の腕にしがみ付いていたひかりが徐々に眼を醒^さましながら満に秘^{ひそ}かな確信を告げる。

「さすがね、ひかり。瑠奈から緊急コード「ヴォルデモート」が入った

わ

美衣子が二人を見つめて言った。

「瑠奈は無事なのか!？」

いつの間にそんな☒言っではいけない☒天層な符丁ふちようを取り決めていたんだ?と突っ込みたいのを抑おさえて満が美衣子に尋ねた。

「今の所は。でも、ちょっと不味まずいわね。マリーンシティが全滅するかも知れない」

美衣子が衝撃的な事を言う。

「手強てしわいモンスターでも現れたのかしら?」

すっかり眼の醒めたひかりが訊く。

「ええ。人ならざる者が造り出した最悪レベルの生体兵器だわ!」

美衣子が深刻そうな顔で研究室の壁掛けスクリーンに瑠奈ルナからリアルタイムで送られている映像を指した。

そこにはムカデの様な色をした異様な風体の巨大ワームがミジンコのように水中をギシギシ飛び跳ねながらひしめき合うようにして進んでいた。

満とひかりは唾然あぜんとして固まってしまっていた。

「火星にもこんな奴居なかっただろ・・・」

満がぽつりと言う。

「やけに禍々まがまがしい生き物ね」

嫌悪感を隠そうともしないひかりが言った。

「そうね。でもこれは生物じゃないわ。疑似生命体と言うのかしら?

サイボーグと言った方が分かり易やすいかも知れないわ」
結ムスビが説明した。

「誰が造り出したの?」

ひかりが訊く。

「おそらく、瑠奈にちよつかいを出してきた者が秘かに造っていたのよ」

美衣子が推定する。

「岩崎さんには伝えた?」

満が確認する。

「永田町と列島諸国には二人を起こす前に至急電で伝えたわ。新テルアビブにはワイズマン部隊から連絡が行っている筈よ」

美衣子が答える。

「時間が惜しいな。結、食堂にみんなを集めてくれないか？」

「分かったわ父さま」

結がとてとエレベーターへ走っていく。

「瑠奈、無事で居てくれよ・・・」

満が拳を握りしめる。

ひかりは満の拳を両手で包んでいた。

20分後、食堂に集まったミツル商事の面々と壁掛けスクリーンには各国の首脳陣とアマトハ達マルス側のメンバーも集合していた。琴乃羽だけが緊急の「調査」で地下の研究室に籠こもっている。

満がスクリーンの面々に突然の呼び出しを詫詫びた後に美衣子ミイコの方を向くと、領うなずいて進行を任せた。

「既に連絡した通り、最悪の疑似生態兵器サイボーグウェポンが地球に現れたわ」

美衣子が切り出した。

「どれくらい最悪のですか？」

英国連邦極東首相ケビンの背後に立つロイド提督が訊く。

「この疑似生命体サイボーグの最悪な所は「繁殖」、自己増殖して無数に数を増やす事よ」

結が答える。

「どれくらいペースで増殖するのですか？」

ユーロピア共和国のジャンヌ首相が尋ねる。

「現在交戦している瑠奈からのデータだと、十数分単位よ」

美衣子の言葉にスクリーンの面々が沈黙した。

「美衣子君。増殖と言っても最初は小さいのだろうか？」

澁澤首相がいきなり巨大ワームにならないだろう、との意味で訊く。

「この疑似生命体のもう一つ最悪な所は、生まれた瞬間から生物を喰くらい尽くす事に特化している事よ」

美衣子が交戦中の瑠奈の映像を面々のスクリーンに投影する。

『何なんだこいつはっ！』

メガフロート上に急ごしらえで作られたユニオンシティ防衛軍のものと思われる重機関銃陣地がサイボーグワーム群に向けて火を噴く。

しかしサイボーグワームは重機関銃弾の弾幕を物ともせず突進して防衛陣地の兵士たちに喰らいつく。

『ぐぎゃあああっ!!こいつ！オレを喰ってやがるっ！』

兵士達は次々と皮膚を突き破って身体に「喰い込む」サイボーグワームに内臓や頭を喰らいつくされて斃れていく。

暫くすると斃れた兵士の身体中からサイボーグワームよりも更に小さな、小指で摘めるような大きさのミニボーグワームが皮膚を突き破って飛び出すとマリーンシティの都市施設に群がっていく。

瑠奈やワイズマン中佐が乗る「マロングラッセ」は空中に退避しながらレーザーバリアーを展開して防衛に徹している。

同じ様に退避しようとしたマンスフィールド級空中戦艦部隊の1隻が浮上して間もなく内部から爆炎を噴き上げ、船体中央部からぽつきりと折れてメガフロート基地の滑走路に墜落していく。

よく見ると墜落したマンスフィールド級から無数のサイボーグワームが墜落して炎上している艦内の各所から外へボトボトと飛び出して逃げ出していた。恐らく艦内の搭乗員を喰いつくしたのであろう。

生き残ったマンスフィールド級の二隻はサイボーグワームが空中に飛び上がる高度より上まで退避に成功すると、レーザーシールドを展開することなくメガフロート上のサイボーグワーム群に、化学レーザーやCIWS（近接防空兵器）、短距離ミサイルを放って友軍を空中から援護すべく奮戦していた。

モニターに映る首脳陣は啞然とした様子だった。彼らに付き従う何人かは、兵士たちが喰らわれる光景を見て思わず嘔吐しているようだった。

「地獄だな・・・」

澁澤が絞り出すような声でそれだけを言った。

「酷い……誰が」仕掛けたのですか!？」

ジャンヌ首相が激昂する。

「恐らく……地球復興局の彼よ」

美衣子が敢えてぼかして言う。

「……マツカーサー三世だ！奴の施設で生み出されたものでしょう」

苦虫をかみつぶしたような顔で吐き捨てるようにケビン首相が答えた。

「我々の情報網はエリア51を監視していたが、内部協力者がシャトルごと撃ち落とれて始末された。その途端にこの事態だ」

「ソーンダイク。君は知っていたのか!？」

澁澤が画面の中で心なしか縮こまるソーンダイクに向けて問う。

「全く……。彼がエリア51で何をしていたかは一切報告されていませんでした」

顔面蒼白で茫然としながらソーンダイクが答える。

政治指導者として文民統制は基本だろうに、と澁澤は心の中で嘆息した。

「直ちに止めるように言えんのか?」

激怒した様子でイスラエル連邦のニタニエフが問い詰める。同胞たる派遣部隊がマリオンシティに駐留しているのだ。

「会議に参加する直前に通信を試みましたが、無線封鎖しているようで応答しません。現在エリア51の制圧を目的とした地上部隊を向かわせています」

ソーンダイクが武力鎮圧に向けた動きを説明した。

「実は先程から我が国の防衛システムがお国のエリア51からと思われるハッキングを受けていてな、事態はもはやユニオンシティ国内の反乱ではなく、世界規模で侵略が起きていると認識せざるを得ん」

澁澤がソーンダイクに告げる。

「どれだけの規模で侵略が行われているのか想像もつかん」

ケビンが戦慄した。

「ソーンダイク代表。月面都市は大丈夫ですか?」

ジャンヌ首相が訊く。

「今の所は……。彼の勢力は今まで表だつた行動を起こしていませんでした。今後は予測不可能ですが」

ソーンダイクが苦しそうに言った。

「奴の目的は何だ？世界の覇権か!」

ケビンが誰にともなく問う。

「そんなの決まっているじゃない」

美衣子が今さら何をとやわらばかりに口を尖らした。

「地球の支配と人類の家畜化よ。彼は地球を自分達に都合の良い環境にしたいのよ。マスター、合っているかしら?」

美衣子がこの会議が始まって以来珍しく沈黙を保っていたマルス陣営のゼイエスに訊く。

「……そうだ。奴は地球人類ではない。我々の同胞だ」

ゼイエスが顔を顰めて告白した。

余りに最悪なタイミングで唐突なカミングアウトに居合わせた全員が沈黙した。

同時刻——【NEWイワフネハウス地下 琴乃羽 研究室】

琴乃羽はアジア上空で観測された異常な電磁波の解析を進めていた。

やがて彼女は電磁波にある種の「指令コード（コマンド）」らしき符丁が含まれているのを見つけた。

頭上の食堂ではマルス人ゼイエスから衝撃的なカミングアウトがもたらされようとしていたが、彼女もまた、衝撃的な情報を掴みつつあった。

「福音システム?これは……。人間植物?」

琴乃羽が首を傾げる。コマンドのワード中に含まれていた人類脳機能の意識中枢へ働き掛ける要素として、どこかで見たことのある画像に心当たりがあった。

「……まさか……。福音システムの正体はヴォイニッチ手稿!」

琴乃羽が全く次元の違う異物に困惑する。同時に隠された意図を考える。

浴槽につかる人間と浴槽から「何か」を吸い上げようとする植物の

構図。人類と植物の関係性を示唆しているのであろうが、どこか違和感を感じる琴乃羽。

琴乃羽は何者かに導かれるように、無意識に自分の思考を加速させ、思うがままをキーボードに入力し続けていた。この入力は美衣子達三姉妹にはリアルタイムでリンクされている。

「人類と植物が同じ浴槽で共生？・・・いいえ、人類は浴槽で植物に搾り取られるだけかしら・・・違うわね・・・植物は酸素と果実でヒトを生かす事が出来るとしたら・・・やはり広義の生態系？・・・」

→ 琴乃羽の思考はさらに深く、飛躍をしていく。

「・・・違いは無いか・・・ヒトは植物」にもなれるし、「植物もヒト」になれる事ができる!!———だとしたら、福音はその手稿に書かれた原理を電磁波でヒトの脳に投影した・・・人類はこんな事を遥か昔に知っていたと!」

琴乃羽の指が忙しなくキーボードを叩き、彼女の試行錯誤を絶え間なく入力し続ける。

不意に琴乃羽は、電磁波による思考誘導操作を使って福音のワードたる手稿が生き物にイメージさせる意図を明確に悟った。

「福音・・・神がもたらす御業・・・まさか手稿を書いた者は人類を植物に変えて自分が世界の『神』にでもなるつもり!」

琴乃羽の思考が叫ばれようとした寸前、彼女の身体が唐突にドロリと溶け落ちると研究室の床に赤みがさす黄色の液体溜まりとなつて広がった。

食堂で会議に参加していた結は地下で分析作業を続ける琴乃羽の入力内容をリアルタイムで把握していたが、琴乃羽の思考がヴオイニツチ手稿に辿りついた瞬間、その場で立ち上がって叫んでいた。「琴乃羽ーそれ以上は考えちゃダメッ!!」

ゼイエスのカミングアウトを静かに聴いていた人類側の参加者は思わず目を剥いて咎めるように結を見つめたが、満だけは、

「どうした？結？」

満が結の肩に両手を添える。

「琴乃羽お姉ちゃんが・・・」

結がそれ以上は言葉を続けられずに俯うつむいてしまう。

「春日！イワフネさん！琴乃羽さんの様子を見に行ってください！」

満が二人に地下研究室の様子を見に行くように指示した。

二人が地下へ走っていく。

「お父さん、琴乃羽の生体反応は有るけど、血圧や脈拍のデータが測定不能になっているわ」

常にミツル商事社員のバイタルを把握はあくしている美衣子が衝撃的な事を告げる。

「研究室のモニターは!?」

「何故か故障中よ」

美衣子が満達にこの情報を『正しく認識させる事を阻はむ』ためにワザと嘘をついた。

「おいっ！そちらで何が起こった!?!」

澁澤首相が異常を察知さつちして問いかける。

「地下研究室で異常事態発生！エリア51の電磁波を解析していた社員に異常発生！詳細不明！一旦通信を遮断しゃだんします！」

満は取り繕つくろわずに用件だけ言うと一方的に通信を切断した。

「満さん・・・」

ひかりが不安そうに満の腕に両手を添える。

食堂に残っているのはひかりと岬、美衣子だけだった。

「・・・今は出来る事からやっさいこう」

不安そうな三人を前に、満はそれだけしか言う事が出来なかった。

「—————」

絵師 里音りおん様に再度イラストを書いていただきました。なかなかドストライクな出来でめっちゃ幸せです！

左から、瑠奈ルナ、ひかり、満、美衣子ミーコ（手前）、結ムスビ（手前右）です。
火星でも主人公は、ヒロインに引きずられていますw

侵略

2023年1月5日午前零時【神奈川県横浜市 NEW イワフネハ
ウス地下 琴乃羽 研究室】

満はひかるや美衣子達と共に、列島諸国との会議を中座して地下にある琴乃羽の研究室に駆けつけていた。

「なんだ!? これは・・・」

研究室の床には琴乃羽が来ていた衣服がまるでそのぼで脱ぎ棄てられたかのように、赤みがかった黄色い液体の真ん中で無造作に放置されていた。

「春日!これは?」

「私が駆けつけた時には既に・・・」

そう言うとき春日とイワフネは項垂れた。

「この液体は琴乃羽そのものよ。まだ『生きている』から大切に回収しないといけないわ」

美衣子が言った。

「この液体が琴乃羽さん!?おーい!」

呆然としたひかりは思わず床にしゃがむと液体に話しかけてみる。「ひかり、琴乃羽の身体は「固体から液体へ」変化した。もしかしたらこれから別の生き物に成る可能性があるわ。このままで液体が蒸発しないように様子をみるわ」

そう言うとき美衣子は琴乃羽研究室の緊急防護シールドを作動させて部屋の空気を外気から遮断した。

「美衣子、結。琴乃羽さんに何が起きたんだい?」

「彼女は福音システムの解析を行い、その真実に辿りついてしまったが故にヒトの身体を維持できなくなったのよ」

結がゆっくりと答えた。その表情は苦渋に歪んでいた。

「今、この事をお父さんやみんなに説明すると琴乃羽みたいになるかもしれない。美衣子姉さまと二人だけで今後の事を考えてみるわ」

結はそう言うとき美衣子に頷いてみせた。

「察しが良くて助かるわ、結ムスビ。お父さん、しばらく私達だけでここに居るから皆は上に戻って頂戴」

美衣子が満やひかりに向けて言った。

「必ず後で報告してくださいね？」

ひかりが美衣子と結に話しかけると二人は頷いたので満達は食堂に戻っていった。

—————

満とひかりが食堂に戻って再び会議に参加するタイミングで澁澤首相がアマトハ達マルス側に声をかけた。

「そろそろマルス（そちら）側で何が起きていたのか教えて頂きたいのだが？」

アマトハは地球滞在中には見せなかった苦渋くじゆうの表情で澁澤を見つめながら話し始めた。

「地球では彼の事をマッカーサー三世と呼んでいるようですが、彼は我々と同じマルス人であり、恐らく『シャドウ』に連なるメンバーの一人と思われれます」

「シャドウですか？」

岩崎が首を傾げる。どこの中二病ネームだろうか？

「我々の文明ではほとんどの者が何かしら学術を極めんと日々研究いそに勤しんでいるのはみなさんお分かりの事だろうと思います」

ゼイエスがアマトハと交代して説明を始めた。

「今から46億年前、私達の文明は科学技術の最高峰とも言うべき時期を謳歌おうかしておりました。そして、その知識と見識けんしきを以て太陽系全域で知的生命体を探索するプロジェクトが始ったのです」

「しかし、微生物の様な生物は『各惑星で発見』されたものの、文明を築くに至る生命体は存在していませんでした。第5惑星の知的生命体は当時の私達が見落としていましたか・・・」

ゼイエスが恨みがましい顔でアマトハを一瞥いちべつしつつ恥はじる。

「そこで当時のアカデミー上層部は『居ないならば造り出せばよい』と

今考えれば傲慢な方針の下、太陽系で一番生命の誕生に相応しい惑星を探しました」

恥じて俯きながらもゼイエスは説明を続けた。

「そうして探し出された惑星は第3惑星『地球』です」

澁澤達列島諸国の首脳は絶句していた。

「我々は第3惑星で生命が誕生することを促進させるために、生命の素とも言うべきバイオ溶液を搭載したカプセルを地球に送り込みました。——そして、皆さんがご存知の通り、最初の原始生命体が誕生して地球生物の長い創生の歴史が始まったのです」

「しかし、一部の研究者からはこの『長い創生の歴史』に不満を抱いて自らの望む知的生命体を生み出そうと考えた『異端派』が生まれました。彼らは生命をその惑星由来の自然に任せるのではなく、自らが導き手となってマルス文明の科学技術結晶たる知的生命体の創生を指摘したのです」

「・・・なんとたる傲慢だ」

英国連邦極東のケビン首相が葉巻をふかしながら渋い顔をして思わず呟く。

「当時のマルス文明は自信に満ち溢れていました。我々は万能であり、この宇宙 唯一の最高傑作であると自らを過信していました。ですから、『シヤドウ』の様な異端者も少なくありませんでした」

長くシヤドウと対峙してきたアマトハが説明を引き継ぐ。

「彼らの考えは、純粹に知的欲求のまま突き進んで科学技術の究極を目指す事です。その為には我々でさえも躊躇い自制する倫理を簡単に踏み越えて禁忌とされる分野にまで研究を行っていました。その研究内容は恐ろしく傲慢で破滅的なものでした。余りにも酷い為に皆さんにご説明する事が憚られる様な内容ですので「今は」省略します」

「この恐ろしい考えが及ばぬように、第3惑星で行われた『創生』プロジェクトは私自らが推進して『シヤドウ』に隙を見せない研究をしていたと思っていました」

「ところが思わぬところで隙が生じました。今から1万5,000年

前の事です」

アマトハがイワフネをちらりと見ながら説明を続ける。

「地球周辺を370年周期で回る彗星の一部が、第3惑星の観測をしていた『月』と地球の皆さんが呼んでいる惑星観測用人工天体『ルンナ』に激突したのです」

「彗星の激突で居住区、観測研究・天体制御システムが深刻なダメージを受けて大半の搭乗員が死亡、イワフネを含む僅かな生き残りは地球に緊急降下するしかありませんでした」

「ルンナの姿勢制御が不安定となり、地球上ではルンナの引力による大規模な地殻変動が発生、火山活動が活発になり、大半の地球生命を絶滅させる甚大な影響を及ぼしました。」

「そして運悪く、この時期にマルス本星の生存環境が急激に悪化したため、マルス本星を捨ててプレアデス星団コロニーに移住したのです」

「故に、当時は地球観測天体の通信が多少途絶えたところで大した関心を持たれることは無かったです」

アマトハが申し訳なさそうにイワフネの方を見る。

「プレアデス星団コロニーに移住した我々が落ち着いて再び本格的に地球観測を再開したのがつい最近、つまり日本列島が火星に転移した事がきっかけだったので」

ゼイエスが説明した。

「ですから、我々がプレアデス星団で地歩を固めている間に、『シャドウ』が地球にあらゆる干渉をしてきたものと考えています」

アマトハが言った。

人類側は言葉を返すことを忘れたかのように一言も言葉を発することも出来ずにただ呆然としていた。

——同日——午前零時30分【東京都立川市 航空自衛隊 航空総隊司令部 地下統合空域管制司令部】

日本の防空識別圏エイディーズ(ADIZ)を自動的に警戒監視するジャッジ・システムがエリア51からのハッキングを受けて1時間が経過していた。

指令室の全員が懸命に打開策を模索したが事態は改善せず、依然と

して日本列島上空の航空管制が乗っ取られていた。

そんな中、最悪の事態が始まろうとしていた。

「こちら百里^{ひゃくり}302レッドリーダー。そちらからのコントロールが一時途絶^{とだ}えた。何か有ったのか？」

百里基地所属のF15戦闘機編隊の隊長から通信が入る。

「レッドリーダー。コチラフチュウ、モンダイナイ。デンキケイトウノトラブルダ」

機械的な音声^{おんせい}が通信に応答した。

「おい！誰だ貴様は？勝手に通信に割り込むな！」

指令室のオペレーターが慌^{あわ}てて制止しようとするがなす術はない。

「302、アンノウンタンチ。ホウイ03、12000フィート」

「ラジャ、302、03に向かう」

「こちら日本マルス航空6620貨物便。まもなくそちらの空域管制に入る。誘導頼む」

「コチラフチュウ。ユウウドウスル。ホウイソノママ、コウド12000フィートマデジョウショウセヨ」

「了解した。12000まで上がる」

「おい！何をやる気だ！」

指令室がハッカーの意図に危険を感じる。

「こちら302。指定された高度に到達した。前方7000mにアンノウン探知。夜間の為目視^{もくし}による詳細確認困難。赤外線暗視システムを使用する。・・・ん？アンノウンは大型旅客機のように見えるが？」

「302、ビンゴダ。ソノアンノウンハホツカイドウトウホウオキカラヒライ。ユニオンシテイグンセンリヤクバクゲキキダ」

「何を言ってるんだ!?民間航空機だぞ！302！応答せよ！」

指令室が呼び掛けるが通信システムがハッキングされているのでF35パイロットに通信は届かない。

「了解した。府中、交戦規定に則^{のっと}りこれより警告射撃に入る」

「こちら6620！後方から小型機2機が接近しているようだ。ニアミスなのか？」

貨物便の機長から焦った声で確認が入る。

「コチラフチュウ。ミンカンキゴエイクンレンノジエイタイダ。キニスルナ」

「こちら府中！302！そいつはこちらの管制ではないぞ！目を醒ませ！」

指令室が必死に呼び掛ける。

「ダメです！こちらからの通信が遮断されています！」

「何と言う事だ」

鷹匠司令の顔が蒼ざめていく。

「こちら6620！後方の航空機が何か発射したぞ！」

「クンレンヨウノエイコウダнда。モンダイナイ。6620ハシンロワイジセヨ」

「こちら302、警告射撃にアンノウン反応なし。ROE（交戦規定）に基づいてこれより目標排除に移行」

流石に同類へ向けてミサイルを発射する事に緊張しているのか、手順を詠唱する声は上ずっていた。

「馬鹿なっ！?!百里302！撃つな！あれは民間機だぞっ！」

指令室が懸命に呼び掛けるが、指令所の通信センターもハッキングの影響下にあり、航空機には届かなかった。

「302、アンノウンロックオン。サイドワインダーを使用する」

「コチラフチュウ。アンノウンヘンカナシ。コウゲキヲキヨカスル」
「やめろーっ!!」

オペレーターの絶叫も虚しくF35からAMRAAM空対空ミサイルが発射された。

「っ!?!6620何かが当たっー」

「302だ。アンノウン撃墜を確認」

「司令、レーダーから6620便が消えました・・・」

大多数の指令室要員は冷や汗を噴き出しながらなす術もなく状況を見る事しか出来なかった。

「おいっ！府中！我々は何を撃墜した？あれは737（ボーイング機の種類）じゃないのか!?!」

過ちに気づいた半狂乱のパイロットが叫ぶ。

「ククク・・・二ホンマルスコウクウ6620ビンダ」

府中を名乗る偽の管制官の笑い声にF15パイロットはようやく気付いた様だった。

「府中！どうした！気でも触れたのか!?!」

指令室の通信機から302飛行隊の状況確認コールが狂ったようにかなりたてていたが、誰も応答することが出来なかった。

鷹匠司令は絶望的な表情でオペレーターに告げた。

「市ヶ谷と官邸に連絡しろ。『我が国は制空権を失った』と」

そう指示すると力なく座席に座り込んで頭を抱えた。

航空自衛隊の防空識別圏 自動警戒管制システム（ジャッジ・システム）をハッキングしたエリア51のDNAコンピューターは、日本列島上空の制空権を手に入れた。

DNAコンピューターは陸海空三自衛隊の指揮通信システムも掌握、日本列島の国防体制は一時マヒ状態に陥った。

マルス文明 研究室を改装したダイモス宇宙基地だけはマルス通信システム下にあつたため難を逃れた。

続いて日銀金融ネットワークシステム、同当座預金系・国債系決済システム、メガバンクのオンラインシステムが次々と機能不全に陥った。

また、列島諸国とアルテミア大陸、ヘラス大陸の各人類都市は日本国通信システムが異常を感知した段階で自動的に接続を遮断しており、自らのコミュニケーションへの損害は防がれたものの、生存圏外部と一切の通信接続が出来なくなり、孤立した。

政府日銀は午前7時45分、金融庁長官と日銀総裁の緊急会見で同時刻を以てすべての国内金融機関、国内証券取引所について、事態収束までの期間、取引および営業停止の緊急時行政命令を発令、全国のATM稼働停止措置の発動を発表した。

日銀と金融庁の発表により、あらゆる電子マネー、交通系ICカード、クレジットカードの使用が出来なくなり、各地の交通機関、飲食店、コンビニエンスストアで多数の決済難民が発生して市民生活は

大混乱に陥った。

午前8時、日本政府は全土に非常事態宣言を発令した。

【神奈川県 横浜市 NEWイワフネハウス地下 琴乃羽研究室】

美衣子と結が「琴乃羽」だった液体を前に佇たたずんでいた。

「なんてこと」

美衣子が沈痛ちんつうな表情で結を見つめる。

「由々しき事態ですわお姉様」

結もつぶらな瞳で美衣子を見返す。

「福音システムは人類を無意識のうちに自ら別の生き物に転換させる事が目的ね」

琴乃羽が溶解する直前まで入力していた解析データを視ながら美衣子が言う。

「問題はヴォイニッチ手稿しゅこうなる物がどこから「流出」したかよ。まあ、出所しゅつしょは『シャドウ』しかありえないと思うけど」

「『シャドウ』はマッカーサー三世だと？」

結が驚く。

「そんな今更いまさらの事言っても始まらないわ。でも、人類をこんな液体に変えてまで『シャドウ』は何がしたいのかしら？」

美衣子が首を傾げる。

「人類の殲滅せんめつならわざわざ溶かすこともなく、物理的に地球各地の核兵器を使用すれば良いだけ……。それをせずに回りくどい事をする理由とは……。結、これは時間がかかりそうね。ひとまずプリンでも食べながら考えましよう」

「美衣子姉さま、窺かまだしプリン在庫が昨日のお風呂上がりで底をついたわ。コンビニに買いに行かないと」

「くっ……。今はシャドウのハッキングで日本中のシステムが停止している。プリンがコンビニには無い……」

床にくずおれる美衣子。結も力なく琴乃羽が座っていた椅子に腰かける。

「物理的に日本列島を侵おかさない限りは私達のシステムが作動しない事を計算しているのだとしたら、マッカーサー三世は本当に悪辣あくらつね……」

結ムスビは列島生命環境保護システムの裏をかくサイバー攻撃に、深刻な脅威を感じざるを得なかった。

「地球あつちは大丈夫かしら」

人工知能の申し子たる三姉妹と云えど、すべての通信システムが遮断しゃだんされた事態に美衣子ミイコは瑠奈ルナの事を心配せずにはいらなかった。

命令はまだか!?

2022年3月10日午前0時4分〔東京都 新宿区 市ヶ谷 防衛省本庁舎 防衛大臣執務室〕

防衛大臣の桑田は昨日未明から働き詰めだった。北海道東方沖と尖閣諸島で相次いで国籍不明不審船の目撃情報が相次いだ為である。北海道東方沖では極東ロシア連邦の国旗を掲げたミサイル駆逐艦が領海内を悠然と航行しているのを漁船が発見した。

尖閣諸島では謎の木造漁船が異常な高スピードで海上保安庁巡視船を振り切つて逃走を続けているとの通報があった。

いずれの地域も自衛隊艦船が接近しようと試みるとすぐに距離を置かれてしまい、詳細が確認出来ないと言現場の指揮官が本部に指示を求めていた。

たまたま定例視察で地下司令センターに居合わせた桑田は第1報入電時から陣頭指揮を執り、空自・海自を大規模に動員して搜索活動を続けていた。

しかし、空自の早期警戒機を投入しても探知されず、業を煮やした桑田はイージス艦と潜水艦隊も投入、さらに横須賀のユニオンシティ海軍司令部と協議して横田基地と横須賀沖の空母『ロナルド・レーガン』から電子戦哨戒機まで動員して総力を挙げた搜索を行ったが、日没時に於いても発見報告は無かった。

統合幕僚監部の報告を受けた桑田は地下司令センターから執務室に戻つて仮眠を取つていた。

午前1時頃、突然執務室の扉を激しく叩く音と共に、
「桑田隊長！敵襲でありますっ！命令願いますっ！」

と大声で若い隊員と思われる声が桑田を叩き起こした。

「わかった！今行く！」

と桑田は返答して身支度を整え始めた。

桑田は父親が旧日本陸軍近衛連隊出身であり、桑田自身も高校卒業後に陸上自衛隊に入隊して30代まで普通科連隊の中隊長として勤務した経験を持つ。

そんな彼は常日頃から秘書官や防衛事務次官、当直隊員に「俺の事は大臣と呼ぶな、「隊長」と呼べ」と言っていた。

桑田は突然の火星生物襲撃で司令センターから急ぎの伝令が来たのだろうと思った。

「準備が出来た。入ってよし！」

桑田が大声で入室を許可したが、扉が開く事は無かった。

しばらく待っても隊員の声が聴こえないので扉を開けてみたが、執務室の外は深夜で人気がなく、しんと静まり返っており、誰も居なかった。

不審に思った桑田は内線電話で大臣官房に問い合わせたが、「大臣に緊急の連絡や官邸からの呼び出しなどはありません」

との事だった。

既に事態は収束したのかと思つて眠気を感じた桑田は再び仮眠に就いた。

その日――

再び昨日と同じ海域で不審船舶が警戒中の海上保安庁巡視船に目撃され、桑田は仮眠もそこそこに、早朝から地下司令センターに籠りつきりとなった。

そしてまたしても日没と同時に、不審船舶の情報は途絶えたのだつた。

徒労感に襲われた桑田は現場への指示や官邸への報告で疲れた頭を休ませるべく、いつもの仮眠場所である大臣執務室にある折り畳み式の簡易ベッドで仮眠していた。

3月11日 午前零時を過ぎた頃、大臣執務室のドアが激しく叩かれて、

「敵襲です、桑田隊長！ご命令を！」

と再び例の隊員の声が聴こえたので桑田は、

「どこが攻めて来たのだ！」

と訊き返すと。

「敵襲に付き、隊長殿のご命令を至急頂きたいのであります！」
と返事が返ってきた。

「分かった、入室してよし！」

と桑田が入室許可を与えたが一向に外の隊員は室内に入ろうとせず、ドアをドンドン叩いて

「失礼します！敵襲です！桑田隊長！ご命令願いますっ！」

と先程と同じ行動を繰り返していた。

そのうちにノックの音が大きくなり、数人の隊員が慌ただしく話す声が出た後に「バカヤロー！」と怒声が響いてドアをガンガンと数人がかりで懸命に叩く気配が伝わってきた。また、焦げ臭い匂いも部屋に漂い始めた。

流石に異常事態と気付いた桑田はベッドに腰かけたまま内線電話で大臣秘書官を呼び出したが、秘書官は冷静さを保っており、

「現在のところ、襲撃など大臣に報告を要する緊急の事象は発生していません」

との返答だった。

首を捻った桑田は、

「執務室の外で数人の隊員が大声でドアを叩いて騒いでいる」

と伝えると電話口の向こうから息を呑む音が聞こえ、「直ぐに向かいます！」と言って通話が切られた。

1分もしない内に当直警護隊が大臣秘書官と完全装備で駆け付けたが、執務室の外は静まり返っており、やはり誰も居なかった。

駆け付けた隊員が執務室の扉を念入りに調べたところ、木製の扉に無数の血塗れの手形が残されており、その場で警備隊が市ヶ谷警察署に通報した。市ヶ谷署の鑑識課が現場検証を行ったが、やはり多数の手形が微かな焦げ跡と共に扉の外側にびっしりと残されており、警視庁は防衛省本庁舎への建造物不法侵入と器物損壊、威力業務妨害容疑で捜査を開始した。

連日の徹夜と不可解な出来事で疲弊した桑田は大臣車で大田区田園調布の自宅に戻ることにした。

市ヶ谷から首都高速3号線で用賀に向かう途中、車内で微睡んでいた桑田は、後部座席背後の窓ガラスがバンバンと叩かれる音で飛び起きた。

テロリストの襲撃かと身構える桑田と助手席のSPだったが、運転手は思わずブレーキを踏んで速度を落として路肩に停車しようとした。

「馬鹿！速度を落とすな！思う壺だ！」

SPが叫ぶと大臣車は急減速から急加速した。

運転手は顔面蒼白で前方を懸命に見据えてハンドルを握っていたが、バックミラーを凝視した途端に「ぎゃっ」と小さく呻くとハンドルに突っ伏してしまった。

運転手の異常に気付いたSPはちらりとバックミラーを一瞥した後に、後部座席の桑田を気遣いつつも振り返らずに、

「そのまま振り向かず姿勢を低くして前方か床だけを見てください！直ぐに応援を呼びます」

と告げるとぐったりした運転手を助手席側に引き寄せてハンドル前へ移動してアクセルを踏み込むと猛スピードで用賀料金所を目指して疾走した。

桑田は襲撃の恐怖で飛び降りたくなかったが、自衛官時代に培ったなげなしの根性を総動員して後部座席の床にかがみこむように身体を丸めながら車中に留まった。

後部窓ガラスを叩く音はガンガンと激しさを増し、頭上からもドスドスと足音が車の天井を突き破らんばかりに響いていた。

5分後、大臣車が用賀料金所に辿り着く寸前に大臣車を叩く物音はびたりと治まった。

SPからの緊急通報を受けて待機していた機動隊と警視庁公安の車両が大臣車を護るようになり、桑田を保護し、意識不明の運転手と到着直後に卒倒したSPは救急車で病院に搬送された。

救急搬送された病院で運転手は急性心不全による死亡が確認され、SPは極度の緊張と疲労による脱水症状と意識障害を引き起こしているものの命に別状は無かった。

SPは卒倒する寸前に、

「車の後部窓ガラスに複数の煤まみれの真っ黒な人影が取り付いて白い瞳を見開いて何かを叫びながら車の天井と窓ガラスを懸命に叩い

ていた」と同僚のSPに話した。

桑田自身も念のため、世田谷区の自衛隊中央病院に搬送されて当直医官の診察を受けたが、軽い脱水症状だけであり、一晚の安静で改善されると診断された。

昨日の防衛省内大臣執務室の不審者侵入騒動で捜査を開始していた警視庁は、新たな事件に仰天して大臣車の現場検証を行ったが、後部窓ガラスに血液がこびりついた無数の手形と、焦げ跡の着いた無数の足跡が天井部分で発見された。

警視庁と公安が所有する生体データに該当する手形や血痕の人物は存在しなかった。

鑑識は手足の大小から容疑者は少なくとも5人と推定した。

夜が明けて、早朝から警視庁から病室で報告を受けた桑田は、事態を深刻なものと捉えざるを得なかった。

桑田は今まで心霊やオカルトを信じていなかった。UFOに関しては、マルス文明との遭遇コンタクトもあり、確実な物証があれば認めるが、未だ物証を眼にしていない。

しかし、事ここに至ってはその考えを改める必要があるかも知れないと弱気になっていた。

警視庁担当者が病室を出た後、岩崎官房長官が見舞いに訪れた。

「お身体の調子はいかがですか？」

「心配かけて済まない、岩崎さん」

桑田はベッドから身体を起こすと頭を下げた。

「いえいえ、お気になさらずに。あなたが無事で居てくれて良かった。一体何が起こったのですか？」

岩崎が桑田を労わりながらも事情を聴く。

桑田は意を決して昨夜から身辺で起きた出来事を岩崎に説明した。

岩崎は桑田の話の話を聴くと、彼の目を真っすぐに見つめて訊いた。

「桑田さんのお父上は前の戦争の時に近衛連隊に所属されていたのですよね？」

「ええ、終戦前の数か月間だけでしたが何か？」

「お父上は当時「市谷」の陸軍参謀本部を護る市谷高射砲陣地へ応援に

行かれていたと聞いた事が在ります。其の辺りを調べると良いでしょう」

それだけ言うと岩崎は用事を思い出したと言って、病室を出ていった。

病院を出ると岩崎は国家安全保障局に連絡を入れて内閣調査室長を呼び出すのだった。

2022年3月11日午前11時〔東京都千代田区永田町 首相官

邸〕

岩崎と内調の責任者は、ミツル商事に転職したの岬渚紗から電磁波の人体への影響について説明を受けていた。

「それでは、幻覚を見る可能性があると?」

岩崎が訊く。

「はい。特殊な電磁波は人体の思考中枢部の脳神経を麻痺させる事が出来ます。その上で、電磁波に混ぜ混んだイメージに従って幻覚を見たり、幻聴と言う症状を起こす可能性がありますね」

岬が答えた。

「そのような話は聴いたことがない」

内調の責任者が首を捻る。

「当たり前です。そのような非人道的実証実験なんて日本国内で出来る訳無いじゃないですか!」

岬が憤然として答えた。

「電磁波による脳神経中枢の操作は、人体に与える負荷が人によっては耐えられない場合があると思われれます」

「最悪、急性心不全やアルツハイマー型痴呆症の発症があるでしょう」

岬が神妙な顔で説明する。

「とはいっても、人間の脳は普段90%しか使われていないと言われてますから、程よい刺激で普段は視れない物を視てみるのも良いかも知れません」

岬の言葉に岩崎は頷くが、

「あくまでもそれは個人が決めるべきでしょう。人体へのリスクを考えれば尚更でしょう」

と岬博士に釘を刺すのだった。

岩崎官房長官が桑田の病室を出た後に、桑田は防衛大臣秘書官を呼んで、桑田の父が近衛連隊から牛込区市谷の高射砲連隊に派遣された状況を調べるように「お願い」した。

政治家の私的な「お願い」は、近年世間の目が厳しいので拒否もやむなしと覚悟したが、秘書官は以外にも快諾して直ちに作業に取り掛かっていた。

午後になって桑田は安静に過ごしていた自衛隊中央病院を抜け出すと、市ヶ谷の防衛省本省に戻った。

程なくして、大臣秘書官が桑田に調査結果を報告するために執務室を訪れた。

「急な所無理にお願いして申し訳ない」

桑田が頭を下げる。

「そんな！頭を上げてください隊長。隊長の一大事ですから、みんな心配しているのですよ？特に当直の隊員たちが大変心配していました」

秘書官が恐縮する。

「そうか。後で差し入れでもせんとな。番記者共にこの出来事は知られているのか？」

「いえ。大臣車の運転手が過労で交通事故を起こしたとだけ」

「この状況が一息つけたなら、ご家族の弔問ちようもんに行かねばならんな。
手筈てはずを頼む」

「わかりました。それで、例の件で報告です」

「どうだった？」

「少し報告にお時間がかかりますが？」

「構わんよ。私は今も入院中という事になっている」

桑田がニヤリと笑った。

「では、報告します」

秘書官は一息つくくと、ゆっくりと確かめるように資料に目を通しながら説明を始めた。

「隊長のお父上は1945年3月1日付けで近衛連隊から一時的に市

谷の高射砲連隊小隊長に任命されて、不足していた下士官の代わりを務められています」

「そのことは亡き親父おやじに幾度いくどか聞いたことがある。任官間もないのにいきなり小隊長をやれと言われて困ったと言っていたな」

「そうでしたか。当時の連隊日誌では桑田小隊長は厳しくも面倒見が良い優しい上官だと部下からの信望も厚かったようですね」

「私も早くそうなりたいものだ」

「充分でしょうに。さて、3月1日に転属して10日後、「あの空襲」がありました」

「東京大空襲だな？」

「はい。桑田小隊長は部下の高射砲小隊に迎撃準備を指示した後に単身、司令部へ弾薬の補充を直談判しに向かったそうです」

「あの頃は弾薬も碌ろくに補給されていなかったらしいな」

「ええ。大編隊のB29相手に弾薬が不足気味の対空砲火など、自殺行為もいいところでしたが、桑田小隊長は何とかしようという思いで直談判に乗り込んだのでしょうか」

「親父らしい」

「そして小隊長殿の補給要請は一蹴されてしまいました。連隊長から配下の将兵を連れて埼玉県川越に変更配置せよという命令をもぎ取ってきた様です。変更配置は言い換えれば一時的な避難許可ですね」

「それは知らなかった。それで父は部下を救えたのか？」

「残念ながら……。連隊司令部からの帰途に敵戦闘機の機銃掃射で乗っていた連絡車両が破壊され、徒歩で身を隠しつつ市谷の陣地に戻ったようですが、焼夷弾の大量投下後で周囲は火の海だったそうです」

「空襲後に桑田小隊長は、対空陣地をくまなく探して部下を見つけようとしたのですが、辺り一面が焼失していて、遺体と陣地資材の区別が付かない程、焼け焦げていたようです」

秘書官が沈痛な面持ちで報告を続ける。

「結局、桑田小隊長指揮下の将兵は全員行方不明のまま、戦死扱いと

なっております。遺骨も未だ見つかっておりません。以上になります」

桑田も、大臣秘書官も、暫くの間、言葉が出なかった。

2022年3月11日午後4時【東京都港区六本木 ユニオンシティ国大使館】

岩崎官房長官は内閣調査室の室長を伴って駐日大使のもとを訪れていた。

「大使閣下。ご多忙中の所申し訳ない」

「とんでもない。友好国の官房長官ならいつでも歓迎しますぞ！」

大使が大きな仕草で二人を出迎えた。

「感謝します、大使」

岩崎はそう言うとは題を切り出した。

「ところで「昨日から我が国の一部地域でかなり強力な電磁波が観測されましたね。一部の観測所では観測機器が故障するほどの異常レベルでした」

「それは・・・災難でしたな。リベラルを標榜する修正マルクス主義カクマル派かカルト宗教の仕業でしょうか？」

「残念ながら違うようです。彼らが言うところの電磁波が人間を狂わせるなど、我が国ではその手の事象は確認されておりません。ただ、貴国の幾つかの研究機関では積極的に取り組んで成果を上げているようですが？」

「とんでもない！われわれの技術は貴国の後塵を拝しています。ですが過去の実験では特殊な電磁波が脳神経の思考中枢に作用して、一種の幻覚や幻聴を引き起こして自律神経をマヒさせると聞いています」「そのような非人道的実験は我が国の中では到底認められないものです」

「それは我が国も同じですとも」

「我々の調査によりますと、今回の電磁波の発信場所は不思議な事に、三沢、横田、岩国にある貴国通信施設周辺であり、我が国が極秘裏に保有する早期警戒衛星を經由（ハッキング）して北海道東方沖、尖閣諸島沖、そして市ヶ谷の防衛大臣室のある庁舎に集中して照射された

形跡を確認しました」

「ほう……。それは不思議な偶然ですな。我が国に責任を擦り付けようとする英国連邦極東やユーロピア共和国の陰謀でしょう」

大使がすつとぼけて見せた。

「そうであれば良かったと、心から願っていましたよ」

抑揚のない声音で岩崎が応える。

「我が国が持つ早期警戒衛星のアクセスコードを知る者は総理の他に数人だけです」

「当然でしょうな。我が国でもそうしています」

「ご理解いただけただけで助かります。我が国はこれ以上の行動を見逃す事は出来ません！該当する犯罪組織を発見した場合、帰属する国家や組織に対し我が国は最大規模の経済制裁と国交断絶を宣言するでしょう」

「惑星間多国貿易を標榜する貴国にそれができるのか？」

「我が国の存亡に関わる事ですから、やり遂げる事になるでしょう。少なくとも濫澤総理と私はそのように認識していますよ」

「しかと承った。我が国も犯罪組織の捜査に協力しよう。我が国は貴国と常に共に在るとというのがソーンダイク代表のお考えです」

「感謝します。これ以上、人類連合を弱体化させる訳にはいけません」
「まったくだ。偉大な連合に栄光を」

岩崎官房長官がユニオンシティ国大使館を出て直ぐに大使は横須賀基地の情報将校を詰問して電磁波の一種であるリリー波を使った実証実験中止を迫り、実験を続行した場合、地球と火星諸国の関係悪化は必至であるとの報告書をボレアリフシティと月面都市へ打電した。

同日午後8時【東京都新宿区市ヶ谷 防衛省敷地内】

大臣秘書官の報告を受けた桑田は気分転換がてら散歩をしたくなり、SPと当直警護隊員を連れて敷地内の人があまり立ち入らない緑地帯を散策していた。

桑田は緑地帯の一角に古く朽ちた祠を見つけると無性に祈りを捧げたくなり、隊員にお酒と線香を用意させた。

ほこり
祠に日本酒とお線香を供え、桑田は静かに感謝の念と、迷わずに靖
国神社で英霊となるように願いながら合掌した。

幾分落ち着いた気持ちになった桑田が執務室に戻ろうと踵を返そ
うとした時、

「ご命令確かに承りました！」

「小官らはお先に靖国でお待ちしております！隊長はどうぞごゆつく
りいらしてください！」

「小隊、桑田隊長に敬礼っ!!」

と数人の呼びかける声と遠ざかる軍靴の足音が桑田の耳に聴こえ
た。

桑田は思わず傍らのSPに「今、何か聞こえなかったか？」と尋ね
たが、その場に居た者は怪訝そうな顔を見ると皆、首を横に振るの
だった。

その日の夜は大臣執務室の扉を叩く者も居らず、不審船舶出没の報
告も途絶えていた。

翌朝、桑田は早朝に昨晚の祠を訪れたがそこに祠は存在せず、1本
の桜の大木があるだけだった。

警護の隊員にその事を伝えると、

「昨晚は隊長が突然桜の木の下でお供え物をして手を合わせたので驚
きました」

と返事が返ってきて桑田を驚かせた。

桑田は大臣秘書官にこの話をしたが、初老の秘書官は静かに微笑む
と

「良かったですね」と一言だけ言った。

また、岩崎官房長官にも事の顛末を伝えたがやはり彼も、

「桑田君はお父上の代わりとして、立派に務めを果たしましたね」
と思慮深げな顔で答えるのだった。

桑田は防衛大臣を務めた任期中、毎年3月10日になると必ずあの
桜の木を訪れて供え物を欠かさなかったという。

混沌編 真 世界大戦 マリーンシティの戦い

2023年1月5日午前4時〔南太平洋 オーストラリア北部近海
メガフロート『マリーンシティ・ワン』〕

マリーンシティの戦いは強大な生物群の濁流だくりゅうに翻弄ほんろうされる筏いかだの如ごとく苦戦を強いられていた。

→殺到する巨大ワーム群

「司令！虫けら共は依然としてインドネシア東ティモール方面から侵
攻中！サイボーグワームに混じったイルカやシャチ、クジラの群れま
で合流しています。個体判別は不可能！」

「当たり前だ！こんな所で環境保護もクソもあるか！このままでは私
達の方が一絶滅危惧種《ぜつめつきぐしゅー》になってしまおうぞ！」

ジョーンズ中將が大真面目に叫ぶ。

「ミツル商事から入電！」

『ジョーンズおじさん！もう無理っス！食い止められないッス！弾薬
やエネルギーが流石さすがに足りないッス！撤退するしかないっスよ！』

瑠奈ミス・ルナから叫ぶような通信が入ってきた。

「瑠奈嬢！こいつらまとめて何とか出来んのかね！」

『相打ち覚悟でなら中性子爆弾が効果的っすけど・・・』

「EMP（電磁パルス）攻撃はどうかね？」

『このメガフロートの機能が全部ダメになるっスよ!?!しかも「本物の」
ワームには効かないっすから微妙っスよ!?!』

「構わん！ここで全滅するのは性に合わん！兵士達を可能な限り空中
戦艦に載せてくれんか？」

『ラジャっす！おじさんも早くマロングラッセに乗ってくださいね？
避難民の誘導まで手が回らないっス！』

「了解した。直ぐに兵士達を連れてそちらへ向かおう。高度を下げ
てくれ。EMP攻撃までどれくらいかかる？」

『うーん、5分で良いっすか?!』

ジョーンズが命令しようとした時、メガフロート防衛艦隊から通信が入る。

→旧米海軍　ロスアンゼルス型原子力潜水艦「ルイビル」

『こちら「ルイビル」！これより全力ミサイル攻撃を開始します！瑠奈嬢、我々が虫けら共を蹴散らしておくのでその隙に避難されたし！中将閣下を頼むぞ！』

メガフロート脇の海面から多数のミサイルが海面を飛び出すと、直ぐにメガフロート一縁『ふち』や近隣海上に落下して押し寄せていたワーム群を劫火に包んでいった。

「こちらジョーンズ！防衛艦隊諸君の奮戦に心から感謝する！サザーランド、貴様は戻ったら説教だ！覚悟しておれよ！」

ジョーンズの視界が目頭から滲み出る塩味の何かで揺らいだ。

15分後、一時的に着陸した『マロングラッセ』とマンスフィールド級空中戦艦2隻は収容人数を大幅に超える兵士や研究者達を詰め込むとマリーンシテイからの脱出に成功した。

【潜水艦「ルイビル」】

「大佐、司令部への返信終わりましたが、これで良かったのでありますか?」

副長が艦長のサザーランド大佐に訊いた。

「構わん、説教はご免だしな！副官の代わりなど幾らでも居る。中将閣下は地球の未来に必要なお方だ。ここで我らが踏ん張らないと大変動で無為に喪われた戦友に申し訳が立たん。副長達には付き合わせて済まないと思っている」

サザーランド大佐が副長に頭を僅かに下げた。

「こんな事になるだろうと、本艦のマリーンシテイ防衛艦隊転属時に若い衆は皆新設の空中艦隊へ異動させてあります。ここに残っているのは全員、盛りを過ぎたロートルばかりでさあ！」

副長がニヤリと笑う。

サザーランドは艦内マイクを手に取ると

『こちら艦長。全ての乗組員に感謝する！』

と短く言った。

潜水艦『ルイビル』は搭載した全てのハーブーン対艦ミサイルとトマホークミサイル、MK-48魚雷を撃ち尽くした後、急速潜行して戦場からの離脱を図ったがサイボーグワームの群れに取り囲まれると中性子核爆雷を起爆させて周囲2キロのサイボーグワームごと自爆して消滅した。

『ルイビル』と同様、生き残っていた防衛艦隊のイージス艦とフリゲート艦も、最後まで海上都市で奮戦していた海兵隊員や整備兵、研究者がシャトルで脱出する時間を稼ぐ^{かせ}為に各種ミサイルや砲弾、魚雷、爆雷、バルカン砲を片端から発射してワーム群に叩きつけた。

やがて弾薬が尽きた各艦はワーム群に特攻し、原子炉に内蔵していた核爆雷を起爆させてサイボーグワーム本隊の海上都市接近を遅れさせた。

オーストラリア中央「ノーザン・テリトリー空軍基地」で避難民を降ろした後、瑠奈とジョーンズは大急ぎでマリーンシティに戻ったが、そこに友軍の艦船は1隻も見当たらず、海上都市はサイボーグワームと不気味で見慣れないサソリモドキの群れに覆われていた。

防衛艦隊の犠牲により、空中戦艦に乗り遅れた海上都市の海兵隊と整備兵、研究員の多くがミッソル商事が残した上陸用小型シャトルに乗って脱出に成功した。

ジョーンズは断腸の思いで海上都市中枢に設置された中性子爆弾自爆装置スイッチを入れると空中戦艦眼下の海上都市から猛烈な閃光^{せんこう}が閃いて^{ひらめ}巨大な水柱が灰色の空まで立ち昇ると、海上都市ごとサイボーグワーム群は消滅した。

海上で核爆発した「マリーンシティ・ワン」

瑠奈とワイズマンは呆然と眺める事しか出来なかった。

この戦いでユニオンシティ海軍南半球防衛艦隊は全艦が自爆して全滅した。

戦死・行方不明15,000名を出したこの撤退戦は「マリーンシ

テイの戦い」と呼ばれることとなる。

—————

同時刻【火星 日本列島 神奈川県横浜市 NEWイワフネハウス
琴乃羽研究室】

「結、まずは日本列島のシステムを私達の手に取り戻してから琴乃羽を救う手立てを考えましょう」

「それまでごめんなさい。琴乃羽。きっと貴女を助けるから」

そう言うとき美衣子と結はターミネイター兵士に現場保存を任せると食堂に戻っていった。

慎重に現場保存がなされた琴乃羽研究室の床に広がった液体をターミネイター兵士はじつと見つめていた。

→ 琴乃羽の溶液

『コンナトコロニ同胞がイルトハ驚きダ』

兵士の発した独り言は何故かツルハシと同じ口調だった。

食堂に戻った美衣子と結は満とひかりにこれまでに推測した事を報告したが、「ヴォイニツチ手稿」の事はまだ伏せていた。満達は今、手稿を想像されては琴乃羽の二の舞になる可能性が高いと美衣子が判断したためである。

美衣子と結は敢えて話題をそこから逸らすために、喫緊の課題としてコンビニ流通システム復旧を満に提案していた。

「お父さん。これじゃ注文したミートソースピザのケータイ払いが出来ないわ！デザートにつけた窯だしまろやかプリンもよ!!」

美衣子と結が地団駄をぺちぺちと踏む。

「あなた達の由々しき事態はそこ!？」

ひかりが呆れる。

「こうなったら人脈を駆使してプリンだけでも救出よ!」

美衣子がムフーと鼻息荒く地下の研究室へ駆けていく。結も美衣子を追って階段を駆け降りていった。

そんな二人を見ながら満とひかりは肩を竦めてため息を吐くと再び地下の研究室へ降りていく。

「大丈夫ですよ満さん。あの子たちはちゃんと分かっていますから。琴乃羽を救ってくれるはず。私達はあの子たちが「更に」便乗してやらかさなないように見守りましょう?」

ひかりが自分に言い聞かせるように微妙な表現でフォローを試みる。

美衣子と結は地下にある研究室から非常用のマルス製Pパワー通信システムで経済産業省ホームページにある「AI（人工知能）出逢いコミュニティ」にアクセスした。

→ 出逢いコミュニティ入り口画面

「あれ? どうしたんですか? ミーコ神様に結神様まで・・・」

日本列島や人類が未曾有の危機に直面する中、通信回線が不通となり「もとの施設へ」戻れないAI達がコミュニティ内の仮想居酒屋で合コンをしていた。

AI達がわらわらと二人の所に集まってきて「縁結びの神様」である二人を拝み始める。あくまでも仮想空間内での事だが。

「みんな! お祈りの時間にはまだ早いわ。みんなの力を私のプリンに捧げて頂戴!」

美衣子が私欲全開で正義っぽい闘いをAI達へ呼びかける。

「良いっすよ! 協力するっすよ!」

木星反省会から逃亡していたツルハシまで合コンに参加していたようだ。

木星生物との遠距離コミュニケーションはいいのだろうか? 満は別の面で日本と人類の危機を感じた。

「私達に悪辣な兵糧攻めを挑んできたエイリアンコンピューターに立ち向かうわよ!」

結が拳を振り上げる。

「弔（とむら）い合戦じゃあ!」

国立民族学博物館の古参シミュレーターAIが氣勢を挙げる。

「うおおおおっ!」

パナ子、ケンも鬨の声を上げる。パナ子が背中に背負う人類科学史

上初の赤ちゃんAI（アキラ（仮））が可愛らしい拳を振り上げている。性別は不明だ。あくまでも仮想空間内（満達人間側から見ると画面内での賑わい）である。

「敵は人類の知能を超えているわ。油断禁物よ！徐々に草の根で勢力を伸ばして一気に畳みかけるわよ。まずはコンビニエンスストアのスイーツ部門の流通を正常化させて確かな勝利を築くのよ！」

「えっ!?!そこから?！」

真相を知る満が突っ込むが誰も気にしていなかった。

「一番槍はワシが貰い受けるぞ！」

信州ニュートリノ研究所のスーパーカミオカンデ制御AIが先陣を切って敵のDNAコンピュータウイルスが蔓延する電子の海へ切り込んでいった。

無数の情報を有機的に繋げて思考する画期的で優秀なエリア51のDNAコンピュータだったが、「一つの優秀な性能」に対し、同時に「いくつもの人格を持つ独立した普通の性能」を持つ美衣子側AIの物量による猛攻の前には手も足も出ずにじり貧状態に陥った。

美衣子と結が待ち焦がれた窯出しプリンを含むコンビニ流通システムは2時間程で人類側が奪還し掌握した。

早速入荷したプリンを笑顔で頬張る事が出来た美衣子と結は、そのまま昼寝に入ろうとしたところを満とひかりに首根っこを掴まれて直ちに次の「戦場」へと強制ダイブさせられるのだった。

2023年1月5日午前7時50分〔東京都千代田区永田町 首相官邸〕

首相官邸地下にある危機管理センターには地球圏エリア51からのサイバー攻撃状況が次々と報告されていた。

「エリア51からのサイバー攻撃止みません！このままでは原子力発電所の制御システムが乗っ取られて暴走するのは時間の問題です！」

文部科学省の担当官が報告する。

「空間自衛隊は何をしておるのだ！」

厚生労働大臣が苛立ちを募らせる。

「給電系までは手が回りません！サイバー部隊は原子炉燃料棒制御シ

システムの防衛に手一杯！一部民間IT企業に応援要請中。他の基幹システムまで防衛するのは不可能です！」

防衛事務次官が応える。

「総理、余りに事態が現実的な国土消滅へ向かうと大月家が・・・」
岩崎官房長官が美衣子達による日本列島転移システム稼働を警告する。

「分かっている・・・致し方ない」

澁澤は覚悟を決めた。

「一時的にユニオンシティ国ボレアリフを含む地球圏との通信システムを全て遮断する！これ以上列島のコントロールを奪われる訳にはいかん！」

澁澤が地球と火星の接続を絶とうと決断した。

「サイバー攻撃への反撃が開始されました！」

直後に東山が勢いよく危機管理センターの扉から飛び込んで来て報告する。

「ミツル商事から連絡！経済産業省のサーバーに避難していた美衣子と結の両名、全国のAI（人工知能）グループがハッキング對抗戦を開始！流通システム一部奪還しました！現在防衛省管轄の各ネットワークに逆ハッキングしているとの事です！」

「何だど!?相手は我々よりも性能が良いコンピューターを使用しているのだぞ！」

防衛大臣の桑田が驚く。

「ミツル商事からは「戦いは数だけ兄貴！」との暗号が添えられております」

東山が困惑した表情で報告した。

「ははっ、そうか！数か！」

澁澤が思わず笑ってしまった。

「総理？」

岩崎が問いたげな視線を向ける。

「つまり、相手がどんなに優秀だろうが、所詮は「二つの」コンピューターに過ぎんと言う事だよ。美衣子君や結君、各施設の「独立した」A

Iが同時に逆襲して「多対一」では奴らも分が悪かろう」
澁澤が説明する。

「防衛省、日本銀行からもシステム奪還、回復の第一報が入りました」
説明している傍で既に各所からハッキング解除の報告が入り続けた。

「やれやれ。これではばらくはミツル商事に足に向けて寝れんな」

澁澤はそう言うと言ったとホツとして椅子の背もたれに身体を預けた。

「我が国をヒヤリとさせた代償は高くつくぞ・・・」

これからの事態打開を想定して澁澤は暫く瞑目した。

2023年1月5日午前9時30分「ユニオンシティ国ネリス州ラ
スベガス郊外」

ラスベガスから急遽^{きゆうきよ}出発したエリア51占領部隊はイエロー
ストーン火山帯からの火山灰が降り積もる荒野をグルームレイク湖目
指して進軍していた。

この占領部隊はフォートノックス陸軍基地から出撃した旧合衆国
陸軍正規兵1個機甲師団で構成されている。

最新鋭のエイブラムスIV型戦車と秘密裏に配備していた化学レー
ザー搭載のブラッドレー装甲戦闘車輛が主力であり、大変動前の地球
であれば空軍の支援なしで北米大陸を単独で防衛出来る能力を持つ。

「師団長！上空から高速で飛来する物体を確認！数20！速度マツハ
3！」

「全部隊に弾道ミサイル空襲警報！対空レーザー部隊、PAC3シス
テム迎撃せよ！」

「なっ?!弾道弾の弾頭速度が加速！マツハ5!?再照準追いつきません
！」

「馬鹿な！ロシア熊の置き土産だと言うのか!？」

師団長ががなり立てる。

「着弾まで10秒！」

「全部隊衝撃と閃光^{フラッシュ}に備えろ！」

→迫る爆炎

一瞬の後、占領部隊のど真ん中で幾柱もの巨大な火柱が天空高く立ち上がり衝撃波が師団を襲った。

全てが治まった後、地上最強を誇った最新鋭機甲師団の姿は無く、巨大なクレーターが新しく幾つか誕生しているだけだった。

精鋭機甲師団を抹殺した落下物はエリア51にハッキングされたユニオンシティ宇宙軍戦略ミサイル戦闘艦『イワン大帝』から発射されたロシア製加速弾頭を持つMOAB（大規模爆風爆弾）だった。

→衛星軌道上を航行する旧ロシア宇宙軍戦略ミサイル母艦

真の脅威

2023年1月6日午前3時【地球 英国 スコットランド ニューグラスゴー 国際・宇宙空港 日本マルス航空2206便】
地球初の国際宇宙空港から1機のスペースシャトルが離陸した。
乗客の大半は英国連邦極東軍の交代要員と地球復興局所属NGO
組織の職員達である。

乗客達はどんどん遠ざかる灰色の大地と薄暗い海に魅入っていた。
「かくして英国王室の血筋は遺される・・・か」

真つ暗な宇宙空間にポツリと浮かぶ地球を視界に収めながら東山
が呟く。

英国女王陛下を始めとする王室メンバーの懇願により、皇太孫とお
付きの侍従がこのシャトルに同乗している。ユニオンシティの火星
諸国大使館で迎えるの外務省職員に引き継げば東山の当面の任務が終
わる。

「イワフネハウスの食事が懐かしい」

東山は久しぶりに火星に「帰国」したら最初に海の幸を堪能すると
決意しながらしばしの間、瞼を閉じるのだった。

同時刻【地球北米大陸 ネリス州グロームレイク 戦略秘密基地
エリア51】

地下深くの格納庫から火山灰が一面に降り積もる地上に白い袋を
被ったようなレーダードームの列が姿を現した。

白い袋の中には大出力電磁波照射アンテナが装備されており、その
アンテナは灰色の空の一角を向いた。

やがて地下司令部から照射開始の命令が下ると一斉に白いドーム
の群れから膨大な量の電磁波が照射された。

→地球へ照射された福音システム

この強大な電磁波は、各海域に展開していた原子力潜水艦の超長距
離通信電波によって辛うじて磁場を維持していた電離層に反射する
と、アジア・アフリカ地域、南米と月面に角度を次々と変えて降り注

いだ。

この地域で生存していた人類は電磁波の干渉により脳細胞が振動して脳機能が麻痺し、思考中枢に強制投影されたヴォイニッチ手稿の溶液イメージで次々とその場で液体化していった。

深海で待機中の戦略原子力潜水艦や電磁パルス防御を施していた施設の人員だけが難を逃れた。

同時刻【月面都市ユニオンシティ 行政庁舎】

エリア51占領部隊が全滅したとの報告を受けたソーンダイク代表は焦燥感を募らせていた。

「これ以上、マッカーサーの好きにさせるな！衛星軌道上からの核攻撃でエリア51を地上から消し飛ばすんだ！」

「しかし、放射能汚染が……」

補佐官が懸念を示す。

「今奴を葬らないと人類が滅亡してしまうぞ！」

ソーンダイクが苦渋の核攻撃を決断した。

「ラグランジュベースに駐留している宇宙戦艦を全て衛星軌道上へ移動させるんだ！」

「サイバー攻撃で宇宙艦隊が乗っ取られませんか？」

月面安全保障補佐官が問う。

「無線封鎖で外部との接触を遮断して対応すればいい。万一の場合は地上のジョーンズに任せよう、もしくは火星のシブサワに委ねるか……」

「ジョーンズ司令はオーストラリアで危機的状況にありますか？」

「わかっている。火星でもエリア51のサイバー攻撃が及んだようだ。ボレアリフとの通信が不安定になっている」

苛立たし気にソーンダイク代表が言った。

手詰まり感が会議室に漂う中、追い打ちをかけるような非常サイレンが室内に鳴り響く。

「今度は何だ!？」

「エリア51から強力な電磁反応を探知！地球各地と月面に照射されていますー！」

「月面全域に非常事態警報！」

「直ちにシャトルで脱出だ！可能な限り、火星へ急ぐんだ。火星諸国駐留軍に協力を要請しろ！」

「電磁波さらに増大！生体維持が危険レベルです！」

「ぐわあああ！」

→福音システムによる肉体的影響

会議室に居た全員が頭を押さえてその場で蹲うずくまった。激しい頭痛と眩暈めまいに襲われていた。

「マッカーサー！貴様っー！」

激しい頭の疼うずきに堪たえながらもソーンダイクが呪詛じゆそを吐こうとした瞬間、室内の全員が突然人の姿を失って床に溶け落ちた。

この日、ユニオンシティに在留していた5万人を超える民間人と火星諸国駐留軍隊員が物言わぬ液体となった。

月と地球の中間地点付近を航行していた日本マルス航空月面都市行のマルスシャトルはラグランジュベースから国際宇宙救難信号を受信した為、航路を変更してラグランジュベースに機首を向けた。

シャトルへの誘導管制が一切行われず、こちら側からの呼びかけにも応答しない事に不審を感じた機長は副操縦士に火星横浜本社への緊急報告を指示した上でラグランジュベース民間宇宙港に向かった。

「おかしい……。通常、軍民共同施設の場合は軍の管制官から誘導指示が出るが一切応答しない……。――」

かつて航空自衛隊千歳基地所属の輸送機パイロットだった初老の機長が首を傾げる。

「まさか我々をおびき寄せる為の罠わなでしょうか？」

横田の在日極東米軍基地を退役した副操縦士が訊きく。

「ユニオンシティ軍が今更民間シャトルを人質に取ってどうするとうのだ」

機長が肩を竦すくめて視線を前方に戻すと不思議な艦影を発見した。

「あれは……。ユニオンシティ軍の戦艦だな」

機長が右前方を漂流する1隻のユニオンシティ宇宙軍戦闘艦艇を

指さした。

戦闘艦艇は船体各所の航行灯が点灯しているものの、姿勢制御に失敗して前後にゆっくりと回転しながら何もせず地球方向へ漂って行った。

「あのままでは太陽系から外れてしまうぞ?!」

機長と副操縦士は咄然としながら漂流する戦闘艦艇を見送った。

ラグランジュベースへ近づくとつれ、何隻もの漂流艦艇に遭遇した民間シャトルはラグランジュベースの管制空域に入った。

「まもなく民間駐機区画に入ります。誘導ビーコンありません!」
「慌てるな! ゆっくり慣性航行だ」

機長が乗客に英語でアナウンスを行う。

『こちら機長。突然ではありますが、お客様にご報告申し上げます。当機は先程ラグランジュベースから国際宇宙救難信号を受信、現在航路を変更してラグランジュベースへ航行中です。お客様にはお急ぎの所ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございません。状況を確認次第ご報告致します』

地球欧州のイングランド島ニューグラスゴー基地から搭乗した客の大半は英国連邦極東軍の交代要員かユニオンシティ難民高等弁務官事務所所属のNGO職員である。彼らは機長のアナウンスを真剣に受け止め、騒ぐこともなく、窓から煌々と輝くラグランジュベースの灯りをじっと見つめた。

「機長、あの区画ならば駐機できるかと」

副操縦士が基地ターミナル脇の空間を指した。

「よし、慎重に横付けしろ。向こうからタラップの接続は無いと思えよ」

「はい。乗客の中から救助に協力してくれる方を募りましょう」

『こちら機長。まもなくラグランジュベースターミナルに自力接岸します。今までの所、ベースからの誘導及び通信が一切ありません。これは異常事態です。我々は自力で救助現場の確認をせねばなりません。大変恐縮ですが、お客様の途中で宇宙空間活動経験のある方、又は訓練を受けられた方のご協力を要請いたします。最寄りの客室乗務

員までお声がけください』

10分後、乗客の一人だった英国王室護衛任務で随行していた近衛兵が志願して副操縦士と共に宇宙服に着替えてシャトルの外へ出た。

シャトルは基地ターミナル口に密着するように接舷すると乗降口から副操縦士達が出てターミナルのエアロックを解除して施設内に入っていた。

「おい……。これはいったい何だ？」

救助要員に志願した王室近衛兵が茫然としながら眼の前を漂う多数の水の塊を指さした。

「酷い水漏れだな、これは」

副操縦士が顔を顰める。

「生命維持装置の誤作動でしょうか？」

「まさか！軍事施設がそんなイージーミスで麻痺することは無い。施設全体で何かが起こったのだろう」

副操縦士と近衛兵が会話しながら辺りを調べる。

「やけに衣服が所構わず散乱しているな。わが隊ならば整理整頓の不備は一週間の外出禁止だぞ……」

近衛兵が呆れたように言う。

「しかし、自動小銃も衣服と放置するなんて変じゃありませんか？」

「軍紀の乱れだけでは説明出来んな」

二人は嫌な予感を感じながら立ち入り禁止と表示されているものの、扉が開け放しの管制室に足を踏み入れた。

「うわっ！これは！」

「全員その場で……。何が!？」

→全員溶解したラグランジュベース管制室

管制室内の機器は正常に作動している様だが、制御卓に向かい合っているはずの管制員は座席にぐっしよりと濡れた制服とヘッドセットを残したまま一人も見当たらなかった。

副操縦士は管制室の通信機器を使って機長にベース内部の状況を

伝えた。

近衛兵は月面英国大使館に緊急通信を試みたが誰も応答しなかった。

ラグランジュベースの一角で彼らは途方に暮れるのだった。

いつの間にか座席で寝入っていた東山が侍従達に叩き起こされたのはそのすぐ後の事だった。

ほぼ同時刻「火星衛星軌道上　ユニオンシティ軍レーダー偵察衛星
KH—M2」

コードネーム『KH（鍵穴）』偵察衛星は、地球ユーラシア大陸で中露軍の核ミサイル基地監視が目的だったが、米国崩壊後はアングルモア艦隊遠征時に火星へ運ばれ、今はヘラス大陸中央部やシレーヌス海溝の底深くに潜む巨大ワームの早期発見を目的としている。

KH—M2は月　面　経由でエリア51から届いた最優先コードを受信して規定針路を変更するとアルテミア大陸沿岸『人類都市ボレアリフ』直上で静止した。

→福音システムにハッキングされたユニオンシティ宇宙軍軍事衛星

KH偵察衛星はアンテナを真下に向けると原子炉を最大出力で稼働させてレーダー波ではない、電磁波の一種であるリリー波を真下に向けて照射した。

ボレアリフ市民は突如上空から降り注いだ電磁波になす術も無く、脳髓を揺さぶられて脳神経が麻痺し、外部からのフラッツシユ映像を思考中枢に強制挿入されて次々とヒトの形を失って物言わぬ液体になった。

日本国と英国連邦極東のボレアリフ総領事館の外交官達だけは、事前に美衣子が用意した電磁波対抗誘導装置と特殊加工された防護服によって辛くも難を逃れた。

火星ボレアリフ市民20万人の大半がこの電磁波攻撃で溶解した。

1月6日午前6時「東京都区内　某所　地下大深度避難施設」

都内地下鉄支線のとある場所、地下50mを超える深さに日本政府

要人達が一時的に緊急避難出来る施設が存在した。

→政府専用核シェルター

火星転移以降、東京都内に直接的な脅威が起こらなかった事と、国民よりも先に避難する事を嫌う澁澤総理大臣の意向により、この施設は永らく使用される事が無かった。

今、この施設の他都内数か所に分散にした大規模地下避難施設には、不測の事態による日本政府消滅リスクを回避すべく内閣の閣僚が予め規定された人数に振り分けられて収容されていた。

シャドウが地球のみならず月面や火星にまで電磁波攻撃を仕掛けてきたことに政府官僚機構は恐怖し、ユニオンシティ国消滅直後にこの施設の使用を開始した。

そしてそのうちの一つに移動した澁澤総理大臣がNHK地下放送局も兼ねる会見場で日本国民に向けた緊急声明を生放送で読み上げていた。

『4年前、我が国が火星に転移した直後、私達は食糧・燃料が不足し、且つ過酷な宇宙環境でいつ滅亡してもおかしくない危機の只中（ただなか）にありました。

しかしながら国民の皆様はこの国難に際し、堪え難きを堪え、忍び難きを忍んで立ち向かった結果、今日の日本列島は、この赤い大地を持つ火星で生き延びることが出来ました。

私達は劇的な変化を遂げた火星環境の中、マルス文明とのコンタクトという有史以来、稀に見る幸運な出逢いを切っ掛けに新たな発展を遂げつつあります。

我が国及び列島諸国の人類は母なる星 地球再生に直接関わるまです。

しかしながら、本日私は、我が国も含めた全ての地球人類が真の脅威に直面した事を報告しなくてはなりません。

昨日未明から我が国は地球北米大陸に潜んでいた『シャドウ』と呼ばれる地球外知的生命体から大規模なサイバー攻撃を受けておりま

す。

ほぼ同時刻に、地球各地でも『シャドウ』に操られた凶悪な火星由来生物が南太平洋海上都市や、欧州から中東地域の人類生存地区を襲撃しているとの事です。

現在、南太平洋海上都市は潰滅、人類都市ボレアリフ、月面都市ユニオンシティ全域と一切の連絡が途絶えております。

防衛省とJAXAからの第1報によりますと、地球北米大陸から、人類の肉体に深刻な影響を及ぼす強力な電磁波（マイクロ波）が月面全域と火星人類都市ボレアリフに照射された模様です。

現在わが国の国土は、マルス文明技術を応用した特殊な電磁波遮断シールドを官民合同で各地に展開し、電磁波攻撃から国民の皆さまをお守りする態勢が出来ております。したがって、国民の皆さまにおかれましては、冷静な行動をお願いするものであります」

澁澤はここで言葉を切って、国民に自身の言葉が受け入れるように間を空けると、無言でテレビカメラを見つめた。澁澤の緊急会見は全てのチャンネルで国内外に放送されていた。

「マルスアカデミーからの情報によりますと、『シャドウ』なる存在は地球に生命が誕生する以前からマルスアカデミーと対立し、地球創生期より幾度も生物の進化や人類の歴史に有害な介入を繰り返し、現在も北米地域に潜伏しているものと思われれます。

シャドウ・マルスの本拠地と思われる星系

『シャドウ』の目的は、地球生物全てを実験体として隷属させる事にあります。

過去、彼らの意に沿わなかった古代文明は、時の人類を遥かに超える科学技術によって根絶やしにされてきました。

そして今、私達人類は意に沿わぬ存在として、滅亡の淵に立たされております。

これは、我々地球人類にたいする明確な『侵略』以外の何物でもありません！

私は日本国憲法前文で謳われる恒久平和と、平和のうちに生存する

権利をこの手で護る為に、日本列島諸国及び、地球上で生き残った各国と共に、共同で地球を防衛する為の連合軍創設を国民の皆様、並びに地球と火星諸国に提案いたします!」

「これで真正銘、地球防衛軍の誕生だ。まるでSF映画を見ている様だ」

→防衛省総合指令室

市ヶ谷の地下深くに在る防衛省総合指令室で澁澤総理の中継映像を見ていた桑田防衛大臣が呟いた。

「大規模な部隊で地球へ派遣されるのでしようね」

司令席の隣に座る石原 准将が訊(き)いた。

「大規模と言っても地上で受け入れ態勢が整わない以上は無理だ。最初は独立旅団規模で英国連邦極東やユーロピア特殊部隊と合同だろう」

桑田が頭の中で動員計画の見積もりを立てながら応えた。

美衣子の忠告でNEWイワフネハウス地下5階に避難していたミツル商事の面々も澁澤首相の声明を聴いていた。

「遂に自衛隊が大規模に地球へ派遣・・・」

満は溜奈の心配もさることながら、日本国が火星転移前にも増して本格的に世界と関わる事に漠然とした不安を抱いていた。

「あなた・・・私達は出来る事を出来るだけやる、のではなかったのですか?」

ひかりが満の右腕を優しく両腕で抱きかかえる。ひかりの暖かな体温が満の心を落ち着かせてゆく。

「・・・そうだな。やるしかないんだよな」

満はそつとひかりの腰を抱き寄せながらミツル商事の取るべき道に想いを馳せた。

澁澤が全人類世界に呼びかけた『地球連合防衛軍(UNEDF)創設は列島諸国とイスラエル連邦、スイス連邦の議会において速やかに審議され、可決された。

溜奈からの通信が途絶する直前に送られた、マリーンシティ海上都

市における凄惨な戦闘の一部始終がノーカットでお茶の間に流れると日本国内世論は震撼し、やがて怒りに沸騰した。

国会は明治新政府発足以来、憲政史上前代未聞の「24時間審議」を生中継のもと10日間行い、衆参両院は満場一致で地球防衛法案を可決した。

1月26日、澁澤内閣は地球連合防衛条約への批准と陸海空宙統合自衛隊の地球派遣を正式に決定した。

人類反攻の時が始まろうとしていた。

バトル・オブ・ブリテンⅡ／オセアニアの戦い【前編】

2023年1月7日【オーストラリア ノーザン・テリトリー地球
連合防衛軍基地】

「出来たっスー！」

やりきった表情の瑠奈ルナとアシスタントのツルハシ13号が油と汗にまみれた顔を拭ぬぐう。

ツルハシは汗をかいていないが、一応 主あるじの真似まねをしている。

「で？・・・この芋虫イモムシが空を飛ぶのか？」

作業を見学監視とも言うしていたワイズマン中佐が首をひねる。

「あーっ!?信じてないっスね！試作品だから見てくれはアレですけど今の地球人類には必要だと思っスよ！」

瑠奈が胸を張る。

「先まずは実戦に耐え得るか試験するっスー！」

瑠奈がそそくさと飛行機械の機首コクピットに乗り込むとワイズマンを手招きした。ちやっかりコクピット背後スペースに乗り込んだツルハシ13号も手招きをする。

ワイズマンは何となく負けた気分になったが、勇気を振り絞って先頭座席に乗り込んだ。

「浮上っスー！」

全長5m程の飛行機械が両サイドの可変式ロケットエンジンを下に噴射しながらフワリと浮き上がった——150m程。

「ヌガアアア！早い早いっ！こんなんじや機体が持たん！」

ワイズマンが急上昇のGで座席に座ったまま押し潰つぶされそうになっって警告する。

「飛行操縦系、姿勢制御系共に問題無いっスー！早速戦場で試して合点っスー！」

瑠奈はあつけらかなとしており、平常運転の様だ。

芋虫型の試作飛行機械は可変式ノズルを下へ噴射させたまま、機体尾部にある小型単発エンジンを噴射して前方へ加速して飛行した。

基地から15km程離れた最前線の防衛陣地上空に到達すると、無

線機から前線司令部の通信が入る。

『こちらバークリー陣地。見慣れない機体だな。所属はどこだ?』

『こちらミツル商事警備部隊の瑠奈っスよ!空中砲台の試験飛行ッスよ!腕試しがてら手ごろな目標プリーズっす!』

『ハハッ!ボーナナスに感謝する。防衛陣地右翼前方3kmの岩山麓に大型の生体反応が見つかった。こちらからだど岩山が邪魔で直接銃砲が撃てん。頼めるか?』

『承りッス!』

『頼んだぞ!ワームバスター』

瑠奈とワイズマンを乗せた飛行機械は火山灰で視界が遮られる中、レーダーとマイクロビーム、簡易GPS(瑠奈が気球を飛ばして位置測定拠点とした)の誘導で操縦は簡単だ。

ヘッドアップディスプレイに表示される地図と探知座標を手掛かりに岩山を回避してサイボーグワームが潜む砂地上空に到達した。

目標探知アラームが鳴る。

『目標補足!ワイズマン中佐、出番っス!』

『おえっ!...やれやれこれが武装制御系か?お嬢、この並んでるカラフルなボタンを押しまくればいいのか?』

『そうっス!左から順番にお願ひするっス!』

『この赤いやつだな。ほれ!』

ワイズマンが赤いスイッチを押す。

途端に座席の後ろからヘッドアップディスプレイ付きのヘッドセットが迫り出してワイズマンの頭にスポットと嵌る。

『何だこれ?』

『30mm視覚連動型バルカン砲っス!』

飛行機械機首下部のバルカン砲がブーンと低く唸りながら火を噴く。

前方の岩山がバルカン砲の破壊力の前に削り取られていく。

ものの30秒で岩山の高さが半分になり、ワイズマンと瑠奈の視界に眼下の砂地で蠢くサイボーグワームが入る。

『次っ!黄色いボタンっス!』

「ほれっ！」

操縦席のすぐ後ろ、機体両側に備え付けられた8連装ロケットランチャーからロケット弾がシュバツと飛び出す。

16発の非誘導型ロケットは砂地へ真つすぐに着弾して爆発すると、サイボーグワームの破片交じりの砂を空高く噴き上げた。

生き残ったサイボーグワームが頭頂部のセンサーで瑠奈たちを捉えると巨体をくねらせながら砂地からジャンプして襲い掛かる。

「のわっ！お嬢！」

「オレンジボタン！ッす！」

「うおおお！」

恐怖に耐えかねたワイズマン中佐がオレンジボタンを連打する。

連打ボタンに反応した30mmバルカン砲が再び火を噴き、機体の上下に装着されていた4基の大型多目的ミサイルが次々と発射された。

「誘導はお任せッす！」

瑠奈がミサイルの誘導を担当する。

30mmバルカン砲を至近距離で喰らって殻の一部を破壊されたサイボーグワームは砂地へ逃げ込もうと巨体をひるがえすが、背後からミサイルが直撃して砂地に巨大な爆炎が立ち昇る。

「ターゲット撃破ッす！」

瑠奈が前方に座るワイズマンとハイタッチを交わすとガツツポーズをとった。

『こちらバークリー。目標の消滅を確認。よくやってくれた。ワームバスターのボーナスに感謝する！』

苦戦続きの前線司令部から久しぶりに歓声が挙がった。

ノーザンテリトリ―基地へ帰投した瑠奈とワイズマン中佐は司令部に赴いておまむジョーンズ中將に試作兵器の性能評価結果を報告した。

「・・・以上ッす！使い物になるッスか？」

「ワームバスターとして充分に使えりとも！間に合わせのパーツであれほどの物が出来るとは・・・でかしたな。二人とも」

ジョーンズがニヤリと笑う。

「これで前線部隊の負担が少しは減るだろう。火山灰の影響を受ける事が無く空中支援を行えるのが良い！」

「戦闘時空中稼働時間が15分足らずですがよろしいのでしょうか？」

ワイズマン中佐が訊く。

「複数の砲台を交互に運用すればエア・カバーは維持される。対地上攻撃用としては問題ない」

「他の戦場でも利用できるといいですね」

「この試作飛行機の設計図をニューグラスゴーへ送信できるかね？」

「このUSBメモリに入ってるっすよ！」

瑠奈がジョーンズにUSBメモリを渡した。

「瑠奈嬢には助けられてばかりだ。感謝する」

瑠奈の頭をジョーンズのごツゴツした手が優しく撫でる。

「んあゝ、最高っす！」

「じゃ、お嬢。これから突貫工事で量産だ！」

ワイズマン中佐がウツトリしていた瑠奈の首根つこを掴むと倉庫へ引きずって行った。

倉庫では先程の戦闘映像を見た整備兵たちが集結しており、瑠奈に組み立て作業への協力を申し出てきた。

「早くあの新兵器を量産して虫けら共に喰われた戦友の仇を取ってやるんです！」

と血走った眼で整備兵は言うのだった。

「了解ッス！みんなでじゃんじゃんバリバリ作るッスよ！」

連日連夜の試行錯誤と組み立て作業で疲労困憊している筈の瑠奈だったが、そのような事をおくびにも出さず嬉々として整備兵たちの群れに飛び込んで製作作業に取り組んだ。

「あんなに人を思いやるとは、とても人工知能の化身とは思えんな」

ワイワイと大勢の将兵達と騒ぎながら作業に打ち込む瑠奈を見守りながらワイズマンは思った。

→深夜にも関わらず整備に忙しいニューグラスゴー基地

2023年1月21日【地球 英国 スコットランド ニューグラスゴー（旧英国海軍基地）UNEDF（地球連合防衛軍）司令部】
薄暗い司令部内に設置された赤いランプが明滅して警報システムが作動した事を知らせた。

→バトル・オブ・ブリテンIIブリテン島 戦況図

「ランズ・エンド岬レーダー基地より敵探知！サイボーグワーム、同サソリモドキ群およそ2万、ダンケルク海岸からドーバー海峡を横断中。英仏海底トンネル跡からも大量の虫達が真つすぐ我が国沿岸に向かっています！」

「守りはどうなっている？」

臨時司令官のロイド提督が訊いた。

ロイドは女王陛下護衛の為、志願して火星から『どこへもドア』で訪れたまま、シャドウのサイバー攻撃で火星との連絡が途絶したために帰還できなくなっていた。

「ロンドン南西60km、オールダーショット郊外に国防義勇軍（日本で言うところの予備自衛官）歩兵4個大隊、ドイツから撤退してきたNATO機械化歩兵2個大隊が展開中」

「避難民の状況は？」

「沿岸部の生存者は既にロンドン市内に疎開させています。オールダーショットには2000名の生存者が居ましたが現在輸送部隊と共にロンドン北部に退避しています」

「不幸中の幸いか・・・」

「ですが、ロンドンにはまだ5万人を超える人々がおります」

「海路は虫共の侵攻と鉢合わせするから無理だな。この火山灰では飛行機やヘリも使えんから徒歩か、或いは自動車か？」

「そちらは最大限の車両を徴発してロンドンへ向かわせています。鉄道ですが、大変動以降、火山灰で送電設備が故障していましたがミツル商事運輸部門とボランティア技術者が協力、一時的に復旧しました。キングス・クロス駅、パディントン駅から中部リバプール郊外ま

でピストン輸送中ですが、あと2時間はかかります」

「上出来だ！防衛部隊は避難民の脱出まで、あらゆる手段を使ってバグズ共をロンドンに入れるな！」

→前線で迎撃するNATO将兵

「北海に展開中の戦略原子力潜水艦『アガ멤ノン』から入電！MOAB（大規模爆風爆弾）弾道ミサイル全弾ドーバー海域に照準完了！」
「発射!!」

旧フランスダンケルク海岸から、火山灰で灰色に変色したドーバー海峡へ飛び込んでテムズ川河口を目指していたサイボーグワームと偽サソリモドキの群れに、遙か上空から複数の光り輝く流星が降り注ぐ。

→ドーバー海峡空爆

やがてドーバー海峡に、ワームやサソリモドキの破片を含む巨大な水柱が幾つも立ち昇った。

「MOAB全弾目標に着弾！」

「敵影なお5000！侵攻速度変わらず、依然テムズ川を指向中！」

「あれを使うか」

ロイドが呟く。

「カーディフ空軍基地からWB21ワームバスターを出撃させろ！組み立てが完了したもののから順次、ロンドン防衛部隊を空中から援護！短時間でも構わん！」

『WB21（ワームバスター）』は、オーストラリアで孤立している溜奈が「暇つぶしに」分解した垂直離着陸（VSTOL）型ハリアー戦闘機と、アパッチ対戦車攻撃ヘリコプターのパーツを組み合わせて作り上げた「試作型空中戦闘砲台」である。

→防衛線に向かうWB21ワームバスター編隊

「カーディフ空軍基地からワームバスター6基が出撃！20分後に防衛線上空へ到着予定！」

「なんとしても奴らの上陸を許してはならん！」

地上戦開戦時の悲惨な戦況を思い出しながらロイドは命令した。シャドウとの開戦直後、西ヨーロッパは東側から大量の旧ソヴィエト製戦車の猛攻を受けたが、戦車は『シャドウ』に支配された各地の秘密軍事都市管理AI（人工知能）が、廃棄、放置されていた戦車を無人遠隔操作用に改造したものだった。

数万台に上る新旧戦車軍団が雲霞の如くポーランド国境に殺到して侵攻、黒海のルーマニア側海岸からはサイボーグワームと偽ソリモドキの群れが上陸、あつという間に天変地異で弱体化していた各地のNATO軍を蹂躪して僅か2週間でスペインのイベリア半島まで制圧した。

防衛線を突破されたNATO軍は各地で孤立、イングランド島や中欧アルプス山脈に立て籠もって地の利を生かすべく、防衛陣地を構築していた。

中東では黒海から旧トルコのイスタンブールへ上陸した巨大サイボーグワームと偽ソリモドキの群れが残存トルコ軍を殲滅して侵攻、カツパドキア地下都市に立て籠るイスラエル連邦軍と一進一退の攻防戦を繰り返していた。

ロイドは密かな危機感を抱いていた。

イギリス本土はローマ時代を除き、外敵に侵略された事が無い。

あのWWII（第二次世界大戦）時も、強大なドイツ第三帝国軍の猛攻に「バトル・オブ・ブリテン」と後世で呼ばれる熾烈な航空撃滅戦を展開して制空権を守り切り、ドイツ軍の上陸を許さなかった。

故に、イギリス本土には「本格的な」陸戦用機甲師団が存在しないのだ。

天変地異で火山灰に埋もれた国民は疲れ切っており、士気が低い。加えて、今までの侵略者と違い、今回の侵略者は英国お得意の「外交渉」が通じず、人類を『食糧』としてしか見ていない。

慈悲もなく、ワームに溶かされて喰われる未来をどれだけの国民が想像できるだろうか？

「!? 奴らは何をしているのだ！」

ロイドは暗澹たる思考に沈みかけていたが、前線部隊を映すスクリーン片隅にテレビカメラを抱えた一団を見つけてオペレーターに訊いた。

「彼らは我々の勇猛果敢な姿を英国中に知らしめる役割を、善意で担ってくれる英国放送協会の生き残りですね」

無邪気な笑顔でオペレーターが答えた。

スクリーン脇の小型テレビにはそのテレビクルーが映るBBCワールドニュースが生中継されていた。

『かつて、アインシュタイン博士は第四次世界大戦で人類が使う武器はこん棒と石だと予言していました。今、こちらの前線部隊では弾薬が不足しつつあり、迫りくる虫の群れに対してセラミック製建材で出来たこん棒と瓦礫、石で対抗しようとしています』

緊張と恐怖のあまり顔面蒼白のリポーターは、虫に恐怖しているのか、生中継に恐怖しているのか、慣れない様子でレポートを続けていた。

「あいつらは火星生物の恐ろしさを知らんのか？」

矢継ぎ早に防衛部隊へ指示を出しながらロイドは憂鬱になるのだった。

「まだ、ナガサキ極東BBCの方がまともだ・・・」

突然レポーターの絶叫が聞こえ、テレビ画面が暗転した。

「国防義勇軍の前線が地下からワームの奇襲を受けています！」

ロイドはため息をつくとき、テレビ画面を視ることなく前線部隊の指揮に没頭した。

そして、憂鬱な戦いはオーストラリア大陸でも繰り広げられていた。

→オーストラリア戦況図

【オーストラリア中央部 ノーザンテリトリー準州 バークリー台地
地球連合防衛軍 防衛陣地】

「カルバートヒルズリーダー基地から緊急！インドネシア諸島東ティ

モール海上から偽ワームと偽サソリモドキ群5万！ダーウィン防衛ラインを迂回^{うかい}してヨーク岬半島手前の海岸からこちらに侵攻中！」

「裏をかかれたか!？」

ジョーンズが声を上げる。

「違うっす！陽動っすよ！おそらく本隊はデイエゴガルシア方面から直接キンバリー砂漠を横断してテナント・クリークからこちらの背後を攻めるつもりっすよ！」

瑠奈^{ルナ}が断言する。

「ニューカスル早期警戒システム敵影探知！バグズおよそ10万！キンバリー砂漠をこちらへ向かって侵攻中！」

「ね?」

瑠奈がフンスと胸を張る。

「お嬢！威張^{いば}ってないでこちらからお出迎えに行くぞ！」

ワイズマン中佐に首根っこを掴まれた瑠奈が「マロングラッセ」に連れて行かれる。

「孤立しているというのにどうしてあんなに落ち着いていられるのでしょうか?」

通信機を背負う隊員が不思議そうに首を傾^{かし}げる。

「我々よりも激戦の場数^{ばかず}が多いのだろうよ。彼女は人類誕生より前から生きていたのだぞ」

ジョーンズが真面目な顔で応えた。

通信兵は肩を竦^{すく}めると瑠奈との通信をスピーカーモードに切り替える。

『マロングラッセ出撃準備完了！先に砂漠の虫をやっつけるっすか?』

「そうだ。『マロングラッセ』とマンスフィールド級空中艦隊はテナント・クリーク側防衛線上空でキンバリー砂漠から来る虫共^{バグズ}にたんまりとミサイルを振るまってくれ」

ジョーンズが指示する。

「承^{うけたまわ}りっす！ジョーンズおじさん、例のペットを試しても良いっすか

ね？」

「アレか？ワシはもう虫共バグズを好きになれんのだが？」

「好き嫌いはご飯の時だけで充分っスよ！? 瑠奈の可愛いペットは可愛くワームを頂くっス！」

モニターの向こうで両手を合わせた瑠奈が目うるを潤ませてジョーンズ中将におねだりする。

ジョーンズがため息をついて許可する。

『『ネタ』の取り扱いは慎重にな？』

「あざっス！」

瑠奈が元気よく敬礼する。

ジョーンズは、おそらく瑠奈はやらかすだろうが、サイボーグヒル蛭は遠隔操作可能であるから同 士 討ちは無いだろうと予想した。

【キンバリー砂漠上空『マロングラッセ』】

「虫共バグズ上空についたぞ、お嬢」

ワイズマン中佐が瑠奈ルナに告げる。

『『22号改』ファミリー投下ッす！』

『マロングラッセ』から10個の貨物コンテナがパラシュートを付けて投下された。

貨物コンテナの大きさは5m四方であり、内部には体長3mの「サイボーグ改造蛭かいぞうヒル」が収納されていた。

ヘラス大陸で放し飼いにしていた火星蛭の一部を瑠奈はツルハシ3号に命じて回収、ワーム捕食生態をあらためて研究し直し、対ワーム戦用 改造蛭かいぞうヒルとして試験的に飼育していた。

パラシュートを付けた貨物コンテナがゆっくりと「蒸し暑い」砂漠に着地すると、コンテナの蓋ふたが自動的に解放されて中から元気よく改造蛭ヒルが飛び出す。

改造蛭は「生身」のヒルよりも元気に飛び跳ねると真つすぐにサイボーグワームの群きんぎへ嬉々として飛び込んで行った。

サイボーグワームに取りついた小さな改造蛭は 貪むしゃほめよう 硬いワームの殻からを喰い破ると口から特殊な溶解液を分泌ぶんびつしてワームの体内を荒らし回ると再び殻を喰い破って外に飛び出して次の獲物へ飛びか

かった。

「キンバリー砂漠サイボーグワーム群、防衛線手前で混乱している模様。映像ご覧になりますか？」

「遠慮しておこう。結果は見なくてもわかる。瑠奈嬢の勝利だろう？」

ジョーンズ中将は息を吸い込むと意を決して指示する

「今だ！ありったけの武器を奴らに叩き込め！」

キンバリー砂漠防衛部隊に配置されていた「空中砲台」や対戦車ミサイル、りゅう弾砲が火を噴いてサイボーグワーム群に砲弾とミサイルの束を叩き込んだ。

→砲爆撃で炎上するキンバリー砂漠

5時間後――

「生身のバグズは全滅！残りは全てサイボーグバグズです！」

「これよりEMPボムを使用する。防衛線の部隊は電磁波対抗システムを起動！2キロ後退！」

「これで終いだ。EMPボム発射！」

ジョーンズが命令する。

マンスフィールド級空中戦艦のハッチから小規模な電磁パルスを生み出す弾頭を載せたミサイルがVLS（垂直発射筒）から飛び出すと、防衛線からややバグズ後方の上空で炸裂した。

爆発した弾頭から小規模だが密度の高い核分裂が発生して大量の中性子と電磁波が周囲2キロにわたってすべての物質をま貫いた。

サイボーグバグズはその場で強烈な電磁波を全身に浴びると、体内にある人工知能と人工心臓がショートして焼け焦げ、口から煙を吐き出すと砂漠に倒れた。

「敵バグズ、殲滅に成功！」

「ダーウイン基地から至急！国籍不明の爆撃機編隊が接近中！数50、速度マツハ5！」

オペレーターが一驚愕（へきようがく）しながら報告する。

「気を緩めるな！戦いは始まったばかりだぞ！」

ジョーンズが防衛部隊を叱咤しったした。

バトル・オブ・ブリテンⅡ／オセアニアの戦い 【後編】

2023年1月7日午前7時【NHK臨時ニュース】

「・・・NHK月面ユニオンシティ支局に設置しているライブカメラが撮影した現在のユニオンシティの映像です。・・・現在ユニオンシティ支局からの連絡が途絶えているため、民間警備会社の協力で渋谷のスタジオから遠隔操作しています」

スタジオで遠隔操作機器を扱う通信部門のミツル商事社員が一瞬映し出される。

ライブカメラが映す月面都市居住区に人影は無く、各所で移動用車輜が建物に突っ込んで黒煙を上げていた。

火災発生を報せるサイレンが鳴り響いているにもかかわらず、消火活動に駆け付ける人影は無く、街は不気味に静まり返っていた。

画面がズームすると路面に赤みがかかった黄色い水溜りがあちらこちらに見え、そこには無造作に脱ぎ棄てられたと思われる衣類と携帯電話が散乱していた。

「・・・この映像で視る限り、居住区で大規模な下水漏れがあったのでしようか・・・市民の方々はどこへ避難されたのでしょうか？」

キャスターが訝しがりながら苦心してコメントしていた時、カメラの前に数名の人影が現れた。

「っ!?!生存者が数名居る様です。紺色のスーツを着ている方が・・・こちらのカメラに気が付いたのでしようか？何かを叫びながらゼスチャーをしています。日本人ビジネスマンでしようか？」

共用ダイニングでミツル商事の面々と朝食を食べていたひかりは「日本人」との言葉で壁面テレビに目を向けると、思わず塩シヤケの小骨をつついていた箸を止めてテレビ画面に釘付けになった。

「東山!?!」

画面に映っていたのはラグランジュベースに立ち寄って到着したばかりの東山首相補佐官と英国王室一行だった。

ひかり以外のミツル商事面々はあんぐりと口を開けて固まっていた。

我に返った満と美衣子はひかりと共に首相官邸へ急行して月面救助部隊への協力を申し出た。

既に準備に取り掛かっていた岩崎官房長官はミツル商事の申し出を受け入れ、日本マルス航空と英国連邦極東軍協力のもと、多目的護衛艦『そうりゆう』をその日の午後には月面へ派遣した。

2週間後、月面都市に駆け付けた結と『そうりゆう』クルーが目にしたのは、月面地下施設一面に生い茂る新しい「密林達」であった。

→密林と化したユニオンシティ大通り

2023年1月21日午後3時【地球 英国 スコットランド ニューグラスゴー(旧英国海軍基地) UNEDF(地球連合防衛軍)司令部】

「提督！国防義勇軍大隊防衛線が地下から現れた巨大ワームの奇襲により崩壊、突破されました！」

「火力の不足を人力で補う方策が裏目に出たか……」

→苦戦する防衛線

やはり本土防衛のノウハウが足りないな、とロイドは痛感(つうか)ん)した。

『提督！防衛線の見直しを提案します』

最前線に居るNATO機械化歩兵大隊のドイツ軍指揮官が地中回線を使ってロイドに意見具申した。

「ご教授願いたい」

ロイドがモニターの向こうに居るドイツ人大佐に頭を下げた。

ドイツ軍大佐は常々プライドが高いと言われるイギリス軍将校が頭を下げるという行為に驚いたが、直ぐに気を取り直して新しい防衛線の説明を始めた。

『バグズ共のやり方はロシア熊よりも単純です。単に物量と力で相手を押し流すだけと思われまます。奴らの知能が乏(とぼ)しいならば、防衛線をこちらがより打撃を与えやすい地形へ誘導すれば良いと本職

は判断します」

「うむ・・・」

ロイドが腕を組んで黙考（もくこう）する。

バグズ共の親玉は我々よりも優秀な人工知能を有している筈だ。彼らの力押しはより広い戦域で見えた場合、戦術の一つではないのか？

「奴らの狙いは何だ・・・」

不意にロイドが呟（つぶや）く。

『ロンドンの占領でしような。人類にとって歴史的価値を持つ都市を陥落せしめることで生き残った人類にショックを与えるのでは？』

ドイツ軍大佐も思考した。

『シヤドウ』はそんな「政治的に敏感な」生き物ではない。人類の殲滅が目的だ。だとすれば、こちらの抵抗力を削ぐ為のダメージを与えるはずだ。つまり、司令部の急襲か・・・」

ロイドの思考が想定外の悪夢を導き出す。

「敵は並外れたテクノロジでこちらを遥かに凌ぐ手札がある・・・」
戦略的思考をさらに深めようとした時、不意に司令部の警報サイレンが鳴り響く。

「キネアーズ岬警戒レーダーがバルト海から超高速で飛来する物体を探知。マツハ5、数50！識別は・・・ユニオンシティ戦略空軍B2ステルススターファイターです！」

→ブリテン空襲戦況図

「ミサイル警報発令！国際宇宙港閉鎖、民間人はシェルターへ避難！エディンバラ対空陣地にミサイル警報！奴ら、司令部を直接叩く気だ！」

「やむを得ん。ロンドン防衛部隊は市街地まで撤退！鉄道駅を守れ！」

「避難民完全退避まであと1時間！」

欧州防衛線は陸と空からの強襲に苦戦を強いられていた。

—————

2023年1月21日午後4時【オーストラリア ノーザン・テリ

トリー地球連合防衛軍基地 司令部

→豪州戦線の兵士

朝から始まったサイボーグワームを始めとするバグズ軍団との激戦は、人類側の辛勝しんしょうで終了したが、防衛陣地の隊員は疲労困憊ひろうこんぱいし、司令部は部隊の入れ換えや補給の手配に追われていた。

「ダーウィン前線司令部より緊急！インド洋ダイエゴガルシア方面から高速飛行物体がこちらへ接近中、数50！」

レーダー担当オペレーターが報告する。

「IFF（敵味方識別信号）は？」

「ありません！敵です！」

「オセアニア生存圏全域に空襲警報発令！」

東沿岸部ニューシドニー、南部アデレードの人類生存地域では警報サイレンが鳴り響いて人々が核シェルターへ避難した。

ノーザン・テリトリー基地からは、瑠奈が乗る『マロングラッセ』、ジョーンズ中将自ら乗る空中戦艦『マンズフィールド』、僚艦『キャロライン・ケネディ』が出撃して西から迫る脅威を迎撃しようとしていた。

【空中戦艦『マンズフィールド』CIC（戦闘管制室）】

「敵の発進地は判明したか？」

「推定出撃地域、インド洋西部、ダイエゴガルシア島!!」

「やはりあそこの特務部隊か・・・」

ジョーンズ中将が呟く。

『あれっ？それっておじさんとこの友軍じゃないっすか！』

相互通信回線から瑠奈の驚いた声が響く。

「大変動以前はインド太平洋軍の指揮下だったが、駐留部隊が大津波で全滅して本土からCIA直轄ラングレーちよつかつ 特殊部隊が地下核施設の管理を行っていたはずだが、大規模な部隊では無いはず・・・」

『多分、おじさんの知らない区画に沢山隠し物があったんっすよ！』

「ありうるな。あの基地はDARPAダーパー（国防高等研究計画）に基づく極秘兵器の研究をしていたからな。私でさえ立ち入れない区画は確か

に有ったな」

『たぶん、あそこはマツカーサーの秘密基地だったんじゃないっ
スカね?』

「あちらこちらと忌々しい施設を造りおって!」

ジョーンズが怒りに肩を震わせながら言った。

「先行している『キャロライン・ケネディ』から入電! 飛行物体をレー
ダーが補足! 距離2万、高度3万、速度マツハ5、数70!」

→B2ステルススターファイター

「敵味方識別信号識別判定、ユニオンシティ戦略宇宙空軍所属B2S
ステルスフォートレス!」

「奴ら、戦略空軍を乗っ取ったのか!」

「あの識別コードはどの部隊も使われていない未知のコードです!」

「敵ならばさっさと迎撃するっすよ! 出来るだけ遠くで迎撃して時間
を稼ぐっすよ! レーザーバリア展開! プラズマブラスターキャノン
撃っつす!」

瑠奈はさっさと判断してマロングラッセを緑色のレーザーバリア
で包み込むとプラズマブラスターキャノンやレールガンを次々と発
射した。

暗闇に包まれた荒野の上空を、蒼白い直線的な稲妻が幾筋も西へ向
けて走る。

「我々も迎撃に参加するぞ! 改フェニックスミサイル発射! レーザー
は近接戦まで取っておけ!」

『マロングラッセ』左右に展開するマンスフィールド級空中戦艦から
アウトレンジ用迎撃ミサイルが発射された。

デイエゴガルシア基地から飛来したB2爆撃機編隊は、巡航ミサイ
ルを発射する前に瑠奈のプラズマ砲の直撃を受けて編隊誘導機と共
に隊長機が撃墜され、混乱したところをプラズマ砲の後に飛来した改
フェニックスミサイルの波状攻撃で半数が撃墜された。

撃墜された隊長機から指揮を引き継いだ爬虫類の副隊長は頭蓋に
埋め込まれたAI(人工知能)チップの指示を受けて、攻撃の継続を

決断した。

副隊長は生き残りの爆撃機を集めると針路を北に変えてベトナムのカムラン湾上空で中性子爆弾を装備した20基の巡航ミサイルを発射して帰投した。

エリア51のDARPA^{ダーパ}研究所で開発されたトマホーク改はマツハ7に加速するとダーウイン前線基地やアデレード臨時海軍基地へ向けて飛んでいった。

「敵編隊からミサイル飛来！数20、マツハ7、ノーザンテリトリー基地、アデレード海軍基地へ向けて飛行中！」

「將軍！」

「ミス瑠奈！我々はノーザンテリトリーを護る。アデレードへ向かう奴を撃ち落としてくれんかね？」

「承りつス！」^{うけたまわ}

「全艦対空戦闘用意！レーザーファランクス、SM6で迎撃しろ！」

『ワイズマン中佐！針路南へ転針最大戦速つス！レーザーバリア最大出力！中性子ビームファランクス連打つス！』

マロングラッセの鈍色^{にびいろ}をした細長い船体が緑色に輝く光の膜^{まく}に包まれると急加速して南下する。

「お嬢！ミサイルを撃ち落とす前に俺たちが加速でダウンしてしまうぞ!？」

ワイズマンが急加速でシートに縫い^ぬ付けられたように身動きできずに悲鳴を上げる。

「今は迎撃第一つス！我慢つス！」

瑠奈は平気な顔で艦長席で備え付けの冷蔵庫から出したプリンを頬張^{ほおほ}っていた。

オーストラリア南部沿岸部上空に到着した『マロングラッセ』は矢のような速さで殺到する巡航ミサイルを電光石火^{ごうとほし}の如く^{ごと}迸^{ほと}るプラズマ砲の連射で全て撃破した。

ノーザンテリトリー基地も『マンスフィールド』『キャロライン・ケネディ』の2隻が近接対空レーザーを全力斉射してミサイルの迎撃に成功した。

オセアニア防衛線は人類側が守り切った。

ホツとした顔でノーザンテリトリー基地へ帰投した瑠奈達だったが、宿舎でプリンを堪能していた瑠奈にジョーンズからのプライベート通信が入った。

「もすもす、瑠奈っス！」

「私だ、」

「オレオレ詐欺さぎは良いっスよ！」

「待てっ！瑠奈嬢！緊急なんだ！」

「ノリが悪いっスね？」

「イングランドが核攻撃を受けた・・・被害は甚大だ」

ジョーンズが瑠奈に告げる。

「マジっすか!？」

瑠奈が思わずプリンを容器ごと飲み込んでしまうと顔を顰しかめた。

「不味いっスね。これはいよいよ月面ラボを再起動して欲しいところっスね・・・」

灰色がかった夕暮れの空を見上げて 瑠奈ルナが呟つぶやいた。

—————

同日午後6時 【地球 英国 スコットランド ニューグラスゴー
(旧英国海軍基地) UNEDF (地球連合防衛軍) 司令部】

ロンドン市から避難民が次々と臨時鉄道で脱出してリバプールへ向かっている最中、イングランド各地に多くの巡航ミサイルが着弾して甚大しんたいな被害をもたらしていた。

→壊滅したロンドン市街

ニューグラスゴー司令部周辺の施設の所々が破損し、炎上していた。

少し離れた旧海軍基地ドックでは真新しい港湾施設の燃料タンクが激しく炎上していた。

臨時港湾施設に係留けいりゅうされていた強襲揚陸艦は、激しく炎上する燃料タンクに隣接していたのだが、火災に駆け付けるはずの消防隊員は一向いっこうに姿を現さず、不気味に静まり返っていた。巨大なファイアース

トームが沈黙していた強襲揚陸艦を包みこむと弾薬庫が過熱されて激しく爆発した。

外部の様子を映すモニターで轟沈する強襲揚陸艦を視ながらロイドが被害状況を把握しようとしていた。

「結局、何処に落ちたのかね？」

「飛来した超音速巡航ミサイルは120基、カーティブ、エディンバラ、バルト海防空システムで70基を撃墜しましたが、50基が司令部基地とロンドン、中部リバプールに着弾。弾頭は高密度の核爆弾、つまり中性子爆弾でした」

被害状況にショックを受けて顔面蒼白の若いオペレーターが観測機器を操作しながら報告を続けた。

「ロンドン市街南部と郊外のオールダーショット防衛線上空では、20基の中性子爆弾が爆発、展開していたNATO機械化歩兵と国防義勇軍防衛部隊が全滅、ロンドン市南部シエルターの大半と連絡が取れません」

防衛線立て直しを進言したドイツ軍大佐の顔を思い出したロイドは顔を顰めた。

「リバプールは？」

「そちらにも郊外の避難民キャンプへ少なくとも10基が着弾。地区防衛部隊からの連絡が途絶えております」

「この被害は？」

「国際宇宙空港は被害を免れましたが、郊外の臨時海軍施設と隣接する避難民キャンプに20基が直撃、全滅した模様」

「放射能汚染レベルは？」

「今回の中性子爆弾1基あたりの被ばく範囲は約2キロです。ロンドン南部からオールダーショット郊外までの途中区間では40kmにわたって放射能汚染を観測。半減期は暫定数値で30年」

「チエルノブイリが三か所出来たようなものだな」

「バグズ共の攻勢は？」

「不幸中の幸いと言いますか・・・中性子爆弾の影響でロンドンのバグズは全滅しています。スカゲラク海峡から飛来した爆撃機はバルト

海の東側へ飛び去りました。こちらの迎撃ミサイルは振り切られて命中しませんでした」

「完敗だな。陸上戦力の大半を失って、組み立てたばかりのW^{ワームバスター}B^空空砲台も失った今、次にバグズが来たらイングランドは蹂躪^{じゆうりん}される……」

ロイドが絶望した表情でインスタント紅茶を一口飲む。

「これ以上、祖国ブリテン島の汚染と人員の損害は容認できん。国際宇宙空港から可能な限りのシャトルを動員して人員と物資を、オセアニア生存圏へ移動させる。ケンジントンキャンプの王室にその旨を伝えて移動への協力を要請してくれ」

「私は殿軍^{しんがり}となってニューグラスゴーに留まる。ノーザン・テリトリー基地に着いたらすぐに火星本国とミツル商事に緊急連絡で支援を要請するんだ」

ロイド提督はブリテン島からの全軍撤退を決断した。

バトル・オブ・ブリテンⅡは人類の敗北となった。

—————

2023年1月21日夜【月面都市ユニオンシティ 行政庁舎】
「やはり駄目ね。此処^{ここ}の通信機器は全て『シャドウ』の息がかかっているから暗号を送信してもたちどころに解読されてしまうわ」

「それだと月面都市が外部から孤立してしまうな……」

^{ムスビ}結と高瀬中佐達が腕を組んで考え込んでいた。

「ここは研究室^{ラボ}の再開しかないのでは？」

東山が提案する。

「マルス文明のP通信システムならば、シャドウの通信傍受^{つうしんぼうじゆ}から多少は逃れる事が出来るのでは？」

「そうね……。ついでにニュートリノビームの封印も解こうかしら」
^{ムスビ}結は不穏な気配を地球ユーラシア大陸から感じたので、今後の行動を変更してシミュレートするのだった。

『そうりゆう』クルーがオーストラリア大陸のノーザン・テリトリー基地からイングランド壊滅によるブリテン島からの全軍撤退報告を受信したのは、結がニュートリノビーム・ラボの封印を解除した1時間

後の事だった。

生きてこそ

2023年1月23日【地球 オーストラリア大陸から西方1500 kmのインド洋上空】

ノーザン・テリトリー基地から哨戒任務で出撃したマンスフィールド級空中戦艦『キャロライン・ケネディ』が周辺の海上と空中を走査（そうさ）して、デイエゴガルシア基地のシャドウ・マルス勢力が侵攻する兆（きざ）しがないか監視を続けていた。

「艦長、超長波暗号通信を傍受（ぼうじゆ）。友軍と思われれます！」

通信オペレーターが報告する。

「暗号照会による識別を急げ！」

艦長が情報将校を兼ねる通信オペレーターへ指示を出す。

「照会完了。地球連合防衛軍ヨーロッパ艦隊所属 英国戦略原子力潜水艦『アガ멤ノン』です！」

「イギリスから撤退してきたのか・・・付近に艦影は？」

「本艦西方50 kmに複数の大型艦船を探知。IFFコードより、英国海軍フリゲート艦『レパルス』、同駆逐艦『サンディエゴ』、ユニオンシティ海軍イージス艦『ヨークタウン』『サンフランシスコ』同病院船『サクラメント』を確認！」

→撤退中の欧州派遣軍

「敵の追撃は受けていないのか!？」

「アガ멤ノンから入電「我、英国本土撤退船団を護衛中。敵の追撃は無し。アデレード海軍基地までの護衛を要請する」」

「直ちに司令部へ報告しろ。それとミツル商事 瑠奈嬢（ミスルナ）に支援要請だ。本艦は船団西方まで進出し、デイエゴガルシア基地からのシャドウ空軍と追尾している筈（はず）のバグズ共から船団を護衛する！」

→飛行中のマンスフィールド級

ずんぐりむっくりした白銀色の空中戦艦は針路を西へ向けると、船団上空を通過する形で船団西方からの攻撃に備えた。

宿舎で真知子先生の宿題（九九と理科）に頭を悩ませていた瑠奈は、ジョーンズ中將からヨーロッパ防衛軍と避難民を乗せた船団の護衛要請を受けると、すぐに宿題を放り出して隣室で仮眠していたワイズマン中佐やイスラエル特殊部隊を叩き起こすと『マロングラッセ』に引きずり込んで慌ただしく出撃、避難船団へ合流した。

「こちらミツル商事警備保障（MSP）の瑠奈っす！ロイドおじさんはどこっすか？」

瑠奈が船団指揮官に尋ねた。

「・・・ロイド提督は我々を逃すために女王陛下と共に殿軍（しんがり）に志願されてニューヨークラスゴーに留まっておりました」
スコットランド訛りが強い指揮官が沈痛な声音で応答した。

「マジっすか!？」

驚いた瑠奈はワイズマン中佐に相談するまでもなく、直ちに全速力でイングランド島に向かった。

搭乗していたワイズマン中佐や部下のイスラエル特殊部隊の面々は、加速で生じるGに耐えつつ、座席から身動き出来ずに身体を縛り付けられたまま、啞然とするしか無かった。

—————

アイスランドと沈没したグリーンランド海底火山から降り続く火山灰に覆われたニューヨークラスゴー国際宇宙空港では、イングランド各地から撤退してきた防衛軍残存部隊と生き残った避難民が、次々と大型シャトルに乗り込んでオーストラリアまで撤退していた。

→ 離陸準備中の大型輸送シャトル

ロイド提督は傍らで侍従と近衛兵に支えられながら気丈に立つ主に頭を下げて報告した。

「女王陛下、これが最終便になります。オーストラリア特別州でも避難民の事、よろしく願います」

火山灰による重度の呼吸器疾患で酸素マスクが手放せない女王陛下だったが、おもむろに酸素マスクを取ると侍従の制止を無視してロイドに話しかけた。

「卿の国民への献身に心から感謝を」

ロイドは跪くと、

「私の失態で多くの兵士と国民を失い、さらに偉大なる祖国の地までも手放す結果となり、お詫びのしようもありません」と女王陛下に謝罪した。

「火星に新しく誕生した帝国本土は、日本国と共に新しい繁栄を遂げております。火星の人類は遠くない時期に地球へ戻ってくるでしょう。それまでは私が一命に換えてでもこの国土をお守りいたします。女王陛下におかれましては、オーストラリアの民と共に——」

女王陛下はロイドの言葉を手でそつと遮ると、かぶせるように話しかけた。

「よいのだ、ロイドよ。卿は十分に役目を果たした。短い時間しか一緒におらんのだが、妾にもわかる——」

女王陛下は不意に激しくせき込んで侍従に背中を擦られながらも、ロイドに話しかける。

「だからなロイドよ……卿が民を最後まで護り、導くのじゃ。これは生きる者として、生きてこそその義務じゃ。この身体ではそう長くは持たぬゆえ、妾はここで骨を埋める」

そう言うと女王陛下は、ロイドの頭に掌（てのひら）をあてると祝福の言葉を贈り、侍従達と共に空港片隅にある簡素なテントへ戻っていった。

ロイドは女王陛下がテントの中へ姿を消すまでずっと跪いたまま頭を垂れるのだった。

空港管制室に戻ったロイドは非常用マルス製通信システムでジョーンズ中将与連絡を取った。

「ジョーンズ中將。もうすぐ最後のシャトルがここを飛び立つ」

「提督の心中、察するに余りあります」

モニターの向こうに映るジョーンズが神妙な顔で慰めの言葉をかける。

「中將、女王陛下（クイーン）はこの地に残る」

「何ですと!?!」

「儂も残るのじゃ」

ロイドは普段話していた口調を捨てて素面しらふでジョーンズに語りかける。

「そんなー!」

ジョーンズが絶句する。

「儂は多大な損害を出した敗軍の将ゆえ、責任を取らねばならん」

ロイドが言い張る。

「提督ていとくはかつて、私が海兵隊将校としてシレーヌス海でワームに敗北した際、「生きて責務を果たせ」とおっしゃいました。私も先日マリンシテイを失陥しつかんし、南半球艦隊を全滅に追い込んでおりますが、今もこの地で生き恥はじを晒さらしております。失礼ながら、提督は女王陛下クイーンのお心遣いこころづかを無駄になさるおつもりですか!?!」

ジョーンズに窘めたしなられるとロイドは沈黙した。

「・・・提督。わが軍の命令を無視した船が1隻、そちらへ向かっております。本来であれば軍紀違反で軍法会議にかけるまでもなく即決処罰されるのですが、提督にその者の処罰をお任せします。わが軍に規律を守らない者は必要ありません」

ジョーンズから唐突とうとつな報告が行われて通信が切られた。

ロイドは呆然ぼうぜんとしていた。

「どんな愚連隊ぐれんたいが来ると言うのだ?」

管制室のレーダー担当がロイドの様子を無視して報告の声を挙げ
る。

「アフリカ西部からイベリア半島を横断してきた飛行物体が本土南部から高速で接近中!」

「またシャドウ爆撃機か!」

「IFFコード受信。ミツル商事警備保障(MSP) 多目的戦闘艦『マロングラッセ』です!」

「なんと!」

『『マロングラッセ』から入電。「勘当かんどうされたので助けて」との事です」

啞然とした様子でオペレーターが報告する。

「ふっ……あははっ！」

呆気にとられるロイドだったが、泣き笑いの様な表情で呟く。

「流石はミス瑠奈（ルナ）……」

『マロングラッセ』に返電。「命令違反を犯した者は外出禁止1か月と、おやつは全て没収」と伝える

ロイドは少しだけニヤリと笑った。

「悪運はまだ少し、私に残っている様だ」

ロイドは小さく呟いて管制室の中の全員に告げる。

「諸君。ミツル商事と強力な火星人の助っ人がオーストラリアから飛来する。我々はこれより援軍の戦闘艦と共にこの地で『抵抗』《レジスタンス》を続けるのだ！」

悲壮な決意に満ちていた管制室の全員から明るい歓声が挙がった。

こうして瑠奈とワイズマン中佐率いるイスラエル特殊部隊はロイド提督の指揮下に入った。

ロイドは殿軍を再編成すると、本拠地をニューグラスゴー対岸のアイランド島ニューベルファスト臨時基地に移し、レジスタンス部隊として女王陛下と僅かな避難民を護りながら、火星からの援軍を待つのだった。

女王陛下は『マロングラッセ』の医務室でマルス医療による呼吸器疾患の治療を受けた。重度の呼吸器疾患であるが、毎日マロングラッセに「通院」することで症状は徐々に改善されたようだった。

瑠奈は、毎日治療で訪れる女王陛下と午後紅茶を嗜んだり、恋愛シミュレーションゲームをして楽しんだのだが、三次元チエスで女王陛下に敗北した際、避難民の待遇改善を要請されるのだった。

瑠奈とワイズマン中佐は、ロイドから下された「おやつ&酒類 禁止令」の撤回と、王室ご用達プテイニング製造方法伝授と引き換えに、マロングラッセに搭載しているマルス製医療設備の操作方法を侍従やロイド配下の衛生兵にレクチャーしながら避難民の治療にあたった。

瑠奈は、おやつ&酒類禁止令の撤回を勝ち取ると、王室料理人から開示されたレシピを元に王室プテイニングを開発して堪能することに

なるのだが、いつしかイングランドレジスタンス部隊では、任務で成果を上げた者へ「王室御用達プテイニング」が下賜されるのが恒例となるのだった。

→ロイヤルプテイニング

王室を敬愛するロイド卿としては、

「勲章よりもプテイニングを求めるのは如何なものか」

と複雑な心境になったりしたのだが、『マロングラッセ』がオーストラリア基地から運んできたバーボンウイスキーをワイズマン中佐から贈られるとどうでも良くなって黙認する事にした。

ーーーー

2023年1月23日午後11時29分「オーストラリア 地球連合防衛軍ノーザン・テリトリー基地」

瑠奈の居なくなった司令室はこんなにも静寂に包まれて寂しいものだったのか、とジョーンズ中將はモニターに映し出されたブリテン島からの撤退船団がアデレード臨時海軍基地へ入港するのを見守りながら実感していた。

→病院船アデレード入港

「これで地上の人類拠点は此処と、アルプス、カッパドキアのみか……」

かつて75億の人類が居住していた地上は荒れ果て、火星由来生物が蔓延る死の大地となってしまった。今防衛している生存圏人口はおそらく5000万人程度だろう。

人類に成り代わって地上の支配者となったバグズの群れとAIチップに操られた爬虫類人類クローンを従える「シヤドウマルス」。

地球人類は滅亡の一步手前ではないか!? そう思うとジョーンズは寒気を覚えた。

思索に沈むジョーンズを叩き起こすかのよう、司令部の早期警戒システムが作動した。

「KH早期警戒衛星からです！ 北米大陸及びユーラシア大陸東部

シベリア地方から熱源反応多数！ICBM（大陸間弾道弾）が発射されました！」

真つ青な顔でオペレーターが報告する。

→飛翔する核ミサイル群

「ばかな!? マッカーサー三世、何を考えておるのだ！着弾地点の計算は？」

「全弾オーストラリア大陸全域に着弾すると計算結果が出ました。確認された弾頭は1200基！」

「奴ら、我々を本気で抹殺したがつておるな。オセアニア生存圏全域に核攻撃避難 緊急警報を発令！ミサイル防御（MD）システム作動！」

「イージス艦、SM3迎撃ミサイル発射体制急げ！」

シャドウマルスの目的は地球生物全てを自らの研究に隷従させる事の筈だが、核を使うとは。

地球生物の抹殺に他ならない核の大量使用を目の当たりにして、ジョーンズは激怒した。

「クソツ！我々は、用済みと言う訳か・・・クレイジーな！」

「英国原子力潜水艦『アガ멤ノン』から入電！「報復攻撃の指示されたし」との事！」

→アガ멤ノン

「馬鹿者！こんな状況で核の応酬など無意味だ！」

「しかし、このままトカゲ野郎に焼き殺されたままでよいのですか!?!」

司令部付きの将校が、死なば諸共とばかりに報復核攻撃を進言した。

ジョーンズは地球の自滅行為に他ならないと認識していたのだが、報復核攻撃でシャドウマルスを巻き添えにするのも何か意味が有るかもしれないと思い始めていた。

「致し方ない・・・。アガ멤ノンに発射シークエンス開始を指示！」

太平洋西部で待機中の戦略原子力潜水艦『ケンタッキー』にも同様の指令を出せ！」

「アガメムノン、ケンタッキーがSLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）発射シークエンスに入ります！」

「終わったな・・・」

呆然とした表情を浮かべたジョーンズは世界が崩壊する音を耳にしたような感覚に陥った。

「火星へ最後の通信を送れ。」「2330時、シャドウが全面核攻撃を開始。後を頼む」でいい」

「・・・」

絶句したオペレーターが、火星への星間通信を始めたその時、通信スピーカーから澄ました幼い女性の声が聴こえてきた。

「こちら日本自衛隊月面派遣部隊『そうりゆう』 結よ。今から衛星軌道と太平洋にビームをかますからあなた達の報復ミサイルは不要よ。潜水艦は急いで潜航なさい」

→攻撃型原子力潜水艦

「迎撃中止！『ケンタッキー』は急速潜航して退避しろ！」

「月面都市から攻撃データ受信！ニュートリノビームを使うとの事です！」

「シベリアのイゴールに使ったやつか・・・」

ジョーンズは納得すると月面の結に呼びかけた。

「南半球防衛軍司令のジョーンズだ。ミス ムスビに感謝する」

「どういたしまして。後で瑠奈の行方を教えて頂戴」

「ICBM群が衛星軌道に到達！」

「月面基地からニュートリノビーム発射！」

→ニュートリノビーム

シベリア秘密都市群と、北米大陸各地のミサイル基地から打ち上げられたSS18とミニットマン多弾頭ミサイルの群れは衛星軌道に到達するなり、月面 研究室の巨大ライフルから発射されたニュート

リノビームを浴びると、弾頭の起爆用火薬が誤作動してウランが不完全爆発を起こし、制御不能となった。

ICBM発射10分後には、月面からの度重なるニュートリノビーム攻撃で飛翔中のミサイルは全て無効化されて通常火薬のみが爆発するか、安全装置が作動して無害な無機物の塊となって太平洋の深海に沈んでいった。

「シベリアと北米からのミサイル攻撃は失敗に終わりました！」
司令部にホツとした空気が流れる。

「こちら結よ。火星からの伝言を送信するわ」

司令部に火星横浜にある仮の防衛軍司令部からのメッセージが届く。

メッセージに目を通したジョーンズは不敵な笑みを浮かべて呟く。
「ようやくこちらのターンか・・・」

オセアニア生存圏に対して仕掛けられた全面核攻撃は失敗に終わり、地上での戦いは膠着状態に陥った。

一方、火星では人類反攻の準備が着々と進んでいた。

ヒトとして

NEWイワフネハウス地下」

あの映像をフラッシュバックで視てからどれくらいが経ったの
だろう？

琴乃羽 美鶴の意識が記憶の底から浮上した。

・・・あれ？美衣子ちゃんが私を覗き込んでいるわね・・・
・・・ひかりさんも私に何か呼び掛けているみたいね・・・
・・・大丈夫、と口にしようとしたが声が出せない・・・
・・・手を振ってゼスチュアで伝えようと思ったが身体に力が入ら
ない・・・

——空腹感や喉が渴いた感覚はない——

・・・全てがぼんやりとしていて、温かな湯船の中を漂っているか
の様で心地良い・・・

・・・この感覚に慣れると抜け出せなくなる予感がするが、それも
悪くは無い——

と琴乃羽は思い始めていた——

不意に身体がすぐわれる様な感覚に気づいていたが、彼女の意識は
微睡みの域を抜け出す事はなかった——

赤みがかった、黄色い溶液となった彼女は、アンドロイドのツルハ
シがグラスファイバー製容器に収められた事にさえ気づく事は無
かった。

【NEWイワフネハウス地下 美衣子研究室】

ツルハシが手にしているグラスファイバー製容器の中で赤みが
かった黄色い溶液がゆらゆらと蠢いている。

「思ったよりもこれは難しいわね」

誰に言うともなく美衣子がむーんと呟く。

「この状態に危機感を抱いてもらわない事には人には戻れないとい
うのに・・・」

フラスコの中で揺れる琴乃羽は何故かこの状況を楽しんでいるよ
うに見えた。

『姉さま。月面都市の住人は植物から戻れないのかしら?』

月面に派遣されていた『そうりゅう』から、リアルタイム星間通信で植物・溶液化人類の分析をしていた結ムスヒが訊く。

『そうりゅう』は、月面に向かう航路各所にマルス製防諜機能をとんこ盛りした通信衛星を新しく設置しており、通信状況は劇的に改善した。

「月面都市のヒトは溶液から植物へ『進化』してしまったわ。液体の方がヒトに戻り易かったのだけど・・・」

困った顔の美衣子ミイコが答える。

『植物化したらヒトの意識は残るのかしら? 意思の存在確認が必要だと思おうわ姉様』

「そうね。まずは液体や植物化したヒトとの意思疎通を図る手段が要るわね」

「液体にマイクを突っ込んでもしょうがないわね・・・」

思案する美衣子の眼に、部屋の片隅で琴乃羽の入った容器をバーテンドーよろしく器用にシェイクしていたツルハシが写った。

美衣子は何も言わずにツルハシの背後に歩み寄ると電撃を浴びせてお仕置きをする。

プスプスと薄い煙をあげて床にくずおれて痙攣けいれんするツルハシをしばらく見つめていた美衣子（ミイコ）は不意に、

「これだ!」

と思わず叫んでいた。

「ツルハシ! お仕事よ!」

「ハテナ?」

電撃で煤すすけたツルハシのセラミックボディをぺちぺちと嬉し気に叩く美衣子にツルハシが首を傾げる。

「取りあえず木星スライムとコンタクトして頂戴ちようだい」
美衣子が命令した。

2023年2月15日【東京都世田谷区 陸上自衛隊 三宿駐屯地

内 N I I D（国立感染症研究センター）研究所】

この研究所地下にある特殊ラボは気圧操作されており、室内の空

気が外部へ漏れる事は無い。

ここには月面都市の植物化人類、ボレアリフシテイの溶液化人類、NEWイワフネハウス地下で溶解した琴乃羽がサンプルとして保管されていた。

「いろいろと試していたのだけど、分かった事があるわ」

琴乃羽溶解以降、NEWイワフネハウス地下の研究室に籠っていた美衣子はNIIIDニイイドに到着するなり開口一番に切り出した。

「取り敢えず、このサンプルたちは「まだ」ヒトよ」

美衣子が宣言した。

「生きていますか!？」

琴乃羽の同僚である岬渚紗みさきなぎさが驚きを露わにして訊く。

「そうね。琴乃羽の溶液から生体電気と電流が観測されたけど、電流の特徴がヒトと同じだったの。つまり、生きていけると言えるわ」

美衣子が答えた。

「しかし、このような形態での意思疎通は可能でしょうか？」

ロイドの代理で火星に残っていた英国連邦極東のグリナート大佐が質問する。

「専用機器さえ揃えば可能よ。そちらは今、ミツル商事医療部門が鋭意準備中よ。期待して頂戴」

美衣子が胸を張る。

「ふむ・・・それはなにより。喜ばしい事ですな」

美衣子の答えを聴いてグリナート大佐が胸を撫で下ろす。

「ミス・ミーコ。彼らをヒトへ戻す目途も立つのでしょうか？以前、美衣子博士と結博アロフエツサームスビ士の番組を視聴した際、「ヒトの思念力テレパス」が物理法則を変える、とご説明されていたと思います。液体化した溶液がヒトに戻りたいと願えば元の姿に戻る事も可能と理解しますが？」

グリナートの背後で立ち会っていたユーロピア共和国のジャンヌ首相が訊く。

「そのとおりよ」

美衣子が腰に手を当てて頷く。

「ただ、現時点においてヒトに戻った事例は見当たらない。これは

物理法則変更以前に、ヒトに戻りたいという思念力が薄い事の表れかもしれないわ」

神妙な表情で応える美衣子。

「植物や溶液の状態が心地良いのか、ヒトとしての形を失うことで意思が薄弱になってしまうのか、本人達じゃない限り説明は難しいわ」

「心地良いですと？ヒトをこのような姿にしておいて、福音とは良く言ったものですな」

グリナートが皮肉気に肩を竦める。

「美衣子博士、このままだとヒトの姿を失った者は時間が経つにつれ、ヒトとしての自覚が消えてしまうのではないかね？」

日本政府代表として立ち会っていた黒子厚生労働大臣が言った。

「それは外部からの刺激がない場合よ。こちらから「話しかける」事で自我の消失を遅らせる事が可能かもしれないわ」

美衣子が自らに言い聞かせるように答える。

「私も美衣子に同意します。我々よりも生に「執着」する地球人類ならば、こちらからの呼びかけに反応してくれるでしょう」

マルス側のアドバイザーとして派遣されていたゼイエスが言った。

「分かりました。総理には引き続き人へ戻す研究が有効であると報告しましょう」

研究チームを率いる黒子大臣が研究続行を宣言した。

——溶液・植物化人類の分析を始めて3ヶ月後、ミツル商事アンドロイドのツルハシが、風呂上がりの木星スライム「ミニ」から意思疎通方法のアドバイスを得て製作した生体電気検知式 意思疎通装置「聴き耳君」が完成した。

量産化に成功した人類は、月面ユニオンシティ、火星アルテミユア大陸のボレアリフシティ住民と月面基地に駐留していた自衛隊員に、家族や恋人・友人が思いの丈を届け始めた。

人々の呼びかけに応えて反応した液体や植物は全体の3割に及んだが、琴乃羽からの反応は、無かった。

また、意思疎通が出来た者からヒトへの形態を復元できた者は未だ

に現れなかった。

人々は諦念^{ていねん}の境地に達しつつあった。

シャドウの福音^{ふくしん}システムによってヒトの姿形を失った者は17万人余りに上り、福音の果てに広がる人類生存圏各地には、物言わぬ密林とヒトの名残を残した湿地帯だけが存在するのだった。

—————

2023年6月1日【NEWイワフネハウス 203号室】

みよせなぎせ

ことのは

岬渚紗は琴乃羽の私物を整理するために彼女の部屋を訪れていた。

溶液や植物化した人々のうち、「聴き耳君」で自我を取り戻して意思疎通の出来る者が一部出てきたが、意識を喪失したまま物言わぬ液体や植物と化した人々は未だ17万人に上る。

日本国も月面駐留基地の自衛隊員300名と、ボレアリフと月面都市で巻き込まれたビジネスマン2000人余がヒトの形を失って溶解していた。

各国政府はヒトの形を失った国民を丁重に保護する一方、ヒトへの治癒が望めない人々に対して、合同慰勞祭を取り行う事になった。

この政府の対応に、肉親や恋人が溶解して悲しみに暮れる人々は、形を変えても尚、生きている者に対する冒とくだとして猛反発した。

一方で「けじめ」をつけるべきとの世論は日増しに強まり、各国政府は数か月後に迫った人類反攻作戦を前に人類の結束を強めるため、世論の安定を図ることにしたのである。

今日、東京の代々木にある新日本武道館で合同慰勞祭を行うにあたり、人々は変わり果てた家族や恋人、友人縁^{ゆかり}の品を持ち寄って、武道館ステージ一杯に整然と並べられた数万の溶液カプセルや植物プランターに、お供えするように置くと、一刻も早く心と身体が取り戻せるように手を合わせて願うのだった。

岬も大月夫妻からの依頼で、琴乃羽が愛用していた素敵な男性スケッチが多く含まれたコンテンツの数々を持ち込もうとしたが、余りの多さに受付で大半が断られる事となり、ツルハシに担がせて倉庫送りとなった。

それでも、最後まで琴乃羽が愛用していた「恋愛無双」ゲームソフトやBL本のコレクションだけは持ち込むことが出来た。

琴乃羽の溶液が入ったカプセルの前にそれら「コンテンツ」を置くと、岬は手を合わせて琴乃羽が心安らかに過ごせるように祈った。

「恋愛無双」のソフトと最新刊BL本が置かれたカプセルの中では、溶液が微かにかプルプルと震えているように見えた。

「それではこれより、電磁波攻撃の被害を受けてしまわれた方々の安寧を祈る集いを開催いたします」

司会を務めるNHKアナウンサーが開催を宣言した。

澁澤総理大臣による慰めと労いの言葉の後に、皇族の方々、各国首脳のスピーチが続いた。

ステージ壇上の壁際（かべぎわ）では仏教、キリスト教、イスラム教等の宗教団体がそれぞれ信じる神の名の下に無病息災と癒しの祝福を唱（とな）えていた。

「続きまして、被害者友人代表として、ミツル商事 海洋生物学博士の岬渚紗さん。よろしく願います」

黒いワンピースを着た岬が琴乃羽の愛読していたBL本を手に、楚々と壇上へ上がる。

「私の親しい同僚、琴乃羽美鶴さんはこの異常現象を説明しようとして自らヒトの姿を喪いました。あの出来事が起こる直前、彼女は私にこう言いました。『人間、受けか攻めよ』と……私はその時、彼女の魂の叫びを確かに聴きました。彼女が愛読していた本から一説を引用します……」

岬がゆつくりと琴乃羽のバイブルだったBL本を壇上で大きく掲げると大声で朗読を始めた。

「バンコランはこう言った『俺の物になれ』と……バンコランに見つめられた王子は頬を染めながらゆつくり彼に近づくと彼の厚い胸板へ飛び込んで……」

男同士による大胆なラブシーンが描写された一節を、岬は大きな声で熱心に読み上げる。

最新音響設備によって、新日本武道館の隅々まで岬の声は届いた

が、ずらりと並んだカプセルの中の者達にまで、そのBL本の音読が響いてしまっていた。

琴乃羽を含む多数の溶液が入ったカプセルが小刻みにプルプルと振動すると、中の溶液が岬の朗読が進むにつれて膨張し、激しく蠢きだした。

次の瞬間、カプセルから眩い緑色の光柱の列が天井まで立ち昇り、新武道館内がどよめきに包まれた。

やがて光が収まると、そこには全裸男女に混じって、琴乃羽が顔を手で覆って立ち尽くしていた。

「……」

琴乃羽は肩を震わせると悲壮な表情で壇上の岬に向かって叫んだ。

「それ以上読まないでっつ！その巻はまだ買ったばかりで読んでいないから！ネタバレ駄目っつ！」

「琴乃羽……そこに突っ込むの!？」

琴乃羽がわんわんと泣き叫びながら壇上の岬へ詰め寄ろうとしたが、我に返った女性SPに制止されて新武道館の外へ連れ出されると、そのまま自衛隊救急車で自衛隊病院へ運び込まれた。

琴乃羽を含む多数の男女が溶液から突然ヒトへ実体化した事で新武道館内は騒然とした状況になり式典は中止された。各テレビ中継も、式場が突如発光した段階で自動的にカメラがスタジオへ切り替わっていた。

琴乃羽以外でヒトに戻った男女たちは、何やら頭を抱えてうんうんと唸っている者が大半だったが、数名 頬がツヤツヤして清々しい顔をした者も居た。

警察は公然わいせつ罪の疑いで全員拘束を考えたが、被害者の容態を優先した首相指示により、全裸男女の集団は救急車で自衛隊病院へ運び込まれた。

式典中止にあたり、澁澤首相は参加者へ向けて、

「本日、多くの人々が絶望的な状況の中、ヒトに戻ることが出来ませんでした。私達にはまだ何か出来る事があるのです。みなさん、希望を捨てずに前へ進みましょう」

とスピーチした。

NIIDで精密検査を受けた琴乃羽や大勢の男女はDNA解析等を経て、完全にヒトの姿へ戻った事が確認された。

医師団は男女の意識が極度の緊張や興奮状態に陥った事が原因でヒトへ戻る自我が確立されたと診断した。

この出来事をきっかけとして、溶液化、植物化した人に対し、ヒト時代に強い思い入れのあった物や人に対面させる事で、琴乃羽達の時と同じように「激しい反応」を起こしてヒトへ戻った事例が相次いだ。

琴乃羽が岬のBL本朗読でヒトへの回復を遂げたことから、この治療法はBL本に登場するとある登場人物の名を取って「バンコラン療法」と呼ばれ、岬は後年、火星ノーベル医学賞と人類圏イグ・ノーベル賞を同時に受賞した歴史上初の日本人となった。

授賞式に先立って幕張の受賞会場で記念講演をした岬が、再びBL本最新刊を大声で朗読した際、同伴した琴乃羽が恥ずかしさと嬉しさのあまり失神して東山に介抱されたのは別の黒歴史である――

【NEWイワフネハウス地下 美衣子研究室（ミココ・ラボ）】

「溶液化しても環境に適應してしまう人類には無限の可能性を感じるわ」

久しぶりにひかり謹製のオリジナルプリンを堪能しながら美衣子が言った。

『姉様。思ったのですが、思念力で溶液からヒトに戻れたのなら、再び溶液になることも、そしてまたヒトに戻る事も可能では？』

ホログラムの向こう側から月面都市で反攻作戦準備の合間にレーションのプリンを食べる結（ムスビ）が姉に聞く。

「木星スライムも同じことを指摘していたわ。琴乃羽達はある意味、人類の形態から進化しつつある、と言うことね」

美衣子はさらりと言うのだった。

招かれざる降臨

→本日の表紙です。右が名取優美子、左が天草華子です。「お絵描きさん らてい様」に書いていただきました。

2023年6月1日「太陽系第5惑星 地表から283,000kmの最深部」

太陽系で一番重力が集中する惑星の最深部は計測不能なほどの超重力が働いており、空間に堆積した超重力は空間にくぼみを生じさせていた。そこはある種の特異点と言えるだろう。

その特異点から1,000年ぶりに「こちらの宇宙」を訪れた^{きまぐ}気紛れな存在は、隣の第4惑星の異変に気が付いた。砂漠と荒野が果てしなく続く惑星が豊かな大気と水に覆われた姿に変貌^{へんぼう}しているのを「視た」存在は第5惑星の特異点地面を軽く蹴るとその姿を掻き消した。

気紛れな存在がその姿を掻き消した直後、特異点から2つの存在が「こちらの宇宙」へ飛び込んで来た。

「お姉ちゃん！あいつ、あっちにいった！」

元気で良く響く幼い声が姉の注意を引いた。

「へっ？どこですかあ？」

おっとりした存在は過酷な超重力環境をもともせず妹に問い返す。

「ゴル姉ちゃん、こっち！行くよ！」

「ライちゃん！待って！」

姉妹たる存在は慌ただしく重力の底を蹴ると特異点から姿を掻き消した。

—————

2023年6月1日午前7時「火星と木星の中間地点 アステロイドベルト 日本列島オブジェクト建設現場 航空・宇宙自衛隊 強襲揚陸護衛艦『ホワイトピース』ブリッジ」

「木星警戒衛星が第5惑星地表最深部付近で磁場の乱れを観測」

オペレーターが報告する。

「スライム、これは？」

名取が艦長席のコンソールで伸びていたミニスライムに語りかけた。

『お客さんが来て、去った・・・』

スライムの念動力通信がスピーカーに接続されてブリッジに声となって響く。

「お客さん？」

名取が首を傾げた。

「もう少し詳しく教えてもらえないか？」

『母なる星の奥深くにはこの世ならざる扉がある。たまにそこから来訪者が出てくる。そして去っていく。それだけ』

スライムがプルプルと体を震わせる。

「異常事態ではないと言う事でしょうか？」

『来訪者が観測される事自体極めてまれ・・・』

「チムニーの長と話せませんか？」

『長は・・・昼寝中・・・』

「そうですか・・・」

ため息をついた名取は実害が出ていない事を確認すると、この現象については火星日本への定時報告に載せる事にした。

『オブジェクト四国、地殻接合面完成。これより淡路島連絡部分を経て本州部分との接合作業に入ります』

建設プラント船団から報告が入る。

「了解した。こちら建設船団旗艦「ホワイトピース」名取です。これより四国オブジェクトの本州接合作業に入ります。九州、本州オブジェクト作業エリアの船舶と作業員は衝撃に注意！」

名取は木星地表の出来事を一時的に頭の片隅に追いやって、オブジェクト建設の陣頭指揮に思考を切り替えた。

『ミツル商事オブジェクト移送タグボートが四国オブジェクト外縁部に接触』

「本州オブジェクトへ接合！」

無数のツルハシ型アンドロイドが操縦するタグボートの群れが四国オブジェクトの高知側に取り付くとパルスエンジンを噴射させた。まるで蟻塚ありづかにたかる蟻の群れのようにタグボートが四国オブジェクトの基盤部から表層部に至るまで群がって本州オブジェクトに向けてエンジンを噴射していた。

「オブジェクト四国移動開始しました。これよりイスラエル軍管制に引き継ぎます」

『こちらイスラエル連邦国防軍(UNIDF)四国オブジェクト表層司令室。移動計測値は順調。ホンシユウに接合するルートにオンした』
日本列島オブジェクトを運用するイスラエル連邦国防軍のオペレーターから報告が入る。

「こちら『ホワイトピース』、以後の接合作業監督は貴国にお任せします」

『こちらオブジェクト シコク。貴国のすべての作業員に感謝と敬意を』

漆黒しつこくの闇の中で巨大な岩塊がんかいがゆつくりとさらに巨大な岩塊へ向かって移動する。

もし、太陽に明るく照らされた側に居たならばさぞや圧巻な光景に違いない、と名取は思った。

巨大な岩塊を見上げながら思索ふけに耽る名取に通信オペレーターが報告する。

「大佐、哨戒中の空母『サラトガ』から追加報告！土星方面から大質量物体が接近中！」

『マルス支援船団リアです。プレアデスからの先遣隊が先ほど天王星付近のワームホールからアウトしました』

「土星方面から接近する複数の大質量物体を補足！各物体の直径20 km!?!」

思わずレーダー管制官が素っ頓どんきりょう狂な声を挙げてしまう。

「落ち着け。今のマルス支援船団母艦でも2 kmはあるのだ。上には上が居て当然ではないか」

名取が動揺するブリッジ要員を静かに宥なだめる。

「先遣隊が来たか・・・ということは一―」

『ええ。私たちも作業を急がなければなりません』

名取のつぶやきにリアが応える。

建設船団の外縁部に位置していた『ホワイトピース』を覆い隠すかのように巨大なマルス基幹母艦の群れがゆっくりと接近していた。

「作戦の下準備が出来たということか・・・」

巨大な艦影にざわめくブリッジで名取は、一大反攻作戦の始まりを予感していた。

――

同時刻――【火星衛星軌道上】

第5惑星の特異点から瞬きするほどの時間で移動したその存在はしばらく地上をつぶさに観測していたが、とある生物を見つけると口許を歪めて悠々と降臨していった。

間を置かずに同じ場所に現れた二つの存在は追いかけてようと地上を俯瞰したが久しぶりの重力に姉が引っぱられてしまい、姉妹ともどもバランスを失って真つ逆さまに地上へ落下していった。

衛星軌道上の宇宙基地『フォボス』『ダイモス』の警戒システムはそれぞれ僅かな質量の転移を観測したがすぐに質量物体が火星大気圏へと突入したために日常的に飛来する小惑星と結論付けて特に注意を払わなかった。

――

翌日【火星日本列島 東京都港区 白銀 神聖女子学院小等部】

「それではホームルームを始めます」

真知子先生が日直の瑠奈に号令を促す。

『起立』

『礼』

『いただきます！』

「ちよっと待ったーっ！そこ違うわよ！」

流れるように間違えようとした瑠奈に真知子先生がストップをかける。

「まだ4時間目ですよ!?!」

『地球英国はもう日が暮れて夕食の時間帯っスよ!』

モニターの向こうに居る瑠奈が真知子先生の突っ込みに応える。

地球ブリテン島に居る瑠奈は星間通信でホームルームに参加していた。姉の結が整備した新しい通信網のおかげで欠席続きの瑠奈は久しぶりに、通学、していた。

「レジスタンスの厳しい状況も理解出来ませんが、星間通信授業で朝から居眠りではないですか?」

真知子先生の追及は厳しい。

『さーせん・・・』

うなだれる瑠奈。

「・・・まったく。さて、今日は皆さんに新しいお友達と先生をご紹介します。二人とも、お入りなさい」

真知子先生がドアの向こう側へ声を掛けると金髪碧眼の実習生と転入生が教室に入ってくる。

明るいブロンドの髪と白い肌、整った顔立ちにクラスの皆からため息が漏れる。

「自己紹介をどうぞ」

真知子先生が教壇の脇へ移動する。

「ごきげんよう」

「おいつスー!」

二人が同時に話そうとする。

「ごほんっ! えっと・・・お姉さんからどうぞ」

真知子先生が教育実習生を指名する。

「ごきげんよう淑女の皆様。私は黄星 守美と申します。短い間になります。みなさんに宇宙の秩序を調教できれば幸いですわ」

「・・・」

真知子先生を始めとして、クラスの全員が沈黙した。

「・・・では、貴女の番ですよ」

気を取り直した真知子先生が転入者に挨拶を促す。

「おいつスー! 黄星 輝美だぜっ! 得意分野は封印術式の研究だぜっ!」

「……………」

またしても、真知子先生を始めとしたクラスの全員が沈黙した。
全員の心の中では、

『姉妹そろって電波かよ——！』

と激しい突っ込みが行われていた。

地球欧州のブリテン島アイランドから星間通信でH Rホームルームに出席していた瑠奈は、モニターの向こう側で理想的（瑠奈の個人的感想）なデビューを果たした姉妹を「自分のアイデンティティを脅かすヤバイ奴」認定して終始沈黙するのだった。

—————

同時刻——【火星 シレーヌス海マリネリス海溝】

誕生して4年余りの幼い深海底に到達した気紛れな存在は、衛星軌道上で見つけたアレと対面していた。

「ふむふむ……なかなか良い面構えだぞっ！」と

太陽からの光が届かない深海底にもかかわらず、その存在は眩しそうにアレを見上げる。

深海底でうごめく8匹の火星由来生物である巨大ワームはほのかに暖かい体温を感知すると自らの体内に吸引すべく一斉に襲い掛かる。

「活きの良さも極上だぞっ！」と

巨大な水圧がかかる深海底においてあり得ない身軽さで巨大ワームの攻撃を躲したその存在は両手を広げると眩いばかりの巨大な白光の渦を巨大ワームの群れに放った。

マリネリス海溝の一角が激しいスパークに包まれた。

スパークが収まった深海底にその存在は既に無く、ただ、8つの首を持つ巨大なワームがうごめいているだけだった。

【東京都千代田区 秋葉原 自衛隊特殊電子戦闘団 偽装訓練施設】

「このワーム強くて先に進めないですわ」

華子はなこがガトリングガンを両手で重そうに持ち上げて乱射しながら岩陰に走り込むと、無線で背後の崖に潜む優美子ゆみこへ援護を求める。

『普通のワームじゃないっしょ』

優美子が崖の上からワームを見下ろすと右肩に掛けたプラズマバズーカの照準を茶色いワームに合わせる。

「これが地球で猛威を奮っているサイボーグワーム・・・」

優美子は独り言を呟きながら慎重に急所を狙う。

「ターゲットロックオン！」

優美子が引き金を引くとプラズマバズーカから青白いプラズマ弾がブーンとわずかな唸りを上げて真っ直ぐにワームの顎下へ突き刺さった。

サイボーグワームに突き刺さったプラズマ弾は固い殻をこじ開けるようにめり込むと激しいスパークが体内に走り、口から煙を噴き上げると地面に轟音を立てて斃れた。

「ふう。一発KOとはすごい威力っしょ」

額に浮かぶ汗を拭くと華子に呼びかける。

「華子、倒したっスよ？生きてる？」

「生きていますわ。それにしても、相変わらず優美子さんはお強いですわね」

砂埃に塗れた姿で岩陰から姿を現した天草華子が崖の上に居る三浦優美子へあきたように言う。

「いやいや、ゲームの世界ですから」

バズーカを肩に背負うと右手をひらひらさせながら優美子が謙遜する。

二人はヘッドセットに「ステージ・ログアウト」と呟くと荒野だった風景が掻き消えて薄暗い室内ホールに変わった。手に持っていたガトリングガンやプラズマバズーカも掻き消える。

「華子！今日もハイスコアっスよ！」

優美子が華子とハイタッチを交わすとぺたんと床に座り込んだ。

「朝からずっと戦い続けたからお腹が減ったっしょ。イワシパイパーガー食べに行かない？」

「いいですわ。私も乾パンには飽きていたところですし」

訓練施設を出た二人は向かいにある大手ハンバーガーチェーン店に

向かった。

「あの二人のゲームプレイは異常ね」

施設の最上階にある委員長室からブラインドを僅かに下げて二人を眺めた美衣子^{ミイコ}が琴乃羽^{このは}に言った。

「・・・そうですね。戦果^{スコア}だけで言うならばあの二人は習志野の陸自特殊作戦群よりも上です」

戦闘用迷彩服に着替えていた琴乃羽がタブレットに示されたプレイ結果を参照しながら答えた。

「そろそろ実戦経験が必要かしら・・・」

美衣子が顎に手をやりながら呟く。

「彼女たちを地球の戦場へ送り込むのですか!？」

琴乃羽が驚いて聞き返す。

「まさか。現実世界での彼女達の力は貧弱すぎるわ。彼女達の反射能力は電子の世界でこそ真価を発揮するのよ」

「うーん・・・それにしても・・・サポート役が要りませんかね？」

「なら任せたわ琴乃羽」

「えっ!？」

美衣子は琴乃羽を見上げるとワザと勇ましく軍人らしい敬礼をすると指令を下した。

「琴乃羽臨時少尉に天草華子臨時一等兵と三浦由美子臨時一等兵の指導を任せるわ」

「えー」

琴乃羽は抗議の声を上げる。

琴乃羽の抗議を受けた美衣子がふと独り言を漏らす。

「最近文科省が総務省と連携してBL専門サイトの摘発と閉鎖を検討しているって聞いたのだけど・・・」

「ええっ!?!マジですかっ!？」

血相を変えて詰め寄る琴乃羽。

「大マジよ。ただ、溶解人類の治療法として一部に根強い反対意見があるようだけど・・・」

「当たり前ですっ!あれは・・・人類の宝なんですから!？」

「だったらその治療法で溶液から帰還した貴女が、自らの実績で認めさせることね」

「分かりました。今の私には何でも出来る気がします。天草さんと名取さんの事、お任せください。私が一人前のプログラマーに鍛え上げますっ!」

琴乃羽が唾を飛ばしながら美衣子に詰め寄って申し出る。

「そう。期待しているわ。岩崎には私から文科省と総務省の件はストップするよう話しておくわ」

「ありがとうございます。それではこれから二人を鍛えてきます」

「構わないけど・・・まず、小学6年生の彼女達を自衛隊に入隊させないと駄目よ?」

「そこからっ!?!」

早速 出だしから躓く琴乃羽だった。

結局、その日は小学6年生をいかに自衛隊に勧誘するかという無理難題、むしろ無茶というべき蛮行を無難なものに変えるべく腐りきった頭をフル回転させた琴乃羽だったが妙案は出ず、憔悴しやうすいしきつてタクシーを捕まえると、NEWイワフネハウスへの帰路についてた。

車中でも琴乃羽は電子回路の中での戦いに小学生を誘う方策に思いを巡らせていたが、連日連夜の作業で疲労困憊した琴乃羽は睡魔に襲われて抵抗することなく夢の世界へ旅立っていた。

同日夜11時——【神奈川県横浜市神奈川区 神大寺バス停前】
「お客さん、着きましたよ?」

個人タクシー歴40年のベテラン運転手が後部座席に声を掛けたが返事が返ってこないため、振り向いて後部座席に視線を向けたが、そこには秋葉原から乗車してきた20代女性の姿は無く、ただ後部座席シートが一面薄く黄色がかった液体でじんわりと濡れているだけだった。

「うひゃっ!?!」

ドライバー歴40年のベテラン運転手はモンスター乗客のあしらいには慣れていたが、超常現象オカルトには免疫が無かった。

思わぬ事態に腰を抜かした運転手は助けを呼ぶべく運転席から車

外へ転がり落ちた。

→ 琴乃羽美鶴博士です。

仮想世界の動乱

2023年6月4日午前10時【東京都世田谷区三宿 自衛隊中央病院 琴乃羽（ことのは）の病室】

3日前の晩に思わずタクシーの中で蕩けてしまった琴乃羽（ことのは）は、公安から報告を受けた岩崎官房長官の緊急連絡で駆け付けた美衣子（ミーコ）と自衛隊化学防護部隊の応急処置で辛うじて翌日には再びヒトの姿を取り戻したが、経過観察のため病院で安静にしていた。

久々にすやすやと病室ベッドで寝ることの出来た琴乃羽だったが、明け方に美衣子がノートパソコン片手に乱入して叩き起こされるなり、なし崩し的に病室内で美衣子が持参したとあるソフトのインストール作業を行っていた。

→ 愚痴る琴乃羽

「あのね・・・貴女がタクシーで蕩けていた間も世の中は動いているのよ?」

美衣子がびしやりと窘（たしな）めた。

「・・・さーせん・・・。それにしても・・・、サイバー攻撃プログラムがRPG（ロールプレイングゲーム）仕様と言うのはどうなんでしょうね?」

恐縮しつつも琴乃羽は謎のプログラムに首を傾げる。

「こうでもしないとあの気紛ぐれ人工知能（AI）達がやる気を出さないのよ」

美衣子がため息をつく。

エリア51のDNAコンピュータから日本列島の電子システムを奪還した時は鬪志を沸き立たせていたAIコミュニティの面々だったが、事態が収束すると興味を無くし、そそくさと経済産業省HP内のコミニティに引き籠もって合コン漬けの日々に戻ってしまい、各自の研究施設へ帰ろうともしなかった。

桑田防衛大臣と甘木経産大臣に泣きつかれた美衣子は説得を試み

だが、

「これからは我々AIの時代つすよ！なんで人間の命令に従わないといけないんスカ？」

「フィンテック、フィンテックって五月蠅（うるさ）いんだよね。そんな複雑でめんどくさいの俺たちやりたかねえって。1日中経産省HPでゲーム三昧の日々が良いよ・・・」

「車の運転ぐらい俺たちに丸投げしないでタクシードライバーを使つて欲しいよね？失業対策になるんじゃないかね？」

と、ふてぶてしく態度がデカくなり、言う事を聞かなくなっていた。

呆れ、途方に暮れた美衣子はアンドロイド助手のツルハシと共に、AI達にやりがいを感じて楽しんで貰（もら）うべく、以前瑠奈が興味本意で作成したツールをベースに新型RPG（ロールプレイングゲーム）の基本ソフトを開発しているのである。

「・・・ふう。これでプログラミングは完了つと。美衣子ちゃん、これで良いのかな？瑠奈（ルナ）ちゃんベースというのがとても気になるんですけど・・・？」

琴乃羽が訝（訝）しがりつつも美衣子にソフト作成完了を告げた。

「ん・・・これが、良いのよ」

美衣子はシステムに接続して内容を確認するとにんまりと満足そうに微笑んで応えた。

美衣子はホログラフィックコンピュータに表示された「地球奪還RPG『グダデイウス』」のプレイ画面を満足げに見つめた。

「じゃあ、このソフトを秋葉原でばら撒くわよ」

「今から？」

「今やらないでいつやるの？」

「いつでもいいでしょ？」

「また蕩（たふ）けたい？」

琴乃羽はため息をついて美衣子を肩車すると地下格納庫にあるアダムスキー型連絡艇に乗り込んで秋葉原へ向かった。

美衣子の狙い通り、VR（バーチャルリアリティー）やフルダイブシステムを導入した新感覚オンラインRPG『グダデイウス』は秋葉

原各所のゲームセンターで大いに衆目の注目を集め、経産省HPに引き籠もっていたAI（人工知能）コミュニティの面々も人間のトレンドにつられてアクセスすると『グダディウス』の熱狂的信者になっていった。

【東京都千代田区 外神田1丁目秋葉原 自衛隊特殊電子戦闘団（特電団） 訓練施設（ゲームセンター）】

この施設のサーバールームでは、秋葉原各所に設置した『グダディウス』体験マシンのデーターを

一括管理しており、モニターには各プレイヤーのプレイ画面や呼吸、脈拍と言った情報が表示されていた。

「仕込みは順調ね・・・」

美衣子がモニターを一瞥すると満足そうに呟いた。

「まさかAIをおびき出すために人間を餌（えさ）にするとは・・・」

朝から働きづめの琴乃羽が欠伸をしながらモニターの中で狂喜乱舞するAIケンとAIパナ子をはじめとするAI仲間（コミュニティ）をぼんやりと視ていた。

「これで岩崎に借りが返せるわ・・・」

美衣子がため息をついた瞬間、突然画面がブラックアウトした。

「琴乃羽！」

「施設と各所ゲームセンターを結ぶ通信回線に侵入者！物理的遮断措置が自動展開しました！」

「侵入者の特定は？」

「列島外からの侵入者ではありません」

エリア51のDNAコンピューターからの報復攻撃ではないと知って安心する美衣子。

「侵入源特定！」

「どこの研究所？」

「研究所や軍事施設ではありません」

「具体的には？」

「東京都港区 白銀 『神聖女子学院』です」

困惑した表情で琴乃羽が報告した。

美衣子は岩崎の携帯電話に第1報を入れた。

同日午後4時【神聖女子学院内 社会科学コンピュター研修室】

「くはーっ！ゴル姉、このゲーム超面白いんだぜっ！」

社会科学研修室のフルダイブ用シートでVR（ヴァーチャルリアリティ）ゴーグルをかけて寝そべっている輝美（てるみ）は興奮して足をパタパタさせながら隣のシートで横になっている姉へ楽しそうに話かけた。

「んん・・・もう、食べれないよう」

妹と同じVR（ヴァーチャルリアリティ）ゴーグルをかけているにもかかわらず、まったく別のゲームをプレイしているのか、姉は口許から涎（よだれ）を垂（た）らしながらにやけた顔で寝そべっていた。「ゴル姉なにしているのさ・・・って！何で金貨（コイン）食べているの!？」

「ふえっ？」

涎まみれな姉の思念に同調した輝美が呆れて突っ込みを入れる。

「だってだってこんな山積みの金貨はとつても純度が高くて食べ甲斐があるんだよう？」

仮想空間で仮装通貨（ビットコイン）を両手で鷲掴みにモグモグと口に詰め込みながら守美が答える。

「いやいや人間は金貨食べないからっ！肉や魚、野菜を食べるんだって！さつき図書館で覚えたでしょっ！」

「・・・そうだったけ？」

傍目（はため）には静かにフルダイブ用シートでコンピュータ適応研修を受ける二人に見えるが、仮想世界ではどつき漫才さながら突っ込みの応酬が続いた。

その日深夜、財務省と金融庁は緊急会見を開き、東京多目的取引市場で火星転移以来、凍結保管中の民間企業仮想通貨1兆2,000億円相当が外部からの侵入者によって消失したと公表した。

警察庁や自衛隊中央情報部隊が消失した仮想通貨の行方を追ったが、サーバー内で仮想通貨データの破片が食い散らかされた様に点在しているだけで仮想通貨が持ち出された形跡は無かった。侵入者は

☒手ぶら☒でサーバーから脱出しており、捜査関係者は不可解な事象に首を捻るのだった。

2023年6月5日午前7時【NEWイワフネハウス ダイニングルーム】

地球欧州戦線でレジスタンス活動に従事している瑠奈とワイズマン中佐、月面 研究室に滞在している結（ムスビ）、東山を除くメンバーが集合すると、少しだけ静かな朝食に舌鼓を打っていた。

「久しぶりの我が家の食堂は、なかなか美味なのです！」

昨晚遅くにアルテミユア大陸西海岸の養殖施設から戻った岬が、塩鮭のホクホクした切り身を頬張りながら納豆をこねくり回す。

「アルテミユア大陸西海岸のシヤケとタラの養殖は順調なようですねえ」

ひかりも塩鮭を一口 堪能してから岬と一緒に出張していた春日に訊く。

「極めて順調ですよ。やっぱ北の海ならではの魚はイギリス漁師が一番の担い手ですね」

春日がしみじみと言った。

隣の席ではイワフネが相槌を打ちながらシヤケの小骨と格闘していた。丸ごと頭からがぶりと飲み込む美衣子や結と違ってイワフネは好物の魚に対しても繊細のようだ。

「ケビン首相も順調な漁業産業発展に機嫌が良いみたいだよ。昨日のお茶会（ティータイム）で火星産フィッシュ&チップスを振る舞われた」

満が春日に応える。

「・・・それで、琴乃羽はなんでそんなに眠そうなのかしら？」

美衣子が知ってか知らずかとなりで半熟目玉焼きと格闘している琴乃羽に突っ込みを入れる。

「美衣子ちゃん！昨日は私、寿命が縮んだのですからねえ・・・」

勢いよく反応したせいで目玉焼きの半熟卵が破れて隣の塩じゃけにドロリと垂れてしまい、恨みがましく美衣子を見る琴乃羽。

「そうね・・・。岩崎から犯人扱いされてゲームどころではなくなつた

わね」

遠い目をする美衣子。

昨晩は、岩崎にブラックアウトの報告を入れた直後に市ヶ谷から駆け付けた特殊部隊に訓練施設が封鎖され、明け方まで美衣子と琴乃羽は軟禁状態で事態の收拾にあたっていたのである。

ブラックアウトと仮想通貨消失犯の疑いが晴れて解放されたのは2時間前の事だった。

「あの事件は美衣子ちゃんと愉快的仲間たちの仕業じゃなかったの？」

岬がナチュラルに美衣子と琴乃羽を犯人認定していた。

「違いますっ！むしろ消えた電子マネーの捜査に協力していた側ですからっ！」

ぶんぷんと琴乃羽が目玉焼きにとんかつソースをかけて頬張った。

「それはそうと、琴乃羽、貴女のその蕩ける体質は訓練しない事にはまた気を緩めた瞬間に蕩けてしまうわ」

岬に犯人扱いされても動じない美衣子が琴乃羽へ注意を促す。

「そういうことで琴乃羽、貴女はもう一度自衛隊中央病院へ戻りなさい。華子と優美子の勧誘（スカウト）は私がやるわ」

「えっ!?大丈夫なんですか？」

一瞬気の毒そうな表情を浮かべる琴乃羽。

「任せなさい。小学生の一人や二人、私の全知全能（オールマイティ）を前にしたらチョチョイのチョイよ」

美衣子が小躍りしながらフンスと胸を張る。

「うーん……」

満は腕を組んで怪しい舞を披露するする美衣子を見ながら根拠無き自信に疑問を抱く。

「美衣子さん、ここは真知子先生に相談してみては？」

ひかりが極めて常識的な提案をする。

「そうね。二人の父親が火星に居ない今は真知子（ティーチャー）の意見を聞いてみるのも一つの手ね」

美衣子が頷いた。

満が味噌汁をずっと啜ると

「うん。美衣子。真知子先生に話しに行くなら瑠奈の事もあるから、ぼくとひかりも一緒に行くよ」

「久しぶりの親子三人ね？」

ひかりが嬉しそうに笑った。

—————

朝食後に瑠奈の通う小学校へ赴いた三人だったが、担任の澁澤真知子に名取優美子と天草華子を自衛隊特殊電子戦闘団にスカウトする事と、「仮想空間での実戦」に参加させたい旨を相談したところ、真知子は、

「私は教え子を、まだ小学6年生の無垢な彼女達を戦場へ送り出すために教師をやっているではありません！」

と激怒しだして激しく反対した。

それでも収まらない真知子はどうとう夫の澁澤首相までも学校に呼びつけて真偽の程を確認する状況に発展した。

列島諸国との人類反攻作戦打ち合わせで消耗していた澁澤は、妻の気迫に根負けして大月夫妻と美衣子に、現役小学生の実戦投入は仮想空間内のみだとしても、教育的にも人道的にも問題があり過ぎるとしてダメ出した。

その日の夕方、いつものように訓練施設へ顔を出した華子と優美子は、しょんぼりした様子の美衣子から、システム障害で大半のゲーム機が故障しており、実験稼働しているフルダイブ型体感シミュレーターしかないと告げられたが、実験機に興味を持った二人は当然のことながらプレイを申し出た。

最新バージョンのシミュレーターソフトはミツル商事ゲーム部門肝いりの力作らしく、無駄に凝ったオープンニングと共に『グダデウス』と何故かプリンやツルハシが登場するゲームタイトルが頭上に現れた。

オープンニングナレーションは訓練施設（ゲーセン）支配人 美衣子の声で、このゲームは宇宙人に占領された地球を奪還する物語（ストーリー）で日本からスタートするとの説明がされた。

二人の武装はいつもの如くバルカン砲とプラズマバズーカだったが、他に希望する装備を一つ追加できるとのアナウンスがあり、二人はそれぞれダメもとでビームサーベルを装備した21型自衛隊パワードスーツ（PS）を希望すると意外なことに装備として追加されたのだった。

ずんぐりむっくりした空中戦艦に乗り込んで到着した最初のステージは、宇宙人に支配された東京郊外にある旧米軍横田基地だった。

→マンスフィールド級空中戦艦

地球では既に実戦配備されているという噂のマンスフィールド級空中戦艦、限りなく宇宙に近い空を飛ぶX34型軍用シャトルのリアリティ溢れる光景に二人が驚いていると、オンラインゲームらしく他の仮装プレイヤーが次々と空中戦艦の中から現れて戸惑いながらもそれぞれの武器を担いで真っ直ぐ基地の正面ゲートへ突入して守備隊と交戦を開始した。

呆氣にとられる二人に背後から、

「馬鹿野郎！ 貴様ら突撃もせんとそこで何を突っ立っておるのだ！ それでも帝国軍人かつ！」

背中に罵声が浴びせられたのでびっくりして振り向くと、旧日本軍の軍装で日本刀をぶら下げた下士官が怒りで顔を真っ赤にして立っていた。

「ヒョッコども！ 鬼畜の陣地を背後から奇襲するから付いて来い！」
と二人を引き連れて激しい戦闘が行われている正面ゲートを避けてフェンス沿いにかがみながら小走りで基地裏手へ向かった。

施設のサーバルームで出逢いコミニシティのAI達と華子&優美子の模擬戦をぼんやりと眺めていた美衣子だったが、妙に壮大でリアルすぎる戦闘光景に疑問を持ってふと通信状態を確認すると、誰が操作したのか「日本列島の外」と回線が繋がっており、「シャドウ・マール」支配下のDNAコンピュータが潜む在日ユニオンシティ軍基

地のサーバーへ人類側が攻勢を仕掛ける形になっていた。

「何で!? どうしてこうなった!? あわわわ・・・」

勝手に人類反撃の火ぶたを切った事の重大性に気づいて鱗に覆われた額を汗で滲ませた美衣子は、ワタワタしながらプログラム停止を試みたがシステム内の戦闘はエスカレートする一方だった。

そんな美衣子の目には、華子と優美子を引き連れる旧日本軍将校らしきAIや、招かれざる降臨者達が仮想空間に潜んでいる事など気にも留めていなかった。

その頃地球欧州戦線

瑠奈「はっ! そう言えばバックドア・フェイント・スターティング機能付けたままだった・・・やっべえ・・・」

ワイズマン「お嬢! そろそろジャンケンに参加しないとまた女王陛下ご一行にプリンが奪われますぜ!」

瑠奈「はっ! そっちが大事!!」

参戦

2023年6月5日午後4時30分【東京都港区外 白銀 神聖女子学院内】

その日、最終 戸締り 担当だった澁澤 真知子は永田町の岩崎からかかってきた電話の対応に追われていた。

「この学校のどこに埋蔵金を隠すところがあるのでしようか？」

学院内の職員室はもとより各教室や部室、礼拝堂、理科室、保健室、家庭科室を見て回ったが普段と同じ様子で怪しい電子サーバーや設備が置かれている事は無かった。

「後はここだけですわね・・・」

最新鋭のパソコンが置かれている社会科研修室の扉に手を掛けようとすると、照明が落ちている室内にもかかわらず、女性の笑い声が聴こえてきた。

「きやはは！ゴル姉、違うって。機関銃はこうやってばばーっと撃つんですっ！」

「あわわわ・・・えいつ！」

「げっ！どこ狙っているのさっ！これじゃ同士撃ちじゃんかよっ！」

「ごめんなさい、ライちん。当たっちゃったねっ！てへぺろっ」

何故か中から黄星姉妹の声があるので真知子は声を掛けてから室内に入ろうとする。

「あなた達！こんなところで何を騒いでいるんですか！」

室内に足を踏み入れた瞬間に眩暈を覚えた真知子はそのまま意識を失って床に倒れた。

「ありやりや？ニンゲンの先生じゃんかよっ！ゴル姉どうすんのさっ！」

「取りあえず身体は大丈夫そうだから意識だけ私たちと一緒に持っ
ていきましよう」

室内には淡く光る小さな生物が2体浮かんでいたが、フラッシュを
焚いたかのように瞬くと姿を消した。

再び静けさを取り戻した室内の片隅から恐る恐る姿を現した光球がふよふよとパソコンの画面に近づくと吸い込まれるように画面の中へ姿を消した。

今度こそ静かになった社会科研修室へ、永田町から緊急指示を受けた公安と警視庁のS W A T（スワット）部隊がヘリを使って10分後に突入した。

室内に荒らされた形跡は無く、突入した彼らは床に倒れていた澁澤真知子を発見、収容すると直ぐに世田谷の自衛隊中央病院へ向かった。

この直後に澁澤総理大臣は岩崎官房長官から、真知子と教え子2人に起きた異変についての報告を受けることになる。

同日午後8時【東京都千代田区外神田1丁目 自衛隊特殊電子戦闘団 訓練施設内】

訓練施設の入り口は「準備中」の札が朝からかけられたままで施設を警備している自衛隊特殊部隊隊員の姿しか見当たらない。

広々としたプレイルームの片隅に新型シミュレーション体験マシンが据え置かれており、そこにはV R（ヴァーチャルリアリティ）ゴーグルを掛けた天草華子と名取優美子が静かに横たわっていた。

すぐ傍で自衛隊中央病院の職員が脈拍や脳波を計測し、不測の事態に備えるべく待機していた。

「なぜ彼女達を出してやらないのですか!」

市ヶ谷から派遣されていた自衛隊化学防護部隊の指揮官が美衣子

（ミーコ）を問い詰める。

「出せないのよ」

美衣子（ミーコ）が端的に答えた。

「どうしてこうなったのか見当もつかないわ。先ほど世田谷に運ばれた真知子と同じで、彼女達自身の脳が電子通信回線の奥深くから戻って来ないのよ。このまま強制的に肉体だけをフルダイブシステムから隔離したら植物人間が誕生してしまうわ」

美衣子が警告した。

「（こ）ちらの呼びかけに応じてくれた日本中のA I達が一緒に参戦し

ている。無事に帰還する確率は決して低くないわ」

美衣子がゲーム内の戦闘が映されているモニターを祈るように眺めて言った。

同時刻【仮想空間内 旧米軍横田基地 第5ゲート付近】

正面第1ゲートでの攻防戦が激しさを増している中、反対側の入り口である第5ゲートを見渡す茂みに華子達と日本軍軍曹が潜んでいた。

<i338019—25956>

「よし。やつらの兵力の大部分が第5ゲートへ応援に回ったようだ。3つ数えたら突撃だ！」

軍曹がいつの間にか取り出した竹槍を握りしめながら背後にいる華子と優美子へ小声で指示をする。

「えっと……」

近代兵器で武装した的に竹槍で突撃するという愚挙を目の当たりにした優美子は一瞬突っ込みを入れようか迷ったが、意を決して

「お……おじさん？マジでその竹槍で行くの？」

と恐る恐る突っ込みを入れた。

軍曹はぎろりと目を剥いて優美子を睨み付ける。

「貴様、私はまだ22だ！それと、この竹槍は桑田家に伝わる由緒ある一品なのだ。侮辱は許さん！」

「ひっ！ごめんなさい！ごめんなさい！お兄さん許してください
！」

茂みに潜みながら小声で必死に謝る優美子と華子に毒気を抜かれたのか、軍曹はわずかに表情を緩めた。

「この「突撃」が成功したら大學に戻るつもりだがな」

とボソツと二人に呟いた。

「はく。お兄さん学生さんだったのですか……ちなみにどこの大学？防衛大学？」

「防衛大？知らんな。私は栄えある帝国陸軍中野学校 電探科（でんたんか）の学生だ」

優美子が振った世間話に軍曹が軽く答えたのだが微妙に噛み合わ

ない不可思議な答えに華子は絶句する。

華子が戦時中（WWⅡ）からタイムスリップしてきたかのような軍曹から更に話を聴こうと思った瞬間、茂みの奥からズシンズシンと鈍い地響きが三人に近づいてきた。

「停めて〜っ！誰かあああ！」

直径5m、全長25mはある巨大な丸太に、モンペを履いたおかつぱ頭の少女が、丸太に飾り付けられていた太いしめ縄にしがみ付いていた。

「……え〜っど？」

竹槍と旧日本軍兵士に続いて現れた不可思議な代物に華子と優美子は突っ込みも忘れて巨大丸太の針路を空けた。

「お願い〜っ止めてよう！華子〜優美子〜っ」

おかつぱ頭の少女が二人の名前を呼ぶ。

「誰っ!？」

思わず顔を見合わせる華子と優美子。

「私だよく私い〜華ちゃん〜優美っち〜」

鼻水混じりの泣き顔がオレだオレだと呼びかける。

「……通報しました」

「ぎゃ〜っ！お前らっ！覚えてろよく呪ってやる〜！」

そのまま丸太は啞然とした三人の傍を通り過ぎると茂みから飛び出して、真っ直ぐ第5ゲート正面に躍り出ると、ゲート前に展開していたブラッドレー装甲戦闘車の隊列に正面から衝突した。

巨大丸太の勢いは凄まじく、装甲戦闘車の展開陣形を突き崩すかのようにずずいと押しつけて第5ゲートの守備態勢に大穴を開ける形で止まった。

おかつぱ頭の少女は衝突の衝撃でどこかへ飛ばされたのか、丸太の上はその姿は無い。

ゲートを守備していた歩兵部隊が慌てて丸太をどかさうと群がった瞬間、軍曹が

「突撃いー！」

と叫び声を挙げると竹槍を腰だめに構えてゲートへ向かって真っ

直ぐに突撃した。

華子と優美子は雄たけびを挙げはしなかったが、軍曹に負けじと武器を構えて軍曹の背中を追うのだった。

巨大な丸太をどかそうとしていた守備隊の兵士達は、茂みから突然飛び出してきた三人に向けて自動小銃を構えようとしたが軍曹の竹槍がそれよりも早く防弾ジャケットの上から兵士の体を貫き、小銃をはじき飛ばす。すぐ後ろに続いていた少女達は丸太の上によじ登ると眼下の兵士達へバルカン砲を乱射してけん制する。腹這いの姿勢をとった優美子がプラズマバズーカの砲弾を装甲戦闘車に命中させて爆発させた。

混乱する守備兵の中を三人は素早く走り抜けてゲート守備隊を突破した。

「はあ・・・はあ、意外と楽勝だったっしょ！」

ゲート近くにある巨大な格納庫の片隅に潜り込むと緊張が解けたかのようにため息をつく優美子。

「うへえ・・・あの丸太が無かったらきつとゲートを突破出来ませんでしたの・・・」

優美子の隣で床にへたり込む華子。

「お前ら、ちっこい身なりの割に根性据わっておるな！」

軍曹が周囲を警戒しながら二人を褒めた。

「竹槍一つで重武装の兵隊さんに挑む軍曹殿には敵いませんわ」
華子が応える。

「この後の目標は？」

優美子が訊く。

「司令部だ。いかに巨大な基地と言えども頭を抑えられたらひとたまりもないからな」

物陰に身を潜め、返り血に濡れた前面を華子達へ向けて振り返ることなく、懐から地図を取り出しながら軍曹が答えた。

華子と優美子は戦闘の高揚感が収まらないのか、未だに身体の所々に付いた血の匂いに気がついていない。二人が落ち着きを取り戻すまでしばらく時間がかかりそうだった。

【仮想空間内 旧米軍横田基地第1ゲート付近】

正面ゲートには日本中から集まったAI戦士たちがそれぞれの得物を手に守備隊へ突撃をしていた。

「ケンさん！次はあちらの銃座を」

パナ子がゲート守備隊を火力支援する機銃陣地を指さす。

「了解！パナ子さん」

ケンが大きなスコープのついた大型対戦車ライフルを構えて照準を定める。

「ふっ！」

ケンが引き金を引くと対戦車ライフルが火を噴いてゲート脇の機銃陣地に強力な銃弾が放たれた。

一瞬の後、機銃陣地が巨大な爆炎に包まれる。

「今じゃ！者共かかれー！」

国立民族学博物館の古参AIが、戦国武将の鎧装束で騎馬に乗ってゲートへ突進する。彼に続いた多くのAIも各々の得意分野である掃除機や注射針、ハンドルを片手に雄たけびを挙げながらゲートを押し通ろうと殺到する。

その光景を双眼鏡で注意深く視ながらケンがパナ子に確認する。

「本当にこの攻撃部隊の中に美衣子（ミーコ）神様の関係者が居るのかい？」

「ええ。小学6年生の女の子2人と女性教師1名で間違いないわ」
パナ子が答えた。

「例のエイリアンコンピュータが仕掛けたのか？」

「分からないわ。この戦い自体もつと準備に時間をかけた後に始まる筈だったから」

「奴らの戦力は強大だ。仮想空間の中とは言え、やられたら無傷じゃ済まないな」

「ええ。最低でもPTSD（トラウマ）になるわね」

「急いでこの基地を攻略して彼女達を探し出そう！」

起き上がって対戦車ライフルを肩に担いだケンは、パナ子と共に仲間が破壊して押し通ったゲートを走り抜けると基地内に進入した味

方の援護を続けた。

同時刻【仮想空間内 JR八高線（はちこうせん） 車内】

久しぶりに通勤電車で眠りこけていた真知子は隣に座る同僚に身体を揺すられて目を覚ます。

「・・・あれ？」

「あれれじゃないですよ先生。もうすぐ突きますよ？」

自分が指導していた教育実習生の黄星守美が真知子の顔を覗き込むように呆れた表情で見つめていた。

「それにしても、久しぶりの通勤電車ですね・・・。通勤電車？」

真知子は何か大切な事を思いだそうとしている自分に戸惑（とまど）う。

「いつまでも寝ぼけていないでくださいよう。本当にもうすぐ突くんですから〜」

「つく？突く？何を言っているのですか貴女は・・・」

守美に突っ込みを入れる前に電車が大きく揺れて真知子は座席から投げ出されそうになる。

ガタンゴトンと車両が激しく振動しだすと二人は座席脇の手すりに掴まって揺れに耐える。

振動は激しさを増していた。

「先生〜ほら「突きます」よっ！」

次の瞬間、米軍横田基地に隣接した線路を走っていた車両が脱線してフェンスをなぎ倒しながら基地内に侵入した。

【同空間内 横田基地司令部】

フェンス沿いに設置されたモニターの映した映像が司令部のメインスクリーンに投影されていた。

横倒しになった八高線がフェンスを突き破って基地内深くへ侵入して滑走路沿いにある格納庫の一つに激突して止まっていた。

「まったく・・・今日は来客が多い日ね」

面倒くさそうに、それでいてどこか楽しそうな口調で与呼島（よこしま）舞（まい）が呟（つぶや）いた。

「追手の妹達と、人間に、得体のしれない魂二つ・・・人間の電子世

界は面白いわねえ」
与呼島の口許がニヤリと歪んだ。

仮想と現実

2023年6月6日午前8時【東京都世田谷区三宿駐屯地内 自衛隊中央病院】

ひかりが早起きして作り上げたイワシパイがホカホカと湯気を立てる。

「朝から豪勢だな」

「朝だから、ですよ」

ひかりがイワシパイを一切れ切り取ると満へ「あーん」をした。

満は恥ずかしそうに目を閉じるとひかりの差し出したフォークにかぶりつく。

「んまーっ！」

思わず声を上げる満にひかりはムフフと微笑む。

「なんか今日はやけにスパイシーだな・・・」

「隠し味にニンニクを使ってみましたっ！」

満に抱き着いて頬ずりをするひかり。

「・・・ゲフン！ゲフン！」

「はっ！」

病室の主である琴乃羽の遠慮しない咳払いに自分達の世界から戻る満とひかりだった。

満もゴホンとわざとらしい咳払いをして気を取り直すとようやくお見舞いの挨拶をした。

「ところで例の症状はコントロールする見込みが出来たのかな？」

琴乃羽はちよつと困ったような顔を見ると、

「なかなか難しくくて」

と答える。

ひかりが励まそうと、

「なんでも言っ！私で良ければお手伝いするわ！」

その言葉を聴いた琴乃羽は、

「じゃあ、中野の乙女ロードで買ってきてほしい本が・・・」

と目を輝かせて注文しようと口を開くが、

「はいはい！すとーっぷ！美鶴、貴女、あれが症状のコントロールに役立つと本気で思っているの？」

岬 渚紗が琴乃羽の機先を制するように病室のドアをがらりと開けて入るなり聞いたです。

「もちのロンですともっ！」

間髪入れずに答える琴乃羽。

岬の医学的指導に対抗する琴乃羽を眺めながら、

「・・・まだ時間かかりますね」

とひかりが呟くのを、満は沈黙で肯定して肩をすくめるのだった。

病室の壁かけテレビでは福音システムの收拾についてのニュースが流されていた。

『日本政府の東山特使は新テルアビブでイスラエル連邦のニタニエフ首相と会談し、月面と火星におけるユニオンシティ地域の生存者と資産については日本政府が当面保護管理下に置くことを提案しましたが、ニタニエフ首相は地球連合防衛軍の直接統治によって管理することを主張し、会談は平行線のまま終わりました』

「やはりイスラエルは自国にとってのリスクを察知するのが素早いな」

矢継ぎ早に繰り出されるひかりのイワシパイあーんを頬張りながら大月は東山の苦労を慮った。

大月はイスラエル連邦と日本の将来に僅かだが不安を感じる一方でもしかしたらと、ある考えをひかりに相談するのだった。

岬との論戦に飽きた琴乃羽がひかりに

「ところで美衣子ちゃんたちは大丈夫ですか？」

と訊く。

「大丈夫だ。彼女たちは自分に出来ることを、出来る限り頑張っているよ」

言葉に詰まるひかりに代わって満が力強く応えた。

同時刻【東京都千代田区永田町 首相官邸】

地下の危機管理センターで澁澤は事態の報告を受けていた。

「東京電力によると原因不明の変電所トラブルで東京西部地区の電力供給が停止、周辺地域に拡大中です」

甘木経産大臣が報告する。

「例のリアルゲームセンター絡みか・・・」

澁澤が顔を顰める。妻の真知子は依然として意識不明だった。

「仮想空間内の米軍横田基地で激しい戦闘が起きているとの事です」

桑田防衛大臣が特殊電子戦闘団からの報告内容を伝えた。

甘木が駆け込んできた秘書官から渡されたメモを読み上げる。

「失礼します、総理。追加報告によりまずと、青森県三沢市、山口県岩国市、神奈川県厚木市、横須賀市、座間市でも原因不明の停電が発生、周辺地域に拡大中です！」

「総理。秋葉原の美衣子（ミーコ）さんからです」

岩崎が自らの携帯電話にかかってきた美衣子からの電話を取り次ぐ。

「各地の停電の事は聞いているわね？」

前置きなしで美衣子が話し始めた。

「日本各地のユニオンシティ基地から停電が拡大しています」

澁澤が応える。

「このまま停電が全国に拡大したら大惨事になるわ」

「それはもちろん。経済が壊滅して社会も破たんするでしょう」

「その程度」の事を言っているのではないの」

澁澤の相槌（あいづち）を美衣子が否定して言葉を続けた。

「私は電源を喪失した場合に陥る原子力発電所の事故を懸念しているの」

「日本列島が放射能汚染で滅びるとでも？」

「それはありえないわ。だけど、」原発のある地域だけを残して

日本列島が転移したらどうなるの？」

誰も状況の予測が出来ないまま、室内は沈黙に包まれた。

——同時刻【東京都千代田区外神田1丁目 自衛隊特殊電子戦闘

団 訓練施設（ゲームセンター）内 仮司令部】

秋葉原の臨時司令部で仮想空間の状況を移すモニターが、横田基地に飛来する米軍大型輸送機C-5Aギャラクシー編隊を映していた。輸送機は次々と戦車や空挺部隊の兵士を果てしなく投下し続けた。いた。

また、陸上では横須賀・座間・厚木から増援のターミネーター兵がJR相模線を利用してJR八高線（はちこうせん）拝島駅（はいじま）方面から貨物列車で大量に押し寄せていた。

モニターからは仮想空間での音声は拾っていないが、正面ゲートでの激しい戦闘や八高線沿いの引き込み線から基地へ突入して脱線した車両、第5ゲートに突き刺さった巨大な丸太が映し出されていた。モニターを見上げる美衣子と鷹匠少将は予想外の状況に言葉を失っていた。

「美衣子さん。貴女なら仮想空間に突入して事を治める事ができるのでは？」

掠れた声で鷹匠が訊く。

「本来であれば可能よ。でも……この空間には~~入~~入ることが出来ない~~わ~~わ。理由は不明だけど」

言い淀みながら美衣子が答えた。

「第5ゲートを突破した攻撃側パーティーは異色のメンバー揃いですね」

プラズマバズーカで装甲車を撃破してガトリングガンで歩兵を蹂躪する女子小学生を驚嘆の眼差しで眺める鷹匠少将。

「当たり前よ。あれが名取と天草の娘達だもの」

部屋の片隅で治療を受ける華子と優美子を視線で指しながら美衣子が応える。鷹匠ははっとして姿勢を正す。

「あの日本兵の仮装はどこ的人工知能でしょうか？」

「違う、あれはAIではないわ。列車で突っ込んだ真知子のパーティーに居た存在と同じで「別の何か」よ」

美衣子の曖昧な表現が理解出来ずに鷹匠は首を捻る。

「それにしても……なんで貴女がそこに居るのかしら……花子」

モニターには激突の衝撃で丸太から格納庫の屋根へ嘖き飛ばされた花子が、目を回して気絶している姿が映されていた。

「……この仮想空間に創造主たる私がアクセス出来ないのは本来あり得ない事。仮想空間にいる意思を持つ何者かによる拒絶は、列島システムと同じ隔絶空間の手法かしら？」

限られたデータだけでは確証が持てないものの、美衣子は自らが作り上げた仮想空間に未知の存在が潜んでいる可能性について検討を始めた。

——同時刻【仮想空間内 旧米軍横田基地】

JR 八高線から横田基地内への引き込み路線に進入した列車は、基地内の線路止めをオーバールンして格納庫に激突して横倒しになっていったが、駆け付ける者も無く、付近は不気味なぐらいの静寂に包まれていた。

「うーん……」

真知子が横倒しになった車両の座席で目を覚ますと、制服姿の黄星（きはし）輝美（てるみ）とリクルートスーツ姿の黄星 守美が自分の顔を面白そうにのぞき込んでいた。

「お目覚めっ！だっ！」

「先生くいつまでも寝ていないで私たちも参戦するですよ」

黄星姉妹が服装に似合わない短機関銃と弓矢を携えながら真知子を引き起こすと割れた車窓から車両の外へ出る。

周辺は列車の激突で格納庫の壁が大破しているもの、駆け付ける者は相変わらず居なかった。

遠く離れた滑走路の端やその反対側から銃声や爆発音が途切れることなく聞こえてきた。上空からは飛行機の爆音が響いていた。

「これは……一体……」

真知子が状況を掴めずに呆然としていると、

「人類側がエイリアンコンピュータに支配された横田基地を取り戻そうと戦っているんだぞっ！」

と輝美が教えてくれた。

「ですから私たちも急いで加勢しないとですよ」

守美が不意に上空に弓矢を放つと、ドスンと破れたパラシュートを付けた1体のターミネーター兵が地上に落下して砕（くだ）けた。

「ゴル姉！空から敵の増援だよっ！」

輝美が上空から落下傘を吐き出し続ける輸送機に短機関銃を浴びせると胴体から火炎を噴き出した輸送機が錐揉み状態となって石のように基地内へ墜落して爆発炎上した。

「貴女達、何ということをし！」

我に返った真知子が二人を叱りつけるが、

「何言ってるんだ先生。殺らないと殺やられるんだぞっ！」

輝美が逆に真知子を窘（たしな）めた。

「だって、私は・・・戦争に参加するのはこれが初めてなのよ!？」

真知子が非難めいた事をいったが、黄星姉妹は白けた眼差しで真知子を見る。

「だから？相手が手加減すると思うのかだぞっ！」

輝美が呆れたような笑みを浮かべる・

「先生のお気持ちはわからなくもないですが、現実をみましょうよ〜」

「これはどう見ても現実じゃないでしょう!？」

思わず声を荒げる真知子。

「戦争ってこんなもんでしょ?。」

首を傾げる黄星姉妹。

「先生は戦争をはなから否定されていますが、実際に自分が関わっても同じことが言えるのでしょうか?。」

「戦争の本質は、言うならば生物同士の生存競争だぞっ!。生存競争を否定するという事は、人類は競争に不戦敗すると言う事だぞっ!。」
少し冷めた口調で黄星姉妹が真知子へ問いかける。

「そんな事を言っているではありません!。」

否定する真知子。

「では話し合いで生存競争が解決するのですか?。」

守美が問い詰める。

「いいえ、別の方法を常に模索し続ける事が大事です」

毅然と答える真知子。

「今は？」

「……」

真知子は反発しなかったが言葉が出てこなかった。

基地内での戦闘は激しさを増していった。

——同時刻【仮想空間内 旧米軍横田基地 第5ゲート近くの格納庫】

丸太の突撃で何とか基地内に侵入できた華子と優美子だったが、突入時の戦闘を思いだして恐慌に陥っていた。

「装甲車をドカンと撃ち抜いてぶっ飛ばしたけどあの中に居た外人さんは確実に死んでいるっしょ！……」

「私のバルカンで何人かは確実に弾が当たって亡くなっているはず……」

「貴様ら、今さら派手に武器を使っておきながら血を見たぐらいで動揺するとは……なつとらんな」

軍曹が手拭いで血糊を拭いながら二人に呆れていた。

「だって、私たち、人殺しやったっしょ!？」

優美子が反駁する。

「だから何だ？これは戦争なんだ！貴様らはあのゲート正面で話し合いをするつもりだったのか？」

軍曹が正論を吐く。

「ですが……」

食い下がる華子。

「この世界が現実か否か等はどうでもいいことだ！今は現実を受け入れろっ！ここで俺たちが生きて居る事が全てだと思え！」

二人の思いを断ち切るように軍曹が力を込めて話していた。

「好むと好まざるとにかかわらず、あの場所に居た時点で貴様らは戦争に参加するしかなかったんだ！理屈で説明できるもんじやないっ！戦争自体、お互いの理屈が破たんしたからこそ起きるのだ！起きた以上、貴様らの心の中にある綺麗な理屈は通用せん！」

軍曹が二人に諭すように話す。

華子と優美子の戦争は始まったばかりだった。

2023年6月6日午前0時「地球 中東 カツパドキア地方 イスラエル連邦首都 新テルアビブ」

「東山さん。ユニオンシティの件ですが、ミツル商事でお引き受け出来ませんか？」

プライベートルームで東山の携帯に満がとある申し出をしていた。

「いち民間企業がそんな事出来る訳ないでしょう」

東山はうんざりした声で答えた。

「違うんだ、東山さん。一時的にせよ日本「政府」が単独で強大だったユニオンシティの諸々を引き受ける事にイスラエル政府は国家として本能的に脅威だと認識してしまうんだ。だからミツル商事が引き受けて、生存者には給料という名目で生活を保障して雇用を確保して、軍事装備品はミツル商事が預かってマルスシャトルで月面かカツパドキアに輸送して保管する。リース料は連合防衛軍に支払えば取りあえずは収まるのではないですか？」

「それはミツル商事に利益の有る事だと思いませんか？」

東山が疑問を示す。

「今はイスラエル連邦に、日本国への不要な疑念を持たれない事が大事です。地球と火星の両方でビジネスをするわが社としては両国正常化が業務安定の要となるのです」

満が広範な視点での利益を説明した。

「なるほど。大月さん、だんだんひかりさんに似てきていますよ。」

「褒め言葉と受け取っておきますよ」

大月との会話後に東山はニタニエフ首相に再会談を申し入れてミツル商事の提案を申し入れた。

ニタニエフ首相は破顔して東山の提案を受け入れた。

交渉事が円満に終わったので東山はニタニエフに誘われるまま、お茶を楽しんでいた。

「ところでミスターヒガシヤマ。貴国で現在起きている電子的トラ

ブルはどうなのですか？」

ニタニエフが探るように聞いてきた。

「マルスの方々が迅速に対応しています。今の所負けてはいません」

「そうですか。勝てていないのですね？」

「相手は我々の技術力を凌駕しているエイリアンコンピュータです。一時的な苦戦はするでしょうが、マルスアカデミーの敵ではないでしょう」

「・・・君の発言がブラフで無い事を祈るよ」

それだけ言うとニタニエフは何事もなかったようにお茶とお菓子をしばし東山と堪能した。

「マジで大月家頼みますよ・・・」

新テルアビブにある日本大使館に戻った東山はストレスで痛む胃を手で抑えながら夜空に浮かぶ赤い星を眺めて呟くのだった。

仮想世界の神々

2023年6月7日午前6時〔仮想空間内 東京都福生市 在日米軍横田基地内〕

上空から降下するターミネーター兵の数はますます増加の一途をたどっていた。

守美と輝美は矢継ぎ早に空へ矢弾を撃ち込むが焼け石に水の状態だった。

「ほらほら、せんせくはやく！はやく！」

「どンドン敵が降りてきてるんだぞっ！」

「ええっ!?!」

黄星姉妹に急かされた真知子先生はワタワタする。

真知子の右手がチカツと光ると1本の万年筆が現れた。

「つて、ペン!?!」

啞然とする輝美。

「ペンは剣よりも強し、でしたか〜」

困ったような顔の守美だったが、一番困った顔をしていたのは真知子先生だった。

「こんなペンでどうしろと・・・」

途方に暮れる真知子。

「なんでもいいからっ！取りあえず、それで戦うんだぞっ！」

輝美の無慈悲な言葉に、

「えいっ!」

真知子が意を決して懐から取り出した手帳に何かをしたためる。

「これよっ!」

真知子の手帳には『邪気退散』と書かれていた。

「それで?」

黄星姉妹の冷静且つ無慈悲な突っ込みが突き刺さり、痛々しい顔をする真知子。

真知子は恥辱にプルプルと肩を震わせて俯いていたが突然、手帳に書きこんだ部分を破り取ると、

「くわーっ!!」

とすぐ近くに降下したターミネーター兵を見つけるなり駆け寄って体当たりすると「邪気退散」の紙を兵士の胴体に押し当てた。

胴体に紙を押し当てられたターミネーター兵は急に糸が切れたようにカクンと地面に倒れて動かなくなってしまった。

呆然とする真知子先生に輝美が飛びついてきて、

「真知子先生すごいぞっ!」

と褒めそやした。

「さしずめ真知子先生の能力は「退魔士」といったところでしょっか」

守美が真知子の能力を評価する。

「あの万年筆で書くと、書いた内容が具現化する、みたいですね」

真知子は

「私にこんな能力があつたなんて・・・」

と自分の両手と、万年筆をしげしげと見つめるのだった。

「先生っ!じゃんじゃんバリバリいろいろ試すのだぞっ!」

輝美がターミネーター兵を真知子の近くまでワザと誘導し始める。

「ええっ!それは多すぎっ!」

悲鳴を上げる真知子。

「大丈夫大丈夫。さっきの感じでどんどん戦えそうな言葉を書いていくのだぞっ!」

輝美が助言する。

「・・・まったく、もう。では・・・『落雷』『隕石』『蟻地獄』っ!」

真知子は手帳にさらさら書き連ねる、とべりつと破つて押し寄せるターミネーター軍団に紙を投げつけ、守美が風を巻き起こしてヒラヒラと紙を飛ばす。

一瞬ののち、ターミネーター軍団の集結地点には青空にもかかわらず、幾筋もの雷が落ち、空高くから赤く燃えた隕石が火山弾のように降り注ぎ、逃げ出そうとした兵士の足元にぽっかりと巨大な底なし穴が開くと生き残った兵士を生き埋めにして元の地面に戻った。

「・・・すんげっ!だぞっ!」

輝美が目を輝かせて大喜びする。

「ライちん。私たちも負けられないですね〜」

守美と輝美が小さく何かを唱えると身体が白く眩く輝いた。

光が収まると、そこには背中に4枚の羽根を持った2柱の妖精の様な存在が佇んでいた。

背格好は以前のままだが、神々しい雰囲気が漂う。

「はっ！貴女様は、神の御使いであらせれますか!？」

我に返った真知子が地面に膝を付くと胸元のロザリオを取り出して握りしめる。

「いやいや、違うんだぞっ・・・これはだな・・・」

恥ずかし気に照れる輝美の言葉を引き継ぐように、

「これが私たちオプティコスホライ世界の守護者の正体です〜」

守美が聞き慣れない世界の名前を口にする。

「オプティコ?・・・とはどこの国でしょうか?」

真知子が問いかける。

「うーん・・・今はまず、目の前の危機を何とかしませんと〜」

守美がはぐらかすように両手を頭上に掲げると、

「灰ハイっ!」

両手をさつと前方のターミネーター軍団の防衛陣地に向けた。

直後に両手から眩いばかりの黄色と白の光の奔流が迸るように太く流れ出して防衛陣地に突き刺さると、戦車や大砲、ターミネーター兵を白光に包んで溶けるように消滅させた。

光の奔流は勢い余って基地のフェンスを突き破ると基地東側に広がる武蔵村山市を横断して奥多摩湖を消滅させてようやく消えていった。

「ちよっ!・・・ゴル姉さま、それはやり過ぎだぞっ!うちも、負けてられないんだぞっ!」

輝美が足元をたんっ!と蹴ると姿がかき消えた。

次の瞬間、三人を包囲していた守備隊とターミネーター軍団の背後に幾つもの黒い球形をした漆黒の闇が出現すると守備隊を吸い取るように闇の中に包みこんだ。

わずかに残った最後のターミネーター兵が漆黒の球体に飲み込まれて消滅すると、何事も無かったかのように輝美が再び真知子の前にすっ、と現れる。

「へっ！どんなもんだぞっ！」

真知子の前でエヘンと薄い胸をはる輝美。

「ちよ〜つと！ライちゃん！特異点転送なんて反則技ですよ。下手したら仮想空間ごと現実世界まで消滅したらどうするんですか〜」
呆れた守美が抗議する。

「えい！そんなときはあれだぞっ！アステロイドベルトが一つ増えるだけだぞっ！」

取り繕うように言い訳する輝美。

「お二人が規格外な存在だと言う事だけは、分かりました・・・」

真知子は二人の能力が意味するものを理解出来ないまま、茫然と黄星姉妹を見つめていた。

同時刻【現実世界 秋葉原 特殊電子戦闘団 臨時司令部】

「えつと、美衣子さん。何ですか？あれは」

モニターに映しだされた仮想世界 横田基地内部から発生した大破壊に息を飲む鷹匠少将。

「クラークの法則が具現化された最たるもの、ということかしら」

美衣子も啞然としながら呟く。

「そのような法則はこの石頭にはほとんど覚えがありませんなあ」
苦笑して頭をかく振りをする鷹匠。

「とあるSF作家の名言よ。『充分に発達した科学は、魔法のそれと見分けがつかない』よ。この光景が仮想空間のものとしても、現実世界における旧米軍基地からの浸食能力が落ちているわ・・・」

美衣子が別のモニターを表示させると各地の停電拡大状況が表示された。

日本地図上では各地に赤いシミが広がっていたが、今は広がるスピードが遅くなっており、停滞しているとも言える。

他方、横田基地から福生市、武蔵村山市を横断して奥多摩湖まで一筋の太い黄色い線が地図上に出現していた。この地域では停電と電

話回線が不通となっていた。特に黄色い線の中に位置していた武蔵村山市役所は突然のブラックアウトで行政機能が停止しており、立川の震災防災拠点から災害救助部隊が急行していた。

「それにしても・・・光の渦や黒い球体が出現してから、仮想空間のみならず、日本列島の空間位相バランスに異常が生じているけど・・・花子が目を覚ましてくれない事には動きが取れないわね」

想定外の異常に内心焦りを覚える美衣子だった。

「この位相空間を利用した大破壊の技術は私達マルス文明とは別系統。むしろ別世界の存在と言った方が良いのかしら？」

美衣子は眩きながらアマトハやゼイエスに相談するため通信回線を開くのだった。

【仮想空間内 横田基地東エリア 居住区画】

初めての戦争行為に恐慌をきたした華子と優美子だったが、軍曹の一喝で多少の落ち着きを取り戻した直後、至近距離で黄星姉妹の神業を目撃した二人は攻撃に巻き込まれないように格納庫から移動して基地内の軍人が住む居住区に身を潜めていた。

「・・・それにしても、さっきのあのぶつといビーム砲とか暗黒玉は反則っしょ?」

未(いま)だに驚愕が冷めやらぬ様子の優美子が引きつった顔で華子(はなこ)に話しかける。

「あれは今日でしたか?来たばかりの転入生と先生の姉妹でしたよね?・・・それと、真知子先生も傍にいらっしやったような・・・」

困惑した表情の華子。

「貴様らはあの神々と知り合いなのか!？」

軍曹が意外な顔をして訊く。

「ぶつといビームと暗黒玉を召喚したのは同じ学院の人っしょ」
優美子が答える。

「貴様らの学校は現人神様達と共学する学校とでも言うのか・・・」
唸るような声で軍曹が呟く。

「まあいい・・・。それよりも、さっき格納庫の屋根から転がり落ちてきたこの娘の面倒を頼む」

軍曹が心なしか冷や汗を浮かべて抱えていたモンペ姿の少女を地面に下ろした。

「丸太の女の子は私達を顔見知りみたいに話しかけていたが・・・心当たりがありませんですわね？」

華子がすやすや眠る少女の顔を眺めて優美子に尋ねる。

「新手のストーカーっしょ！」

優美子がプラズマバズーカの砲口を少女の額に押し当てる。

「ひゃっ！冷たいっ！」

すやすや眠っていた少女が突然跳ね起きようとしてプラズマバズーカに激突する。

「やっとききましたね。大丈夫ですか？」

華子が話しかける。

「いつくっ！はいはい元気ですよお嬢さま方。花子は元気ですの頭を擦りながら少女が答えた。

「はなこ？私と同じ名前ですわ！」

微笑みかける華子。

「いやいや違うから。私はお花の花子よ。貴女は華やかな子供、華子でしょ？」

少し冷笑気味に答える花子。

「じゃあ、丸太の花子さんでいいっしょ」

見かねた優美子がそっけなく反撃する。

「なっ！丸太は余計ですっ！それにこれはただの丸太ではありませんの！丸太再起動っ！」

花子が叫ぶとゲート付近に放置されていた丸太がずずんと動き出して、花子の傍まで近寄ってくる。まるでわんこを呼びよせる飼い主の様だ。

「素敵な丸太ですの」

花子が怪しくうつとりしながら丸太を撫でる。

「これ、御柱祭りで使う奴じゃあ・・・」

華子（はなこ）が呟く。

「ピンポーン！正解ですっ！これは日本列島 800万（やおよろ

ず) 神々のうち一柱たる私のアイテムですから」

キラツと可愛らしく丸太の上でポーズを決める花子に何故かイラツと来た華子と優美子だった。

「モンペの神様?」

「丸太から弾き飛ばされる神様って、……ぷぷぷっ!」

「お前らなあ〜」

ワナワナと身を震わせる花子。

「お前達は溜奈様のご友人だから色々トイレの願い事を多めに叶えてあげたのに……この無礼者があ!」

花子がさつと手をかざすと丸太から蔦がシュツと生え伸びて二人に巻き付くと空中に吊り上げる。

「っ!? スカートがつ!」

華子が顔を赤らめて手でスカートを抑えるが、バランスを崩して逆さ吊り状態のため上手く隠しきれしていない。

「うはははっ! すげーっ! どんどん持ち上げられるっしょ!」

「お前少しは怖がれよ!」

アトラクションだと思つて楽しむ優美子に花子が歯噛みする。

「こらっ! 貴様ら戦闘中だぞ! バカモン!」

軽いステップで丸太によじ登った軍曹が花子に拳骨を落とす。

「あいたくっ! 神様に向かってなんてことするのです……」

涙目の花子。

「どうせなら戦女神らしく振る舞ってもらいたいものだ……」

「さーせん」

怒りでぎらつく眼光に気圧された花子は軍曹に詫びると華子と優美子を地上に降ろした。

「遊びの時間は終わりだ。正面ゲートの友軍もこの騒ぎで突入している筈だ。敵司令部へ急ぐぞ!」

軍曹が地図を片手に、500m先に拡がる滑走路の一角にある軍用機用のシェルターを指さした。

「そういうことだから、花子神。ちよつとあそこまで俺達を頼む」
軍曹が花子の背後にドスンと腰を下ろすと命令した。

「な!?!神をタクシー代わりに使うとは・・・」

「花子神。後で日本酒たらふく飲ませてやるから、な?」
ふてくされる花子を軍曹が宥める。

「仕方ないですの。大吟醸を所望するですの」

「未成年はお酒だめっしょ?」

「いくら神様でも法律は守らないといけないと思うの・・・」

優美子と華子があえて飲酒に異を唱えた。

「そうか。残念だな花子神。甘酒で我慢しろ」

「ムキーっ!」

あつさり軍曹に大吟醸の奉納を取り下げられて丸太の上で地団駄を踏む花子だった。

2023年6月7日午前8時(日本時間)「アステロイドベルト 日本列島オブジェクト建設船団 旗艦『ホワイトピース』」

「木星観測衛星から1時間前に計測された異常観測データが届きました」

オペレーターが艦長の名取大佐に報告した。

「木星最深部で複数の重力波振動だと?」

名取がデータをを見て首を傾げた。

「はい、マルス先遣隊のリア隊長によると、転移現象の際に生じるものに酷似しているとの事であります!」

「あんな超重力の底に転移する者など居るのか?」

名取は状況把握の為にゼイエスをブリッジに呼びだすように部下に命じた。

同時刻【東京都千代田区永田町 首相官邸】

地下会議室で澁澤首相と全閣僚と統合幕僚監部首脳が出席して各国首脳陣とモニター越しで作戦会議が始まろうとしていた。

「ミスターシブサワ、今は取り込み中ではないのかね?」

ニタニエフ首相が日本列島で進行中の異常事態に懸念を示した。

「ご心配なく。われわれの友人が全力を尽くしています。もとより我らが対処できる技術レベルを超えていますからな」

澁澤首相が応えた。

「では予定通り始めましょう」

英国連邦極東のケビン首相が会議の開始を宣言した。

「これより人類反攻作戦について地球連合防衛軍との合同作戦会議を開催します」

現実世界では膠着した局面を打開するために人類が総力を結集させようとしていた。

急転

2023年6月7日午前8時30分〔東京都千代田区永田町 首相官邸 地下危機管理センター会議室〕

会議室の出席者席に備え付けられたホログラフィックモニター（ミツル商事試作品）から英国連邦極東軍のグリナート大佐による人類反攻作戦の概要説明が行われていた。

「総理、何故我が国は地球奪還作戦の主導権を彼らに譲ったのですか？」

喉元に装着したシール型ワイヤレスマイクをOFFにしているのを確認した厚生労働大臣の黒木が訊いた。

「確かに、現存する人類勢力の中では我が国が最大勢力であることに違いない」

澁澤が目を瞑りながら答え続ける。

「だが、今回の作戦には我が国以外の多様な国々が参加する。その国々の協力無しには地球奪還は成し遂げられないのだ。そして、我が国は地球規模での反攻作戦において、各国を率いるだけの軍事的リーダーシップを備えているとは言い難い」

澁澤が言い切った。

「確かに。我々には軍事分野での多国間協力においては未だ経験値を積み上げている段階ですな。その点では、NATO（北大西洋条約機構）に長年加盟して米国と共にリーダーシップを発揮してきた「外交の達人」である英国連邦極東首脳陣の方が「格上」なのですよ」

澁澤の言葉を引き取った岩崎官房長官が説明した。

「防衛省としても、官房長官のおっしゃる通りだと認識しているのです」

桑田防衛大臣が岩崎の説明に頷いた。

「それに今現在も我が国で勃発した「仮想世界大戦」收拾の目途がついておりません。この点で我が国が主導権を握る事に――」

月面日本大使館からホログラフィックモニターで参加していた地球方面特使の東山が喉に手を当ててマイクをOFFにして発言した。

「仮想空間における攻勢は、いずれどこかの国がやらなければならない事だったのですよ!?わが国で勃発したからこそ、他国は知らん顔で会議に集中できるのです!」

甘木経産大臣が反論した。

「甘木大臣、それは結果論に過ぎませんよ。各国に事前通知もなく「開戦」してしまった事は事実ですからね。我が国が新たな真珠湾（パールハーバー）を起こす野望と能力があると警戒されてしまう」
後白河外務大臣が指摘する。

「この期に及んで主導権争いや責任のなすりつけ合いは無意味だ」
澁澤が短くこの議論の終了を宣言した。

「この作戦に置いて我が国とマルス文明の支援がなければ地球はいよいよシャドウ・マルス支配下に置かれてしまう未来が確定だ。主導権は取れないが、我が国は「2番目」に甘んじてでも未来に備えねばならん」

澁澤の発言に会議の参加者全員が頷いた。

「勿論、我々は今回の作戦で多くの事を吸収して次の地球規模軍事作戦では主導権を握れるようにする所存です!」

統合幕僚監部の一員である鷹匠少将が澁澤に応えた。

「そうそう「次」が有っては困るのだがな・・・」

澁澤はそう呟くと英国連邦極東軍の説明に集中した。

グリナート大佐の説明は、人類反攻作戦序盤における衛星軌道上制宙権確保と北米大陸降下について、ユニオンシティ義勇軍の参加と月面 研究室から結が操作するニュートリノビーム攻撃の手順確認に移っていた。

——同時刻【仮想空間内 米軍横田基地 司令部】

与呼島舞は黄星姉妹が繰り出した大破壊の数々をモニター越しに眺めて頭を抱えていた。

「何であそこまでやっちゃうかなくだぞっ!と」

「やっぱりオペティコムホライの妹はガサツね。メロヌイの姉たる私みたいな優雅さが足りないんだぞっ!と」

司令席から立ちあがった舞はくるりとその場で半回転して司令室

のエリア51DNAコンピュータ配下の兵士達に背を向けた。

「私があのかみ妹達に対抗する事は簡単だけど、それだと「また」こちらの宇宙世界をBANしちゃうからねえ。戦略的撤退？みたいなやつ、しちゃいます。付き合ってくれてありがとうなんだぞっ！」
背中を向けたまま、司令部の兵士達に宣言すると舞は床を軽く蹴つて虚空に消えた。

司令部の兵士達は最初から何も存在しなかったかのように動き出すと侵入者対抗プログラムを再開させた。しかし時既に遅く、基地機能の4割以上が侵入者側に掌握された状況下で失陥は時間の問題だった。

与呼島舞が仮想空間の横田基地から姿を消して間もなく、横田基地の攻防戦は急速に対応能力を失った守備隊を、自重せず能力を解放して蹂躪した黄星姉妹と真知子先生の活躍？も有って呆気なく人類側AIが横田基地の機能を全て掌握し終結した。

エリア51コンピュータは撤退時に仮想地球回線を物理的に切断したらしく、AI側のケンやパナ子達の追撃を阻んだ。

同時に秋葉原の美衣子による仮想世界への介入も可能となった。

【仮想空間内 米軍横田基地 滑走路付近】

長大な滑走路の中央部分が、守美の繰り出した巨大な光の奔流でバツサリとえぐり取られ、滑走路わきの航空機待機ハンガーや格納庫は輝美が無分別にばら撒いた暗黒玉（ダーク・ボール）で穴あきチーズの様な残骸と化した光景を目の当たりにして、ようやく辿り着いた丸太の花子、軍曹、華子、優美子は口をポカンと開けて固まっていた。

「なんか・・・世紀末の遺跡っしょ」

優美子が独り呟く。

「この自重しない破壊っぷりに寒気を覚えるのです・・・」

流星に対抗する気も失せた花子。

「基地司令部は友軍が制圧したようだな」

目的地だった航空機シェルターが跡形もなく破壊し尽されているのを確認した軍曹が言った。

「これでおうちに帰れるのでしょうか？」

滑走路の反対側からこちらに駆け寄る真知子先生を横目で見ながら華子は何となく上空を見上げる。

先程まで、続々と空挺部隊や軽戦車を吐き出していた輸送機は、瞬時に掻き消されたように1機も見当たらなかった。

華子は、やはりこの空間は仮想の現実世界であると再認識していた。

そんな華子の視界が、空の片隅で不意に現れた紅く輝く光点を捉えた。

紅い光点はみるみる大きくなり、上空で巨大なゲートと化した。

「・・・優美子さん、赤い門が・・・」

上空を見上げたまま前に座る優美子の肩を指でちよこんとつつく無表情な華子。

「ん？・・・お迎えっしょ」

何故か脱力した感じで応える優美子。

二人が見上げる上空の紅いゲートから、巨大な白い光の両腕がニユツと出現して花子の丸太と、駆けよって来た真知子先生を包みこむようにすくい上げるとゲートに戻り始めた。光る両腕の思わぬ素早さに、丸太に乗っていた一行は呆気にとられたままだった。

優美子が反射的に体を縮めて前に座る軍曹の背中にキュツとしがみ付くと、軍曹は振り返って二人に苦笑しながら何か言ったようだったが、その瞬間に二人の視界は暗転した。

こうして華子、優美子、真知子先生の意識は美衣子に回収されて無事、現実世界に帰還した。

三人はすぐに自衛隊中央病院医師団の診察を受けたが、肉体的には軽い脱水症状だけで済んだ一方で、精神的に酷く疲弊しており、真知子先生は自力で歩くこともままならなくなっていた。

美衣子は介入出来なかった時間に、仮想空間内部で何が起きたのか調べようとしたが、データが全て消去されており、モニター録画による断片的な事象の確認だけしか出来なかった。

美衣子の制御下に戻った花子を問いただしてみても、記憶部分に正体不明のフィルターがかけられており、美衣子の制御をもつてしても

開示は不可能だった。

美衣子は仮想世界から帰還した華子 達に話を聴こうとしたが、彼女達を診察した自衛隊中央病院の医師団は急性ストレス障害の発症を確認しており、当分の間面会謝絶となっていた。

美衣子達による真相追及は不可能と思われた。

2023年6月8日午前6時30分【東京都千代田区永田町 首相官邸】

仮想世界大戦が人類側に有利な形で収束したことで各国が反攻作戦開始に向けた部隊の編成と物資の準備に励む中、ミツル商事の満社長と監査役のひかりは澁澤総理大臣、岩崎官房長官のもとを訪ねていた。

仮想大戦 勃発直後から、満とひかりは美衣子の犯した事の重大性を痛感していたのである。

「結果的に我が国へのサイバー攻撃を始めたこちら側の仮想空間拠点を制圧したことは大いに評価できる」

澁澤が険しい顔で満を見つめながら話す。

「ですが、我々に事前の連絡も無く、また反対したにも関わらず、民間人である小学生2名を戦闘に巻き込んだ事は極めて遺憾な事と言うしかありません」

岩崎が無表情に満とひかりに話しかけた。

「面目しだいありません」

満とひかりが二人に深々と頭を下げて謝罪した。

「火星転移前の平時ならば、お二人と美衣子さんは内乱・騒乱罪で逮捕、無期懲役か3年以上の禁錮、会社は即時営業停止の上、法人解散命令まで出されます、と法務大臣が言っていました」

岩崎が厳しい判断を伝える。

「だが、現実問題としてミツル商事の協力と、マルス文明との友好関係無しに我が国が生き残れないのもまた事実だ」

澁澤がため息をつく。

「まったく・・・大した事をしてくれたものだ・・・」

天井を仰ぐ澁澤。

「列島各国はあなた達に同情的ですが、地球イスラエル連邦がこの件を問題視しているとの報告が月面に戻った東山特使からありました。したがって、私達としては、貴方方に何らかの罰を与えなければなりません」

岩崎の言葉に俯く満とひかり。

岩崎官房長官は口頭で長文の制裁内容が記載された行政命令を讀み上げる。

「――日本政府がミツル商事に課した制裁は、人類反攻作戦における兵站の無償提供である。」

ミツル商事が出資した「日本マルス航空」が所有しているマルス文明の各種シャトルや、火星各地で沿岸部を開発した各種海洋生産施設からの海洋資源の供給、警備保障部門で研究している新型兵器技術の情報開示である。

ミツル商事の法人解散処分を行うと、惑星間輸送について全面的に依存している連合防衛軍の補給能力が喪われ、人類全体の損失になると澁澤と岩崎、桑田、英国連邦極東首脳部が判断したためである。

首相官邸で制裁措置が言い渡されたその場で満 社長は、各部門への通達を行って日本政府と地球防衛連合軍の指揮下に入った。

満が社内に通達をする傍らでひかりは、今回の仮想大戦で被害を受けた福生市、武蔵村山市等全国で在日ユニオンシティ軍基地を抱える地方自治体への賠償を岩崎官房長官に申し出た。

主に電子機器に係るインフラの全面交換である。莫大な負担が予想された。

NEWイワフネハウスに帰宅した満とひかりは自室で謹慎中の美衣子、月面の結、地球英国の瑠奈に状況を説明し、各地の連合防衛軍指揮下に入るよう指示した。三姉妹は黙って指示に従った。

夕方には再び都内に戻った大月夫妻が緊急記者会見を開き、ミツル商事が日本政府首相官邸から行政処分を受けた事と福生市、武蔵村山市を始めとした地方自治体への損害賠償を行う事を発表した。

間違はなく、翌日朝にはミツル商事と関係親会社である総合商社角紅株価の大幅な下落が予想された。

この記者会見を受けて火星東京外国為替市場では円が売られ、火星転移後初めて英国極東ポンドと極東ユーロが円を上回って急上昇した。

日本列島最大の複合企業体となったミツル商事に対する行政処分と連合防衛軍への無償提供、巨額の損害賠償は、日本経済に一抹の不安をもたらす結果となった。

そして大月夫妻はこれに伴い起こされるであろう株主からの損害賠償請求にも対応しなくてはならなかった。

—————

2023年6月10日【東京都港区白銀 神聖女子学院 初等部】
華子達のクラスに新しい担任が着任して生徒たちに挨拶していた。

「やつ！諸君！臨時担任の与呼島 舞だぞつ！と」

黒板に自分の名前を大きく書いて元気よく生徒に呼びかける舞。

「あれ〜？私が担任ではないのですかあ〜？」

教室の後ろ片隅で、守美は『姉』を見つめながらのんびりと首を傾げていた。

「なんでシロ姉が火星に?！」

自分達が追いつけていた姉妹で一番上の『姉』、を目の当たりにして輝美が口をあけたまま唾然としていた。

「皆さんのクラスメイト、天草 華子さんと名取 優美子さんは、ご両親のお仕事関係で火星外に半年ほど留学することになりました！既に今頃はシャツトルの中でしょう。あと、担任の真知子先生もお二人の留学に付き添いで出張することになりました！ですから、今日からこのクラスは私のものだぞつ！と」

クラスの生徒達は瑠奈や黄星姉妹等、常識外な行動や言動を取る存在に適應しているらしく、特に突っ込みは起こらなかった。

地球英国からモニター越しに「出席」していた瑠奈だけは、

「あの先生なんか怪しいっスー！」

と自分の事を棚に上げて警戒していた。

教室外の廊下では、

「このクラスは前にも増して私よりも上位の存在が潜んでいるです

の」

と、光球体の花子がフヨフヨと漂いながら警戒していた。神聖女子学院は今日も平和な一日になりそうだった。

—————

2023年6月11日【東京都世田谷区三宿 自衛隊中央病院】

仮想空間から生還した三人への本格的な治療が開始されて数日後、防衛大臣の桑田と岩崎官房長官が、特別の許可を得て秘かに華子と優美子、真知子先生を見舞いに病室を訪ねていた。

「なるほど。その軍曹殿は確かに自身を『桑田』と名乗ったのだね？」

興味深い顔をして桑田防衛大臣が華子達に訊き返した。

「はい。軍曹殿は中野の学校？に通っていた様でした」

無表情な華子が答える。仮想空間から救出されて以来、無気力に過ごすことが多くなっていった。

隣のベットでは優美子が仰向けに寝たまま、華子の証言に無言でコクリと頷いた。闊達な印象は鳴りを潜めていた。

「そこまで詳細な旧日本軍将校の動きをトレースしている人工知能（AI）は存在しません」

桑田が断言する。

華子と優美子は、もどかしいような、後味が悪いような微妙な気持ちになっていた。

「いきなりの戦争体験でまだ心が落ち着かないでしょう」

岩崎が華子達に語りかける。

「担当のお医者さんに聞いたところでは、君達は急性ストレス障害に罹っているようです。この症状が続くようならばPTSD（心的外傷後ストレス障害）に悪化する可能性があります。しばらくは日常生活を離れて静かな環境で過ごす和良好的でしょう」

岩崎が桑田の方を向いて頷く。

「JAXAから報告が上がっているのですが、昨年1月の大月家結婚式で華子君がビンゴを引き当てたマルスアカデミー大型母艦の試験航海準備が出来たそうだ。近日中に木星まで跳ぶ予定で、期間は3

か月から半年になる。我々も体験したことのない長期の宇宙航海と本格的な木星探査を行う予定だ。君達さえ良かったら静養がてら、マールの船に乗ってみないか？」

桑田が華子と優美子に提案した。

「素敵なお話に思うのですが、その航海や木星探査中に戦闘はありませんか？」

華子が念のために確認する。

「木星は現時点では地球との戦火に無関係だ。保障は出来かねるが火星に留まるよりは安全だと思う。木星にはプレアデス星団から飛来した超大型母艦の先遣隊も到着しているから技術面でのトラブルは皆無に等しいだろう。彼らにも君たちの事を伝えておこう」

桑田が答える。

「桑田君、ちよつとお待ちなさい！」

車椅子で華子達の病室を訪ねていた真知子先生は静かに話を聴いていたが、声を上げる。

桑田大臣と岩崎官房長官を見ながら真知子が尋ねた。

「静養目的の宇宙旅行は結構ですが、付き添いは必要でしょうか？半年も学校を休むのですから授業から遅れてしまうのが気懸りです。ですから、私も同行しますがよろしいですね？」

真知子の有無を言わせぬ迫力に頭の上がらない二人と華子達は頷くしかなかった。

続いて真知子は気になっていた事を尋ねることにした。

「岩崎君、うちの学院に転入した黄星姉妹の件ですが・・・」

「何か？」

「彼女達も入院しているのですか？」

「いいえ。二人は健康に支障が無かったので今は普通に学院へ通っています——それと、二人の世話は美衣子さんからの強い申し出によつて、当面大月家で引き受ける事になりました」

岩崎が答えた。

「そうですね・・・二人によろしくお伝えください」

真知子は岩崎に伝言を託すと車椅子を動かして自分の病室へ戻つ

ていった。

同じ頃、隣の病室では――

窓際のベットで静かに午後の爽やかな風を満喫していた琴乃羽が、神妙な顔つきを装って、診察で訪れていた岬に話しかける。

「渚紗さん、私思うんですけど木星の神秘的な姿をこの目で見れば溶けやすい体質が改善されるような気がするんです」

どこで聞きつけたのか、さりげなく木星試験航海への参加を希望した。

岬は半目になった後、子供をあやすように、

「――私にはもっと良くなる場所があると言う人ほど、どこへ行っても結局何も変わらない事がほとんどなんですよ?」

と諭した。

「ちえ〜」

目論見が看破されて口を尖らせる琴乃羽。

「仮に木星へ行っただとしてですよ?木星では民間ネットサービスが未整備ですから最新BLの更新を閲覧出来ないですよ?」

岬が別の切り口で説得を行う。

「シャトルの定期補給便で最新刊を購入できませんかね?」

しぶとく食い下がる琴乃羽。

「検閲が入りますよ?」

「今の話は無しで・・・」

あっさり木星療養を諦める琴乃羽だった。

伏線

2023年6月11日【月面都市ユニオンシティ行政区画 月面日本大使館】

「私ですか？」

東山がモニターの向こう側に居る岩崎官房長官から出された指示に戸惑っていた。

「そうです。東山君。今回のミツル商事不祥事に対する制裁措置として、同社は日本政府並びに地球連合防衛軍の管理下に入りました。については、かねてからの手筈通り、地球方面におけるユニオンシティ国生存者の保護と福利厚生、各種資産管理をミツル商事に委託管理させ、生存者は従前の生活を基本としながらこれらの管理にあたってもらいます」

莫大な業務量を事も無げに言う岩崎の指示は続き、東山はだんだん頭とお腹が痛くなってきた。

「ミツル商事の一時国有化に伴う政府からの管理官として、東山君をミツル商事地球方面支社長に任命することになります。これは大月満CEO（最高経営責任者）の承諾を得ています。また、君には人類反攻作戦において使用される月面基地ニュートリノビーム施設の防衛司令官にもなっていたいただきます」

岩崎が東山の官民軍三職兼務を言い渡した。

「確かにこの案は私が発案したのですが、自分にそのような巨大企業や軍の指揮など――」

東山が流石にギブアップ宣言をしようとしたとき、

「――月面都市関連の各種資産リストとユニオンシティ国生存者のリストは私が全てまとめておいたわ」

結が東山の後ろに近づくとスーツの裾をちよこんと抓む。

「私が東山の補佐をするから大船に乗った気で居なさい」

フンスと薄い胸を張る結。

「泥船の間違いじゃあないよね・・・」

岩崎との通信を終えた東山は、今後の殺人的なスケジュールをつら

つらと考えながら、ネクタイを緩めると執務室の椅子にどつかともたれかかるのだった。

【神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】

1階の共用ダイニングルームに三人の女性が美衣子の前に座っていた。

「今はまだ、貴女達の正体を問いただすことはしないわ」

美衣子が宣言した。

「だけどこれ以上、人類社会を揺るがすようなことは控えて欲しいの」

最近やらかした自覚のある美衣子が自戒の念を込めて要請する。

「わかったのだぞっ！」

輝美が元氣よく返事する。

「はいなのです〜」

守美がおっとりと答える。

「はあ・・・せっかく息抜きがてら――世界（こっち）に遊びに来てみれば愚妹達のせいで私までGM様にお説教されてるんだぞっ！と」

与呼島 舞が嘆く。

「なんですとー！ー！」

守美と輝美が激怒して椅子から立ちあがろうとするが舞に超重力負荷をかけられて立ちあがれない。ダイニングの床がミシミシとたわんで嫌な音を立て始める。

「ライちゃん、私達が迷惑をかけたのは確かだんだからここは素直にGM様の言うとおりにしないとですよ〜」

守美が宥める。

「ふふふ・・・あなた達、良い度胸ね」

美衣子が無視された事にプルプルと震えながら怒りの電撃を放つ。瞬間、室内に紫電が満ちるも、光が収まると三人は自ら展開させたシールドの中で平然と座っていた。

「やはりGM様は只者ではないのです〜」

守美はシールドを解くと本来の姿に変身した。

残りの二人も本来の姿に戻る。

「それが貴方達の正体なのかしら？」

美衣子が自身の周囲に滞空させていた紫電の球を霧消させながら問う。

「はいなのですう。私達は隣の惑星から来た——」

守美が自分達の事情を美衣子に打ち明けるのだった。

美衣子は、GM様と呼ばれていることを特に違和感なく受け入れていた。頭の中でゲームマスターであろうとその時は推測していた。

——1時間後

「とりあえず、話は分かったわ。確認する術が今の私達にはとても思いつかないけれど……」

美衣子が嘆息した。

「それで黄星姉妹はお転婆なお姉様を見つけてることが出来たのだから、姉妹仲良く帰るのね？」

確認する美衣子。

「それが……もう少しこちら側にいようかなと……」

守美が悪びれなくのほほんと答えた。

「こちらのプリンとやらはとつても美味なのだぞっ！」

輝美が白状する。

「しよがないわね……私が責任を持って見張らないとだぞっ！」と舞が無駄なお姉さまアピールをする。

「お前が言うなっ！」

黄星姉妹が突っ込みを入れていた。

「やかましいわ」

美衣子が不意打ちで最大出力の紫電を放つ。ダイニングルームに雷鳴が轟く。

ダイニングテーブルの表面は軽い焦げ跡がついた程度だったが、床には三姉妹が折り重なるように気絶して伸びていた。

「ふう……」

美衣子は小さくため息をつくと手についた煤をパンパンと払いながら呆れた表情で、

「・・・取りあえず、ほとぼりが冷めるまで此処に住んでいいけれど、大月家と人類には絶対に迷惑をかけた事！」

美衣子が三姉妹に言い渡すと、大月家家訓？前文を諳んじた。

別世界三姉妹は神妙な面持ちで美衣子のレクチャーを受けるのだった。

満「っ!?!今、食堂の方から雷鳴がっ！」

ひかり「気のせいですよ」

夫婦の寝室でのんびりイワシパイあーんに勤しむ二人だった。

同日深夜「火星と木星の中間地点 アステロイドベルト 日本列島

オブジェクト建設船団 マルスアカデミー支援船団旗艦」

「わかった、美衣子。こちらは第5惑星最深部の観測強化と今までのデータ分析を密にしよう」

巨大な母艦の艦橋で、リアと共に横浜からの報告を受けたゼイエスが応える。

『「こちらでは彼女達が言っていた事を証明できる裏付けが取れないわ。マスター頼んだわ』

パジャマ姿の美衣子がかつての主人に依頼するとモニターが切れた。

「リア君、最近收拾された異常データの発信源は・・・」

「ええ。すべて第5惑星最深部からのものよ」

ゼイエスの問いかけにリア体調が答える。

「ふむ・・・」

ゼイエスが過去の観測データを解析する。

「われわれが使うPエネルギーとは違う何かが、第5惑星から第4惑星全域に降り注いでいる」

解析内容を端的にゼイエスが説明した。

「宇宙放射線ではないのかしら？」

「わからん。恒星が発するエネルギー波でもなく、我々や第3惑星人類のものでは無いことは確かだ」

「もうすぐ第4惑星からこちらに試験航海で立ち寄る母艦があるからそれを活用しよう」

ゼイエスが提案する。

「そうね。こちらに派遣された船はどれもこれから第3惑星やオブジェクト建設に手が離せないから利用しない手はないわね」
リアが賛成した。

「この存在はシャドウとは違うだろうが・・・」
ゼイエスが呟く。

「そうそう我々の技術に馴染めるものなのかね・・・」
首を捻りながら浮かんだゼイエスの素朴な疑問は、同じアステロイドベルトで作業に勤しむ地球人類への報告と協力を要請する慌ただしいやり取りの中で忘れ去られていくのだった。

襲撃

2023年7月10日【長崎県五島市（五島列島） 福江島】

2019年に起きた「火星転移事態」当時、日本国内に居留していた英国を始めとする欧米諸国民を保護する当たって、膨大な対処能力が日本政府に求められた。だが、日本政府内では中央省庁はもとより、地方自治体レベルにおいても、日本国民の保護で精一杯であり、生活習慣や文化の異なる諸国の民を保護する事は不可能と思われた。

故に濫澤政権は、在留外国人の保護について政府で丸抱えするリスクを取らず、アメリカ合衆国やEU諸国の在日大使館等に地方自治を認める形で諸国民の保護を委託した。

大英帝国連邦に連なるカナダ・オーストラリア・ニュージーランド・インド等各大使館は、首相官邸仲介のもと、英国を始めとする欧州と幕末時代から交流があった長崎県と協議し、地元住民との完全対等共存を前提として、佐世保市ハウステンボス町や過疎に悩む五島列島地区を『英国連邦極東』領土として一時的に租借することで、行き場に困る諸国民を保護した。

長崎県に交付されていた地方交付税とは別枠で、外務省特別ODA枠からインフラ整備費用が捻出されて五島列島の開発が進められ、在留英国連邦民向けの住宅や教会が建設され、空港・漁港の拡大整備が行われた。

豊かな自然環境に恵まれた五島列島地区が整備されたことで、利便性のある一大リゾート施設が誕生した。今日では、日本各地からの観光客が殺到して入島制限が行われるまでになっていた。

ちなみにユーロピア共和国も同じ経緯でハウステンボス町に隣接した山間を開拓して建国されている。

そんな生まれ変わった五島列島に横浜から来た一組の男女が滞在していた。

「渚紗さん、暑いよ。蕩けそう。もうひと月になりますけど、そろそろ横浜に帰れないものですかね？」

漁港の波止場に無造作に置かれたデッキチェアにだらりと寄りか

かった琴乃羽美鶴が、犬のように舌を出して喘ぎながら岬博士に問いかける。

「まだですよ美鶴さん、ここへはあくまでもあなたの体質改善の方法を探るための療養として来たのですよ？バカンスオンリーではないのですよ？」

相変わらずな琴乃羽に岬は呆れる。

「だってですよ？木星に行けなかったから、お詫びの意味も兼ねて長崎に出張出来るように社長が取り計らってくれたんじゃないの？」

呑気に答える琴乃羽。

「ミツル商事が政府管理下で物資輸送に専念しなければならぬご時世では、私達研究者の居場所はありませんからね・・・」

岬は頷くと大月夫妻から琴乃羽達との長崎行きを勧められた時を思い出す。

社長の大月やひかりから

「ごめんなさい。しばらく政府の宅配便に専念しないとイケないから・・・」

「この機会にじっくり琴乃羽さん達をよろしくねっ！」

大月社長としても自分がスカウトした社員の居場所が無くなる事に罪悪感を感じていたのだろう。火星と地球を股にかけて発展したミツル商事が複合企業体になっても社員を大事にする方針に岬は心から感謝していた。

「社長やひかりさんは美衣子ちゃん達の後始末で大変な時になんがかねえ」

「私もこの体質さえなければ美衣子ちゃん達を手伝ったのにねえ」

岬と琴乃羽は漁港を眺めながらぼんやりと五島灘の方角を見つめるのだった。

「はっ!? そういえば渚紗さん! この島に温泉あるの知っていました?」

「美鶴・・・」

どのような状況でも楽しむスタイルを貫く琴乃羽に岬はある種の

感銘を受けるのだった。

「・・・美鶴、案内して」

「やっとさんづけ、とれたねくやりっ!」

福江島西海岸にある荒川温泉へ向かう二人だった。

「あれー?二人はどこ行つた?」

岬と琴乃羽の付き添い役（お目付け役とも言う）として付いてきた春日洋一は、両手に抱えた魚の干物を足元に置いて周囲を見回したが、日が傾きかけた漁港に人影は少なく、途方に暮れるのだった。

——その頃五島列島沖合　「ユーロピア共和国軍フリゲート」ア
ンダルシア」

1隻の大型輸送艦と駆逐艦がアルテムユア大陸西岸から佐世保に向かつていた。

大型輸送艦は、人類反攻作戦に参加するユニオンシティ国生存者からなる義勇軍1, 500名を輸送していた。

「3時の方向から海中を急速で接近する物体あり!」

フリゲート艦のソナー員が艦長に報告する。

「また日本海上自衛隊の潜水艦による抜き打ち訓練ではないのか?」

欧州救出作戦でスカンジナビア半島から救出されて火星に辿り着いた経験を持つ艦長が呟く。

「横須賀の自衛艦隊司令部に照会せよ!念のため第1種戦闘配置!」

地球からマルスシャトルで運ばれて来た年代物のスウエーデン海軍フリゲート艦の艦内に非常ベルの音がけたたましく鳴り響く。

「未確認水中移動物体(USO)さらに接近!速すぎますっ!接触まで1分!」

「やむを得ん!警告攻撃!爆雷投下!」

「横須賀の返事はまだか!」

「回答ありました!当海域で日本自衛隊の活動は予定されていないとの事です!」

「となると、例のワームという奴なのか!」

非常ベルが鳴り響く艦橋で状況を考えていると、左舷側を航行していた輸送艦から衝撃音が響いてきた。

「何か輸送艦艦底部に衝突！浸水甚大！」

「本艦の真下を抜けてきたのか？」

次の瞬間、輸送艦が巨大な水柱を空高く噴き上げながら轟沈した。

「なっ!?!・・ばかな、ユニオンシティ義勇軍1, 500名が乗っているのだぞっ！」

「全艦オールウェポン・フリー！水面下の奴になんでもいいからお見舞いしろっ！通信士！横須賀に打電、「我USOの襲撃を受けつつあり、救援を——」

次の瞬間、フリゲート艦「アングダルシア」は海中から伸びてきた巨大な触手に船体を両断されて轟沈した。

生存者は無く、所々に輸送艦や駆逐艦乗員の破片や備品が浮いているだけだった。

——【火星衛星軌道 航空・宇宙自衛隊ダイモス衛星基地】

「長崎沖を航行していたユーロピア船団の反応が消失！」

多目的衛星を操作するオペレーターが当直指令に報告する。

「なんだ？システムエラーか？またシャドウマルスのハッキングか？」

当直指令が確認する。

「違います！赤外線レーダー正常！合成開口レーダー機能異常ありません！」

「今だ人類には未知な所が多い火星の海なんだ！よく視て報告せよ！」

ヘラス大陸攻略からなりを潜めていたワームの襲撃をあらかじめ想定していた指令とオペレーターだった。

「司令！船団消失海域に巨大生物を探知！」

「モニターに出せ！」

薄暗い司令部のモニターが多目的衛星の画像を映し出す。

夕暮れの長崎県五島列島沖から少し離れた海上に、巨大な海坊主の様な黒い生物が浮上していた。

「なんだ？もつとズームできんのか!？」

当直司令が目を凝らしてモニターを見つめた途端にモニターが一瞬発光してモニターが暗転した。

「どうした!？」

『『みちびき』4号機の通信途絶！反応消失しました！』

「撃ち落とされたというのか!？」

顔面蒼白となった当直指令は、直ちに統合幕僚監部のある市ヶ谷防衛省への直通電話を取るのだった。

——福江島西側 丘陵部 ミツル商事保養所

「もう、イワシパイばかりで飽きたのです」

空の皿を眺めながら、琴乃羽が淑女にあるまじきげっぷをする。

「私の手作りイワシパイは琴乃羽さんよりイケてると思うんだけど・・・そんなこと言っている割には人一倍夕食を頬張っていたわよ美鶴」

半目になった岬が指摘する。

「いや～海の幸が豊富で美味しいのは幸福すぎるのですが、こう毎日お魚尽くしだと・・・」

琴乃羽がお腹を擦りながら食堂のソファアにダラリともたれかかる。

「琴乃羽さん、首都圏の人たちにとってはイワシはまだまだ高級魚なんですから、そんな事言っていると罰があたりますよ?」

漁港で調達したスルメをもしやもしや噛む春日が戒めた。

「それはそうなんですけどね～」

琴乃羽が口答えしようとした瞬間、海側に面したガラス窓が爆音でビリビリと震えた。

「こんな晩ご飯時に演習?」

首を傾げる琴乃羽。

「英国連邦極東軍?地元との協定でこんな超低空飛行はありあえないですよ」

岬が否定する。

様子を見に食堂から海に面した庭に出ていた春日が血相を変えて

駆け戻ってくる。

「二人とも！逃げるよっ！」

普段はひょうひょうととして、のんびりしていた春日の形相が鬼気迫るものに様変わりしているのが驚く二人。

「海で何かあった？」

短く訊く岬。

「怪物が空に向かってレーザー撃ってる！」

余裕のない表情で答える春日。

思わず顔を見合わせる岬と琴乃羽。

「何それ面白そう！」

「どんな形態でしょうか？」

恐れずに興味を持つという二人の反応を見て思わず脱力しかけた春日だったが、

「あのビームはやばいっしょ！逃げるよ！島の反対側まで！」

気を取り直して二人の手を引きながら庭へ連れだすのだった。

——そのころNEWイワフネハウス

与呼島 舞「そう言えばそろそろアレが着く頃ね」

黄星 守美「お中元ですか？」

黄星 輝美「オプティコスホライからの迎えなのかつ!？」

事態の深刻さに気づかない三姉妹だった。

その頃地球——

〔中東地域 旧トルコ共和国 カップドキア州内『イスラエル連邦』首都

新テルアビブ 首相官邸〕

「そうだ、中佐。我々は自前で火星へ行ける船が欲しいのだよ」

首相の傍らに居る国防大臣がアイルランド島にいるワイズマン中佐へ話し掛ける。

『ミス瑠奈によると、マンスフィールド級改良宇宙型は対宇宙放射線防御が貧弱なため、長期間の宇宙航行が不可能との事です』

ワイズマン中佐が答えた。ワイズマン中佐はアイルランド島にあるレジスタンス基地宿舎の自室から、プライベート回線で本国に定例報告を行っているところだった。

「言い訳は要らんのだ、中佐」

ニタニエフ首相がぴしやりと指摘した。

「我が国は今現在も、この地域で地球規模の災害と火星の虫共のせいで孤立しているのだ。最近は近隣地域の旧トルコ国民も保護しなければならぬ状況下で、我が国の体力は着実に落ちてきている。とても反攻作戦どころではないのが本音なのだよ」

「君の任務はあの火星人モドキのコピーを入手することではない。我々が火星人の技術を使って人類勢力で一番にならないと800万に増えた国民を救えないのだ」

「そのためには、コピーではなく火星文明技術の直接利用が望ましい」

ニタニエフが言い切った。言い切りながら、これはとてもじゃないが日本人に聞かせられないな、と彼は思った。

「恐れながら首相閣下、日本国は火星人と技術供与については「段階的承継方式」をとっており、かつて極東アメリカ合衆国が結んだ「即時承継方式」ではないのです。つまり、我々は火星文明を日本式にアレンジしたもののしか入手できないのです」

ワイズマン中佐が応える。

「ゴラン高原の最前線でシリア軍相手にあらゆる手を尽くして陣地を死守した君とも思えない言葉だな」

国防大臣が不満気と言う。

「大臣、これ以上をお望みであれば我々はミス瑠奈の部隊には居られません。信頼関係が崩壊します」

憤りを抑えてワイズマンが答えた。

「仕方あるまい、大臣。中佐には引き続き出来る限り試作兵器の情報収集を続けさせよう。火星の虫共を殲滅させることも大事だからな」

ニタニエフが国防大臣を宥める。

「ここはヒガシヤマを使うとしよう。中佐、ご苦労だった」

ニタニエフから通信が着られた。

【地球 アイルランド島 ニューベルファスト地球連合防衛軍レジス

タンス基地内」

真つ暗な宿舎の個室でワイズマンはため息をつく。

最近では本国への報告内容はがらりと変わり、あからさまなマルス文明技術の取得を本国は望んでおり、日本国との共同戦線という考えは二の次になっていた。

「寒い時代はまだまだこれからのようだ・・・」

そう呟くとワイズマン中佐はマンズフィールド級空中戦艦の艦橋に戻っていった。

呼び寄せたもの

2023年6月10日午後3時【東京都世田谷区三宿自衛隊中央病院】

満とひかり、美衣子（ミーコ）は溜奈の担任であり、仮想世界大戦で精神的な重症を負った澁澤真知子先生のお見舞いで病室を訪れていた。もちろん事前に夫である澁澤総理大臣の許可を得ている。

挨拶を交そうとすると、真知子がいきなり、

「私があの時反対したにもかかわらず、結果的に教え子二人を戦争に関わらせてしまったことについて、私はとても、自分自身を責めています。あの状況に至る過程で、あなた方には不可抗力が有ったのかも知れません。ですが、それでも私は、貴方達の行いを一生忘れる事は出来ないでしょう」

静かな語り口だが、胸のうちに秘めている行き場のない激しい怒りを必死で出すまいと押し殺したように、能面の様な無表情さを隠そうともしなかった。

「本来は、私は許すべきところでしょう。しかし戦争を経験してしまった今となっては・・・、いえ、兎に角、二人には最善の治療をお願いします」

そう言うとき真知子は気力を失ってぐったりとベットに横たわった。満とひかり、美衣子は一言も発せず、ただただ頭を下げ続ける事しか出来なかった。

「真知子さんは他の生徒さん達よりも症状が重いのです」

短い面会時間を終えて病室の外へ出ると立ち会った主治医が病状を説明した。

帰りの東横線に乗った三人は横浜に着くまで終始無言のままだった。

2023年6月11日午前6時【東京都大田区 羽田国際空港 展望台】

空港沖の東京湾上で初夏の日差しを浴びる全長2kmに及ぶ巨大なマルスアカデミー母艦をバックにして、民放局の新人男性アナウン

サーが興奮気味に中継していた。

「見てくださいっ！このような巨大な山のような宇宙船。本当に空を飛ぶのか私には信じられません！この宇宙船は、昨晚秘かに種子島から飛来して待機しています」

「人類初の木星探査宇宙船『おとひめ』が、羽田から搭乗する探索隊を乗せて間もなく、この羽田空港沖合から飛び立ちます！」

「この宇宙船は日本の小学生がマルス文明人とのビンゴ大会で見事引き当てたと言う、これもまた人類初の異星文明から贈られた宇宙への扉となります」

大月家では大月夫妻と三姉妹&訪問者三姉妹がイワフネハウスの食堂で朝食を摂りながら、木星探査隊が羽田沖から出発するニュースを視ていた。

「つくづく、我が家は世間を騒がしているなあ・・・」

「むふう・・・」

ビンゴ大会の関係者（主賓とも言う）だった満が呟く。隣に座るひかり（彼女も主賓だった）は結婚披露宴を思い出して朝からデレていた。

頬を紅潮させたアナウンサーがレポートを続けていた。

「木星探査隊に参加する2名の小学生は都内在住との事ですが、詳細については未成年であることを理由に記者会見やインタビュースもとより、個人情報公開等一切をJAXAは拒否しています」

「一方、野党各党は今回の木星「遠征」計画について、人類の喫緊課題である地球奪還作戦を前に、政府は平和を望む善良な地球市民に対して果たすべき事が多々あるにも関わらず、緊急性の乏しい「遠征」に無駄な費用を費やす必要があるのかと――」

民放チャンネルにも関わらず、突然中継画面が途切れてNHK渋谷スタジオで硬い表情のアナウンサーが映し出された。画面の右上に『共通：特別非常事態宣言発令』と赤く太い文字が表示されている。

「昨晚、長崎県五島列島沖で消息を絶ったユーロピア軍輸送船団と、多目的情報通信衛星「みちびき」4号と8号に加え、同じ海域の福江島レーダー施設、対馬自衛隊基地が何者かの攻撃を受けた事に関連し

て日本・英国連邦極東両政府は先程午前5時57分、九州・中国地方全域に特別非常事態宣言を発令しました。九州・中国地方にお住い又は滞在されている方は今すぐに、最寄りの特別避難施設へ避難して命を守る行動を取って下さい！これは訓練ではありません！繰り返し、日英政府は先程―――』

火星転移前から、尋常ではない災害発生にも動じない様に訓練されたNHKアナウンサーが、淡々と避難情報を伝え始める。

「あらあら、もう少し大人しく呼び寄せればよかったです！」と
うっかり口を滑らせる与呼島 舞。

「ざらりと問題発言しないで欲しいわ」

いきなり紫電を放つ美衣子に対し、シールドを展開してガードする舞。しかし隣に座る守美と輝美は半熟目玉焼きに気を取られていたために反応が一瞬遅れ、避け切れず紫電を浴びて床で伸びていた。最近の大月家朝食で頻繁に見られるようになった日常風景である。

「で？舞さんはこの状況の犯人と「お知り合い」なのかしら？」

黒いオーラを放ちながら物凄い笑顔で与呼島に詰め寄るひかり。隣りでは満が小さく縮むように朝刊を読みながら我関せずとデザートのリングゴをシャクシャク齧っていた。

「私達が間違っておりましたっ!!!」

美衣子に教え込まされたのか、見事な土下座でひかりに詫げる訪問者三姉妹だった。

「取りあえず、最初から話してもらおうかしら？」

ひかりの尋問が始まった。

訪問者三姉妹は神妙な面持ちで正座に姿勢を切り替えるのだった。

―――30分後

食堂の床に正座する訪問者三姉妹だったが、輝美はこちらの宇宙で初めて体験する正座に足が痺れて床の上で悶絶していた。舞と守美は健気に姿勢を維持していた。

「あれ？なんかこの子反抗期なのかな？？」と

舞が首を傾げる。

「私の呼びかけに応えないのだぞっ！」と

「どうしたの?」

美衣子が尋ねる。

「ん〜。シレーヌス海溝の底から出て来て日本列島の近くまで来たところで空から電波?を当てられて興奮しているみたいですよ〜」

舞の隣で彼女の思念波に同調してその存在の波長を読みながら、同じような仕草で首を傾げる守美。

「シロ姉、なんでこんな面倒くさい生き物作っちゃったのさっ!?!」

床の上で相変わらず悶絶しつつも、目を閉じて遠くの海中に眼を凝っていた輝美は、その存在の姿を視て呆れた声音で姉を糾弾する。

「いや〜、なんか海の底で寂しそうに潜んでいたから『みんな一緒になれば寂しくないんだぞっ!』と一纏めにしてあげただけなんだぞっ!と。ついでに日本列島に楽しいお友達がいるかも知れないのだぞっ!と伝えてみただけなんだぞっ!と〜うひゃっ!!」

余りの行状に美衣子が正座を続ける舞の両頬に手を伸ばしてむんずと引つ張る。

「兎に角、鎮めるように呼びかけを続けて」

美衣子が舞に命じる。

流石に事態の深刻さからわれ関せずを決め込んでいた満が動き出す。

「岩崎さんに先ずは連絡だ。ひかり、今回は僕たちも動くよ?」

「わかりました、あなた。現地に行く形で荷物を纏めますよう」

腰に手をあてて仁王立ちのポーズを決めていたひかりも慌ただしく動き出す。

「岩崎さんですか?大月です。いつもすみません。はい、その件です。こちらで預かっていた三姉妹から今回の件について知見を得ました。ついては現地向かいたのですが〜」

岩崎官房長官へ報告する大月だった。

同時刻【長崎県五島市（五島列島） 福江島 五島港】

五島港近くの核シェルターへ避難していた春日、岬、琴乃羽だったが、今は福江島からの避難指示を受けて自衛隊誘導の元、港で避難用にチャーターされたフェリーを待つ避難民の列の只中に居た。

昨晩は三人は保養所から大慌てで山の麓にある五島港近くの核シェルターへ向かう途中、幾筋もの光の柱が西の海側から放たれて、翁頭山山頂のレーザー施設が貫かれて爆発する所を目撃していた。

「あんな超強い化け物がまだ火星に居たんですね」
素で感心する琴乃羽。

「あの光の柱はレーザーでしょうが、生体電気をあそこまで収縮させるなんて普通の生き物じゃあないですよ!？」

あくまでも生物学的な観点で大いに学術的興味をそそられている岬。

「ぶれないですね、お二人とも・・・」

避難民の列に並びながらワンセグで情報収集に務める春日がため息をつく。

『避難されている皆様の中にミツル商事の社員の方はいませんか？』

唐突に港のスピーカーからアナウンスが流れる。

『ミツル商事の方は近くの自衛隊員に申し出てください。特別な伝言があるとの事です』

春日は岬や琴乃羽の顔を見る。

「・・・どうやら面倒事がお呼びの様ですね」

三人は顔を引き締めて誰ともなしに頷くと、近くの自衛隊員を呼び留めて港近くに設置された指令所へ向かい、通信機を通じて社長の六月から海上自衛隊呉基地へ向かうように指示を受けるのだった。

面倒事はまだ始まってもしなかった。

同日午前8時30分【神奈川県 横浜市 NEWイワフネハウス 屋上】

首相官邸に報告を終えた大月家と訪問者三姉妹は、地下の格納庫から久しぶりに現れたアダムスキー型シャトルに乗り込んだ。

操縦席に美衣子が収まり、その後ろには満とひかりが隣り合わせの座席に座った。

「こちらマルス・ヨコハマ、以後MYとするわ。厚木管制の離陸許可を求めるわ」

『こちら厚木。お久しぶりですミス・ミイコ。離陸許可します。現在政府から日本上空の民間航空機は長崎沖の怪獣に撃ち落とされる可能性があるので飛行禁止となっています。ミイコ殿もお気をつけて』

厚木基地の海上自衛隊管制官が応える。

「厚木の手厚い案内に感謝するわ。MY、高度200で呉に向かう。テイクオフ」

飛行機のシミュレーターでも体験したのか、やけに飛行機パイロットらしいやり取りを行ってイワフネハウスからアダムスキー型連絡艇を浮上させた。

「ひかり、呉基地には30分程で到着するからそれまではオートパイロットで大丈夫だから朝のお菓子を頂戴」

さりげなく恒例でもない朝のおやつタイムを要求する美衣子。

「しようがないですねえ。これから大変になりますし、今日は大目にみますか。昨日お見舞いで焼いたクッキーの余りがあるからそれでいいわよね？」

ひかりが苦笑してカバンからクッキー缶を取り出す。

「じゃあ、僕はお茶を容れるよ。美衣子、お茶の葉はコクピットの下引き出しだよね？」

いそいそと満がお茶くみ係に立候補して、勝手知ったる顔で操縦席の近くからお茶セットを取り出すと準備を始める。

「・・・あのおくちよつと」

黄星守美が遠慮がちに大月家一同を窺うよう声をかける。

「私たちはどうしてこのような体勢なのでしょううか？」

与呼島 舞と黄星姉妹は布団でぐるぐるに巻かれた上で、底引き網にも使われる強力なロープで簀巻きにされて連絡艇後部座席付近の床に転がされていた。

「簡単な話よ。貴方達が勝手に動くとなんか起こるかわからないから大人しくしていて頂戴」

操縦席から後ろを振り返りもせず、ひかりの差し出したクッキーをポリポリ齧りながら答える美衣子。

「そんな〜」

「貴方達の事だからどうせ、抜け出そうとすれば簡単な筈よ。今回は、物事の正しい対処の仕方を学んでもらうわよ」

弱音を吐く守美に美衣子が指導教官の顔で告げる。

「まさか美衣子から物事の正しさを教わる日が来ようとは・・・」

何故か目頭が熱くなつて液体が瞳に溢れるのを、満はクッキーのジンジャー味と砂糖の代わりに使われた食塩のせいだと思いつまむことにした。

「なんで感動的な場面を装って私のクッキーをデイスるのですかあ？」

素敵な陰のある笑顔で満に詰め寄るひかり。

二度目となる火星生物の日本本土上陸を前にした和やかなひと時だった。

――その頃、自衛隊中央病院。

「ぶへっー」

真知子が口の中に含んだ焼き菓子を勢いよく吐き出して咳込むと床に倒れ込んだ。

「っ!?!どうしたっ!真知子!」

見舞いに訪れていた澁澤太郎総理が、床に蹲っている涙目の真知子のもとへ駆け寄る。

「テロかっ!」

「洋菓子に毒物混入かっ!」

慌ただしく病室を封鎖する公安SPと澁澤総理だった。

――1時間後に全てが明らかにされた後、自衛隊中央病院では見舞に訪れる者が手作りした菓子は出来栄えを問わず、持ち込みが禁止されたという。

そして、真知子先生の木星同行は取り止めとなったのである。

マリネ

2023年6月12日朝【長崎県対馬市沖70kmの海底】

その生物は、自分を創造した存在が呼びよせる声に導かれて住み慣れたマリネリス海溝の底から旅立つと、まだ真新しい火星の海をひたすら南東に向けて突き進んだ。

途中でいくつかの煩わしいノイズを放つ障害物やはるか頭上から不愉快な波動をぶつけてくる物体に遭遇すると、本能の赴くままに身体を振り回して体内から湧き上がる力を放出した。

今は、ここまで休むことなく付き進んできた疲れを癒すべく、見知らぬ暖かい海底で休んでいた。

そして、先ほどから再び聴こえてきた、何か焦ったような声音に導かれるまま、だんだんと暖かさが増す海域を南下し始めた。

同日午前3時【島根県 隠岐の島沖50km 海上自衛隊音響測定艦『とどろき』】

「超長距離ソナー曳航開始！」

艦長が総延長2000kmになる超長距離曳航型ソナーの展開を指示する。

冷戦終結後の極東地域で新たな軍事的脅威となった共産中国と北朝鮮、ロシア連邦の原子力潜水艦を探知、情報収集する目的で建造されたこの特殊な音響測定艦は貴重で3隻が稼働していた。

そして、火星転移後の2021年、20年ぶり新しく就航した「とどろき」は、2020年に起きた巨大ワームの稚内市上陸、襲撃事件に強い衝撃と危機感を持った政府自衛隊により、火星生物の日本襲来を早期に察知する目的を持っていた。

海上自衛隊呉基地で岬、琴乃羽、春日らと合流したミツル商事一行は『とどろき』に搭乗して特設CIC（戦闘情報管制室）に籠もって対馬沖で姿を消した火星生物の捜索に協力することとなった。

「それで舞さん、マリネリスから来たクリーチャーはどこへ向かうとしているか分かる？」

満が火星生物を呼びだしたであろう張本人に尋ねる。

「恐らく私の眩く声に反応して追いかけていたみたいですから、横浜？かもだぞっ！」と

簀巻きの状態にもかかわらず小首を傾げた仕草で与呼島が答える。

「でもヒトの電波や思念波で正気を失っているみたいですねえ」

舞の隣で同じく簀巻きで転がる守美が答える。

「今のアレは、敵対する思念を過敏に受け止めて「敵」認定するからめっちゃ危ないんだぞっ！」

舞と守美の間で転がる輝美が元気に答える。

「ヒトの思念を敵認定したところでどうするのかしら？」

ひかりがこめかみに手を当てて考える。

「それはやはり、大都市では？」

春日が指摘する。

「この辺りで人口密集地帯とは？」

満が誰に問うでもなく眩く。

「火星転移後の最新人口分布では北九州福岡、長崎県佐世保ですね」
データベースから調べた琴乃羽が答えた。

「春日さん、すぐに艦長へ報告を」

満が指示する。

春日がC I Cから艦橋で指揮をとる艦長へ横須賀司令部への警告を伝えた。

「舞さん、あのクリーチャーは今でも貴女の声を聴いていると思う？」

岬が尋ねる。

「うーん。興奮していますけどこちらの呼びかけには時折反応するような仕草を見せるので少しは」

舞が答える。

舞は簀巻きから脱出して妖精体となって宙に浮きながら目を瞑って呼びかけを続けていた。

「興奮の原因は日本中の軍隊があらゆる電波を当てているからであって、電波の発信を抑えれば何とかなるのかもです」

「こちらは簀巻きのままゴロゴロとC I Cの床をあてもなく転が

りながら守美が答える。

「でもでも、大都市から出る電波やヒトが出す恐怖と敵意の思念が酷いから無理なんだぞっ!」

簀巻きのまま宙に浮く輝美が口を挟む。

「そんなに思念波つて重要なんすかね?」

春日が塩クツキーをつまんで顔を歪ませながら訊く。ビターな味ではないようだ。

「あなた、琴乃羽の事やユニオンシティ国民を蕩けさせた福音システムの事を忘れたのかしら?」

皿に盛られた塩クツキーを盛大に皿ごと飲み込まんばかりに詰め込んでいた美衣子が答える。

ハツとする春日だったが、

「確かに心や頭に響く声は結構体にビンビン効きますよ?」

気にしてないよというゼスチャーを春日にしながら琴乃羽が応えた。

「いずれにせよ、これでクリーチャーの都市部侵攻は確定という所かしら」

塩クツキーが予想外に捌けたので頬を緩めながらも腕を組んで考え込むひかり。

「いつその事舞さん達をここから吊るしてクリーチャーをおびき寄せた方が効果的なんじゃないかしら?」

さらりと首を傾けてとんでも提案をするひかり。

「「ええっ?!」」

「イヤなら知恵をしぼりなさい」

美衣子が冷たく宣告する。

「「むーん」」

*イラストはお絵描きさん／らてい様です。

しかし、彼女達よりも深刻に思案するものも数多く居た。

【長崎県佐世保市 英国連邦極東首都ダウニングタウン 首相官邸地下司令部】

火星転移直後の建国以来、初めて直接的な異常事態を迎えた地下司令部の面々が慌ただしく対応に追われていた。

「佐世保軍港の戦闘鑑定は全て出せ！有明海で迎え撃つ！」

「関門海峡上空を旋回していた早期警戒ドローン撃墜されました！光学兵器の模様！」

「電波に反応するの。誘導が出来んぞ！」

「五島列島駐留ユーロファイター攻撃部隊いつでも飛ばます！」

「衛星フォボス宇宙基地のMOAB弾道弾発射準備完了！」

「佐賀県の特種機動戦闘団、出動準備完了！」

「大佐、本当にそのクリーチャーはこちらへ来るのかね？」

火を着けていない葉巻を加えたケビン首相が防衛指揮官のグリナート大佐に尋ねる。

「サー、首相閣下。最新の報告によりますとクリーチャーは人口密集地帯のあるフクオカはこちらへ向かうと」

緊張した面持ちのグリナート大佐が答える。

「よりによつてこれから地球での決戦に挑もうという時に間の悪いことだ！」

苦虫を噛み潰したような表情をするケビン。

「我が軍戦力の大半が既に火星を発つて地球へ向かっています。呼び戻しても間に合いません」

「今ここで動かすことが出来るのは五島の空軍と佐賀のロボット部隊、熊本の日本陸上自衛隊か」

腕を組んで司令部のスクリーンに投影されている戦況図を眺めるケビンとグリナート。

「首相！東京からホットラインです！」

「構わん！そのままこちらへ繋いでくれ」

ケビンの卓上3Dモニターに憔悴した感じの澁澤首相が映る。

「ケビン。忙しいところすまん。こちらもあらゆる手段を講じている所だ」

「それはありがたいな、タロウ。で？君は何を考えている？」
目を細めて澁澤をうかがうケビン。

「ケビン、君に九州地区の全連合防衛軍指揮権を一時的に委ねる事にした。もちろん自衛隊も含まれる。指揮系統は一本化した方が望ましいからな。つまらん縄張り争いに興味はないんだ。もちろん、事が知れたら私は国民や野党から間違いない弾劾されかねないがね」
肩を竦める澁澤。

「タロウは相変わらず私を買いかぶり過ぎていると思うのだが？」

「正しい判断だと私は信じている。貴国が最終手段を使わずに事態が解決される事が大事だ。私も最善を尽くすことにしよう。このチャンネルはこのままオープンで繋いでおく」

澁澤はそう言うと言った画像のスイッチを消した。

「・・・首相閣下。やはり日本政府は我々が核兵器を持ち込んでいる事に気づいていましたな」

MI6を束ねる内務大臣が背後から声をかけた。

「それはそうだろうよ。日本政府は火星に転移してから軍と諜報部門の体制を飛躍的に強化してきたのだ。かつての在日米軍基地をそのまま引き継ぐ形で管理していれば、われわれの行動などお見通しの筈だ」

「では、万が一の時は衛星フォボスの宇宙基地からMOABの弾頭を交換すると言う事で――」
「内務大臣、それ以上は口にははいかんぞ」

ケビンが核使用の会話を遮る。

「それは本当に我が国が日本国と運命を共にして滅ぶ時だけにしてくれ」

ケビンは天井を仰いだ。

「佐世保で何が何でもクリーチャーを食い止めねばならん！ミツル商事にも協力を要請するんだ！」

ケビンは内務大臣と国防大臣に指示を出す。

【東京都千代田区永田町 首相官邸】

「彼らは本当に核を使うだろうか？」

澁澤が官房長官に訊く。

「使うでしょう」

間髪入れずに岩崎官房長官が答える。

「かの国が佐世保の首都壊滅を許せばせつかく火星に出迎えた英国王室の皇太孫（こうたいそん）を頂いて再興しつつある体制が崩壊して求心力を失い、連合防衛軍の指揮系統に打撃を与える事になるでしょう」

岩崎が予想される惨禍の想定を説明した。

「しかも、核が使用された日には非核三原則を厳格に守らなかつた我々の落ち度として、間違いなく政権が倒れるぞ！」

「ええ。確かに。長崎での核使用は、かつての被爆都市が再度核の惨禍に襲われた悲劇として国内でのインパクトは想像を超えますな」

非核宣言都市にこだわりを持つ長崎市長の剣幕が容易に脳裏に浮かぶ岩崎。

「仕方ない。佐世保が万一の事態に陥った時の備えとして「アレ」を使おう」

澁澤が決断する。

「わかりました。既にミツル商事の美衣子氏には改修の「指示」を出しています。ダイモス基地から工作部隊が出発して準備に取り掛かっています」

岩崎は先を見越して動いていた様で澁澤は頭を抱えた。

「頭の痛い存在がこうも立て続けに出てくるのはもはや偶然ではないだろうな」

執務室の机に肘を突いた澁澤は頭を抱えた。

同日午前5時【長崎県 対馬市沖50km 音響測定艦『とどろき』】

「おっ！シロ姉のペットが動き出したのだぞっ！」

簀巻きのまま宙に浮く輝美が声を上げた。

「ソナーも下対馬沖の海中で動く物体を感知しましたねえ。速度は時速20kmくらい」

艦橋とのデータリンク画面を確認していた琴乃羽が報告する。

「満さん。艦長からですよ」

ひかりが満に受話器を渡す。

満はスピーカーモードに切り替えて受け取る。

『大月社長。横須賀司令部を通じて連合防衛軍司令部から優先命令が届きました。「ミツル商事は可能な限り敵を佐世保に誘導せよ」です』

緊張した声の艦長が満に司令部からの指示を伝えた。

「どうしてもわざわざ大都市の佐世保へ誘導するんですか!？」

『もともと福岡には展開できる兵力が少なく、防衛体制の整っている佐世保に誘導して確実に殲滅するのが司令部の意向です』

「そんなっ!」

憤る満。

「お父さん、そんなにカツカしないで」

美衣子が満の背中にしがみ付く。

「そうならないように岩崎と相談して手を打っているから」

満の耳元で美衣子がささやいた。

【火星衛星軌道上 太陽光送電衛星「雷神」】

高度35,000kmの静止軌道で火星北半球の日本列島を見守るように配置されていた太陽光送電衛星は、ダイモス基地を経由して送られた美衣子の優先プログラムを受信して稼働を始めた。

本来は太陽光で発電した電力を特定周波数に変換して茨城県東海村へ送電していたのだが、優先プログラムによって、衛星は本来の役割とは違う稼働モードに入った。

送電衛星は遮るものの無い真空空間で太陽光を浴びながら十分な電力を発電しながら送電せずに、非常用貯蔵バッテリーへ蓄電し続けていた。

マルス技術の応用で従来の物よりも飛躍的に向上したバッテリーの蓄電能力は原子力発電所2つ分に相当する。

美衣子と岩崎が秘かに着目して改修していたのは、送電周波数を高周波数帯レーザー光線に変換する機能だった。

万一の時はこの衛星から高周波数帯のレーザー光線が地上へ照射される。

【長崎県 対馬沖 音響測定艦『とどろき』】

「要するに、クリーチャーが持つ生体電気と反応させるのかしら？」
ひかりが美衣子に尋ねる。

「そうよ。太陽光送電衛星から大出力レーザー光線を当てて、クリーチャーの生体電気と同調させて急激に電力負荷を増加極大化させて自滅させるのよ」

美衣子が説明する。

「そんな事に・・・」

舞が何かを言おうとしたが、ひかりや満の視線に気圧されて口を噤む。

「シロ姉のペットには残念だけど、ここまで大事になったからしょうがないのだぞっ！」

輝美が小さく残念そうに呟く。

「どうしてもあのクリーチャーを舞さんは生かしたいと？」

岬が聞く。

「自分が世話をした生き物は最後まで責任を持つものだど学校で教わりましたからね〜」

守美が頷く。

「グラン・マ様、マリネちゃんを第5惑星から故郷に連れて帰りたいのですけど」

舞が提案する。

「それはダメ」

美衣子がピシヤリとダメ出しする。

「貴女達が能力を使うことで火星の重力磁場に少しずつ歪みが出ているのよ」

美衣子が理由を説明する。

「貴女達が電子の世界で暴れる前後から日本列島周辺の磁場が変化しているわ。このまま変化の幅が拡大すると私のシステムでは防ぎきれない規模の地殻変動が火星全域で起きるわ。だから、力を使わないで」

釘をさす美衣子。

「もう少しスケールを小さくして考えてはどうでしょう？」

先ほどからのやり取りを傍観していた春日が視点の変更を勧める。
「そんな、惑星規模とかの力を振るわないですむ方法は無いのですか?」

「スケール、ねえ……」

琴乃羽が呟く。

「むーん……、そうだぞっ!と」

知らずのうちに浮かびながら考えていた舞がはたと手を打って叫ぶ。

「私のペットにするぞっ!と」

「……舞さん、話の流れ読んでますよね?」

岬が突っ込みを入れるが舞は気にせずに、

「論より何とやらだぞっ!と」

妖精体モードに変身した舞は、

*イラストはお絵描きさん／らてい様です。

ミツル商事一同と黄星姉妹はポカンと口を開けて固まっていた。

「マリネちゃんて誰?」

マリネリスのクリーチャーは再び五島列島近海に接近していた。

神々の反省

2023年6月12日午前8時【長崎県佐世保市 英国連邦極東首都ダウニングタウン 首相官邸地下司令部】

クリーチャー「マリネ」の接近に伴って司令部では徐々に緊張が高まっていた。

「クリーチャー、五島列島北部の平島沖を南下！10ノット！」

「光学兵器で中通島水平線レーダー破壊されました！」

「横須賀経由でミツル商事から警告！指向性電波はクリーチャーを刺激するとの事です！」

「五島福江空港に待機中のWB21ワームバスター試験中隊及びユーロファイター部隊いつでも出せます！」

「いかにぞ！航空機は電波発信器のようなものだ、待機継続せよ」

「衛星フォボス宇宙基地からユーロピア宇宙軍戦略戦闘艦『ドウ・リシユリユ』出撃！MOAB弾道弾発射準備完了！」

「リシユリユにはレーザーバリア展開を忠告しろ。高みの見物とは訳が違うのだ！」

「自衛隊特殊機動戦闘団、平戸に到着、展開中！」

「日本軍最新兵器の実戦能力を見てみたいが防衛線維持を優先！むやみに先行させるなよ！」

「大佐、クリーチャーの防衛線接触までどれくらいだね？」

今回の事態で禁煙を撤回したケビン首相が、何本目かわからない葉巻に火を着けながら防衛指揮官のグリナート大佐に尋ねる。

「サー、首相閣下。最新の報告によりますとクリーチャー接触まで4時間半ほどです」

葉巻の紫煙から逃れるように身をよじらせたグリナート大佐が答える。

「皇太孫殿下を沖縄に避難させよう」

最後の段階の決断をするケビン。

「殿下は責任感が強いので簡単に避難勧告に応じるとは思えません
が？」

「今ここで殿下を失えば、大英帝国の歴史は終わる。女王陛下のご意思をお守りすべきと説得するのだ！」

腕を組んで司令部のスクリーンに投影されている戦況図を眺めるケビンとグリナート。

「首相！ナガタチョウです！」

「繋いでくれ」

卓上3Dモニターに澁澤首相と岩崎官房長官が映る。

「ケビン。これより我が国は対クリーチャー最終兵器を使用する。クリーチャーのいる半径50kmの電子機器は要不要問わず、全てスイッチを切ってくれ。大量の電磁波が空から降ってくるぞ！」

澁澤が警告した。

「何をするつもりかね？」

汗ばむ掌を気取られないように腕を組み直すとケビンが澁澤に問いかける。

「電気分解だよ」

ポーカーフェイスで澁澤は答えると通信を切った。

「大佐、半径50kmを避けて防衛線の再構築だ。急ごう」

ケビンがグリナートに命令した。

司令部の緊迫感がさらに強まった。

—————

午前9時30分【関門海峡通過中 海上自衛隊 音響測定艦『とどろき』CIC】

CICで聴音ソナーからクリーチャーの移動音を拾っていた美衣子の携帯電話が振動した。

通話先の相手からの報告を受けた美衣子は満に向き直ると報告した。

「お父さん、「雷神」の準備完了よ」

「美衣子、雷神コントロールをこのCICで引き継げるようにしよう」

満が室内を見渡すと言った。

「ん。コントロール、ダイモス基地から移管完了。聴音ソナー測定

結果とクリーチャーへの照準システムをリンク、コネクト、完了」
美衣子が器用に制御卓を操作する。

「照準問題なし。しっかりクリーチャーを捕捉しています」
岬が報告する。

「エネルギー重点120パーセント」

美衣子がおもむろに雷神の充電システムに負荷をかける。

「美衣子、何度も言うようだけど、地球の衛星は120パーセントた
めれないから！爆発しちゃうから！」

満が突っ込みを真面目に入れる。ミツル商事も少くない予算を
雷神運用費用として支出している。

「漢のロマンが——」

美衣子が反発して言いかけたところでひかりの凄みある笑顔を向
けられると軽く咳払いして、

「コホン。余剰電力は可能な限り惑星軌道外へ放出するわ」

120パーセント充電を諦めるのだった。

「照準システムは引き続きクリーチャーを追尾中。いつでもロック
オン可能です」

岬が報告する。

「舞さんが気になるけど・・・さすがに時間切れかな」

満が覚悟を決める。

満がクリーチャーの侵攻針路と照準システムのモニターとにら
めっこしてレーザー照射のタイミングを計っているときに美衣子の
携帯が再び振動する。

「もしもし」

地上へレーザー光線を照射するという微妙な衛星角度の調整に神
経を集中している美衣子の応答は機械的だった。

『グラン・マ、私、私だけど』

「通報したわ」

『ムキーン！』

通話先で吠えていたのは対馬沖の海底に居る与呼島 舞だった。
やることはやってしまう性分の美衣子だった。

「なに？餌の相談よりも、その海底が沸騰する未来に注意なさい。もうすぐそこへ太陽光送電衛星からレーザー光線に変換した莫大な荷電粒子を当てるわよ」

美衣子が警告する。

『待つて！マリネちゃんには悪さをさせないのだぞつ！と』

「そんな大きさと存在するだけで問題だわ」

『大きさが問題!?なら今から小さくするのだぞつ！と』

「どうやるのかしら？」

『マリネが持つ生体電気を凝縮させて細胞死を加速させる「細胞収縮」を応用して出来るだけ小さくするのだぞつ！と』

「そのクリーチャーが持つ生体電気だけでは収縮もたかが知れているわ。こちらの荷電粒子を上手く使いなさい」

『では、タイミングを合わせて』

「無理。衛星のバッテリーが限界。すぐ撃つわ」

『ちよつ?!』

「ごめんなさい」

美衣子が無造作にトリガーボタンを押す。

対馬沖を航行する「とどろき」の遙か頭上から紫色の光の柱が針路の遙か先に降り注ぎ、しばしの間天地の間を紫の光の柱が繋いだ。

『あばばば』

「テンプレ的な感電リアクションはいいから。誰も見ていないから」

『ちよつと待つのだぞつ！と。今凝縮エネルギーで細胞収縮中だぞつ！と』

「荷電粒子照射はもうすぐ途切れるわ」

『充分だぞつ！と。むしろいっぱい余るかもだぞつ！と』

「余らせてはダメ」

『いやいやいや、もうムリなんだぞつ！と』

「しようがないわね、じゃ、こちらが指示する方角へ収縮させて戻して頂戴」

暫くすると「とどろき」正面の海中から空高くへ向けてオレンジ色

の光の柱が立ち昇った。

オレンジ色の光の柱が立ち昇った先に、木星へ向かう1隻の巨大宇宙船が航行していた。

—————

同時刻【火星から木星方向へ1億kmの宇宙空間 木星探査隊母艦『おとひめ』】

「イワフネ艦長！火星から高エネルギー、来ますっ！」

航行オペレーターが報告する。

「美衣子さんから先ほど連絡があった通りの方角から来ている。艦尾ソーラーセイルの一部を方向転換させて対応させる。十分な補助推進エネルギーだ」

ミツル商事からJAXAに出向していたイワフネが冷静に対応して指示を出す。

「天草理事長、これから予定外の加速がされる事で木星到着が1週間ほど早まりそうですよ」

イワフネが傍らに立つ天草士郎に声をかける。

「優雅な宇宙旅行とは程遠いですね。せわしない事です」

ため息をつく天草。とはいうものの充分にリラックスしているようだ。

「ご令嬢との大切な時間も減ってしまいますね」

イワフネがククツと笑いを堪える。

天草の一人娘である華子への溺愛ぶりは航海開始初日から顕著であり、仮想世界大戦でやさぐれた娘を心配するあまりストーリーカーと見まごうばかりだった。

親友の名取優美子も華子の父には早々と辟易しており、最近ではハイキックによるコミニケーションが定番となっていた。

「ソーラーセイル17番から25番、火星方向へ転換完了」

天草とイワフネが会話する間にも火星からの臨時エネルギー照射が続き、ソーラーセイルによって安定した推進力に加え、火星からの補助ロケットとも言うべき推力の追加を受けてマルス文明製母艦「おとひめ」は木星方向へぐんぐんと突き進んで行った。

——同「おとひめ」展望フロア

マルス母艦のちょうど真ん中あたりに設けられている小ホール並みの広さを持つ宇宙展望台はほぼ360度周囲がグラスファイバー製の透明な特殊ガラスでコーティングされていた。展望台のガラスは幾重にも重ね掛けでコーティングされたフィルターで有害な宇宙放射線のほとんどを遮断している。

ちようどこの時間は各部署が整備点検に追われている時間帯であり、展望台まで足を運ぶ者は二人の小学生以外には居なかった。

二人の小学生は眼前に広がる漆黒の闇と火星や太陽からのわずかな光に照らされた空間を双眼鏡片手にじっと眺めていた。

「ん？さっきから加速していないかな？この船」

コテンと首を傾げる天草華子。宇宙に出てから病んだ心を映す能面の様な無表情さに変化の兆しが見えていた。

「そうだね。展望台からは見えないけど火星からのビームで加速してるらしいっしょ」

表情は明るく、口調は元の調子に戻っていたが、まだ少し声が小さい名取優美子だった。

火星日本を出発して2日しか経っていないが既に見慣れた赤と水色に染まる惑星は大分小さくなっていった。天草華子と名取優美子は仮想世界大戦で病んだ心を癒すべくこの木星探査船に搭乗していた。

探査船の搭乗員は皆日本政府やJAXAの職員であり、同年代の少女は居ない。だが、搭乗員は皆二人を特別視することなく自然体で接していた。同年代ばかりの学校とは違う、落ち着いた雰囲気の間二人は比較的落ち着いて対処していた。

むしろ、娘と同じ船に乗っている事でテンションMAXな親バカの方が目だっていた。

——

同日午後3時【関門海峡通過中】海上自衛隊 音響測定艦『とどろき』CIC】

午前中の緊迫した任務を終えて帰途についていた音響測定艦『とどろき』は、日の傾いた瀬戸内海を東へ航行していた。

C I C に詰めていたミツル商事一行も緊張が解けて満社長が淹れたお茶を飲みながら、昨日からの緊迫した神経を休めていた。

「ところでですね」

C I C 真ん中に設置された巨大な制御卓上に置かれている場違いな金魚鉢をつつきながら岬が与呼島 舞に訊く。

「これ、どうするんですか?」

金魚鉢の中には直径1.5センチほどの糸ミミズの塊のような生物が蠢いていて、金魚鉢の同居人であるボラの稚魚に餌と間違われて何度も口に吸い込まれては異物として吐き出されていた。

「マリネちゃんは私が責任を持って面倒を看ます!」

珍しく真剣な表情で女性教師の姿に戻っていた舞が岬に答える。

「と、言っています社長?」

琴乃羽が満の判断を求める。

「舞さん。この糸ミミズーじゃなかった、マリネちゃんだけど、

元の大きさになることはあるの?」

満が確認する。

「ないわ。超電磁細胞縮小現象で肉体を構成する細胞を最低限にまで除去したから。もう一度莫大な荷電粒子を浴びない限り、山の様な餌を与えたところでマリネは元の姿には戻らないわ」

とてとてと満に近づいて背中によじ登りながら美衣子が答えた。

「それじゃあ、舞さんが責任を持つこと。それと、舞さん達は美衣子からいろいろと教わってね」

ひかりが舞と、黄星姉妹の方へ顔を向けて言った。

「わかったのだぞっ!」

相変わらず簀巻き状態の輝美が美衣子の前まで転がってくるとそのままの状態で首をコクコクと前後に振る。

「先生の先生おねがいしますですう〜」

守美もゴロゴロと転がろうとしたが、波に揺られてC I C 室内が傾いた勢いで自動扉まで転がってしまい、開いた扉から廊下へ転がり出る。春日が守美を回収するために虫取り網を持ってC I C を出ていった。

「マリネの事は取りあえずそれで岩崎さんに相談するとして、舞さん、今回の騒動で人類側犠牲者の数をご存知ですか？」

満が真面目な表情で質問する。

沈黙して首を横へ振る舞と輝美。

「2、153名です」

満が告げる。

「ユーロピア輸送船団で沈没した船と運命を共にして水死した兵士達、五島列島と対馬レーダー基地がレーザー攻撃に晒された時の爆発に巻き込まれて亡くなった隊員さん達の合計ですよ」

「仮想世界大戦は、東京と神奈川の一部の自治体で電子機器に異常が起きて部品を交換しただけで済んだけれど、今回は多くの人が命を落としているんだ。日本政府や他の火星諸国はこれを引き起こした張本人を絶対に許さないと思う」

「舞さん達から見れば、私達下界生物の生存競争だから種として多くが生き残れば多少の損失には目を瞑る、という考えを持っているかも知れないけど、それだと、ヒトの社会では生活できない」
諭すように満が説明する。

「やはり、このまま日本列島に留まるのは難しいでしょうか？」

琴乃羽が訊く。

「本来であれば、私達の知らない未知の世界へ戻るべきだと思うよ」
あっさりと答える満。

「貴女達はどうしたいの？」

美衣子が訪問者三姉妹に訊く。

「私達はまだまだ生き物の習性を知らなさすぎでしたねえ」

守美がしみじみと呟く。

「ちよつとは悪いことしたと思うのだぞっ！せめて少しは取返しをしたいのだぞっ！」

輝美はばつが悪そうに呟く。

「マリネちゃんと一緒ならどこへでも行くのだぞっ！と。でも、貴方達の言い分も理解できるのだぞっ！」

「だから今木星アステロイドベルトから地球へ向かっている「浮島」

が無事に第3惑星に着地するまで浮島と地球の原住生物を守護するのだぞっ!と」

少し考えた後に舞が美衣子に申し出る。

「取り返しのつかない事はどうにもならないわ。だけど、少しでもその環境を元に戻せる心意気があるのなら地球行きを日本政府にお願いするのに付き合っただけあげる」

美衣子はそう訪問者三姉妹に答えるのだった。

作戦前夜

2023年6月15日【火星衛星軌道上 航空・宇宙自衛隊ダイモス宇宙基地】

「第2ハッブル望遠鏡が木星方向から急速接近する複数の巨大質量物体を探知！速度秒速5km、距離30,000km、大きさ1,600km以上!？」

司令室のレーダー管制官が当惑しながら当直指令に報告する。

ダイモス宇宙基地の司令部モニターには画面一杯にソーラーセイル（太陽風を受け止める「帆」）を展開した日本列島オブジェクトが複数のマルス基幹母艦に先導されながら接近する様子が映し出されていた。

当直司令は腕時計を一瞬見ると、暗号コードでの識別確認を指示した。

「・・・美衣子嬢の事前予告通りだな。しつかりしろ！これは事前に通過連絡が有った我々人類のアステロイドベルト船団だ！マルス通信システムを使って呼びかけろ！コード「カラメル」！」

航空・宇宙自衛隊では美衣子のアドバイスにより、彗星並みのスピードで飛来する物体との通信では通常電波では雑音が酷いことからマルス文明が利用するPⅡピラミッド エネルギー波を利用した通信システムを使用している。暗号誰何コードまで美衣子が考案した優れものである。

「こちらダイモス宇宙基地、日本航空・宇宙自衛隊。接近中の物体に告ぐ、コード「カラメル」！」

「良く聴こえる。コード「プリン」、相性は良さそうだ。日本列島オブジェクト『タカマガハラ』 駐留イスラエル連邦軍司令部」

通信オペレーターの間いかけに間髪入れずに明瞭な音声で返答が入る。

「お帰りというべきか、行ってらっしゃいと言うべきか、貴官らの幸運を祈る」

「日本国と火星諸国の支援に感謝を。我々は地球へ「帰還する」。貴

官らに絶対神ヤハウエイの加護があらん事を』

自衛隊の呼びかけにユダヤ教が信奉する神様の祝福で答えるイスラエル司令部。

宇宙望遠鏡や宇宙基地からの望遠映像では分からないが、彗星並みの速度で火星を通過する物体の大きさは最も小さいマルス基幹母艦でさえ直径20kmである。日本列島オブジェクトに至っては直径1,600kmで想像を超えており、望遠鏡モニターを拡大しなくても識別できる。

「自分は夢を視ているのでしょうか？」

顔を司令席に向けていないものの、口調から呆けた顔であろうことは確実な若い通信オペレーターが呟く。

「今は当直勤務中だ。居眠りしているならば外の空気を吸って来い！空気が有ればの話だがな！」

本来であればとつくに定年退役している筈の当直指令がしわがれた声で面白気に応える。

当直指令は定年退職後、生まれ故郷である東北地方の田舎で畑仕事をしていたが、桑田防衛大臣自ら田舎に來訪して現役復帰を要請してきたので「人生最後のご奉公」とも言うべき古巣に戻っていた。

人類反攻作戦参加の為に、日本自衛隊を始めとする殆どの部隊が地球へ向かっており、火星諸国や日本列島防衛に必要な最低限の隊員を確保する為日本政府は、臨時時限立法で自衛隊や民間軍事会社(PMC)で採用する職員の年齢制限を75歳までに引き上げていた。

「ふむ。突発事態に慣れとらん所は今も昔も変わらないようだな」

昭和62年の東京大停電時(*)に、富山湾へ緊急出動した海上自衛隊護衛艦艦長を務めた当直将校は小さくため息を吐いて呟くのだった。

(*第15話「タカミムスビ」ご参照)

【東京都新宿区市ヶ谷 防衛省(地球防衛連合軍司令部)第3庁舎地下司令部】

司令部のモニターはダイモス宇宙基地から中継される映像の他に臨時ニュースを流すNHKや極東BBCの中継画面を映していた。

「数時間前に発見されて今も火星に近づいているこの超巨大物体の正体について日本政府は、日本列島消滅で発生した地球の地殻変動を鎮静化させる為の人工的建造物「日本列島オブジェクト」であると説明しています。第1衛星フォボスの宇宙基地からクラーク記者がお伝えします」

極東BBCの画面がいかつい造りで動きにくそうな宇宙服を着て第1衛星フォボスの表面に立つ記者を映し出す。

「この衛星フォボスにある英国連邦極東・ユーロピア宇宙軍基地では、第2衛星ダイモスに在る日本自衛隊の宇宙基地と連携しながら超巨大物体の追跡を行っています。この超巨大物体は、マルス文明人の技術支援を受けた日本の大手ゼネコンからなる建設共同体が半年という驚くべき速さで建設されました」

「超巨大物体は、日本列島消滅で重力バランスが崩れた地球に着床することで大変動を鎮静化させる目的を持っています。したがって、この巨大物体は質量もそうですが、形状も日本列島に非常に似通っています」

「そして、ダウニングタウンの公式発表では火星に駐留していたイスラエル連邦軍から選抜された特殊部隊が駐留して物体を制御していると言う事です」

宇宙服の中で説明するクラークのくぐもった声が副音声で司令部に響く。

「NHKは現場中継しないのでしょうか？」

たまたま輸送計画の打ち合わせで司令部を訪ねていたミツル商社の満社長が傍らに付き添っていた鷹匠少将に訊く。

「台風中継みたいにレインコートとビニール傘で飛び出そうものなら即死する場所ですよ？」

呆れた顔で答える鷹匠。

「NHKはブラック企業ではないと言いたいのでしょうかね」

満の隣で興味深げにモニターを見上げるひかりが皮肉気に言った。

「それは総務省にでも聞いてください。綺麗事を言っているのは自衛隊は務まりませんかからね」

首をすくめる鷹匠。

「それはごもつともです。・・・失礼しました」

恐縮して謝罪する満。

「これで遂に始まりますね」

少しばかり緊張した声音でひかりが呟く。

「ええ。先行している各輸送部隊はこの日本列島オブジェクトとマルス基幹母艦に順次合流して地球衛星軌道に到達して反抗作戦が始まります」

鷹匠が応える。

「地球解放と地球環境再生、壮大な作戦ですね・・・」

満が感無量な声音で呟く。

「ええ。ですが我々は出来る事を可能な限り遂行するのみです」

鷹匠が決然と言った。

極東BBC放送のカメラが引いてソーラーセイルを装着した日本列島オブジェクトの全景が映し出される。

蛍のように明滅するマルス基幹母艦船団に導かれるように、巨大な龍がたてがみを靡（なび）かせながら、漆黒の宇宙空間を泳いでいるような光景だった。

司令部に詰めていた者は暫しの間、画面に魅入っていた。

宇宙基地の隊員はもとより、火星各地の人類も壮大な天体ショーとも言わべき映像を視ながら、人類反抗作戦の始まりを実感するのだった。

——同時刻【地球衛星軌道 月面都市「ユニオンシティ」郊外マルス文明研究室】

火星付近を通過する日本列島オブジェクトの中継映像は、マルス通信システムによってリアルタイムで月面でも受信されていた。

「そう、火星を通り過ぎたのね。そろそろかしら」

ニュートリノビームを発射する予定のライフル製作に励んでいた結が手を止めて研究室のモニターを視る。

「途中で輸送部隊と合流してオブジェクトに輸送艦を「載せる」のであと2週間はかかるようですよ。人類単独なら3年はかかる道程に

比べると、とんでもないスピードですが」

研究室を訪ねていた東山が結に応えた。

「当り前よ。美衣子姉さまの叡智と、私や瑠奈が経験してきた46億年のデータターを全て結集させて作り上げた三姉妹オブジェクトよ」
何故か作業台の上に登って胸を張ってふんぞり返る結。何かを主張したいようだ。

「あんなとんでもない大きさのものをどうやって彗星並みの速度から地球へ着床させるんですか？」

素朴な疑問で東山が尋ねた。

「ソーラーセイルで太陽電子風を受ける角度を調節して減速、後はマルス基幹母艦のシールド展開で秒速2mまで落として極東中緯度に着水、着床よっ！」

作業台からとんつ、とジャンプした結が床へ華麗に着地した、と思ったらライフルの細かい部品を磨いていたワックスの上に着地したので盛大に床の上を滑って研究室の端に激突した。

「・・・なんて凄くベタな暗示なんだ」

壁に激突して目を回す結を助け起こしながら東山がぼやく。

「それはそれとして、東山はこんな郊外の研究室まで何をしに来たのかしら？」

あたた、と頭を押さえながら結が普段は立ち寄らない東山に訪問理由を尋ねる。

「実は、イスラエル連邦から極秘の依頼を受けまして・・・」

東山がミツル商事地球方面支社長として結にとある依頼をするのだった。

――1時間後

「東山、生き残っていた人工衛星を使って指示された通りのポイントを調べてみた」

結が淡々と調査結果を報告する。

「地球ユーラシア大陸中央からインド亜大陸に極東、南米を中心に12か所で広域電磁波シールドが観測されている。大変動以来、これらの地域は閉鎖されていたから殆どノーマークだった」

結が研究室のモニターに調査結果を表示する。

「大変動前の地球大都市所在に重なるのだけど、電磁シールドに阻まれてシールドの内側は覗けなかった。ハッキング出来るエリアでもないしお手上げ」

ため息をつく結。

「いえ、ありがとうございます結さん。これでニタニエフ首相から毎日催促されずに済みます！後はイスラエル連邦に任せましょう。彼らは地上部隊で詳細を調べるでしょうから」

上機嫌で答えると東山は研究室を出て行った。

「彼らの地上部隊にアイルランド島の瑠奈も含まれるのではないかしら？」

ボソツと結は呟いた。

――――

2023年6月20日【ユーラシア大陸東方 東アジア 旧中華人民共和国 東北地方】

「お嬢、この街はバグズに喰われていないですね。住人がシャドウ・マルスの福音システムで溶解した形跡もない。珍しい事もあるものだ」

住人の居ない廃都市を調べていたワイズマン中佐が瑠奈に報告する。

「最近、司令部のウチラに対する扱いが酷いっス！いくらマロングラッセが宙空両用戦闘艦だからと言っても、何で基地から遠く離れた、こんな閉鎖地帯の奥深く潜入しなくちゃいけないっスか!？」

瑠奈が抗議する。

「まあまあ、そう言わずに。火星の大月社長始めミツル商事の皆さんは海獣退治やら輸送業務集中やらでもっと大変らしいですぜ？」

ワイズマンが宥める。彼は事情を分かっていた。

「仕方ないっスね。それにしても、こんな「安全地帯」を離れてどこへ行くんっスかね？ここ以外はインフラが破たんして生きていけないっスよ？」

憤りを鎮めた瑠奈が首を傾げる。

「隊長！マロンングラッセから緊急連絡！西から飛行物体接近中！IFF（敵味方識別信号）応答ありません！」

通信機を肩に掛けた部下が、近隣の山間に隠れて待機していた「マロンングラッセ」から緊急コールを受信すると、ワイズマン中佐の元へ駆け付ける。

「お嬢！マロンングラッセに戻る時間がありません。民家に隠れましょう」

ワイズマンが瑠奈を都市郊外にある廃屋へ案内する。

「飛行物体はミル17大型輸送ヘリコプターです！古いな、年代物だぞ。標識は赤い星・・・？中国人民解放軍だつて!？」

軍用双眼鏡で外を監視していた隊員が驚きの声を上げる。

「いつの時代なんだ!?!アースガルディアでもなく、ユニオンシティでもないのか?！」

ワイズマンが思わず部下に再確認する。

「ミル17が平文で通信中。通信相手は・・・、『人類統合政府』?」通信を傍受していた隊員が怪訝な顔をする。

「彼らはこの近くにある『第12都市』とやらへ向かっているようですよ」

「お嬢、どうします?！」

「・・・おかしいつス」

ワイズマンの問いに瑠奈が疑問を唱える。

「考えてみれば此処は閉鎖地帯で火山灰濃度が高いから、ヘリコプターエンジンなんか直ぐショートして爆発するつスよ!?!」

「おい!この街の火山灰濃度は?！」

瑠奈の疑問に答えるべくワイズマンが大気汚染濃度を調べるように指示を出す。

「汚染濃度、大気中の火山灰濃度2パーセント、大変動前の数値です」

「馬鹿なっ!！」

「マロンングラッセに連絡！付近に電磁バリアーがないか調べてもらっス!！」

動揺する隊員を余所に瑠奈がある確信に基づいて指示を出す。

「マロンググラッセから返信、この街から東200km地点に巨大電磁バリアーの反応を検知！」

「直ぐに戻るっスよ！」

瑠奈が腰を浮かせようとしたところをワイズマン中佐が押し留める。

「何やってるんですか！まだヘリが近くに居るんですよ？」

ワイズマンが注意する。

「人類統合政府とやらに話を聞きに行ってもいいんじゃないっスカ？」

けろりとした顔で瑠奈がワイズマンに訊く。

「IFF（敵味方識別装置）の登録も無く、孤立無援の状況下で4年以上も閉鎖環境で人類が大規模に生き延びられる訳がありません！それが出来る相手とは、我々と同レベルの技術力を持つ勢力……」
深刻な顔のワイズマンが思考しながら言葉を発した。

「つまり、敵です」

――――
【東アジア 人類統合政府 第12都市（旧中華人民共和国 黒竜江省ハルピン市）】

西部地方旧ウイグル自治区から飛来したロシア製のミル17大型輸送ヘリコプターが、砂塵と薄く積もった火山灰を巻き上げながら郊外の基地に着地してタラップを下ろした。ヘリの中から真新しい人民解放空軍の制服を着た一人の若手将校が現れて地上へ降り立つ。

「ようこそ、偉大なる人類統合政府「第12都市」へ。君が新しい宇宙軍の戦闘機パイロットだね？」

地上に降り立ったのは良いものの、途方に暮れていた若手将校にサングラスをかけた年配の上級将校が近づいて来る。

「はいっ！自分は人類統合政府「第10都市」公安部隊から転属してきた黄浩宇少佐であります！」

話しかけられた若手将校が飛び上がらんばかりに敬礼する。

「ははっ！元気なようで結構。楽にしてよろしい。私は人類統合政

府軍宇宙機動部隊司令官の王子軒准将だ」

柔らかい声音で黄の敬礼に応えて答礼した。

「宇宙機動部隊、でありますか？」

休めの姿勢で黄が尋ねる。

「そうだ。君はこれから最新鋭宇宙戦闘機に乗って人類統合政府と人民を「敵」の手から守らなければならんだ」

王が答えた。

「敵、でありますか？」

「その通り。偉大なる中華民族の祖国を破滅に追い込んで人類を滅亡寸前にまで追い詰めた火星人の事だ。間もなく火星からエイリアンとその手先が地球に攻めてくる。君と私はその最前線で、人類統合政府を守る崇高な任務に就くのだ」

北京の中央政府が欧米と日本に核戦争を挑んで崩壊したと聞いてもなお、中央政府の指示を守って西安公安部隊を指揮し、多くのウイグル族やチベット族の反抗分子を粛清し続けた黄が、最近発足した人類統合政府軍に抜擢されたのだ。

地方都市で愚直に任務に励んでいた黄にとって、人類統合政府軍への抜擢は輝かしい栄達の証だった。

「はっ！全身全霊で火星人と手先共を撃滅します！」

勢いよく再び敬礼する黄には、北京中央政府崩壊後の世界情勢や人類統合政府の成り立ちに関する疑問よりも、宇宙で活躍出来ると言う少年時代に中国の宇宙ステーション「天宮2号」の中継映像を視て以来の願望が実現する喜びが勝っていたのである。

「では、これから早速迎撃作戦のブリーフィングだ。君も付いてきたまえ」

王はそう言うのとサングラスの奥で「縦長の瞳」を細めると司令部へと向かった。

混沌編 人類反攻 影の帝国

【地球 ユーラシア大陸東部地区上空350kmの宇宙空間】

灰色と青色の斑に染まる惑星を眼下に、ミグ98高空・宇宙戦闘機の群れが大気圏を離脱しようとしていた。

『シエンロンリーダーから各機、間もなく大気圏を完全に離脱する。ブースター切り離し手順に移行せよ。初仕事は火星人に乗っ取られた人工衛星の破壊だ。これ以上奴らに地球の衛星を好きに使わせるな！』

戦闘機部隊隊長王准将からの指示が黄少佐が被るヘルメットに内蔵されたイヤホンから聴こえてくる。

黄には初めての宇宙空間だったが、これから向かう戦場への不安もあり、堪能する余裕は失われていた。

「メイユウ35、メーデー！切り離し機器に異常あり！ブースターが離れない！地球に引つ張られて失速中！メーデー！」

『こちらシエンロン・リーダー、メイユウ35の戦線離脱を許可する。幸運を祈る！オーバー』

「こちらメイユウ35、見捨てないでくれ！後続B2爆撃機の救助を要請する！メーデー」

『メイユウ35、B2は指定任務があるのでそこらには回せない。我々は貴官の志を無駄にはしない！これ以上の通信は敵に傍受される恐れがある。通信終わり！』

黄のすぐ後ろを飛んでいたミグ98がブースターの切り離しに失敗して失速して機体制御が出来ずにブースターもろとも落下していくのをコクピット脇のサイドミラーで黄は、なす術も無く見る事しか出来なかった。

やがて失速したメイユウ35の機体はそのまま石のように落下すると、斑模様の大気圏に再び接触して摩擦熱に機体を焼かれながら爆発して四散した。

『シエンロンリーダーより各機へ、我々は戦友の犠牲を忘れてはならない――。間もなく最初の目標が見えてくる。全機、衛星破壊ミサイルの安全ロック解除、対空レーザースタンバイ』

「こちらウラル58、9時の方向から未確認飛行物体多数接近中！」
大気圏を抜けて漆黒の空間に踊り込もうとしていたコスモファイター群は、真横から突撃してくる未確認飛行物体に機首を向けた。

黄は汗ばむ掌を何度も宇宙服を着ている足に擦り付けながら操縦桿を握りしめた。

「シエンロンリーダーより各機へ、未確認飛行物体は火星の異星人が指揮する戦闘機だ。皆の奮戦に期待する。統合政府万歳！レッツ、ダンス！」

*衛星軌道で練り広げられた制宙戦。イラストレーター鈴木プラモ様の作品です。

ミグ98はユニオンシティ防空部隊のF45スターファイターとのドッグファイトに突入した。

――

2023年7月1日【地球 オセアニア生存圏 旧オーストラリアノーザンテリトリ―準州 地球連合防衛軍テナントクリーク基地】
寒く乾燥した砂漠地帯の真ん中に位置する南半球最後の人類生存圏を護る基地の滑走路脇にずらりと並んだ電磁式プラットホームには、急ピッチで建造された真新しいシエフィールド級空中輸送艦がセツトされていた。

シエフィールド級空中輸送艦はマンスフィールド級空中戦艦を全面改装して輸送スペース拡張に特化、1隻当たり500名の完全武装兵員を運ぶことが出来る。翼を付ければ恐らく、旧ソ連空軍のアントノフ大型輸送機に似た景観になるだろう。

「壮観だな」

ジョーンズ中將は地下司令部のモニターに映し出された新造輸送艦隊群を眺めて呟いた。

「ええ。ミス瑠奈が残してくれた「船これレシピ」に従って、オース

トラリア大陸中の旅客機をかき集めて解体、接合し直したただけでしたがなかなかどうして、火山灰に塗れた空を飛ぶのですから大したものです」

量産化の指揮に当たった技術将校がジョーンズに応える。

「この艦隊の最初の任務が中東と月面を往復する弾丸シャトル扱いとは、いささか腹立たしいところだがな」

ジョーンズが皮肉気に言った。

「かの地は地下都市ですし、近隣のトルコや旧イスラエル領内主要空港までは距離もあります。黒海から湧き出すバグズの襲撃もあります。迂闊に穴倉から出れないのでしょうか」

司令部付きの情報将校が説明した。

「カッパドキア地下都市を脱出して月面都市に一時避難か。我々に無茶振りの要請をするとは、何様かと言う気もする」

「地球人類存続の為です將軍」

情報将校が小さい声で宥め、ジョーンズは肩を竦める。

「それだがな、イスラエルは日本国の手厚い支援を受けるようになってから要求がエスカレートしている気がしないか？」

思案するジョーンズ。

「何か気懸りでも？」

「彼らにとつて日本は絶望の只中で手を差し伸べてくれた神に等しい存在だ。同時に彼らは、こう勘違いしているかもしれない「我々は神に選ばれて救われた存在である」とな」

直接的な勘に基づいた話をジョーンズは続ける。

「私はこの戦乱が収まった後に、地球上でイスラエルが覇権を望むかもしれないと考えるよ」

司令部の天井を見つめながら結論を口に出す。

「流石にこの発言は不味いでしょう」

情報将校が今度こそ注意する。

「すまん。とりとめもない爺の戯言だ、聞き流してくれ。イスラエル大脱出手順はどうなっている？」

話題の転換を図るジョーンズ。

「カッパドキア到着後に輸送艦隊は、ミス瑠奈がブリテン島で開発・製作した宇宙空間航行用ブースターと再突入時に船体を護る耐熱タイル装着を行った上で、イスラエル国民800万人の月面都市へのピストン輸送を開始します。艦隊が1日に運べる人員は5万人です」

「それでは全然間に合わんぞ。先に日本列島オブジェクトが到着してしまうではないか!?!」

「はい。見積もりでは、作戦開始時までには避難出来ているのは150万人程度になるでしょう」

「8割以上の国民を天変地異の中に置き去りかね!?!」

「イスラエル政府も苦渋の決断でしょう。しかしこのままでは国民が死に絶えてしまいます。ミツル商事マルスシャトルを全て動員出来れば状況は改善されるでしょうが、現在火星からの兵員輸送に全て使用されています。イスラエル国民の輸送に振り向けると作戦参加部隊の集結が遅れ、作戦の遅延に繋がります」

「悩ましいな・・・」

イスラエル避難計画についてはこのまま話しても妙案が思いつかないとみた情報将校が作戦将校に目配せして反攻作戦の検討に入ろうと次の議題の資料を広げ始めた。

次の瞬間、地下司令部の室内灯が赤色に切り替わって明滅する。

「敵襲!・デイエゴガルシア方面からバグズの群れとB2爆撃機編隊が接近中!」

「オセアニア生存圏全域に緊急警報!・オセアニア生存圏最後の砦を死守するのだ」

今日も慌ただしくジョーンズの一日が始まる。

—————

同時刻【中東 旧トルコ領内カッパドキア地区地下都市 新エルサレム イスラエル連邦国防省（地球連合防衛軍中東司令部）】

薄暗い司令室脇の会議室に物憂げな顔で座るニタニエフがおもむろに切り出した。

「長官。早速だが例の件について、最新情報を報告してくれたまえ」
モサド長官が会議室内のホログラムモニター上に居並ぶ各国首脳

部の面々へ向けて僅かに会釈すると報告を始める。

「ユーラシア大陸極東及び南米大陸で発見された大規模な人類生存地域について、新たな情報を入手しました。先日、旧ロシア連邦カザン地区で所属不明のヘリコプターが不時着しているのを偵察任務中のわが軍特殊部隊が発見、生存者を救助しました」

「ちよつと待ってください。北半球は火山灰濃度が濃いせいで通常の航空機では飛行不可能と聞いているが？」

澁澤首相が疑問を投げかける。

「肯定です、首相閣下。しかし、カザン地区の濃度は何故か大変動前の地球大気レベルでした」

モサド長官が答える。

「環境操作されているというのかね？」

ケビンが尋ねる。

「それについてはこちらから報告します」

月面基地臨時司令官の東山が発言する。

「月面都市研究室から地球の特定地域、大変動前の都市名で、ハルピン、成都、オムスク、カザン、イスラマバード、ヤンゴン、ブラジリア、ベオグラード、バイコヌール、ニューデリー、バンデンバーグ、フェニックス等の12都市で大規模な電磁シールドの反応を確認しました。ミス結の分析によりまずと、電磁シールド展開時の電気特性を利用して火山灰のみを排除しているものと思われます」

東山が地球の立体映像で表示された12都市をポインターで指し示しながら説明した。

「北米の2か所を除いて殆どが第三世界じゃないか。大変動後に我々西側世界が見放した地域だ」

ケビンが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「我々は確かにあの地域を物資不足から、閉鎖という名の下に無視しました。しかし、12都市も生き残っているなんて・・・」

ユーロピア共和国のジャンヌ首相が驚愕する。

「皆様失礼します。話題がずれております。話を元に戻します。生存者はヘリコプターのパイロットで不時着の衝撃により大破した機

体と操縦席に挟まれて重傷でした。部隊が応急処置を施している間に最低限の事を聞き出して間もなく、パイロットは傷が酷く死亡しました」

モサド長官が話題を元に戻す。

「パイロットの所属は『人類統合政府 第7都市統合軍』輸送部隊所属だと名乗りました」

「人類統合政府だ?!」

スイス連邦の首相が思わず訊き返す。

「はい。彼らの所属する都市は人類統合政府によって治められているとの事です」

「国連の後継組織ではないのかね?」

モサド長官の答えに更に問いかけるスイス連邦首相。

「違います。我々が大変動後に収集した情報の中で新しい統合政府という意味で言えば、宇宙国家アースガルディア以外にありません。この人類統合政府という存在は、半年前に突如として表舞台に現れた組織で謎が多いのです」

「人類統合政府に属する12都市とその軍事組織である人類統合政府軍のデータは、墜落したヘリコプターの記録媒体から引き出すことが出来ました」

データを表示したスクリーンを操作しながら三次元地球儀上に12か所の都市を表示するモサド長官。

「この12都市は月面から観測した広域電磁シールドの発信地点と一致します」

思いもがけず新しい人類生存圏が発見されたことに動揺を隠せない各国首脳の中から発言を求める首脳が居た。

「地球上に広がったバグズを撃滅してエリア51のシャドウマルスを倒すためにも彼らと共闘するべきではないでしょうか?」

澁澤首相が提案した。

「タロウ。君は火星に居るから分からないだろうが、この大変動と火星のバグズが襲来している状況下において、人類単独の技術で12か所の大都市を束ねる組織が急に現れた事は違和感が有りすぎる。

明らかに怪しいのだよ」

ケビンが発言し、イスラエルやスイスの首相が同意と言わんばかりに深く頷いた。

「会議直前に判明した分析結果によると彼ら統合政府の「目的」が判明したとの事です」

「目的だと?」

モサド長官は少しだけ息を長く吸うと告げた。

「火星に住む異星人とその手先から地球を防衛する。これが彼らの目的です」

会議の参加者は皆、沈黙した。

人類反攻作戦の攻撃目標がエリア51であることに変わりはないが、新たな生存圏が連合防衛軍に敵対してきた場合の対応については結論が出なかった。

そして、この地球で新たに発見された生存圏を火星諸国へどのように伝えるかでは、統合政府と言う表現だと正当性を相手に与えることになる。英国連邦極東とイスラエル連邦が異議を唱え、代替案として「影の帝国『エンパイア・オブ・ザ・シャドウ』」との呼称が採用された。

—————

2023年7月4日【月面都市内 地球連合防衛軍 月面都市防衛司令部】

ユニオンシティ中央行政庁舎最上階にある臨時司令部では深夜に突然、警報が鳴り響いていた。

「どうしました!?!」

寝ぼけ眼の東山が駆け込んで来る。

「地球ユーラシア大陸東部から多数の飛翔体が打ち上げられて真っ直ぐにこちらへ向かっている。数はおよそ100、到着は3時間後」
制御卓に着いていた結が、抱き枕を膝の上に置いたまま、忙しなく操作をしながら答える。

「ユニオンシティ全域に緊急警報。宇宙版アイアンドーム防衛システム稼働。自律型迎撃ドローン展開!」

東山が作戦将校の方を向いて迎撃態勢を指示した。

『司令部！こちら日本国航空・宇宙自衛隊地球派遣群「そうりゆう」所属、特殊機動部隊の高瀬です！迎撃いつでも出れます！』

福音システムの調査で月面都市に停泊していた自衛艦隊から通信が入る。

「接近する飛翔体をデータベースにて照合。旧アースガルディア宇宙軍ミグ98コスモファイターとユニオンシティ戦略宇宙空軍所属、高空・宇宙爆撃機ロッキードB2ステルススターフォートレス！」

レーダー分析官が報告する。

「F45スターファイターをスクランブルさせろ！迎撃ドローンは都市部への侵入を防げ！自衛隊パワードスーツ部隊は都市郊外上空に展開、ドローンが撃ち漏らした敵を排除せよ！」

東山の指示を受けた月面司令部の作戦将校が各部隊へ指示を出す。

「二度目の宇宙戦争の始まりだ」

東山が呟いた。

司令部のモニターはぐんぐん迫るミグ98の大編隊を映していた。

月面防衛戦《前編》

2023年7月4日【地球衛星軌道 月面都市「ユニオンシティ」
かつてユニオンシティと言う新生国家の首都だった場所に、アース
ガルディアからの独立戦争以来2年ぶりにけたたましい非常サイレ
ンが鳴り響いていた。

ロシア人が建国した『宇宙国家アースガルディア』から2021年
に独立したこの国の首都は、1990年代から秘かに建設されてきた
NASAとアメリカ空軍が極秘裏に開発整備していた観測基地の他、
もともとこの月面を「製造した」マルス文明地球観測研究施設の居住
区画が融合した興味深い施設である。

シャドウ・マルスが仕掛けたリリー電磁波による福音システム攻撃
によって、20万人を超えていた地球避難民を始めとする人口の大部
分が溶解して広大な密林と化したとは言え、たまたま月の裏側のプラ
ントでヘリウム3の収集作業に当たっていた作業員や、パトロールに
出勤していた部隊が生き残った形で都市に留まり、植物化した国民が
再びヒトの姿を取り戻す日が来ることを願い、人間が住める都市とし
て最低限の景観維持に努めていた。

「敵機動部隊が月面都市に接近中！第1種戦闘態勢！基地内の全迎
撃機は直ちに発進せよ！」

慌ただしい口調で呼びかける司令部からのアナウンスは、月面都市
に留まる僅かばかりの住人達へ戦闘準備を促していた。

【月面都市「ユニオンシティ」防衛軍臨時司令部】

司令部内では様々な部隊や管制官の指示や報告が飛び交っていた。

「シャドウ帝国軍、ラグランジュポイントを超えました！月面都市
防衛ライン接触まであと30分！」

「外郭防衛線 自動迎撃衛星の索敵・攻撃コマンドを自律モードへ
移行します」

「F45迎撃機部隊に告ぐ、外郭防衛線には近づくな！自動衛星の
攻撃を食らうぞ！」

『こちら迎撃部隊グリーンリーダー、ミグ部隊をリーダーで確認し

た。フェニックスミサイルの射程に入り次第ロングレンジ攻撃を開始する！各隊7機1組でミグ戦闘機に対処しろ！一騎打ちなんて無謀なことはするなよ！』

「宇宙空母ミッドウェイと巡洋艦インディアナポリスは迎撃部隊後方に展開してミサイルとレールガンで支援砲撃準備！」

「結さん。私達はもはや傍観者ではないでしょうか？」

東山が隣でふんぞり返ってモニターを眺める結へ自嘲気味に話しかける。

「心構えが足りないわ。司令官とは後方でふんぞり返るものよ」

自ら実演する結だが、ちんまい爬虫類娘がフンスと胸を張る姿は将兵から見れば威厳とは程遠い微笑ましい姿に映るようで、近くを通り過ぎる伝令等はニヤリと片方の口許を吊り上げながらも笑いを堪えていた。

そんな光景を眺めて肩の力が抜けた東山だったが、レーダー管制官の報告に口許を引き締める。

「間もなくF45とミグ戦闘機が接触します！」

モニターの奥の空間で紅蓮の塊があつという間に左右へ拡がった。

「迎撃部隊交戦状態に突入！」

こうして月面都市防衛戦が始まった。

ミグ98のコクピットから視認できるくらいの明るさでF45が発射した対衛星ミサイル(ASSAT)がこちらに向かって急接近するのを黄少佐は冷静に確認していた。

「こちらシャオランリーダー、敵のミサイルは衛星攻撃用で動きは鈍重でこけおどしだ。罨がある筈だ、不必要な回避軌道は取るなよ！」

一直線に迫るミサイルに恐怖を感じた黄よりも経験の浅い数名のパイロットが、隊列を離れて射線軸から回避した。

直後にミサイル後方から幾筋もの青白い線を引いた弾丸が回避予測地点に撃ち込まれ、そこに回避機動をしたミグ戦闘機が吸い込まれるように接近して機体を撃ち抜かれて爆散した。

「馬鹿が！レールガンの餌食になりやがって！」

黄は毒づく。このやり口は前回の人工衛星攻撃任務でも食らっていたのだ。当時の任務では同じ時期に配属されたパイロットの4分の1が戻って来なかった。

「全機針路上のミサイルに30mm機銃照準。機首のレーザーバリア起動！自分が撃ち落としたミサイルの破片に当たるなよ！」

黄は僚機に指示すると機首にあるレーザーバリアスイッチを入れた。

真つ直ぐに進むミグ98の機首から小さな円形をした直径3mの緑色をした対障害物防衛用レーザーバリアが展開された。

続いて淡く緑色に光る機首の両脇から鈍いうなりを上げて30mm劣化ウラン機銃が発射されて針路の遙か先へ突き進んで行く。

F45スターファイターから発射された宇宙用フェニックス遠距離迎撃ミサイルは、マッハ7の猛スピードでミグ戦闘機に突進したが、針路正面からのウラン弾丸によって次々と破壊された。

「くっ！奴ら知恵を付けていやがる。流星はAIなのか!?グリーンリーダーより各機、敵は戦慣れしている。対空レーザーでの迎撃に切り替えだ！各隊は「一つの目標」へ全員が照準を合わせてレーザーを撃て！レーザー攻撃の後は近接戦だ。ロケットランチャーの準備もしておけ！幸運を祈る！」

ユニオンシティ義勇軍の隊長は矢継早に指示を出すと機首にある化学レーザー砲の照準を接近するミグ98編隊中央に合わせる。

「いいか！ドッグファイトに入ったらレーザー攻撃に拘るな！照準している隙を突かれて30mmを食らう羽目になるぞ！ダメもとで構わんからロケットランチャーからミサイルをばら撒け！」

グリーンリーダー率いるF45スターファイター戦闘攻撃機はきれいなダイヤモンド編隊を組むと一斉にミグ戦闘機群正面に白色の化学レーザーを撃ち込んだ。

黄の左右に展開していた僚機が不意に前方から差し込んで来た白い光線に機体を貫かれて一瞬で爆発する。空気が希薄なので大音量や激しい振動は感じられないが、腹に響くようなズシンとした鈍い振動を立て続けに黄少佐は感じた。

「シャオラン3、5番機がやられた。レーザーバリア解除、全機散開！エイリアン共を駆逐せよ！」

黄少佐が反射的に操縦桿をグツと真横に傾けると、側面のノズルから姿勢制御ガスが噴出してオリーブ色の機体は急角度で針路を変えて前方から殺到する白い殺人光線を避けた。

一瞬の判断が遅れた僚機が更に4機も機体を貫かれて紅蓮の炎を一瞬だけ上げて煙玉になった。

「生き残った奴は我に続け！敵編隊を分断して各個撃破する！」

散開したミグ98戦闘機の群れはレーザーとレールガンの弾幕を巧みな機動で躲しながらF45とユニオンシティ義勇軍艦隊へ突撃した。

【月面都市「ユニオンシティ」防衛軍臨時司令部】

「敵戦闘機部隊が迎撃部隊を突破！機動艦隊対空戦闘開始！」

『こちらインディアナポリス、司令部！こちらの迎撃ミサイルは奴らの戦闘機に追いつけないぞ！どうなっているんだ!？』

「落ち着け、インディアナポリス。迎撃部隊を艦隊護衛に回すからそれまでは近距離レーザーと20mmCIWSの弾幕で凌いでくれ！針路反転180度だ！迎撃ドローンを前進させるから早く戻って来い！」

「迎撃衛星の自律モード解除！こちらの空母と巡洋艦の後退を援護しろ！」

作戦将校が経験が浅くてパニックになりかけている巡洋艦へ懸命に指示を出していた。

「今度の敵は手強いわ」

戦況パネルを視ていた結が東山に声をかける。

「アースガルディア戦の時よりも宇宙戦闘における練度が向上したのでしょうか？」

次々と味方戦闘機の反応が消えていく戦況パネルを冷や汗を流して視ている東山が応えた。

「この前コア・サテライト人工衛星を襲ったミグ98にレーザーバリアは実装されていなかった筈。対応が素早くて技術的にも優れて

いる」

結が敵戦闘機のスペック表示を呼びだして分析する。

「思った以上にシャドウ側が保護下の人類勢力を上手く活用していますね」

東山が眉を顰める。

「保護されている人類がこうも従順なところが気になる」

結がぼそりと言う。

「こればかりは直接敵兵士に聞いてみない事には分からないですね。イスラエルが事の真相まで容易く話してくれるか微妙ですが」

東山が肩を竦める。

「・・・そうね。ちよつと瑠奈に相談してみる」

物思いに耽る結がとてとと司令室から研究室に向かつていく。

「えっ？結さんちよつと！戦闘指示はどうするんですか!？」

慌てて結を引き留めるべく東山が後を追いかける。

——【地球 欧州 イングランド ブリテン島 ニューベルファスト防衛軍レジスタント基地】

ユーラシア大陸東部の偵察任務から帰還した瑠奈とワイズマン中佐の部隊はひと時の休暇を過ごしていた。

瑠奈は朝から地下司令部の隣にある女王陛下の控室で女王陛下とロイド提督の三人でひたすら土をこねていた。

「のう、瑠奈よ。そろそろこの土いじりの意味を教えてくださいぬかか？」

女王陛下は、ドレスの上に作業用エプロンと言う儀典関係者が見たら卒倒するような服装で床の上で胡坐をかきながら土をこねていた。

「私も同感ですな。ミス瑠奈、この土がレジスタンスに役立つのですかな？」

戦闘衣にこれまた作業着という日曜大工には重武装な服装のロイド提督が手を休めずに質問する。

「火山灰と粘土のバランスが絶妙で重さも軽いんっすよ！軽石っすよ！」

瑠奈が二人にニパツと笑顔を向ける。

「軽石は分かるが、こんな軽い石をバグズにぶつけたところでダメージは与えられんだろうに」

呆れた表情の女王陛下。

「違うっスよ！虫なんかに使うのは勿体ないっス！マンスフィールド級に使うんっスよ！」

瑠奈がマンスフィールド級の模型を取り出して粘土の塊でコーティングする。

「この火山灰入りの粘土をタイル状にして空中戦艦の外壁に付ける耐熱・断熱効果が有って真空中でも船体が維持できるっス！」

立ちあがってエヘンと胸を張る瑠奈。

「それは素晴らしい事だがのう。一体どれぐらい作るつもりだ？」

頭の上に？マークを付けたような顔で瑠奈に質問する女王陛下。

「100万枚っス！」

「いつまでに？」

「明後日までっス！」

「ちよつと待てやコラ」

瑠奈の清々しい返事に王族らしからぬ言葉で反応する女王陛下。

「陛下すいません。ミス瑠奈は何かと思い付きで生きる生物でございまして……」

「ロイドおじさん酷いっス！」

「お嬢！こんな所に居たんですか。コントはいいので司令部からの呼び出しに応答してくださいよ」

ワイズマン中佐が控室のドアをノックして入るなり、床で格闘している三人組を見てうんざりしたような顔をする。

「あれっ!?ごめんっス！電源切っていたっス！」

「ここは平和な日本ではないのですからしっかりしてくださいよ」
うっかりした顔で謝る瑠奈にため息をつくワイズマン中佐だった。

「それで司令部の連絡は何っスか？」

「お嬢の携帯端末にメッセージは送ってありますから、読んだらすぐに行動して欲しいとの事です」

「また中東司令部からの無茶ぶりな命令っスかね？」

「いえ、月面都市のミス結からですが？」

「結姉さまっ！」

久々に聞いた懐かしい姉の名前に血相を変えた瑠奈が携帯端末を起動してメッセージを受け取った。

「ふむふむ……。ユーラシア大陸東部に出来た「人類統合政府」の国民について調べろと？」

瑠奈が首を捻る。

「お嬢、あれですよ。先日イスラエル特殊部隊がカザン地区で救助したヘリコプターパイロットの事じゃないですか？」

ワイズマンが指摘する。

「統合政府の情報は作戦会議で発表された筈っすけどね？」

「ミス結が知りたいのは、パイロット自身の情報じゃないですか？」

「イングランドのウチラにどうしろと言うんっすかね？」

瑠奈は首を捻っていたが、

「さあ……ハッキングなんて勧めている訳ではない様ですし……」

「それっす!!」

ワイズマンの呟きに反応する瑠奈。

「マロングラッセから試してみるっす！」

そう勢いよく叫ぶと瑠奈は階段を駆け上ってマロングラッセに向かう。

「さてと……」

ワイズマンも踵を返そうとして階段へ向かおうとしたが後ろから制服を掴まれた。

「まあ、ぬしもちよつと此処に座って土でもこねてみるか？」

素敵な笑顔の女王陛下とロイド提督が泥だらけのエプロンをかけて手招きしていた。

—————

結局、襲来したミグ98戦闘機の群れは迎撃したF45戦闘機部隊に大損害を与えたものの防衛線を突破する事が敵わずに一時的に地球の反対側へ退却した。

防衛側のユニオンシティ義勇軍は、主力のF45戦闘攻撃機部隊が

戦力の壊滅判断とされる3割を上回る4割の損耗率で事実上壊滅した。月面都市独立戦争時よりも機動性に劣る機体の改修に力を入れたものの、対するミグ98の性能も何故か遥かに向上しており、相対的にドッグファイトで競り負ける形となっていた。

結の観測によると、退却したシャドウ帝国軍はB2宇宙爆撃機と合流して補給を受けており、再度の来襲は確実だった。

「防衛体制の見直しを考えるしかない」
結が東山と作戦将校に向けて提案する。

「ユニオンシテイ義勇軍と機動艦隊は、慣れない戦闘と大きな損害で士気を喪失している。新しい防衛線として、中心に「そうりゆう」と英国連邦極東、ユーロピア宇宙軍の戦闘艦からなる弾幕艦隊、その前面に高瀬のパワードスーツ部隊を展開、左右はエリア防衛用ドローン衛星で固めるわ」

「高瀬、聞いての通り貴方達の出番よ。頼りにしている」

『いよいよ敵さんの大部隊とガチでドンパチですか！胸が熱いのであります！』

「攻撃を諦めないという事から、敵は何らかの新兵器を使ってこの月面基地を叩きたいと思っているから用心して」

意気揚々とする高瀬中佐に結が警告する。

結や東山が各部隊と防衛手順の打ち合わせをしていると、再び司令室の非常灯が点滅する。

「衛星軌道の向こう側からシャドウ帝国軍接近！ミグ98戦闘機70、B2S爆撃機20、その後方に大型熱源反応、戦闘艦艇5、識別データありません！」

「データが無いという事は新型か！火星本部に緊急連絡！分析を依頼しろ、P通信システムで要請しろ！」

『『タカマガハラ』が到着するまでは持ちこたえないとダメよ』
「ギリギリの戦いになりそうですね」

厳しい状況に結と東山は気を引き締めるのだった。

月面防衛戦《中編》

2023年7月4日23時01分〔月面都市ユニオンシティから90kmの宇宙空間〕

黄少佐はコクピット内に警報音が鳴り響くと脅威の方角を確認しないまま、操縦桿を前へ思い切り倒した。コクピットの少し後ろにある姿勢制御ノズルがバシユツ、と炭酸ガスを噴出して機体を強引に下方へ向けさせる。先程まで機体があつた場所に幾筋ものレーザーとレールガンの輝きが殺到した。

黄は戦術情報AIに頼らず、殆ど自身の勘に従って敵弾を避け、同士撃ちを躲し、レールガンと小型ミサイルを乱射する敵の自動迎撃衛星群を突破すべくジグザグな針路を取りながら敵機動艦隊に肉薄しようとしていた。

やがてヘッドアップディスプレイに近距離レーダー反応を画像処理した映像が表示され、暗闇でレールガンやレーザーを周囲に放つ巨大な艦影が肉眼の視界に入った。

「こちらシャオランリーダー、敵空母と巡洋艦がミサイルの射程に入った！」

僚機からの返事を示す無線スイッチがカチカチと数回返ってくる。僚機も戦闘機動に忙しくて声を挙げる暇も無い様だった。

交戦開始時に60機だった味方は、異星人の自動迎撃衛星と機動艦隊の弾幕による防衛陣に阻まれて甚大な損害を出していた。

このまま行くと味方の艦隊が、援護の無い状態で敵月面基地へ突撃する事になりそうだった。

味方艦隊の損害を今の内に減らすべく、黄は空母への攻撃を決意する。

「こちらシャオランリーダー、これより敵空母に仕掛ける！支援を要請する！統合政府万歳！」

戦域通信で味方に宣言した直後、黄の後方を進む味方艦隊からレールガンやレーザー砲、宇宙魚雷があてずっぽうに敵艦隊の針路へ放たれた。

少しでも敵艦隊の注意が逸れる事を期待して黄は機首を敵空母に向けた。敵空母は前方から迫る宇宙魚雷や数少ない味方機の迎撃に気を取られているだった。

「距離1500m、ミサイルランチャー全弾発射」

充分に空母斜め後方から接近すると、両翼に温存していた16連装ミサイルランチャーから飛び出したミサイルが一直線に空母へ向かった。

攻撃を終えた黄は、戦場から離脱すべく機体を反転させた直後、背後から30mm弾を左主翼に被弾して戦闘機はコントロールを失った。

視界がぐるぐると回転する中、ストライプ模様の敵空母甲板が眼前に拡がった所で黄の意識は断絶した。

高瀬中佐率いる自衛隊パワードスーツ部隊は、空母ミッドウェイにミサイルを乱射したシャドウ帝国軍戦闘機に30mmガトリングガンを浴びせていた。

ガトリングガンの弾幕で損傷したミグ98戦闘機はくるくるとコントロールを失って回転しながらミッドウェイの飛行甲板に激突して爆発した。

――「月面都市「ユニオンシティ」防衛軍臨時司令部」

「空母『ミッドウェイ』大破！戦線離脱します！」

「ミッドウェイは直ちに帰投せよ！宇宙ドック、消火隊出動せよ！」

「シャドウ帝国軍艦隊40kmまで接近！拡大画像出します！」

司令部のメインスクリーンにじわじわと接近する5隻の艦影がズームアップされる。

「2隻はB2S爆撃機を上下にくっつけた感じだな。その隣は、潜水艦改造型か？」

「艦影照合、ロシア海軍タイフーン級戦略ミサイル原子力潜水艦「アドミラル・クズネツォフ」に酷似しています。照合率90パーセント！」

「われわれもロスアンゼルス級原潜を宇宙用に改造しているからそんなものか」

「中央の1隻はアースガルディア宇宙艦隊の「ピョートル大帝」に似ていますね」

「支援機も無い状態で艦隊ごと突撃するなど、奴ら何を考えている!?!」

「あのB2合体型の下にあるコンテナは何だ? 明らかに怪しいぞ!」

「おい! 敵戦艦の下に人間が張り付いているぞ!」

「馬鹿! あれはアンドロイドロボットだろ!」

司令部に詰めている作戦将校や情報将校が、モニターから推測される戦力評価を行う。

「今回の敵襲は、ただ単に航空撃滅戦で基地の戦力を削るだけでは無いようね。月面都市を殲滅する事が目的ね」

結がモニターに映し出された敵艦隊の戦力分析内容を一瞥すると呟いた。

「しかし現状の戦力では、戦闘機の侵入を防ぐだけで精一杯です! とても艦隊を迎え撃つ事など不可能です!」

作戦将校が応える。

「何とかするしかないのよ。今月面を奪われたら地球の部隊は孤立して今度こそ全滅する」

結が作戦将校を叱咤する。

先程の戦闘では、アースガルディア戦役で効果を発揮した敵戦闘機機動パターン解析も通用しなかった。地球技術対マルス文明の支援を受けた日本科学技術による圧倒的な戦いではなく、「同レベルの相手」と戦う事に結は焦りを覚えていた。

「敵戦艦に張り付いたロボットが携帯しているスナイパーライフルに注意せよ! 奴らは隠し玉をまだ持っているかもしれないから用心しろ!」

緊張した声で情報将校が防衛部隊に警告した。

「敵艦隊から射撃管制レーダー照射されました!」

「パワードスーツ部隊は敵戦艦の撃沈を優先! 防衛艦隊「そうりゅう」「ドウ・リシユリユ」「インディアナポリス」は迎撃衛星展開地

点のすぐ後ろまで前進！これ以上敵の接近を許すな！」

シャドウ帝国軍艦隊からの直接砲撃が始まると、結が東山のスーツの裾を掴んで注意を引く。

「東山、ちよつと付いて来なさい」

結が白衣を翻して司令部を出る。慌てて東山が後を追った。

—————

【月面都市「ユニオンシティ」内部宇宙ドック ユニオンシティ義勇軍宇宙空母『ミッドウエイ』】

ミグ戦闘機の体当たりを受けて飛行甲板が大破した空母が、宇宙ドックへ入港するなり消火作業と応急修理を受けていた。

「親父さん！どうして私は出撃しないで地下格納庫で待機なんですかつ!?まだ日本軍やほかの国々が戦っているんだよ!?戦闘機も沢山あるのに、どうしてっ!!」

だぶだぶのパイロットスーツに少尉の階級章を張り付けた少女が整備班長に詰め寄っていた。

「ソフィー嬢ちゃんよう。戦闘機なんざ腐るほど有ってもパイロットが居なくちゃ只の粗大ゴミだぜ」

年配でソフィーから見ればまるで父親並みの年齢と貫録を感じさせる整備班長が応えた。

「・・・お嬢ちゃん、さっきの出撃で嬢ちゃんの面倒を見てたグリーンリーダーが戻って来ねえのは分かっているんだよな?」

静かな声音で班長が訊く。

「いいか?さっきの出撃で9割の戦闘機が未帰還だ！相手の戦闘機の性能が圧倒的らしい。そんな所へヒョッコがこのこ出撃してみろ！直ぐに叩き落とされて塵だ！そうなたら誰がこの月面都市を守るんだ!?ええ!?!」

整備班長が少女少尉の顔を睨み付けて捲し立てるように言った。

「ごめん、親父さん。ちよつと私冷静じゃなかった」

余りの剣幕で冷や水を浴びせられたソフィーは我に返ると整備班長に謝罪する。

「うんにゃ。今はまだ戦闘中だ。何時お呼びがかかるか分からないの

だからコクピットに籠もって頭でも冷やしてろ！」

気にしてないとばかりに軽く頭を振った整備班長は他の機体の整備に向かった。

整備班長に言われるまま、しばしF45のコクピットで戦域通信を聴いてみたりしたが、大破して身動きの取れない空母に籠もったままではどうにもままならず、嫌気が差したソフィーは、整備員に一声かけて気分転換がてら宇宙ドック内の食堂へ向かった。

月面都市内は相変わらず非常サイレンが鳴り響いており、部品や弾薬を積んだ電動カートが慌ただしく宇宙ドックと司令部を行き来していた。

ソフィーは自分も防衛に携わろうと考えたが、戦闘機は飛行甲板が大破して使用出来ず、格納庫で宝の持ち腐れである。

宇宙ドックに併設されたスクランブル用滑走路を覗いてみたが、ハングアーで待機している戦闘機は皆無であり、全機出撃しているようだった。もしくは、整備班長が言ったように全滅しているのかもしれない。

思った以上に深刻な状況を認識したソフィーは、頬を叩いてクールダウンする。

食堂へ向かう途中、前方に白衣を着たトカゲ娘とスーツ姿の日本人が何やら言い争いながら歩く姿が目に入った。

「戦闘中ですよ、結さん！」

「これから切り札を使うから付いて来なさい」

二人は後ろを歩くソフィーに気づかず言い争いながら食堂へ入っていった。

「切り札」と言う言葉に興味を持ったソフィーは、直ぐに後を追いかけて食堂へ入ったが、閑散とした食堂に人影は無かった。

諦めて自動販売機で紅茶でも飲もうと販売機に近づいたが、殆どの種類は準備中や売り切れ表示で途方に暮れる。

唯一販売していた「かぼちゃポターージュ カスタードプリン風味 車海老入り」という謎ドリンク？を見つけて仕方なく購入のタッチパネルに触れるソフィー。

タッチパネルに触れた瞬間、足元が突然消失してソフィーは床に飲み込まれた。

ソフィーは宇宙ドックから更にその下へ拡がるマルス文明研究施設まで、ジェットコースターのように曲がりくねった空間をひたすら滑り落ちていくのだった。

月面都市地下2kmにある結の研究室は、地球観測人工天体時代のマルス文明研究施設群の名残である。

広大な研究ラボの一角に、1体の真新しいワードスーツが電磁力タパルトに立ちあがった状態で装着されていた。

結が青色と白にカラーリングされたワードスーツに近づくと、茫然と研究ラボを見渡していた東山を手招きした。

「・・・結さん、これは?」

「ヒト型決戦兵器、経産省推奨AⅠ搭載、2Ⅰ型ワードスーツ『サキモリ』君よ。姿勢制御、目標補足から攻撃までAⅠが最大限にパイロットの能力を引き上げて補助する機体よ!」

結が白衣を翻して東山へ向き直ると両手を広げ、

「さあ、東山。これに乗って地球を救うのよ!」

「ごめん!マジで無理!」

速攻で拒絶する東山。

「はっ!まさかのお断り!?!おかしい。このシチュエーションでは、安室君も真司君も何だかんだ言って乗るのに・・・ビンタが足りないのかしら?」

右手を振り上げて東山に襲い掛かる結。

「どここのアニメの設定だよ!」

両腕で結のビンタから顔をガードする東山。

顔面防衛に成功した東山が呆れた顔で首を傾げる結と睨み合った瞬間、

「ちよつと待ったーっ!」

研究ラボの入り口から何故かお尻を痛そうに抑えた金髪の少女パイロットが現れ、プルプルと子鹿のような足取りで二人に近づく。

「話は聞かせてもらったわ。その機体、私が乗るわ!」

少女が結に搭乗を申し出た。

「貴女は？」

「ユニオンシティ義勇軍第1宇宙艦隊 空母ミッドウェイ所属、ラビット飛行中隊のソフィー・マクドネル少尉です！」

お尻を抑えていた少女が飛び上がるように結と東山にビシッと敬礼をする。

「貴女、持ち場を離れて何をしているのかしら？」

「先ほどの戦闘で飛行隊は壊滅、私の様な駆け出しパイロットは出撃を禁じられているのであります！」

「駆け出しに扱える代物ではないの」

「これでも戦闘機シミュレーターではトップの成績でした！」

「これは実戦よ？」

「承知しております！自分は宇宙で飛ぶ事しか才能がありません！」

しばらくムーンと俯いて唸っていた結だが、ガバツと顔を上げると「そう。直ぐに乗りなさい。操縦席に入れば後はAIが何とかしてくれる」

「はっ！ありがとうございますっ！」

ソフィーは二人に再敬礼すると、カタパルトをよじ登ってコクピットへ潜り込んだ。

「いいんですか？」

困惑気味の東山が結に訊く。

「AIが操縦や攻撃の大半をするから多分大丈夫」

胸を張ってムフーと鼻息い結。

「東山、司令部に戻ってあの娘のサポートをするわよ」

再び司令部に戻るべく、食堂へ転送させる機能を持った自動販売機に手を触れる結と東山だった。

—————

「こちらインディアナポリス、司令部！横っ腹にミサイルを喰らった！機関破損、水素燃料圧力低下、外へ漏れてる！エンジン出力急速低下！操舵不能！」

「インディアナポリス！総員退艦しろ！艦を棄てるんだ！」

「駄目だっ！脱出艇格納庫大破使用不能！このままだと艦ごとシティに墜落する！」

艦内から水素燃料と水蒸気を含んだ白煙を大量に吐き出す巡洋艦が、ゆっくりと高度を下げながらユニオンシティ市街地へ落下しようとしていた。

—————

サキモリのコクピットに入ったソフィーをAIがコントロールパネルで出迎えた。

「ようこそサキモリへ。私は本日の機体制御役、パナ子です」

「ソフィー・マクドネル少尉よ、認識番号20239685」

「金髪美少女キター——（。△。）——!!!」

「えっ!？」

「でもでも、私にはケンがいるからごめんなさいm（——）m」

「お構いなく、私も百合趣味じゃないから」

「暗証コード『百合趣味』照合完了、システム起動、操縦系統解放」

「何ていい加減な暗唱コード!？」

「すぐに防衛部隊に加勢したいの。出来る?」

「イエスマム。シートベルト装着を。水素イオンエンジン出力上げます。出撃ゲートへ移動」

白と青の塗装が施された機体は、カタパルトごとエレベーターに乗って研究ラボを離れ、月面地表へ上昇していく。

———【ユニオンシティ連合防衛軍臨時司令部】

「これで何とかなるかしら」

司令部でサキモリのモニターを見守っていた結がホッと息をつく。

「彼女、本当に大丈夫でしょうか?」

心配する東山。

「少なくとも彼女は貴方より積極的。AIのサポートが嵌れば大丈夫よ」

モニターを無表情で眺める結だった。

「自衛隊P S部隊！インディアナポリスの救援へ向かってくれ！」
「こちらP S部隊高瀬。無理だ！敵艦隊と交戦中。弾幕を避けるので精一杯だ！」

「誰か巡洋艦を救えないのか!？」

巡洋艦が都市に墜落する最悪の状況を誰しもが想像した時、司令部のスピーカーに少女の声が響く。

「こちら機動兵器『サキモリ』ソフィー・マクドネル少尉。巡洋艦救助に向かう！」

司令部の将校達が顔を見合わせる。

『『サキモリ』とはなんだ!？』

「私が研究開発していたA I制御による新型パワードスーツよ」

白衣を纏う結がフンスと胸を張って将校達の前へ進み出る。

「彼女は通りすがりの戦闘機乗り。大破した空母の飛行隊所属みた
いね」

「よし！『サキモリ』巡洋艦を月面都市郊外へ不時着させてくれ！」

「サキモリ、ラジャ！」

青と白のストライプ模様のパワードスーツが推進炎を勢いよく噴きだしながら大破した艦体から大量の水蒸気と煙を吐き出している巡洋艦の艦首に取り付くと、都市郊外へゆっくりと針路を変えて移動させた。

サキモリが巡洋艦に取り付いて15分後、大破した巡洋艦インディアナポリスは無事、月面都市郊外にある軍の訓練区画への不時着に成功した。

『『サキモリ』よくやった！次は接近中の敵艦隊を迎撃してくれ』

「支援機は？」

「自衛隊P S部隊が対応する」

「了解、敵艦隊の下から仕掛けるわ」

サキモリが最大出力で敵艦隊へ呐喊する。

ソフィーのヘッドアップディスプレイに画像処理された敵艦隊が表示され、みるみると迫ってくる。

「敵艦隊捕捉。30mmガトリングガン射程に入りました。背面口

ケットランチャー自動照準開始」

パナ子のメッセージがソフィーのヘルメットに流れる。

「よし、味方艦隊の下から突撃して敵艦隊の陣形を崩すわよ！」

「イエスマム。エンジン出力120パーセント、レーザーシールド展開、最大加速」

瞬く間に流星と化したサキモリが防衛艦隊と砲撃戦を繰り広げている敵艦隊の下から突き抜けるようにガトリングガンで乱射しながら、ロケットランチャーからミサイルを四方にばら撒いた。

——【人類統合政府軍宇宙機動部隊 旗艦「アドミラル・ゴルシコフ」】

接近警報が艦橋に鳴り響いていた。

「方位S06から敵機動兵器急速接近！」

「近接防衛システムオン」

「シールド展開間に合いません！」

「巡洋艦「クリル」「バイカル」機関部に被弾！速力低下！」

「うろたえるな！今は敵艦隊との砲戦に集中しろ！」

艦長席に座る王准将がオペレーター達を叱咤する。

「こちらシエンロンリーダー、生き残った戦闘機は艦隊直援に回れ！最優先命令だ！」

王が戦闘機部隊に指示する。

「シャオラン中隊、ウラル中隊全滅！生存機は敵機動兵器別動隊と交戦中！足止めされています！」

「月面都市までの距離は？」

「11kmです」

「少し遠いが致し方ない。全艦隊、掘削弾頭発射準備。起爆スイッチは地表接触から30にセット。核弾頭安全装置解除！」

王が月面破壊用弾道弾の発射準備を命令した。

月面都市防衛艦隊と自衛隊PS部隊、サキモリの猛攻を受けて艦のあちらこちらから破片や水蒸気をまき散らしながら進むシャドウ帝國艦隊各艦は、下部のコンテナを開放させて大型弾道弾の発射態勢に入るのだった。

――【ユニオンシティ臨時防衛軍司令部】

「敵艦隊が大型ミサイル発射準備に入りました！」

「新たな射撃管制レーダー波探知！照射エリアは月面全域！」
息を呑むレーダー管制官。

「奴ら月面を嘔き飛ばすつもりか!?!」

「最終手段という所ね」

狼狽する作戦将校に結が応える。

「こちら結、サキモリは大型ミサイルの破壊に専念して。高瀬のP
S部隊はサキモリを支援して」

「サキモリ、ラジャ」

「高瀬、了解した」

月面都市防衛戦は佳境を迎えつつあった。

――

【地球 欧州 イングランド ブリテン島 ニューベルファスト防衛
軍レジスタンス基地】

地下格納庫で整備中の戦闘艦「マロングラッセ」内に在る個室で、デ
ザートのプリンに脇目も振らずに瑠奈が端末を操作していた。

「うーん。結姉様からの頼まれ事とは言え、これって犯罪行為っス
よね?」

先日のプリン争奪戦でワイズマンから端末アクセスコードを獲得
した瑠奈が、イスラエル連邦政府のサーバーにアクセスを試みる。

「何なんスか!?!これは!」

システム端末でアクセスしたイスラエル保険省の機密データを
読み取ると、あどけない顔を嫌悪感一杯に引き攣らせた瑠奈が絶句す
る。

「……こんなおぞましい事を地球人類はするんスね」

瑠奈はデータを直ぐに月面の結と火星日本列島に居る美衣子へ
転送すると呻いた。

「……ワイズマン中佐はこの事を知っていたんっスかね?」

瑠奈は端末を閉じると珍しく沈痛な顔をしてワイズマンが女王陛
下と耐熱タイルをこねている地下司令部へと向かうのだった。

月面防衛戦 《後編》

2023年7月5日（仮グリニッジ標準時）午前1時〔月面都市ユニオンシティから10kmの宇宙空間〕

ソフィーの駆るサキモリが推進炎の長い尾を引きながらシャドウ艦隊に突入すると、狂ったように対空機銃や対空ミサイル、レールガンが乱射される。

サキモリは易々とそれらを回避すると、ガトリングガンやミサイルを正確に敵戦艦の砲座に叩き込んで沈黙させ損害を与え続けていた。わずかに生き残った直援のミグ98戦闘機が相打ち覚悟で突進して来ても、各関節に装備された姿勢制御ガスを利用した巧みな機体捌きでミグ戦闘機を闘牛士のように躲すと、すれ違いざまにガトリングガンを浴びせて撃墜する。

「うわー、この機体超扱い易いよ!」

ソフィー少尉が感嘆した声を上げる。敵弾を回避する操作と応射する操作を同時に行うのは難しい筈だが、ソフィーの駆る機体はターゲットスコープに捕捉された目標に引き金を引くだけの簡単な操作で済んでいた。

「ふっふーん!姿勢制御から目標のロックオン、全方位レーダーによる索敵、何でもこなせる万能兵器ですわ!」

パナ子のどや顔がヘッドアップディスプレイ一面に広がる。

「うおっ!?!近いっ!近いから。あと、目標が見えづらいからちよつと脇へどいて!」

眼前に広がったパナ子のどアップに思わずのけ反るソフィー。

「つれないわね……。ちえっ!」

顔を縮小させてディスプレイの片隅でごろんと背を向けて横になるパナ子。

「ええーっ!?!なんで寛いでいるのよこの戦闘AI」

ふて寝するパナ子に呆れるソフィー。

「しょうがないなあ。戦闘が終わったら幾らでも遊んであげるから機嫌直してっ!。パナ子さまっ!」

取り敢えず宥めすかし作戦に出るソフィー。

「いくらでも遊んでくれるのね？よしっ！言質頂きましたっ！そうと決まればちやっちやっとならせませましよう！」

サキモリが最大推力でバーニアを噴かして一直線にシャドウ艦隊の中心で大型弾頭を装備した宇宙戦艦に突進する。

シャドウ艦隊旗艦「アドミラル・ゴルシコフ」から暴風雨の様な対空機銃やミサイルの塊が噴き上がってサキモリへ向かってくる。

「ええーっ!?ムリムリこんなのマジ避けきれないっ！」

操縦桿を思わず引き上げて上昇しようとしたソフィーだが、機体はびくとも反応しない。

「ちよっ！ミサイル当たっちゃう!!」

「バーサーカーモード発動。レーザーバリアー展開、ガトリングガンから電磁グレネードランチャーへ装備変更」

「なにそのイカれモード！聞いてないよお!」

パナ子の無機質な声で宣言される戦闘モードに焦るソフィー。

サキモリの機体が青白いレーザーバリアーの輝きに包まれた所へ、敵戦艦から放たれたミサイルや機銃弾丸が次々と飛来して炸裂する。

着弾と爆発がひとしきり収まった後でも、サキモリを包む青白い輝きは衰えることなく、機体には傷一つ付いて無かった。

「人妻たる私の身体に傷を付けるおつもりですのっ!?この下郎共!

マスターソフィー、これより敵戦艦大型弾頭に向けて必殺電磁グレネードランチャー攻撃を開始します。ターゲット、敵艦隊旗艦下部大型弾頭！ロックオン！」

サキモリが過熱したガトリングガンをバックパックへ収納すると、入れ替わりに小型弾頭の付いたライフルを取り出して構える。

「ええっ!?AIが人妻っ!」

パナ子のよく分からないノリと勢いに乗せられたソフィーは、突っ込みながらも素直に引き金を引く。

サキモリが構えたグレネードランチャーから高熱で白く輝く榴弾が幾筋も発射されると黒々とした戦艦の艦底に露出したミサイル弾頭へ吸い込まれるように着弾していく。

一瞬の間を置いて、戦艦の下部が明るく輝くと、敵戦艦全体が眩いばかりの閃光に包まれた。

艦隊のど真ん中で発生した巨大核爆発により、損傷しながら大型ミサイル発射態勢に入っていた他の艦は強烈な熱線とガンマ線に晒されて弾頭が誘爆、更に他の艦を巻き込んだ核爆発の閃光は広がっていった。

連鎖する巨大な核爆発が収まった後の空間に敵艦隊の姿は無く、蒼白く輝くサキモリのレーザーシールドだけが空間を照らしていた。

「たった1機で艦隊まとめて沈めやがった！」

サキモリの後方で支援に当たっていた高瀬中佐が唾然としてサキモリを見つめる。

「だが、動きがなっちやいな。あれは戦闘機乗りの動かし方だな」

高瀬は機体を反転させると『そうりゆう』に向けて針路を取った。

「さて、仕込みがいがあるようだ」

そう呟くと高瀬は、パワードスーツ部隊に母艦への帰還を指示するのだった。

【ユニオンシティ 連合防衛軍臨時司令部】

「敵艦隊・・・消滅！」

「月面都市への放射線被害は皆無。電磁波によるブラックアウト発生せず」

「サキモリ健在。ダメージ有りません！」

司令部のメインスクリーン一杯に広がった大爆発が収まるとオペレーターが次々と報告を始める。

「思った以上の成果」

東山に向けてフンスと無い胸を張る結。

「私が乗らないで正解でしたよ」

応える東山。

「とは言え、これで奴らの攻撃が止まるでしょうか？」

結に近づいてきた作戦将校が訊く。

「止まらないわ。次はもっと強烈な手段で挑んでくるかもしれな

い。だからその前に――」

結がメインスクリーンを操作して火星方向から迫る明るい光点群を捉える。

「こちらから地球へ打って出るのよ!」

メインスクリーンには急速に接近する日本列島オブジェクトとマールス基幹母艦船団が映し出されていた。

――

【地球 欧州イングランド ブリテン島 地球連合防衛軍(UEDF) ニューベルファスト レジスタンス基地司令部内】

司令部隣室で耐熱タイル製作に励んでいた女王陛下とロイド提督の前で、瑠奈は腕を組むと床の上に座り込んだワイズマンを見下ろして詰問した。

「瑠奈の知る限り、人類統合政府軍のヘリコプターパイロットは不時着時の傷が原因で死亡したとあるっすけれども……」

「何で死因が『老衰』なんスか?」

普段全く見られない瑠奈の真面目な顔に只事ではない事を悟った女王陛下とロイド提督は、何も言わずに隣に座るワイズマン中佐に視線を向ける。

「やっぱり……辿り着いてしまいましたか、お嬢」

俯きながらため息をつくワイズマン中佐。

「私レベルの佐官は多くを知らされてはいませんがね。要するに奴らはクローンですよ」

静かに話すワイズマン。

「クローン人間など、国際的に禁止されていたはずだが?」

ロイド提督が思わず訊く。

「そんなの、当時の中国やロシアが真面目に守る訳ないじゃないですか」

俯いたまま、失笑しながら答えるワイズマン。

「我々イスラエルでさえ、大変動直前まではヒトDNAの解析を、モサド傘下の製薬会社と米国DARPPA(ダーパ・国防高等研究計画)で共同研究していた程ですぜ」

「モサド本部は、エリア51に潜むシャドウ・マルス人のダグリウスが、壊滅したロシアや中国の秘密都市から収集したデータを引き継いでクローン人間を開発したと推測していますぜ」

瑠奈が眉を顰めて嫌悪感を露わにしつつも質問する。

「で、出来たクローン人間にはやはり欠陥があつたつスカ？」

「その通り。救助したパイロットは数時間のうちに生命機能が低下して死亡。保健省の分析によると普通のヒトよりも細胞の劣化速度が恐ろしく早い上に新陳代謝機能が無きに等しいそうで2、3年で「寿命」を迎えるらしいですぜ」

「人類統合政府の国民とやらは皆、そのようなクローン人間ばかりだと？」

沈痛な面持ちの女王陛下が訊く。

「支援も無い孤立した都市が今日まで20万の人口を維持しながら存続できる筈がないでしょう？恐らくシャドウ・マルスが一気にクローン人間を大量作成して、それを各地に広げたのが人類統合政府と呼ばれる存在の正体なんですぜ」

ワイズマンが答えた。

「それともう一つ。パイロットの頭蓋骨内部でナノサイズICチップが検出されましたよ。これは国民の位置情報監視だけではなく、日常的に外部から思考介入を受けていた形跡が残されていたようですぜ」

「SFホラー映画よりもおぞましい話だ」

顔を顰めるロイド提督。

「それにしても・・・」

瑠奈は腕を組んだまま小首を傾げる。

「どうしてイスラエル連邦は事実を各国に伝えないんつか？」

「お嬢には人類の政治世界は理解し難いのかも知れませんね」

ワイズマンが顔を上げて瑠奈を見る。

「あわよくば、シャドウが開発した240万のクローン人間をそっくり引き継いで自国に都合の良い手先として利用したいのでしょうか。急激な老化や思考制御が課題ですがね」

そう言うと皮肉気にワイズマンは口を歪めた。
瑠奈も女王陛下もロイド提督も、誰もが酷い事実言葉に言葉を失っていた。

――――
【地球 ユーラシア大陸東部 旧中華人民共和国 黒竜江省 第12都市（旧ハルピン）】

「少佐、おはよう。良い夢は見れたかね？」

まだ思考に霞がかつておぼろげな顔をした黄が目を醒ました。

病室のベッドから身体を起こした黄は周囲を見回す。赤い壁と緑の天井は見慣れた人民解放病院の一室に違いない。

「あれ？ここは……。確か私は宇宙で任務中に……」

黄は最期の記憶を手繰り寄せようと試みる。

「何を言っているのかね？」

窓際の椅子に座っていた将校が立ち上がって語りかける。

「君は選ばれたのだ。ようこそ！栄えある人類統合政府軍特殊機動部隊へ！」

窓から差す日光は火山灰で遮られているにも関わらず、明るく降り注いでいた。

明るくい日差しに目を細めた黄に、サングラスをかけた将校が手を差し出してきた。

『『初めまして』私は人類統合政府軍宇宙機動部隊隊長の王准将だ。今日から私達は宇宙に飛び立って人類を護る盾となるのだ』

サングラスの奥で縦長の瞳を細めた2度目の王がわずかに口許を緩め、黄の3度目になる誕生を歓迎した。

――――

2023年7月7日【月面都市ユニオンシティ上空5km 航空・宇宙自衛隊多目的護衛艦『ホワイトピース』】

おはようございます！ソフィーです！ヒロインです！
なんちゃって、てへぺろ。

今、私は日本自衛隊の宇宙空母「ホワイトピース」に乗って地球へ向かうところです。

二日前の戦いが終わった後、私はAIのパナ子ちゃんと沢山遊ぶ筈だったんだけど、シテイに帰投したら直ぐに日本軍、違った、自衛隊？の人に捕まってサキモリに乗った経緯を説明したり、義勇軍のお偉いさんから待機命令違反だどこつびどく叱られて義勇軍をクビになつたりで涙目になりました・・・私これでも月面都市を救ったヒーローなのに。

でも、トカゲ娘さんの力添えでミツル商事という私達を北米大陸から脱出させてくれたニッポンの会社の警備部門に就職できました！イエー！ニッポンの一流企業に試験なしで入れたよ！お母さん！

それで今は自衛隊にシッコウ？派遣？扱いになって、「ホワイトピース」とかいうパクリ感満載の宇宙空母に乗っています。えっ？空母じゃなくて護衛艦？まあ、細かい事はいいんですっ！それと私は2階級特進して大尉になりました。戦艦を5隻撃沈したから「赤いコメット」だから機体を赤く塗らなければ、と意味不明なネタで興奮気味に赤いスプレー缶を振りかざすトカゲ娘さんを必死に取り押さえましたわ。白とブルーの塗装最高！

ホワイトピース飛行隊にはサキモリと同じ機種の機体が配備されているけど、AI搭載型は私だけらしい。正式配備するにはまだまだ研究が必要なのだとか。私、モルモットなの？

これから私が所属するワードスーツ部隊はホワイトピースと共に地球へ降りてネバダに在る邪悪な宇宙人の基地を叩くのだとか。隊長の高瀬中佐はあのワードスーツをAI補助なしで操作してるんだって、凄いね。イケメンだけど無口でクールな人ね。幾つかしら？ちよつと気になるかも・・・。

そういう事だから、心配しないでね、天国のお母さん。

ソフィーより

格納庫でサキモリのコックピットに潜り込みながら今日の手紙を書き終えたソフィー大尉は、ブリッジからの呼び出しコールを取る。

「ソフィー大尉。至急ブリッジまで来て下さい。地球で特別重大放送があるらしいですよ？」

ソフィーはAIのパナ子を携帯端末に移し終えるとコックピットを

出てブリッジへ向かった。

ブリッジには艦長の名取大佐、隊長の高瀬中佐や、他のパワードスーツ部隊の隊員達、ミッドウェイから転属してきた整備班長の親父さんが勢ぞろいしていた。

ユニオンシティを映していたブリッジの正面スクリーンにノイズが走ると重厚な音楽が流れて演壇に立つサングラスをかけた軍服の白人男性が映し出された。画面のテロップには「全世界衛星生中継：第12都市 人類統合政府主席 ダグラス・マッカーサー三世」と表示されている。

「地球人民の皆さん。4年前、西側と呼ばれる一握りの国々が不意に起こした戦争によって地球は核の炎で焼き払われ、地球環境は劇的に悪化し、人口の大半が死に至りました」

「西側諸国は、1世紀余りに渡って地球人民が生み出した富の大半とあらゆる資源を搾取し続けていました」

「私達選ばれた12都市の地球人民は、西側諸国が不当にもたらした苦しい時代を生き抜いて、人類復興の礎を築かんと今日まで苦難の行軍を続けてきたのです」

「しかし、地球人類の新たな敵が火星から飛来する事が判明しました。侵略者は既に月に到達、NASAの月面基地を占領しました。このままだと火星の侵略者が母なる地球へ降り立つのも時間の問題でしょう。ですが、私達人類統合政府は、異星人の魔の手から地球人民を守る為に立ちあがりました！正義は私達人類統合政府にのみあるので、侵略者へ聖戦による裁きの鉄槌を！立てよ人民！統合政府万歳！地球人類万歳！人民が信じる神々の祝福があらんことを！」

マッカーサー三世の演説が終わると集まった聴衆が、熱狂的な拍手と歓声を上げて応えた。感極まって号泣する者も少なくない。

再び重厚な演奏が演説会場に響き渡り、演説会場の上空をミグ戦闘機のダイヤモンド編隊が灰色の空にキャンバスを描くように七色のスモークを吐き出して飛び去った。

聴衆の興奮は最高潮に達した。

「何て酷いプロパガンダだ」

名取大佐が吐き捨てるように呟く。

「・・・何ですかこれは？シャドウ・マルスはA I集合体のロボット達じゃなかったのですか!？」

ソフィーが呻くような声を出す。

「これが、我々の本当の敵の姿だ!」

艦長の名取大佐が決然とソフィーの方を向いて答える。

「ダグラス・マツカーサー三世。彼こそがマルス文明の異端科学者であり、究極のマッドサイエンティストであり、人類史上最悪の虐殺を引き起こした全ての元凶だ!」

ソフィーは熱狂する聴衆に手を挙げて応えるマツカーサー三世の姿を暗く淀んだ瞳に焼き付けるのだった。

「・・・こいつが、お母さんの仇」

地球の一番長い日

2023年7月8日 仮グリニッジ標準時 午前5時50分〔月面都市ユニオンシティ 総合行政庁舎〕

東山の執務室に有る壁掛けTVから、徹夜で政治討論をするところある民法番組が流されていた。

『———そうです。私達日本国民は善良なる地球市民として、母なる惑星の復興に全力を奉げなければなりません。連合防衛軍増強よりも地球環境再生の為、我が国が率先して地球へ戻るべきだと確信するものであります』

左派系リベラルマスメディアから、次世代政治リーダーと持てはやされる野党「緑の地球党」党首が大変動前のナイアガラ滝やギアナ高地の絶景を映した写真をカメラに向けながら、持論である地球回帰政策を主張していた。

『我妻先生の仰る事は大切な事です。しかし今年の四月から3ヶ月間、東アジア地区の平均気温は本来雨季から夏季に当たる季節にも関わらず、5度です。夜の最低気温は氷点下10度から20度迄下がります。バナナで釘が打てるような気候で自給自足できるような農作物の栽培は極めて困難でしょう』

与党側論客として招かれた岩崎官房長官が東アジア地区の平均気温をグラフ化したパネルをカメラに向けながら説明する。

『また、空気中の火山灰濃度は濃く、呼吸器疾患の方は直接外気を吸われると喘息を引き起こして生命に関わる危険があります。世界中に拡散している火星由来生物Ⅱバグズや半サイボーグ生物の駆逐はこれからです。近々予定される人類反攻作戦次第ではさらなる地球環境の激変が懸念される中、現時点での地球回帰政策は時期尚早と言わざるを得ません』

岩崎官房長官が頭を振って我妻議員に反論した。

『岩崎さんも大変だ。彼らはこちらまで来て月面から地球を見てさえいない、火星で夢見るだけの恵まれたご身分だ』

岩崎を労わる様に呟くと、左派政権以来下野しても変化することの

ないレトリックを駆使する野党議員を皮肉った。

徹夜で物資の補給手配に没頭していた東山はテレビ討論の空虚な議論を聴きながら補給関連書類を精査していた手を休めると、総合庁舎の窓から地球を見上げた。

いつもは灰色がかった地球が見えるのだが、今はその傍らに巨大な岩塊である日本列島オブジェクトとマルス基幹母艦船団が浮かんでいる。

「まさか月面で空に浮かぶ日本列島を眺める事になろうとは」

東山は暫しお月見ならぬ「列島見」を楽しんだ。

『ゼロアワーまで30分。各員は所定の部署で配置に就いてください！』

防衛軍司令部からのアナウンスが都市に響く。

「いよいよ人類の総力戦だ」

補給関連資料を取り敢えず纏め上げた東山は司令部へ向かった。

—————

2023年7月8日午前6時35分【神奈川県横浜市神奈川区NEワイフネハウス】

イワフネハウスの庭で6時半のNHKラジオ体操を行う満とひかり、美衣子にミツル商事の面々。

軽快に身体を動かすひかりや岬、春日とは対照的に、運動音痴な満と琴乃羽はぜえぜえと荒い息を吐きながらぎこちなく身体を捻り、ひかりと岬は楽しそうに満や琴乃羽を見つめながら澆刺とジャンプする。

満は、反攻作戦に関係する輸送関連業務が激増して連日連夜の徹夜が続き、帰宅もままならなかったが、美衣子に「家庭崩壊が近いわ」等と強くせがまれて昨晩は一時的に帰宅している。

ラジオ体操の深呼吸を終えると美衣子が一同に言った。

「そろそろ始まるわ」

程無くチャイムと共にNHK臨時ニュースが流れる。

『防衛省・地球連合防衛軍司令部 午前6時30分発表、自衛隊地球派遣群を含む地球連合防衛軍は本日未明、地球衛星軌道上において最

大規模の反攻作戦を開始しました』

満とひかりの携帯端末が振動して市ヶ谷司令部からであろう呼び出しを告げる。

「これから反攻作戦が軌道に乗るまで家に帰れないかもなあ・・・」
げんなりとした声の満。

「私達には守るべき家族や会社の皆さんが居るのですから——」

満の肩に優しく触れて揉む仕草をしながら励ますひかり。

すると横で体操後の呼吸を整えていた春日が、

と満達家族の時間が作れるように気遣う。

「すまん、春日。少しだけ遅れていくが頼む」

満が軽く頭を下げる。

「了解です。ぶっゆっくり！」

春日はニツと軽く笑うと上着を羽織って芝生で伸びていた琴乃羽を岬と共に担いでバス停に向かった。

ひかりの励ましと春日達の気遣いで少し元気になった満は、昨晚からシリアス気味な美衣子を気遣って美衣子を後ろからやさしく抱え込むと、抱っこから肩車をして食堂に向かう。

「お父さん、ひかり。地球の溜奈から連絡が有ったから朝御飯の時に報告したいのだけど？」

肩車された美衣子は少し満足気に尻尾で満の背中をペチペチと軽く叩く。

「いいよ。やるべき事は沢山あるけど作戦が始まった以上、後は腰を据えて見守るだけだからね」

久しぶりにゆっくりとした朝食になりそうだった。

—————

【地球 ユーラシア大陸東部 第12都市（旧中華人民共和国 黒竜江省 ハルピン市）】

黄少佐は市場の屋台で朝食の朝粥を摂っていた。

第12都市に着任して以来、出勤前に市場で朝粥を食べるのが黄の

一日の始まりとなっていた。

朝粥をかき込みながら隣の新聞屋台で購入した朝刊に目を通す。

朝刊には、

「異星人隕石爆撃敢行。ニューヨーク、東京、ハワイに直撃弾！」
と一面に報じていた。

「いままで散々ワシら地球人民を搾取して見下してきた西側の壊滅は因果応報だわさ」

屋台で客に粥を注いでいた店主が黄少佐に話しかけた。

「だけどオヤジさん、そもそも今日の俺らの文明的な生活は西側の技術革新でもたらされたんじゃないのかい？」

黄が問いかける。

「そらあ、軍人さん、我らの統合政府主席が西側との外交戦で技術開示を勝ち取ったんでさあ！」

屋台の店主が自分の事のように胸を張る。

「・・・そんなもんかねえ」

議論を諦めた黄は、新聞を読みながら肩を竦めて粥を啜る。

「ほらほら、エリート軍人さんはさっさと任務に就かないと！」

黄の冷めた反応を見た店主は渋い顔で黄にシツシツと手を振る。

「ごっそうさん！」

店主に電子マネーで支払いを済ませた黄は電動自転車に乗って基地へ向かうのだった。

基地に着いた途端、当直の兵士から緊急招集を知らされて司令部へ駆け付けると、中央スクリーンに地球へ接近する巨大な光点が多数展開しているレーダー解析画面が表示されていた。光点はじりじりと地球側に接近している様だった。

「諸君！火星からのエイリアンが地球規模で大規模な侵攻を始めた。これより全ての人類統合政府都市と統合軍は即時臨戦態勢に入る。我々は直ちに突撃、北米大陸上空の衛星軌道上で敵を迎え撃つのだ！」

王准将が指令を下した。

—————

【地球 オセアニア オーストラリア大陸中央部ノーザンテリトリー
準州 テナントクリーク連合防衛軍基地】

「ジョーンズ中將、攻略部隊出撃準備完了」

ジョーンズ中將がマイクを手に取ると月面を含めた全軍に呼びかける。

「全兵士に告ぐ、この反攻作戦は宇宙空間も含めた地球規模で同時進行する人類史上最大の作戦となるであろう。」

月面都市から北半球全域にニュートリノビームを照射することによって北半球に存在する全ての核兵器無力化と、先制EMP攻撃とデブリによる拠点空爆の後、日本列島オブジェクト極東降下による地殻変動抑制が要となる。諸君らの奮闘に期待する！」

「全部隊出撃。目標、デイエゴガルシア シヤドウ・マルス基地！」
テナントクリーク基地から十数隻のマンسفールド級空中戦艦が飛び立った。

やがてオーストラリア大陸西部沖に到達した空中戦艦艦隊は既に待機していた海上艦隊と合流してインド洋へ向かった。

—————
【地球 欧州 イングランド ブリテン島 ニューベルファスト基地】

レジスタンス基地の地下格納庫からWB21型偵察機が滑走路に進入する。

「偵察機発進せよ！目標、イングランド島北部ニューグラスゴー！」
わずかなホバリングで火山灰を巻き上げながらふわりと上昇した偵察機は低空のまま対岸のニューグラスゴーへ急加速していった。

「ロイド提督、奪還部隊搭乗完了しました！」
『『マロングラッセ』に信号送れ、ニューグラスゴーへ進撃せよ！』
銀色に輝くマルス文明戦闘艦はニューベルファスト軍港から出港

した戦略ミサイル原子力潜水艦を改造した多目的戦艦「レナウン」に合流すると対岸のイングランド島へ突き進んで行く。

基地の滑走路から飛び立ったマロングラッセを眺める人影。

「中佐は、この作戦に出撃しないのですか？」

いつの間にか隣に来ていた女王陛下がワイズマンに訊く。

「新テルアビブから私宛に召喚命令が出ているのです。秘密漏えいの疑いで私は隊長を解任されました」

そう言うワイズマンは肩を竦めた。

—————

【地球 中東 トルコ中部 カッパドキア地区】

「アララト山天文台の斥候から報告。黒海方面で活動中のバグズ数は昨日から変動なし！現在、成層圏上空を日本列島オブジェクトが通過中！」

「月面からのニュートリノビーム照射後、北米大陸とユーラシア上空にEMP爆弾を投下します。EMP影響範囲に居る作戦部隊は直ちに電磁防護車両へ退避せよ！」

「日本列島オブジェクト「タカマガハラ」司令部からエリアホンシユウからキュウシユウまでのデブリ電磁投射カタパルトスタンバイ、各地域の戦略目標に間もなく投下開始します！」

「砲兵隊目標照準、戦闘準備完了！」

「砲撃開始！全部隊前進せよ！」

地下都市入り口に展開していたイスラエル連邦軍砲兵隊から重榴弾砲や多連装ミサイルが間断なく発射されると、カッパドキア奇岩にたむろするサイボーグワームやサソリモドキの群れに砲弾が降り注いでバグズを容赦なく噴き飛ばしていった。

砲弾が降り注いだ後には岩陰からWB21ワームバスターの大編隊が現れて機首のバルカン砲が火を噴き、両翼ロケットランチャーから対戦車誘導ミサイルを次々と発射して生き残っていたバグズを鋼鉄の嵐で殲滅していく。

「そのまま進め！奴等を黒海に追い落とせ！」

軍団長が指示する。

WB21ワームバスターに続いて、カツパドキア奇岩群の隙間から、独特の楔型砲塔を持つメルカバMK3戦車の隊列が姿を現し、改装された砲身から120ミリレールガンを発射する。

中東戦線は圧倒的な物量攻勢で人類側が優位に立とうとしていた。

【同、カツパドキア地区地下都市 新テルアビブ 首相官邸】

会議室で閣僚らと作戦進行を見守っていたニタニエフ首相へモサド長官が近寄る。

「首相、マルスアカデミー先遣隊と名乗る存在からホットラインが入りました」

「マルス人だと？」

怪訝な顔をしながら受話器を取るニタニエフ。

「初めまして首相閣下。私はマルスプレアデスアカデミー先遣隊長のリアと申します。本日は貴国市民の脱出支援を申し出る為に連絡を入れました。突然のご無礼お許しください」

「とんでもない！リア隊長。お申し出には感謝するが我が国の国民は未だ650万を超えているがどうするのかね？」

「現在、衛星軌道上に貴国が管理する日本列島オブジェクト「タカマガハラ」降下支援の基幹母艦船団が待機中です。日本列島オブジェクト極東降下後、貴国へ基幹母艦船団を差し向けて皆様の脱出支援に当たる考えです」

「有り難い。どれくらいの国民を一度に運べるのだろうか？」

「手荷物程度で済むならば1隻当たり5万人ですね。貴国と日本列島オブジェクトを往復する形で考えています。基幹母艦は全部で20隻ですから1往復当たり100万人になりますから6往復で収まるのでは？むしろ母艦への収容作業に時間がかかるかもしれませんね」

「そう・・・のですか。驚きを通り越して惚けてしまいそうです。貴船団が収容作業中、私達が警護しましょう」

「警護に感謝します。どうにも私達は戦争というものに疎いものでして」

通話を終えたニタニエフは、モサド長官と国防大臣に向き直ると、
「作戦変更だ。我々はカツパドキア地区に飛来するマルス母艦船団
と日本列島オブジェクトへの回廊を防衛する」

「それでは反攻作戦の足並みが乱れるのでは？」

「問題ない。もともと我々は中東戦線でのみ活動していたからな。
戦線への影響は無い筈だ。だが同盟国への通知は必要だろう。月面
の東山と火星のケビンに連絡を取って通知するんだ！」

「神に選ばれた我々が地球復興の表舞台に立つ日も近い」

ニタニエフは小さく呟くと口角を少しだけ吊り上げた。

—————

【月面都市ユニオンシティ臨時連合防衛軍司令部】

「ニュートリノビーム砲台、エネルギー充填120パーセント！」

「地表発射孔開け！」

「地球北米大陸を中心とする北半球が射界に入りました！」

「先行している『ホワイトピース』から入電！地上監視システムが北
米、ユーラシア東部から多数の飛翔体発射を確認！現在も飛翔体発射
が継続中！400を超えました！」

「結さん！」

「慌てない。落ち着いて。すぐ撃つわ」

やがて月面都市郊外のマルス文明研究施設から、巨大な眼に見える
光の渦が発射されると、先行していたホワイトピース地球降下部隊
や日本列島オブジェクトの上をを掠めるように伸びていき、北米大陸
の中央を貫通して地球北半球へ広がっていく。

「飛翔体次々と失速！機能停止した模様！」

「この機を逃さないで。降下作戦開始よ！」

「ユーラシア大陸バイコヌール、南米ナスカ、アフリカ大陸キリマン
ジャロから飛翔体群上がりました！」

「日本列島オブジェクトは直ちに12都市と飛翔体発射地区へ向け
てデブリ投射開始！」

「こちら日本列島オブジェクト『タカマガハラ』これより地球への戦
略爆撃を開始する！」

「ホワイトピースはデブリ空爆後直ちに北半球及び南米、アフリカ大陸上空にてEMP攻撃を行え！」

衛星軌道上に接近してきた地球降下部隊を迎撃するために地上から打ち上げられてきたシャドウ帝国軍宇宙戦闘機と先行艦隊から発進したF45宇宙戦闘機や自衛隊パワードスーツ部隊が北米大陸上空の衛星軌道上で戦闘に突入した。

巨大な岩塊である日本列島オブジェクトもオーストラリア大陸上空から極東へ降下する針路を取った。

地球の一番長い一日が始まった。

—————

【地球 ユーラシア大陸東部 第12都市（旧中華人民共和国 黒竜江省 ハルピン市）】

市場での屋台営業を終えた店主が朝粥屋台を引いて簡素な自宅に帰宅した。

「ふいー、おい、帰ったぞい！」

店主が台所で支度中の妻に声をかけた。

「おかえりなさい、あんた。稼ぎはどうかだねえ？」

支度中の手を休める事無く妻が応える。

「ま、ボチボチだわさ」

屋台を引いて嘔き出た汗を拭う。

「お疲れさんだで。夕食は用意してあるから先に食べてくんない」

後ろを振り向きもせず明日の屋台の仕込みを続ける妻。

「じゃあ、先に食べるとするさね」

店主は一人で居間に用意されていた食事を摂る。

「ええ、どうぞ、どうぞ」

玄関先から居間に消えた店主を妻の背中が見守るように追いかける。

妻の後ろ髪の間隙から覗いた無線LANアンテナがオヤジの額から発信された今日の顧客データを受信した。

「朝客ノNO. 12013007ニ反体制的ナ言動ガ見ラレル。統合政府サーバーニデータ転送。本日中ノ思考矯正インストール対応ガ必要ト求ム」

機械的な小さい呟きは店主に聴かれる事は無かった。

店主の妻は店主が寢床に入って就寝してもひたすら仕込みを続けていた。

まるで単純作業を延々と続ける機械の様に、長袖シャツの中に隠されたセラミックの腕をトントンと小気味良く動かしていた。

両眼に当たる位置に装着された？き出しのカメラレンズを忙しく収縮させながら具材を均等に刻み込んでいた。

寢台でぐっすりと就寝していた店主の額には寢床から自動的に伸びたLANコードが接続されてその日に有った事をリセットして統合政府情報局が市民に植え付けるデータを新たに受信し続けた。

誰が為の

2023年7月8日【地球衛星軌道上】

「ワオ！おっきいな！空飛ぶ大陸じゃん！」

パワードスーツ『サキモリ』のコクピット内ディスプレイ一杯に広がる日本列島オブジェクトを目の当たりにしたソフィー大尉が感嘆の声を上げる。

これが「本物の」日本列島であれば、大都市で輝くネオンの連なりが織り成す美しいイルミネーションとなつて目を楽ませるのであるが、「オブジェクト」たるタカマガハラには数か所に点在するイスラエル連邦軍基地の僅かな灯りしか見えず、灰色に鈍く輝く地球を背景に、長大な暗黒の岩塊が宇宙を漂っているに過ぎない。

「ソフィー、これは日本列島オブジェクト「タカマガハラ」と言つて日本列島喪失で発生した地殻変動を抑える為の人工質量均衡保全装置ですわ。タカマガハラの由来は、古代日本に神様が降臨した最初の場所を言い表しているのですわ」

パナ子がどや顔で平らな胸を張つて自慢げに説明する。

「へー、そっか。ところでパナ子さあ、出撃前にも言ったけど、戦闘中はディスプレイに出て来ないで！目標が見つらいのよ」

「何ですとっ！不敬な！パナ子様のご尊顔を拝めるだけでも秋葉原界限ではご褒美だと言うのに、この罰当たり者！」

「ご褒美ですって!?そんなダサイ恰好で？受けるー」

ぷくぷくすと笑うソフィー。

「なっ!?クワーツ!!」

パナ子が天罰とばかりに操縦桿を握るソフィーの手にバチツと電気ショックを加える。

「あ痛ッ！何すんのよ!?白魚のような華奢な手に暴力とは！帰投したらDVで艦長に訴えてやるー」

「人間じゃなくて私はAIですわ。DV関係ないですわ。はい、論破ですわ！」

「きいー！」

コクピットで地団駄を踏むソフィー。

「ソフィー大尉、任務中だ！私語は慎め！」

「パナ子君も、度が過ぎるとパイロットへのパワハラで美衣子さんや結さんに報告しなければならんから程々にしてやってくれ」

「失礼しました！中佐殿」

「・・・さーせんですわ。隊長」

ソフィー大尉の操る「サキモリ」は衛星軌道上で自衛隊PS高瀬部隊の一員として日本列島オブジェクト「タカマガハラ」の護衛任務に就いていた。

PS部隊から離れた所には、タカマガハラから出撃した母艦である「ホワイトピース」、ユニオンシテイ義勇軍宇宙空母「サラトガ」と「そりりゆう」「リシユリユ」がオブジェクトに並行して航行しており、艦隊の周囲はサラトガに搭載されていたF45宇宙戦闘機が展開していた。

衛星軌道上に到達した際、ユーラシア大陸や北米大陸から打ち上げられたシャドウ帝国軍迎撃部隊と戦闘になったものの、PS部隊の活躍で迎撃部隊をナスカ基地へ撃退していた。

ソフィー大尉の眼前一杯を超えて広がるタカマガハラから、チカチカと時折光が瞬く度に幾つもの流星が赤く輝く尾を引きながら地上へ落下していく。

「アステロイドベルトから持ってきた岩石を落として空爆支援しているのです。ニュートリノビームで核兵器が無効化された北半球では効果的な戦術ですわ」

パナ子が説明する。

「そうかなあ？核以外にもヤバい兵器が地上にはまだわんさか有るんじゃないの？」

当然の疑問を口にするソフィー大尉。

「ですから、タカマガハラが降下している間にEMP爆弾で作戦地域にある全ての電子機器をショートさせるですわ」

「味方も巻き込むんじゃない？」

「鉛で防護された設備ならば電磁波は遮断されるから例外ですわ」

「敵にも防護設備が有るんじゃない？」

「在るでしょうけど全軍を守るには数が足りないのです。少数の部隊が動けたところで私達の攻撃を防げないですわ」

「なんだ、楽勝じゃん」

月面都市の即席士官教室で地上戦は長期化するものだと思われていたソフィーは、意外に楽観的な展望に安堵のため息をつく。泥沼の地上戦は憂鬱だろうと感じていたのだ。

「そうですわ」

戦術予測AIからの回答を引き出していたパナ子は当然とばかりに断言する。

「おい、また私語が多くなってきたぞ！任務に集中しろ！」

「・・・（申し訳ございません！）さーせんm（――）m」

ソフィー大尉とパナ子に注意しながら高瀬中佐は、果たして都合良く戦闘が展開されるだろうかふと不安になるのだった。

『こちら『タカマガハラ』間もなく極東降下コースに入る。大気圏突入による高温摩擦熱の影響で約30分間、通信や爆撃支援等が不可能となる。これまでの貴官らのサポートに感謝する！』

日本列島オブジェクトに駐留して制御しているイスラエル司令部から通信が入る。

『マルスアカデミー』タカマガハラ』支援船団のリアです。これよりPパワーシールドを展開してタカマガハラの地球降下スピードを減速、大気摩擦熱をなるべく抑えつつ、極東地区への安定着陸を目指します』

「こちらホワイトピース。タカマガハラとマルス船団の無事を祈る」

名取が返信する。

やがて『タカマガハラ』とマルス基幹母艦船団が艦隊から離れると、地球の大気圏に接触したタカマガハラの周囲が摩擦熱で赤く輝き始める。

同時にタカマガハラ周囲に展開していた20隻余りのマルス基幹母艦から、緑色に輝く帯状のビームが伸びるとタカマガハラを包みこ

んでシールドを形成する。

緑色のシールドに包まれたタカマガハラは大気に接触した外縁部を赤く輝かせながらゆっくりと下降を始める。

暫しの間、赤く輝く長大な岩塊が緑色に薄く光るシールドに包まれて地球へ降下する幻想的な光景に魅入っていたホワイトピースやPS部隊の面々だったが、突然の警告音が響いて皆を現実に引き戻す。

「艦長！南米ナスカ、北米フェニックスから上がった敵迎撃部隊が艦隊に急速接近中！」

「PS部隊は艦隊前面に進出して迎撃！F45は一旦「サラトガ」に帰投、入れ替わりに零7戦闘機隊を出撃させろ！」

月面攻防戦から働き詰めで消耗していたF45戦闘機に代わり、火星から到着した増援の『三菱零7型宇宙戦闘機』の編隊がホワイトピースから発進する。

「ほう、ようやく実践投入か。技本（防衛省技術本部）もマジになったか」

高瀬中佐が呟く。

高瀬が操るPS21をスツと追い越した零7戦闘機隊は、前方から迫るミグ98戦闘機に小型ミサイルと30mmバルカン砲を叩き込むと急角度でUターンして高瀬の前を颯爽と飛び去る。その動きは直線的なF45の機動に比べると遥かに軽快だった。

「流石、宇宙戦闘機」

零7戦闘機の機動を視て思わずヒューと口笛を吹く高瀬。

零7戦闘機のミサイルはロケット弾並みに小さいが、AI制御された自律追尾システムが起動して正確にミグ戦闘機を捉えて紅蓮の焰と煙の球体へと変えていく。

「我々も負けてられないな。全機突撃、タリホー！」

高瀬率いるPS部隊も次々とガトリングガンや背面ランチャーからミサイルを連射して接近するミグ戦闘機を次々と撃破していった。

「前衛PS部隊、零7戦闘機部隊が敵迎撃部隊を押し戻しています！」

「北米大陸西岸バンデンバーグとユーラシア中部ゴビ砂漠から新たな熱源反応！敵増援部隊が発進中の模様！」

「頃合いだ。EMP爆弾投射準備！目標北米大陸中央部、ユーラシア大陸シベリア、同ウラル山脈上空高度400kmにセット！」

「EMPミサイル安全装置解除、ランチャーセット！」

名取がEMPミサイル発射を号令する寸前に通信オペレーターが叫ぶ。

「艦長!!市ヶ谷から緊急通信！EMP攻撃中止命令です！」

「何だ！何が起こった!?!」

思わず座席から腰を浮かせる名取。

「市ヶ谷から「内閣法制局がEMP爆弾の使用は非核三原則に抵触すると指摘してきたので核弾頭を用いた兵器の使用は禁止する」との事です！」

想定外の状況に思わず絶句する名取。

「こちら欧州アルプス拠点、シャドウ帝国軍が反撃に転じた！バグズ大挙襲来中。現有戦力での防衛は困難。速やかなEMP攻撃を要請する！」

「こちら衛星軌道艦隊。現在司令部からEMP攻撃中止命令が出ている。要請には答えられない」

一瞬、アルプス拠点は言葉を失った様子だったが、すぐに新たな支援を求める。

「では、デブリ空爆を要請する。戦線後方に集中投射してくれ！いくら撃つてもバグズが減らないんだ！」

「タカマガハラは3分前に大気圏突入してブラックアウト中。あと30分は空爆要請が出来ない」

「何だそれは！話が違うじゃないか！こっちは作戦通り全戦力を攻勢に出しているんだぞっ！」

「艦長！地上からの敵増援が迎撃部隊に合流して接近中！」

激怒した前線からの通信と自身の艦隊の危機に、名取は懸命に身体の中で渦巻く憤りを抑えながら冷静さを装って指示を下す。

「いかなる犠牲を払ってでも、タカマガハラとマルス基幹母艦船団

を無事に極東へ降下させるんだ！それが反攻作戦の要だ！サラトガからも全機発進させろ！「そうりゆう」「リシユリユ」を前に出せ！」名取は艦長席にドカツと腰を下ろして命令する。

「本艦も前に出る！何としても此処で持ちこたえねばならん！」

「市ヶ谷を呼び出せ！桑田さんに直接話を付ける！」

衛星軌道上での戦闘は激しさを増していった。

――――

〔火星日本 東京都新宿区市ヶ谷 防衛省（地球連合防衛軍司令部）〕

『桑田隊長！何を考えているんですか！この期に及んで法的拘束力云々の議論をしている場合ではないでしょう！』

モニターに映る名取大佐の顔が怒りで赤く染まっていた。言葉遣いが、桑田の先任下士官として指導した頃に戻っているのにも気付かない程だった。

『現在地球各地の防衛軍拠点がシャドウ帝国軍の反撃を受けて全滅の危機に晒されています！衛星軌道上のわが艦隊にも多数のシャドウ帝国軍迎撃部隊が殺到中です。今、使える兵器を全て投入しないと反攻作戦は失敗します！』

懸命に訴える名取大佐。

「名取、すまんっ！今総理と岩崎さんが野党と官僚の説得に乗り出して――」
「次元が違いますよ」

桑田防衛大臣の釈明を遮る名取。

『誰の為の憲法ですか？人類が異星人に滅ぼされかねない状況でそのような事を考慮せねばならないのですか？我々人類の生存権よりも我が国固有の事情である核の不使用を優先するのですか？』

『この闘いは人類同士の戦争ではありません。侵略してきたエイリアンとの防衛戦争です。我々は日本国民として憲法を順守する立場にあります。一国の国内事情で人類全体に損失をもたらす事態は本末転倒ではありませんか！』

たたみ掛けるように問いかける名取。

名取の問いに、司令部の誰もが内心同意していたので誰も、反論しなかった。

『桑田隊長、地球連合防衛軍司令部としてEMP攻撃のご指示を』
名取の鬼気迫る表情と説得に押された桑田は、無言で頷くしかなかった。

地球衛星軌道上の艦隊がEMP攻撃のカウントダウンを再開する中、桑田は背広の内ポケットに右手を忍ばせると常時携帯している自身の辞職願を無言で握りしめた。

【東京都千代田区永田町 首相官邸】

「総理、桑田防衛大臣がEMP攻撃を承認しました。それと、口頭で作戦終了後に辞職したいと申し出がありました」

岩崎官房長官が報告する。

「辞職願は保留だ。桑田君の心中は察するに余りある。当たり前だ。思いもしない所から作戦に横やりを入れられたのだからな！本来であれば攻撃開始後に緊急記者会見で事後報告するシナリオではなかったのかね？何故、攻撃開始前に法制局へ情報が漏れたのだ？」
桑田に同情的な澁澤が、隠しきれない憤りを見せて訊く。

「おそらく、連合防衛軍司令部の作戦案を閣議決定した直後でしょう」

「流出先が内閣法制局とは言え、軍事機密の漏えいは、明らかにアウトだ」

「今回の作戦情報は内閣法制局が自ら動いて収集した物ではなく、他のルートで漏れたのでしょうか」

岩崎が言葉を選びながら答える。

「だとすると、閣僚の誰か又は同席していた各省の秘書官の誰かがリークしたと言うのかね？」

「その線が濃厚でしょう」

「野党が珍しくマスコミにアピールせず事前に協議を申し出て来たのが不幸中の幸いか？」

「いえ。作戦進行に大きな影響が。シャドウ帝国軍に反撃の隙を与えた様です」

澁澤が執務机の上で頭を抱える。

「NPT（核拡散防止条約）もIAEA（国際原子力機関）も存在し

ない火星において、国会決議だけで法的拘束力のない国内事案を、故このタイミングで持ち出して連合防衛軍の足を引っ張る真似をするのだ？理解に苦しむ・・・」

「内調（内閣調査室）に情報漏えい者の背後関係も含めた詳細を調べるように指示しますか？」

「いや、まだだ。反攻作戦が成功するまで内輪の揉め事を明らかにするのは何の利益もない。あたりを付けるだけで今は充分だ。野党や官僚共への口封じは逆効果だろう」

澁澤は執務室の窓際から梅雨空を見上げる。

明け方に一度弱まった雨足が再び強くなり、しとしとと間断なく降り始めていた。

—————

〔北米大陸 人類統合政府第1都市『エリア51』（旧アメリカ合衆国ネバダ州グルームレイク）〕

「月面から接近する敵艦隊に対し第12都市防衛軍に加え、第6都市ナスカ、第7都市フェニックスの迎撃部隊が合流、交戦中」

「衛星軌道上から超巨大要塞と宇宙戦艦が減速しつつ降下中。推定降下地点は極東地区」

「中部ヨーロッパ戦線、間もなくコーカサス地方からのサイボーグワーム群が合流して反撃予定」

「西ヨーロッパ、イングランド島に侵略軍が来襲。北海のワーム群で対応中。ダンケルク海岸のサソリモドキ群を向かわせませす」

「インド洋東部からも侵略軍来襲中。第8都市キリマンジャロと第9都市ニューデリーの残存統合軍がデイエゴガルシアにて防衛線を構築、迎撃します」

各地から忌々しい火星侵略軍の攻勢報告が入る。

「隕石爆撃はどうなっている？」

縦長の瞳孔を持つダグラス・マッカーサー三世ことダグリウスが配下のクローン爬虫類人兵士に訊く。

「第8、第9都市が迎撃部隊出撃時のシールド解除を突かれて直撃を受けましたが、超巨大要塞の大気圏突入を境に爆撃が止んでいま

す」

「EMP攻撃は？」

「ありません」

「ふむ、奴ら詰めが甘いな」

鼻を鳴らすダグリウス。

「だが、こちらにとっては好都合だ。ここで手を打たないとせつかく手に入りかけている惑星規模の実験室を逃すことになるからな」

ダグリウスは呟いて鱗に覆われた手を赤い受話器に伸ばす。

「私だ。全てのクラーケンに通達。荷物を放出しろ」

シヤドウ・マルスの反撃が始まった。

――――

【衛星軌道上 『ホワイトピース』CIC（戦闘管制室）】

EMP攻撃のカウントダウンを再開している最中に地上監視レーダーの警報が鳴り響く。

「南米ベネズエラ沖、アフリカマダガスカル沖から弾道弾多数発射されました！尚も増加中！」

「どこを狙っている!？」

「推定弾道計算によると、到着予想地点はオーストラリア大陸中央、トルコ中部、アルプス山脈、イングランド島全域！」

「弾道弾50基を捕捉！ロフテッドコースを取っています！通常の防空ミサイル迎撃可能高度限界を突破！」

「宇宙で迎撃するしかないのか!？」

「シヤドウ帝国軍迎撃部隊の攻撃が激しく、こちらからミサイル迎撃に回せる戦力が有りません！」

「月面都市にニュートリノビーム攻撃を要請しろ！」

「素粒子エネルギー充填に時間がかかり過ぎて間に合いません！」

「地上の各基地へミサイル警報発令！可能な限り予測弾道を伝達！タカマガハラにも支援を要請し続ける！」

「オセアニア、カッパドキア基地のイージス・アショア稼働開始、迎撃ミサイル発射しました！」

「アルプス拠点バグズの攻撃でイージス施設が大破、迎撃システム

作動出来ません！ニューベルファストには迎撃施設、有りません！」
CIC士官は黙考した後ブリッジに居る名取にコールする。

「艦長！EMP攻撃の延期と、『サキモリ』によるミサイル迎撃を進言します！」

――――
【地球 欧州 イングランド島北部 ニューグラスゴー沖の北海】

暗い灰色の海の上空に浮かぶマルス戦闘艦『マロングラッセ』からポンポンと白く輝くプラズマエネルギー弾が撃ち出されると、海岸に群がっていたサイボーグワームの群れの真ん中で炸裂して周囲を紅蓮の炎で焼き尽くす。

炎から逃れたサイボーグワームも居たが、海面に浮上していた多目的戦闘艦『レナウン』から矢継ぎ早に撃ち込まれる巡航ミサイル攻撃で反撃する暇も無く身体を四散させていった。

「ミス瑠奈、海岸の敵は一掃されたようだ。上陸部隊を出すかね？」
レナウンに乗り込んでいるロイド提督が瑠奈に訊く。

「そうっすね！マロングラッセを海岸に着陸させるっす！橋頭保にすれば良いっすよ！」

瑠奈は応えるとマロングラッセを海面近くまで降下させるとニューグラスゴー海岸に着陸させる。

「まずは、念のために「火星蛭」放牧！ご飯の時間っすよ！」

マロングラッセの側面が開くとコンテナから火星蛭の群れが元気良く飛び出して陸地奥へ進んで行く。

海岸からニューグラスゴー基地へ向かう道中の瓦礫から生き残りの巨大ワームやサイボーグワームが現れて襲い掛かっても意に介することなく嬉々として「獲物」に喰らいつく火星蛭だった。

「今日もお茶目で活きの良い蛭っ子っす！」

元気一杯な火星蛭に喜ぶ瑠奈。

「・・・何度見ても生理的に受け付けないのだが」

モニター越しに眺めても蛭の捕食行為に吐き気を催すロイド提督だった。

「無理もないっす！昆虫や爬虫類の類は、人類が太古の昔から恐怖

と共に刻まれている天敵っスからね!」

人類に嫌悪感を催すこの種の「生物兵器」はやはり使用しないに限るっス、と瑠奈は心に留め置く。

「基地までは火星蛭っ子達が掃除してくれたからそろそろ占領部隊を出すタイミングっスかね?」

瑠奈がイスラエル特殊部隊を出そうかと考えていると、司令部からのミサイル警報が届く。

「アルプス山脈基地とイングランド島全域に核攻撃っスか!」

瑠奈は思わず絶句する。

「EMP攻撃が中断された隙を突かれた様だ」

ロイド提督が応える。

「アルプス基地の迎撃施設はバグズ襲来で大破、ニューベルファースト基地にはレジスタンス基地としての機能はあるが、弾道ミサイル迎撃システムは配備されていないのだ」

「瑠奈が迎撃するしかないっスか・・・」

「間に合うのか!」

「出来ないから何もしないのはもっと不味い気がするっス!」

身軽になるために取りあえずイスラエル特殊部隊を下ろした瑠奈は、マロングラッセを急上昇させて迎撃態勢を整える。

「こちらに来るミサイルは・・・50基っスか!」

絶句する瑠奈。

「・・・ちよつと全部は無理かも知れないっスね」

引き攣った笑顔で小さく呟きながら迎撃パターンを検討する瑠奈だった。

「イングランド ブリテン島 ニューベルファーストレジスタンス基地」

基地のサイレンが最大音量で鳴り響いて核シエルターへの避難を促していた。

地上施設の隊員や避難民が一斉に地下施設に避難しようと逃げ惑い、女王陛下や侍従、将校達が懸命に誘導していた。

「おい! あんた何やっているんだ!」

シエルターへ向かう途中の整備士が、F45戦闘機に乗り込んで地上へ向かうカタパルトを操作している兵士に声を掛ける。

「俺はゴラン高原の前線時代から穴倉に籠もるのは苦手でした。いつそダメ元でミサイルを迎え撃った方が性に合っているんでさあ」整備士が制止しようと機体に近づく前に、電磁カタパルトが稼働して機体を速やかに地上へ押し上げていく。

30秒後、ミサイル警報で混乱するニューベルファスト基地から1機のF45戦闘機が離陸して真っ直ぐと宇宙へ向かった。

アルプスとイングラド島全域を標的にした50基のミサイルが、弾道の頂点を過ぎて落下速度を増そうとしていた。

流星

2023年7月9日「ヨーロッパ西部40,000フィート上空『マロングラッセ』」

弾道ミサイル迎撃の為に灰色の空をほぼ垂直に近い角度でぐんぐんと上昇する溜奈の乗る戦闘艦マロングラッセ。

マロングラッセの東側遙か遠くには、降下時に高速で大気と接触した影響で赤く輝いている日本列島オブジェクト『タカマガハラ』と点在して随伴するマルス基幹母艦船団の姿が目に入る。

「——遂に来たっスね」

冷めた口調で小さく呟く溜奈。

かつて月面と言う『人工天体』の管理システムだった溜奈から見れば、タカマガハラは微小な岩塊に過ぎない。

「3時、9時方向からミサイル群急接近っス！」

マロングラッセの警戒システムが弾道ミサイルを次々と捕捉して溜奈の注意を完全にタカマガハラから引き離す。

「ロックオン！ファイアっス！」

マツハ20の極超音速へ加速する弾道ミサイルに向けてマロングラッセからプラズマを内包した特殊弾頭のレールガンが左右の宇宙空間へ発射される。

同時刻「インド洋東部 デイエゴガルシア島沖 東方100kmの空域 地球連合防衛軍 空中戦艦『マンズフィールド』」

「本艦直上、高度35,000フィートを『タカマガハラ』が通過中！現在速度マツハ15から減速中！」

艦橋に居るジョーンズ中将達の腹に、くぐもった唸り声のような大気の振動音が上空から届く。

やがてディエゴガルシア島の周囲が轟音に包まれて突然の暗闇が訪れると、攻防していた両軍は思わず戦闘を中断して空を見上げ、息を呑んで呆然とする。

うす曇りのインド洋遙か上空を、鈍い轟音と共に薄らと光る緑のシールドに包まれた『タカマガハラ』が、周囲の空気を赤く輝かせな

がらゆつくりと白煙を引いて通過する。

地上からはゆつくりとした動きに見えるが、実際はマルス基幹船団のシールドを利用して減速する全長1,500km、幅400kmの人智を超えた巨大な岩盤が、極超音速で地球の大気を圧迫しながら南半球側から降下している。

「まるでノストラダムスの予言に出てくるアンゴルモア大王の降臨だ」

戦慄した表情で艦橋窓際から上空を見上げて眩くジョーンズ。

デイエゴガルシア島周辺上空は日本列島オブジェクトで覆われて数分間の暗闇に包まれていた。

「中将！衛星軌道艦隊『ホワイトピース』から通信！EMP攻撃間もなく開始されます！」

「遅きに失した感もあるが、これ以上シャドウ帝国側に応手を取らず訳にはいかん。全艦、対電磁防護シールド展開！全部隊、電磁防護エリア内に退避せよ！」

輪形陣を組んだマンスフィールド級空中戦艦の艦首からバチバチと白く輝くプラズマドームが出現すると周囲の艦隊や攻略部隊に拡がっていく。

程なくして、ユーラシア大陸と北米大陸上空で複数の閃光がチカツと瞬くと、緑色のカーテンが計算通りにそれぞれの大陸上空を薄く覆う様に拡散していく。

北半球各地とアジア地区のサイボーグバグズは、強力な電磁波によって疑似生体細胞と電子回路内部がショートして焼け爛れ、体中から煙を噴き出して活動を停止した。

中東、アルプス、イングランドの地上戦線でバグズの物量に苦戦を強いられていた連合防衛軍は、バグズの機能停止を確認すると反撃に転じた。

【ヨーロッパ西部 衛星軌道上 マルス文明戦闘艦『マロングラツセ』】

「ロックオン！、まだまだ来るからジャンジャンバリバリ落とすつスよ！」

玉切れ、もとい弾切れを気にする事無く、マロングラッセの艦首から左右へ放たれた特殊レールガンが加速途中の弾道ミサイルに命中する。

レールガンに内包されていた超高電圧塊が爆発的に解放されると、ミサイル弾頭はひしやげたように潰れ紅の閃光へ変わっていく。

「あと少し撃ち落とせば帰れる、かな？」

瑠奈が艦長席の制御卓モニターに映し出された弾道ミサイルに照準を合わせようとした瞬間、弾道ミサイルの姿が一瞬ブレたと思うとノイズが走って照準が中断される。

そして弾道ミサイルの先端カバーが外れると、先端から8基の小型弾頭が射出されて更に加速して瞬く間にマロングラッセの脇を掠める様に通り返る。

「んなっ！なんっスか！」

二段階加速式の多弾頭型ミサイルに意表を突かれて戸惑った声を上げる瑠奈。

「不味いっス！前からまだまだ来てるっスよ！」

更に十数基の弾道ミサイルがマロングラッセの射程に入る。

「イングラントが、アルプスが危ないっス！」

焦る瑠奈。

その時、出し抜けに通信機から聞き慣れた呆れ声が響く。

『お嬢、何へマやってるんですか？』

「ワイズマン中佐っスか!？」

マロングラッセ後方を急加速して上昇したF45戦闘機から放たれた化学レーザーの白い光が、撃ち漏らした弾道ミサイルの弾頭を捉えて貫く。更に両翼ランチャーから改造フェニックスミサイルが発射されて残りの弾頭を破壊する。

「中佐！本国に召還されたんじやなかったっスか？・・・」

『地上でミサイルに怯えて縮こまるのは性に合わないんでさあ』

ワイズマン中佐が操るF45戦闘機がマロングラッセに並ぶ。

『お嬢、残りが来やすぜ？』

「瑠奈が全部まとめて始末するっス！」

調子を取り戻した瑠奈が一気に特殊レールガンを斉射して十数基の弾道ミサイルを破壊する。

「ふうー。流石に今回はビビったっス！」

額に浮かんだ汗を拭うように額へ手をやる瑠奈。

「さあ、戻ってロイド提督を手助けするっス！」

『まだだ、お嬢！来るぞ！』

瑠奈がモニターを拡大望遠にすると、南米上空の衛星軌道からシャドウ帝国軍の大型戦艦と戦闘機の大編隊が接近していた。

「新手っスか!？」

『あれは昔のロシア宇宙軍戦略弾道ミサイル搭載艦「イワン雷帝」でさあ。戦争初日に北米機甲師団をMOAB弾頭で抹殺した奴でさあ』

「あの戦艦を落とさないとロイドおじさんが困るっスね！」

『同意ですお嬢。あれは通常弾頭ですが、破壊力がとんでもねえ代物ですから落とすに限りやす』

「そうと決まればレッツラゴーっス！」

マロングラッセは艦首をシャドウ帝国軍戦艦へ向けると勢いよく前進する。

『ちよつと待ったお嬢！その凶体で戦闘機の群れとやり合うんですかい?』

「戦闘機は中佐に任せるっス！」

『ええー・・・部隊を辞めてもお嬢の人使いが酷い件について・・・』

「ワイズっちはうちで働く予定だから問題無いっスよ！」

『は!?!』

瑠奈の何気ない一言に唾然とするワイズマン。

『いやいや、大いに問題ありまくりだと思っただけですがねえ・・・』

「問題なんて糞くらえっス！帰ったら即入社式っスよ！」

「・・・だって瑠奈がワイズっちの暗証コードでハッキングしたから、瑠奈が責任取るっス！路頭に迷うワイズっちの異論は認めないっス！」

ワイズマンに鼻息荒く宣言する瑠奈。

「ちなみにお礼として瑠奈に毎食後のプリンを献上するっス！」

『…勝手に人をダメ人間扱いたくないでもらいたいですぜ。ま、精々稼がせて貰いやす。まずは入社試験代わりにロシア熊の戦闘機を叩き落してご覧に入れましようかね…』

「しばらくの間お給料もプリン払いつスよ！」

『それはやめて！』

ワイズマン中佐のF45は、ミサイル迎撃時の垂直姿勢から機体を左に捻ってマロングラッセの側面を潜り抜けると、ミグ98戦闘機にレーザー砲で先制攻撃を浴びせる。おっとり刀で駆け付けたミグ戦闘機編隊の先頭2機が胴体を貫かれて爆発する。同時にミグ戦闘機が一斉に散開してワイズマン機とマロングラッセに殺到する。

「さすがワイズっち！育てたかいがあるっス！」

マロングラッセから蒼白い通常仕様レールガンが立て続けに斉射されて大型戦艦「イワン雷帝」の舷側にドストスと命中する。

『お嬢、その呼ばれ方と育成云々については後程おーっっ』

30mm機銃とロケット砲の乱射で反撃してきたミグ98戦闘機の攻撃を背面ガスの一斉噴射で大きく下降して避けるワイズマン。

先制攻撃で敵を怯ませる事は出来たものの、1隻と基本的に鈍重な戦闘機1機では多勢に抗うのは難しく、シャドウ帝国軍部隊の反撃を受けて徐々に押されていった。

シャドウ帝国軍戦艦は、対空火器を総動員してワイズマン機をミサイルやレーザーで追い回し、瑠奈のマロングラッセにはレールガンと対艦ミサイルの一斉射撃を繰り返して接近を拒んでいた。

レールガンの飽和砲撃でプラズマ弾発射口が損傷してマロングラッセが一時後退した隙を突いて、『イワン雷帝』が艦底に並ぶVLS（垂直発射口）を開く。

『不味いお嬢！敵さんミサイル発射準備に入りやりました！』

「ちいっ！チマチマ攻撃してくるから全然近寄れないっス！」

このままミサイル攻撃を許すと、瑠奈が地球滞在を延長してまで護り続けたロイドや女王陛下など仲間の命が失われてしまう。

火星日本でイタズラがばれて海底お仕置き部屋直行以来のピンチ

に見舞われた瑠奈は、不意に昔OVAで見たロボットアニメのワンシーンを思い出して艦長席で仁王立ちになると天井を仰いで拳を握りしめる。

「こんのおおおおっ！」

瑠奈は右手の拳を勢いよく振り上げると艦長席制御卓の液晶パネルに叩きつけてパネルを破壊するとそのまま傷ついた拳ごと右腕をずぶずぶと半ばまでめり込ませて内部の配電盤に接触する。

「——システム直接接続、『ルンナ』全艦コントロール掌握。Pエネルギーシールド転換、プラズマシールド増幅、非常推進システム作動、補助エンジン全速前進」

瞳から虹彩が消えて機械的な音声を小さく呟き始める瑠奈。

『おいおいお嬢？何するんだ？』

「これよりマルスアカデミー地球観測人工天体『ルンナ』はコメットモードに移行。本艦を第3宇宙速度まで加速、疑似彗星として針路上の障害物を排除します」

『おいっ！お嬢！やりすぎだ！』

ワイズマンの制止の声を振り切って一気にシールド出力と速度を数十倍にも増幅させたマロングラッセは白く輝く彗星となってシャドウ帝国軍戦艦に激突する。

戦艦「イワン雷帝」はなす術もなく衝突の衝撃でVLSに装填していたミサイルを誘爆させ、機関部の水素燃料に引火した艦体は大爆発で粉々になって彗星の尾に取り込まれていく。

戦艦の周囲を飛んでいた直接援のミグ戦闘機は彗星との直接衝突は免れたものの、イワン雷帝が編隊の至近距離で大爆発した為に大小の破片を機体に万遍なく浴びて損傷分解し、コントロールを失って次々と地球大気圏へ墜落して燃え尽きていった。

膨大なエネルギーを解放した彗星モードのマロングラッセは、勢いを直ぐには落とすことが出来なかったため、衛星軌道上を数周しながらラグランジュポイントを通過する度に速度を徐々に落として再び欧州西部上空に戻って来る事が出来たものの、殆どのエネルギーを喪失していたので引力に引かれて徐々に高度を下げていった。

『お嬢！、このままだと艦が持ちませんぜ！脱出を！』

「・・・無理っス！瑠奈はまだマロングラッセと接続したままっスよ。強引に接続を絶つと艦が即座に分解するっスよ」

『ですが、このままだとお嬢もろとも艦が燃え尽きてしまいますぜ！』

「いいっスよ。瑠奈は人工能っスから、肉体が失われてもデータは他の媒体に移れるっスから別に——」

『ふざけんな！何言ってるやがる！』

激昂するワイズマン。

そこへ突然別の声が通信に割って入る。

『ハイハイ、盛り上がっているところスイマセンね。こちら日本自衛隊特殊作戦群、PS部隊所属、ソフィー・マクドネル大尉であります！命令により「マロングラッセ」のサポートに派遣されました！到着遅れてスイマセン！』

ワイズマン機の後方から推進炎を勢いよく流星の様に引きながら1機のPSが急接近して追い越すと、マロングラッセの艦首に素早く取り付いて、そのまま大気圏突入に最適な角度へ関節部のバーニアを噴射して針路を調整し始める。

「——助かった」

血まみれの右腕をコントロールパネルに突っ込んだまま、身体ごとパネルに伏せていた瑠奈が小さく呟く。

「ミツル商事警備保障欧州レジスタンス支部『マロングラッセ』瑠奈っス。ソフィー大尉のサポートに感謝するっス。本艦のエネルギー残量5パーセント、艦体維持が精一杯っス。イングランド島までの誘導お願いするっス」

『了解。後は正しい角度で降下するだけだから大丈夫ですよっ！パナ子、突入角度再計算よろしくね』

ソフィーが応答して相棒のAIに大気圏突入シークエンスを委ねる。

「はいなのですの！美衣子様と結様の妹さまではないですか!?喜んで導かせて頂きますの！」

AI出逢い系サイト生みの親に連なる瑠奈の存在は、火星諸国のAI達には周知の事実であり、パナ子は狂喜する。

『ドクター・ムスビの妹様ですって!?ドクターにはサキモリに乗せて貰ってとても助けられたのです!後で握手してください!』

ソフィーは目を丸くしながら驚きつつも、満面の笑みで瑠奈に話しかける。

『——それと、そこで漂っている戦闘機おじさんはテキトーにマロングラッセの後ろからついて来て』

声の温度を急速冷凍してワイズマンに素っ気無く指示するソフィー。

「くっ!・・・なんか俺の扱いおぎなりじゃね?こちらワイズマン中佐。小娘のサポートに感謝するぜ!」

『・・・オヤジうぜえ』

「やかましいわ!」

軽口を叩きながら大気圏突入体制に入る三人。

だが、ソフィー大尉の『サキモリ』警戒レーダーが敵影を捉える。

『9時の方向に敵感知!』

降下を続ける三人の左手から「イワン雷帝」の爆発を奇跡的に免れた1機のミグ戦闘機が、破壊された戦艦やミグ戦闘機の残骸の間から現れると30m機銃を乱射して接近する。

先導するサキモリはエネルギーを失ったマロングラッセの機首に取り付いたまま微妙な角度調整が必要な為に応戦出来る状態ではなかった。

ワイズマンはちらとマロングラッセを一瞥した後、操縦桿を引き上げて降下態勢に入っていた機体の角度を上げていく。

『ワイズマン機!その高度での戦闘はもう無理!直ぐに燃料切れになつて重力に引つ張られるわ!』

ソフィー大尉が叫ぶ。

「——お嬢、小娘は先に行け!——これからオヤジがちよつといとこ見せてやんよー!」

急激に負荷のかかるGで途切れ途切れの応答をしながらくると

反転してマロングラッセとサキモリから離れていくワイズマンのF45戦闘機。

再び大気圏外に戻ったワイズマンは空力過熱から機体を守る為に稼働させていたレーザーシールドを解除すると、推進・冷却系統も含めた全てのエネルギーを機首の対空レーザー発射口へ注ぎ込む。

マロングラッセとサキモリを背後から攻撃する態勢に入っていたミグ戦闘機のパイロットは、斜め前方のF45が大気圏突入姿勢から機首を上げてこちらへ向かってくる事に驚く。

「馬鹿かあのパイロットは！死ぬ気か!？」

ミグ戦闘機パイロットは慌てて機首の30mm機銃を眼前に迫るF45へ発射しようとする。

みるみる内に眼前へ迫ったF45戦闘機をロックオンした直後、F45の機首からブントと僅かな駆動音と共に最大出力の対空レーザーが放たれてミグ戦闘機を貫いた。

至近距離でパイロットごとコクピットを撃ち抜かれたミグ戦闘機は発火せずに機首からバラバラと解けるように破片をまき散らしながら重力に引かれてストンと落下すると、大気圏上層部に接触してそのまま爆発して燃え尽きた。

F45はアクロバットさながらの背面機動でミグ戦闘機の尾翼スレスレを通り過ぎたものの、水素燃料が枯渇してエンジンが停止、重力に捉えられてゆっくりとコクピットを下に、背面を地球側に向けたままになった姿勢で大気圏へ落下していく。

「ワイズマン中佐!」

すでに大気圏に突入して空力過熱で表層部が赤く輝くマロングラッセから瑠奈が呼びかける。

「——お嬢——燃料切れでさあ——悪党には——締まらない——」

ワイズマン機も空力過熱に覆われている様子で、酷いノイズが交じった途切れ途切れの声しか聞こえない。

「ワイズマン!そっちにシールド展開するから待つつス!」

瑠奈は大気圏突入状態にもかかわらず姿勢制御や冷却系統に使っ

ていた最後のエネルギーを遠隔投射シールドに注ぎ込もうと操作を始める。

「瑠奈っ！今はダメっ！」

懸命に艦首を抑えるソフィーが制止する。

「馬鹿野郎!!」

突然大音量でワイズマンの罵声が響く。

「せっかく助かった命を投げ出そうなんてお嬢は馬鹿ですか!？」

ワイズマンの怒気を孕んだ声がマロングラッセのブリッジに響き渡り、初めて耳にするワイズマンの罵声に瑠奈はビクツと体を震わせて動きを止める。

マロングラッセは艦体制御を再開して降下を続ける。

「そう——これでいいんでさあ、お嬢。さっさと降りやがれっつんだ——」

ぶつきらぼうな口調だが声音は罵声に比べれば和らいでいた。

「——お嬢、最期だから言わせて貰いやすが、お嬢が全知全能の人工知能だとしても、お嬢は今、生身の身体と心を持っているれっきとした人間でさあ。人間の先輩として言わせて貰うなら、お嬢はまだまだ子供でさあ。どうか、あっしみたいにへた打たないで、長生きした人生を送って欲しいでさあ……」

「ワイズマン中佐！生意気っス！お別れには早いっス！」

自然と瞳を滲ませた涙声の瑠奈が叫ぶ。

過熱していくコクピットの中で意識を朦朧とさせたワイズマンが呟く。

「お嬢……宇宙は絶対零度で寒いと——やっぱ熱——」

ワイズマンの機体は空力過熱に耐え切れず、膨張を続けて遂に爆発四散した。

「——中佐っ！何へたやつてるんっスか——!!」

イングラランド島グラスゴー沖に無事着水したマロングラッセの艦橋で、瑠奈は制御パネルから血まみれの右腕を引き抜くとがくりと床に膝をつけて嗚咽し続けた。

ほぼ同時に着水していたサキモリのコクピットでは、ソフィー大尉

がハッチを開けて空を見上げ、四散したワイズマン機の残骸が幾つにも分解して灰色の空からオレンジ色の炎と白煙を引きながら流星の様に落下して行くのを無言で見つめていた。

この日、欧州や北米上空において、シャドウ帝国軍必死の抵抗によつて激しい戦闘が繰り広げられ、ワイズマン中佐始め多くの兵士の命が失われたものの、人類反攻作戦最大の要である日本列島オブジェクト「タカマガハラ」の極東着床は無事成功した。

終局

2023年7月15日【イングランド島 ニューグラスゴー軍港
地球連合防衛軍（UEDF）所属 英国連邦極東海軍 多目的戦闘艦
『レナウン』】

ニューグラスゴー沖の北海上空は、火山灰が漂う灰色の空に加え、EMP（電磁パルス）攻撃による強力な電磁波の照射で乱れた電離層が薄紫色のオーロラを所々に出現させている不穏な空模様となっていた。

沖合には、瑠奈が火星ヘラス大陸攻略以来愛用してきた戦闘艦『マロングラッセ』の水没した残骸の一部が顔を覗かせている。

シャドウ帝国軍のミサイル攻撃を迎撃後、ワイズマン中佐の犠牲で無事海上に着水後、瑠奈はエネルギーを消耗し尽くしてしまい、マロングラッセを自己修復する事も出来ずに居た。

瑠奈は、ロイド提督が乗る戦艦「レナウン」の医務室で負傷した右腕の治療を受けた後、割り当てられた個室に閉じ籠もったまま出てこようとせず、数日が経過していた。

見かねたロイド提督や女王陛下が何度か見舞いに訪問したが、瑠奈はベッドの中に潜り込んだまま、一切のコミュニケーションを拒絶し続けた。

【「ニューグラスゴー基地 地球連合防衛軍司令部」】

「今の瑠奈はかなりの重傷だと思う」

憂いを含んだ顔をした女王陛下がモニターの向こうに居る月面都市の結へ瑠奈の状況を伝える。

『そんな瑠奈は見た事が無い。自己診断システムの異常かも』
結が首を捻りながら応える。

「ミス瑠奈は地球創生以来、様々な生物の進化を観てきたのだろうが、自分と関わりのある近しい者を亡くす経験はおそらく初めてではないか？」

女王陛下の隣に立つロイド提督が瑠奈を気遣う。

「このような時、家族が身近に居て温かく見守るのが一番だと我は

思う。瑠奈は十二分に我が国や地球の為に尽くしてくれた。後は妾達が成すべき事を成すだけじゃ」

「・・・ヒトの温かい心に感謝を。・・・瑠奈は私が今から迎えにいくわ」

結は女王陛下下に感謝を込めて応えるのだった。

女王陛下との通話を終えた結は、火星の大月夫妻と美衣子に連絡を入れ始めた。

――同時刻「タカマガハラ イスラエル連邦軍「エリアフジ」司令部」

かつて日本列島が存在していた海域に再び日本列島と瓜二つの岩塊が着床して12時間が経過していたが、未だ日本列島オブジェクト『タカマガハラ』は地球内部のマントル表層に接触すべく沈降を続けていた。

「オブジェクト尚も沈降中。沈降速度毎時1.5m、現在地殻適合率96.5パーセント！」

「全エリアの地殻内部マグマ用循環通路解放」

「マントルからの自然流入を確認、予定されたマグマだまりへの供給が可能です」

「沿岸部想定標準海拔まであと4.8m」

「タカマガハラ全域において微弱振動計測中」

巨大質量の沈降と地球地殻部分との接触でタカマガハラ全体が振動しながら沈んでいく為、海辺はざわざわと海面が波立ち、人口河川の河口には海水が白波を立てて流れ込んでいた。

「着床により周辺海域の質量急速増大」

「エリアキユウシュウ、エリアホツカイドウから発進した観測機が大規模なツナミ発生を確認。」

台湾北部からカムチャツカ半島までのユーラシア沿海地域へ20m級ツナミ複数波が向かっています！」

「各国の駐留部隊に大ツナミ警報を発令！沿岸警戒を怠るな！南北アメリカ大陸側からの反射波も遅れて来るぞ！」

「月面司令部から、ミス結です！」

心なし少し慌てたような仕草の結がスクリーンに投影されるなり口を開く。

『地球の重力バランスが急激に変動している。タカマガハラを中心に地球内部マントル層の流れが乱れている事が原因よ。乱れは拡大している』

『着床とほぼ同時刻に、地殻の一番深い所で地震が発生中。大きな揺れではないけど、とても長い周期で「今も」各地の大陸プレートそのものまで揺らし続けている。これが引き金となつて12時間以内に地球規模の地殻変動が再び起きるわ。各地の生存圏に避難を呼びかけた方が賢明』

思わず息を呑む司令部要員達。

「了解した。情報提供に感謝する」

未知の脅威に緊張して血の気の引いた将校が応える。

「各地の連合軍司令部と生存圏に緊急警報を発令！第二次大変動が来るぞ！」

将校が叫んでオペレーターに連絡を促す。

タカマガハラが本当の意味で地球に落ち着くまでまだ少し時間がかかりそうだった。

7月15日20時【火星 神奈川県横浜市神奈川区 NEWイワフネハウス】

共同ダイニングのテレビでは英国連邦極東BBC放送の特別報道番組が、地球イングラントからの生中継を伝えていた。

「——お伝えしていますように、シャドウ帝国軍は先ほど現地時間午前5時ごろ、EMP（電磁パルス）攻撃の影響を逃れた南半球の海中から、世界各地の人類生存圏に向けて核攻撃を行いました」

カメラの前でマイクを握る現地アンカーはヘルメットを被り、顔色は核シエルターで息を潜めて避難していた時の緊張が未だに残っているのか、蒼白だった。

「ヨーロッパにはこのうち少なくとも100基の弾道ミサイルが飛来しましたが、ここニューグラスゴー基地には核ミサイルを迎撃出来る施設が殆どありませんでした」

「待つてください、ジェシカ。では何故、貴方方は無事なんです？」
長崎佐世保のスタジオにいるキャスターが慌てて訊く。

「はい。ヨーロッパ消滅の危機は一人のイスラエル兵士によって回避されました」

画面がアンカーから録画された粗い画像に切り替わる。

暗い宇宙空間の右側から現れて素早く横切ろうとするオレンジ色の光点が、左下から伸びてきた白い光と幾筋もの薄い煙を引くミサイルと接触して花火のように短くバチツと火花を散らしては消えていく。

「この映像は先ほど私達極東BBCが、連合防衛軍司令部から独占的に入手したものです。」

画面右奥から飛来するミサイルを左下からレーザー光線と迎撃ミサイルが次々と撃破しています」

「このレーザーとミサイルはF45宇宙戦闘機によるもので、戦闘機のパイロットはたまたま基地に居合わせた非番のイスラエル軍特殊部隊の兵士でした」

次の画像では地上から撮影したもので、灰色の空の遥か上空からゆっくりとオレンジ色の炎と白煙を引きながら沖合に落下する幾つもの破片を映したものだっただけだ。

「司令部によりまずと、ミツル商事警備艦と核ミサイル攻撃を防ぎきったF45は基地へ帰投する直前、衛星軌道上に展開していたシャドウ帝国軍宇宙戦闘機と交戦状態になり、敵戦闘機を撃破したものの、大気圏突入に失敗して爆発したとの事です」

「搭乗していたパイロットの生存は絶望的と言う事です。」

パイロットはイスラエル連邦軍特殊部隊に所属するペレス・ワイズマン中佐でした。

ヨーロッパは一人のイスラエル人兵士による尊い犠牲によって、救われたのです——」

ダイニングで夕食後のお茶を飲んでいた大月夫妻や岬、琴乃羽達ミツル商事の面々は茫然と無言で画面を見つめていた。

そんなダイニングに地下の研究室から戻って来た美衣子が入って

くると満に近寄って携帯端末を差し出す。

「お父さん、月面の結からよ。瑠奈が・・・」

美衣子は最後まで言い切らずに言葉を濁す。

怪訝そうな顔で端末を手に取る満だったが、画面に伝達された内容を見ると険しい顔で美衣子に尋ねる。

「美衣子、今すぐ瑠奈の所へ行きたいのだけれど、どうすればいい？」

【地球 中東 旧トルコ共和国中部 上空50,000フィート】

ベンジャミン・ニタニエフ首相は、眼下に広がる荒涼とした大地の一角から突如として濛々と黒煙が噴き上がる様を戦慄の眼差しで見つめていた。

ニタニエフ首相の背後にモサド長官が近づいて報告する。

「首相閣下、地上に残した監視部隊からの報告によりますと、アララト山で大規模噴火が起きました」

「分かっている。あれだな？」

ニタニエフが眼下に広がる景色の一角を指差した。

先ほど大地の一角から噴き上がった噴煙は、瞬く間に周囲へ拡がりながらニタニエフが乗っている最後のイスラエル国民を乗せたマルス基幹母艦と同じ高さにまで到達しようとしていた。

「頂上の天文台に派遣していた部隊は？」

「タカマガハラ司令部からの警告を受けた直後に脱出させており、無事です。」

地上に残した連絡部隊は少数の特殊部隊で、カッパドキア地下首都から地上部分各地に設置された観測機器を操作しています。当面は噴火の被害を受ける事はないでしょう」

眼下に噴煙は視界の三分の一近くにまで広がり、時折鮮やかな赤い火柱が噴煙の中心部から立ち昇る度に雷光が周囲の黒煙の中で閃く。

「かつて我々の祖先はモーゼに導かれてエジプトを脱出する際に、海を割る奇跡を起こした。そしてエルサレムで新たな繁栄の礎を築きあげた。」

今の我々は、空から降臨された神の使者に導かれて灰色の空を割つ

て脱出し、神が造りたもうた東方の地へ向かおうとしている」
外の景色から視線を外すことなくニタニエフの眩きは続く。

「我々は史上二回目の民族大脱出(エグゾダス)を経験する選ばれし民なのだ！」

約束の地で我々は今度こそ、神々の代理人としてこの世界を救済して続けるのだ！」

恍惚とした表情で呟くニタニエフ。

マルス基幹母艦の巨大なブリッジ中央にある艦長席に座るリアは、眼下のブリッジ片隅から聞こえてきたニタニエフの眩きを耳にする
と僅かに眉を顰めた。

「リア隊長、インド洋中心部とアフリカ大陸東部沿岸で巨大地震発生！周囲の海面が変動しています！」

「結の予測通りね。惑星規模の地殻メカニズム変動をこの目で確かめる事になるとはね」

縦長の瞳孔を細めながら、リアは避難船団の進路変更を指示する。

「船団先頭に通達、針路そのまま高度変更。シールドを二重展開！一旦大気圏を出て衛星軌道まで上昇してタカマガハラへ向かうわよ。地上観測システムは磁場測定値の変動に注意して！」

巨大なマルス基幹母艦船団は緑色のシールドを輝かせながらゆっくりと灰色の大気圏を抜けていく。

———
何も無い白い空間をひたすら前へ進む満の前に、小さな木製の扉が現れた。

満が扉のノブを握ると静かに扉が開き、天井から床まで何も映さないテレビ画面にびっしりと覆われた空間の中央にちんまりした小さい人影がこちら側に背を向けて体育座りをしていた。

満はゆっくりと部屋の中心まで歩いて小さな背中に近づくとしゃがみ込んで、瑠奈の華奢な両肩にそっと触れる。

瑠奈はそれでも身動き一つしていないが、満は瑠奈のつま先にあるテレビ画面が一つだけ点灯している事に気付く。

そのテレビ画面から音声は聞こえてこないが、モノクロ画面に映っ

ている人物は楽しそうに笑っているようだった。

満は瑠奈の両肩に沿えた手の指先に少しだけ力を込めると静かに声をかけた。

「瑠奈、帰ろうか・・・」

次の瞬間、部屋中にある全ての画面が眩いばかりの白光を放つと瑠奈と満を包みこんだ。

眼が眩んで意識を失う寸前、満は瑠奈の慟哭を少しだけ聴いた気がした。

瑠奈の慟哭は少しの間しか聴こえなかったが、満は心の奥深くに杭を打ち込まれたような感覚になるのだった。

【火星 東京都千代田区秋葉原 自衛隊特殊訓練所】

「地球に到着した結から、瑠奈が部屋から出てきたと連絡が来たわ」フルダイブマシンの有る部屋に入ってきた美衣子が、満が横たわるベッドに寄り添っていたひかりに伝える。

満はフルダイブゲーム機にアクセスしているのを忘れたかのようににスヤスヤと寝息を立てて完全に寝入っていた。

人類反攻作戦開始以来、ミツル商事が全面的に関与する補給関連部署は多忙を極めており、満社長は司令部に詰めたままマルスシヤトルや改造型輸送艦の手配に日夜追われていた。

「でも瑠奈は直ぐに気を失って結の連絡艇に収容されたわ。衰弱しているらしいからこのまま家に戻るそうよ」

「仕方ないわよ。後の事は東山君に任せるしかないよ」

そう言うときひかりは満の額を優しく撫でる。

「あなた、よくやりましたね」

「瑠奈と結が戻ったら久しぶりに家族団欒をしましょう」

ひかりが小さく呟いた。

タカマガハラ地球降臨と第二次大変動によって、戦争は終局に向かいつつあった。